drea[M]oon fantasy

空音色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｄｒｅａ［Ｍ］ｏｏｎ　ｆａｎｔａｓｙ

【Ｎコード】
Ｎ７３３１Ｄ

【作者名】
空音色

【あらすじ】
（※元タイトル【夢一目指すものがあるから一】）小さい頃から、私は母と暮らしていた。私には父と兄がいたらしいのだが、私が生まれて何日も経たぬ内に、国を助けるべく家を出ていった。１０歳になった私。母は病に倒れ、私に写真入りのペンダントを渡した。
「お父さんとお兄さんに会いに行きなさい」と言い残して…。

プロローグ

―――――――――
わたしの名前は
『アルテミス・メリアー』
―――――――――

サンポリア大陸。
世界で1番面積の狭い大陸であろう。
でも、この大陸にも1つの王国はある。サンポリア王国である。

わたしは、父さんが家に置いていったという両手剣を背負い、サンポリア王国へと向かって歩いていた。

＊＊＊＊＊

わたしはこの大陸の北端にある湊町で生まれ育った。ただ、わたし

が物心ついた時には、家族は母さんだけだと知った。
近所のおばさん達がよくわたし達の生活を支えてくれた。

わたしが5歳の時、母さんからさらに家族がいる事を話してくれた。
サンポリア王国の騎士団に所属している父さんの話、騎士団に所属すべく父さんについていった10歳年上の兄さんの話。

その頃は、魔界から現れる魔物達がたくさんいた頃であった為、王国を守るべく2人は家を出たのだという。

その話を聞いたわたしは、2人を尊敬したし、羨ましいとも思った。
わたしは町の外で友達と遊んでいたりすると、時たまに魔物達が現れる事があったが、この町1番の剣士が、わたし達を守るために剣を振るう事があった。
わたしは…誰かを守る事が出来る人間を、尊敬の眼差して見ていたというワケだ。

もちろん、その気持ちは今もなくなってなどいない…。
わたしもいつか、立派な剣士になって、皆を守れる人間になりたいと夢を見た。

しかし、わたしが10歳になった年に…。

「母さん……」

母さんが、町に襲ってきた魔物に傷を負わされ、魔物の呪いにかかった。
それにより、重病を患った。
町の医師の診断でも、教会の僧侶の癒しの力でも、母さんの病気は治らなかった……。

「母さん……」

わたしは、寝台に横たわっている母さんの顔を見た。
本当はつらいのに、わたしの前だからって笑顔を見せてくれた。

「アル……お母さんから、頼みがあるの……」

そう言って、震える手で、わたしにペンダントを差し出した。

「お母さん、もう死んでしまうけれど……お父さん達のように立派に生きてほしいの。そして…あなたのお父さんとお兄さんに、会ってほしいのよ…」

受け取ったペンダントのふたを開けてみると、そこには古ぼけた家族の写真があった。赤ん坊のわたしは若き母さんに抱かれていた。
兄さんと思わしき少年と、鎧を身に纏う男もいた。
ただ、鎧の男だけは、顔の部分が色褪せていてよく見えなかった。

「アル……最期に1つだけ。…お母さんがこうなったのは、あなたのせいじゃないわ……」
「!?……」
「あなたはいつも、お母さんを守ろうとしたね……その気持ちはす

ごく、嬉しいわ。でも…あなたはまだ若い……。お母さんの事は守れなかったかも、しれないけど……、いつか、大切な人を守れる程に、強くなって…お母さんの事は、気にしないで……」

「母さん…ごめんなさい……」

わたしはただ泣くばかりで、何も出来ない自分を恨めしく思った。
それでも母さんは、また手を伸ばしてきて、わたしの頬を触った。

「お母さん…あなたが夢を叶えるのを、楽しみにしているわ……」

その夜、母さんは神に召された。
教会の方々、近所の皆が、わたし達の為に泣いてくれた。
わたしはもう泣きすぎて、涙も出なかった。
僧侶達の祈りの歌を聞きながら、母さんからもらったペンダントを、ギュッと握り締めていた……。

＊＊＊＊＊

それから3年が経ち、わたしは町を出て、今に至る。
母さんが亡くなってから、わたしは修行にはげんだ。
町1番の剣士から、剣の稽古を受けて受けて受け続け、わたしは13歳。でもわたしは剣1本でのスタイルは好んでいない。

わたしは、父さんと同じ両手剣の剣士を目指していた。

（母さん…）

わたしは、首にかかっているペンダントの写真を見て、改めて意を決した。

（まずはサンポリア騎士団に入って、たくさん学んで、世界に飛び立ってやるんだ！　そして…絶対に父さんと兄さんに会って……）

ペンダントから手を離し、わたしは歩き出した。

その瞬間

『シャアー！』

「！！」

魔物の大蛇が茂みから現れて襲いかかってきたが

「たぁ！！」

すぐさま両手に剣を持ち、瞬速で蛇の体をズタズタに切り裂いた。

蛇だったそれはボトボトと地面に落ちた。

「ふんっ、女だからって、なめないでよね？

得意気になったわたしは、歩き出した。

夢への第一歩、サンポリア王国を目指して…。

【第一部】第一章

―――――――――
サンポリア騎士団
入団テスト
―――――――――

「うわぁ～…」

あまりの人の多さにわたしはア然とした。
行き交う人々、豪華な街並み。
もはや故郷と比べたらとんでもないくらいの大きな街だった。
わたしは故郷から一歩も出た事がない故、写真等で城下町とかいうものを見てきたが、実物を見るのは今回が初めてだ。

（こんなに広いんじゃ、迷子になっちゃうよなぁ……）

とりあえず、まずは城へ行こう。
わたしは遠くの前に見える巨城目指して歩き出した。途端に

「うわっ！」
「きゃっ！」

横から駆けてきた人とぶつかってしまった。

「あ……すみませんでした。急いでいたもので……」

ぶつかった人は教会のシスターだった。この街のシスターなのだろうか？

まだ立ち上がっていないわたしに手を指し伸ばしてくれた。多分、わたしより年上だろう。

「いえ…大丈夫です」

わたしは手を取り立ち上がった。

「ありがとうございます」とお礼を言う前に、

「いけない！　急がないと！　それでは失礼します！」

「えっ？」

シスターは一目散に人混みに紛れて行ってしまった。

「……ん？」

ふと、地面に落ちていたクロスのペンダントに目がついた。

あのシスターのものなのだろうか。

「すみませーん！！　落としましたよぉー！？」

まだ見える背中に声をかけても、シスターはこちらを振り向かず小さくなり、やがて見えなくなってしまった…。

（ど…どうしよう…。きっと探すと思うなぁ、こんなに綺麗なペンダントは……。テスト終わってから教会に行って渡さないと……）

仕方ないが故、わたしはクロスペンダントを荷物にしまった。
そして今回の目的の為、また歩き出した。

＊＊＊＊＊

サンポリア城。
城門には警備兵がおり、入団テストを受けるのだろう強そうな戦士達が警備兵に話をし、それから城内へ入っていく光景がある。

「すみません」
「ん？　なんだい、お嬢ちゃん。今我々は忙しいので、他の兵士をあたってくれないかい？」

わたしも警備兵に話しかけたが、思いっきり女の子扱いをされてしまった。

「いえ…わたしも騎士団入団テストを受けに……」
「……え？」

警備兵は目を丸くし、私の全身を上から下まで見てから、

「あっはははは！　まさか冗談だろう！！　こんなお嬢ちゃんが騎士団にかい？　笑わせないでくれよ！！」
「……証拠を見せればいいのかしら？」
「証拠？　証拠って一体どん…、…っ！？」

わたしは“証拠”を見せるべく、素早く警備兵の背後を回り、首筋

に剣一本を当てた。
それで警備兵は黙ってしまった。
順番待ちをしていたギャラリーのほぼ全員が、警備兵のように黙ってしまった。

「こんなにすぐに殺られるなら、警備兵失格ですね…」

首筋の剣を離してやり、警備兵は安心したのか、脱力した。

「も、申し訳ございませんでした。どうぞ、お通り下さい。受付がございますので、そちらで手続きをお願いします」

警備兵は改めた態度でわたしにそう説明した。わたしは、わかりました、とにっこり（多分、目、笑ってないかも…）と答えて門を通った。

＊＊＊＊＊

警備兵の言う通り、城に入ってすぐでそんな“受付”の場所を見つけた。
ロビーのようになっているこの部屋は人がいっぱいいて、手続きの順番待ちだったり、済ませたらしいのか数人で会話をしていた。

＊＊＊

「こんにちは、騎士団入団テストをお受けになる方ですか？」
「はい」
受付は女の人だった。格好から使用人の服だから、この城のメイドだろうか。
「では、まずお名前をお願いします」
受付嬢は紙と羽ペンを持ち出し、わたしの答えを待った。
「アルテミス・メリアーです」
「え！？」
言った途端、受付嬢はビックリした。
受付嬢だけじゃない、耳に入ったのであろう周りの受付嬢、順番待ちの戦士達が後退り、わたしを見た。
「あ…アルテミス…・メリアー様ですね…」
受付嬢はおどおどしながら紙に名前を書き込んだ。
周りの連中も、何事もなかったかのように平静を装おうとし始めた。
「えっと、お次に年齢をよろしいでしょうか……？」
受付嬢の顔から笑顔が消えていた。
わたしの名前を聞いてからだ。もしかして、父さんか兄さんの影響だろうか。

「１３歳です」
「１３……はい。では次に、出身地をお願いします」
「大陸名もですか？」
「はい、出来る限りに」
「サンポリア大陸、北端の湊町ウィズです」
「っ！？」

またも周りの皆がこちらを見てきた。
父さんの出身地は知らないが、兄さんの出身地は一致する。
メリアーはそれほど有名なのだろうか…。

「は…はい」
「……大丈夫ですか？」
「ひぃっ」

涙目になっているので、わたしは心配になって受付嬢に声をかけたら、ビビられた。

「はい、ごめんなさい……」
「いえいえ、焦らずに仕事をして下さい」

安心させる意味でにっこり微笑んだが、受付嬢には通用しなかった。

「お次は、メリアー様の武器と主な戦法を、…お願いします……」
「はい、わたしは両手剣です。素早さと手数の多さで低い分野を補います」
「……いやぁぁぁぁぁ！！！！！」
「！？」

またもビビられた。しかも今度はハンパない。

さすがの戦士達も驚き、思わずわたしに武器を構えた。

「やっぱりメリアーか…」
「まさか、メリアーに娘がいたとはな…」
「親父さんとほとんど一緒じゃないか…」

群衆からヒソヒソと囁かれるわたし。

「おい女！　お前、メリアーの娘だそうだな！？」
「っ？　そうですけど……」

いきなり人混みを掻き分けて現れた大柄な男の斧使い。
わたしは正直の意味でしっかり答えたのだが、

「メリアーの娘…ここはお前の来る所じゃねぇんだよ！！」
「そうだそうだ！！」
「あんな奴の血が流れてるお前なんか人間じゃねぇ！！」
「人殺し！　魔物に寝返った悪魔！！」
「え？　え…？」

何の事なのかさっぱりであった。
でも、人々の罵声を聞くと、どうやら父さんも兄さんもあまり良い評判はなさそうだった。
そう思うと、わたしは悲しくなった。

「戦士共、何事だ！　静かに手続きも出来ないのか！？」
「！？」

まさに鶴の一声、突然現れた豪華な鎧を身につけた男が現れ、場は静まった。

歳は４０代くらいだろうか。でも体格の良さそうな戦士だ。

「あ…あの方は、ディルス将軍じゃないか…？」
「やべぇぞ……こんなに騒いじゃあ、おれ達テスト受けられねぇかもな……」
「全部メリアーがいけないんだろ……」

人混みのヒソヒソ話が聞こえる。

「何？　メリアーだとっ？」

ディルス将軍という男は地獄耳なのか、ヒソヒソ話からわたしの名前を聞き、目を見開いた。
騎士団の将軍さえも驚かす程のファミリーネームを持つわたしは一体…。

「？　お前がメリアーか？」

と、わたしをピタリと当てたディルス将軍。
そりゃわかるだろう。わたしの周りは誰もいないから。

「はい。アルテミス・メリアーです」
「……おい、その紙を見せろ」
「は、はいっ」

受付嬢にそう言い、泣いている彼女は慌てて将軍に紙を渡した。わたしの情報が記されたそれを。

「……ふむ、なるほどな。悪いが、わしについてこい」

ディルス将軍はそう言い残し、スタスタと歩いていった。
わたしは慌てて彼の後を追いかけた。

「お前達、もう騒がずに手続きを済ませろ！！　いいな！？」

この部屋を出る前に、ディルス将軍は皆にそう呼び掛けた。

＊＊＊＊＊

長い廊下を渡っていた。
やはり城内は豪華だ。天井は高く、たかが廊下なのにいろんな飾りがある。
絵画や全身鎧、高級感ただようツボや骨董品とか。

「さ、入るがいい」

と促され、わたしはある一室に案内された。その部屋は長机に椅子が向かい合うように並んである。
写真で見た限り…会議室かなにかか。

「適当にどこか腰掛けてくれ」
「はい…」

ディルス将軍は立場が上位らしき椅子に座り、わたしは一脚離れた椅子に座った。

「アルテミス・メリアー…だったか？」
「はい」
「お前はあんな事が起こる可能性を承知で、今回、入団テストを受けようとしたのか？」
「いえ、まったく。というか…わたしは父さんと兄さんの名前すら知らないんです」
「何…？　それはどういう事だ？」
「はい……実は……」

＊＊＊＊＊

わたしは今まで生きて、今日に至るまでの話をした。
わたしが物心ついた頃、父さんと兄さんはいないと思っていた事。
母さんが話してくれたが、一度も名前を聞いていない事。
また、父さんはこの王国の騎士団に所属しており、兄さんも後を追って所属したのかとばかり思っていた事。
そして、国の為、人々の為に正義を貫いているのだとばかり思っていた事……。

「ふむ……なるほどな」

ディルス将軍はわたしの話をしっかり受け入れてくれた。

「つまり、血縁があるにも関わらず、お前は世間の事を知らぬままテストを受けるつもりだったのだな」
「？　世間…？」

普通、家族の事を知らぬまま、ならばわかるが、何故“世間”という言葉を用いるのだろうか？

「あまり信じたくないが……わしが話す事は事実だ。しっかり聞くがよい」

「……はい…」

将軍の表情から見ると、やはりあまりいい話ではなさそうだ。
わたしはどんな話になろうと崩れぬよう、心をしっかりと身構えた。

「まず…お前の父親の名は『ダイアン・メリアー』。兄の名は『ルナトル・メリアー』だ」

「ダイアン……ルナトル……」

やっと、初めて聞いた家族の名前。
わたしは確認するようにその名を呟いた。
そして、身構えた心はこの後語られる真実に、結局は揺れ動いてしまうのであった…。

第二章

―――――――――
父はダイアン
兄はルナトル
二人は王国の騎士だったが…
―――――――――

＊＊＊＊＊

父が騎士団の入団テストを受けて、合格したのは１８歳の時だという。
当時のディルス将軍も、将軍ではなく１つの騎士団の団長を勤めていた。
その騎士団に所属したのが、父であった。

＊＊＊＊＊

「…暗殺騎士団？」
「そうだ。わしも最初はそこで働き、任務を遂行していたものだ」
「その騎士団…あまり聞いた事がないのですが……」

騎士団なのに、暗殺？
響きがなんだか悪く聞こえる…。

「それは暗殺騎士団と言うくらいだからな。世間に知られてはいけない、正義の暗殺をするのだよ」

「正義…？」

「そう、弱いものには手を出さず、裏で悪さをする組織や貴族を暗殺するのだ」

暗殺騎士団の詳細を聞いてみると、どうやらその騎士団に入る条件は、身軽さと攻撃の速さが欠かせないのだそうだ。

「ダイアンは、審査員だった当時の騎士団長達や王様を驚かすくらいの身のこなしであった。両手に剣を持つ戦士など、ダイアンしかいなかったからなぁ……」

「そ…そんなにすごかったんですか？」

将軍の懐かしむ目を見ると、本当に父はすごい人だったんだと知る。

「それはすごいものさ。慎重に物事を考える王様だって、すぐにあいつを採用したがっていたくらいだからな」

「……」

王様が欲しがる程の人材…父はそんな人間だったんだ。そう思うと、とても誇らしかった。

「普通の騎士団に入れてはもったいない、と王様はダイアンを暗殺騎士団に入れようとした。ダイアンはそれを快く受け入れ、暗殺騎士団で任務をこなしていったんだ」

＊＊＊＊＊

ある日に暗殺騎士団は、旅の劇団と偽り湊町のウィズを訪れた。
当時ウィズには裏で危険物の取り引きがされているという情報があった為、その主犯を殺すべく騎士団は動いたのだという。
そこで父さんは……母さんと出会ったのだ。

＊＊＊＊＊

「出会ったあの二人はお似合いのカップルだったな……皆が付き合いを認めたくらいだ。でも、任務はすぐに終わり、わし達は城に帰らねばならなかった。しばらくそこに住み、暇があればいつも一緒にいた二人だったから……別れるのが寂しかっただろう」
「そうだったんですか……」

＊＊＊＊＊

しばらく父さんは母さんと手紙のやりとりをしていたようだ。
そして父さんは、母さんに嘘をついていた事を手紙に書いたらしい。
自分は暗殺騎士団だ、と…。

＊＊＊＊＊

「ダイアンの部屋を調べれば、手紙が残っているかもしれないな。写真のやりとりもしていたみたいだからな…」

（み…みてみたい……）

父さんと母さんがどんな会話を手紙にしたのだろうか……機会があれば、是非とも。

＊＊＊＊＊

母さんは父さんの仕事を受け入れたらしく、二人の関係はさらに深まった。

休みの日、父さんが母さんに会いに行くくらいだという。

そして一年間付き合い、二人は結婚した。お互いに１９歳の頃だ。

その一年後に、兄さんのルナトルが誕生した。

＊＊＊＊＊

「ルナトルは母親に似ていたな……ダイアンは少し残念がっていたがな」

とディルス将軍はがははははと豪快に笑った。

きっと、母さんを羨ましがる父さんの姿を思い浮かべているのだろう。

＊＊＊＊＊

結婚してから父さんは、ウィズで暮らし始めたのだという。
朝早くに起きて、日が昇る前にウィズを出ていると聞いているのだそうだ。
そして、夜遅くに我が家に帰るのだという。
休みの日は必ず家族の団らんをとるのだという。
そして父さんが25歳の時、父さんは暗殺騎士団から一般的な騎士団に所属を変えられたという。

＊＊＊＊＊

「あの頃は少し人手不足だったからな…仕方なしに異動したのだ」
「それからどうなったんですか？」
「もちろん、仕事は順調にこなしたさ。聞いた話ではな。わしは暗殺団長故、あの後に何があったのかわからないんでな」
父はきっと、家族の為なら何も苦を感じなかったのだろう。
喜んでいるのかわからないし、悲しんでいるのかもわからない。

＊＊＊＊＊

わたしが生まれたのはその5年後。
しかし、当時の王国は、いや、世界全体が危険な状態だったのだ。

父はやむを得ず、サンポリア王国からユゴリアン王国へと行かされたのだという。
まだ１０歳の兄さんを連れて。

ユゴリアン王国というのは、この世界で１番広いユゴリアン大陸にある王国だ。危険な大陸でもあった。
何故なら…その大陸に、魔界の入り口があるからだ。

＊＊＊＊＊

「サンポリア王国だけじゃないだろうな…エイス王国の騎士達も、サーサリー王国の騎士達も、強者ばかりが行ってしまった…」
「……どこに、ですか？」
「……『魔界戦争』に」
「！？……」

＊＊＊＊＊

魔界戦争……。
わたしも本で読んだ事がある。
でもわたしが知ったのは７歳の頃、その頃の書いてある本では『まだ戦争は続いている』という事が最後に書いてあった。

噂ではわたしが１０歳になった時には、もう終戦を迎えて、人間達が勝ったのだと聞いた。

＊＊＊＊＊

「ダイアンはルナトルを徹底的に鍛え上げ、ルナトルはダイアンより若い１６歳に、騎士として認められたのだ」

「１６…！？」

「ルナトルも小さい頃から騎士になりたがっていたからな。その夢を叶えてやろうと、ダイアンはルナトルを戦争に連れていったに違いない…」

＊＊＊＊＊

戦争は死者がたくさん出てしまい、それでもこちらが優勢だった。しかし、戦争が勃発してから８年後…ルナトルが１８歳の時。

＊＊＊＊＊

「ルナトルはダイアンと正反対の戦法だった。ダイアンが素早さを持つならば、ルナトルは破壊力を持っていた」

「それは…斧を使う戦法ですか？」

「いや…斧よりも恐ろしく強い武器、大剣だ」

「たいけ……嘘！？」

わたしが聞いた話では、大剣は自分の背丈よりも長い武器で、刃も

大きいもの。たくさんの鉄や硬いもので作られている故、破壊力はどんな武器も魔法も上回るという。
ただ……あまりにも重たく、扱いが難しいのだという。

「ルナトルはダイアンよりも強くなりたいと思い、その武器を選び、極めようとしたのだろう。しかし、大剣は熟練者でも扱いが難しい…ましてや戦争の中で、マスター出来るものではない」
「…まさか……」
「ああ……ルナトルは、ある魔術を使う魔物に敗れた」
「――――!?」

＊＊＊＊＊

兄さんは魔物の呪いで、身体の半分が魔物になってしまったのだという。
兄さんは魔物に寝返り、人間を襲った。扱い慣れていなかった大剣を、木の棒のように操って。

＊＊＊＊＊

「ダイアンは、自分の息子が魔物になってしまっても、息子をかばおうとした。それでダイアンは仲間達に責められたのだ。『魔物の味方をする裏切り者』と」
「嘘……そんな……」

嘘ならよかった……でも、将軍は嘘つきでこんな話をするワケがな

い。
わたしは、ただ悲しくて悲しくて…。

＊＊＊＊＊

戦争が終わった。でも兄さんは依然魔物のままで、まだ生き残っていた魔物と共に魔界へ逃げてしまった。
父さんも、皆が裏切り者だと批判をしていた故、行方がわからなくなっていた。
いや、戦争に参加していた皆が、父さんの事なんかどうでもいいと思ったのだろう。
とにかく戦争はこちらの勝利となったのだという。

＊＊＊＊＊

「それから3年後…お前が現れたのだ」
「……」
あれだけ身構えていたのに、心はショックを受けていた。
兄さんは魔物になった……父さんは生死が定かじゃない。
「気の毒だが……わしが話すのはここまでだ。仕方がない……」
「いえ……話して下さりありがとうございます……」
「それでだ……お前は入団テストを受けるのか？」
「受けます」

わたしは決めた。こんな気の遠くなりそうな事、やり遂げられるかどうかわからない。

「わたし……父さんと兄さんを捜します」

「何…？」

ディルス将軍は怪訝な顔でわたしを見た。

「騎士団に入れば、いつかはいろんな王国に行けるに違いないでしょう。そうやって騎士団をして、修行を積んで、父さんを捜します！　魔物の兄さんと出会ったならば、わたしは兄さんを元の人間に戻します！」

「……志を持つのは悪い事ではない。だが……」

ディルス将軍は、今度は心配そうな顔でわたしを見た。

「お前はアルテミス・メリアー。魔物の妹にして、裏切り者の娘なんだぞ。世間がお前をどんな目で見るのかわかっているのか？」

遠回しに、テストを受けるな、と言いたいのだろう。

「わかっています。だから証明したいんです」

「……何をだ」

「……父さんが子を思う気持ちと、兄さんの無実を」

わたしは決心の目でディルス将軍の目を見た。

将軍もわたしの目を見返す。

しばらくのにらみ合い……に近い、沈黙。

「……お前の目に汚れはない。父親にそっくりだ」

「え……？」

ディルス将軍は諦めたのか、苦笑いを浮かべた。

「ならば、テストを受ければよい。もう手続きは締め切ってしまっただろうから、わしの紹介で特別に受けさせよう」

「！　ありがとうございます！！」

チャンスが見え、わたしは感謝いっぱいに将軍に頭を下げた。

「ただし、お前は己の志を貫かなければならぬ」

「え？」

将軍の厳しい声にわたしは顔を上げた。

まさに将軍の顔で、ディルス将軍は言った。

「どんな困難が会おうと、お前は自分の夢を必ず叶えるのだぞ……いいな？」

「……はい…！」

わたしは、もう、後戻りをしないと決意した。

その意味を込めて、わたしは返事をした。

＊＊＊＊＊

「……」

一応、将軍の紹介でわたしはテストを受ける事になった。

テストを受ける者の控え室。とても広い部屋だった。

「……」

わたしは部屋の隅に寄りかかり、役員が来るのを待っていた。
皆も、自分の防具や武器の手入れをしたり、他人同士で情報を交換をしたりと活気的だ。
……でも、わたしの周りに人が集まる事はない。

「あのショートヘアの女の子…」
「ああ、あいつがメリアーの娘だそうだ…」
「格好がまともじゃねぇなぁ…あれ、明らか修行用の服だろ」
「あの両手剣も古そうだな……あんなんで魔物が斬れるのか？」
「将軍の紹介だっていうけど……確か将軍とメリアーには上下関係があったんだろ……？」
「親の七光りって事か…あんなやつ、一回目の試験で終わるな」

ハハハハハ！！と笑い声がしてきた。
わたしを馬鹿にしている連中の声だろう。

（どうせ……名前だけよ……でも、わたしはそんなんじゃないのを証明するわよ……）

こいつらのあっけにとられた顔を見るのが楽しみでしょうがない…
…早くテストを始めないのだろうか？

「皆さん！　お待たせしました！！」
「！」

ドアが開き、役員の男が高らかに呼び掛けた。

わたし含めて全員は、待ってました、と言わんばかりに役員を見た。
よし……わたしの夢を叶える一歩目にしてやるわよ…。
わたしは心に何度も決意させた。
そして、役員からの説明が始まろうとしていた。

第三章

―――――――――
入団テスト　第一回
ツーマンセル
―――――――――

「ではまず、第一回目のテストの内容について説明させて頂きます」

役員の口が開き、部屋はシン…と静まり返った。

「これから皆さんにはツーマンセルで、捕獲した魔物と戦って頂きます」

ツーマンセル？

ざわざわと人々が口々に言い、なんだそれは、とか、どういう事だ、等が聞こえてきた。

「ツーマンセルとは、二人組、という事です。皆さんがお持ちの番号札で、組み合わせをこちらで発表します。この試験の着目点は、二人との協力性、二人との戦法連携が主となります。互いに知らぬ者同士ですから、この短い時間でどれほど相手との絆が深まるかが重要となります」

なるほど…騎士団に入るなら必要な要素だろうな。

わたしもそれに納得したし、皆も、ああそうか、という顔を見せた。

「制限時間内に魔物を倒せなかった場合、勝手行動が目立った場合、誰か一人が死傷した場合等、そのツーマンセルは失格となります。お気をつけて下さい。また、この試験では、半分の人数を減らすつもりですので、皆さんの技術、戦法、そしてチームプレイを存分に見せて下さいますようお願いします」

半分……これはキツい。つまり、この部屋にゆとりが持てる程に減るのだろう。

「では、最初のツーマンセルを発表します」

と、役員は持っていた書類に目を通した。

……誰の番号が呼ばれるのか、一同は緊張の面持ちで待っていた。

「一組目は、１０８番と４１番です。こちらに来て下さりますようお願いします！」

「！？」

１０８番……最後の番号。つまり、わたしだ。しかもいきなり。きっとディルス将軍の仕業に違いない…そう思っておけば反感を持つ気もなくなる。

わたしは歩き出し、皆に注目された。

やはり嘲笑いの目線を感じるが、そんなもの、知ったこっちゃない。

「４１番は可哀想だなぁ……」

「ああ……あのメリアーにあたっちまったからな……」

「運がねぇよ……同情するぜ…」

そんな声が聞こえたが、相手にそんな不快な思いをさせるつもりはない。むしろ、勝たせてやろうと思えた。
わたしは役員の元にたどり着き、その後に４１番が現れた。

「１０８番のアルテミス・メリアー様。４１番のムーン・タリアス様。私について下さるようお願いします」

と、役員はわたし達に言い、部屋を出る。
わたし達も後を追った。

＊＊＊＊＊

長い廊下を歩く。この辺りはディルス将軍と歩いた廊下と少し違う。
天井も低く、造りも殺風景。まるで地下の階。

「…」

わたしは、隣にいる４１番…ムーン・タリアスをチラッと見る。
背丈はもちろんわたしより高い。体格も程よい成人男性。でも年齢はわからない。
身に纏っているマントはボロボロで色も褪せている。
その布切れの間から、同じように古そうな鎧が見え隠れする。
頭はフードを被っている。顔も右目以外、包帯で巻かれており、素顔がわかりづらい。
それに、メリアーのわたしとペアになってしまったというのに、至って冷静だ。
腰に提げているのは……細い長剣。

「……ねぇ」

静かなのもつまらないので、試しに話しかけてみたら、

「……なんだ」

意外にもしゃべった。声は見た目とは裏腹にとても良い声音だった。

「どうしてそんなに冷静なの？　わたし、メリアーなのに」

「……別に、お前がメリアーでも関係ない」

感情の込もらない声で彼…ムーンは答えた。でも、決して嫌がるような声ではない。

「だってわたしは、魔物の妹で、裏切り者の娘なんだよ。皆みたいに嫌な素振りをしないもの、あなたは」

「……魔物だろうが裏切り者だろうが、今は関係ないだろう。もちろん、もし私がお前と共に騎士になっても、気にはしない…」

「…皆より大人ね。あなたは」

わたしの事を『メリアー』としてではなく、『アルテミス・メリアー』として見てくれたのは、この人が初めてかもしれない。将軍より、よく人を見る心がある気がする。

「もう知ってるだろうけど、わたしはアルテミス・メリアー。アルって呼んで。よろしくね、ムーン」

あの群衆には見せないだろう笑顔を、わたしは浮かべ、ムーンに挨拶をした。

ムーンはコクリと頷くだけ。それで会話が終わった。

…彼は決して悪い人じゃない、と何度でも思えた。

「お二人様、そろそろ闘技場に着きますので、気を引き締めて下さい」

と、役員はたどり着いた古そうな木の扉に手をかけた。

扉が開き、まばゆい光が溢れる。

ワアアァ……！！

「！…」

歓声。そして人々。

写真で見たことがある。コロッセオだ。

観客席に囲まれている対決の場に、わたし達は連れてかれた。

目の前の客席に、豪華な椅子に座る王様と、騎士団長らしき４人が側にいる。ディルス将軍も。

「今回は貴族の方々や、騎士団員の方々がお見えになっております。緊張なさっているでしょうが、いつも通りの自分を発揮して下さいね」

「え？」

役員にそこまで言われたわたし。何で？という顔で役員を見たら、

「…ディルス様からの伝言です」

とウィンクで返された。なるほど…。

わたしは、こちらを見下ろしてくるディルス将軍を見た。

目が合うと、頷かれたので、わたしも頷き返した。

「メリアー様、タリアス様、準備はよろしいですか？」
「はい」
「ああ…」

役員に改めて問われ、わたしとムーンの返事は揃った。

「魔術師の皆さん、試験を始めますので、よろしくお願いします！！」

役員は、王様の側で控えるローブを纏いし者に声をかけた。そしてこの場から逃げるように観客席へと飛び越えた。
身のこなしがある役員だなぁ…と思っていたら、

バチバチバチバチ！！

「！？」

突然、頭上で激しい音が響き渡ってきた。
空中で魔法陣が現れた。呼ばれた魔術師達に目を向けると、何か手を伸ばし、その魔法陣に向かって何かを詠唱していた。

「何あれ…」
「騎士団が捕獲した魔物を召喚している」
「え？」

なんでムーンが知ってるの？と聞く前に

ズウゥゥン……！！！

「きゃあっ！」

魔法陣から巨大な黒い竜が姿を現し、この石の地面に足をつけたのだ。

その拍子に起きた短い地震に足をとられたわたし。

「いきなり黒竜か……」

と、ムーンは以前にも戦った事があるような声で呟いた。

「アル」

「っ。何っ？」

不意に名前を呼ばれ（ここに来てその名で呼ばれたのが初めてだったのも含む…）、慌ててわたしは彼を見た。彼はここまで慌てる様子が全くない。

「私は攻撃の魔術が扱える。私の剣に魔法を与え、一撃必殺で奴を仕留めるつもりだ。私が詠唱している間に、あいつの気をそらしてほしいが…出来るか？」

つまり、この戦法で戦えるか否か。

「…」

いつもは一人で弱い魔物を相手にしてきたから、そのようにペアを組んだ戦い方が出来るのか不安だったが…、

「…わかった」

初めて会ったのに、わたしをすぐに信頼してくれた彼。
わたしも彼を信じる事で、乗り越えられるような気がした。

「2分以内にこの魔物を倒せば合格です！　時間以内に倒せなかった場合、または試験続行が不可能だと判定された場合、不合格となります！」

観客席から役員の改まった説明が聞こえ、わたしは両手に剣を持った。
ムーンも右手に長剣を持ち、構えた。

「レディーゴー！！」

いつの間にか持っていた役員のベルが鳴り響き、試験が始まった。
それを合図にするかのように、観客から声援が送られ、黒竜はわたし達に向かってきた。

「アル、時間がかかるが、頼む」
「ＯＫ」

ムーンは早速、ぶつぶつと詠唱を始めた。
わたしは彼が邪魔をされない為、黒竜に向かって駆け出した。

第四章

―――――――
第一回の試験は
黒竜との戦い

一人の仲間と共に
―――――――

「遊んでやるわよ黒い竜！！」

わたしは自分の最高速度で黒竜に向かい、そして叫んだ。

グオォォ――――――！！！

黒竜は右腕を高く上げ、わたしへと振り下ろしてきたが、

「っと」

わたしは瞬時に横へ跳んだ。
そのまま奴の左足へ

「遅い！！」

風のように通り抜けながら、素早く斬り付けた。

奴は痛がるような声をあげず、わたしへと振り向いた。
左足には、あの一瞬だけで、十数くらいの傷があった。

グアアッ！！

黒竜はさらに腕を振り下ろしてきた。だが、やはり動作はわたしから見て遅く感じる。

「おっと。よっと」

右拳を避け、後からきた左拳も避けた。
右腕が上がる前に、わたしは黒竜の右の手の甲に乗った。

グゥッ…！？

黒竜はわたしの行動に驚いたのか、一瞬ひるんだ。
そのひるみはわたしにとって絶好のチャンスだ。

「チンタラしてるとねぇ」

わたしは右腕を駆け上がり、肩に乗った。

「あんたの目がなくなるのよぉ！！！」

そこから高く跳び上がり、奴の目へと、両手剣を揃えて向かっていく。
呆気にとられて黒竜がこちらを見上げてきたから好都合に

ギィヤアアァアァァ――――――――――――――――――！！！！！！

右目を突き刺す事が出来た。思ったより深く。

グゥゥ…グガァア…！！

グアアアアア――――――！！！！！！！

「うわっ、うわっ、うわぁっ」

黒竜は目の痛みに耐えきれず暴れだした。

わたしは奴の右目に刺さっている両手剣を素早く抜く事が出来なかった為に振り回されてしまう。

ギャアアォォォ――――――――――！！！！！！

「っキャアアアアッ！！！」

ブンッと思いきった力で、目に刺さっている剣が抜けた。

ずっと握っていたわたしは剣と共に吹っ飛ばされた。

「ひっ！」

てっきり地面の衝撃を受けるのかとばかり思ったら、そうじゃなかった。

受け止められた、無傷で。誰だと振り向いたら

「ムーン…」

「××××××××……」

彼だった。詠唱をしながらもわたしを受け止めてくれたのだ。

彼がどんな呪文を言っているのかはわからない。聞いた事がない言葉ばかりが聞こえる。

「×××…」
「え？」
彼は依然唱え続けながら（そんなに呪文が長いとは思わなかった…）、どこかを指差した。
目の痛みによる怒りで、身体中から湯けむりを出す黒竜の左足だ。
「…あ！」
もしかしたら…、
「わかった、やってみるわ！」
「××××××…」
わたしは彼から離れ、すぐに駆け出した。
背後で彼が頷く気配がした。
黒竜は右目から血を流し、左目でわたしを捉える。
わたしはフラフラしている黒竜の左足に向かった。
グガアアォォォ――――――――――――――！！！！
黒竜はそんなわたしを近付かせたくないのか、わたしにパンチを放ったが
「ほいっとっ」
軽々とそれをジャンプで避けられ、意味をなくした。
「悪いけど、わたし達が勝つんだからっ！！」

左足に集中攻撃。両手剣の刃の乱舞。
目にもとまらぬ速さで、左足にどんどん斬り傷をつけていく。

ガアアアア――――――――！！！！！

黒竜はわたしの攻撃を阻止しようと、左足でわたしを踏みつけようとするが、その攻撃にわたしは瞬時に離れ、足が地につく時にまた接近した。

グガアア！　グギャアアアア！！！

思い通りにいかないもどかしさと傷の痛みに、黒竜は怒りを身体で表現していた。
じだんだを踏み、尻尾を振り回し、両腕を振り回して地面を殴りつけたり、観客席にも放とうとすれが、ガードマンならぬ防衛魔術師達が観客席の人々を守る。
（ムーンも無傷ね…すごいわ…）

黒竜の攻撃が時々ムーンに届く事があるが、彼がそれを難なく避けるのが視界に入る。どうやら相当な戦闘力がある、と今更知った。
魔術を扱える事と黒竜の知識があると知った時に、レベルが明らかに高いとは感じていたが。

グガガガアアアアア――――――――――――――――――――――！！！！！！！！！

黒竜の鳴き声は絶えない。
わたしの集中攻撃も絶えない。
でも、そろそろだと思う。

「てぇいっ！！！」

斬り傷だらけの血だらけの左足を、両手剣を合わせて、横一閃。

さすがのドラゴン種族の魔物でも、

グギャアアアアアア――――――――――――――！！！！！

痛みで立てない。

ズウウゥー……ン……

黒竜は倒れてしまった。

グガァ……グガァァァア！！

それでも立ち上がろうと必死になる黒竜。

でも、慌てふためく故に、奴はなかなか立ち上がらない。

「アル、下がれ！」

「！」

不意にムーンからの鋭い指摘。わたしは反射的に黒竜から離れた。

「『聖水の神“マーキュリー”の絶対的加護を、この剣（つるぎ）に与えたまえ』……」

最後の締めらしき呪文を唱え、彼は長剣を高く掲げた。

「『ポセイドン』！！」

長剣は青白く輝き、水流を纏った。
でも、ただの水流ではない。見るからに滝のごとき流れが、長剣の刃渡りを螺旋で流れているのだ。
「はあああああああっ！！！」
ムーンはその魔剣と化したそれを逆手に持ち、高くジャンプした。
切っ先は倒れている黒竜の胸辺りに向かい、そして、
「だぁぁぁ！！！」
心臓辺りを突き刺した。
グオオオ――――――――――――――――――――――――――――――――！！！！！！！！
黒竜の口から轟音が発せられた。
その声は今まで散々戦って聞いた鳴き声よりも大きい。これが断末魔の声なのだろうか。
わたしも、ムーンを除いてこの場にいる皆が耳を塞いだ。
黒竜は最期の声と共に姿を消した。
「消えた……どうして……」
「黒竜は魔族の中のドラゴン族……魔界の強い生物程、死体は残りにくいんだ……」
魔剣から長剣に戻った剣を鞘に入れ、ムーンはこちらに歩み寄る。
「……あなたはあの竜の弱点を知っていたの？」

「ああ……黒竜は体内に水が入ると、死んでしまう。だから水の魔術を使ったワケだ」

やはり彼はただ者ではない……騎士としての条件は充分に揃っていると思うのだが……。

「……？」

パチパチと、一人分の拍手の音が聞こえ、わたし達はその方を見た。

「素晴らしい！　このような戦士に会ったのは久しぶりだ！！」

王様だった。

王様の顔は希望溢れる表情をしており、椅子から立ち上がってわたし達に拍手を送って下さっていた。

「ブラボー！」

「すごく面白かったわ！」

「最初からこんな戦いが見れるなんてラッキーだぜ！！」

「お姉ちゃんカッコいいー！」

「キャアー！」

王様に習うかのように、他の観客達も立ち、拍手、歓声。

「良かったじゃないか」

「？」

背後にいたムーンに言われ、わたしは振り向いた。

「何が……？」

「お前を認めてくれる人が、こんなにいるんだからな」
「…ムーン、それは違うと思うな」
「？　何故だ？」

今度は逆に問われた。

「皆がわたしの名前を知らないだけなんだもの。メリアーの名前を知れば、あいつらみたいに白い目で見られるわ……」
「……」

そう答えると、ムーンは黙ってしまった。何か言う言葉がないなら、それでもいいと思った。
どんな優しい言葉を、ムーンが放ったとしても、メリアーである事に変わりはないから。

＊＊＊＊＊

「マジであいつら合格したのか……？」
「あのメリアーがだぞ？」
「相棒の方も、よく無事に帰ってこれたよな……」

役員にまた案内してもらって控え室に戻れば、囁きが絶えない。
定位置になってもおかしくない部屋の隅に、わたしは座り込み待機していた。
ただ、今回違うのは

「気にするな」

ムーンが側にいてくれた事だ。

「ああいう奴ら程、試験に落ちやすい。ほっとけばその内静まるだろう」

ムーンの言葉は本当に支えになる。やはり彼はそこらへんの大人より大人だった。

「…ありがと」

わたしは微笑み、彼に礼を言った。
これほど心強い仲間は、本当に、どこを捜してもいない気がする。

＊＊＊＊＊

それからしばらく、他の受験者達が終わるのを待っていた。
死者はさすがに出なかったが、怪我人が続出した。
その大半が、わたしを馬鹿にした連中ばかりだった。

「他の奴らはどんな魔物と戦ったんだろうな…」

「？　どういう事？」

「入団テストに使う魔物は、皆違うらしいんだ。ペアの組み合わせも、戦わせる魔物も、各々の戦術に合わせているんだ」

知り尽くしている口振り。

「なんで知ってるの？」

「……以前に入団テストを受けた友人からの、情報だ」

「あ、なるほど……」

受けに行く前に、予習をした、という事か……準備がいいとはまさにこれだ、とわたしは思った。

「でも……すごいね、あなたは」

「？」

「全てが完璧に備わっているんだもの。羨ましいわ」

「……」

尊敬の意を込めて言ったつもりだったが、彼は俯き、黙り込んでしまった。

「…お前が思う程、私は完璧な人間ではない……」

「……どうしてそう思うの…？」

「……私は」

「ガーッハッハッハッ！！　あれが試験か！？　笑わせてくれるじゃねぇか！！　ガハハハハ！！」

ムーンの声が、戻ってきた受験者の笑い声で止められてしまった。しかもあの男…というか大男、手続きをするロビーで出会った斧使いだ。

「なぁボウズ！　お前も結構やるじゃねぇか！」

「えへへ…」

大男はペアらしき少年の背中をベシベシ叩く。

少年は痛がっているようだが、無理して笑っているのがわかる。苦笑する少年。可哀想だ…。

「彼が可哀想だな」
「ええ」

ムーンもわたしと同じように同情していた。

「あいつらで最後みたいだな」
「結構長かったなぁ…疲れたぜ」
「腹が減ったなぁ。もう昼の時間か？」

何人かの戦士達の会話が聞こえる。
そういえば小腹が空いた、でも今は試験中だし…休憩なんてないよね。

「騎士は休憩する暇がないからな。残念だが昼飯は食えないぞ」
「あ…やっぱり…？」
「そんな顔をしていたからな」

しかも表情でわたしの思考を読み取るとは…。敵に回したら負けてしまいそうだ。全てにおいて。

「ほら」
「？」
「食え」
「え？　いいの？」

彼は懐から木の実を取り出して、わたしに差し出してきた。
しかもそれは本で見た事がある『チカラモの実』だ。

「一粒で腹が満たされるからな。騎士のみならず、戦士ならば欠かせないものだ。食え」

「うん…ありがとう」

やはり完璧だ。わたしは彼から木の実を受け取り、口に含んだ。うん、美味。

彼は多分、謙虚なのだろう。だからさっき、あんな風に言葉を言ったのだろう。

「…美味しいね」

「ああ」

そうやってチカラモを味わいながら、わたし達は役員が来るまで待っていた。

第五章

―――――――――
新しい仲間は
『レイニー・バルナ』
―――――――――

＊＊＊＊＊

「皆さん、お疲れ様でした！」

役員が部屋に入ってきて、この場にいる受験者達に呼び掛けた。

「結果が発表されましたので、手続きを行ったロビーへ移動願います。そちらに結果を記した紙が貼られていますので。ご自分の番号が記されておりましたら、その方は合格者となります」

＊＊＊＊＊

役員の言う通り、わたし達はロビーに向かった。
そこでは既に見終わった者。これから見ようとする者。
不合格だったのか、悔やんだり、荷支度をして帰ろうとする者。

合格したのか、喜んだり、周りの連中に自慢する者もいた。

「１０８番１０８番……」

わたしは、背が低いのと細身なのを利用し、群衆の隙間をかいくぐった。

そして、最後の番号を捜すべく、最後尾の数字の列を目で辿った。

「あっ」

あった！

（よしっ！）

ここはあえて騒がず、心の中でガッツポーズをした。

「アル！　私の番号はあるか！？」

「あ、うん！　ちょっと待ってて！」

後ろからムーンの声が聞こえ、わたしはまた紙を見上げた。

そしたら、

「おらっ、メリアーの娘！　邪魔だ！！」

「きゃあ！」

あの大男がわたしの肩をガシリと掴み、物をどけるようにわたしを押し出した。

その力にわたしは尻餅をついてしまった。

見上げれば、大男の周りに人はいなかった。

無理矢理道をあけられたらしいのか、嫌な顔をする受験者が大半だ。

大男の後を追うのは、先程のペアの少年だった。

「ちょっと、皆に迷惑かけないで！」

わたしは彼の自己中心的な行動に腹を立て、声を荒らげた。

「ああ？　メリアーの分際で俺に口答えす」

「大丈夫かっ？」

「え？」

大男が言い切る前に、あの少年がわたしの元に駆け寄ってきた。

わたしに手を差し出し、わたしもとっさに手を取った。

それでわたしは立ち上がったのだが、

「お前、確か黒竜を倒した戦士だろ？　すげぇよな！」

「え？　どうして知ってるの…？」

わたしと同じ防御の薄そうな身軽な服装の少年。わたしと歳が近いかもしれない。

腰のベルトには、短剣が収まっている鞘がいくつもぶら下がっている。

特に目についたのが、同じくベルトについている小さなバッグ。何やらたくさん入れてあり、膨らんでいる。

「だってお前ら、話してたじゃん。黒竜がどうのこうのって。他の人に聞いても黒竜と戦った組はいないし、すごく凶暴なんだろ？　すげぇよ本当に！」

「き…聞いてたの…？」

短い茶髪で癖っ毛の少年。ニコニコと笑顔を輝かせる。

好奇心旺盛な子供の顔とはまさにこれなのだろうか。

「おいボウズ、メリアーに気安く話しかけるな。そいつは悪魔の娘なんだぞ」

「へ？」

大男が少年の肩を掴み、自分に引き寄せる。

先程の試験で信頼したらしいのか、余程わたしを関わらせたくないようだ。

「めりあぁ？　お前、めりあぁってファミリーネームなのか？　名前は？」

「え？　わたしは…アルテミスよ。アルテミス・メリアー…」

わたしの名前を聞いた少年はわたしの顔をジーッと見る。

「えー！？　こんなに可愛いのに悪魔なの！？　おかしいだろーよ！」

「かっ…！？」

少年の口から出た単語に思わず焦る。

少年は大男に抗議の声をあげる。

「し…知らねぇのか？　魔界大戦で有名なメリアーの娘なん」

「魔界大戦とか知らないよそんな大昔の話ー」

「いや、まだ最近のはな」

「おれにとっちゃもう知らないんだっつーの」

「あのなぁボウズ…」

この二人の会話の噛み合わさなっぷりは少し笑える。

「アルテミスだっけ？　おれ、レイニー・バルナ！　雨の日に生まれたからレイニーなんだ。おれの事はレイって呼んでいいからなっ。よろしく！」
「え…よ、よろしく。じゃあレイ、わたしの事はアルでいいわ」
急な自己紹介で少年…レイニーにわたしは自己紹介を返した。

「アルぅ？　なんか男呼びの名前だなぁ…アルテミスでいいや」
「いや…アルテミスじゃ長いから、やっぱりアルがいいな。わたしもそれで呼ばれ慣れ」
「アル、行くぞ」
「っ？」

ムーンに呼ばれ、わたしは振り向いた。
彼は既に戻ろうとしているのであった。

「番号は？」
「あった。もう奴らに関わる事はないだろう。時間の無駄だ」
「そんな事言わないでよ……少なくともレイは悪い人じゃ」
「ほぉ？　じゃあ俺は悪者か？　悪者はお前のほうじゃねぇのか？」
「っ」

わたしの言葉に大男が反応した。
背後で迫力を感じた…わたしを睨んでいるのか。

「ほら、こんな奴らがいるから時間の無駄なんだ。早く行くぞ。次の試験まで体力を温存しておけ」

そう手首を掴まれ、強引にわたしはムーンに連れてかれた。

「アルテミスー！」
「？」

レイの呼ぶ声が聞こえ、わたしは振り向いた。でも足は動き続け、彼が小さくなる。

「もしおれ達と組んだらよろしくなー！！」

ニッコリ笑顔で手を振りながら、わたし達を見送ってくれた。

＊＊＊＊＊

「…そこまでしなくてもよかったじゃない」

控え室に戻ってきたわたし達。
部屋にいる受験者達も、本当に半分になった。
先程より部屋の空気の通りがよくなった気がする。

「ああいうのは相手をしてもキリがない。ほっといておくのが得策なんだ…」
「どうしてそこまでしてわたしに気を使うの？」

彼の以上な過保護っぷり……まるで親のようなそれ。
共に試験を突破した仲間とは言え、何故それほどわたしを気にするのだろうか…。

「……メリアーだからだ」

「え？」
「メリアーであるお前が、次々に何かを言われているのを見たくはないんだ……」
「だから…どうして……」
メリアーだからって、自分の事のように心配する者がこう簡単にいるのか？
「仲間だからだ」
「え…」
仲間。
「仲間だから……自分のように思えてしまうんだ……」
「仲間……」
仲間か……わたしは彼を仲間だと思っている。
彼もわたしを仲間と思っている。
「仲間とは、そういうものだろう。……私だけがそう思ってるのかもしれないな……すまない」
彼の言葉が自嘲に変わり、わたしの謝罪にまで発展してしまった。
その流れにわたしは慌ててしまい
「そんな、あなただけじゃない。わたしだって、仲間だと思っているんだか」
「皆さん、お待たせしました。一回戦はご苦労様でした」
役員が来た事により、わたしの言葉は切られてしまった。

どうやら向こうの準備が出来たのだろう。

（どうしよう…ちゃんと言わないと……）

わたしも、仲間だと思っている事を。
でも役員の説明は始まってしまう。

「次の試験の内容ですが、闘技場で発表いたしますので、ご案内します」

＊＊＊＊＊

という事で、また闘技場を訪れたわたし達。
観客はおらず、いるのは騎士団長とディルス将軍、サンポリア王が、定席で待っていた。

「第一回試験の合格者よ。ご苦労であった」

王様は椅子から立ち上がり、わたし達に話しかけた。

「次の第二試験だが、この試験は騎士団としての立場を考えて行動出来るかどうかが試される」

王様からのお言葉に、わたし達は耳を傾けた。
聞き逃してはいけない。そういう緊張感が、闘技場内でただよっていた。

「試験内容は先程のように、魔物を仕留める事が目標だが、それだ

けではないぞ。倒したとしても、倒さなかったとしても、結果よりも経過を重視する。よいか……騎士団として、この試験を乗り越えられるかどうかだ。忘れるでないぞ……」

騎士団として……。
王様の言葉に、わたしは意味を探した。
騎士団としてか、やはりそういうのは

「私からは以上だ。ディルス将軍、試験内容を発表するがいい」
「はい」

王様に命じられ、ディルス将軍が前に出た。

「では、お前達に試験内容を説明しよう。先程も王がおっしゃった通り、第一回試験と同じように、魔物と戦ってもらう。だが、今回は二人組ではなく、大人数の組で試験を受けてもらう」

大人数。その言葉に受験者がざわつく。
将軍が、静かに、と言えば、場がすぐに静まった。

「今ここにいるのは１０８人の半分……つまり、５４人がここにいる。こちらで編成した９人の騎士団として、第二試験を受けるのだ。騎士団のメンバー表を、受付のロビーに貼っておくので、よく目に通しておけ。騎士団は全部で６つだ」

おっと待った、まだ行くんじゃないぞ。
ここから立ち去ろうとした受験者達を、慌てて呼び止める将軍。

「それぞれの騎士団には団長がつく。それは騎士団長だったり、わしだったり、役員だったりする。その団長からの指令に従い、良い

成績を出せるかどうか、チェックされる。もちろん、団長の役目だけでなく、審査員の役目もするのを忘れるな」

受験者達は、黙ったまま互いの顔を見合わせた。見合わせたと言うより、各々が顔ぶれを確認した、という感じだ。

「メンバーの確認が終わったら、それぞれの団長についてゆけ。そこからはその団長の指示に従え。以上！」

＊＊＊＊＊

受付ロビー。
先程は合格者の番号が書いてある紙ではなく、６枚の紙が貼られていた。

「ムーン！　こっち来て！」

確認を終えた受験者達とすれ違いながら、ムーンがこちらに来てくれた。

「ほら……この６つ目の騎士団……」
「……また、同じになれたようだな…」

わたしの番号と彼の番号があった。
しかも騎士団長兼審査員は…ディルス将軍だ。

「まさか将軍の元につくなんて……」
「え！？　アルテミスも６の騎士団なんだ！」

「！」

わたしの呟きを聞いたのか（地獄耳だわ…）、ある者が反応し、わたしに話しかけてきた。

「…レイ……」

「よっ、まさか本当に仲間になれるなんてな。よろしくな！」

人懐っこい笑顔でわたしに挨拶をするのは、レイニー。

「……ボウズ……まさか」

「ああ、おっちゃん。アルテミス達も同じ騎士団みたいだぜ！」

大男も一緒だった。という事は、先程の組と同じところに所属する可能性が高いのだろうか…。

大男はわたしの存在に気付き、舌打ちをした。それはやはりわたしの耳に入ってしまう。

「…もう終わったな」

「え？　何が？」

「行くぞボウズ。死なない程度にやるしかねぇぞ……」

「え？　え？　…何が…？」

大男は理由を言わぬまま、部屋の隅で待機している将軍の元へと歩き出した。

レイは本当に、ワケがわからない様子だ。

「……ま、いいか。アルテミス。早く行こうぜ」

レイはわたしに振り向きそう言った。そして大男の後についていっ

た。
ディルス将軍の元にメンバーがどんどん集まってきた。

「……」
「アル、気にするな」
「……うん…」

ムーンにそう言われはしたが、やはりどこかで引っ掛かっている。

＊＊＊＊＊

ディルス将軍の元に、受験者が集まった。

「よし、9人揃っているな。では、試験について説明をしよう。まずはわしについて来い」

場所移しか。ディルス将軍は歩き出し、わたし達も後を追った。

＊＊＊＊＊

長い豪華な廊下を渡り、わたし達がたどり着いたのはとある一室。
武器やら防具やら、なんだかそのようなものが所々に散乱していた。

「ここは騎士団が実際に使っている交流の部屋だ。ここで作戦を練ったり、互いに武器防具の性能を確かめあったりする。ちなみにこの部屋は『赤炎の騎士団』の部屋だ」

「せきえんのきしだん…？」

聞いた事のない単語を呟くわたし。

「この王国には、４つの騎士団があるのだ。赤炎の騎士団、青海（せいかい）の騎士団、緑原（りょくげん）の騎士団、黒雲（こくうん）の騎士団がある」

ディルス将軍は、この王国に存在している騎士団の名を語り出した。

…暗殺騎士団の話はさすがに言わないようだが。

「それぞれの騎士団には得意な分野によって構成されておる。簡単に言うなら、赤炎は攻撃、青海は防御、緑原は素早さ、黒雲は戦略。もちろん、騎士団一つ一つバランスがあるぞ。もしお前達がこの試験に合格出来たならば、お前達の長所を活かした騎士団に所属出来るだろうな」

へぇ…そうなんだ。

「へぇー…」

心の内の呟きにしておこうと思っていたら、隣にいたレイがわたしと同じ呟きを出した。

「さて…話はこれくらいにして。本題に戻ろうか」

そう言われ、わたし達側が緊張感に溢れた気がした。

「これからの試験で戦う魔物だが、それはとても強い魔物だ。一人だけでは倒せるようなものではない。お前達のチームワークを活かし、その魔物を倒せば、合格に近づける。いいか…しつこいようだ

が、お前達は騎士団として、この試験に挑むのだ」

騎士団として……やはりこれはチームプレイがものを言うのか…。
ムーンとレイ以外の連中はわたしを警戒しているし…果たして乗り越えられるのか…。

「騎士道に反した事が発覚した場合、合格は出来ないと思え、いいな？」

ディルス将軍は念を込めた睨みで、わたし達を見た。

「では…これより、第６騎士団の作戦会議を始める」

将軍の声で、より緊張が高まった。
わたしだけじゃなく、ムーンもレイも、あの大男や他の戦士達も、将軍の話を懸命に聞こうとしているのがわかった。

＊＊＊＊＊

「…という事だ。何か疑問があるならば、今の内に聞け」

一通りの会議が終わり、将軍がしめにそう問いかけてきた。
その問いに皆は答えず、沈黙していた。

「…何もないのならば、副団長を決めるぞ」
「ちょっと待って下さい」
「？」

あの大男が太い腕を上げて挙手をした。

「将軍、１つ聞いてもよろしいでしょうか？」

「そろそろ時間だ、なるべく手短に」

「では単刀直入に聞きます…」

と彼はわたしを見た。すぐにディルス将軍に視線を戻し

「何故メリアーの娘がこの入団テストに参加しているのですか？」

「っ…」

単刀直入すぎる…。

ムーン、レイ以外の他の５人がさらにわたしを見た。

「いくら将軍との仲が良いからと言って、悪魔の娘を騎士団に入れるつもりなのですか？」

「…その質問の答えは試験が終わってからだ」

「はぁ！？」

コンコン

「失礼します。第６騎士団、準備が出来ましたので、ご案内します」

役員が部屋に入ってきた事により、区切りがついた。

「そうか…ならば７５番、お前が副団長だ。しっかりまとめるのだぞ」

「え？　は、はい。ありがとうございます…」

時間が来た事により、大男が強制的に副団長となった。

何か嫌な予感を覚えたが…

「アルテミス。気にするなよ。アルテミスはアルテミスなんだからよ」

「っ。…レイ」

肩をポンッと叩かれ、振り向けばレイのにっかにかの笑顔が。

「私はお前の味方だ。気にせず試験を突破するぞ」

「おれも味方だからな！」

ムーンがそう言ってくれて、さらにレイが（便乗だが）そう言ってくれた。

「…二人共、ありがとう」

不思議と心に余裕が出来た。

先に行ってしまったメンバーを追いかけるように、わたし達は部屋を出た。

いよいよ、第2試験が始まる。

第六章

―――――――――
入団テスト　第二回
騎士団形式模擬戦
―――――――――

わたし達第６騎士団は、同じ闘技場へとたどり着いた。
先程は王様達以外観客席にいなかったのに、また大人数で埋まっていた。

「うっひゃー……盛り上がり過ぎだよー」

プレッシャーなのか、レイがキョロキョロ見回しながら弱音を吐く。

「私達より先に戦った騎士団があるからな。嫌でも熱があるだろう。私達は期待されているからな…」

ムーンがそのワケを知るような口調で呟いたのを聞けた。

「マジか？　じゃあおれ達頑張んねぇとな！」

レイも聞こえたようで（やっぱり地獄耳…）、先程とは逆に元気を見せた。

「ほぉ…何でそういうのがわかるんだ？　お前」

「…」

副団長に任命された大男が睨むようにムーンを見た。

「…予習してきただけだ」

「ほぉ…？」

ムーンの返事に大男は相づちを打つだけで、それ以上何も問いかけなかった。

「ではこれより、第６騎士団による第２試験を始めます！　団長から何かございますでしょうか？」

役員が、団長であるディルス将軍に問う。

「特別な指示はない。ただ、騎士団としての行いを守れば良い。以上だ」

「わかりました。それでは、よろしくお願いします！」

と、役員と将軍は観客席に身軽に乗り込んだ。

そして魔術師達が、第一回と同じように魔物を召喚するために魔法陣を出す詠唱を始めた。

「うわぁ～…何が出てくるんだろー…」

レイはわくわくした様子で、魔物の召喚を待っていた。

そして、バチバチという轟音と共に、魔物が姿を現した。

ズゥゥゥ…ン…！！

巨大な魔物は地に足をつけた。
見上げると、それはとても大きな、白い龍だ。黒竜とは違う、神々しさがある。

「ま…まさか、ホワイトドラゴンか!?」
「えっ?」

大男の柄にしては珍しい焦りの声、そして発された単語に私も驚いた。
ホワイトドラゴン……伝説の巨竜とされ、大昔から、人間の中で1番強い戦士の前でしか姿を現さないという架空の魔物。
本の絵で散々見てきたが、どの本も姿形が全く異なっていたのを覚えている。
つまり、本当の姿は結局誰も知らないのだ。

「ホワイトドラゴンだって!?　カッコイー!!」

レイは本当に場に合わない。

「勝ち目のない無駄な……いや、」
「え?　ムーンのおっちゃん何か言った?」
「っ…集中しておけ、死にたくないならな」

ムーンとレイの会話が耳に入ったが、ムーンの言葉、何か気になった。やはり予習をしていたから、この白龍も知っていたのだろうか。

「模擬試合、開始!!」

役員の高らかな宣言が合図となり、観客が歓声をあげる。
白龍がこちらを見下ろす。

わたし達は武器を構える。

「よし、お前ら！　まずは奴の出方を見ろ！！　それから奴の足を崩してそこを一気に攻めるぞ！」

と大男はこの場のメンバーに指令を出した。
副団長を任されてこの仕切り方……明らかに素人だ。
これでこの試験が上手くいかなかったらこの大男のせいとなる。

ガァァァァ――――――――――――！！！！！！

「うぉ！」
「きゃ！」
「っ！」
「うわぁ！」

白龍は咆哮と共に火の玉を吐き出した。
それは一部に集まっていたわたし達の中心を狙ったかのよう。
わたし達は散り散りに避けた。

「主力は火の球か……お前ら、攻撃に気をつけて一本の足を集中的に狙うぞ！」
「おう！」

お、様になってきた大男。
他のメンバーも返事に気合いが入り、各方向から2人がまず、白龍の右足に向かって駆け出した。

グアアアァッ！！！

「ぉわわぁ！」

白龍のはばたく巨翼の風に2人は尻餅をつき、距離を離された。
「副団長、あんな風じゃ近づけねぇぞ…」
風を受けたメンバーの1人が大男に言った。
「くそっ…こんな敵、どうやって倒せってんだ…！」
大男も既にお手上げの状態だ。
すると、白龍がこちらに迫ってきた！
「だったら止めればいいんだよおっちゃん！」
レイがあの小荷物から何かを取り出した。
そして奴の顔面めがけて投げつけた。
カッ！！
「きゃっ！」
それは一瞬、目映い光を放ち、消えた。
グォォアアア――――――――！！！！！！
「ボウズ、お前何を」
「おれお手製閃光玉だ。これであいつはしばらく目が見えねぇはずだ！」
とレイは今度はムチを取り出し、白龍へと向かって駆け出した。

白龍はというと、視界を閉ざされた事に苛立ち、じたばたと暴れているが、

「よっ！　ほっ！」

レイはそれをものともせず、サッサッと避け、どんどん白龍の体を登っていった。それに白龍は翼を動かし、強風でレイを離そうとしたが

「おおっと危ねぇ！」

と言いつつも余裕しゃくしゃく、白龍の頭の角にムチを放ち、それは角を縛った。
という事はレイは風にやられてもぶら下がっている状態だ。

「レイニー！　何をするつもりだ！！」

ムーンがレイを見上げ、大声で問いかけた。

「ああっ？　簡単だよ！　こいつの翼を」

とレイは返答しながら

「封じるんだ！！」

またあの荷物からナイフを取り出し、次々に翼に向かって投げつけた。
それはぷすぷすと翼に全て刺さり、

グアアァ！　ぐあああぁ！！　ぐぉぉおぉぉおお！！！！

「うぉぉぉっ！」

白龍はさらに暴れ回った。
それにはレイも振り払われ、受け身を綺麗にとった。

「あっぶなー。でも…少し楽になったな」
「レイ、あなた何を……」

わたしは彼が心配になり歩み寄った。

「翼を封じたんだよ。魔物の麻痺効果のある牙をナイフ型にしてあって、それを投げつけたんだ」
「あ！　ホントだ！　翼が動いてないぞ！」

一人のメンバーがレイの話でそれに気付いた。
白龍は動かしたそうにするが、翼は小刻みに震えるだけだ。

「でかしたぞボウズ！　よしっ、奴の攻撃に気をつけながら足を崩すぞ！」
「おっちゃん、もうあいつ、目が見えてるから気を」
「安心しろ、俺がぶっ殺してやるからよぉ！！」
「そういう事じゃ」
わたし、ムーン、レイ以外のメンバーは既に勝ち誇った気持ちで奴へと駆け出した。

しかし、

があああああ――――――――――！！！！！！！

「はっ？　嘘っ」

白龍は火の球を吐いたのだ。

「うわぁぁぁ――――――――――！！！！！」

直撃ではなかったが、一人の身体が吹っ飛んだ。

「大丈夫！？」

わたしはすぐに、転がってきた戦士の元へ駆け寄ったが、

「ひっ…く、来るなぁ…！　痛い…痛い……！！」

「ッ」

こんな状況にも関わらず、彼はわたしを拒絶した。

「アル、ここは私が回復させる。先に言った連中の援護を」

「わ、わかったわ」

「おれも行くぜアルテミス！」

ムーンに一人を任せ、先に行った大男達の元へと走った。

背後でレイの駆け足の音が聞こえた。

グオオオオ――――――！！！！

「くぅっ！」

白龍の引っ掻き攻撃を斧で防ぐが、やはり力負けしていた大男。

「ひるむな！　迷わず叩けぇ！！」
「お…おう！！」

仲間が一人やられたのに気付かず、ただ目の前の敵だけを相手していた。
白龍も彼らの攻撃にひるみはしていた。

「副団！」
「おっちゃん！」

わたしは両手に剣を持ち、レイは右手にムチを、左手に短剣を持った。

「ボウズ！　さっさと加勢しろ！　合格したかねぇのか！？」
「おっちゃん！　さっき仲間が……危ない！！」

レイは不意にムチを振るい出した。

「うわぁぁぁぁ！！」

踏み潰されそうになった1人の仲間をムチで捕らえ、レイは振り回すように白龍から距離を離させた。

「大丈夫か！？　兄ちゃん！！」
「あ……ああ、済まない」

助けられた剣士はホッとしていた。

「気を緩むな！！　早く倒すぞお前らぁ！！」
「うわぁぁぁ！！」

「！？」

大男の掛け声の後すぐに、２人が白龍の尻尾により飛ばされた。

「助けないと！」

わたしは無我夢中になり、自慢の足で彼らの落下地点へと駆け出す。

「っ！！」

「うぉ！！」

そして、２人が地面に叩きつけられないようにクッションになった。

……弱力だが、ないよりかはマシ。

「いたた……」

「大丈夫？」

「！　……は、早く仕留めようぜ」

「ああ……」

「ッッ……」

私が心配しても、何も知らないような顔で敵へと向かった。

「メリアーの娘！　お前は引っ込んでろ！！」

「！？」

攻撃を避け、斧で白龍の足を傷付けていた大男に言われた。

「いるだけ邪魔なんだ！　足手まといになるからな！！　うぉぉぉりゃぁぁぁあ――――――――！！！！！！」

ガガガガガガッッ！！！

それは、わたし達にとっては福音。

グギャアアアアアア――――――――――――――――――！！！！！！！！

白龍の足が一本、骨ごとほぼ斬れたのだ。

それによりバランスを崩した白龍。ズシィンと地面に倒れた、でもまだジタバタと弱い抵抗をする。

「よっしゃあ！！　お前ら！！　狙うは頭だぁ！！」

「おおー！！」

大男が高らかに叫べば、戦えるメンバーも走り出す。

「待て！」

「っ？」

急にムーンが声をあらげた。

「そいつは倒れた時に口からブレスを吐くぞ！！」

「なっ…！？」

呼び止められたメンバーはそれを聞き顔を強ばらせ…あれ？　１人いない！？

「うぉぉぉぉ――――――――――――――――！！！！！！！！」

大男！？　彼はムーンの声が聞こえたのか聞こえてないのか、まだ

向かっていた。
白龍を見ると、口の隙間から何か光が見えた。

「おっちゃん！」
「副団！！」
「え！？」

レイは駆け出し、わたしも駆け出す。だが、スピードはわたしが上。
わたしのスピードにレイは驚き足を止めたようだ。

「副団！！！」

助けないと…彼が白龍に殺られる前に！

「あ…？」

大男はやっと白龍の様子に気付き、武器をおろした。

「！？」

そして声にならない悲鳴をあげた。
白龍は倒れたまま大口を開けていた。光の輝きが増し、それは今にも吐き出されそうな勢い。

「うわぁぁぁ…」

大男がおびえるのを初めて見た。
やばい、やばい、急げ、急げわたし！！

「やめてぇぇぇ――――――――――！！！！！！」

わたしは発射内から彼を押し出した。同時に

「――――――――――ッッッッ！！！！！」

音が聞こえなくなった。

身体が中に浮く感じ。だがそれは不快感。

視界が真っ白になり、身体全身が激痛。激痛過ぎて途中から何もわからなくなった。

「ッッ！！！？」

音が急に耳に入り、わたしは風を感じた。吹き飛ばされてるんだ、わたし。

そのまま地面に転がる感触がした、もちろんそれも、痛い。

「あ……ぁぁ……」

横たわった時の視界が。

レイが目を見開いたままこちらに来た。ムーンも、焦っている。

「副団は？」そう聞きたいのに声が出ない。出そうとすると痛い。

「ぁ……」

副団の小さな背中を見つけた。距離が離れているのだ。

「よかった」

＊＊＊＊＊

第七章

―――――――――
試験は……どうなったの？
―――――――――

わたしは1人だ。
今、わたしは1人だ…。

――この子の名前は…アルテミスだ
――アルテミス？　やぁね、まるで男の子じゃない
――でも母さん、オレの名前は女の子みたいなもんじゃないか
――だから、この子はアルテミスだ
――もう…あなたったら…でも、これならバランスがいいわね

あはははは…
あはははは…

楽しそうな会話…聞いた感じ、家族の会話に聞こえる。
わたしの名前……じゃあ、生まれたのは、わたし？

――アル、お前は月のように、優しく輝ける、素晴らしい人間になるんだぞ……

「あ……」

＊＊＊＊＊

目が開けた。石造りの天井が見えた。

「アルテミス！！　大丈夫か！？」
「！？」

気付くなりレイが大声で叫んだ。そしてわたしの顔を覗き込む。

「わ…わたし……」
「お前さぁ！　なんであんな無茶な事したんだよぉ！？　おれ、マジで心配したんだからな！！」

子供みたいに泣きそうな顔でわたしを怒るレイだが、全然怖くない。
でも、皆に…いや、彼に心配をかけてしまった事には申し訳ない気

持ちはある。

「ムーンのおっちゃんだって、お前が倒れてから戦いに参加しなかったんだぞ。ずっとアルテミスの事ばかり気にしててさ」

「え？　ムーンが……？」

「ほら、見てみろって」

「！」

ふと、レイとは反対側にムーンがいた。

しかも彼は椅子に座ったまま、ベッドに突っ伏し眠っている様子だった。

「この城の神官さんと一緒になって回復に専念してたみたいだし…

…ってかおっちゃんって、魔法はなんでも使えるのか、いいなぁ～」

後半は子供の羨む声となる。わたしは思わず、彼の手を触ってみるが、反応がない。というか

「……ｚｚＺ」

「健康的ないびきだよな、あははっ」

レイにそう言われるムーンは知るよしもない。

わたしもクスッと笑ってしまった。

「そっか…ごめん、ムーン。ありがとう……」

後でちゃんと、彼が起きている時にお礼を言おう。

彼がどれほどわたしを仲間として大切に思っているのか、よくわかった。

このまま彼と騎士団に入れればいいと思えるが、現実はそう甘くは

ない……。

（わたしは白龍に殺られかけたから……きっと合格の可能性は低いに違いないわ…）

現実を受け入れる覚悟を決めた。

「……ん」

「あ！　おっちゃん！　アルテミス、起きたぜ！！」

「……？」

今まで過ごしてきて初めて見るムーンの寝ぼけ眼。

「……！　アル！？」

ガバッと起き上がり、目を見開きわたしを見た。

その彼の行動にわたしびっくりしたが、

「うん、大丈夫」

にっこりと微笑みを返した。

それを見たムーンはふぅ、と一息をついた。安堵のため息だ。

「あの、ムーン。レイから聞いたんだけ」

「おお、目覚めたか。どうやら無事のようだな」

ムーンにお礼を言おうとしたら、急にディルス将軍がこの部屋に入ってきた。

「さ、立てるならばすぐに来い。お前達の結果を伝えるのでな」

「は、はいー！」
「……立てるな？」

レイは慌てて将軍について行き、ムーンは振り向き心配してくれた。

「う、うん…」

どうしよう、言い損ねてしまう。

「そんな顔をしなくても…大丈夫だ。お前はよくやったじゃないか…」

違うよ、ムーン。わたしはそんな意味でそんな顔をしたワケじゃ…。
と、心内に入れてしまい、わたし達もこの部屋を出た。

＊＊＊＊＊

着いたのは赤炎の騎士団の部屋。

「よし、全員揃っているな」

部屋にはすでに、共に戦った（？）メンバーがいた。
大男をはじめとする一同が、入ってきてすぐにわたしを睨んだ。…
…あまり良い展開は期待しない方がいいと思った。

「では…まず理由を話さねばな。お前達だけが何故、召集をかけられたのか」

ディルス将軍の言葉により、緊張感が訪れる。

「お前達第６団が、あまりにもひどすぎる事を、陛下からのお言葉も添えて、わしも評価をするのだ」

「ふん…ひどすぎる理由なんざ、言わなくてもわかるじゃないですか、将軍」

皮肉を込めて大男が言った。もちろんわたしに目を向けて。

「…お前が思うような理由ではないぞ」

「じゃあ俺の納得する理由を話して下さい。それがメリアーをかばうようならば、俺は認めませんから」

「……やれやれ……」

将軍は呟くように、ため息混じり。

「……では、はじめに。お前達に確認したい事がある」

そう言われ、わたしも皆も……いや、ムーン以外が、え？、という表情になった。

「お前達は、陛下が最初に言った言葉を覚えているか？」

「はーい！　『騎士団らしく戦え』って事ですよね」

「…」

空気が読めないのはある意味幸せなのかもしれない……レイが挙手しながら答えた。

「…まぁ、間違ってはいない。そう、騎士道にそむく事なく戦え、そうおっしゃった。しかし、この第６団の一部は、あまりにも騎士

道に従った戦いをしなかった」
「それはやはり」
「口を慎め。これからわしに番号を呼ばれた者は、失格者だ。しっかり聞くがよい。わしが話終えたら、いくらでも文句や質問をすればよい…」

大男の口挟みは拒絶された。
合格者ではなく失格者を発表する辺り……厳しさを感じた。
ディルス将軍は懐から羊皮紙を取りだし、それを自分の前に広げた。
そしてそこに書いてあるだろう番号を目でたどり……、

「５４番、９２番、２８番、２４番、７５番、１０１番」
「！？……」
「以上だ」
「！？」

あれ……わたしの番号がない。まさか。
それに、ムーンの番号もない。
あっさりとした発表に、わたし達はア然とするだけである。

「ご……合格者が、３人だけ？」
「そうだ、４１番、６６番、１０８番が合格者だ。他の団と比べ、合格者が少な過ぎるがな……」

苦笑いを浮かべ、将軍はそう言った。
わたしの番号、ムーンの番号、後の番号は？

「お……おれが……」
「…レイ……」

わなわなと震えているレイ。彼は失格者となってしまったのか。

「受かったぁぁぁぁ！！」

「え……」

このパターンは架空を物語る本だけかと思ったが…まさか現実でこんなタイプの者がいたとは。

という事は、レイも合格者？　意外だと思った。

「さて…失格者にはその理由を説明しなければな」

と、わたし達以外の者に目を向けるディルス将軍。

「お前達は『騎士道』を間違えて見解しているのではないか？　75番、お前の騎士道とはどのようなものだ？」

急に問われ、まだショックから立ち直れない大男はビクリとしたが、すぐに目に光をともした。

「それは…受け持った任務を遂行する事だと思っています…。だから、今回の結果はおかしいです！！　自分はそう思うのですが」

「確かに、任務を遂行する事は騎士団として当たり前の事である。しかし、それだけかと思うか？　実は任務の重要性は、2番目に過ぎぬ」

「はっ？」

わたしはわかってきた、騎士道の正しい意味。

でも失格者はまだわからないようだ。

「騎士団は、常に仲間を想わなくてはならない」

「…は？」
「仲間がいなくては騎士団とは呼べぬ。その仲間が傷つき倒れたのならば、任務よりも先に彼らを優先するのが、騎士道たるものなのだ」
「仲間……仲間ならちゃんと」
「じゃあお前は、１０８番が倒れた時にそちらを気にしたか？」
「え？　そんなの構ってられませんよ。そんな簡単に負ける足手まといが……」
「……愚か者が。お前が大怪我をしなかったのは、あやつが身代わりになったのだぞ」
「……！？」

本当に知らなかったのか、大男はわたしを見て目を見開いた。相当驚いている。

「４１番は、お前をかばった１０８番の傷を癒そうと戦いに参加しなかった。他の仲間が暴言を吐いたとしても、だ。周りにとらわれず、仲間の命を優先した。６６番は常に仲間の事を考え、場の状況を変えるべく良い方向へと展開させ、傷つきそうになった仲間も助けた」

失格者はわたし達を見た。
信じられない……そんな表情が読み取れた。

「だがお前達は、助けられた事も知らず、礼も言わずに任務を遂行した。これは騎士団としてどうだ？　マナーがなっていない。仲間は家族同然だ、その事に気付けなかったお前達が、失格者になったのだ。以上」

長々と語ってくれた将軍。

騎士団とは、絆がなければ出来ない仲間の集団……その事を教えてくれた。

「何か質問があるならば」

「あります」

早い。大男は挙手をした。

「何故メリアーをこの試験に参加させたのですか。最初に言った質問です、もう事は全て終わりました。答えて下さい！」

どうしてもわたしがいる理由が不明だ、と大男は訴えた。

「……じゃあわしも聞きたい事がある。何故お前はメリアーがいると不満なのだ？」

「不満？　不満も何も、当然じゃないですか！？　魔物の妹…裏切り者の娘なんですよ。そんな奴がこの王国の騎士団に入って、メリットなんて何一つないじゃないですか！　逆に奴はもしかしたら裏切ったりするかもしれま」

「じゃあその証拠を詳しく言わぬか？」

「証拠ぉ？　もう血縁的に奴は」

「血縁とか噂とかではない。お前が、このメリアーの、悪い話や悪行を聞いたり見たりしたのかと聞いておるのだ」

「っ…それは……」

あんなに勢いのあった大男が考え始めた。

「……わしは、この者が本気だから、参加させたのだ。お前達のようなガキの考えを持つ連中等気にせず、ここまで来たのだぞ。普通だったらお前を嫌うはずのメリアーが、身を粉にしてお前をかばい

助けたのだぞ。そんな恩知らずなクソガキが、この騎士団に入る資格などない！　メリアーの方が…お前達よりよっぽどの大人だと、わしは思う」

「っ……」

そこまで言われ、反論が出来ない大男。

他の失格者達も、やっと気付き、そして後悔していた。

強さだけが、騎士ではない。わたしは彼らに、それを知ってほしいと願った。

「簡単に言うならば、やる気のある者の実力を見たかった。以上だ。他にあるか？」

と、将軍が求めるが、メンバーは、ありません、と首を振った。そしたら

「ちくしょうがぁ！！」

突然大男が自分の武器を床に叩き付けた。

それは弾みでわたし達に飛んできたが、すぐに避けた。それは壁に辺り、音を立てて落ちた。

「全部……全部メリアーのせいだ！　お前が現れてから調子が狂ったんだ！！　お前が悪魔の肩書きを持つから、俺はこの騎士団に入れなかったんだ！！　何年も挑んで、挑み続けたのによぉ！！　今年ならば大丈夫だとばかり思ったのに……お前のせいだぁ！！」

何故……ただ試験を受けて、頑張っただけなのに、そんな言われようを。

「お前なんかあの怪我で死んでしまえば良かったんだぁぁ！！」
「おい！　貴様、それは聞き捨てなら…ん…！？」

将軍が怒るが、大男がいない。

「これ以上あいつを傷つけるなら、私がお前の腕を斬るぞ」
「ひ…ぃ…ああ…」

大男がいた位置と、今いる位置から距離がある。
消えるように移動出来たのは、ムーンが早業で大男を吹っ飛ばしたから。
ムーンは…自分の武器の刃を大男の腕に当てていた。

「ど…どうして……」

そこまでしてわたしをかばう理由は何？

「愚者が。お前のような心の無いクズは、たとえ騎士団（ここ）に入れたとしても、そのうちに蹴落とされるだけだ……」
「な……なんでお前は…」

大男がビビっている。初めて見た気がする。
でも…だからと言ってわたしの中に優越感はない。
ただ、疑問だけがとどまっている。

「私は……お前のように仲間を想わない連中が大嫌いだからだぁぁぁぁ！！！！！」
「ぎゃあああ――――――――――――！！！！！」

怒りが爆発したかのように、ムーンは長剣を振り上げた。

大男はこれから来る激痛を予想してしまい、フライングの悲鳴。

「やっ……！」

わたしはこれ以上見たくなくて、とっさに目を閉じたが、

「……」

あれ？　静かになった……。

恐る恐る目を開けると、

「タリアス……お前の気持ちはわかるが、時と場所を考えろ」

ディルス将軍の剣が、ムーンの剣の軌道を塞いでいた。

「ほれ、早く剣をおろせ。騒ぎを起こすと、お前の合格が取り消しになるぞ」

「……申し訳ございませんでした、将軍…」

それで場が収まったが、大男はまだおびえている。

二人は互いに武器をしまう。

「さて…悪いが、失格者はすぐに退場してもらおうか……」

「は、はい……」

と、メンバーはいそいそとドアを開け、向こう側へと消えていく。

大男もハッとなり、慌てて斧を取りに行って、部屋を出た。

「……次は、お前達だな。もう遅い。明日は入団式を行う故、城に泊まるがいい……メリアーがさっき寝ていた部屋を使え。わしは会

議に行かねばならぬから……場所はわかっているな？」

そう言って将軍は部屋を出ていった。

残されたわたし達。ムーンとレイ、そしてわたし。

「な……なんだか、時が早すぎて全然飲み込めないんだけど、状況が…」

事の進展にまだ混乱していたレイ。一所懸命に頭の中で整理し始めた。

「……」

――――死んでしまえば良かったんだぁぁ！！

「……っ」

死ンデシマエバ良カッタンダ？

「なによそれ……何よそれ何よそれ――――――――！！！！？？？」

「！？」

「アル！？」

いきなり脳裏によぎるあの言葉……。

え…？　最初は意味わからない…知らないままが良かった…。

「どうして…どうしてわたしが死んだ方がいいのかわかんないよぉ！！！！」

腹が立つ。腹が立ちすぎて悲しくなった。

わたしは膝から崩れ落ち、固い石造りの床を拳で殴った。
痛い…痛い…ますます腹が立ち、泣きたくなる。

「なんでわたしだけ…」
「あ…アルテミス…！？」

のろのろと立ち上がり、辺りを見回した。
ある物が目に入り、わたしはそこへ駆け出した。

「わたしだけなの！！？」

それは、剣技を試したり、練習したりする相手……木で出来た等身大人形。
そいつにわたしは右手に持った剣で一斬り。

「っっ！」

傷はつくが、振動がこっちにきた。

「なんでなんでなんでなんでなんで！！！！！　そんなにわたしが嫌いなの！？」
「アルテミス！　落ち着けよ！！　あんな奴らの言う事なんか気にするなよ！！」
「うるさい！！！」
「うわっ！」

左手にも剣を持ち、群がるレイを追い払った。
ガスッ、ザシュッと人形にも八つ当たりをした。

「わたしがメリアーの娘なのはわかってるわよ！　わたしは何も知

らないのに、勝手に魔物扱いするし、悪魔に仕立てあげるし！！
挙げ句の果てには死ねだって！？　ふざけんじゃない！！　わたしは何にも知らないのに、何にも知らないのに……」

腕が疲れてきた。我を忘れて無闇に腕を振るうのは体力が無駄になるのは、わたしもよくわかっているのに。

「わたしが何をしたのか……誰か教えてよお！！！！！！」

とどめに突き刺した。しかし、

ガシュッ！
ガシャンッ

「っ！！」
「！？　アル！？」
「アルテミス！？」

まさか……まさか。
わたしが突き刺した剣は、力に耐えきれず割れてしまった。
その刃はその勢いで周りに散らばり、わたしの顔の側を通った。痛い。

「あ……ああ、嘘、嘘よ……」

父さんの…剣が。
わたしが両手剣士を志した時から共にしてきた、わたしの剣が…。

「いや…いやだ、いやよ……」
「な、何やってんだよアルテミス！」

早く拾わないと。わたしは慌てて周りにある剣の欠片を拾い集める。

「つっ……」

「当たり前だろ!?　壊れても剣なんだからよ!」

時々、わたしに反抗する欠片もあるが、構わずわたしはそれらを拾った。

「やめろよ!　壊れたなら使えねぇって!　新しいのならきっと騎士団から手に入るだろ!」

「壊れてなんかない……!」

「え?」

「わたしの剣なの。父さんの剣なんだから、壊れるワケないんだから!!」

「……アル…」

新しいのをもらう?　そんなの考えた事がない。

わたしはこの剣だけが頼りなんだ…例え壊れたというのなら、直すまでだ。

大切な、父さんの大切な

「――――あ」

そう…わたしは過ちを犯してしまった事に気付いた。

大切な父さんの剣を壊してしまった罪。

父さんが何を思って家に残したのかわからない、それは古い両手剣。

それをわたしは、我を忘れて怒り狂い、無責任に壊してしまったのだ。

「ご…ごめんなさい……」
「アルテミス……？」
「ごめんなさい…ごめんなさい、父さん……ごめんなさい……！！」
今はどこにいるのかわからない、父さんに会って謝りたい気持ちだった。
だから、神様を通して、この謝罪を届けたい…ごめんなさい……。
「ごめんなさい……すぐに、すぐに全部集めて、直すから」
「……アル」
誰かの手がわたしの肩に置かれる。
大きさと骨格からして、ムーンの手。男らしい手だ。
「刀鍛冶とかあるなら……その人達に直してもらうから…お金がかかるなら、わたしが時間をかけて直すよ、鍛冶のやり方も頑張って覚えるから」
「…アル」
「ちゃんと直すから、死ぬまで使うから、」
「もういいんだ、アル、落ち着け…」
「だから、父さん、わたしと会ってよ…死ぬ前に、父さんの顔が見たいよぉ……！！」
「アルテミス！！」
「！？」
怒声。でも呼び方が違う。
その声はムーンだった。
「…もう充分だろう…お前の願いは、私も、彼も聞いている。お前

の父も、聞いているはずだ……もう、寝た方がいい……」
「……うわあああああ！！」

泣きたい。もう泣いている。
喉からも声をあげて泣きたいし、心からも叫びたい。もう叫んでいる。
こんなに泣いたのは……母さんが死んで以来からだと思う。

「あああ……！！　ごめんなさいぃ…！！　ごめんなさいぃぃ…！！」
「ああ…わかってる。お前は疲れているんだ…もう休もう…。早くベッドに入ればいい……」
「ごめんなさい……ごめんなさい……！！」

ムーンに抱き締められて、身体も悲鳴をあげているのがわかった。
精神が疲れると、身体までも疲労にさせるという本の記述は、本当のようだ。

「ごめんなさい……でもね…」
「？」
「わたし…悲しいの……死ねって言われて……悔しかったのぉ…！！」
「…わかってる……」

大声をあげるのも出来なくなり、すすり泣く。
大人の男に抱き締められるのは初めてだが……父親に抱き締められる、というのは、こんな感じなのだろうか……。

「悔しいから……絶対、負けない……」
「そうだな……お前は、強くならないとな。レイ…お前もだ」

「も、もちろんおれは強くなるぜ！？　アルテミスをおれの強さで、惚れ直させてやるさ」
「いつアルがお前に惚れたんだ？」
「あ、それはぁ…あははっ」

＊＊＊＊＊

第八章

―――――――――
気付けばわたしは
眠っている…
そうだ。明日は、
騎士団入団式……
―――――――――

コンコン

「……？」

ドアをノックした音が聞こえた。
目を開けたいが、起きる気になれない……それをほっといてみた。

「はい…」
「わしだ。ディルスだ。さっさと起きろ」
「はっ、はいー！！」

レイが慌てて布団の音を立たせて起き上がってきたようだ。
ぺたぺたと走り（裸足なの…？）、ガチャッと勢いよくドアを開けた。

「お、おはようございます！　将軍！！」
「うむ…元気だけは一人前だな」

「いやぁそれほどでもぉ…」

確かに彼は元気だけはあると思う。でも、そこは照れるところなのだろうか。

「…タリアスとメリアーは？」

「え？　あ、まだ寝てますね……起こしまーす」

ぺたぺたと、わたしのところに迫ってくるのがわかる。ぺたぺたという音が大きくなるので、わたしは渋々目を開けた。

「あ、丁度良く起きた！　おはようアルテミスー！！」

「う、うるさい…おはよう…」

大声を出されると余計に身体を起こしたくなくなる。何故彼はこれほど元気なのだろうか？

「タリアスは？」

「はいはい、起こしますね～……あれ？」

「？」

将軍に促され、レイは別のベッドへとぺたぺた歩いた。

…足音が気になる。レイ、ブーツを履いてほしいのだが。

「将軍、ムーンのおっちゃんがいないですよ」

「何？」

「ベッドから出た後のようですけど…もしかしたら早起きしたのかもしれませんよ」

「そうか……しかし、城の出入りはありえない。出入口には検問の為に兵士がおるからな。よし、お前ら、タリアスを捜せ。城からは

出るな？　出るなら中庭までだぞ」
「は、はい！　わかりました！　アルテミス、行こうぜ！」
「うん……レイ、靴履いて」
「あ、悪ぃ悪ぃ」

やっとぺたぺた音が終わった。
ムーンが寝ていたというベッドを見るが……もちろんいない。

（どこに行ったんだろう…ムーン……）

昨日は散々迷惑をかけてしまったし、もしかしてうんざりしていなくなったのでは…？
いなくなる理由がいろいろ浮かんでくるが、不安ばかりが募る。

「大丈夫だよアルテミス、そんな顔しなくても」
「あ、ごめん…」
「いいって。じゃ、お城探検隊しゅっぱ〜つ！！」
「え、いや、主旨が違う…」
「気をつけて行ってこい」

将軍もそこはあえて言わないようだ。彼の性格について行けなくなったのか。
わたしも呆れながら彼の後を追った。

＊＊＊＊＊

「ムーンのおっちゃーん！」
「ムーン！」

わたし達は城内から出て、広い中庭から彼を捜し始めた。
中庭は花壇や木々の手入れもよくしており、素敵なデッサンの石像から出る噴水も所々にある。
散歩しても飽きない眺めに思える。
でも今はまったりしている時じゃない。

「やっぱ朝だからそんなに人いないし……おっちゃんあんな格好だからすぐ見つかると思うのになぁ……」

とブツブツ言いながら彼は辺りを見回した。
彼の言う通り、人はほとんどいない。仮にムーンが違う服装をしていても見つかると思える程。

「おっちゃーん!!　どこにいるんだー?!」
「ムーン!」

わたし達は声をあげて彼を呼ぶが、返事はないし、姿ももちろんない。

「……ムーン、嫌になったのかな?」
「?　何が?」
「ほら、昨夜…わたしのせいで、ムーンやレイに迷惑かけたし……」

わたしみたいなものと騎士団に入ったら、やはり迷惑だと思う……
勝手にわめいて、騒いで暴れて、先に眠ってしまうから。

「迷惑だなんて思ってないさ。おっちゃんもきっとそうだと思うぜ」
「なんでそう言えるの?」

根拠のないレイの言葉。わたしは気になって仕方ない。

「だって、昨日のムーンのおっちゃん、すごく優しい顔してたから」
「え…」
「最初は怖い印象しかなかったのに…おっちゃんもああいう顔をするんだって思ってさ。初めてみたよ、あんな優しいおっちゃんを」
「……そうなの…」

信じがたいけど、レイは嘘つきではないし。
それを聞くとホッとしているわたしがいた。

「だからさ、アルテミス、あんまり悪い方向ばっかり考えない方がいいぜ？　おれ達を信じろって」
「信じる…」
「そうさ！　おれ達はもう仲間じゃないか！　同じ団に入って、これから頑張って行くんだろ！？」
「…」

レイの強い意思表示。わたしは今の自分の情けなさを改めて知った。
わたしは…もう独りじゃないという事を、知った。

「……そうね！」
「よし！　アルテミスが元気出したから、捜しに行くぞぉ！」
「うん！」
「あ！？」
「っ？」

急にレイが目を大きく見開き、一点を見つめる顔になった。
わたしは振り向き、レイの視線をたどったら……

「！」

なんとムーンが。

「ムーン！！」

「おっちゃん！！」

わたし達は慌てて彼の元へと駆け出した。

彼はわたし達が来るのを待ってくれた。

「ムーン、どこに行ってたの！？」

「おれ達捜してたんだぜ！？　まさかかくれんぼうじゃないよな！？」

「レイ…それは違う」

ムーンがレイ程の子供ではないと思う…。

わたしは呆れながらすぐに否定した。間違いなくそれは違うと確信が持てるから。

「すまない……街まで取りに行ってたんだ」

「？」

と、ムーンはあるものを持っていた。

「！」

「あの後……街の鍛冶屋に頼んで、朝早くから引き取りにきたんだ」

「それ……」

あるもの…わたしが昨夜壊したはずだった、父さんの両手剣。鞘に収まっている。

「サンポリア一の鍛冶屋だからな。昔からの知り合いで、すぐに引き受けてくれた。以前よりかは、見た目も斬れ味も良くなっているはずだ……」

そう言って彼はわたしに差し出した。
わたしは恐る恐るそれを受け取り、一本、鞘から取り出した。

「わぁ…」

壊れていない。ちゃんと鋭さを持っている刃だ。
形は変わっていないのに、まるで生まれ変わったようなそれ。

「これで…お前も、父親に顔向けが出来るな」
「！　…どうして、ここまで、わたしにしてくれるの…？」
「…仲間だからだ」
「っ…」

仲間。

「よかったじゃんか！　アルテミス！　言ったろ？　おれ達を信じろって」
「…」

信じる。

「ありがとう…ありがとう！　わたし、頑張る！」

そう…これからは一緒だ。
こんなにも素晴らしい仲間がいるわたしは、幸せ者だ…。

＊＊＊＊＊

「一体どこにいたんだ、タリアスよ」
「すみません…ご迷惑おかけしました」
「まぁよい……時間に間に合ったならば問題はない。さぁ、正装をしろ。使用人が騎士団の服を持ってきた」

ディルス将軍に怒られたムーンだが、将軍にそこまで怒りはない様子。
わたし達が使った部屋には、既に新しい服が用意されていた。

「なんだこりゃ？」
「各々は必ず違う服と防具。同じものは存在しない。個々の能力を分析し、それに合わせて作ったものだ」
「それをたった一日で！？　すげぇよサンポリア騎士団！！」

将軍の説明を聞き、興奮しているレイ。その勢いは新品を破きそうな。

「街の全ての仕立て屋、全ての武具屋の力を借りたからな。容易い事だ」
「すげぇすげぇ！！　ありがとうございます！　将軍！！」
「着替えが終わり次第、昨日試験の控え室に使った部屋に来い。入団式が始まるまで待機するのだ」

と将軍は部屋を出た。
残った我々新人騎士。

「いぇーい！　きっしだんきっしだん！」
「レイ…はしゃぎすぎじゃない？　仮にも戦う身なんだから…」
「だっておれ、他に戦闘向けの服なんか今着てるの以外全くなかったんだぜ。黙ってられねぇもん」
「……歳いくつ？」

急に気になった。

「歳？　おれ、１７」
「……嘘！？」

見えない。せいぜい同い年か１つ２つ歳上とばかり思ったのだが。

「なんだよその反応。まるでおれがガキみたいに思われてたのかよー」
「……」
「反論しないって図星かよヲイ！！」

ああ仕方がない。思ったのは事実だからわたしは黙った。

「じゃあアルテミスはいくつなんだ？」

仕返しのつもりなのか、逆に聞いてきたレイ。

「……１３歳」
「……え！？」
「え、って言われても……」
「嘘だろ！？　おれてっきり同い年か若干歳下かと思った！」
「…ようはお互い様なのね……」

向こうもわたしをそう見たのならいい、というかもともと歳とか気にしていないわたし。

「お互い様ってなんだよ……アレか!?　つまりお前はおれの事を13歳かそこらへんで見ていたって事か!?」

「レイニー。我々男性陣が外に出なくてはな」

「え?　ムーンのおっちゃん何言って…」

「お前は平気で女性の着替えを見るのか?」

とムーンはこの部屋から出てくれた。

言葉の意味をやっと理解したレイは急に顔を真っ赤にし

「わ、わりぃ!」と慌ててムーンを追った。

「…ガキだ」

精神年齢幼い。

まぁ邪魔者も消えたし、ムーンに感謝して着替えを始める事に。

「これ……」

城の中で過ごして、騎士達とすれ違ったりする事もあったが、同じ装備を見た事がない。

「重たそう……」

とても造りが強そうな、でも女である雰囲気もある防具が、人形木人形に着せられていた。

ムーンとレイのも見てみるが、やはり形が違う……似ているところは特に見当たらない。

まずは木人形から服を外そう。
肩と胴と背中を守る、短いマントの付いた鉄の甲冑を持つと

「あれ？」

軽い……コンコン叩くと頑丈そうなのに、とても軽いのだ。
ひょい、とわたしは自分が使ったベッドに甲冑を置いた。

（綺麗……）

次に、ヒラヒラとしたシルクの布をさげているベルトを外す。
見た感じ、戦闘の邪魔にならぬように切った形なので、この布は装飾を意味するのか。
剣を身につけるのに必要な防具だ。

（細かいなぁ……）

腕の防具として、二の腕から指の第2間接まで覆う、鉄と動物の革で作られたウォーマー。
足の防具として、膝上からある鉄と革のブーツ。
それぞれ、革の上から、綺麗に形を持つ鉄が覆い被さるような感じだ。

（え？　このインナーは…）

防具の下は、今着ている修行用服よりも肌を覆う部分が少ない。
材質は高級のようだが、試しにそのインナーを着替えてみる…。

（……）

なんというか……。

「アルテミスー！！　着替えは終わったのかぁ！？」
「！？」

レイ！？　何故入ってくる！？

「えっ」

首から胸までを覆うインナー、言わばヘソ出し。三寸のスパッツ、短い。
そんな格好をレイに見られた。身体のラインとかバレバレである。

「こら」
「んぎゃっ！！」

ムーンに背後から頭をげんこつされ、レイは部屋の外へと吐き出される。

「すまなかった」
「あ、いえ、ありがとうございました」

ムーンも言葉を残して退出。

「……をい」

ひとりぼやくわたし。

＊＊＊＊＊

インナーの状態から防具を装備する想像図を描いてみたが、あまりいい眺めではない……。
綺麗な女性の身体につけるならわかるが、今のわたしじゃ色気もなにもない……。

（何故仕立て屋はわたしにこのようなものを与えた）

恨む相手は数が多すぎて確定出来ない。
しょうがないので、インナー、スパッツの上から、予備の着替えとして持っていた綿のキャミソール、スパッツより短めの動物皮の短パンを着る事にした。……これなら多少隠せる、いろいろと。

「よし」

改めて、この状態から防具を着けよう。

＊＊＊＊＊

「ふぅ」

着替え完了。
甲冑は思ったよりも小さく感じる。わたしの体格に密着しているようだ。
ブーツも履き心地がよく、足にフィットしている。
グローブも邪魔にならず、剣を持ってもなんら困難はない。まるで

最初から腕に何も着いてない感覚だ。
ベルトから垂れる装飾の布も、案の定関わりがない。むしろオシャレに見えてくる。
両手剣を身につけても、普段通り動ける。

「……あれ？」

人型木人形にはまだ何か残っていた。それは顔の横……右耳辺りに。

「これは…」

三日月型の小さなピアス。これも装備の一部なのだろうか？
これに何か特殊能力でも？

「おーい！　着替え終わったかぁ！？」
「また…」
「って終わってんじゃん！　うひょ～カッコイイぞアルテミス～！！」
「少しは紳士としての構えはないのかお前は」
「イテッ」

無断に入るレイ、再び。でも今回はタイミングが良い。
ムーンも冷静にレイを小突く。

「おっちゃんすげぇよ！！　アルテミスが！　アルテミスが！！」
「わかったから黙れお前…、…！」

と叱りきる前にわたしを見たムーン。
わたしの格好を見て、包帯ばかりに巻かれた顔が驚いている。右目が丸くなっているからだ。

「そ……そんな顔で見られると恥ずかしいってば」
「あ…ああ、すまない…」
意外にもその時間が長いので、一応指摘すると、彼は元の表情に戻る。
「アルテミスがそんなにカッコイイならおれだって！！」
といきなりレイは上半身から服を脱ぎ始めた。
「バカ！！　わたしがいなくなってから着替えてよ！！」
「あ、わりぃわりぃ」
ニヒヒと無邪気に笑うレイ……こんなんだから憎めない。
わたしは慌てて部屋から出た。
「もう……レイってどうして合格したのかしら？」
「まったくだ」
「……ん？」
なんで会話してるの？　思わず隣を見た。
「ムーン？　あなた、一緒に着替えるんじゃ……」
そう、男同士二人でかと思ったが、
「騎士のみならず、戦士は自分の防具に必ず慣れておかないといけない……あいつの事だ。つまづけば誰かに聞いてしまうだろう…」
「なるほど…」

確かに、今、身につけている装備はとても複雑で、素早く着替えるには今のわたしでは無理だと思う。これもやはり経験がものを言うのだろう。
ムーンはやはりいろいろ知っている…一度騎士団に入ったかのような口振りだ。
いや、騎士団じゃなくとも、戦士になるのは誰にだってなれると思う…。

「あ…そうだ。ねぇ、ムーン」
「？」

わたしは片手にある物を彼に見せた。

「これ……わたしの装備品らしいんだけど……これ、何か知ってる？」
「！」

右耳につける三日月のピアス。
それを見てムーンは驚く顔になるので、やはり何か知っているようだ。

「……それは……」
「それは？」
「……そうか、まだ残っていたのか……」
「え？」

まだ残っていた…という事は貴重なもの？

「それには、聖霊の加護が宿っている…」

「せいれい……？」

ムーンの様子がおかしい……何か重要性を感じる。

「もしかしたら、ディルス将軍が残っていたそれを、装備品としてお前に用意したのだろう……」

「どうしてわたしが……？」

「……理由はいろいろあると思う。お前はメリアーだからな……」

「……」

メリアーだからか……でもせっかくだ。もらえるものはもらおう。何か暗い事ばかり考えてはこの先やっていけないのだから。

「自分でつけれるか？」

「え？　いや、やってみるよ」

ムーンに言われ、わたしは実践する。

穴をあけて刺すものではなく、耳にはめるものである。が

（出来ない…）

焦れば焦る程出来なくなる。

「私がやろう」

「あっ」

ムーンにピアスを盗られた。と思ったら、

「失礼する…」

「…」

わたしの代わりに、わたしの右耳にピアスをつけてくれた。
ちゃんとフィットしてて、ちょっとやそっとじゃ外れなさそうだ。
だからと言ってキツくもなかった。

「ありがとう…」
「…似合っているな」
「ほんと？　えへへ…」

そう言われるとなんだか照れる…。
そしたら

「じゃーん！！　どうだ！！　カッコいいだろぉ！？」

バタンッと思いっきりドアを開けて現れた。防具を身にまとったレイが。

「…デザインは異なるが、アルと似ているな……」
「え？　あ！　ホントだ！！」

ムーンがわたしとレイを交互に見た理由だ。確かに、防具の雰囲気は似ているが、異なる。
レイよりわたしの方が動きやすい。彼はズボンとTシャツがインナーのようだ。

「……アルテミスの見てたらおれのがカッコ悪くなってきた」
「そ、そんな事ないと思うけど……」
「でもはコレすげぇよ！　おれが道具使いってのをわかってくれたよ！！　ほら、新しい皮の袋！」

と彼は腰のベルトからさげていた真新しい袋を見せてきた。
……確かレイは試験で、そういう袋からムチとか道具とかを出していたっけ。

「では、私は着替えるとしよう…。レイニー」
「なに？」
「勝手に入ったら…」
「わ、わかりました。ごめんなさい」
「わかればいい」

ムーンの睨む目にレイはびくびくおびえた…ざまぁみろと思った。

「ひぃ～…おっちゃんはやっぱり怖いよー」
「怖いかしら？　あんなに仲間思いなのに…」
「あ、アルテミス、そのピアス」
「話の切り替え早いわね…。うん、装備の１つ」

一応指摘しながらもわたしは教えた。

「おれにはそんな装備なかったけど…まぁ、おれはどっちかってぇと雨関連の飾りが欲しいなぁ」
「レイニーだから？」
「そう。アルテミスは“月”なんだから、ピッタリだぜ、そのピアス」
「…ありがとう」
「どうしいたしましてっ」

そうだ…父さんがつけてくれた名前は『月』の意味。
わたしがこの三日月ピアスを手に入れたのは偶然なのだろうか。そ

れとも…

「メリアー様、バルナ様、そろそろお時間です。捜しましたよ」

タタタッと駆け寄ってきた役員。
ぜいぜいと息を切らしていた。

「でも、ムーンがまだ着替えてて…」
「タリアス様は私がお連れしますので、どうかお先に闘技場へと行って下さい。そちらで入団式を始めます」
「アルテミス…」
「…わかりました、行こっ」
「ああっ」

役員に彼を任せ、わたし達は走り出した。
希望に満ち溢れ、わたし達騎士達の始まりとなる式に参加する為に。

第九章

―――――――――
サンポリア王国
王国騎士団入団式
―――――――――

「レイ!!　速く!!」
「アルテミスが速すぎるんだよぉ!!」

地下階の造りの廊下をわたし達は駆けている。
この先は試験で使った闘技場がある。
さっきから誰ともすれ違わないから、時間が迫っている雰囲気なのは察しがついている。

「おおお!!　闘技場闘技場!!」
「騒がない方がいい!!　一旦扉前で止まらないと…っなぁ!?」

急にレイがスピードをあげて突っ込んできた。
その勢いでわたし達は扉に突っ込むように開け入った。

「イタッ!!」

ドサリッとわたし達は石造りの地面に転がった。
顔だけ上げると、既に集まっている新人騎士達ほぼ全員が見てきた。

「……」

沈黙。

と思ったらガヤガヤと、それぞれが何もなかったかのように話を始めた。

「あれ？　なんか、まだやってないような感じだな？」

「確かに……」

レイとわたしは立ち上がりながら、服のほこりを払いながら闘技場を見回した。

観客席はもう埋まっており、こちらには注目しておらず。それぞれに暇潰しをしている。

客席の中にある王座も、その周りの騎士団長の席も誰も座っていない。

「あれ、王様じゃん。団長みたいな奴と話してるけど、まだ入団式やんないのか？」

「……？　……あ、いた」

レイが指差したのは、王座には座っておらず、一人の女性騎士と話す王様だ。

揃って顔の表情がなんだか暗いが……どうしたのだろうか。

「なぁなぁ、入団式ってまだやんないのか？」

「って、レイ……」

いつの間にかレイが１つのグループに話しかけていた。

「ああ、話じゃまだ割り振りが決まってないんだとよ」

気の良さそうなお兄さんがレイに答えた。

「割り振り？」

「騎士団の割り振りだよ。サンポリアには騎士団が４つあるじゃないか。攻める赤炎の騎士団、護る青海の騎士団、駆ける緑原の騎士団、そして、なんでもありな黒雲の騎士団」

「ああ、そういえば」

破壊力、鉄壁力、迅速力、そしてバランス力。

「その割り振りが今日になってもまだ決まらないんだと。それで俺達は待たされてる状態なんだよ。陛下と話してるあの女の人見えるか？」

「？　ああ、あの美人の…」

お兄さんはレイの為にその女性を指差し、わたしもレイもそちらを見た。

「あの方は黒雲の団長、ラルク・ジェンデスマン。副将軍でもあるんだ」

「副将軍！？　すげぇ！！」

「最近の年じゃ、副将軍に憧れて入団に挑む女も増えてるみたいだぞ」

「そこの連れのお嬢ちゃんも、ラルク副将を目標にして来れたのかい？」

ははははは、と穏やかに笑うそのグループ。不快ではなかったが、入団に挑む女は皆そう見られる、という事を知る…。

「まぁ、そういう事だ。とりあえず気長に待とうぜ」
「あ、ああ…ありがとな」

それでレイは会話を終わらせ、わたしの元へ戻ってきた。

「聞いたか？」
「うんバッチリ。こんな事ってあるのかしら……」

時間はいっぱいあったはずだ。
ましてや合格者は、最初の試験よりも大幅に人数が少ない。
にも関わらず入団式が出来ないとは……。

＊＊＊＊＊

１０分経ったと思う。
もう始まってもいい頃なのに、闘技場で待たされる皆は様々な気持ちを抱えていた。
わたしのように疑問を持つ者や、レイみたいにイライラが表に表れてきた者。
しまいには身体がなまらないよう、簡単な模擬戦をやっている者もいた。
ここは規模の小さな無法地帯だった。

「……あれ？」
「？　どうしたの？」

レイが何かに気付いた。観客席に目を向けていた。

「ディルス将軍！」
「嘘っ！？」

そう、王様の元へと観客席を走る将軍の姿が。
レイの大きな声で、この場の皆が将軍に注目した。

「……何を話しているんだ？」
「……わからない…」

レイの疑問の答えは、この後に聞けた。

「皆の者、誠に申し訳ない知らせだ！」

と、将軍と王様と副将が話し終わった後、王様は響く声で皆に呼び掛けた。

「本日ここで開催するはずだった入団式だが……決行は不可能となった」
「えっ！？」
「はぁ！？」

王の言葉にわたしのみならず皆が目を見開いた。
予定していたものが決行不可って……どうして？

「入団式はそれぞれの団で実行する。ロビーの壁に、振り分けを記した紙が下げられておる、そちらで確認をしてから、それぞれの騎士団へと集い、入団式を開始してほしい。以上」

そう言って王様は将軍と一緒に
この闘技場から立ち去った…。

……残された試験合格者、役員達、ラルク副将。

「どうして……」

皆そう思っているだろう。

ここでやる、と言われたのに、それが将軍の何かの報告で、なくなった。

理由がない故に、合格者は困惑の表情をしていた。

「……ボサッと突っ立ってないで、さっさと行ったらどうだ？」

と低く綺麗な声音が観客席から。

「これは陛下の命令だ。さっさと行く！！　それともお前らは騎士団に入らないというのか！？」

「は……はい！」

副将の声だった。女にしては低く、でも男にしては高い声で、とても逆らえない。

「い、行こうよアルテミス……」

「うん…」

レイもビクビクして、わたしの腕を掴んで引っ張る。

そこまで逃げたくなる程だろうか……わたしはむしろ、この威厳ある副将に憧れを覚えた。

レイに引っ張られるように、わたし達は闘技場を出て行った。

＊＊＊＊＊

「あ、おっちゃん！」
「ムーン！」

ロビーに行くと、見覚えある背中が。

「ああ……お前達…」
「おっちゃん、防具カッコいいじゃん！　…でも、なんかいつも通りだな」

確かに。あの古い防具が新品になっただけで、見た目は対して変わらなかった。

「……まぁ、無理もない。前の防具は同じ武具店のものだからな…」
「つまり、その武具店はおっちゃんの能力に合わせて作ったって事か。同じ人なら仕方ないか」

とレイは納得するが、わたしは違う。

「なんで同じ人だってわかるの？」
「昔からの知り合いだからな、武具店の主人とは」
「あ、そうか…」

ちゃんと考えれば当たり前の事だった。

「とにかく、耳に挟んだが、入団式は各騎士団の元で始めるようだな。私はもう確認をした」
「早っ」

「ムーンはどこに所属されたの……？」

1番気になる事だ。

「私は黒雲だ」

「え！？　すげぇ！！」

レイはキラキラと目を輝かせ感心を見せる。

確かに、ムーンは魔法も使えるし、剣技も高い。万能な人材だと言えるだろう。

「おれはどこになるんだろぉ……楽しみだなぁ」

「レイ、なら早く見に行きましょ」

「おうっ」

わくわくしているレイと共に、壁に群がる集団の元へと向かう。

多分、わたしは速さを生かす戦闘をするので、緑原に入れられる可能性が高い……。

（ムーンと同じ所にはならないのか……やっぱり）

彼やレイがいてくれるのは心強かった。

しかし、わたしと彼らの能力を考えてみると、明らかに違うところ。

同じ王家の騎士団にいるのだから、会えない事はないが、やはりメリアーとして考えれば、わたしの立場はとても危ない者だった。

（皆が味方になる事は期待しない方がいいわ……）

そう覚悟して、やっと紙の前にたどり着いたわたし達。

「えっとぉ……青海なワケないし、赤炎なワケもないしぃ…」

ボソボソと、名前を目でたどるレイ。
わたしも彼の隣で、まず真っ先に緑原のメンバーが記された紙を見た。
横書きで、上から順番に番号が早い順序で名前が記されていた。が、

（！？）

最後の番号はわたしの番号ではなかった。という事は

（わたしは緑原ではない！？）

他にどこが当てはまるというのか。
赤炎なパワーファイターは女でも入れる率は低い。
青海みたいにわたしは防御を誇るのは好きではない。
まさか…黒雲…？

（まさか）

思わず嘲笑いたくなり、黒雲の紙を見た。

「――――！？」
「あ！　あったぁ！！」

わたしとレイは同時に名前を見つけた。
そう……ムーンと同じ、黒雲の騎士団に、わたし達の名前があった。

「う……嘘…」
「うわぁ！　すげぇよ！」

確認を終え、二人で違う反応をしてわたし達はそこを離れた。
歩いていた先には、同じ仲間が、

「おっちゃーん！　知ってるならなんで言ってくれなかったんだよぉ！」

ムーンだ。

「しかもアルテミスと一緒だし！　ぃやっほーい！！」

レイはテンションが高くなっていた。
わたしは違う。論理上よく考えれば考える程、この結果はまず、ありえないからだ。

「アル」
「っ？」

急に名前を呼ばれ、わたしは慌てて我に返った。

「不満そうな顔をしているが……どうした？」
「えっ？　不満なんかじゃないって、むしろ嬉しいんだけど……」
「…なんだ？」
「わたしなんかが黒雲に入って、良かったの……？」

ムーンに聞いてもいい答えになるはずはないけれども…。

「…お前は黒雲として選ばれたんだから、黒雲として頑張ればいいんだ」
「え……？」

「騎士団の異動はよくある事なんだ、最初は黒雲で良かったかもしれない。しかし、人間、何が起こるかわかるものではない。今は黒雲として、騎士をやっていけばよいだろう……」
「そうそう！　今は喜んでりゃいいんだって！」
レイも割って入ってきたが、これは良い入りかただと思った。
「……そうね！」
ムーンに聞いて正解だった。
せっかく正式な仲間になれたのだから、今はその喜びを素直に受け入れよう。

＊＊＊＊＊

そしてわたし達は、黒雲の騎士団の部屋を訪れた。
部屋は試験中に使った赤炎の騎士団の部屋とほぼ同じ作りだった。
部屋は広く、現役騎士達と新人騎士達がいても、充分使える。
「よし、全員揃ったな」
中性的な声が部屋に響く。
「サンポリア騎士団、黒雲の騎士団入団、お前らに祝福をしよう」
ラルク副将の声だ。
先程見た時には身につけていなかった黒いマントをつけていた。
いや、よく見ると、現役の先輩方の防具のマントや布の装飾はみん

な、黒で統一されている。
わたし達新人の防具のマント、装飾は色がないものだった。

「知ってると思うが、自己紹介をしようか。アタイはラルク・ジェンデスマン。ここ、黒雲の騎士団長にして、サンポリア騎士団の副将軍でもある。……ぶっちゃけ、副将はアタイにはいらない職なんだけどなぁ…」

と団長兼副将としてらしくない言葉をぼやくラルク副将。

「んな事将軍に聞かれた殺されるぞラルクちゃーん」
「お前は黙ってろ、エンバシー」

気の利く好印象のお兄さんな先輩が副将をからかう。
…なんか、緊張感がない。

「こんな風に、この騎士団はまともなのがいない。皆が皆、アホで変な奴ばっかりだ」
「変な奴ってそんなぁ…」
「黙れエンバシー」

もう覚えた。気楽に話しかけるエンバシーさんはしょんぼりした。

「嫌なイメージの多い騎士団だが、逆の意味を捉えれば、ここはサンポリア一強い騎士団ともとれるのだ」
「な、なんでだ…？」

ぼやくレイに鋭い眼差しが

「レイニー・バルナ」

「は、はい！」
「そのワケを聞きたいか？」
「っ！…」

すごい威圧のある目……姉御肌。
女性がこの人に憧れる理由がわかる気がする。
男より男らしいからだ。

「いいだろう。騎士団の仕組みを知るいい機会だ。耳の穴かっぽじってよぉく聞け」

……女としての口調はこれでいいのだろうか疑問もあるが。

「まず、それぞれの騎士団の特徴を言葉的に説明しよう。実物がいないからな、頭ん中でイメージしろよ」

新人らに呼び掛け、言われた一同は理解しようと必死になる。

「まず赤炎。そこは男の割合がほとんどで、体格が大柄な連中が特徴的だ。武器も重量級の斧や大剣、ハンマー等を愛用している。力仕事ならば誰にも負けない、力馬鹿な連中だ」
「最後の言葉は蛇足だと思うけ」
「次は青海」
「無視かいラルクちゃん…」

エンバシーさんの言う通りだが、エンバシーさん以外に反論する人はいないだろう…。

「こちらは男女のバランスが良い。と言っても騎士団に入る女なんて数が少ないからなぁ…一応割合は良い方だ」

「それ説明にならないでしょ」
「青海は守りを重視した騎士団だ。武具も盾は必ず必要とする。武具だけじゃなく、守りの魔法を用いる奴らもそこにいるんだ。こいつらは主に、貴族や大切な荷物を護衛する時に活躍する、守りのエキスパートというワケだ」

つまり、赤炎と青海は確実に正反対なワケだ。
わたしの脳内には、斧を振り回しているひげ面の大男と、鎧や盾がすごい騎士が浮かんでいる。

「三番目に緑原。こいつらはスピードを武器にする連中だ」

わたしが入るとばかり思った団だ。

「体格も小回りが利く、足の速い奴がよく入れられるんだ。女が多い騎士団としても有名だ。別名『盗賊団』と言われるくらいだからな。また、情報に関してはとても正確で敏感だ。他の大陸の事について聞きたいなら、そこの連中から聞いてみたらどうだ？　裏情報も、奴らが手にしているみたいだしなぁ…」

クックックッと意味深な笑いをするラルク副将…。どう反応してよいのやら…。

「んで、最後がここ、黒雲の騎士団だ」

やっとわたし達の番だ。

「イメージする必要はない。まずは、自分の仲間らを見渡してみろ」

副将に言われ、わたしも皆もメンバーを見た。

わたしはレイとムーンを見、次に他の新人達を見た。
現役の先輩やエンバシーさんを見、最後にラルク副将を見た。
……しかしよく見ると

「みーんな、共通なところがほとんど無いだろ」

それだった。

「つまり、本来ここにいる奴らは先程紹介した3つの騎士団のどれかに付属するはずだった。……でも、お前らはここに選ばれた。黒雲の騎士団は選りすぐりの能力をここに集めたんだ」
「どういう事ですか……？」

わたしは思わず質問を口にしていた。

「…アルテミス・メリアーだな」
「っ、はい」

急に名前を呼ばれ、ドキリとした。

「お前は緑原に選ばれるはずだったけどな、お前のその剣技は向こうではもったいない、だからこちらに引き寄せたんだ」
「え…？」
「隣のムーン・タリアス」
「……はい」

今度は彼が呼ばれた。

「お前は剣だけでなく魔法も使える。戦法手段がいくつもあるお前はここに来れたワケだ」

「……はい」
「レイニー・バルナ」
「は、はいっ！」

慌ててレイは返事をした。

「お前は道具使い、道具で身を守れる青海に入れるはずだったが、お前は身を守るだけじゃなく様々な手段を持っている。だからここに来れた」

話を聞いて段々わかってきた。

「この騎士団は、サンポリア一の主戦力というワケだ。状況に応じてメンバーを替え、戦い、そして協力していく、言わばエリート騎士団って事さ！！　他の騎士団に入れるのはもったいない、だから黒雲の騎士団がある！！」

ここは最強にして、責任重大の騎士団なのだと知った。

「だから共通な連中があまりいない、バラバラ、変人が多い、故にここは強い。これでわかったか？　レイニー・バルナ」
「は、はい！　ありがとうございます！！」

これでレイの質問の答えになったようだ。

「じゃあ理解を深めたところで、頭を使う時間は終わりだ。次は身体を使う時間、黒雲伝統の歓迎会」

え……何をするの？

「……試合をやるぞ」
「！！？」

我々新人組は驚くしかなかった。
……ん？　ムーンは至って冷静のようだが…。

「大丈夫だ。危なそうになったらアタイらがしっかり止めるからな。あ、別にお前らが同士で試合をするんじゃないぞ」
「……へ？」
「アタイらと、お前らが戦うんだ」
「……え――――！！？」

わたしとレイは揃って声をあげた。
他の新人も一部、声をあげてしまう者もいた。

「これはお前ら新人の力を見る為だ。負けると思い込んで諦めず、ちゃんと自分流に戦え。それでお前らの力を見極めてやる。いいか、勝つ気持ちで試合をしろよ！！」

最後の言葉は怒り混じりで副将は言った。
本気を見たいからだろう。

「じゃあ最初は…」
「オレでいいか？」
「っ…エンバシー……」

エンバシーさんが名乗りをあげた。

「……わかった、じゃあ誰か指名しろ。指名された者には拒否権はない。嫌でも戦え」

副将の許可がおり、エンバシーさんは

「最初から気になる子がいてさ…」

とわたしを見てきた。

「君」

「え？」

「オレは君と試合をしてみたいんだ」

「…えぇっ！？」

いきなりわたしに指名、しかもラルク副将に気安く声をかけれた人に。

「よし、アルテミス・メリアー。前に出ろ」

「…はい……」

この騎士団の部屋は本当に広い、闘技場のように公式な試合は出来そうにないが、1対1でも充分である。

「君はダイアン・メリアーの娘さんだって聞いてるよ。かつては世界の英雄だった娘さんの力を見てみたいからねぇ」

「っ！　父の事…」

「知ってるさ。あの事件があろうとなかろうと、オレはあの人を尊敬してるからさ」

「…」

父を悪い目で見ない人がここにいた。

「おしゃべりはもういいだろう。それは後にしろ。お互い、武器を構えろ！」

ラルク副将の号令で、わたしは両手剣を、エンバシーさんは剣と盾を構えた。

「はじめ！！」

第十章

―――――――――
突然の試合
わたしとエンバシーさん
―――――――――

高らかな試合開始宣言。
わたし達はほぼ同時に駆け出した。
でも…スピードなら

「はぁぁぁぁッッ！！」
「うぉっ！」

わたしが速い。
勢いで、両手の剣で相手を突く。
それをエンバシーさんが盾で防いだ。
それによりバランスを崩してくれたなら、チャンス。

「てい！　たぁ！　やぁ！　はぁ！！」

わたしはさらに追撃をし、エンバシーさんを追い詰める。
彼はわたしの攻撃を防ぐのに必死だ、反撃は出来ない。と思ったら、

「とぉ！」
「っ！？」

盾が突然消えて、代わりに剣が現れた。
わたしの右手剣と彼の剣がぶつかり、そのまま動かない。
お互い、剣で力を押し合う状態に。

「さすがダイアンの娘さん……同じスタイル、同じ戦法だねぇ」

咄嗟に剣を出されるとは思わなかった。
押し合うならばわたしは不利だ、相手は力があるから。

「実はさ、一度だけ、君の親父さんと試合した事があるんだ。彼はやっぱり強かったよ」
「！」

父の事を話していられるというこの余裕。経験がものを言うのだろう。
今度はわたしが必死になっている。

「あの時は負けちゃったけど……ダイアンと戦って初めて目標を持つようになったんだ。今度戦う時は、あの人に勝とう、って」
「くっ……」

ジリジリと、相手から力が増してゆく。
わたしは力を補う為に、両の剣で押さえ始めた。

「でも、あの人は帰ってこなかった」
「っ……」
「でもオレは信じてるんだ。あの人は絶対に生きてるって」
「ッそれはっ」
「ん？」

押してダメなら

「わたしも同じですっ！！！」

「――――！！？」

下に押さえろ。

急な動きにより剣を叩きつけられたエンバシーさん。

わたしは反撃が来る前に後ろに素早く後退した。

「わたしも……父の帰りを待っています…その日まで、わたしはここで強くなるって、決めたんです……！」

まだ息切れはしてないが、両手がジンジンと痛む。

「わたしは父の顔を知りません…兄も同じです。だから、ちゃんと会うにふさわしくならないと、わたしは」

「え……？　親父さんに会った事がないの？」

意外に思われたらしい。エンバシーさんは驚いていた。

「はい……」

「なら、君のその戦法は独学って事か……これは嬉しい事だよ」

「？」

エンバシーさんは何が言いたいのか…。

「だって、『ダイアン・メリアー』の戦法じゃなく、『アルテミス・メリアー』の戦法と手合わせ出来るからねっ！！！」

「！？」

今度はエンバシーさんが駆け出してきた。
あんなに距離を縮められたら、わたしの足でも相手に詰め寄れる余裕がない。

「おりゃあ！！」
「うわっ！」

斬り上げが、わたしの右剣を弾いた。
剣は中を舞い、石造りの床に転がり滑った。

（くそ……利き腕がないとやりにくいっていうのに…！！）

父を『ダイアン』として見てくれた。わたしさえも『アルテミス』として見てくれた。
わたしと父を認めてくれたような気がした。
嬉しい事なのだが……今は喜んでいる暇はない。

「とぉ！！　たぁ！　おりゃぁぁ！！」

わたしは盾等ない、だから身体を動かしながらエンバシーさんの攻撃を避けた。
もちろんわたしは押されている。
後退する故、落ちている剣との距離も遠ざかる。

（一か八か）

これだけはあまりやらない方がいいのだが。

「えいっ！！」

「っ！？」

左を逆手に持ち、エンバシーさんの攻撃を一回防ぐ。
振りおろしてきた剣を防ぎ、その状態から、

「っ！！」
「！？」

逆手剣を前に突きだしジャンプした。
跳んだ勢いで剣を左に流し、道を開ける。
エンバシーさんの背後に着地したら、すぐに駆け出した。

「待て！！」

もちろんほおっておくワケない彼もわたしの後を追う。
わたしの剣まで、もう少し、もう少し！

（取れた！！）

背後には殺気がもう近くに、

「させない！！！」

わたしは低い姿勢のまま、両手剣を伸ばし勢いよく回った。
彼の足に当たるかと思ったが、エンバシーさんはそれを避けて何歩か後退した。

「いやぁ……確かに武器は戦いにおいて必要不可欠なのはわかるけど…すごいなぁ」

エンバシーさんはわたしの動きに感心を示していた。

「これは…父が残した、大切なものですから……」

身体の一部だとも思える。

自ら壊したから尚更思い知らされる存在。

「なるほど……親父さんの、だね」

「お話すると気が散ります。決着つけてからゆっくりお話しましょうよ……」

「そうだねぇ……オレも早く、君から話を聞きたいんだ！」

「わたしもです！！」

駆け出した。お互いに。

最初に副将が号令をかけた状況と酷似していた。

スピードはわたしが1番。だからまたバランスを崩して

「たぁぁぁぁぁ！！！」

「同じ手は通じないよ」

2つの刃を勢いで、相手に当てようとしたら

さらりと横に避けられた。

「しまっ…！！」

勢いが行き、剣は空を刺す。

エンバシーさんがすぐ隣に。

「動きにバリエーションが欲しいかな？」

その声を聞き、腹部に痛みが襲ってきた。

＊＊＊＊＊

「……ミス」
「ん？」
「アルテミス」
「…うん、もうちょっと」
「もうちょっとじゃねぇってアルテミス！！」
「うわわっ」

レイのでかい声で目が覚めた。

「あれ…？　レイ、どうしたのその傷……」
「ああ…試合で指名されてさ、がむしゃらに道具使ってもやられちゃったんだ……」

レイの顔や防具等は汚れ気味だった。

「……え？　って事はわたしの試合は？」
「何言ってんだよ……エンバシーのあんちゃんに腹殴られて気絶したじゃねぇか」
「えっ？」
「あっははは、ごめんねぇアルちゃん。やっぱ女の子に刃物を向けるのはいけないからさぁ」
「っ！」

急に声をかけられ、わたし達はその方を見た。

「エンバシーさん……」
「もう試合はどんどん進んでるぞ。ほら、もう終わった」
「やめ！」

ラルク副将の声が響き、わたしは光景を目の当たりにした。
新人の一人が、小柄な戦士に負けていた。
そして新人組を見てみると、もう人数が少なかった。
その中にムーンが残っているのだった。

「わたしが寝てる間に…こんな早く」
「でもアルテミス、今のところお前が長く戦えてるんだぜ。おれなんかアルテミスの半分にも満たねぇよ」
「そうなの…？」

自分の戦闘力を疑った。

「そうなんですか…エンバシーさん」
「ああ、今のところな。もうちょっとーっ、って奴も何人かいるけど、君の記録はまだ破られていないよ」
「……」

自分の力を疑い始めているわたしがいた。
だってわたしは速さだけは誇れるのに……。

「はじめ！」

また先輩が新人を指名し、試合開始。

「まだ新人で勝った奴はいないな……ってかもし勝ったら飛び級で

順位が上がっちまうってば」

自分で言って自分に笑うエンバシーさんは、思った以上にお気楽な性格だと知った。

「やめ！」
「早っ」

わたしとレイの声が被る。

「すごい短期だったなぁ……ってか、もうあの人だけか」
「？」

エンバシーさんが新人を見た。
わたし達も確認した。

「って、ムーン！？」
「おっちゃん！？」
「君らのお仲間かな？　今年の新人の中では1番雰囲気が違う新人だよなぁ……」

彼は呟くように、ムーンに興味を示す。

「あ？　もしかして全員戦ったか？」

ふと副将が慌ててメンバーを確認した。
先輩方が
「終わりました」
「やったよ」
「はい…」等とそれぞれに答えた。

「そうか……ムーン・タリアス。お前も不運だな…」

と副将が武器を構えた。

「アタイがお前の相手をしてやろう」

確かに不運だ。

わたし達は特に驚いた。

「おんやぁ？　ラルクちゃん直々にお相手してくれるなんてなぁ～？」

「黙れエンバシー。お前が号令をかけろ」

「へいへい」

からかうエンバシーさんを流すラルク副将。

場の空気が張り詰める。

わたし達は突然の展開に焦っているというのに、ムーンは顔色変えずに、武器を構えた。

副将も、鎖の繋がった円型の刃物を持つ。

あの武器は、投げたり振り回したり出来るものなのだろうか……とても危険なものだと知る。

「大丈夫、ラルクちゃんは真面目だから、傷つける事はしないよ」

わたしの顔を見てエンバシーさんがそう言う。

副将を誰よりも知っているような口振りは、わたしを安心させてくれた。が…

（ムーン…大丈夫かな……？）

どうなるのかが、やっぱり不安。
エンバシーさんはお互いが構えているのをちゃんと確認し

「はじめ！」

戦いをさせた。

第十一章

―――――――――
また突然の試合
彼と副将
―――――――――

ほぼ同時に動いた。

「はぁ！」
「たぁ！」

ガキィィィン！
二人の刃の音がぶつかり合い、高い音を立てる。
しばらく押し合うような状態。
どちらも一歩引かぬ。と思ったが

「あの新人……すげぇ力だな」
「え？」
「あのラルクちゃんがあんな顔してる」

エンバシーさんの分析なる言葉に私は二人を見た。
確かに、ラルク副将は何やら険しい顔をしている。

「っていい！！」

動いたのは副将。押した勢いで後ろに下がり、

「これでもくらえ！！」

円型の刃物とは逆の、鎖に繋がっている重りをムーンに放つ。
とっさに彼は長剣で防御したら、

「！」
「よしっ」

長剣に鎖が絡まり、副将は引っ張る。
引っ張ればムーンの剣の自由が利かない。

「武器さえ封じればこっちのもの。なぁに、血は流させない」
「っ……」

ギギギ…そんな音が聞こえてきそう。
副将は左手で剣を絡めている鎖を固定。
右手で鎖を振り回す。振り回している先端には刃物。

「……」
「ん？」

副将はふと回すのをやめ、刃物を手中に戻す。何かムーンに気付く。
何に気付いた？

「魔技（マギ）、『紅蓮』」
「えっ！？　っきゃぁぁぁ！！」

ムーンの剣がたちまち紅い炎で燃え上がる。

それ程高い温度なのか、剣を捕らえていた鎖は溶けて、引っ張る事により固定していたラルク副将は尻餅をついた。

「魔技だと！？　まさか新人にそんな技を…」
「ラルクちゃん！」
「わかってる！！」

エンバシーさんが不意に声をかけたのは、副将に向かってきたムーンの存在を気付かせる為。
副将もすぐ立ち上がり、円型刃を右手に持ち、

キィン！！

「お前…その魔技、どこで修得した…？」
「……」

また刃物を当て、力で押し合う状態になった。
いやしかし、よく見るとムーンの剣にはまだ炎が宿っている。
このままじゃ副将の剣が溶けてしまう。

「紅蓮は相当な練習量が必要となる、アタイですら修得出来なかった魔技だぞ…？」
「…修行を、したまでです」
「ならばアタイも本気でやるぞ！！」

ラルク副将が叫んだ瞬間、彼女の武器から水の衝撃波が！？

「っ！！」
「きゃあ！！」
「うぉわぁ！！」

ムーンだけじゃなく、観戦していたわたし達にも被害が及んだ。
ムーンの剣は元の色に戻り、彼自身も床を転がった。

「魔技、『水竜』！！」
「おお～、久しぶりに見たなぁ…」

エンバシーさんが楽しそうに呟く。
副将の武器全体に魔技がかかっているのがわかった。
鎖は生きた水竜の身体を象り、刃物が頭を模している。

「…」

ムーンは黙って立ち上がり、彼もまた紅蓮を再発動させた。

「相性が悪いじゃないか……ムーン・タリアス」
「……」

今、二人の距離は離れている。
この状態で副将は2つ有利だ。
遠い範囲まで届く武器、さらに魔技により炎に打ち勝てる水。

「アタイを本気にさせた事、誇りに思いなっ！！」

刃物のある方の鎖を振り回し、飛ばした。
それは水竜がムーンに襲いかかるが如く。だが

「！」
「む！」

それを剣で防ぐのではなく、左に避けてかわした。しかし、

「甘い！！」

「！　ぐっ…！！」

かわせたと思えたはずの刃物から、水圧の強い水流が彼を襲った。
それで彼にダメージはないようだが、身体は押され、また剣の炎が消える。
また距離が出来てしまう。

「くふふ……やはり難しいだろうな。炎が水に勝つ、という事は…」

楽しそうに笑う副将。その笑みに対し怖いと思ったのは、わたしだけじゃない、隣のレイもおびえていたのが気配で知れた。

「行くぞ！！」

副将は刃物を持ち直し、ムーンへと接近。
鎖にはまだ魔技が宿っている。このままムーンを戦闘不能にするのだろうか。
わたしはムーンを見た。彼は。

「！？」

「なっ！？」

わたしは目を見開く。この場にいる皆がそんな風に驚いている。

「紅蓮が…」

彼の剣には紅蓮が宿る。

先程とは違う、炎の剣そのもの。熱がこちらまで届きそうなくらいだった。

「っ…！　くそっ！」

思わず立ち止まっていた副将は舌打ちをした。

「それでアタイに勝てるのか！？」

水竜神を宿す刃物を、振り回す勢いで飛ばした。
また打ち消されるのかと思ったら

「あっ！？」

逆に打ち消された！？
水は蒸発し、水竜神の効果が消えた。
灼熱の炎に触れた刃は瞬時に溶け、ラルク副将は慌ててそれを引き寄せた。

「熱っ！」

副将とは思えない女性らしい悲鳴をあげ、また魔技を宿し武器を冷やした。

「あーあ……こりゃ鍛治屋に行かないとな。何年ぶりだろう…」

武器の無惨な姿に呟く副将。
相手はまだ構えているのに。

「…行きます」

彼もわざわざ声をかけ、駆け出した。
副将はその彼に対してなのか、展開に対してなのかため息をつき。

「武器はどうせ使い物にならない。ならば」

彼女も駆け出した。
だが距離はもう短い、一体どう対処するのか、そう思ったら

「!?　ムーン!?」

彼の魔技が燃え尽きて、剣のみとなった。彼自身も驚きの目を見せる。

「くらえぇ!!!」

鎖がムーンを蛇のように捕らえた。瞬間

「奥義!!　『水竜神昇華』!!!」
「――――――――――――――――!!!!!!!!!」

彼を捕らえていた鎖から、大量の水が。
それに彼はダメージを受けた。だけならば良かったが

「ちょっとラルクちゃんそれ駄目だって!!」

エンバシーさんや、他の先輩方が慌てる。我々新人は首を傾げる。
しかし

「……えっ!?」

理由がわかった。

「皆――――！！　なるべく遠くに逃げろ――――――――！！！」

ラルク副将の奥義は、周囲にまでもダメージが行き届くのだという事。

海のような巨大な波が襲ってきた！

「いやあああああ！！！」

「アルテミス！！　手を！！」

先に前に走ったレイがわたしに手を差し出す。わたしは油断しつつも彼の手を取ろうとしたら

「っきゃあああああぁ――――――――――――――――！！！！！」

「うわぁぁぁぁ――――――――――――――！！！！！！！」

間に合わず、のまれる。

所々で悲鳴が聞こえる。

とにかく海に踊らされたり、投げ出されたり……。

＊＊＊＊＊

水は魔力故、引っ込んだが、部屋の中はびしょ濡れだった。

大半が、倒れていたり、むせたりと、加害者である副将さえも、被害者の仲間入りをしていた。

「ラルクちゃん…それはここでは使うな！！」
「げほっ……すまん…」

エンバシーさんの口調にしてはキツめの言葉。
これには流石の副将も言葉を受け入れ、反省の態度を見せた。

「おっちゃーん！」
「あ、そうだった。ムーン！！」

レイの声に気付き、わたしも走り出した。まだ倒れているムーンの元へ。

「おっちゃん生きてるか！？」

レイが身体を揺らす。目は開いてるし、大きく呼吸もしてるから死んでるワケないが。

「…魔力を使い過ぎたな」
「だから途中で切れたのかぁ～。おっちゃん、ドンマイ」

己の敗因を呟き、全身びしょ濡れの身体を起こす。
せっかく我々新人に用意された防具……錆びたりしないかと不安に思う。

「この勝負は引き分けでいいよね？」
「まぁ……そうだな、アタイも気が抜けていたから、ああいう事になってしまったんだ」
「明らかラルクちゃんの怒り任せだと思うけど」
「ほっとけ」

と、副将とエンバシーさんの話が耳に入る。

「にしても……あの男」

副将の視線を感じた。ムーンに対してのものだ。

「以前どこかで戦った事があるような気がするな……」

「……やっぱりラルクも思った？」

え？　戦った事がある？

エンバシーさんが呼び捨てになったのも、真剣味が入った為か。

「また……戦えるといいな。よし！」

後半は一同に対する声となった。

「これにて入団式は終了とする！！　この後部屋割りをするぞ。集合！！」

「はい！！」

先輩方、新人達の声が揃った。

ここで初めて、一致団結をしたように思えた。

＊＊＊＊＊

まさか。予想外。

「黒雲の女は新人のお前を入れて5人となった。しかも新人の女は

お前だけだ。文句はないだろ？」
「はい…」

つまり残り三人の女先輩方は二人部屋と一人部屋に分かれる。
副将があるドア前に止まり。
廊下を歩いてきて、一定感覚のドア達を見たが、このドアは両隣のドアとは距離がある。しかも若干豪華に見えるは気のせいか？

「ここがアタイ達の部屋だ」
「！？」

開ければそこは綺麗な部屋。
全ての家具、床の絨毯、とにかく1つ1つが高価そうなもの。
鑑定力がない人でもこの部屋は高級そのものだと知れるだろう。

「開けてすぐ入ればアタイの事務室。右のドアはアタイ達の寝室、左は洗面所と風呂があるからな」
「……」
「なんだ？　緊張してるのか？」

その緊張をほぐすなんて無理だ。副将はともかく、わたしなんかがこの部屋を利用して良いのか？
わたしの言う予想外とは、副将と同室になったという事。
男達はくじ引きだというのに、わたしは副将直々に指名され、決まったようなものだった。

「ははっ、可愛いなぁ。やっぱ女の子だし、こんな部屋慣れないだろ？」

男の子でもきっと驚くと思う。あえて口外しない。

「一緒に過ごせばいいさ。アタイ達はもう仲間なんだからな。改めて、よろしくな、アルテミス」

副将の笑顔と差し出された手。
副将の笑顔を見て、少し緊張が解ける。

「よろしくお願いします、副将」

手を取り、握手を交わす。
握った瞬間

「いたたたたたたっ！？」
「一応言っとくが」

とんでもない握力で握られ、わたしは離れようと必死に暴れる。
副将の静かな怒声、笑顔と釣り合わない。

「アタイは確かに副将軍だが、ここでは団長だ。『団長』『ラルクさん』、呼ぶならどっちか呼びな？」
「は、ははははいはい！　痛い痛いすみま痛いでした団長ー！」
「わかればよろしい」
「うぎっ」

パッと手を離され、引っ張っていたわたしは勢いが余り尻餅。

（今度間違えたら手がなくなる…）

日常生活は団長と呼ぼう。
痛い手をさすりながら、わたしは誓った。

第十二章

―――――――――
落とし物のペンダント
―――――――――

挨拶も交わし、わたしは団長に促されるまま寝室に入った。

「一応ここにも事務机はあるが、この部屋の机はお前が使っても構わない。物置にしちゃいな」

そう笑われるわたし。
確かに言ってはならないが、視界に入った団長の事務室の机は物置と化していた。
さすがにあれを見習ってはいけない…。

「服とかしまうタンスはここだ。あと、武器庫も。で、本はいろいろあるから、燃やしたり切ったりさえしなきゃ何度読んでも構わない。お前のベッドは机と隣り合わせのやつだからな」

と次々に物の場所や使用用途を淡々と説明する団長。
わたしはすぐに理解したがいいが、早くのみ込めない人は大変だ。

「ありがとうございます」

でも感謝は本心、無意識に口にした。

故郷から出た時に持っていた荷物の袋。
ベッドの上に置き、荷物を確認した。お金、薬草、解毒剤、ホータイに携帯食料、替えの服何枚か。あとは…

「？」

クロスペンダント？
わたしは確か首にかけているのは写真入りのペンダントだけだが…。

「あ！？」

急に脳裏をよぎった些細な光景。
城下町でシスターとぶつかり、その彼女の落とし物。

「やばい！」
「？」
「ふくしょ…団長！　外出許可ってどこでするんですか！？」

＊＊＊＊＊

わたしは、試験当日に出会ったシスターの話をし、ペンダントを届けたいと話した。

「もちろん許可は降りるさ。というか、理由を述べなくともすぐに出れるけどな」

団長はあっさり。焦って一生懸命事情説明したわたしは恥ずかしかった。

「ちゃんとアタイに一言言えばいいさ。ルームメイトのアタイに、な。ってかこの騎士団は仲間にさえ言えば誰でも出られるし」

つまり、一人でも情報を持っていれば自由に出入りが効くというワケか。

騎士団はこんなに規約が緩いのか…？

「落とし物だろ？　行くならさっさと行った方がいいぞ。あと、なるべく夕飯には帰ってこい、二次会があるからなー」

後半の言葉を気にしつつ、わたしは見送られ、部屋を出た。

＊＊＊＊＊

「アル」

「っ？」

振り向くと、丁度ドアを開けて出ようとしたムーンが。

「どうした、そんなに急いで…」

「城下町の教会に行くの。シスターの落とし物を届けなくちゃ」

「教会…確かそこまでの道のりは少し複雑なはずだ。近道を案内出来るが…」

「えっ？　いいの？　でも…」

ムーンは部屋から出たばかりで、何かしようとしたのでは？

わたしの事情に巻き込めて迷惑はかけたくないが…

「なに、私も丁度暇を持て余そうとしたところだ。いい時間潰しになるからな…」

わたしの内心を察してくれたのか、心配ご無用と言わんばかりにムーンは言う。
それならば、とわたしも彼を連れて行く事にした。

＊＊＊＊＊

確かにムーンの言う近道。
ちょっとやそっとじゃ気付かれない、ある民家の裏にある道だった。
そこを歩けば、すぐに教会にたどり着けた。
故郷にある教会より、少し大きな建物だった。

＊＊＊＊＊

「えっ！？　それ本当ですか！？」
「はい…間違いなくそれは旅の教団がお持ちしていらっしゃったものです」

ここのシスターから聞いた情報。
わたしが拾ったクロスペンダント、神の存在発祥の地であるサーサリー大陸で暮らす教団のシスターのものだという。
サーサリー大陸は他の大陸と比べ、とても信仰の厚い人々が大勢暮らしているという。

「で、その教団は今ここにいらっしゃいますか？」
「…それが」
「……まさか」
「はい……丁度、あなた様が拾ったという日に、この町を去りました」
「そんな……」

そうか、だからあんなに急いでいたのか…。
試験が終わった後に気付けたとしても、どっちにしろ遅かった、という事を知る。

「もしかしたら…これは神のお導きかもしれません」

シスターがわたしを元気付けようとしているのか、微笑んで語る。

「いつの日か、これを返す時が来るでしょう。それはあなた様とそのお方が、再び出会えるという奇跡だからかもしれません…」
「また、会える…？」
「そうです。ですから、なくさずに、大切に持っていた方がよろしいですよ」

わたしは神様等、シスター程に信じてはいないが…、

「…わかりました。ありがとうございました！」

神を信じるシスターの言葉は、とても説得力があった。

「いえ、これも全て神の決めた道しるべ。あなたに、神のご加護があらん事を…」

わたしの為に励ましの十字を切ってくれた。

＊＊＊＊＊

「残念だったな…」
「ええ…」

帰りはごくごく普通に町中を歩いた。急ぐ理由がないからだ。
ゆっくりと堪能しなかった町だから、せめて散歩気分で帰路を歩こう。

「手に持っていたり、荷物に入れたりしたら、なくすだろう。首にかけたらどうだ?」
「そうね、そうする」

ムーンの勧めで、わたしは留め具を外し、その紐を首に回す。
そういえば写真入りの……と、わたしはずっと首にかけているペンダントを取り出した。

「それは……」
「?」

ムーンがわたしのペンダントに目を向けた。

「ああ、これね……わたしの家族の写真。家族で撮ってあるの、これしかないの」

ほら、とわたしはペンダントの蓋を取る。
ムーンに見せた。

「赤ん坊がわたしで、わたしを抱っこしてるのが母さん。男の子は兄さん。顔が見えないのが、父さん」
「……」

ムーンは写真を見た後、わたしの顔を見た。

「母さん、死んじゃったのよ」
「え…？」
「わたしが１０歳の時、つまり三年前に亡くなったの。原因不明の病気、助かる見込みがなかった」
「……」

何故だろう、他人に昔話を語るのに抵抗を覚えないのは。する事は初めてで、する相手も彼が初めてで。

「でも母さんは、最後まで笑顔でいてくれたの。わたしを悲しませたりしないように。最後に言った」

語るわたしは、今、知った。母さんの

「立派に生きろ。父さんと兄さんに会いなさい。大切な人を守れるように、強くなれって」

この言葉のおかげで、夢への一歩を進んでいる事を。

「わたしの夢を楽しみにしているから。わたし、叶えるまで負けたくないし、死んだりしないから」

「……」

気付けばわたし達は立ち止まっていた。
語るのに夢中になっていたのか、わたしは。

「……そうか…」

彼が熱心に聞いてくれた事。その一言で知る。

「その気持ち。絶対に捨ててはならないぞ。まぁ……お前ごときが、そう易々と捨てるようには思えぬがな」
「当たり前よ！　わたし、世界中の誰よりも強くなるんだから！　皆を守れるくらいに！」

皆……皆とは誰だろう。
ムーン？　レイ？　それとも団長？　ううん。皆は、皆だ。

「頑張るんだぞ……」

そう言って、彼は歩き出した。

「……」

何故か。寂しそうな目をしたような、ほんの一瞬だが。

「……あ！　ちょっと待ってよ！！」

先に行ってしまう彼。
クロスペンダントも慌てて首にかけ、わたしはムーンの背中を追いかけた。

＊＊＊＊＊

「ではでは、新人達の入団を祝し、今後の騎士団の健闘を祈って、乾杯！！」
「かんぱーい！！」

黒雲の騎士団の部屋。
威勢の良い団長の言葉により、曰く二次会が始まった。
いくつかの長テーブルには様々な料理が並べられている。
それを皿片手に、いろいろ盛り付け、椅子に座って食べるなり立ち話するなりと、無法地帯気味。

「にしてもこれ美味ぇなぁ」
「そ、そうね…」

人の邪魔にならぬよう、部屋の隅で食事をする。
レイがガツガツと食うものだから、思わず苦笑いするわたし。

「よう！　楽しんでるかい？」
「あ、エンバシーの兄ちゃん！」

後々、団長から話を聞いて知ったが、エンバシーさんは黒雲の副団長だ、と。
だからあんなに気楽に団長と話し合えるのか、と納得したわたしがいた。

「ここの料理すっげぇ美味いっすね」

「そりゃそうさ。ラルクちゃんがわざわざ城の厨房借りて作った料理だからな」
「え！？　これ全部！？」
ボロッと口から食べ物をこぼしながらレイが目を丸くする。
わたしも丁度口にした故に、喉に詰まらせかけた。
「なんだ？　アタイの料理が不味いっていうのか？」
とんだ地獄耳、ラルク団長がお酒片手にこちらに来た。
レイも誤解されたくないのか早口で言う。
「めめめっ滅相もない！　ただ、ビックリしたもので…」
「そりゃそうだろ？　アタイの料理はビックリするくらい美味いんだからなぁ！！　あっはははははは！！！」
この人酔ってる。酔っても酔ってなくても性格が変わらない団長だった。
「まぁ、ラルクちゃんも実は女性らしいところがあるって事さ」
「誰が女性らしくないだぁ！？」
「んな事言ってないってラルクちゃん！　うわわわ！　皿投げないで皿だけはぁ！！」
「うっせぇブルッカス！！　てめぇはファミリーネーム同様にカッスカスなんだよ死ねぇ！！」
「うわぁあぁ！　オレのファミリーネームは関係ないじゃないか――！！！」
酒の酔いの勢いというか…。
エンバシーさんを追いかけ回すラルク団長を笑う先輩方。

まさかこれが日常的なのだろうか？　他の新人達も笑っているし…。

「ははははは！！」

レイも笑ってるし…。

「…？」

一人だけ突っ立っている人が……ムーンだ。

皆、鎧とかマントとか外してラフな格好をしているが、ムーンだけは騎士防具のままだ。

見た限り、食事は一切していない様子。

「ムーン」

「ああ……アルか」

わたしのかける声に振り向く。

「食べないの？」

「あいにく、食欲がないからな…」

「そっか…」

そういえば彼は顔の右目以外はホータイで巻かれている。

試験中、第一試験が終わった時に彼からのチカラモの実を食べたが、食べている姿を見る事は出来なかった。

彼はどうやって食事をするのか？

「でも明日から仕事だろうから、一口でも何か食べた方がいいと思うよ…」

「…そうだな」

と言葉を受け入れてはくれるが行動しようとする気配がない。

（まぁ…いっか）

これから先、ここにいる仲間達と共に過ごすのだから。
その日々を利用して仲間達を理解し合えばいいのだから。
深く追求する事はない、これからなんだから…。

「そうよね……これからが、大事なんだよね……」
「ああ……」

思わず口にした事に、彼は相づちを打ってくれた。
そう……わたし、アルテミス・メリアーの夢追いは、ここから始まるのだから……。

【第二部】第十三章

―――――――――
思い出と人生が
残った部屋
―――――――――

あれから数ヶ月。

「アルちゃん！」
「あ、先輩！」

わたし達新人騎士は、もうこの生活にも慣れてきた。

「どうしたんですか？」
「この後訓練しようかと思うのよ。闘技場で赤炎と合同訓練。どう？　暇なら参加する？」
「それ面白そうですね……是非参加させて下さい！」

騎士団は何も、戦うのが仕事ではない。
一般人が困っているならば、例えそれが小さい事でも、助けるのが騎士団。

「アルちゃんなら言うと思ったわ。早速行きましょ！」
「はい！」

もちろん、今まで全て成功したワケではない。
わたしも、慣れない事には失敗を重ねてしまった。

「あら？　もしかして合同訓練ですか？　私もよろしいでしょうか？」
「ああ、あんた。もちろんＯＫよ！」

そんな時に、仲間や先輩達が激励を送ってくれた。

「ルッキィ先輩とミウ先輩と訓練出来るなんて、わたし、嬉しいです」
「おっ、いい事言うじゃないアルちゃん」
「私も、あなたのような方とご一緒出来て嬉しい限りです」

わたしを『魔物の妹』『裏切り者の娘』として捉えるのではなく、騎士団の一員アルテミス・メリアーとして見てくれる。
それだけでも充分なのに……わたしはこんなにたくさん、素敵な仲間に巡り会えたのだから。
夢を叶えるまで……絶対諦めないし、負けたりしない。

＊＊＊＊＊

そんなある日。
今日は騎士団の仕事もなく、わたしはフリーだった。
する事と言えば訓練だが、する相手がいなくては向上にはならないので

（出かけよっかなぁ）

街に気になる店があったのをこの前見たので、散歩がてら行こう。
寝室にて、甲冑と剣を提げたベルトを外し、身軽な服装になるわたし。すると

「？」

ガチャとドアが開く音。それは扉の向こうから、という事は

「アルテミス・メリアー。いたか」

やっぱり。ラルク団長が入ってきた。

「どうしましたか？　団長」
「ああ、お前をある場所に連れて行こうと思ってな」
「？」

ラルク団長らしいにっこりとした微笑み。
なんだろう？　わたしを連れて行く場所とは……。

「今から何かする事があるなら、早速行くが。大丈夫か？」
「あ、はい。暇だったんで、これから出かけようとしました」
「ならいい。グッドタイミングだな」

＊＊＊＊＊

それで団長と、廊下を並んで歩く。

今、わたし達の自室とは1つ上の階にいる。

「将軍の命令でな、お前を連れてけって」

「ディルス将軍ですか？　うーん……」

心当たりがない。わざわざ団長に命令してわたしを連れて行く場所なんて…。

「なんでも、将軍の昔の後輩なんだと。そいつの部屋だってさ」

「後輩…？　……！！」

まさか。

「やっと気付いたか」

ニヒヒと笑むラルク団長。

「ほら、ここだ」

と、ある一室のドアで立ち止まる。

「開けてみな」

「……はい」

団長に勧められ、わたしはドアノブに手をかける。

と、わたしは思い詰める。このドアをわたしが開けていいのだろうか、と。

思わず団長に目をやってしまう。

「…」

団長は楽しそうな顔をしながら、黙って頷いてくれた。
その仕草に、わたしは安心し、回した。

「……」

開けた先には、わたし達の似たような部屋。だが、こちらの方が整理整頓が利いている。
事務机、本棚、洗面所と風呂に続くドア、寝室に続くドア。

「ダイアン・メリアー」
「ッ」

不意に口にしたその名前。
言ったはラルク団長。

「実はアタイも、エンバシー同様に手合わせした事があんのさ、昔の話だけどな」

優しい眼差しの団長。

「将軍がお前を気にかけたんだろう。この部屋は魔界大戦以来誰も入っちゃいない。将軍から命令があるぞ、お前に」
「へっ？」

将軍から？

「この部屋で、父親の思い出をさがせ、だとよ」
「！！……」
「何かのきっかけや、手掛かりになるからだろうって」

「……」

確かに思った。試験日、将軍の話を聞いて。
父さんと母さんの手紙が読みたいな、と。
意外とあっさりと、その時が来たのだ。

「じゃあな。アタイはずらかるからよ。あ、これ鍵」

ポイッとぶっきらぼうに投げてきて、わたしは慌ててキャッチした。

「出入りは自由だ。でも、部屋をここにするってのは、アタイが許さないからな」

あははははっと笑いながら去るラルク団長。
それでわたしは、ドアが開けっ放しのこの部屋にぽつん。

「……父さん…」

手の平にある鍵に、目をやる。
装飾も文句なしに好みの鍵。
父さんは、この鍵に愛着があったのだろうか。

＊＊＊＊＊

まずは事務室。
引き出しや本棚にある書類や書物をチェックした。
どれも皆、あの時から時が止まっているのを知る。
日付が……昔のものだからだ。

「……あ！」

見つけた。本棚の上にある、たくさんの封筒をまとめる為に、紐で縛られているものが。

「くぅ…」

手を伸ばすも届かない。
本棚が明らかにわたしより高いのだ。

（あと少し…）

もう少し、もう少しというところ。
すると突然、辺りが薄暗くなる。
それに気付いた時に

「椅子とか使えばいいだろうよー」

わたしの指じゃない別の手が、その紐を捉え、封筒の束はわたしの手元に。

「って、レイ！？」
「おれだけじゃないぞ」

と、嫌味のように思える背丈の彼は、ドアを指差す。
そこではムーンの姿もあった。
何故か部屋の敷地内には入らず、突っ立ったまま部屋を眺めていた。

「どうしてここに？」

わたしはやっと手に入れたものを抱え、レイとムーンに問う。

「いやぁ…おれ、非番だから稽古相手捜してたんだよ。おっちゃんとお前も連れて行こうと思ったけど、部屋訪ねてもいなかったから…」

「団長から居場所を聞いたからだ」

「そういう事」

長いレイの話に、ムーンが代わりに簡潔的に答えた。

「つーかこの部屋古いなぁー。誰の部屋なんだ?」

「うん……父さんの部屋」

「えっ!? アルテミスの親父さん!? すっげぇ豪華じゃん! おれと先輩の部屋と全然違うぞぉ!?」

今まで過ごしてきて思うが、まだ子供の精神並みだ…。

レイはとても興味津々で、部屋をパタパタと見回り始めた。

「頼むから……壊したりしないでよ?」

「誰が壊すかよ~」

わたしが注意するが、好奇心旺盛同僚は勝手に窓を開けたり、洗面所に続く部屋に行ったり。

「うぉわぁ!?」

「!?」

姿なきレイの声にわたしは駆け寄る。

開いてるドアに覗き込むと……間抜けに倒れてるレイ。

「何してるの」
「悪ぃ……コケた」

アホか……と思ったが、それは心内に留め、ため息だけはした。

「もう走り回るのやめて。わたし、これ読みたいから、ここ鍵かけるからね」
「えっ？　もういいの？　も少し見せてくれよー」
「なんで父さんの部屋を見たがるの？」
「将軍から聞いたんだよ。昔の騎士団は本当に強かったってよ。だから昔の騎士団の部屋から何か強くなるきっかけってないのかなぁーって」
「そんなものはない」
「！」

ずっと黙っていたムーンが口を開いた。

「強くなる事は、楽してなれるものではない……日頃からの努力が大切なんだ…」
「でもおっちゃん……」

レイはムーンに歩み寄り

「努力するのに、何か目標や見習う事がなけりゃ、何も出来やしないと思うぜ？」
「自分で探せばいいだろう…何もこの部屋だけから何か習得する事はない…」

言うも彼に言い返される。

事実的にムーンはわたし達と同期だが、やはり人生の長さは彼が先輩だ。
何もかも知っている口振りは尚更。

「この部屋以外にも…まだ学べる場所はある……」

そう言い残し立ち去る彼。

「うー……ムーンのおっちゃん、いっつも厳しいよなぁ…」

苦笑いを浮かべるレイより、わたしは彼が気になった。

「なんでだろう……」

ずっと前にした入団式二次会で見た、悲しそうな顔。

「？　何が？」
「あ、いや。なんでもない」

思わず呟いていたか…わたし。レイに聞かれた事を誤魔化す。

「そうか？　じゃあおれ部屋に戻るわー」

とスタスタと部屋から出ていくレイ。
残されたわたし。

「…父さん……」

久しぶりに開け放たれた窓からは、当時の空気を入れ換えているかのよう。

深呼吸をすると、わたしが生まれた時から変わらない、サンポリアの大気が肺に入る。

（しばらく借りるね。読み終わったら、ここに返すから…）

レイが開けた窓を閉め、わたしも部屋から出た。
そして、誰も入られぬよう、鍵をかけた。
片手には、封筒の束。

＊＊＊＊＊

廊下を歩いていたら

「きゃああっ！？」
「うおっ！？」

急に現れた将軍。
わたしから見て右側から現れた。丁度、廊下の分岐故。
驚いて尻餅をつき、将軍もわたしの声に驚いて後ずさる。

「だ…大丈夫か？」
「イテテ……すみません…」

手を差し出され、わたしはそれを掴み、立ち上がった。

「ん？　それは…」
「ん？　…あ！　いけない！！」

転んだ拍子に落ちた束。

ディルス将軍に言われて慌てて拾い上げたわたし。

「確かそれは…」

「あ、はい。父の手紙です。団長から鍵をお借りして、それでこれを……」

「そうか……」

「あ、あの、本当にありがとうございました！」

部屋に入れたはこの人のおかげである。

わたしは深々と将軍に頭を下げた。

「いや、少しでもダイアンの事を知ってもらう必要があると思ってな」

「本当に、ありがとうございます。これは必ず部屋に戻しますので…」

「いや…好きにして構わん」

「え？」

「親の遺したものは、子が使っても構わないはずだ…」

将軍の眼差しはどこか寂しげ、あるいは親を思わせるそれ。

「お前は、ただ父親の偉大さを知ればいいだけだ。悲しむ事はないはずだ」

そう言われ、ディルス将軍は行ってしまった。

（悲しむ事はない……か）

確かに父さんの事情を聞いて悲しくも思えたが、今はそんな情はない。

今は父さんの手紙が読みたい。
正確には、母さんから届いた手紙だが。
わくわくした気持ちが、今のわたしを支配している。
わたしは焦る心抑え、また誰かとぶつからぬよう歩いていった。

＊＊＊＊＊

寝室のベッドに腰掛け、隣には束を置く。
一番古そうな手紙を探した。それが、母さんが一番最初に父さんに届けた手紙だろうから。

（これかな…）

ご丁寧に月日が封筒に書かれていた。
わたしは、その封筒を開けて、便箋を開いた。

第十四章

―――――――――
親愛なる
ダイアン・メリアー様へ
―――――――――

――――最近はこのような、鳩を使った手紙のやりとりが流行っていると聞きます。

まさか、私がその流行りに乗ってダイアンに手紙を書くだなんて、思ってもいませんでした。

劇の公演は、サンポリア王国でやると聞いてます。
その日は是非、見に行きたいので、日時を教えて下さい。
あなたの悪役っぷりを見てみたいから。いい意味で。

では、お身体に気を付けて…。
この手紙が、ちゃんとあなたに届きますように。

これからもあなたを想い続けます
フィーネス・ガーフィッシ――――

＊＊＊＊＊

――――親愛なるダイアン・メリアー様へ

ダイアンもこの伝書鳩を利用するのが初めてだなんて、ビックリしました。
私だけ流行に遅れていると思ってヒヤヒヤしましたが……あなたも遅れ人なのですね、安心しました。

あなたの上司さんも、あなたを思って言っているのだから。
悪く思ってはダメですよ？

私も、お父さんの漁の手伝いをしているけど、お母さんは
「早く結婚して、私達に孫を見せておくれ。安心させておくれよ」
と、うるさいんです。

やたらと魚料理の作り方を叩き込んできたり…家事のやり方を教えてきたり。
私……結構覚えてるつもりなのに、お母さん、私を信用してないのかしら？

劇は台詞を覚えるのが大変だと聞きます。
ダイアンも、本番で私に恥を見せないよう、頑張って下さい。
ちょっと言い過ぎた…？
では、この手紙が届く事を祈っています……。

あなたに会いたいです
フィーネス・ガーフィッシ――――

＊＊＊＊＊

――――親愛なるダイアン・メリアー様へ

わかりました。ここからはちゃんと、敬語はなしにします。
正直……馴れ馴れしいのでは、と緊張しています…。

お父さんとお母さんは心配性だから、ちょっと口うるさいわ。
でも…私を思って言ってくれるから、我慢はしているわ。
あなた程、上司さんに不満を持っているような事はないのよ?

私の両親が出会わなければ、私は生まれてこなかったし。
あなたの両親も、愛し合った末にあなたが生まれたのだから。
親というのは…大切にすべき人であり、尊敬すべき人であると思うの。

私達の両親がいなかったら…私達、こんな伝書鳩してないもの…。
あなたに会えた事、あなたと愛し合える事、すごく嬉しいわ。

もう少しで劇団の公演ね、楽しみでしょうがないわ。
それでは、あなたにこの文字が届きますように…。

この鳩は、何年仕事が出来るのかしら?
フィーネス・ガーフィッシ――――

＊＊＊＊＊

――――親愛なるダイアン・メリアー様へ

勇気を持って、書いてくれた事、感謝してるわ。

あなたも、ずっと隠していて、つらかったのよね…？

本当のあなたを知っても、私はあなたを愛す事をやめない。

知ってる？　手紙はね、実は難しい事なの。
普段口にしている単語を、いざ文面に出そうとする時、思い付かないものなの。

それなのにあなたは、つらい思いをして書いてくれた。
悲しくなんかない、むしろ、嬉しかった。

あなたの仕事は、国のために勤める誇りある仕事よ。
もっと自分を、誇りに思って。

今度、お休みの日があるなら、サンポリア王国でやる劇を見に行きましょう。
あなたの悪役が見れないのは、ちょっと残念だけど、デートでチャラ、って事ね。

今日はイジワルでごめんなさい。
あなたの健闘と、手紙が届くのを祈り…。

あなたって、本当に優しいのね
フィーネス・ガーフィッシ――――

＊＊＊＊＊

――――親愛なるダイアン・メリアー様へ

元気にしてる？　明日のお休み取れた？
明日は私から、そっちに行くわね。

仕事はどう？　剣は持つと重い、ってお父さんから聞くわ。
あなたの剣は、国の為に振るわれているものね。
重量だけじゃなく、責任も重くのし掛かると思うの。

それじゃあ、いい返事を待ってるわ。
手紙が届きますように。

明日、魚料理持ってくるわね
フィーネス・ガーフィッシ――――

＊＊＊＊＊

――――親愛なるダイアンへ

良かったわ！　これでやっと会えるのね！

あなたとはずっと、文字でのやりとりしかなかったから。
手紙を毎日書いても、どこか物足りなさを感じたわ。

あなたの顔…早く見たい。
全然会ってないし、あなたは毎日剣の特訓をしているだろうから、
きっと顔付きが変わっているに違いないわ。
間違えたら、ごめんなさい……冗談よ。
この文字を見て、笑ってくれたら嬉しいわ。

あなたの顔は、誰よりも覚えているつもりよ
フィーネス・ガーフィッシ――――

＊＊＊＊＊

――――親愛なるダイアンへ

今日のデートはとても楽しかったわ。
実は私、演劇っていうのは今日初めて見たの。
あんなに上手に他人になれるなんて、私、ビックリしたわ。

そういえばあなたも、立派な役者さんだったわね。
しばらく私を騙してたじゃない？　そういう意味でね。
でも、自分から台本をさらけ出すなんて。
本物の役者さんが知ったら、あなたの事、異様な目で見るに違いないわ。

大丈夫。あなたの台本は、誰にも言い振らしてないわ。
だって、これは私達のものだもの、ね？
手紙、届いてるわよね…？

あなたと手紙の
やりとりしてると
詩人になった気分！
フィーネス・ガーフィッシ――――

＊＊＊＊＊

「すごい…」

その一言。

こんな母さんを見たのは、初めてかもしれない。
何よりも、想像が出来ない。
母さんはいつも真面目で、優しい人だったから、こんなお茶目な母さん、知らなかった。

（母さん……父さんとこういう事して、楽しかったんだろうな…）

今、我が家には父さんからの手紙はあるのだろうか。
今度休みの時、里帰りして、調べよう。

「っワワワワッ！？」

わたしがいろいろ思い考えていたら、束がバタバタと床に落ちてしまった。
わたしは慌ててその封筒達を拾い上げた。

「……？」

拾った拍子に、封筒に挟まっていた便箋が、一枚、こぼれた。

（何これ……）

今、手に持っている封筒を近くの机に置き、拾いあげた。

＊＊＊＊＊

――――ありがとう……

ずっと待ってたわ

お父さんとお母さんに話したら
きっと喜んでくれるはず

私は、あなたを幸せにする事を誓います。
私は、あなたの妻でいる事を誓います。
私は……あなたを愛し続ける事を誓います……。

フィーネ――――

＊＊＊＊＊

「……母さん…」

これは、父さんからプロポーズされた返事だろうか。
泣いて喜んでいる母さんの姿が、ハッキリと映像化している。

第十五章

―――――――――
疑い
そして遠征任務
―――――――――

＊＊＊＊＊

結局、夜遅くまで母さんの手紙を読んでいた。
父さんと兄さんが大戦に行った後の、やり取りしたであろう手紙もあった。

どうやら、写真も何枚か同封し合っていたらしく。
昔のウィズの光景、近所の人々の笑顔、そして幼きわたしと若き母。

父の元には、常にわたし達の日常を見せられていたようだ。
最後であろう手紙の日付は……兄さんと父さんに災難が訪れる寸前の辺りだと思われる。

（という事は……父さんは最後に返事が書けなかった、って事になる……）

しかし、例え今、父がいたとしても、返事をしたとしても。
読んでくれる彼女は、もうこの世にはいないのである…。

＊＊＊＊＊

翌日は、仕事があった。
それは、この大陸で一番小さな村へ荷物を届ける為の護衛。
サンポリアは、魔界があるであろう所から距離がある故、強い魔物等はそれほどいやしない。

この仕事は、昼過ぎに終わり、帰ってこれた。

＊＊＊＊＊

（この手紙、返さないと…）

封筒の束を抱え、わたしは廊下を歩いていた。
いくら家族のものとはいえ、父のものは父のもの。
部屋に返すべく今に至る。

「おお、メリアー」
「あ！　こんにちは、将軍」

昨日と同じ場所で、将軍とすれ違った。

「ああ……それは」

ディルス将軍は、わたしの腕の中にある束に目を向ける。

「はい、父のものです。やっと暇になったので、部屋に戻そうかと…」

「そうか……。そして、何か得るものはあったか？」

と、将軍は聞いてきた。

普段厳しい将軍にしては、優しそうな雰囲気の問いだ。

「……はい」

得たものとは。それは夫婦の愛。

「父と母は、本当に、愛し合っていたんだと、実感しました」

誇りたくなる。わたしの両親を。

二人がいなかったら、わたしも、兄さんもこの世にはいなかったのだから。

「そうか……確かに、あの二人は誰もが羨む程、仲が良かった…」

目を閉じ、父さんと母さんの事を思い浮かべているのだろうか。

将軍の声にはあたたかみがある。父さん達の思い出は、やはり良きものであったのだろう。

「メリアーよ」

と、目を開き、わたしの顔を見据えてきた将軍。

さっきの優しいのは消えて、真剣な面持ちであった。

「お前の父は本当に素晴らしい男だと、わしは思う。お前も高みを

目指すならば、父を目標にしても良いであろう」

わたしの将来を気遣っての、将来からの言葉。

「夢を叶えると決めたならば、その道を信じて歩め。良いな？」

「…はい！」

わたしはまた改めて、気持ちの決意を固めた。

＊＊＊＊＊

将軍からのありがたき助言を頂き、わたしは目的の部屋へと、廊下を歩く。

父の部屋のドアを見つける前に、ある者がまず、視界に入った。

（ムーン…？）

そう、仕事ももう終わったというのに、まだ鎧を身にまとっている彼の姿。

父の部屋のドアと向かい合うように、廊下の壁に寄りかかり誰かを待っている様子。

というか……あそこに用があるのは今のところわたしだけだ。わたしを待っているのか。

（……！）

さらに気付いた事が。

（どうして…）

そう、部屋の鍵。鍵穴に刺さったままの光景を知る。
それで慌てて、ベルトから提げている小物入れに手を突っ込んだら、
鍵がない事を知った。

「…？」

と、ムーンがわたしに気付き、こちらを見てきた。

「アル」
「ムーン、どうして…」

わたしを見て名を呼んできた。
わたしは彼に駆け寄り、何故鍵を持っていたのか問おうとしたら

「昨日、廊下に落ちていたのを拾ったんだ」
「え…？」

昨日？　昨日は確か、父の部屋から自室まで……あ！

（もしかしてあの時…！？）

将軍と廊下でぶつかった時を思い出した。
ならば何故鍵がないのか、それで納得した。
だが…

「それはありがたいけど…だったら、どうしてすぐにわたしに渡しに来なかったの？」

あの後も昨日も暇であったし、今日仕事も一緒だった。
彼と交流していた時間はあったし、会話もした、その時に渡しても良かったのでは。

「すまない……すっかり忘れていたんだ…」
「そう…」

変わらぬ様子でそう答えるムーン。
彼は万能のように思えるが、やはり人間だ、物忘れをする事だってある。
それでもまだ疑問がある。

「あのさ」
「鍵も渡せた事だ、私は失礼する」
「え？　あ、うん……ありがとうね…」

聞こうとする前に、ムーンは去っていった。なんだか一方的に話を切られた感じだ。

（……まさか、部屋に入ったりしてないだろうし。だったらなんで刺したままなの？）

鍵穴を見た。装飾が綺麗な鍵が、役目をしている途中の姿。

（……なんで…）

ただ鍵を渡しに来ただけのようには思えなかった。
疑問はあるが、今は束達を部屋に戻すべくドアを開けた。

＊＊＊＊＊

彼は本当にいい人である。
過ごしてきてそれはわかる。
だが、やはり気になって仕方がない。
いくらメリアーのわたしだからといえ、ここまでわたしにしてくれる事はあるのか？
もう何回疑問に思ったのだろう。
まさかとは思うけど…

（父さん…なワケないと思う……だったらすぐに名乗ってくれると思う…。それとも…父さんと何か関係が……？）

「アルテミス、どしたんだ？」

悩んでいるわたしに声をかけてきたのは、レイニー。
あれから一週間が経った。
先程、団長からの召集がかかり、騎士団の部屋に向かっている途中だった。
考えて、廊下を歩いていたわたしを追い越し、とおせんぼうをするように現れた彼に、わたしは足を止めた。

「いや、なんでもないよ。ただ、考え事」

その考え事も止められたのだが。

「なんでもないワケないじゃんかよー。悩み事か？」

レイが歩き出したので、わたしも踏み出す。
彼は心配そうにわたしの顔を覗き込む。

「大丈夫大丈夫、すぐ終わるから」
「そうかぁ…？　もし解決しないなら、おれに頼れよな？」

じゃっ、おっ先ー、と駆け出したレイ。
そうだ、チンタラ歩いてる場合じゃなかった。

「ちょっと待って！」

遅れると団長を怒らす事になる。
わたしもレイに便乗して走り出した。

＊＊＊＊＊

黒雲の騎士団の部屋にて。
走っても、既に部屋には団員達でいっぱいだ。
遅れたわたし達は団長からの叱りを受けたが、それだけだったのが幸いだ。
団の先輩方曰く、
「エンバシーは遅刻して、ラルクさんに怪我された」んだとか。
団長が時間に厳しいのはわかったし、団長がどれほど危険かも一緒にわかった。

「今回の任務は、団のメンバー全員がするものだ」

ラルク団長から聞かされた仕事は、このようなものだった。
しかも遠征。
フルメンバーも遠征も未経験だったわたし。

どんな内容なのだろうか、とわくわくもしたし、緊張もした。

「今回は、湊町ウィズから船で、サーサリー大陸へ向かう。船着き場に着いた後、アルス村へと徒歩で向かう。その村では最近、魔物からの災害を受けて困っているらしいんだ。そこでアタイらが食物等の支給品を届けると共に、災害の元となっているモンスターを倒すワケだ。向こうで過ごすのは、大体5日を目安とする。明日朝早く国を出て、ウィズに向かうからな。寝坊した奴は置いてくのでそこは覚悟するように。特にエンバシー」

「いぃっ？」

黙って団長の話を聞いていたわたし達。

だが、指名されたエンバシーさん、すっとんきょうな声をあげた。

「お前が特に気を付けろよな」

「へいへい……」

厳しい団長から釘を刺されたエンバシーさん。

やる気のない、適当に返事をする。

それもそうだよなぁ、と苦笑いをするわたし達メンバー。そしたら

「笑い事じゃないだろ、アルテミスもレイニーも」

「えっ！？」

「嘘っ！？」

わたしと隣の彼も！？

予想外。でも言われて、ああ…と納得するしかない。

というかさっきしたばかりだ、遅刻を。

「アルちゃん、レイ君、頑張ろーぜ」

仲間を見つけた安心感か、エンバシーさん、ふにゃっと笑ってきた。
歓迎しているかの如く。
いい先輩ではあるが、正直、一緒の扱いから早く逃げたいかも…。
メンバー達に笑われる対象となったのであった。

＊＊＊＊＊

その夜。明日が初のジャンルの任務でもあるから、寝付けない。
でもそれだけじゃない。理由は。

（ムーンは一体何者なのか……）

もう月日も経っていた。
だが彼だけは変わらない。謎がまだ、彼には残っているから。

（いつか知りたい…でもいつわかるのか……）

頭の中はいろいろと悩みの種が増える。
だが、徐々に睡魔は襲ってくる。
種の存在を消せないが、忘れる事は出来た。
明日からの任務、わたしはうまく果たせるだろうか。

第十六章

―――――――――
深まる疑い
―――――――――

黒雲の騎士団の朝は早かった。

「じゃあ男共はこの荷物を上手く運べ」

「えぇっ！？」

騎士団の部屋にて。村の為に持っていく食物等の援助物があった。
ラルク団長が指名された彼らの心境を知ってか知らずか荒い命令。
何故なら、荷物が多すぎるのだ。ただでさえ個人の着替え等の荷物も多いというのに。

「女共はあれで充分だ」

「わかりました」

「えーっ！？　ラルクちゃん差がありすぎだし！！」

わたし達が持つのは、片手で持てる軽そうな麻の手提げバッグ。
中には、薬草や包帯等の医療道具。

「ああ？　だったらなんだ、赤炎に仕事任せてお前ら給料無しにするぞ」

「ごめんなさいラルク団長」

男より怖い脅しにより、団長の勝ち。エンバシーさん早いよ、降参するの…。
嘆く男性陣そっちのけ、わたし達女性陣もバッグを両手に持つ。あ、軽い。

「あ、そうそう」

と思い出したように団長が口を開く。

「言い忘れたが馬車は使わないぞ」
「いぃっ!?」
「あたり前だろうが。ウィズまで半日もかかりゃしない。馬車なんざ使ったら街の人に世話を任せるしかないだろ」

正論。だが重い荷物を任された彼らにとってはつらい話だった。

「って、おっちゃん強っ!?」
「?」

レイの驚く声にわたしは振り向いた。

「おおー、さすがだな、ムーン・タリアス」

幼い頃見た絵本、異国の冬の赤い老人のように、ムーンが重そうな大きい麻袋を背負っていた。
まぁ…もともと個人荷物が誰よりも少ない彼だ。それに、苦の表情もないし。いつもどおりの顔。
ラルク団長は満足げな顔になる。

「男共！　お前達の方が人数多いんだからな。交代で荷物を運べ。持たない奴が、護衛をするんだぞ！　わかったか！？」
「はい！！」

ムーンの頑張りに影響され、男性達に気合いが入ったようだ。
そうして我々は、サンポリア王国から湊町ウィズへと向かった。

＊＊＊＊＊

久しぶりの故郷。幼馴染みや近所の人達と話をしたいが、仕事故に挨拶のみで済ませた。
ウィズ一番の大きな船に乗せてもらい、騎士団一同はサーサリー大陸へ進む。

「あー重かったぁ…」
「お疲れ様、レイ」

巨大な帆をなびかせる為にあるポール。わたしとレイはそこを背もたれに座り、潮風に当たっていた。
他のメンバーも何人か、特に男性、重い荷物から解放されて伸びをしたり、楽しそうに話したりしている光景が見られる。

「あれ？　ムーンは？」
「ああ、おっちゃんなら中で荷物確認。団長とエンバシーさんと一緒に」

仕事熱心だよなー、とレイは異様なものを見ているように言う。
入団当初から、彼は真面目に仕事に取りかかっている。

目立ったミスもなく、エンバシーさんみたいに遅刻したりしない。
先輩方もそんな彼には喜ぶし、我々同期の新米達も彼を慕っている。

（皆、誰一人、彼の正体に疑問を持とうとしない…）

それとも、真面目に見せる事により、周りの人々にそういう気持ちを持たせないようにしてるのか。
あるいはわたしが考え過ぎなのか…。

「アルテミスー？」
「……？　何っ？」

我を忘れて考え込んでいたらしい。レイの声に慌てて答える。

「やっぱり悩み事かよー。おれが話聞くぞ？」

苦笑を浮かべ、彼はそう言ってくれる。
だが、わたしの問題に彼はあまり関わりがない、と言ったら悪いのだが。
彼にムーンの事を話しても解決に繋がるのだろうか。

「…大丈夫よ」
「大丈夫に見えないけど……」
「おーいバルナー！」

と、メンバーの声。
そちらを見ると、船の後方。
一人の同期が階段を駆け降り向かってきた。

「船の後ろに変な生き物がついてきてんだよ！」

「えっ？　何だよそれ！　見てぇ！！」

好奇心旺盛。相変わらず。レイはスッと立ち上がった。

「お前なら言うと思ったよ！　行こーぜ！！」

「おうよ！！」

と、わたし残して階段を駆け上がり、後方へと行ってしまった。

……ある意味、助かった。

「おいおい、走るなよお前らー」

船内から出てきたエンバシーさん。荷物確認が終わった模様。

多分団長にこき使われたのか、疲れた顔をしている。

「あ！　副団長！　変な生き物いるんですよ見ます！！？」

階段を上りきる前に、レイ達がエンバシーさんを見下ろし誘っている。

「マジか！　行く行くー！！」

と、レイ達を追いかける副団。

揃いも揃って子供である…。

「やれやれ……アルテミス・メリアーも呆れるだろ？」

「あ、はい……」

後からラルク団長、ムーンが出てきた。エンバシーさんとは対称的に平気な顔。

どうやらわたしに表情が出ていたようだ、言われてしまった。

「大体昼ぐらいには着けるはずだ。それまでのんびりすればいいさ」

と笑みを浮かべる。じゃあまた、と船首の方へ歩き出した団長。

…この場にいるのはわたしとムーン。

「……」

なんだこの雰囲気は…重く感じるのはわたしのせいか、それとも沈黙のせいか。

「おいレイ君!!　大丈夫か!?」

「ここで吐くんじゃないぞお前ー!!」

と後方で騒がしい声。レイが船酔いにあったのであろう事が聞こえる。

「…わたし、見に行ってくる」

「ああ…」

この場から逃げるための理由になった。

ムーンは一言、だが冷たくはない返事をしてくれた。

立ち上がり、後方に上がる為に階段を走る。

背後でムーンの視線を感じた。

（ムーンは悪い人じゃないのに…）

何を疑っていたのだろう。ムーンはムーンじゃないか。

今まで悩んでいたのが、馬鹿馬鹿しくなった。

「どうしたんですかー！？」

悩みの種を脳内から消し去った。今度はちゃんと、存在を消した。
忘れたのではなく。

「レイどうしたの！？」
「ああ、アルちゃん…なんかレイ君、気分悪いんだって……」

レイの介護が、忘却を手伝ってくれた。

＊＊＊＊＊

そして、サーサリー大陸南端の船着き場に到着。
また荷物を担いだりして歩くのだが、城からウィズより比べれば、
大体３０分くらいで村に到着。
アルス村。森に囲まれた村。
というか、船着き場からここまでの道は森の中にある。

「うっわぁ……ひでぇなぁ……」

レイの第一声はまさに村の状況を物語る。
民家がいくつか半壊している。
木々も折れて横たわっている。
文字通り災害の傷跡が、アルス村にはあった。

「木材や工具を持ってきて正解だったな……」
「そうだね…」

メンバーが持ってきている荷物を見渡し、呟く団長。
その呟きに答えるエンバシーさん。深刻な表情。
まずは村長へ挨拶をしに向かった。
ラルク団長の予測通り、太陽は丁度真上にあった。

＊＊＊＊＊

村長は初老の男性だった。
団長が代表で挨拶、村長は我々を歓迎してくれた。
村長から話を聞くと、災害の原因は魔物だけではないという。
最近、この辺りの森を陣取る盗賊も出没するようになったんだとか。

村長からの頼みは、主に村の復興。
作業中に魔物または盗賊が現れたのであれば、退治をしてほしい、
と付け足しされた。

「まぁ…何が来ようが、アタイ達は大丈夫です。必ず村をお守りしますよ」

と滅多に聞けない敬語の団長。女性らしく聞こえる。
村長は感謝の言葉を述べた。

＊＊＊＊＊

そして始まった復興作業。
男性達は壊れた民家の壁や屋根等を修理。
女性達は怪我人に医療品を配る。
また、この村は、各地から食べ物や店に並べる物を仕入れるようだ。
仕入れる為に現地に赴く者が怪我をしており、それが不可能となっている。
さらに魔物や盗賊達が荒らし、食べ物を奪っていくのだから大変な状況。
持ってきた食物を、餓えた人々に配っていく。
そんな時だった。

「きゃあ――――!!!」

子供の悲鳴。
わたしと女性先輩とで食べ物配りをしている時。悲鳴のした方を見ると、森から小さい獅子の魔物が次々と現れた。
泣きながら必死にこちらに逃げてくる幼女。

「わたしが行きます!!」
「え、ちょっとアルちゃん!!」

怯え逃げ出す村人達とは対称的に、わたしは魔物へと立ち向かった。
先輩の呼び掛けを無視して。
見たところ、五匹くらいか。それにしても、大型犬並の大きさだ。
本では、獅子は成人身長平均を越すか越さないかの全長だというが。

「えいやっ!!!」

まず右手に片手剣。逆手に持ち、近い小獅子の胴体を突き刺し、すぐに抜く。

そこから血が溢れ、痛みに倒れ、その場でバタバタと暴れる小獅子。
それに、残り四匹の獅子の勢いが収まり、わたしを警戒し始めた。
グルルゥ…と唸り声。牙を剥き出しにする魔物達。
左手が、もう片手剣の柄に手を置いた時だった。

「おらよっ！！」

鞭が一匹を捕らえ、さらにナイフの嵐がそいつに降り注ぐ。
体にたくさん刺さったナイフ、小獅子は逃げようとするが、鞭がヤツを逃がさない。

「はっ！！！」

エンバシーさんが素早く、一瞬で何回も切り裂き、その小獅子は断末魔の声をあげて倒れた。

「てりゃあああああっ！！！」

鎖に繋がった円型の刃物。
残り二匹に傷を負わせ、さらに鎖がまとめてヤツらを捕らえる。

「大丈夫かアルテミス！」
「皆さん、無事ですか！？」

と、鞭を持ったままのレイ、鎖を持ちこの場の人物の安否を確認するラルク団長。
それにしても団長、あなたは敬語を使った方が良い、と思ったわたしはどうすればいいですか…。

「ラルクさん、アルちゃんが先制してくれましたから、村人に怪我

人はいません」

と、先輩が状況説明。団長はそれを聞き

「わかった」と短く答え、

「エンバシー、レイニー、今の内に息の根を止めておけ」

「はい」

瀕死状態の小獅子の処理を、男二人に任せた。

「どうやら、食べ物の匂いを嗅ぎ付けて来たんだろうな。でも、皆無事なら問題ない、よくやったぞアルテミス」

「はい。ありがとうございます」

団長に誉められ、わたしは頭を下げた。

すると、あの幼女がパタパタと駆け寄ってきた。

「あ…ありがと、お姉ちゃん…」

おずおずと礼を言ってきた。

わたしは怖がらせないように、笑顔で

「どういたしまして」と答えた。

＊＊＊＊＊

時間が経つのは早いもので、もう辺りは夕日に照らされていた。

それにより団長から作業終了の合図、明日に持ち越しである。

わたし達騎士団は宿に泊まれば良いのだが、アルス村のはそれほど

大きな宿屋ではない。

「よし、アタイが部屋割りを決める。今日よく働いた奴が、宿屋に泊まれるぞ。名前を呼ばれなかった奴は、他の民家のとこにお願いしに行くか、野宿でもするんだな」

「えー！？」

団長らしい話、だが新米達は愕然とした。

わたしももちろん驚いたが、その心配はなかった。

＊＊＊＊＊

「あのぉ……団長」

「なんだ？　レイニー・バルナ」

「どうして女性陣皆が宿屋なんですか…？」

「女を一人にさせるというのか、こんな危険な世の中だというのに」

「そ、そうですよねぇアハハ…」

レイの弱い笑い声が聞こえる宿屋の受付ロビー。と言える程広いワケではないが。

宿屋に泊まるメンバー、まず団長。

今日魔物討伐に貢献したエンバシーさんとレイ、それとわたし。

で、誰よりも働いたムーン。

そして、女性先輩方全員。

「この人数でお願いします」

「はいよ。それにしても、いいのかい？　他の騎士達も泊めなくて。あたしなら床に敷く布団も用意するよ」

受付を済ませようとする団長。
女将のおばさんは、多分、外から聞こえる嘆きの声を聞いたのか。
団長に全員宿泊を勧めるが、

「大丈夫ですよ、あいつら、サンポリア一死なない連中ですから」
（えっ！？）

ラルク団長がそう微笑んで言うのを見てしまったわたし。どこか黒い雰囲気を感じた。
見なかった事にしようううんそうしよう……視界から団長を外す。
ってかレイもエンバシーさんも、わたしと同じ行動してるし。

「そうかい。たくましいんだね、あんた達は」
「それだけが取り柄ですから」

女将さんも笑顔になり、安心した様子。
女将さん…団長の言葉をもう少し疑った方がいいと思う、とわたしは野宿組になった彼らに同情した。

＊＊＊＊＊

そして夜の時間。
宿屋側が用意してくれた食事を済ませ、風呂の支度。
わたし達女性陣が先に風呂を済ませ、後に男性陣（三人だが）。

「じゃあ、忘れ物ないかチェックしてくれ」
「はーい」

普段はポニーテールの団長、今は長い髪を揺らし、わたしに命令。
そして先輩方と退散。
寝間着代わりに、入団試験当日に着てきた袖無しシャツと短パン姿のわたし。
確認を終え、最後に風呂場を出て、頭をタオルで懸命に拭きながら部屋に戻ろうとした時だ。

「あ、やっべ！」

廊下でそう焦る声を出すレイと出会す。
エンバシーさんもいた。彼らは洗面用具を持っていたから、多分団長に知らされたのだろう、風呂が終わった事を。

「どうしたの？」
「あ！　丁度良かったぁ！！　アルテミスー！！」

と、救いを求める顔でこちらに迫ってきた彼。
その勢いに思わず二、三歩後ずさってしまった。

「アルテミス、部屋からおれのタオル持ってきてくれよぉ！」
「はぁっ？」

なんでたかがタオルをわたしに頼む。自分で持ってきなさいよと言ったが、

「部屋戻るの面倒だしよぉ、それに団長が３０分以内に風呂を済ませろって言うから時間が惜しいんだよー！！」

な、何故に時間制限……団長、何故。わたし達は無制限な気がし

たが。
多分、団長なりのマナーかもしれない。宿屋側に負担をかけぬように。
今日を振り返ってみると、普段団長は女性らしくなくとも、礼儀正しい騎士であると認識出来る。

「わかった…持ってくるわよ」
「サンキューアルテミスー！！　あ、部屋は奥だからな、間違えるなよ！！」
「はいはい」

注意も付け足され、わたし達はすれ違ったが

「あれ？」

と、気付いた。

「エンバシーさん、ムーンはどうしたんですか？」
「ん？　ああ」
「って副団長！　時間ないのにー！！」

背中に呼び掛ければ、案の定振り向いてくれた。
そんな彼にレイが騒ぎ出す。

「ムーン君なら、一人で入るって言うから、一緒じゃないよ。ってか今どこにいるのかわかんないんだよねー……武具は部屋にあったけど」
「おっちゃんの事はいいからさっさと行こーよ副団長ー！！」

とうとう敬語もなくなったレイ。無理矢理エンバシーさんを引っ張

り促す。
エンバシーさんがじゃあね、と苦笑いで手を振ってくれた。
タオル忘れんなよー！という声を最後に、二人は風呂場へと姿を消した。

「……はぁ…」

どうしてあの二人、宿に泊まれたんだっけ、と思わず確認したくなる緊張感の無さ。

＊＊＊＊＊

（この部屋か…）

小さい宿屋でも、ベッドはちゃんとある。三つ。この部屋は三人部屋か、とわたしは中に入り見渡す。
そして、レイの防具が置かれているベッドを見つけ、リュックサックのような個人荷物を開ければ、真っ白いバスタオルが出てきた。

（エンバシーさんとムーンはキチンと整頓しているのに…）

と、このベッドとは別の二つを見た。
エンバシーさんは意外にも荷物をきれいにまとめている。
ムーンは当たり前にそうだった。
だが、こいつはベッド上に小道具が散乱しており、呆れてしまう。

（エンバシーさん達に整頓講座でも受ければいいわ…）

と、どうでもいい願いをし、タオルを抱えて部屋を出ようと思ったが、

「…？」

ドアに近いムーンのベッド。ベッドサイド、床に置かれている武具。それらの側に、見覚えのあるものがあった。

「！」

それは、わたしの写真入れペンダント。
いつの間に、とわたしは自分の首に下げているものを確認し、取り出したが

（あれ…ある……）

同じデザインのペンダント。そして修道女が忘れたクロス。
何故ムーンが同じペンダントを持っているのか。
わたしはそのペンダントの中身を知りたくて、ムーンのそれを手に取った。
恐る恐る、ペンダントを開けてみた。そこには

「え…？」

母さんの写真だった。顔写真。
背景らしき自然の風景があるので、一枚の写真からこれだけを切り抜いて入れたのであろう、と推理した。
微笑む母。わたしの持つ写真と比べた。
わずかだが、わたしのペンダントの写真よりも、こっちの方が若い。

（どうしてムーンが持っているの！？）

まず浮かぶ疑問がそこだった。
船上で忘れていたはずの種が、またまかれていく。

（いや、まさか、でも……）

まさか、ムーンが、父？
でも父さんは両手剣の使い手だと聞く、何故長剣を使うのか。
それに、父は追われている身である。何故サンポリア騎士団に入団し直した。

（ありえない……でもムーンはこれを持っている。どうして……）

もし、ムーンが実の父親だったら。
ならば何故試験当日に……と同じ疑問を抱える。
でも、不快ではない。思ったのだ。

（あの人が父さんだったらどんなに嬉しいのか……）

親のような存在を持つムーン。
交流は薄くとも、皆から信頼されている。
そんな人間が父だったら、誰でも誇りたくなるものだった。

（直接、ムーンに聞いてみないと…）

彼のペンダントを元の位置に置き、わたしは部屋を出た。
レイにタオルを届けなくては。

第十七章

抱える疑問
奇襲

アルス村に到着し、復興作業を始めてから5日が経った。
仕事は順調に進み、途中、襲い掛かってくる小獅子にも、難なく返り討ちにする事もあった。
また、このように協力する事が、団員達の結束力を更に高めたのではないか、とわたしは思う。
だが……わたしはこれで終わりに出来ない悩みがある。
この5日間、ずっと気掛かりだったのだから。

「屋根の修復、終わりました」
「いよーし！　お疲れムーン君！」

最後の民家の屋根から飛び降り、綺麗に着地をするムーン。
仕事ぶりを見守っていたエンバシーさんは、彼を誉めていた。
わたしは、彼が何故、わたしの母の写真を持っているのかが、どうしても知りたかった。
でも、この忙しさによるすれ違いの多さ、またはわたしが彼に聞く事での抵抗があった故。
今までずっと、疑問のままでいたのであった。

「アルちゃん？　どしたの？」
「えっ？」

わたしの目の前で、エンバシーさんの手が振られる。
どうやらボーッとしていたようだ、わたしは。
ムーンもこちらの様子を見に寄ってきた。

「あ、すみません…」
「副団長……彼女は疲れているのかもしれません…」
「うーん……だよなぁ。ずっと労働だったし、当然か」

ムーンが推測を述べ、エンバシーさんはそれに納得の苦笑を見せてきた。
そうやって、わたしを気遣っている言動、余計に聞く事が出来ない。

「でも、さっき修理終わったから、ラルクちゃんに報告すればサンポリアに帰れるぞ」
「おお、終わったのか、お前達」

と、ナイスタイミングで団長がこちらにやってきた。
……？　何故、武器を構えている。
ふと村を見渡すと、持ってきた復興作業用荷物をまとめ終えた他の団員達も、武器を取り出していた。

「ほら、その工具をさっさと片付けて、最後の仕上げをするぞ」
「仕上げ？」
「根源退治だ」

ラルク団長は楽しそうな、でもニヤリとした笑顔を浮かべた。

＊＊＊＊＊

「とりゃあああああっ！！！」

森の中、たくさんの魔物の血で塗られた草木がいくつかある。

「おらぁっ！！」

こんな自然豊かな森に、小獅子の群れがいると言うのだから。
また村が襲われぬように、わたし達、黒雲の騎士団は小獅子退治を現在遂行中。

「ふぅ……」

不意打ちをされても、ヘマさえしなきゃ対応が出来た。
足元には、わたしの剣により深傷を負い、多量出血で死んだ小獅子が横たわっている。が

「？」

ガサガサと音がした。背後から。振り向いたと同時に、既に牙を向けてきた小獅子が。
まずいとは思ったが、出来る限り両手剣を構えたら

「はぁっ！！！」

横から、小獅子に斬りかかってきたムーン。
わたしはただ驚くだけで動けず。

その一撃だけで地面に倒れた小獅子は、ムーンがしっかり剣先で急所を刺した事で、絶命した。

「大丈夫か？」
「あ、ありがと…」

うまく気持ちがこもらず、戸惑った礼となってしまった。

「私の方はもう片付けた。団長もそろそろ引き上げろと言っていたぞ」
「わ、わかった…」

ムーンがすたすたと村へ戻ろうとしていた。
わたしも武器をしまい、彼のあとを追う。

「……妙だと思わないか？」
「えっ？」

歩いた状態のまま、ムーンがそう尋ねてきた。
何の事か、問い返そうとしたら、ムーンは続けて言う。

「これほどの魔物の数があると言うのに、親玉が見当たらない」
「……？」
「あの小獅子達は、群れで生活をする。その群れには必ず、小獅子のリーダーが存在するんだ」
「そうなの…？」

知らない知識、彼は知っている。
やはり、彼はなんでも知っているように思える。

「群れない小獅子は見た事がないからな……」

そう呟いたきり、わたし達は無言となる。

そして、森を出れば、既に村では仲間達が待っていた。

＊＊＊＊＊

「本当に、ありがとうございました。いくらお礼を言っても足りないくらい、我々はあなた方に感謝しておりますぞ」

村長が代表し、わたし達に感謝を述べる。

「いえ、私達は騎士団です。人々の為に尽くす事が、我々の仕事です。皆さんが喜んでくれるだけでも、私達は嬉しく思います」

団長が村長にそう答える。

確かに、団長が言った言葉に嘘はないし、わたしも同じ意見を言えると思う。

「これは、少ないですが…」

と、村長はジャラジャラと音が鳴っている両手で持つサイズの袋、さらに薬草がたくさん詰まった同じ袋を団長に渡した。

「ありがとうございます。また、何かありましたら、いつでもお手紙を下さい」

団長は受け取り、微笑んだ。

そして、村人達に見送られながら、来た時よりも軽くなった荷物を抱えて、我々は村をあとにした。

＊＊＊＊＊

森の中を歩くわたし達。
ちゃんと人工で作られた平坦の道があるので、迷う事なく船着き場へ行ける。

「いやぁー。やっと終わったぜー」

と、隣で歩くレイニー。伸びをし、解放された様子。
片手には工具箱がある。
他のメンバーも、気楽な表情であった。
また、持ってきた荷物等は、ほとんどが作業で消えたので、特に男性陣が嬉しそうだ。
ムーンはいつもと変わらないが。

「おい、ヘラヘラしてんじゃないぞ。まだ任務は終わってないんだからな」

と、そのヘラヘラ組をしかる団長。
はーい、と返事はするも、気が引き締まってない。よっぽど嬉しいらしい、大荷物がない事が。

「うぉ？」
「？」

不意にエンバシーさんがすっとんきょうな声をあげた。
それに足を止める我々一同。

「おい、ラルクちゃん…」

と、エンバシーさんが指差す。前方を。
遠くには、道幅の広いこの真ん中で、うずくまっている男がいた。
見ただけだと、苦しそうだった。
我々は騎士団、人が困っているのは見捨てない。団長をはじめ、何人か走り出していた。

「わたしが行きます」
「えっ？」

団長とエンバシーさん達が既に駆け出していたが、わたしは彼らを追い越し、すぐにその人に駆け寄った。

「大丈夫ですか？　どうしましたか？」

片膝を地面につき、うつむいた男性。
服装があまり見慣れない、軽そうなもの。アルス村の人ではなさそうだが、船着き場から来た人だろうか。

「う…うぅ……」

苦しそうにうめく男。わたしはさっきから見えない表情を見ようとし、同じような姿勢になる。
丁度、エンバシーさんと団長が追い付いた。

「た……頼む…」

と、懇願する声。聞き取りにくい、わたしは懸命に耳を傾けたが、

「死んでくれよ」

ハッキリと。こちらに不敵な笑みを見せて言った。瞬間

「キヒャヒャヒャヒャ！！！」
「おらおらおら――――――！！！！！」
「！？」

道の両脇の森から、この男性と同じような軽装の人間がわらわらと現れた。手には剣や斧等、魔物ならともかく人間に向けてはならない物を持っていた。

「罠か…！」
「おい！　お前ら！！　気絶させるか峰打ちで済ませろ！！　殺すんじゃないぞ！！！」

しかも、人数が多い。我々騎士団と同じか、あるいは上回るか。まだ追い付いてこれなかった後ろの方でも、敵が仲間達に襲いいかかろうとしていた。
わたしはラルク団長の命令を守り、鞘に収まったままで両手剣を構えた。
こんな状況でも、団長は人間に殺生はしないようだ。

「このぉっ！！」
「ぐっ！」

まずは、目の前にいるこのムカつく男。

頭上から思い切り両手を振り下ろし、相手の頭を殴った。
力任せにやったら、ぱたりと倒れた。気絶したようだ。

「ったく！」
「ぐわっ！！」

エンバシーさんも鞘に入れたまま剣を振り回す。
頭や顔の横を叩けば、敵達は次々と倒れていく。

「うぉぉぉぉぉりゃあああぁぁぁぁぁぁ―――――――――！！！！！！」

団長は、円型刃物ではなく、重りがある方を鎖で振り回した。

「ぐがぁっ！！」
「うぎゃあああ！！」

重りは勢いよく、数多き敵に当たる。

「きゃああっ！！」
「うわあっ！！」
「！？」

後方で、悲鳴。わたし達はそちらを見るよりも先に、身体が動いた。

「こ、の、やろ―――――！！！！」

女の先輩に刃を下ろそうとした奴の脇腹に飛び蹴りを食らわせた。
その勢いで、わたしとそいつは地面を転がるが、わたしは受け身をとりすぐに立つ。

蹴りを受けた男は倒れたまま。

「アルちゃん！」
「大丈夫ですか！？　先輩！　あっ！？」

先輩を見ようとしたら、先輩の背後からまた襲いかかる敵。だが

「おいっ！！」
「ぐぉっ！」

奴の横から小さな針が飛んできて、首に刺さった。
そして男はそのままゆっくり倒れ、眠ってしまった。

「不意打ちとか、人間なってねぇな…」
「レイ…」

それは、レイの攻撃だった。あの針には何か睡眠か麻酔が作用するのだろうか。と考える暇はない。

「っ！！」

まだまだ襲い掛かる集団。
わたしもレイも、先輩もそれぞれに対抗する。
戦いながら辺りを見回すと、今ここは、騎士団と謎の集団による争いが繰り広げられている。

「くう…！」

今、相手しているこの男。片手剣。
奴とつばぜり合いとなった。

「クソがぁ…！！」

と、相手は押してくる。なんとか押し返すわたし。
相手はこちらを睨んでいる。尋常ではない、憎むような目で。
ふと、わたしの脳裏に何かがよぎる。

（あれ…こいつ、どこかで……）

そう、相手には見覚えがあった。
どこで会ったのだろうか。だが今は、記憶よりもこちらの事に脳を動かさなければならない。

「ていっ！！」

相手を押しながら、わたしは後ろにステップ。また距離を縮められる前に

「えいっ！！」

素早く背後に回り、相手の頭を頂点から殴る。
それにより相手は倒れ、気絶した。

（一体何人いるのよ！？）

周りを見回すと、まだそれぞれに争いがある。
この数でも、この騎士団だったら対応が出来るはずだが、急襲となると話が変わる。
それが手伝ってしまい、まだ優勢になってないか、五分五分の状態。
剣の音、殴る音、争い荒げる声が響く。

そしてまた、新たな敵が襲い掛かる。

（相手が人間じゃなかったらどんなに楽か…）

今度は両手に片手斧を持った相手。
わたしはそう心内で愚痴をこぼし、必死に対抗する。その時だった

「うおおおおおおおぉっ！！！！！！」

これも聞き覚えのある声が耳に入る。とても低い、大きな体格を連想させる声音。
今の相手とはつばぜり合いの状態。わたしは横目で見てしまった。

「――――――！！！？？」

ムーンだ。ムーンと戦っていた敵は、斧使い。
その斧の刃が、ムーンの脇腹を狙い、斬りつけた。
血が流れる部分を、片方の手で押さえるムーン。
よろめきながらも立とうとする。だが、相手は彼を蹴り、ムーンは後ろへと吹っ飛ぶ。
その拍子に

（あ…！！）

わたしも持っている同じ形のペンダントが、紐に限界があったのか切れて、宙を舞った。

「邪魔！！」
「がっ！」

わたしは相手を思い切り蹴り飛ばし、駆け出した。ペンダントの方へ。
誰かの手に渡したくない、踏ませたくない、拾わせたくない。
どうしてか必死になる。

「！！」

斧使いをジャンプで飛び越え、ペンダントが地面に落ちる前にキャッチ。
そして、受け身をとりながらゴロゴロと地面を転がった。

「ムーン！！」

わたしはすぐに、倒れたままの彼に駆け寄ろうと立ち上がった。が

（！　アイツ……！？）

斧使いを見て、わたしは驚愕した。
斧使いは、あの入団試験日、第二次試験でチームを組んだあの大男だった。
あの時とは随分と服装が変わっていた。連中同様に軽装…。

「！？」

わたしを見るなり、大男はニヤリと笑みを浮かべた。そして、もう用がない、と言うかのように、森の中へと姿を消して行く。

（あの男…ムーンを……！！）

仲間を傷つけられた悔しさが募る。

「待て――――――!!!!!」

団長のような言葉使いの荒い叫びをあげ、わたしは奴を追いかけた。
そうだ、あの集団の何人かに見覚えがあってもおかしくない。奴らもまた、あの時に組んだメンバーだったのだから。
わたしに恨みがあるのならば、わたしを狙えばいいのに。

（許せない…!!）

仲間は関係ないじゃないか！
わたしは奴らに対して、殺意しか沸かなかった。
気付けば鞘に入ったままの剣2つを、素早くベルトに引っ掛け、そして今度は真剣として、武器を構えた。

「アルテミス！　どこ行くんだよ!?」

レイの声が背後から聞こえたが、わたしは構わず、この視界の悪い森の中を駆けていた。
まだ大男の背が見える。体格の割には足が速い……否、わたしがこの森に慣れてないからだ。

（絶対に許さない!!）

左手には、柄と共にペンダントも握られたままだった。
それでも構わず、わたしは奴を追い掛けた。

第十八章

―――――――
恨む大男と
恨まれたわたし
そして新手の…
―――――――

森の木々の背丈は、それほど高くはない。
同じ背丈の人間はまずいないだろう。
だが、走り続けて、奥に進むにつれて茂みが多くなる。
それでもわたしは走り続けた。
憎き相手の背を見つめ、追い付く為にも。

「待てぇ！！　待てって…言ってるでしょ！？」

慣れない獣道は、足に自信があるわたしでも戸惑う場所。息も切れてしまうのだから、スピードもいつもより遅く感じる。
それでも、両手の剣を握り直す。大男を視界から消さないようにする。

（…？）

大男より前の景色。
徐々に拓けてくる草木達。
森を抜けたと同時に、まばゆい光に目を保護し、立ち止まった。

…ゆっくりと目を開ける。ここは木々が立たぬ広場のようだった。
広場には、距離をとってこちらを見てくる大男と、仲間らしい男らがたくさんいた。
騎士団の人数と同じくらいだ。相手達は様々な風貌、武器を持っていた。

「久しぶりだな、メリアー」
「…お前、どういうつもりなんだ」

思わず言葉が汚くなってしまうが、それは抑えられない怒りによるもの。
わたしは武器を構える前に、ムーンのペンダントを、ベルトに提げている小物入れに保管した。

「当然だろ。お前を殺す為だ」

案の定、やはり大男の考えはそれだった。だったら

「だったらなんでムーン達に刃を向けた！　皆は関係ないじゃないか！！」

何故彼らに襲いかかったのか。
わたしはそれが悔しくて仕方がない。

「関係あるだろ。お前の大事な仲間なんだからよ」
「！？」
「俺を侮辱したお前の仲間も同罪だ。ま、本来はお前をここに誘き出す為にした事だけどな」

ガハハハハハッ！　大男独特の笑い声が森に響く。

大男の仲間らも一緒になって笑う。嘲笑。
…あれから何にも進歩してない。ウザい。
殺意が更に込み上がってくる。

「ふざけるな！！！」
「…？」

わたしの一声に奴らの笑いが収まる。

「そんなのただの逆恨みだ！！　お前が騎士道に背くからこういう事になったんだろ！？」
「…ほう？　俺の人生も知らないくせに、よく言ってやがる」
「はぁ…？」

大男が鋭い眼光でわたしを睨んだ。

「お前がいなけりゃ、俺は騎士団に入り、家族に飯を食わせる事だって出来たんだ。それがなんだ？　お前が現れた事により、俺はこんな下らない盗賊をやらなきゃならなかった」

と、大男はあの後の『人生』とやらを語り出した。
家族がありながら、何故仲間を思う気持ちがないのか疑問に思う。
家族がいるだなんて嘘みたいだ。

「…？　盗賊…？」

ある単語を聞き逃さなかった。
アルス村でも聞いた『盗賊』。
…まさか

「ああそうだ。つい最近あの村で世話になったさ。そしたらお前らサンポリアの連中が来たからよ。そん時は復讐が出来ると知って大喜びさ！！」

また下品に笑い出す盗賊共。

アルス村を襲ったのはあの小獅子だけじゃない、こいつらだったんだ。

それを知れば、無論。

「いい加減にしろ！！！」

怒りは頂点に達した。

「お前らなんか生きる資格なんてない！！　わたしがお前らを…殺してやる！！！」

殺られるならば、立場なんて関係ない。

仲間を傷付け、関係のない村を己が欲望の為に襲った事も。

もはや死に等しい。報いる気がないならさせてやる…。

「殺れるのか？」

大男は余裕の笑みだ。

その笑顔…消してやろう。

わたしはジャンプの要領で、地面を蹴るようにスピードを出し、大男の目の前に接近。

「なっ…！？」

案の定、相手はひるんだ。わたしのスピードに。

「死ねぇ！！」

わたしは両手を振り上げ、縦斬りで大男の頭を狙おうとしたが

「おらよっ！」

「っ！？」

不意に横から蹴られ、わたしは草原の地面を転がった。

大男から距離が遠ざかる。

仰向けに向いて身体が止まったら、

「一人で何が出来るんだ！？」

「お前こそ死ねよ！」

立ち上がる前に、他の盗賊達に囲まれた。

起き上がりたいのに、足で蹴られたり、踏みつけられり。

わたしは両手の剣で懸命に防御する。

顔辺り防御が出来ても、腹や足はどうしても攻撃を受ける。

「どうやって殺せばいいすか？　親分」

「そうだなぁ…すぐに殺すのはつまらねぇ。生かす程度に斬りつけちまえ」

と、盗賊の長である大男と部下達の会話。

ふざけんじゃない…わたしは蹴られ続けてワケがわからなくなる。

「ふざけんじゃねぇっ！！！！！」

「うぉっ！？」

わたしの大声に周りの連中がビビる。瞬間。
わたしはすぐに立ち上がり、腕と共に剣を水平にすぐ構え

「黙れ糞野郎がぁぁぁぁぁ！！！」
「ぎゃあああああっ！！」
「うがぁぁぁあっ！！」
「うおおおおおおおっ！！！」

身体を軸にその場に勢いよく回転。
剣も周りに軌道を描き、その軌道上範囲にいた奴らの身体を斬りつけた。
わたしを散々痛め付けた奴らの悲鳴。
血が、辺りに散っていく。剣先や刃にも、同じ人間の血がついている。
回転の勢いが止み、わたしは辺りを見た。
傷つけられた輩は、倒れていたり、尻餅をついたり。

「ひぇぇ…お、お許しを……」
「オレ、まだ死にたくねぇんだ…！」

命乞いの声がそれぞれに聞こえる。それぞれの傷口に血を流しながら。

「…それが人を襲う人間のする口か？」

自覚はしてる。段々口調が団長に近くなってる事は。
でも、いまのわたしじゃ普段通りに喋れそうにない。
わたしは距離の近い盗賊に歩み寄った。そういえばまだ、大男の周りには他に仲間がいるというのに。
わたしを恐れて助けにも行かないとは……いくら盗賊でも、仲間意

識はあるだろうに。

「ひ……ひぃっ…」

わたしを見上げ、怯える一人の男。
嗚呼…こいつも確か、入団式にいた奴だ。わたしの記憶力は負の関連程よく覚えているらしい。
こいつは丁度、腹の上真横に傷があった。

「お前らが犯した罪は大きい…誰かがお前らを許しても、わたしは許さない！！！」

わたしは剣と剣を合わせる。見た目は一本の剣。
だが、これで振り上げ、斬りつければ通常より攻撃力はある。
わたしは、こいつに止めを刺そうと振り上げた。
その時だった。

「やめろ！！」

ガサリッ、と茂みから現れた声。
音の方向を見ると、

「アルテミス！　団長が言ってただろ！？　人を殺すのはやめろって！！！」

レイニーだった。
わたしを必死に捜してくれたのか、息を切らしていた。
わたしの為に来てくれた。それは嬉しい。だが、彼の言葉にわたしは驚く。

「で、でもレイ…こいつらは」
「おー！　ボウズ、久しぶりだなぁ！！　お前みたいな恩を仇で返すクソガキは是非とも殺しがいがあるってもんだぁ！！！」
新しく加わった獲物に、別の意味喜ぶ大男の声。
「黙れ糞が！！！　お前にレイは殺させないぞ！！！」
思わず反抗するように、わたしは奴に言った。この口減らずが。少しは言葉よりも行動を出してみたらどうだ。
「…おっちゃんか……」
レイは冷静に、相手が誰かを分析した。
普段のレイだったら、昔の仲間、という事で再会を喜ぶだろうが。状況と、相手の素性を知っている時点、彼はそんな反応ではなかった。
「……アルテミス」
「？」
呼ばれ、レイを見た。腕をゆっくり降ろした。
レイは片手に丸い玉を持っていた。
それをレイは、目をつぶった瞬間、大男達の前にほおりこんだ。
まさか、とわたしは判断し、目をつぶった。
「うぉっ！？」
破裂するような音、盗賊達の短い悲鳴。
…数秒数えて、目を開ければ

「ぐおお…目が、見えねぇ…」
「くそぉ……ボウズ！　なんて真似をしやがる！！」

……どうやらレイが投げ込んだのは、お手製の閃光玉のようだった。
盗賊達は己の目を手で押さえ、視界に苦しんでいた。
レイに習って行動したのが正解だったようだ。

「アルテミス」
「……レイ…」

地面にうずくまっている盗賊達を避けながら、こちらに歩み寄ってきたレイニー。
わたしは、彼が助けに来た事が嬉しく、お礼を言おうと口を開きかけた時

「バカ野郎！！！」
「っ！？」

頭ごなしにそう怒鳴り込んできた。
わたしはわからなかった。なんで彼が怒っているのか。

「いくら悪い奴だからって、斬ればいいって話じゃないだろ！？
何考えてんだよ！！」
「え……」

真剣に怒る彼を初めて見た。
普段は怒られている彼なのに、信じられない。

「だって……あいつら、ムーンや、皆を……それに、あいつらはア

ルス村を襲った盗賊なんだよ…！？」

わたしはただ、悪い奴らが許せなかったから。ただそれだけだった。

でも

「……あのなぁ、アルテミス…」

と、レイは少し怒りを抑えて、言った。

「いくら悪い奴らでも、人を殺したら、その人が悪者になるんだ。だろ？」

「あ…」

その言葉に、わたしはやっと気がついた。

「おれ、馬鹿かもしんないけど、これだけは自信持って言えるよ…。物を盗んだり、仲間に傷を負わせるのも悪いけど、この世で一番悪いのは、自分と同じ人間を殺した人なんだぞ…？」

そう…誰だってわかる事。団長だって、争う前に言ったじゃないか。人間を殺したら、わたしはこいつらよりも悪になってしまう。わたしはこの事を、怒りで忘れてしまったのだ。

「ほう…ボウズ、お前もカッコいい事が言えるようになったんだな……」

「！！」

こうして話している間に、奴らの目が回復してしまったようだ。周りの連中も、傷をかばいながら立ち上がった。

レイとわたしは、互いに背を合わせるように、相手を見た。

わたしは、レイの言葉を守り、鞘に剣を納め、鞘が入ったまま、また武器を構えた。

「だが、俺はもう無くすものがない。悪者になっても構わないし、そもそも俺達を悪者にしたのは、お前らのせいだからな……」

大男達も、自分の武器を構えた。傷付いている相手もいる。
だが、人数的には不利である。
レイがいなかったら心細かったが、レイが来てくれても、状況は大差がない。
…死を覚悟して、挑むしかないようだ。わたしは、相手の出だしを待った。

「勝手に人のせいにするのか…貴様……」
「？」

またも現れた者。ガサリと森の音を立てて、姿を出したのは

「！？」

ムーンだった。身に付けているマントにより、見にくいが、脇腹の傷を抑えているようだ。
顔色は変えていないのに、彼は無理をしている事が伺える。
まさか……わたし達を助けにここまで来たの……？

「おお…この前はどうも、お仲間さんよ」
「……」

大男が憎む人間の一人の登場。彼はますますニヤニヤと笑う。

「……」
「どうした？　感動のあまり声も出ないってか？」
ククク…と嘲笑う声。胸糞悪い…こいつ、声帯に病気を負ってくれよ、とつくづく願う。
「アル」
「？」
「レイニー」
「ん…？」
急にわたし達に声をかけるムーン。
わたし達二人は、距離の離れた彼を見た。
「その場から動くな」
「？？？」
意味深な言葉を言い、ゆっくり、片膝を地面につけて低い姿勢をとった。
そして、空いてる手を前に出し、地面につける。
…何をする気か、まさか魔法を？
「おい！　あいつが何かする前に叩け！！　悪魔の娘は後だ！！」
「おう！！」
試験以来に聞く仲間への命令。リーダーらしくはなったが、こんな形で上達はしてほしくなかった。
仲間らも気合いの声、すぐにムーンへと駆け出した。
この距離とは言え、ムーンが早口ならば発動出来るだろうが。
大勢を一掃する詠唱ならば、長いに決まっている。彼と過ごしてそ

の知識は持っていた。
だが、わたしが考えていたような展開ではなかった。

「『スペルショート』！！」

聞いた事のない、言葉通り短い呪文。その瞬間、

「えっ…！？」

地震が起き、わたしは踏ん張れず倒れ、そうになったが。
レイがわたしを抱き止め、地面に倒れるのは防いだ。

「うおおおっ！？」

盗賊達が驚きの声をあげた。
奴らの地面が膨らんできた。
すると、地面の土から

「うわあああああああああああっ！！！！！！！！！」

たくさんのイバラが生え、盗賊達を次々と捕らえた。
それを避け、逃げようとしても、逃げた先にはまた生えてくる。そして捕まえる。
イバラのトゲはとても鋭そうだ。絡まれた奴らから点々と出血が現れている。

「助けてくれぇぇぇっ！！」

大男も弱音をあげ、ここで初めての悲鳴をあげた。
ざまぁみろ、わたしは思ったが同時に、殺しはしないだろうかと不

安になったが

「どうする？　助かりたいならば…一緒に連行する」
「はっ…誰が、お前なんかに…」
「……そうか…」

と、ムーンは立ち上がり、イバラ達をそのままにし、わたし達の元に歩み寄ってきた。
わたしは不安を思い、彼を見た。
するとムーンは、大丈夫、と一言。

「反省の色がないのなら、一生そのままでいろ…」
「はぁっ！？」
「お、親分！！　そんなの嫌っすよぉ！！」

生かさず殺さず、彼らには生き地獄を。
ムーンの考えはそれに当てはまる。
やはり彼も、相手が許せないのだが、対策は随分と大人だった。

「ムーンのおっちゃん、意外に意地悪だな……」

レイの呟きには同意してしまう。
対しムーンは何も返さず、ただ奴らを眺めていた。

「ムーン……今の呪文は」
「……ああ、あれか」
「すぺるしょおとってなんだ？」

わたしが聞こうとした事を、レイが先越して彼に聞いた。

「魔法力の消費を通常より多目にする代わり、魔法発動に必要な詠唱を向こうにする単語だ。団に入ってから、練習をしていたんだが……」

「え…？」

ふらり…と。スローのようにムーンが傾き、地面に倒れた。

「ムーン！？」

「おっちゃん！？」

わたし達はすぐに、協力をして彼の身体を起こそうとする。

仰向けにし、上体だけを起こした。

「大丈夫！？　ムーン！！」

「ああ…少し、無理をし過ぎたな…」

マントをめくり、脇腹傷を確認した。

押さえている手のホータイはもう赤く染まっており、その周りから服にも染みている。

防具の甲冑を避け、そこを狙った大男のレベルは高くなったようだが、本当に嬉しくない成長だった。

「とにかく手当てしねぇと！！　でもおれ…回復呪文なんか覚えてねぇし…」

「すまない…私も、先程ので…」

「そんな…！！」

唯一回復を使える彼も、出来ない一人となってしまった。

「あまり、短縮するものではないな…」

そう…彼がわたし達を助けたから、こうなってしまったのである。
どうして自分より仲間を優先するのか……彼の思いは充分にわかる。
だけど、わたしは彼に無理をしてほしくなかった。

「とりあえず薬草はあるから、それを傷に当てれば…」

と、レイが自分の荷物を探り出す。

「クソがぁ！！　さっさと降ろせぇ！！」

イバラに捕まれたままの連中はギャアギャア騒いでいる。
こっちは人の命かかってんのに、

「うっせぇ黙れ糞野郎が！！！！」
「……はい…」

団長の如くわたしは奴らを叱り飛ばした。
それにレイもムーンも驚いてしまった。

「アルテミス、お前怖いよ…」
「いいからその薬草を早くムーンに」
「え、あ、おっ…ああ！」

突っ込む暇もない。わたしは慌てるレイの手から薬草を奪う。
彼の手を外し、一枚ずつ、傷に貼り付けていた時、

「…？」

遠くの方でガサガサと音がした。それは丁度、傷全体に薬草を貼っ

た後

「なんだ…？」

レイもそれに気付き、音のする森を見た。
盗賊達も口々に、なんだ？、どうした？、と話し出した。
それは徐々に影が現れ、そしてとうとう森から姿を現した。

「っ！？」

ムーンが村で不審に思った疑問を、思い出した。
つまり、ムーンの言葉は当たっていた。

グルルルル…

村を襲った小獅子達には、グループのリーダーがいるはず。
そう…そのリーダー格とも言える、今までみた獅子よりも大きい獅子が登場したのだ。

「うわぁぁぁ！！　風獅子の親玉だぁぁ！！」
「おーい！！　俺達を助けてくれぇぇぇ！！」
「かぜしし？」

この土地にいるのだからか、どうやらあの魔物を知っているはず。
小獅子の二倍程あるだろう魔物。するとそいつは

ガアウッ！！！

片方の前足を横に振り、その先から刃を飛ばした。
飛ばした先には、ムーンが呼び出したイバラの根本。

直撃し、森の木のように育っていたイバラは次々と倒れていく。
地面に叩き付けられたのと、拍子にトゲが刺さった事に痛がる声をあげる盗賊達。

「なるほど…だから『かぜしし』か……」

と、レイも納得。あの魔物は…風の刃を飛ばせる魔物なのだ、とわたしも知った。
ムーンもさすがに良心があったのか、苦しみつつも魔法のイバラを解除した。
奴らからイバラが消え去る。

「逃げるぞ!!　お前達!!」
「おう!!」

大男の焦りは、仲間の気持ちもそうさせた。
しかし、それが誤りだった。

グルルルァッ!!!

森の中へ逃げていく大男達。
逃げるものを追い掛ける習性なのか、風獅子も獲物を追うべく森の中へと消えてしまった…。

「…あいつら……」
「構ってる暇ないわよ!　早く逃げましょ!　ムーンを村に連れていかないと!!」

今、傷を治せるのは、村の医者しかいない。
わたしはレイと協力し、ムーンの腕を自分の肩にかけて、ゆっくり

歩き出した。
そういえば……もう夕方になってしまうのか…。

＊＊＊＊＊

第十九章

―――――――――
危険な森の中で
―――――――――

景色が変わらない森の中。
足元だけは変わりつつある、足を踏み込ませるのを邪魔するように。

（どこまで行けたかしら…）

方角的にも、多分、間違いない、はずなのだが…。

「アルテミス……おれ達、迷ったのか？」

レイが嫌な事を言うものだから、わたしは違う、と強がる。
そう思い込んだら、負けるから。

「待て…」
「っ？」

ムーンが苦しげに声を絞り込む。
わたし達は立ち止まり、彼の声に耳を傾けた。

「風獅子かもしれない……あそこに隠れるぞ…」
「えぇっ？　あのライオンなんてどこにも…」

レイが見回すより先に、ガサガサと大きいものがこの場所を移動する音が聞こえてきた。
わたし達は彼の言葉に従い、葉が特に生い茂っている草むらへと移動。
近くの木にムーンを預けさせ、わたし達は姿勢を低くし、音の鳴る方を見た。

「！…」

やはり、風獅子だった。だが、わたしは驚きを隠せない。
それが声になりそうになったので、両手で口を覆い、それを抑え込んだ。

「ひ…ひでぇ……」

声音のないレイの呟き。わたしもそう言いたくなる。
風獅子はわたし達の居場所に気付かず、前を横切ろうとしているのだが。
風獅子の顔や口元、見えにくいが、前足は血で汚れているのだ。
明らか、凶行に及んだ後だ。
あの盗賊達がどうなったのか……想像してみると、もはや絶望的な結末しか描けない。

「……言ったみたいだな」

まだ声に色を宿せないレイが確認する。
風獅子の後ろ姿を見送り、危険が去った事を認知。
また、子供二人で協力し、傷負いし大人を補助しながら、村へと向かう。

…もう、方角がわからなくなってくる。空はオレンジから黒に染まりつつあるが故。
それでも、めげずに歩き続けた。

＊＊＊＊＊

本当に、道がわからなくなった。
夜になり、視界も見づらく、『危険』の単語しかない。
歩く先、暗くなって活発化した小さな蛇や大きな蛾の魔物らを相手にしていった。
小獅子より簡単に倒せるが、この争う音が『奴』に聞かれるのではないか、とヒヤヒヤしてしまう。
ムーンは本格的に苦しみを露にしていたが、うめき声をあげたりはしない…。
どうしてそこまで我慢が出来るのか、彼の精神力には本当に参る。

「アル……」
「っ？」

かすれた声がわたしを呼ぶ。
わたし達はすぐに足を止めた。

「チカラモ……覚えているか？」

チカラモ……ああ、試験の時、食べた木の実だ。
何故ここでその話が出るのか。それが今のムーンを救えるのだろうか…。

「おっちゃん何それ？」
「ベルト…小物……」
「小物入れね、ちょっと待って」

レイの問い掛けは後回しにし、単語しか発せなくなった彼のベルトを確認。
長剣、手の平サイズの皮の入れ物が提げてあり、わたしは小物入れに指を入れた。
彼の言葉通り、木の実が入っていて、それを取れるだけ取った。

「座る……木に……」
「わかった」

近くの樹木を背に、草っ原の地面に座らせた。
彼は口元を隠しながら、顔のホータイをほどく。最低限に。
しかも暗がり。目が慣れても彼の素顔はハッキリ見えない。
でも、チカラモの実を食べている、というのはわかった。
わたしは彼が何かに邪魔されぬよう、周りを見渡した。

「おい……アルテミス……！」
「なに……？」

レイニーが嬉しそうな声をあげ、わたしを呼んだ。でも声量は小さく。

「あれ……灯りが見えるぞ…！」
「えっ……！？」

レイが指差す場所を見ると、遠くにぼんやりと小さな輝き。
間違いない…村にたどり着いたんだ。

「おっちゃん、木の実食べなくても大丈夫だぞ…早く村に……」

と言い切る前に、嫌な予感を導く音が聞こえた。
自然の中を、誰かが音を揺らしている。否、何かが、だ。
そちらを振り向くと、鋭い目付きと目が合った。

「おい……嘘だろ…！？」

レイがぼやく。わたしもこれは夢でありたいと思うが、そう簡単にいけるなら苦労はしない。

ガルルルル……

魔物…風獅子のうなり声。
まだ飛びかかってくる様子はないが、どうすればいい。
立ち向かうか、それとも……。

「村には逃げ込むな」
「えっ！？」

今までずっとかすれていた声音が、力強くハッキリそう言った。
見ると、ムーンが立ち上がっていた。長剣を持って。

「村に逃げては、そこの人達がまた被害を受けるだけだ…」
「おっちゃん…」
「ムーン…」

自分の身よりも、大人数の命を守ろうとする彼。
しっかりと足は立っているが、やっぱりつらそうだ。

チカラモが満腹以外にどんな効果をもたらすか知らないが、少なくとも、ムーンをこのような状態にするならば良薬なのだろう。

「私達で、こいつを仕留めるぞ…」

ムーンの言葉には、自信が溢れているように思えた。
この風獅子一体でも、先程の攻撃、残虐さを見れば、とても強い事はわかる。
わたしはこいつと対峙する事に恐怖を持つ。
だが…ムーンがそう断言するならば、わたし達が協力して、こいつを倒せるかもしれない。

（いや、倒さなきゃいけないんだ）

気持ちを入れ直す。
ムーンが怪我しても地面に足を立たすなら。
わたしも、怪我とか死ぬの覚悟で立たせなくちゃ。
そもそも、騎士団や戦士は死と隣り合わせの者。
いちいち怖がっちゃ何も始まらないじゃないか。

「…わかった」

「マジかよ……こんなおっかねぇのと戦うなんて…」

わたしは両手に剣を一本ずつ、どんな状況にも対応出来るよう構えた。
レイは右手にムチを持ち、左手の指の間それぞれにナイフを挟む。
…どんな効力が仕組まれているのか。

「わたし達は騎士団よ。これくらい倒せなきゃクビになってもいいわよ」

余裕を持とう。言葉はいくら言ってもタダだ。
わたしに自信を持たせてくれるなら。

グルルル…

まだこちらを睨む風獅子。
森は、最悪の舞踏会になりそうだ。

第二十章

―――――――――
風獅子との戦い
恐ろしい刃
―――――――――

風獅子との距離はあるが、奴の脚力は高いと思う。
一回の飛び付きならば絶対にここまで行けると思う。
後ろには怪我をしているムーン。
隣やや前方にレイニー。
相手はまだうなり声を出している。…無闇に動けば攻撃は避けられ、反撃を食らうかもしれない。

ガウウッ！！！

相手が突っ込んできた、予想通りのジャンプ力。
わたしとレイは鏡のように、横っ跳びで避けた。

「ムーン！？」

すぐさま振り向く、確かムーンは木を背にしていたが

「おっちゃん何して…！？」

ムーンは避けず、長剣を盾に風獅子の爪を止めた。

押し合っている状態……今のムーンではその内押し負けられる。

「このぉっ！！！」

レイは風獅子の胴体に向かって、左手にあるナイフを投げ放った。
それを察した相手は、ムーンとの対立をやめて、真上に跳んだ。
何本か外したのか、わたしのところに飛んできたナイフ。
わたしの顔の横を通り過ぎる。…避けなくて正解だった。

「あいつは！？」
「奴は、数秒だが飛行が出来る。頭上に気を付けろ！」

ムーンの言葉に緊張。
上空では、木の枝に乗っているような、ガサガサとした音が響く。

グルルル……

うなる声……だが、自然の音に混じり、どこの方角から聞こえるのか確実な判断が出来ない。
ガサッといつもより強い木の音、それを聞いたムーンが

「ここから離れろ！」

焦ってわたし達に呼び掛けた。
どうしてかわからず、考えた。が

ガアアアアッ！！

暇を与えられず。
咆哮と共に、頭上から風の刃がいくつも降り注いできた。

「うわっ！　なんだこれ！？」

レイは姿勢を低くしながら走り回る。
わたしは速さで避け、どうしても避けきれない刃に、両手剣を前に交差して防御したら

「きゃあ！！」
「アルテミス！？」
「アル！！」

勢いが強く、押されて尻餅をついた。その後、風の刃は小さくなり、消えた。
剣は壊れはしなかったが、まともに受けてはいけない攻撃だと判断した。

グウウウウ…！

風獅子はサッと、体格からは似合わぬ着地をした。丁度、またムーンと向き合う形だった。

ガルルルアァッ！！！

一声あげ、彼に突進してきた。
また彼と戦わせてはいけないと思ったら

「おらっ！！」

バチンッと乾いた音。
レイがムチを鳴らした。

その音に足を止め、レイの方へ向く風獅子。

「ほら…こっち来い！　おれが相手してやる！！」

またバチンバチンと音を鳴らし、気を引かせる。
それにとうとう乗った奴は、今度は少し離れた彼に駆け出した瞬間

「よっ」

左手に持っていた手の平サイズの玉を足元に投げつけた。
それはモクモクと白い煙があがり、レイの姿が見えなくなった。

ガウアア――――！！！

目眩まし等に騙されない、そう言うかのように、奴は構わず走り続けた。
そして煙の中に入り、鳴き声をあげ続けた。

「レイ…！？」

彼はいずこに…？
不安、わたしは近付こうか迷っていた時に

「よぉっ」
「うわっ！？」

いつの間に隣にいたレイ。
あれ？　確か向こうの煙に…

「あれは煙り玉だ。時間稼ぎにしかならねぇけど…おっちゃん、ど

うする？」

少し離れた先のムーンを見た。
ムーンはこちらにゆっくりと歩きながら

「試験の戦法を使おうと思う…」
「え…？」

そう言った。
試験の戦法…となると、黒竜を倒した時の戦い方だろうか。

「今の私では、まともに動けぬ……だから、相手の弱点を突いて、一発で終わらせる」
「どうやって？　おっちゃん、魔法はもう使えないんじゃ……」

レイが問うが、彼は大丈夫、と答えた。

「先程、チカラモで魔力だけは回復した…」
「本当に……？」
「微量だが、魔技ならば可能だ」

そうか……だから口にしたワケか。彼は先を読んで行動をしたのだと知る。

「つまり、おれ達が時間稼ぎの相手って事か？」

ガアアアアッ！！！

「！？」

レイが答えを得る前に、煙が晴れ、風獅子はわたし達を見つけた。
惑わされた事に怒っているように見えた。

「そういう事よっ」
「頼む」
「えっ…ちょ、待てよアルテ」

代わりにわたしが彼に答え、駆け出した。
ムーンの短い願いを背に受けて、わたしは真正面、接近を試みるが

ガウッ！！

「うわっ！」

相手が左前足を縦に振った。
右斜め前方から縦の刃が向かってきて、わたしは咄嗟にサイドステップ。わたしの側を刃が過ぎたが

「アルテミス！！」

刃で切られた樹木が、わたしに向かって倒れてきた。
呼ばれたのと同時に、レイが突っ込んできて、地面に倒れた。
ズウゥン…と、間一髪。
木の下敷きになるのは免れた。

「大丈夫かアルテミス！」
「うん…」

覆い被されている状態。
不安げに見下ろしてくるレイ。

…この状況、恥ずかしいのだが。平静装って彼に返事した。

「もっと距離を離してくれないかっ！？」

詠唱途中、後衛のムーンがわたし達に呼び掛けた。
どうやらこのままでは危険らしい。

ガアアアアッ！

「やっべ！」

向かってきた風獅子。
レイはムチを真上の木の枝に引っ掛け、飛び乗った。
わたしはすぐに起き上がり、思いっきり高く跳ぶ。
レイとは別の木の枝に掴まり、ぶら下がった。身体を振り子のように前へ、後ろへ振り、勢いよく前の方へと着地した。

「ほらっ！　こっちに来なさい！！」

両手剣の刃と刃をぶつけ合い、音を鳴らした。
それに、後ろを向いた風獅子が振り向く。

ガルルルルアァッ！！！

縦、横に爪を振れば、その通りに刃が来た。
さらに風獅子自ら駆け出してきた。
まずは縦一閃を避ける。
横一閃は、わたしの腰より下と推理。

「えいっ！！」

勢いよくジャンプ。
避けるのと一緒に、こっちに来る奴の顔に向かって

「たぁぁあっ！！！」

剣を合わせ、縦に降り下ろした。そして着地。

グアアアアアッ！！！

叫ぶ風獅子からバックステップで離れる。
バタバタとのたうち回る。

「アルテミス！！　もっと離れて！！」

頭上からレイの呼び掛けだった。
わたしは見上げ、彼の姿を確認した。木の枝に足を乗っけており、
風獅子を見下ろしている。

「何かするなら早く！」
「言われなくても！！」

風獅子が暴れるのをやめ、標的をレイとして睨んだ。
風獅子は空が飛べる。それを考えると彼の居場所は不利となる。

グガアァッ！！！

「うわっ！」

その場から風の刃を飛ばす風獅子。

レイがいる枝が切れて、彼は他の木に乗り移らなくてはならなかった。

「こいつ…！！」

攻撃をやめない奴に、わたしは止めようと構え、向かおうとしたら

「大丈夫だからあいつに近付くなぁぁ！！」

「えっ…！？」

転々と移動しながら、レイはわたしを制した。

ただジャンプするだけじゃなく、ムチも用いて遠い所もたどり着いていく。

風獅子はその場から動かず、レイを倒そうと必死にカマイタチ。

わたしがつけた顔の縦傷からは、血が流れ続けていた。

（レイは動くなと言うし…奴はまだ攻撃をやめない…）

わたしは剣と剣をぶつけ合い、また気を引かせてみたが、見向きもしてくれない。

「アルテミス！　何やってん…うわ！」

わたしの行動に気付き、焦りつつも指摘してきた。

言い切る前に、また別の木に移らなくてはならなくなったが。

（奴を止めなきゃ、攻撃出来ないじゃない）

聞かずに行こうか…でもそれじゃあ仲間を信頼していない事を意味する。

せめて助けはしたいのに…どうすればいいのか。
いてもたってもいられない。

「…てめぇ……！」

イライラが、風獅子を呼び掛ける声になった。
それにピクリと反応したが、集中している。

「てめぇ聞いてんのか！！　ああっ！！？」

ありったけの声で言ったら、今度はビクッと身体を震わせた風獅子。
振っていた前足も止まった。
魔物がこんな表情をするのだろうか……目を丸くしてこちらを見てきたが

「くらえっ！！！」

頭上からレイが、閃光玉より一回り小さい玉を、いくつも奴に投げつけた。
それが風獅子の身体に当たり

グギャアアッ！！

パンッ、パンッと破裂した。
一発一発は威力が小さそうだが、レイはたくさん投げつけた。
風獅子は痛がっている。

「どうだ！　参ったか！？」

へへーンと得意気なレイ。そしたら、レイの足元の枝が重さに耐え

られなくなったのか

「うおあっ！？」

ガサガサドスンと音を立てて、地上に落ちてしまった。
せっかくカッコよかったと思ったが、台無しだ。

「大丈夫！？」

まだ痛がる風獅子をほおっておき、レイの元へ駆け寄る。
レイは苦笑いを浮かべ、立ち上がりながら服の防具をポンポンと払う。

「アルテミス……お前ホントはおっかねぇんだな」
「レイが動くなって言うから」
「いてっ」

ケタケタ笑う彼にムッとなって、コツンと頭を叩いた。

「二人とも…ありがとう」
「！」
「後は私が仕留める…」

時間稼ぎは成功したらしい。
ムーンが風獅子に向かって歩き出した。長剣の刃は光輝いている。

「『大地の神“ヴィーナス”の偉大なる加護をこの剣（つるぎ）に与えたまえ』
……」

入団式に聞いた事がある、似た締めの呪文。

彼は剣を逆手に持ち、剣先を地面に向けた。が

「っ……」
「ムーン！？」
「おっちゃん！」

急に片足から崩れだし、わたし達は慌てて彼を支えた。

「大丈夫かおっちゃん！！」
「ああ…」
「最後の…名前を……」
「……ムーン」

わたしは、ムーンの剣を持つ手に、自分の手を添えた。

「わたしも手伝うから」
「アル…」

わたしの顔を見て、彼は驚いていた。

「おれだって！」

と、反対の位置にいるレイも、わたしを真似して剣を握る。

「…すまない、二人とも……」

グルルル……！！

「急いで！」

痛みをこらえ、こちらをにらんできた風獅子。
瀕死に近いだろうが、また殺意がある。
「『ウェヌス・クラック』――！」
長剣は更なる光を放つ。
ムーンが剣を高く掲げる。
「思いっきり突き刺せ……せーの！！！」
ムーンの言葉に、わたし達は顔を見合わせた。
風獅子が向かってきた！
「てやあああっ！！！」
ムーンの掛け声に、剣を思いっきり地面に突き刺した。
そこから
「！？」
地割れが生じ、地鳴りが起きる。
轟音を響かせ、風獅子の行く先はもう、足の踏めるところではなかった。
グギャアアアアアアア――――――――――！！！
踏み外し、亀裂の中へと落ちてしまった。
さらに自信が起き、陥没したり、崩れたり、風獅子を埋めるようにそこは崩壊した。
……揺れも音もなくなり、目の前には瓦礫で埋まった地面。

「……勝った？」

わたしが思わず二人に呟く。
笑顔を出さずにはいられない。
二人を見てみると

「……みたいだな！」

とレイが喜びを浮かべる。
ムーンも、同意の意味で頷いた。
そしたら

「うわっ！！？」

もうムーンの魔法攻撃はないはず。なのに、この地面が揺れ始めた。
地割れの跡から、通る筈のない風が吹き込まれていた。

ガアアアアアアア――――――――――――！！！！！！

「えぇっ！？」

風の刃を纏わせ、崩れた土をも舞い上げて、風獅子が姿を現した。
弱点は突けた筈だ……なのに、まだ生きていられるのか。

「まだ終わってねぇじゃん！」
「構わないわよ……また倒せばいいんだから！」

レイが不満をたらしながらも武器を構えた。
わたしも、気合いを入れ直し武器を持つ。

ムーンは地面に突き刺さった長剣を抜き、ゆっくり持ち直した。
互いに睨み合う……うなる風獅子と、集中力を高めるわたし達。
互いの動きを探り合っていたら

グウウ……

不意に、力が抜けるように、風獅子は倒れてしまった。
何が起こったのか……わたし達は戦意を失ってしまった。

「……あれ？」

と、レイが何かに気付き、風獅子の体へと近寄って行く。

「ちょっとレイ！　危ないわよ！！」

いつ動き出すかわからない。
わたしは慌てて彼を呼び止めるが、ちょっと待ってと言われ、言う事を聞いてくれない。
横に倒れている風獅子の胴体に手を触れた。いや

（何やってるの……）

何かを抜き取った。というか、胴体に何か刺さっていたのか……わたしは気付かなかったが。
小さなそれを持って、彼がこちらに駆け寄る。

「それ、なんなの？」
「これ、おれが最初に投げたナイフだよ」
「えっ？」

レイの手に握られていたのは、確かに、風獅子が襲い掛かってきた時に放ったものだった。

「それがどうしたの？」
「おれ、てっきり全部外れたのかと思ったけどさ。一本だけ刺さってたみたい」
「だからそれなんなの？」

彼が何を言いたいのかわからなかった。

「蛇の魔物の毒が塗ってあるナイフ」
「……じゃあ、まさか」
「毒が回って、それが死の原因」

と、ムーンが結論を代わりに言った。

「という事になるな……」
「！！　ムーン！？」

ばったりと、彼は倒れてしまった。
もう、彼にも限界が来てしまったのであった。
わたしは彼の身体を起こそうとしたが、もう自力で立つ力も彼には残っていないようだった。

「レイ……どうしよう…」
「もうこいつと戦う事はないから、さっさとおっちゃんを村に運ぼうぜ！？」

レイも冷静を装って言うも、やはり慌てているのが見える。
わたし達は協力して、ムーンの身体を背に負うような形で運んだ。

村の灯りが見えた辺りからは、離れていないのが幸いだった。
わたし達は彼が助かる為に、力の限り、この舞踏会跡地から去った。

＊＊＊＊＊

第二十一章

彼のペンダント

森を抜け、アルス村にたどり着いた。
歩けば普通にたどり着ける距離なのに、誰かを背負って行くとなると距離感が違ってくる。

「おれ、お医者さん呼びに行くから、二人はここで待っててくれ！」
「わかった…」

ムーンを横たわらせ、レイが村の中へと駆け出した。
わたしは彼の姿が見えなくなって、ムーンの様子を確認した。
気を失ってはいない。ぜいぜいと呼吸が落ち着かない。
傷口を見た。もう薬草も役目を果たせず、ホータイ同様に赤色に侵『色』されていた。

「もうすぐだから、ムーン……」

わたしは、彼に、彼は助かる事を教えた。それでムーンが少しでも気を楽にしてくれたら、とわたしは思う…。

「……ちょっと待ってて、薬草を新しくするね」

このまま救済を待っても、彼をそのままにはしておけない。
小物入れに手を突っ込み、薬草はないかと探り込んだ時に

「…」

そういえば…とわたしは思い出し、薬草と共に取り出した。それは

「…」

ムーンが持っていた、わたしの母の写真が入れられたペンダント。
村で過ごしていた時に、どうしても拭いきれなかった疑問の種。
ふと、ムーンがこちらを見ている事に気付く。
否、わたしではなく、わたしの手に握られたペンダントとであろう。
血まみれたホータイの手で、わたしからそれを奪い取ろうと腕を伸ばしてきた。

「待って」

ゆっくりとした動作だから、避けるのは簡単。わたしはその手を、彼から遠ざける位置に動かした。

「あ……アル…そ、れは……」
「後でね…」

普段のわたしだったら、仲間の物は必ず返している。でも、今回は状況が違う。

（わたしは彼から聞かないと……）

これを武器に、ムーンに対する疑問を削除しなければならない。

何故、あなたがこれを持っていたのか、と。

（後で聞くから…）

彼に向ける言葉を心内で呟く。

薬草を傷口に新しく貼り直す作業の途中、レイが医者を連れて戻ってきた。

＊＊＊＊＊

「……私が出来るのはここまでです。こんな小さな村だからって、医療が乏しいと言えば、言い訳になってしまいますが…」

「いえ…そのままにするよりは、まだマシです。本当にありがとうございます、先生…」

「あの…おれ達、少ししかお金払えないけど…これ……」

「あ、いえいえ。お金は必要ないですよ。村を助けてくれた恩返しだと思って下さい」

「…ありがとうございます」

「あの、今は、ムーンの様子見に行っても大丈夫ですか？」

「はい…安静ですが、お話するくらいなら大丈夫ですよ。くれぐれも傷に触らぬよう気をつけて下さいね」

「はい」

「本当にありがとうございます！」

＊＊＊＊＊

村の病院…と言うには小さい民家。
先生と話終わった後、わたし達は別室へ入った。
ムーンが眠るベッドが一つ。
サイドテーブルにはランプが置かれて、部屋をほの暗く照らす。
殺風景な部屋。
窓の外はすっかり暗く、夜ならではのかすかな音が耳に入る。

「ムーンのおっちゃん…さっきよりかは楽そうだな」
「うん…」

安らかに眠る彼を見て、わたし達は安堵した。
武具もマントも、部屋の済みに置かれている。
彼の肌は、顔の右目の回り以外全く見えない。全身にホータイが巻かれていた、と医者に教えられた。
さらに治療の際、ホータイだけは取らないでほしいとも言われたらしい…。
彼がそこまで身を保護するのは何故なのか、彼の謎の一つでもあった。

「おれ、宿屋の女将さんに泊まる部屋あるか聞いてくるよ」
「うん、わかった」

レイは眠る彼に気を遣い、ドアの開閉はゆっくりだった。
…わたしは部屋に残った。
ムーンが横たわるベッドへ歩み寄る。側にあった椅子に座り、彼の様子を見る。

（今、起きるワケないよね……）

彼のペンダントを取り出した。

そして、蓋を取る、若き母の写真。
早くこの事に関して真相が知りたかった。
答えは持ち主にしか聞けないのだから。

「……」

この中の母は本当に若い。わたしの知らない頃の母さんだ。
手紙の様子からだって、母は本当に幸せであった事はわかっている。

「……誰だ……？」
「！！」

小さな低い声が聞こえ、わたしはそっちを見た。ムーンだ。
右目が開かれ、こちらを見ていた。まだ視界がぼやけているらしい。

「わたし…アルテミス」
「……アルか…」

彼は身体を起こそうとしたのだが、動いた瞬間、険しい表情を浮かぶ。
わたしは慌てて彼を横に戻した。まだ起き上がってはいけない、とわたしは彼に言い聞かせた。

「…わかった」

彼は素直に聞いてくれた。

「……あのさ」
「…なんだ……？」

わたしは、ペンダントの紐を持って、ぶら下げた状態でムーンにそれを見せた。
ムーンはペンダントに目を向ける。

「……これ、どうして持ってるの？」
「……」

すると彼は目をそらした。ペンダントから。

「この中の写真の人……知ってる……？」
「……ああ」

その問いには一言答えた。

「…わたしの母親だって、知ってる…？」
「ああ…」
「……じゃあどうして」

意味もなく、彼がそれを身につけるワケがない。
何故母の写真を、他人が持っている。これはわたしだけじゃなく、誰もが同じ境遇に会えば必ず気にする事だろう。

「どうして持ってるの？　あなたが何故わたしの母を知るの？　あなたは何者なの！？」

何もわからない、憤りを覚える。
怪我人だとわかっても、感情は抑えきれない。
怒りに任せ、立ち上がった。ペンダントの見せつけるように突き付ける。
彼は依然、こちらを見てはくれない。　あなたは誰？　誰なのよ…。

「……私は…」

重い口を開いた。

「私は、魔界大戦に参戦した騎士団の一人だった」

「え…？」

今まで誰も聞いた事のない、ムーンの過去が、彼自信の口から語られた。

「私は、彼らとは戦友だった」

「……誰？」

「メリアーの二人だ……」

「！？」

大戦で出会ったメリアーの二人、と言ったら。

父と兄以外、いるワケがない。

「ダイアンとルナは私にとっても、かけがえのない仲間だった……あんな事さえ、起きなければ……」

目を伏せ、過去を思い出しているのだろうか。普段聞けない弱い声。

時折見せた悲しい表情が、今ここにあった。

「私が油断さえしなければ、ルナは魔物に等ならなかったはずだ…私は、今でも後悔している……」

彼がとても仲間を思うのはよく知っている。

彼が心を痛めている、わたしも、話を聞いているだけでつらくなる。

突き付けた腕を降ろしていた。

「私も傷を負い、人前に晒せるような身体ではなかった…。私は、戦いが終わった後に、それを拾ったんだ」

ムーンは、わたしが握りしめている手を見た。

「それは以前に、ダイアンが見せたものだった…だからすぐに、彼の物だとわかった。だから……」

「だからあなたが持っていたの…？」

言葉が続きそうになかったのを、わたしが繋げてあげた。

彼はゆっくり頷いた。

「私は…彼に会うまで、ルナを助けるまで、逃げないと決めた……。だからサンポリアに来たんだ…」

彼の入団理由の真実。

父さんと兄さんに、こんなにも素晴らしい友がいたのだ。

わたしは、散々疑っていた自分に罪悪感を知る。

「今まで、すまなかった…」

「え…？」

「お前には、いろいろと苦しめたと思う…そのペンダントに……」

ムーンはわたしに謝罪をした。

戦士としても強く、賢く、皆から信頼されているムーン。

そんな彼が、わたしに悲しみの目を向けていた。

彼は……わたしなんかと比べられない、罪の意識を持っているのだろう。

「ううん…大丈夫」

わたしは、ペンダントの紐、切れた部分の両端をそれぞれに持った。
ちょっといい?、とわたしは彼の首に紐を回し、結ぶ。
ペンダントは、ムーンの首からさがっている状態になった。

「本当なら、返してもらいたいけど…ムーンは、目的があるもんね」

そのペンダントを、父さんに返す目的が。兄さんを魔の手から連れ帰る目的が。
結論的には、わたしも同じ目的でもあり、夢でもあった。

「父さん達に会えるまで、なくさないでよ?」

自分はもう大丈夫、その事を伝えたくて、彼に笑顔を見せた。
わたしも謝罪をした。無理矢理聞き出してごめんなさい、と。
彼はただ、首を横に振り、大丈夫と一言答えてくれた。

「それじゃあ、多分レイが宿とってると思うから、わたしはもう行」
「アルテミスー!!」

バタンッ、と勢いよくレイニーがこの部屋に入ってきた。
何事かと思い、わたしはビックリして騒がしい彼を見た。
何故か、彼の手にはふんわりとした大きな布団を抱え込んでいた。

「どうしたの? それ…」
「ああ…おはちゃんに聞いたんだけど、部屋が埋まってたんだよ」
「どうしてっ?」
「なんでも…サーサリー教団が礼拝の為に泊まりに来たんだってよ。

だからおばちゃん、おれ達にこれ貸してくれたよ」

と、持ち物を示した。

もしかして…初日、女将さんが言っていた、床に敷いて寝るベッド？　そう聞くと、ビンゴ、と言われた。

「先生にも、騒がしくないならここで寝ていいってよ。もう寝ようぜ」

せっせと床にそれを敷き始めたレイ。この部屋は少し狭い…荷物置く場所や、今敷かれているこれの面積だとあまり余裕がない。

「ちょっと、汚したくないんだから、靴くらい脱ぐ時間与えてよ…」

皆疲れているんだから…急がなくてもいいのに。

＊＊＊＊＊

一通り、準備は終わった。

「案外眠れねぇなぁ…」

「そうね…」

小声で会話をするわたしとレイは床組。

ベッドを一人独占のムーンは誰よりも疲れているし、寝息が聞こえる。

隣のレイに背を向け、壁に寄りかからせるように置いた自分の荷物、武具を、わたしはただ眺めているだけ。

「なぁアルテミス」
「なに…？」

ごそりと音がする、レイがこちらを向いて来たのだろう。

「団長達…今どうしてるんだ？」
「あ！」

そういえば、とわたしは思わず大きな声を出してしまった。
それにレイが慌ててシーッと声で制する。
……ムーンの方を見る。起きなかったようだ。良かった…。

「そうよね…盗賊に襲われたんだもの……状況的に考えてこの村に戻ってくるはずよ」

なのに、この小さな病院に訪れるまで、誰一人、騎士団の仲間に出会さなかった。
宿屋はもう貸し切り状態だから無理だとわかる。
民家に泊まっているのだとしても、やはり人数的にも無理に思える。

「まさか……おいてかれた？」
「まっ…まさか……」

また大声を出しそうになった。レイは本当に突拍子のない事を言うのだから、油断出来ない。
わたしは声の加減に気をつけながら、否定した。

「だって、おかしいじゃないか…。村でおれ達以外の騎士団の皆を見てないんだぜ？　おれ達の事おいてったに違ぇねぇよ…」

「……でも。もしかしたら…」
「なんだよ？」

他にどんな推理があるんだ、と聞いてきた。
わたしはただ、あんなに仲間を思い、信頼し合っているわたし達の団が、仲間を見捨てるはずがないと否定したのだが…。

「……きっと、見捨ててなんかないよ」
「…そうかぁ……？」
「ただ、わたし達を捜しに行けない状況なのかもしれない……ただそれだけよ……」

ただの思い込みに過ぎない。レイもわかっているはず。
でも……そう口にしないと、本当に見捨てられたんじゃ、って思ってしまうから。

「わたしは、ラルク団長達を信じるわ……」

そういう話から、もう言葉を交わす事はなくなり、互いが眠りにつくのは間もなかったと思う……。

＊＊＊＊＊

とにかく、準備をし、団長達を捜す。
もし見当たらなかったら、わたし達だけで船に乗って、サンポリアに帰ろう。
そして、ムーンの怪我をちゃんと治療しよう。
窓から射し込む光に目覚め、脳内に計画を組み立てた。

「……」

まず隣のレイ。
身体にかかってる掛け布団なんか、寝相の悪さで剥がされている…
…風邪をひかなければいいのだが。

「…」

次に、ムーンを見た。
ぐっすり眠れたんだろうなぁって思ったら

「え…？」

なんか様子が違う。わたしはベッドに近寄り、ムーンの容態を見た。

「ムーン…！？」

彼は起きていたが……苦しそうだった。
呼吸が荒い、昨日の彼のようだった。
あんなに安らかに眠っていたのに……何故？

「レイ……レイ起きて！！　そうだ……先生！　先生っ！！」

レイを起こし、そして、医者も起こそう、と思考が働き、わたしは
ブーツを履いて慌てて部屋を出た。

こんな事……誰が予想した？
この後の事も、この先の事も……。

第二十二章

―――――――――
わたしとあの人の
再会
―――――――――

＊＊＊＊＊

先生に診てもらったところ。
ムーンは、発熱してしまったらしい。高熱。それも原因は、完全に治療しきれなかった怪我によるもの。
先生はその事で何度も頭を下げた。わたし達は謝らなくても大丈夫、悪いのは先生じゃない、と言って制したが。
絶望しても、ムーンの熱が下がるワケではない……一体どうすればいいのか。

「せんせー」

と、こんな時、無邪気な村の子供達が、この病院を訪れてきた。
わたし達とは対称的にも、にこにこと笑顔を見せてきた。

「どうしたんだい？　君達…」
「今日はサーサリーのきょーこー様がれーはいに来てる日だよぉー。

行こーよぉ」

難しい単語で、村の男の子は医者を誘う。

「ああ…それは知っているよ……ああそうだ！！」

「うわっ」

「ビックリしたぁ…」

あんなに落ち込んでいたのに、わたし達をおどかした先生の明るく大きな声が。

「教皇様にお願いすればいいんですよ！　教皇様は神の力で傷も病気も治して下さるはずです！！」

「本当に！？」

助かる手掛かりが現れた。

「なぁお前ら！　そのきょーこー様の所に案内してくれねぇか！？」

「うん、いいよー」

レイが頼み、子供らはすんなりと答えた。

わたし達は子供達の案内の元、この村の教会へ向かう…。

＊＊＊＊＊

「ここだよぉ」

「へぇ…豪華なミサだな……」

遠くからでもわかるように、教会の前には人だかりがある。
教会は、周りの民家よりは大きい建物だが、やはりあの大人数は入りきれないのだろう。だから入り口の前で教えを説いているのか。

「ねぇレイ」
「うん？」

わたしは、教会の隣にある三つ程のキャラバンと馬を見つけ、問いたくなった。

「教団の人ってわざわざあんなので移動するの…？」
「うーん……どうだろう。この先、ユーピテルって街があるんだけどよ…」

と、レイは、この大陸について話し出した。
大昔にサーサリー大陸で神が誕生した、という言い伝えが、まだこの現代で信じられているのだという。
それにちなんで、わたし達が来た方向とは反対の方角に、ユーピテルという街があるのだという。
ユーピテルとは、神様の名前なんだとか…。

「じゃあ、あの教団はユーピテルの教団、って事」
「ああ。神の教えを広めようと努力する教皇達はすごい、って聞くよ。普段の生活でも、規制が厳しいんだってよ……」

教会の入り口前、神々しい綺麗な修道着を身に纏った、男性の老人。とても優しい表情、聖書を片手に、教えを聞きにきた村人達に語りかけていた。
その彼の側で待機している他の修道士達。
老若男女、地位の低さを表しているのだろう黒い服を着ている。

女性は、本の絵でも見た事がある“シスター”だ。

「……レイ、あの人は？」

「あ？」

わたしは、教皇様と同じように、いやもしかしたらそれ以上に豪華な服を着る４０代程の女性を見つけた。

教皇様とは対称的に、厳しそうな人に見える。

「ああ……ええっと、確か、司祭長だったか？」

「しさいちょう？」

「おれ、そこまでサーサリーの教団には詳しくないんだけど……」

困った顔をするレイ。どうやらそれ以上、聞けそうにないようだ。

「ところで、先生と子供達は？」

「あれ？　そういえば…」

わたしはふと気付き、周辺を見回した。

わたし達、おいてかれたらしい。

同行していたはずのメンバーがいなかった。サーサリーの住民だから、教皇の話が聞きたいのかもしれない。

「まさかムーンのおっちゃんそっちのけで、話なんか聞いてないよな？　先生…」

「……一応、わたし達で頼みに行きましょ」

いくら信仰が厚くったって、医者ならばまず己のする事を優先するはず。

不安になってしまったが、わたし達は教会へと向かった。

＊＊＊＊＊

近くに行けば人だから、わたしは背が低いから、教皇様を間近に見れない。

「一体誰に頼めばいいんだ？　教皇のおっちゃんは無理だし、先生もどこにいるんだ…？」

小声で話すのは、皆が教皇の話を聞いているから。
邪魔をしたら大変だからである。
レイはわたしよりかは視界がいいはず、少し背伸びをしながら、見渡している。

「何をしているのですか」
「うわっ」
「お静かに」

突然背後から声をかけられた。
もう大声を出さないのは慣れた。でも声をかけた人から注意された。
姿通りの厳しい声の主は、レイ曰くの司祭長であった。

「おお！　ここにいらっしゃったのですか、ヘスティアー様」
「あ！　先生！」

そして医者も現れた。このヘスティアー様という司祭長を捜して走っていたのか、息切れている。

「お二人に、紹介しましょう……えっと」
「とりあえず息整えてからでお願いします」
「あ、はい…」

……先生が落ち着き、

「改めて。こちら、神誕生の地ユーピテルの、サーサリー教団司祭長、ヘスティアー様です」

誇らしげに、この厳格な女性を紹介した。
顔は化粧を施しているのか綺麗ではあるが、修道女が化粧をしていいのかはわからない…。
多分、司祭長と呼ばれるくらいなのだから、地位が上ならば許されるのであろう。

「はじめまして、子羊さん。ヘスティアーと申します」
「あ、はじめまして…アルテミス・メリアーです」
「おれはレイニー・バルナです…」

これが優しく聞こえるならば、一般的な教会の人である。だがこのヘスティアーという女性、声音も一定で厳しいとしか言えない。
真面目に神に仕えているのはわかる。

「あなた方が教皇様の話を聞かず、キョロキョロとしておりましたので、何を企んでいるのかと思いお声をかけました」

うわぁ…厳しい。そんな疑いの目を向けられていたのか。

「いえ、わたし達はこちらの先生を捜してました。はぐれてしまったので」

「すみません…司祭長にどうしても頼みたくて、先走ってしまいました……」

わたしがそのキョロキョロの原因を話すと、医者がわたし達に謝罪をした。

「そうだったのですか……私にどのようなご用件で？」

「はい、実は…」

と、先生はムーンの怪我について話した。

医療が乏しく治療が出来ず、さらに熱を出してしまった事も。

「そう……私でよろしければ、治して差し上げます」

おお…優しさが見えなくとも、発する言葉には希望が見えた。

と思ったら

「その代わり」

「えっ？」

「寄付として少しのお金を頂こうと思います」

「え……」

教会の人間が金を取る？

これにはわたしだけじゃなく、レイも反応に困っていた。

「寄付でございますか…しかし、自分には教会を支援するほどのお金は……」

先生も同様に困惑していたが、わたし達みたいに驚くような様子はない。

まさか…寄付というのは当たり前？　それともわたしが教会のシステムを知らなかっただけ？

「ヘスティアー司祭長様」

と、一人のシスターが、司祭長に駆け寄って話しかけてきた。
黒い服、黒い被り物…あれって何て言ったっけ？　と脳内から単語を探していたが

「あ！」

そのシスターと目が合い、わたし達は互いに声をあげてしまった。

「……どうされましたか？」

と、柔和な老人の声……教皇様のだ。
彼のみならず、彼の教えを聞いていた村人達もこちらに注目している。
純粋に何があったのか気がかりな人、邪魔をするんじゃないと恨む目の人。

「司祭長殿、どうされましたかな？」

と、今度は主語をつけて司祭長に問いかける教皇様。
わたし、レイ、ヘスティアーさん、シスター。この面子で考えると、冷静に答えられるのは司祭長だから、彼女に問うたのであろう。

「すみません、教皇様。マリアンヌが…」
「あの、すみません。お聞きしてもよろしいですか？」
「マリア、私語を慎みなさい」

教皇と司祭長が話をしているのに、マリアンヌと呼ばれたシスターはわたしに問いかける。

「あの時、サンポリア王国でお会いした方ですね？」

「あ、はい……これを、落としてましたよ…」

そう、彼女は、入団試験当日、街中でぶつかったシスター。
その時に拾った彼女の落とし物、クロスペンダントを、わたしは首からさげている。
わたしはそれを取り出し彼女に見せた。ら

「あ！　それはわたくしの……！」

シスターはわたしの元に歩み寄り、わたしの手から、クロスを手に取る。
まじまじと見、自分の物だと判断し、彼女の顔に笑顔が表れた。

「教皇様！！　教皇様のおっしゃった通り、この方と会える事を信じたおかげで、わたくしのロザリオが戻ってきました！」

「マリアンヌ、今は私と教皇様がお話をしているのです。いい加減に」

「きょーこー様、どーゆー事？」

「きょーこー様がおっしゃったって、あのお姉ちゃんに何を言ったのー？」

ヘスティアーさんの制しは、子供達が教皇様に問いかけた事により途絶える。
教皇様は、にっこりと微笑み、子供達だけじゃなく、教会前にいる皆に語った。

「私が彼女に教えたのは、再会を信じる、という事です」

人との出会いは時に一瞬で、それさえも神様が下さったプレゼントである。

だが、人々は出会いというものを当たり前のように扱う。

人と人とが出会う事に感謝をするしないは自由ではあるが、時に、感謝をしなかった事を後悔する事もある。

教皇様はこんな感じに、教皇らしくわかりやすく話をした。

「そこで私は彼女に、また出会える事を願えば必ず、取り戻したい思いや気持ちが戻るであろう、と教えました」

「ロザリオをなくした時、すぐに心当たりとして思い出したのが、あなたの事でした。サンポリアを去った後、後悔をしましたが、わたくしは希望を捨てず、神に祈り続けました。またあなたに会いたい、と…」

わたしも、その話をサンポリアの教会のシスターに聞かされた。神の導きで、出会える時が訪れると。

わたしは彼女程神を信じたワケではないが、なくさずに持っていようという気持ちはあった。

「本当に、ありがとうございます」

「いえ……わたしも、どうしても返したくて…ずっと、持っていました」

やっぱり、なくして困るものだった。

だから、持ち主の手に戻れた事はわたしも嬉しい。

紐をとき、わたしはシスターにクロスペンダントを手渡した。

彼女は一礼をし、丁寧に受け取ってくれた。

その瞬間、拍手の嵐。
教皇様の話も手伝ってくれたものだから、この場にいる村人達は感動して拍手を送ってくれたのだ。

「さて…彼女の再会を祝ったところで、私のお話は終わりにします。皆様に、神のご加護があらん事を……」

話の締めとして、教皇様は十字を切り、手を組み、祈った。
村人達も真似て、祈りをした。
シスター、司祭長も祈りを捧げる。
わたしは神を信じているワケではない、けど、この再会には感謝をし、祈る事にした。

＊＊＊＊＊

村人の集まりもなくなった。

「自己紹介が遅れました。わたくし、マリアンヌと申します」

再会したシスターがわたし達に名を教える。
他の修道士と修道女は、もうキャラバンに乗り込んでいたりと、帰る準備をしているのだが。そういえば司祭長もいない……。

「わたしはアルテミスといいます。アルテミス・メリアー。アルって呼んで下さい」
「おれはレイニー・バルナ。レイでいいよ」
「ってレイ…シスターに対してそんな言葉遣い…」

後から自己紹介をしてきたレイを、わたしは睨んだ。レイはそれに怯えつつ苦笑い。
するとマリアンヌさんが

「構いません。わたくしは神に仕えるものですが、アル様達とはお友達になる事は出来ますよ」

微笑み、レイをかばうような言葉。彼女の心の広さを感じた。

「もし、わたくしの名前が長ければ、マリアでも構いません。改めて、よろしくお願いします、アル様、レイ様」

口調も、シスターにふさわしい言葉遣い。

「それじゃあ…よろしくね、マリア」

許してくれるならば、彼女の心遣いに応えなくては。
互いに紹介し合い、わたし達は友達に

「アルさんレイさん！　ヘスティアー様に頼まないと！！　行ってしまいますよ！！」
「あっ！！　そうだった！！」

ってか、側に医者がいたのを忘れていた。先生はわたし達を急かし、キャラバンを指差すが、もう人は中に乗り込んだまま。
いや、よく見るとまだ人影一つ。

「マリアンヌ！　何をしているのですか！？　ユーピテルに帰りますよ！！」

ヘスティアーさんだ。怒声が彼女に呼び掛ける。

「申し訳ありません！　お待ち下さい司祭長！！」

「早くなさい！　そこのお連れ様とお話したいならば、一緒に連れてもよろしいですわよ！！」

「あ、ありがとうございます！！」

「ええっ…！？」

連れていくって、わたし達同行は出来ないし…。

「すみません、もし、何か用がないのでしたら……」

と、マリアが困った顔でどうするかを聞いてきた。

教会側は時間も与えてくれないらしい、マリアもそれにはどうする事も出来ないようだ。

「アル……」

「！」

ここなら聞くはずのない声が、わたしを呼んだ。まさかと思い、振り向くと、

「おっちゃん！？」

「ムーン！！？」

ムーンだった。ちゃんと武具の装備もしており、準備万端…なワケない！

「どうして勝手に病院から出たのよ！　安静にしないと！！」

「構わん……それよりも、早くサンポリアに…」

怪我が痛みだしてて、さらに高熱の状態なのだから、大丈夫なワケない。
わたしとレイは、無理して行動する彼を病院に帰そうとしたら

「病院？　どこかお身体がよろしくないのですか？」

マリアが反応した。彼に駆け寄り、容態を確認する。
ムーンに対しとても心配している表情。気持ちを共有しているのを思うと、仲間意識をマリアに感じた。

「ひどい熱…それに、お怪我まで……」
「マリア！！　いつまで話しているのですか！？」

司祭長が時間を許してくれない。とうとう怒り出しそうだ。

「ほおっておくワケにはいきません。わたくしが出来る限りの事をします。同行をお願いします」

真剣な目付きとなり、わたし達に確認をする彼女。わたしは、レイと顔を見合わせた。
このままついて行って、騎士団の皆と合流が出来ない事を考えると……。

「アルさん、どうぞ行って下さい」
「えっ？」

先生がわたし達に言った。

「私ではどうする事も出来ませんでした……ですから、サーサリー

教団の皆様と、ユーピテルへ向かって下さい。私がサンポリア騎士団の皆さんに、行った事を伝えますので」

彼なりのお詫びなのだろう。伝言までしてくれる。

わたし達はお礼を言い、レイとマリアと一緒にムーンを支え、キャラバンへと歩き出した。

まだ踏んだ事のない大陸の冒険が、始まる。

朝の太陽の光を受けながら……。

【第三部】第二十三章

―――――――――
シスターマリアンヌ
―――――――――

揺れるキャラバンの中…わたし達は、最後尾の荷物を運ぶキャラバンの中にいた。
前方辺りの方は、多分、教皇様や司祭長様とかの地位の高い者が乗っていると思われる。
キャラバンは布で覆われているので、外の景色を伺えない。

「おっちゃん…大丈夫か……？」

わずかな隙間、そこにムーンを横にさせるが、依然苦しそうだ。わたし達は何も出来ない。ただ、見ているだけ。
わたし達も、荷物と荷物の隙間に座り込んでいるような状態。
わたしの隣にはレイニー、向かい側にはマリアンヌが、体育座りの姿勢だ。

「わたくしでしたら……その脇腹の怪我を治せるかもしれません…」

揺れるキャラバンの中。
バランスをとりながら、マリアは身を乗り出して、彼の患部に手をかざした。

「『神よ、この者に癒しの力を与えたまえ』……」

わたしが返したクロスペンダント…ロザリオ、今は彼女の首からさがっている。

それが、マリアの言葉に反応するかのように、光輝くが、弱く優しいものだった。

すると、

「……うぅ…」

「ムーン……？」

のっそりと、ムーンが身体を起こした。

一体どうしたのだろうか、わたしとレイは、不安になるが

「……すまない、助かった……」

彼が、彼なりの安堵の表情を見せてくれたので、どうやら心配はなくなったようだ。

「怪我は完全に完治しました。後は熱の方ですが…わたくしはまだ未熟故、教皇様か司祭長に頼んでみますね」

「えっ？　怪我が治ったのに？」

怪我とはどう違うの？　わたしは驚き、もう座っているマリアを見た。

「『怪我』と『病気』とでは、多少の違いがあるんです。怪我は、主に外傷の皮膚を戻すものですが、『病気』は熱や毒と言った、身体内の病状の事を言うんです」

「なるほど…」

「わたくしは、ロザリオをなくしてしまった故、他の方達よりも遅れてしまったのです……その、病気治療の方法を…」

しょんぼりと落ち込むマリア。

修道士と修道女にとって、クロスペンダントは欠かせないものである事を知れた。

「大丈夫よ」

「え…？」

「治そうとしてくれたその気持ちだけでも、嬉しいから」

「…アル様……」

わたしなりに感謝の気持ちを伝えた。すると彼女から落ち込む表情が消えていく。

「それに……マリアはまだまだこれからって事よね？　だったら皆に追い付けるように頑張ってね！」

頑張る人は、わたしは好きだ。

マリアに笑顔とエールを送れば、彼女もまた明るい顔を見せてくれた。

「はい！　ありがとうございます！」

ムーンの怪我だけはとりあえず治った。マリアの笑顔に、この場はいい雰囲気となる。

「それにしてもすげぇなぁー。マリア、それって魔法なのか？」

レイが、修道人ならば誰もが持っているだろう、彼女の回復の力に

興味を示した。

「魔法……とは少し違うところはありますね」
「どう違うんだ？」

さらに質問。
それにマリアが、えっとぉ…と困り始めた。具体的な事を知らないらしい。
わたしも、魔法使いの力と修道人の力の違い等、そこまで詳しくは知らない…。でもマリアに確認してみる。

「魔法は攻撃するものだし、癒しの力は守るものじゃないの？」
「うーん……教皇様から聞いた事があるのですが…よくわからないんです……」

ありゃりゃ……じゃあ一体どう違う？
この答えを導いてくれる人はいるのか。

「精神力を使うのは共通している……」
「っ、おっちゃん……」

ムーンだ。完治はしても状態がまだ良好ではない。荷物に寄りかかって座っていた。

「魔法は、詠唱する呪文と、その呪文のイメージ力が大事となる…」
「じゃあマリア達の力は？」

すぐ食いつくは知りたがりのレイ。
それに丁寧に答えるのはムーンだ。

「修道人特有の力は、祈る気持ちが必要となる…」
「……もっとわかりやすく言うと？」

ダメだ。レイの事だから、わからないと思ったよ…。
わたしはそれを聞いただけで理解したし、マリアもそれを聞いて、思い出したような顔をしたし。

「そうだな……私や団長が使う魔法は、まず最初に呪文を覚えなければならない」
「面倒くさそう…」
「だが、覚えれば戦略の幅が広がる。覚えるコツは、詠唱するその言葉を、ちゃんと理解し、イメージを浮かべる事だ…」
「イメージ……」

ムーンはいろいろな魔法を覚えているし、ラルク団長は魔技さえも習得している。
やはり、力を得るにはそれなりの知力が必要となるのだろう。

「例えば…私の魔技『紅蓮』は、炎の力だろう。アル、イメージとして沸くのは？」
「えっ？」

不意に問われた。やばい…ちゃんと答えなきゃレイと同類の扱いになる。

「うーん…やっぱり、灼熱、かな？　火山の噴火みたいな…」

思い付いたイメージを、わたしは彼に答える。
ムーンは黙って頷く。

「…魔技ではなく、魔法であってさらに詠唱が完璧ならば合格だな……」

「え？　魔技は違うの？」

「魔技は、武器や何か物に魔力を宿す技……もっと豊かなイメージ力があれば、お前も、レイニーも魔技を扱えるはずだ……」

「豊かなイメージ……？」

魔法が出来ても、このままじゃ魔技が出来ない。

豊かなイメージとはなんなのだろうか。

「つまり、いろいろな想像をすればいいのですね」

「？」

マリアが口を開く。

「紅蓮と聞いて思ったのは……まず、熱く、燃え盛る炎、それは火山の噴火の如し。小さな村さえも消してしまいそうな、神のような力…。火を吐く獣が、武器にとり憑き、武器が独りでに相手を襲う、恐ろしい魔力……」

「おー…マリア、すげぇ…」

レイが感心を呟いた。

マリアの語る一つ一つの単語は、聞き手のわたし達の脳内に『紅蓮』のイメージを与えてくれる。

魔技は、ただイメージするのではなく、もっともっと、自分の物のように想像しなければならないのだと知った。

精神力が高ければ高い程、イメージは高く、高度な魔法も扱えるのであろう。

「…もしかしたらマリアンヌは、修道女よりも魔女が向いているん

じゃないのか……？」

と、彼女をからかってきたムーン。本調子ではないから、聞き方を変えれば真面目に言っているみたいだ。

「いえ……わたくしは、祈る事で、皆様をお守りしたいのです」

「あ、そうだ」

とレイが声をあげ、ムーンに向く。

「魔法とか魔技は大体わかったけど、マリアの祈る力ってのはなんなんだ？」

魔法が想像力、あるいは創造力に対し、癒しの力はなんなのか。ムーンの説明は本当に丁寧だ。わたしも知りたくなってしまった。

「祈りは想像力よりも、思いが物を言う」

「おもい…？」

「そう…人を思う気持ち、自然を思う気持ち、いろいろあるだろう。思いの気持ちは、やがて祈りとなり、それにより癒す力が発動する」

「じゃあ誰でも使えるって事じゃねぇか」

「それは違いますわ」

「えっ？」

レイの反論に、マリアが口を挟んだ。

「わたくし共の力は、神に忠誠心を持つ者にしか使えません。仕えると決めたその日から、わたくし達にはロザリオが与えられるのです」

「ロザリオが？　おっちゃんはそんなもの持ってないけど、使える

よな？」

あ、そういえば。レイは知りたがりな分、鋭い所を突いてくれる。
わたしも、どうして使えるのか聞いてみた。

「私の場合は、回復は魔法の扱いだ。私は、傷が治る詠唱、そのイメージを思い浮かべる事で、回復が使える…」
「へぇー」
「ただ…私の力よりかは、修道人達の方が上回っているだろう。そのロザリオは…癒しの力を使う源のようなものだからな」

そう言って、右目は彼女のクロスペンダントに向けられた。
マリアは、両手でロザリオを持つ。大切そうに、眺めていた。

「そう…わたくし共は、このロザリオを持ち、神に祈りを捧げるのです。それがやがて、人の傷や病気、心の病さえも癒せる力として、神が答えてくれるのです…」
「ふーん……」

要は、魔法とは違う特別な力。
神を信じ、神を愛し、神に全てを捧げる人でなければ手に入らない、心の力なのだろう。

「まぁ…細かいのはよくわかんねぇけど、魔法と回復は違うって事はわかったぞ。おっちゃん、サンキュー」

これでやっと満足し、笑顔でお礼を言うレイ。
ムーンはただ頷き、目を閉じる。高熱なのに、わざわざ話してくれるのだから…ちゃんと休ませてあげなくては。

「っ？」

突然、馬車が止まった。
少し大きく揺れて、動かなくなり、何事なのかとキャラバンから急いで出た。
ムーンまで外に向かおうとしたので、わたしは無理矢理制し、わたしとレイとマリアで、先頭の様子を見に行った。

「どうされましたか！？」

他の修道人も、キャラバンから出てきた。
マリアが彼らに問いかける。

「魔物が現れました！　それも、教皇様と司祭長様が乗っている一番前のキャラバン前に…」
「ええっ！？」
「ヘスティアー様は大丈夫だから、中で待っているよう言われましたが…心配で……」

不安で不安で仕方ない、彼らからそんな気持ちがにじみ出ている。

「レイ！」
「おうっ！」

戦えるわたし達の出番だ。わたしはレイに一声かけ、レイも短く答え、これで了承し合った意。
わたし達はこの長いキャラバンの列を、たどりながら駆け出した。

「あ！　お待ち下さい！！」

それにマリアの声、追いかけてくるのが気配でわかる。
わたし達を止めたいのであろう。
でも、わたし達は腕に自信があった。だから振り向かず、向かったのだが

「はぁ！！！」

ヘスティアーさんの姿と声が見えた瞬間、犬のような狂暴化した大きな獣一匹に、雷のような光が当てられた。
思わず足が止まる。
そして

「これでいいでしょう……」

光が収まり、獣は小さな犬になった。

「魔界の力が抜け、本来の獣に戻ったのです…」
「えっ？」

わたし達に追い付いたマリア。息を切らしていた。

「ヘスティアー様は、そのような、魔物を浄化する力を、持っていらるのです……わたくし共の力は、魔物達の罪さえも、許せる力なのです……」
「マリア、無理しなくていいから……」

ぜいぜい言いながら、司祭長の力、さらに修道人の力を誇らしく語るマリア。

「マリアンヌ、もう終わりました。動物も、森へ帰りましたよ」

ヘスティアーさんに言われ、ふと周りを見渡した。
キャラバンは、人工的に切り開いた森の中の道をたどっている。
サーサリー大陸は、自然豊かな森林が多いのだろうか。

「帰りが遅くなりますから、後方の皆様にも済んだ事を伝えて、キャラバンに戻りなさい」
「はい、司祭長様」

依然厳しい司祭長。彼女に言われた通りに動き、教団達は帰路への進行を再開する。

＊＊＊＊＊

「ヘスティアーっておばちゃん、なんか怖ぇなぁ……」
「ちょっとレイっ！」
「いてっ！」

揺れるキャラバンの中。
レイが不満げに言うものだから、わたしは思わず彼を叩いた。
だって…マリアの前でそんな事言ったら、失礼だろうに。

「何すんだよアルテミス！！」
「あんたねぇ！　少しは考え！　マリアがいるのに…！！」
「いえ、いいんですよ。街の方々も、司祭長様はとても厳しいお方だとおっしゃってますから……」

マリアは苦笑いしながら答えてくれた。

「でも…マリアにとっては大事な人なんでしょ？　こんな風に悪く言われて悔しくないの？」

わたしは悔しい思いがある。
父も兄も、あの大戦では被害者の仲間。にも関わらず、二人を悪者として見る者がたくさんいた。
だから、本当に悪かったとしても、わたしは相手の身内をけなす事はしたくない、と思っている。

「ええ……ですが、それが司祭長様ですから」

彼女は微笑みながら語り始めた。

「どんな言われようをしても、ヘスティアー様はわたくしを拾って下さった方なのです。血の繋がりはなくとも、わたくしはあの方を家族として思っています」
「家族…か……」
「そう……」

家族……いい響きだと思う。
血筋を越えた関係。すごく羨ましく思った。
レイは何やら考え事を始めたし、黙っていたムーンはゆっくりと目を開け、マリアを見る。
わたしは……まず、母を思い出した。微笑みながら死んでいった、わたしのたった一人の母親。

（わたしも…必ず、家族に戻りたい……その日までは…）

もう何回目かの、心に決めた思い。何度も決意して、自分を保ち、

夢に向かっていく。
…今はそれどころじゃないけど、時間はある。いつか、必ず…。

「わたくしは、捨て子だったんです……」

沈黙になったこの中で、マリアが話し始めた。ゆったりとした、しゃべり方。

「夜……ユーピテルの教会の前に、わたくしは置き去りにされて、泣いていたのだそうです。教会は孤児院も担っておりましたから、わたくしは司祭長に拾われたのです」

物語を語るようなそれに、わたし達は耳を傾けた。

「わたくしは…この恩を、司祭長や教皇様、そして、わたくしの存在を産んで下さった母なる神に感謝をしようと、修道女になりました」

彼女の生い立ちは、いろいろな経験をしたに違いない。
苦しい事。つらい事。
嬉しい事。楽しい事。

「わたしは、教団の皆様とは、家族なんです。これからもずっと」

それが、今、彼女が誇れる事が出来る、基盤のようなものなのだろう。
それはこれからも、積み重ねていくに違いない。

「すみません……なんだかわたくしが一方的に話してしまって」
「いや、大丈夫よ。元々はレイが言い出したのが悪いんだし…」

「えっ？　おれなの！？」
「空気を読まなかったお前が悪い」
「おっちゃんまでぇっ！？」

荷物運搬用キャラバンの中。
わたし達の楽しそうな笑い声が響く。

＊＊＊＊＊

第二十四章

―――――――――
神の地　ユーピテルと
サーサリー教団
―――――――――

揺れが止まる。馬車が止まる合図。
外から人のざわめきが聞こえる。街についたのだろうか。

「着きました…。神の街、ユーピテルです」

やっと、外の光を得られる。始めにマリアが外へとおりた。
わたし達も後に続き、外へ出ると

「うわぁ…」

街並みはサンポリア王国と同じくらい。村とは違い、民家も人も多い。
というか…何故こんなに人が集まっているの？

「うわぁ…こりゃとんでもねぇ信者の集まりだなぁ…」

レイニーが困った表情で呟いた。
それを聞いて納得。この街の人々は皆、神の言葉を伝える事が出来る教皇様の、帰りを待っていたのだ。

ふと振り向くと、今まで見た中で特に大きい教会がそびえ立っていた。

「大丈夫ですか？」
「すまない…」

マリアンヌがキャラバン内最後の一人、ムーンに手を貸し、彼を中から外へ連れ出す。
怪我は治ったからいいが、熱で足取りがおぼつかない。

「教皇様か司祭長様に解熱を施せるかお頼みします…」
「いや…いい。私達はすぐに帰らなくては」
「！」

自分の状態よりも、帰還を優先する彼。
これじゃあ、いつか魔物に襲われた時に危険だ。

「マリアンヌ、何をしているのですか。荷物運びはよろしいので、早くお連れ様を中へお招きなさい」
「あ、はい！」

ヘスティアーさんがまたも急かす。
マリアは慌てて返事をし、ムーンを連れて行こうとする。
彼の表情…見るのは珍しい、嫌がっているように見えるが、渋々従っていた。
わたしもレイも、彼女を助けに行く。

＊＊＊＊＊

教会の扉を開ければ、誰もが知っている礼拝堂内部を見渡せる。
違うところは、他の教会よりも天井が高く、広く、造りも豪華な事。
祭壇の向こうに、神様の姿を描かれたステンドグラス。
パイプオルガンもあるし、十字架も立っている。
長椅子も配置されているが、やはり数が違う。
太陽の光も、そろそろ昼になる頃、窓から注がれていた。

「司祭長様、お願いがあります」
「なんですか？」

わたし達がムーンに付き添い、マリアはヘスティアーさんに頼みに向かった。

「……そう。それでしたら、こちらへどうぞ」

わたし達は、礼拝堂の奥にあるドアの向こうへと招かれた。

＊＊＊＊＊

ドアを開ければ、先程の礼拝堂とは真逆に狭い廊下が続く。

「こちらは修道人達の共同部屋なんです」

歩けば、両壁に一定感覚にあるドア。マリアが説明してくれた。
そして、さらに奥まで行き、ある一室のドアを開けるヘスティアーさん。

「それでは、このベッドに横になって下さい」

窓が一つある、寝室のようだ。ベッドは四つあるが、眠る為だけの部屋なのか、それ以外の家具はなく。少し狭い。
わたし達は彼を寝かせようと、防具を外す作業に取り掛かる。
が、ムーンは甲冑を脱ごうとしてくれない。

「……やはり、早く戻らなければ…」
「ここまで来て何言ってるのっ？」
「そうだよおっちゃん！　せっかく治るんだから！」

本当に珍しい。逆らわず、文句も言わず、忠実に働く彼がワガママを言って拒む。
そこまで騎士団の皆と合流したいのだろうか。

「司祭長様…」
「……」

マリアが司祭長に助け船をもらおうとする顔を向ける。
司祭長は考え、悩み、そして、

「わかりました…今から治療を始めます」
「なっ…！？」

ヘスティアーさんがロザリオを両手に持ち、祈る形を作った。
ムーンは言われ、目を丸くする。

「『神よ、この者に天使の加護を与えたまえ』…」
「や…やめろ…！！」

しまいには声を荒げて制してきたが、

「っ……」

がくりと、気を失ったかのように眠ってしまった。
それにはわたし達も驚き、彼の身体を揺らしたり、名前を呼んでも起きなかった。

「おっちゃん……どうしたんだ？」
「なんで寝ちゃったのよ……ねぇ、ムーン！？」

どんなに揺らしても起きる気配なし。まるで、眠りの魔法をかけられたかのようだ。

「ヘスティアーさん？　あなた……一体何を？」

まず、こうなった原因を探るため、ヘスティアーさんを疑った。
だが彼女は、いつもの顔色で答えた。

「いいえ。私はただ、解熱を施しただけです。我々の力に、相手を眠らせるような効力はありません」
「えっ？　……じゃあ、一体なんで……？」

ヘスティアーさんじゃないとなると、一体何が？

「もしかしたら……高熱から解放されて、疲労がどっと溜まったのだと思います。それがこのような状態になったのではありませんか？」

マリアが遠慮がちに、推測を語る。

そう言われると、納得出来る。
彼はずっと苦しかったのに、必死に平常を保っていたから。

「でも……困りましたね。急に眠られてしまっては…」

さも迷惑そうにヘスティアーさんが言う。
原因がわからないんだから、そんな事言われても困る。
わたしはレイを見た、そしたら彼もこっちを見てきた。
お互い、ヘスティアーさんに対する気持ちは一致していると知る。

「司祭長様。どうかこの方を、準備が整うまで泊まらせる事は出来ないでしょうか？」
「え？」

マリアがヘスティアーさんにさらにお願いをする。
これにわたしも驚き、ヘスティアーさんも予想外だった、という表情を見せた。

「この方はわたくしのロザリオを大切に持って下さった方なのです。そのお礼も込めて、どうか彼らに、部屋を与えては頂けないでしょうか？」

必死にの頼みだった。わたしに感謝したい気持ちが伝わる。
それにヘスティアーさんはまた考え始めた。そして

「……いいでしょう。ただし、この事を必ず、教皇様に伝えるのですよ。よろしいですね？」
「は……はい！　ありがとうございます！！」

許しを得る事が出来た。正直、内心は安堵した。

レイはわかりやすく、表情は安心感に満ちている。
マリアはヘスティアーさんに感謝の意を込め、十字を切り、祈った。

＊＊＊＊＊

「ごめんなさい…なんだか、迷惑かけちゃって」
「ごめんな、マリア」

ヘスティアーさんが去った後のこの部屋で。
わたし達はベッドに腰掛けていた。向かいにマリア、隣には同じ場所に座るレイ。
左側、向こうのベッドには、武具を外し終え、横たわらせたムーンが眠っている。

「いいえ。これも、何かのご縁。神のお導きに違いありません……」

わたし達が謝っても、むしろマリアは歓迎してくれた。

「このまま待っても……ただ時間が過ぎるだけよね…」
「だよなぁー…どうする？」

もうそろそろ昼時。ご飯が欲しくなる頃。よくよく考えたらわたし達、今日一日何も口にしていない。

「でしたら、ユーピテルを見に行ったらいかがでしょうか？」
「えっ？」

マリアがそう勧めてきたので、わたしとレイのびっくりする声が揃

った。

「ここは神の地であります故、世界各地から巡礼の旅をする者がここを訪れるのです。言わば、観光地のように、有名な街なのですよ」
「でも…ムーンをおいてくワケにもいかないし……」
「ムーン様でしたら大丈夫です。わたくし達修道人にお任せ下さい」

なんて親切。彼女は本当に、素敵な人だ。
わたし達は彼女に礼を言い、街へと出た。

＊＊＊＊＊

「にしても……サンポリアとおんなじくらいかしら？」
「だろうなぁ。ここは神の地だから、繁栄してるんだろうなぁ」

街並みを歩く。
ここもアルス村同様、森の中にある街のはずなのに、街の周りは高い城壁のようなもので守られ、森の木々なんか中々見えない。
人々も見た限り、交流が良く、楽しそうに会話する人達もちらほら。
子供達はキャッキャと遊んでいる。

「それにさぁ……ふと思ったんだけど」
「？　何？」

歩きながら会話するわたし達。隣にはレイ。
話題を提供した彼の顔を見た。

「おれ達、こうやって二人になるのって滅多にないよな」

「……あ、そう言えば」

騎士団に入ってから、レイ達と仕事を共にはしてきたが。
レイ個人と二人きりになるなんて、これが初めてなのだろうか？

「よし、せっかくだから何か食いに行こうぜ！」
「え？　でもまだお昼じゃないし……」
「朝飯だよ朝飯！！」
「うわわっ」

無理矢理手首を掴まれ、走り出したレイ。
わたしも引っ張られつつも、足並みを揃えて彼と走る。
彼の手はちゃんと、わたしを離さないようにしっかり、でも強過ぎず。

＊＊＊＊＊

「まいどありー」

出店で売られていた焼きリンゴを買ったわたし達。

「これのどこが朝飯なのよ」
「悪ぃ…お金ないの忘れてたわ…」

彼がおごるというから、ちょっと期待したのに。
それが火を少し加えた果物だから、ちょっと残念だった。
苦笑いしながら、彼はわたしに串一本に刺さった丸々一個の焼きリンゴを渡した。

「でも…ありがとう」
「えっ？　あ、うん、どういたましー」
「何言ってるの？」

それでも嬉しかったから、お礼を言ったら、不意を突かれたように焦りつつ返事をするレイ。
それが面白くて、つい笑ってしまった。
レイもつられて笑ってくれた。
また散歩みたいに歩き出し、焼きリンゴを食べていた時だった。

「急げ急げ！！」
「坊や！　さぁ速く！」
「待ってよママー！！」

わたし達を抜かしながら、必死に駆け出す街人達。
ふと真っ直ぐ先を見ると、あのサーサリー教団の教会が見えた。どうやらこの大通りをたどって、街を一周したらしい。

「何かあったっけ…？」
「さぁな…？」

リンゴが刺さった串片手に、わたし達も後を追った。

＊＊＊＊＊

「うわっ」
「人、多いね…」

教会前に戻ると、辺りは人が多くいた。

「早く中に入って！」

「押さないでぇ！！」

ぞろぞろと長い列が、教会の中へと吸い込まれる。

一体何をするというのか。

「おやおや…そこの若いのは、旅の者かの？」

老人に声をかけられた。杖を持ち、それで身体を支えているご老人だ。

旅…という程のものではなかったが、そう見られているならば仕方ない。わたしは、はい、と答えた。

「教皇様が、お昼の礼拝を始めるのじゃよ」

「えっ？　昼飯前だってのに…？」

くだらないけど、聞いてしまうレイにとっては、それよりもご飯を優先する。

ここに来るまで、焼きリンゴも半分になっているし…食べるの速い。

「毎日ユーピテルの教会では、朝昼晩に、教皇様の教えがあるのじゃ。街の者全てと言っていいほど、ユーピテルの住民は神を愛し、教皇様を称えるのじゃ」

「へぇー…」

きっと、どこの大陸よりも、ここでは神様は一番に愛されているのだ。

この熱狂ぶりだもの。信仰は、生活の一部になってしまっているのだ。

「若い者よ、せっかく来た街じゃ。参加してみてはどうかの？」

中に入るなら、その手の食べ物はちゃんと食べきるのじゃぞ、と注意され、老人は列に混じっていった。

「礼拝…ねぇ……」

わたしは神を信じてないワケじゃないし、かと言ってそこまで愛してはいない。それはさっきも思った。

言うなら、中立の立場だ。神を信じるか否かは自由、都合のいいポジション。

「時間潰しにはなるはずだぜ。行ってみっか？」

「うん、そうね」

ムーンが動けない以上、わたし達もユーピテルからは出られない。

時間は有効に。

レイからもらった焼きリンゴを食べてから、わたし達も教会内部へ入った。

＊＊＊＊＊

第二十五章

―――――――――
これが教会？
何かが違う……
―――――――――

中に入れば、教会の礼拝堂内部は大変な事になっていた。
長椅子は全て埋まっており、座りきれない人は両端の壁や、入り口から真ん中にある、祭壇へと真っ直ぐの通路に立ち尽くしていた。
祭壇にはまだ、教皇様はいないようだが、修道人達も彼を待っているのか、祭壇の端に待機していた。

「すげぇなぁ……どんだけ神様好きなんだよ」

ガヤガヤとしている中、レイの呟きはわたしにしか聞こえない。街人達がお喋りをしているのだ。
わたし達も、椅子には座れないから最後尾の壁を背に立っていた。

「これで全員でしょうか？　それでしたら、扉を閉めます。礼拝が始まるまで、もう少々お待ち下さい」

と、聞き覚えのある女性の声が人々を呼び掛け、扉の閉まる音がした。
人の隙間を利用すれば多少は歩けるが、それでもここは狭い。
これで街人全員かどうかは定かじゃないが、これだけ入れるとなる

と本当に教会の大きさを実感する。

「あら、アル様、レイ様も来ていたのですね」

と、やはり先程の声の主はマリアンヌだった。
わたし達を見つけ、こちらにやって来た。
人と人との間を通っても、平気な顔だ。慣れているのだろう。

「サーサリー教団ってすげぇんだな……まさかこれ全部街の人？」

レイが、わざわざ来てくれた彼女に質問をした。
マリアは当たり前のように、はい、と答えて、続ける。

「教皇様はじめ、わたくし共教団は四ヵ国の王からも認められております。街の人々は、必ずと言っていい程、教皇様のお話をお聞きに訪れるのです」

誇らしく語るのは、やはり神を愛しているのと、教団の皆を家族と思う心からなのだろう。
彼女の誇りというのは、教団そのものに違いない。

「おお……ドアが開くぞ…」

と、一人の住人の声に、この場がしんと静まった。
ドアとは、祭壇の奥にある、修道人の皆の部屋があった、あのフロアに続くドアだ。
息の音も小さくし、この場にいる信仰者は期待に胸を膨らませていた。
が

「あれ…？」

現れたのは教皇ではなく、司祭長ヘスティアーさんだった。
これには街の人はざわざわと騒ぎ始めた。

「教皇様はこちらに帰った後すぐに、お身体を悪くしたらしくて…
…今は休養をとっておられます…」
「うそっ？」
「マジ？」

小声でマリアが教えてくれた。
普通の声量じゃないのは、周りの一般人に知られてはならないからなのか。

「この事は今からヘスティアー様がお伝えして下さいます。教皇様が良くなるまでは、ヘスティアー様が代わりに教皇様の立場になります……」

不安げな顔もわかる。教団のメンバーにとっては、父であり、祖父でもある教皇だ。
その彼が倒れたというのは一大事で、修道人達の表情が暗くなるのは仕方がない。
なのに

「せっかくお集まりになった皆様に、お知らせがございます…」

ヘスティアーさんは顔色変えず、いつも通りの彼女で、祭壇に立ち、街人に呼び掛けた。ポーカーフェイス…？

「……おかしくねぇか？」

「何が……？」

ヘスティアーさんが教皇様に関する知らせを伝えている中、レイが耳打ちで問う。

「朝、あんなに元気に見えたのに……どうしてユーピテルに帰るなりベッドに倒れたんだ？」

「わからないよそんなの……」

「無理したのかな？　わざわざ村まで行ったんだし」

「……そうだといいけど」

ただの疲労ならば……問題ないが。

ヘスティアーさんが教皇が倒れた事を話し、周りがまたざわめく。

それを彼女は厳しい一声で制し、しばらくの間はヘスティアーさんが教皇の代わりとなる、という事を人々に伝えた。

「それでは…」

と、ヘスティアーさんは、本来の目的であるお話を始めた。

司祭長もやはり人々に慕われているらしい。静聴している。

「……」

「……」

「……」

わたしもレイもマリアも、一言も話さず彼女の言葉に耳を傾けた。

教皇様の話は少ししか聞けなかったが、ヘスティアーさんのを聞いてみると…

（なんだか……ヘスティアーさんの厳しさがそのまま表れてる…）

神の偉大さ、尊さ。神がいるからこそ我々人間は……という、神様を誇張する話を荒々しく物語る。言わば演説。
村で聞いた教皇のものは、子供にもわかりやすく、ちゃんと聞かせようと心掛けている気持ちが伝わった。

「やばい……眠たくなっちった……」
「ちょっと……」

声音のない声で、さらにあくびを隠しながらレイが言う。
わたしも声音無しで彼に注意するが、二度目のあくびをする始末。

「それでしたら……外へお連れしますよ」

と、マリアも声音無く、わたし達に話しかけてきた。
司祭長が話をしているのに、あくびを許す彼女。

＊＊＊＊＊

マリアが上手く誤魔化してくれた。
本来なら、礼拝時間中に抜け出す事はご法度だと言うが、気分が悪い、という理由で説明してくれるという。

「本当に悪ぃ…マリア…」
「いえいえ……無理をなさってはお身体に毒ですから」

マリアにいらぬ負担をかけるきっかけの男が、彼女に謝罪をする。
わたし達は出入口の近く、教会の前にいる。

「本当に、信者の皆って苦に思わないのかしら？」
「厳しいのも、神様の思し召しだと思っていらっしゃるのです。何も苦に感じてはおりません。わたくしも」

マリアはそびえる教会を見上げ、そう答えてくれた。
信仰心とは、人間が無理をしても保てる力というのだろうか。
今日は、神や修道人、信仰者についていろいろ考えさせられる。
時間潰しとして、マリアから街の店についていろいろ聞こうと思ったら、

「っ？」

扉が開かれた。なんだろうと思ったら、街人達がぞろぞろと出てくる。

「礼拝が終わったみたいです。予定より早いですね」

とマリアも不思議そうな顔で、人々の帰る姿を見送った。

「あ！　いけない！」
「えっ？」
「ちょっとマリア！？」

急に思い出した声をあげ、マリアは人にぶつからないよう避けながら、教会の中へと戻っていく。
わたし達も、彼女が気になり、人と人との間を抜けて中へ向かった。

＊＊＊＊＊

「どうか、この神の街ユーピテルの発展の為に、少しでも構いません。寄付をお願い致します」

中に入るなりヘスティアーさんの声が内部で響き渡った。
中では、修道人達が持っている編みかごに、銅貨等の小さな数字のお金を入れて、帰ってゆく人々。
皆、本当に満足した顔で帰っていくのである。

「おいおいマジかよ……」

レイの呟きにも、わたしは賛同の意味で頷いた。
マリアは修道人達の元へ行き、仲間から編みかごを受け取って、寄付集めに加わっていた。

「教皇様がおらんかったのは残念じゃったのぉ…」
「でもおばあちゃん…あたし、神様にいい事したよね?」
「ああもちろんじゃよ」
「ねぇあなた…これで私達の夫婦仲も良くなればいいわね」
「ああ。だけど、俺にとって君こそが女神様なんだけどね」
「まぁあなたったらぁ」
「これでわしらも神様に愛されるぞ!」
「父ちゃん、夜も行くんだよね!?」
「おうよ!」

去りし人々の会話が耳に入る。
聞いた限り、この教会から出ようとする者が皆、寄付をした事がわかる。

「な…に、これ」

思わず呟いてしまった。

「さぁ……？」

レイも呟いて返事してくれたが、答えにはならない。

貧しそうな人も、裕福そうな人も皆、次々にお金を編みかごに入れる。

わたし達は建物内の隅で、その光景を眺め、信者全員がいなくなるのを待った。

＊＊＊＊＊

寄付の時間は終わり、教会は静けさを纏う。

修道人達は、司祭長に指示され、お金が貯まったかごを定位置らしい祭壇に置いた。

そして、各々に隣のフロアへと帰っていく。

マリアだけはわたし達の元へと向かって歩んできた。

ヘスティアーさんはかご１つに全てのお金を入れ、修道人と同じくドアを開けて行った。

「街の方々は、本当に心優しい方ばかりです」

マリアも、街人と同じような満足感を語った。

「そのお金って、どーすんだ？」

最大の疑問をレイが聞き出そうとする。
一人一人の持ち合わせが少量でも、あれだけの人数ならば貯まるものもすぐ貯まる。
一体、何に使うというのか。

「ヘスティアー様の考えでは、街の貧富の差をなくす為に、貧しい方々には集めたお金をお分けするのだそうです」

なるほど…信者を皆、平等に扱う為に、そんな事をするのだろうか。

「でもあれはやりすぎじゃねぇか？　分けるには充分過ぎるじゃん」

レイがまだ納得しない、苦笑いの顔でさらに問うが

「余ったお金は、街の発展の為に、町長さんと検討して使い道を探す予定だそうです」
「ふーん…」

彼女が丁寧に、わかりやすく言えば、レイもすんなり疑問をなくしたようだ。が

（なんか引っ掛かる……）

わたしの中ではどうも、決着がついていなかった。
世間で言う『女のカン』か。それとも、ただの気にし過ぎか。
どっちだ、と言われてもすぐには選べない。脳内の隅に、それは課題として保留にしておく事にした。

＊＊＊＊＊

昼食を教会側が用意してくれるというので、わたし達は修道人達が使う食堂にやってきた。
礼拝堂には劣るが、それでも充分広い部屋に、決まった配列の木製テーブルが並べられている。椅子も木製だ。
食堂では既に、何人かの修道人、そして子供達がご飯を食べていた。

「あれ？　肉とかないの？」

先に食べていた人達のメニューを見て、レイがマリアに聞く。

「わたくし共は、他の生物の命を頂くワケにはいきません。ですので、植物や木の実を食べております」
「えー！？　お肉ないのー！？」
「仕方ないでしょ？　わたしだって魚があったら食べたかったわ」
「うー……」

駄々をこねらせる前に、わたしも我慢する事を添えて制せば、レイも渋々受け入れてくれた。

「あ、マリアンヌお姉ちゃーん！！」
「マリ姉、その人だぁれー？」

すると、昼食中の子供達５人、マリアを見るなり椅子から立ち、駆け寄ってきた。
一緒に食べていた修道女達はびっくりし、彼らを追い掛けてきた。

「この子達は…？」

わたしはマリアを見た。

「わたくしのお友達です。これから一緒にご飯を食べるんですよ」

だがマリアはまず、子供らの相手をしていた。
腰を低くし、まだ幼児の子供に目線を合わせる。

「じゃあ一緒のテーブルで食べよーよ！！」
「お兄ちゃんお姉ちゃんこっちー！！」

今度は子供達がわたし達の元に群がってきた。
防具の装飾を引っ張ってきたら、後ろから無理矢理押してきたりと忙しい子らだ。

「こら、お客様が困ってますよ。あなた達は自分の席につきなさい」
「はぁーい……」

保護者的存在の大人の修道女が、彼らをやんわりと叱った。
これなら普通の子供は反発しそうなのに、この子らは落ち込みながらもすんなり言う事を聞いてくれた。

「もう……元気でいいのは構わないけど、元気過ぎるのも困るわ」
「元気であるのが、子供の特権ですもの」

先輩シスターが疲れたように笑い、マリアも微笑みながら、テーブルに戻る彼らを見て答えた。

「あの、マリア…」
「ああっ、すみませんっ」

わたしの問いを思い出してくれた彼女、すぐに謝罪をしてくれた。

「先程もお話しましたが、ここは孤児院も兼ねているのです。親を亡くした子、捨てられた子、帰る家をなくしてしまった子……そんな子供達を、わたくし共は引き取っているのです」

子供に向ける目がとても優しい彼女。言葉にも、まるで母親のような雰囲気が伝わっていた。

「子供は、神様から贈られた素敵な宝物なのです」

宝物…。わたしはその言葉に印象を持った。

マリアの話が続く。

「だから、その宝物を亡くすワケにはいきません。わたくし共は神に仕える身分……全ての命を、大切にしなければなりません」

ここまで聞くと、修道人達は平和主義者なのであろう。

ユーピテルに来る途中に魔物が襲ってきたが、ヘスティアーさんもそれを倒さず、生かしてしまったのだから。

「立ち話もなんですから、お昼にしましょう」

振り返り、にこりと微笑む彼女。

わたし達も同意し、子供らが待つテーブルへと向かった。

＊＊＊＊＊

てっきり野菜ばかりかと思ったが、そうでもなかった。
麦パンと果物ジャム等と言った、朝食のようなご飯もあったが、それでも充分満足であった。

「ムーンのおっちゃん起きたかな？」
「ああ……そういえば」

この食堂と言える部屋の洗い場に、食べ終わった後の皿を片付けを手伝ってから。
レイがふと呟き、わたしも気になった。

「一度見に行きます？」

マリアが問いかけてきたので、わたしは頷いた瞬間

「アルテミス姉ちゃんどこ行くのー？」
「あたしも行きたーい！！」
「ぼくもー！！」

子供らがわーわー騒ぎ出した。好奇心旺盛だ、レイみたい。

「……でもなぁ…」
「皆さん、お姉さんのお友達は今、寝てるから、行くなら静かにして下さいね」
「はぁーい…」

まだ行ったワケじゃないのに、マリアが子供らにそう言ったら、子供達は声を急に小さくして返事をした。

＊＊＊＊＊

食堂を出て、覚えるには時間がかかりそうな廊下の道順を、マリアが先頭きってすいすい行く。
彼女を追えば迷わずに済む。
ここです、と彼女が示すドアは確かに見覚えがあるが、他のとは区別がつかない。
コンコンとノックをし

「失礼します」

とマリアが先に入る。それに続き、わたし、レイ、子供達の順に中に入る。

「この人がレイ兄達のお友達ぃ…？」

まだムーンはベッドに眠っていた。
子供達は空いてるベッドに腰かけたり、ムーンのベッドに……乗ろうとしている男の子が！？　これは慌てる！

「ちょっと！　危ないですよ！」
「うわわっ」

わたし達が動き出す前にマリアが一喝。
大きな声で言われた拍子に、男の子はバランスを崩し、ムーンの身体を倒れてしまった。

「……」
「お、おっちゃんすげぇ……」

子供の体重が軽いのが幸いか、ムーンは全然起きる気配を見せない。

「こらっ！　危ないったらありゃしない！」
「うわぁーん！　ごめんなさいアル姉ちゃーん！！」

わたしは無理矢理男の子の腕を掴み引っ張る。
彼から男の子を引き剥がす為。
それで怖いのか必死に謝る男の子。
手を離したらすぐに静かになった。

「アルテミスがこんなに大声出してるのに起きないなんてな……」
「本当に疲れているんですね……ふふ」

レイはますますムーンに感心するし（感心するべきポイントがズレているのは、やはりレイだから）、マリアは微笑ましく言うし。
ムーンがまだ起きる様子がない。
結局わたし達は、孤児院の子供らと一緒に、夕方まで時を過ごした。

最初は疑いが晴れたこの場所も、後に、ベールを少しずつ脱がされていく…。

＊＊＊＊＊

第二十六章

―――――――――
真夜中、
神の地に魔の手
―――――――――

子供達を相手にするのは大変だ。
マリアンヌ達はじめ修道人達は、本当に苦労しないのだろうか、と思いたくなる。
でも、彼らの子供達に対する気持ちは本当に、我が子を大事にするものと同じように伝わってくる。
まるで、母親、あるいは父親のよう。
父親、というものをわたしは知らないが、母親はわかる。
時に、母と近い年齢の修道女とわたしの母を、重ねて見てしまう。

（やっぱり、今まで見た教会とあまり変わりはないよね……）

建物が大きいか小さいか、人数が多いか少ないかの違いだけだと思う。
夕日もそろそろ沈み出す時刻、子供部屋で相手をしていたわたし達、マリア。

「そろそろ礼拝のお時間ですね……」

窓の外を見て、マリアが呟いた。

その呟きを聞いた子供達も、遊ぶのをやめて、本やおもちゃの片付けを始めた。
子供も参加するなんて、すごいなぁ……。

「もし、参加なさらないのでしたら、外へ行くか、お部屋で待つかどちらかお好きな方をお選び下さい」

失礼します、と一礼し、子供達を引き連れて部屋を後にした彼女ら一同。
わたし達もこの場所に居続けるワケにもいかないので、部屋を出た。

「……どーする？」

レイが第一声に聞いてきた。
街を行っても、大半の人々が出払っててお店等なってはいないだろうし。

「ムーンのいる部屋に戻りましょ。子供達相手に疲れたし…」
「そうだなぁ…」

ゆっくり出来る場所を選択した。

＊＊＊＊＊

しかし

「迷った」

結論を言葉にしてしまいたくなるほど

「ここ広い…」

わたし達は部屋を探すのに苦労していた。
ドアは皆、全て同じ形、同じ感覚の為、どの部屋が自分達が借りている部屋なのか全然わからなかった。
角を曲がっても、真っ直ぐ進んでも、中々たどり着けない。

「あれぇ？　ここ、確か昼飯食った部屋だっけ」
「そうみたい…」

目印になる、両開きの扉を見つけた。
ここを基準にして、ムーンの様子を見に行った時の道順を思い出しながら、進んで行った。
T通路になり、それを右に曲がる。さらに真っ直ぐ進むと、左は壁のまま、右に曲がる通路と真っ直ぐ行く通路に着く。
左側は一定感覚の窓があり、残りわずかの夕日がここを照らす。
でも、燭台は既に火が灯っていた。灯りの心配はない。

「どっちだっけ？　確か…真っ直ぐ行ってまた右に曲がるんだっけか？」
「わからないわよ…」

レイが懸命に思い出しているのはわかるが、確証がないのであてにならない。

「もういい！　こういう時はムーンのダンジョン攻略法よ！」
「なんだそりゃ？」

この前、サンポリア大陸の小さな村で発見された洞窟探索の時に、ムーンが道に迷わない方法を教えてくれた。

「ずばり、左の壁に手をつけて進む」
「ここは洞窟じゃねぇって」

常に左を基準にすれば、必ずどこかにたどり着ける方法である。無駄骨ではあるが、出口にたどり着けるのは確実なのである。
ムーンが教えてくれたその方法で、任務の洞窟探索は無事に終了したのである。

「とにかく行くの！！」
「おい待てよぉ！！」

わたしは、方法を信じてくれない男はほっといて、真っ直ぐ進んだ。

＊＊＊＊＊

しかし、たどり着いたは1つの扉。行き止まりにドアがあった。

「なぁ……絶対ここじゃないって」
「うん」

こんな所に部屋なんてあるワケない。一応ドアに手をかけてみるが、鍵がかかっているのか、開かない。
振り向いて、左壁を基準に引き返そうとした時に

「あ……」

なんとヘスティアーさんと会ってしまった。思わず立ち止まる。
表情はいつもと変わらない。
だが……何か、殺意に近い怒りのものを感じた。ここの立ち入りは禁じられているのだろうか。

「すみません、部屋に戻ろうと思ったら、道に迷ってしまって……」

レイはおっかなびっくりしてて何も言いそうになかったので、わたしは事情を話した。
ヘスティアーさんの表情は変わらないが

「そうでしたか。あなた方にお貸ししている部屋は、ここを進んで左に曲がればあります」

振り向き、指で示しながら教えてくれた。

「子羊は迷い、学んでいくものです。ここは広いので、場所は覚えた方がよろしいですよ」

優しい言葉遣いでも、淡々と言われるとそれを感じられない。
でも、せっかく教えてくれたのだから、礼を言い、わたし達は言われた通りに進んだ。

＊＊＊＊＊

「やっと戻ってきたぁ」

ヘスティアーさんの言う通り、わたし達は部屋に戻ってこれた。依然、ムーンは眠ったまま。
レイは武具を外し、ベッドに倒れ込む。
子守りは体力を使ったし、ここに来るまで散々歩いた。無理もない。
わたしも、甲冑と両手剣を部屋の隅に起き、ベッドに座った状態で後ろに倒れた。
ぽふん、と柔らかい羽毛に身体を預ける。

「……なぁアルテミス」
「……なに？」

わたしは天井を向いたまま。沈黙を破った彼の声を聞く。

「なんでヘスティアーさんあんな所に来たんだ？　礼拝の時間だってのに」
「……！」

確かに。何故あんな所に来たんだ？
気になってしまい、身体が動く。起き上がり、部屋を出てあの廊下を確認しに行、く前に

「……」

ヘスティアーさんがスタスタと前を横切る。手にはあの編みかごを持って。
わたしに気付いたかどうかは知らないが、ヘスティアーさんは見向きもせずに行ってしまった。

「……」
「どしたっ？」

部屋に戻る。疑問を出した本人はベッドに横たわったままだ。なんだか自分の行動が虚しい。

「あそこは倉庫みたい。ヘスティアーさん、あそこから編みかご持って行っちゃったわ」

「なんだ。つまんねぇの」

まさにそうだ。わたしはつまらない事をしたと思った、が…

（だったらなんで他の僧侶にやらせないのだろう……？）

引っ掛かるものがますます増える一方だった。

＊＊＊＊＊

礼拝が終わり、マリア達や子供達と夕食を共にする。

もちろん、他の修道人達も食堂に集まった。

いろいろと話をしたり、教会や街の話を聞いたり。

修道人達はとても面白い話をしたり、個性がそれぞれに溢れていた。

子供達も、大人をからかったり、ふざけたりする為に食堂内は賑やかだった。

「いやぁ～、にしても面白かったなぁ」

「そうね」

部屋に戻り、わくわくした余韻に浸るわたし達。

食べたばかりなのに、ベッドに倒れるように横になるレイ。

にこにこと笑顔が消えない。

「教会の人とか僧侶とかってのは、堅物ばかりかと思ったけどさ、結構皆冗談とか好きなんだな」

「みたいね」

「ご飯は物足りないけど、これだけ楽しいならずっとここにいてもいいかなー」

「ちょっとっ」

それはいけない。レイの発言に思わず言葉が強くなった。

それにむくっと起き上がり、悪ぃ悪ぃと苦笑いして謝った彼。

全く……良いものに流されやすいようだ、レイは。

「で、おっちゃんはまだ起きないワケ？」

慌てて話題を変えるレイ。怒られたくないからした事。

わたしも彼を見たが、まだ目を閉じたまま。

「朝には起きればいいけど……」

「まさか死んじゃってなんかいないよな」

「……」

冗談でも、言っていい事と悪い事がある。

わたしの睨んだ顔が怖かったのか、レイは必死にごめんごめんと謝る。

そんな時に

「うわあああ――――――！！！」

「！？」

悲鳴だ。それは窓越しに聞こえてきた。という事は外からの声だろう。

「ああ……神よぉ！！　我らを救いたまえ！！」
「きゃあああっ！！！」

街の人達に違いない。魔物か何かの襲撃のようだ。
わたし達は顔を見合わせ、すぐに武具を装備。
そして部屋を風のように飛び出した。

＊＊＊＊＊

教会の出入口から出る。薄暗く、でも街にはちゃんと灯火があるから、見えるものは見える。
ここからでは騒ぎの原因が見当たらない。
でも、人混みがここから真っ直ぐ先にある。

「お客様！　失礼します！」
「うわっ」

わたし達を抜かし、その先へ向かおうと走る修道人二人。
街の騒ぎに駆けつけるとは、さすがユーピテルに貢献する……とか思ってる場合じゃないって！

「アルテミス！」
「レイ！」

わたし達も走り出した。先に走った修道人を抜かし、人だかりをジ

ャンプで飛び越えた。
着地した所の先、人々が丸く囲っている中心には、魔物が三体。
地面に根を張る肉食植物だ。
植物のツルを伸ばし、市民に襲いかかる。
が、わたし達より先に着いていた修道人達五、六人が、祈りにより
発動している壁で防いでいた。

「いけない……わたくしも行かなくては」
「ま、マリアンヌ！」

後から来た修道人の中に、マリアがいた。
皆、先発組に加わり、共に攻撃を防ごうと祈りをする。
魔物達は金切り声をあげながら、攻撃をやめない。
ざわざわと怯える街人達……何故避難しないのかと思ったら

「私達も祈りましょう！」
「ああ、必ず神が奴らに制裁を下すに違いない！」
「神よ……ああ、神よ…！！」

街人達は修道人達を習い、指を交差し祈り始めた。
無力だとわかっているのに、何故祈るのか。神を信じる者の考えは
よくわからない。

「皆さん！！　どいて下さい！！」
「ここはおれ達がやるから！　離れろぉ！！」

修道人達に呼び掛ければ、彼らはこちらを振り向く。
同時に、防ぐ壁が消え、植物の攻撃が修道人に

「てぇい！！」

当てさせない。地面を蹴り、水平に低く跳び、修道人達の前に立ったと同時に、ツルを一閃。
ツルの先はポトリと落ち、うねうねと動くが、すぐに止まった。

「修道人さん!!　おれ達がやるから街の人達をなんとかしろぉ!!」
「は…はい!!」

レイが再度呼び掛け、彼らはやっと動いてくれた。
散り散りになり、街の人に遠くへ行くよう呼び掛ける教団員。
その間に魔物が攻撃をするが

「はぁ!!」
「おらよっ!!」

茎から次々と生え、襲いかかるツルをわたしは走りながら斬り裂いた。
レイも、一般人と魔物の動きを見極めているのか、ナイフを百発百中、投げつけて攻撃を防ぐ。

キィィイィ!!

耳につんざく鳴き声。そんなものに怯んでいる暇はない。
僧侶達のおかげで、街の道は広くなり、戦いやすくなった。

「アルテミス!　おれも行くぞ!!」

攻撃が止まらない、だからわたしも対抗して剣を振り続ける。
レイの声が聞こえ、横目で見れば姿がある。

ナイフを次々と、ベルトからさがっている袋から取りだし、投げたり、持って斬りつけたり。

キィィィィィッ！！！

ツルを斬ってもまた生えてくる。この手の相手はどうすればいいのか…考えないと。

奴等の姿をよく見て、弱点を探ろうと思い、足を止めたが

「っ！？」

一瞬の隙、一体の植物に足をとられた。

「きゃああっ！？」

片足は上に持っていかれ、逆さに吊るされた状態になった。

頭に血がのぼる…そんな状態、視界は地上を見下ろす形になる。

「アルテミス！！　うわっ！！」

ナイフを投げようとしたのだろうが、先にツルが襲いかかり、レイは緊急回避。他の二体のツルが彼を追い掛ける。

キィィ……

鳴き声に、真下を見た。

花の形をした顔だ。だが、丸い口が真ん中にあり、チロチロと気持ち悪い色をした舌を見せる。牙が鋭い……肉食の姿だ。

「えい！　えいッ！！」

わたしの足枷となるツルを早く斬らなければ。だが、どんなに剣を振っても、届くだろう部分が避ける。なんて知恵のある魔物か。

「あっ！！」

振った拍子、左剣を離してしまった。
切っ先が丁度、あの花の口に入ってしまった。瞬間

ギィィィィィィィ！！！！！！！

さっきよりも耳にキツい声をあげ、身体全体をくねらせて暴れ始めた。
足のツルもグニャグニャと動き、振り落とされるかのように

「きゃあああ――――――！！！！！！」

ツルが足を離した。
地面を転がり、受け身を取れなかった。

「アルテミス！」

他の魔物を振り払い、レイがわたしの元へ駆け寄る。

「大丈夫か！？　アルテミス！！」
「う、うん…」

レイに手伝ってもらい、立ち上がる。
まだ暴れる植物。よく見ると、胴体と言える茎は、縦に斬られていた。

きっと、わたしが落とした剣によるものだ。

ギィィィィ…！！

そして、茶色になり、枯れ果てた。
葉やツル、花も粉々に砕け、地面に落ちる。
地面に突き刺さったわたしの剣が残った。

「…なるほど」

理解した。レイを見ると、ニヤリと笑っていた。彼もわかったらしい。
あと二体。互いに顔を見合わせた。

「わたしは右」
「じゃあおれは左だ」

分担し合い、共に駆け出した。
レイは言葉通り、わたし達から見て左の植物へと向かった。
わたしは剣を引き抜きながら向かう、右の方へと。

「てりゃあああああっ！！！」

襲いくる何本のツルを、身体の回転も利用して斬り裂く。
剣の舞をしながら、接近し続ける。

ギィィィ！！！

隣の距離。
頭部と言える頭が、最後の手段のように牙を剥いたが、

「えい！」

縦に斬りつけた。それに植物の動きが止まり、

「たぁぁぁぁ！！！」

横に茎を斬りつけた。

真っ二つになり、別れた身体は地面に落ち、枯れていく。

（レイは！？）

彼の方を見ると、何故かツルがナイフにより地面に刺さっている。

動けないようだ。

花はパクパクと口を動かす。だが、茎は伸びない。無駄な足掻き。

「おれのお手製爆弾、くれてやるぜ！」

レイが得意気に、小物入れから何かを取り出した。

手の平サイズ、動物の皮にくるまれた玉。紐が飛び出ている。

その紐を、街に設置された灯火に点火。そこから花の口へと放り込んだ。

何か異物が入った感触を知ったのか、声をあげて暴れだす。だが、ツルは地面に突き刺さってる。そして

ドォォン！！！

爆風は小さいが、あの植物を吹き飛ぶには丁度良かった。

身体がバラバラになり、地面に次々と落ちる。そして、緑色は茶色となる。枯れたのである。

「いっちょあがり！」
「おつかれ！」

互いに歩み寄り、ハイタッチ。
魔物騒動は無事に終わった。

「アル様！　レイ様！」

マリア達修道人達が駆け寄ってきた。
マリアはわたし達に心配の顔を見せる。

「大丈夫ですかっ？」
「ええ、大丈夫よ」
「おれ、カッコ良かったろ！？」

わたしは彼女に答え、レイはレイらしい問いかけをする。
それに彼女も、笑顔を取り戻した。

「良かった……ご無事で…。ですが……」

と困り果てた顔に変わった。一体どうしたというのか。
すると、辺りに人が集まってきた。わたし達の戦いの様子を見ていた街人達だ。だが

「あいつら…まさか剣士だったのか…？」
「ひどいわ……」
「何故ヘスティアー様が駆けつけるのを待たなかったんだ…」
「罰当たり…」
「お花さん…可哀想だよ、ママ…」

「そうね……可哀想だわ……」

ひそひそと、わたし達を憎むような声が聞こえてくる。
先程までに人々を襲っていた魔物に同情する声まで。

「皆様、大丈夫でしたか！？」

司祭長が呼び掛けながら、この人の集まりに現れた。焦る様子は初めて見た。
足を止め、息を切らしつつ、辺りを見回す彼女。
そして、わたし達の目の前にある枯れた花達を見て、目を見開いた。

「ああ……なんて事を……」

おぼつかない足取りで、植物に歩み寄る。
悲しい表情、わたし達を横切り、膝から脱力するように地面に座り込む。

「まさか……これはあなた達が？」

悲しいのが一変、また厳しい彼女。
顔だけこちらを向け、問い掛けてきた。

「はい…」
「だってよ、街の人達が危なかったんだぜ？」

ヘスティアーさんに何か言われる前に、先手に出るレイ。
レイの主張を、彼女は聞き入れるのか。

「……そうでしたか。わかりました…」

おや、性格上何か言い出すのかと思ったが。
それを聞き、彼女は立ち上がった。

「本来ならば、ここは神の地、故に争いは禁じられております。例え相手が感情無き魔物でも、私の力で彼らを浄化し、争いを止めるはずでした」

街の人達がわたし達に非難の目を向ける理由を、彼女が語ってくれた。
だから街人はあんな事を言うのか。

「私が教皇様の看病をなさっていた事により、邪気を感知出来なかった、私に不備がありました」
「そ…そんな事はありません！　司祭長様！！」

マリア達始め、修道人、街の人々も口々に言う。
司祭長様は悪くない、あなたは教皇様が一日でも治るよう勤めていた、とか。
だがこっそり、刃物を振り回したあいつらが悪いんです、って……
わたし達に対する言葉が。聞きたくなかったなぁ…。

「今日…神に召された花達に、祈りをしましょう。アーメン……」

ヘスティアーさんが仕切り、手を祈りの形にする。
修道人、住民達も、魔物だった彼らに弔いをする。

「……」

わたし達は、ただ黙ったままだ。突っ立ったまま。

だってそれじゃあ、魔物に命を消されるかもしれないのに、ヘスティアーさんを待っていては遅すぎるじゃないか。
ヘスティアーさんが目を開けた。

「どうか、彼らを責めぬよう、私からお願いします。彼らはあなた方の事を思い、彼らなりにあなた方を救ったのですから……」

そう庇う彼女の言葉が、今はちょっと嬉しい。普段厳しくとも、実は良き理解者なのかも。
すると、住人からの鋭い視線が柔らかくなるのを感じた。

＊＊＊＊＊

それから、枯れた植物の処理……と言ったらまた変な目で見られそうだが、それは修道人達がしてくれた。
教会の庭まで持っていき、人間の墓地と同じように、地面に埋められた。
これほど全ての生命を愛せるのは、神を信じない者から見れば異常な光景だろうに。

「やっぱおかしいよ、僧侶達って」

部屋に戻り、武具を外しながらレイが愚痴る。彼が神を信じてるのかは知らないが、口振りからは異常者に見えるのである、彼らは。

「それで街が成り立っているなら、文句なんて言えないわよ。むしろ従わなきゃダメよ」
「でもよぉー」

ここが部屋だからいい。さすがに本人達を前に言わせては殺されそうだ。
わたしはそれを想定し、レイに釘を打った。

「やっぱりおっちゃん起きないのか……」
「……ね」

今度は普通に話を振った。
眠り人に目線を向ける。やっぱり眠ってる。なんだか心配になってきた……。

「……朝になんなきゃわかんねぇよな。おれ寝るわ。火、消すのよろしくー」

ブーツを脱ぎ、素早くベッドの布団に潜り込むレイ。
彼のさっきの言葉は、少しだけ不安が消された気がした。

「おやすみ、レイ」
「おやすみー」

燭台の炎を息で吹き消し、わたしも眠りにつく事にした……。

第二十七章

―――――――
太陽も昇るが
月も目覚める
魔界大戦の後遺症
―――――――

朝の目覚ましは、窓越しに聞こえる小鳥の可愛い鳴き声……ではなかった。

「いぃっ！？」
「うわっ！？」

不意に、鐘の音が耳に入る。
それはとても大きな音で、思わず声をあげて飛び起きる程。
レイニーもその被害者だった。

「……えぇっ？」
「何？　一体何が起きたんだよ？」

依然鐘は鳴り響く。一定感覚の一つの音を繰り返して。
ベッドから上体を起こしたまま、互いに目をパチパチする。

「って、まだ日も昇りかけじゃねぇかよ……」
「僧侶達って、早起きなのね……」

窓に裸足で歩み寄り、文句を呟くレイ。
わたしはレイみたいに裸足で歩きたくないので、鉄の守りの装飾付ブーツを履き、防具と武器の装備作業にとりかかる。

「……ムーン。あなたなんなの？」
「ここまで来ると化け物だぞ、おっちゃん……」

綺麗な鐘の音でも、轟音に変わりない。のに、ムーンはまぶたをピクリともせず、眠り続けている。
どうしても話しかけてしまうのは、その異常さがある故。つまり、ツッコミたくなるのだ。

「？」

コンコンとドアをノックされた音。
はい、と返事をし、中途半端のグローブを引っ張りながら、ドアへと向かった。
ドアを開けると

「おはようございます。アル様、レイ様」

苦笑の表情を持ったマリアンヌだった。今はもう鳴り止んだ鐘の音に起きたのであろう。さすが修道女。

「申し訳ありません……驚かせてしまって。起きてしまわれましたよね」

どうやらマリアはわざわざ、あの轟音の事で謝りに来たようだ。
本当に、心優しい彼女だ。

「朝からすげぇよなぁここは。これじゃあ街の連中も起きちまうんじゃねぇの？」

まだ不機嫌なレイがマリアに問う。

言い方が悪い、と思ったわたしは彼を睨んだ。そしたらビビってくれたので、許してやるか。

「ええ。朝の礼拝の為に、街の方々は起きて下さりますので」

「へぇー……」

街の住民も教団員と同じような時間に起きているのか……神の地ユーピテルの名は伊達じゃないと思った。

ってそれは昨日から散々思い知ったが。改めてそう思える。

「もちろん、礼拝の参加は強制しません。また眠っても構いませんよ」

「マジか！？　よっしゃあ！　じゃあおれ寝るっ！！」

「ちょっとレイ……」

マリアのありがたき言葉に、レイは急にご機嫌になった。

そして勢いよく宣言し、猛スピードで布団に潜った。

ああ恥ずかしい……こんなのが騎士団にいる、と知られたくなかったなぁ。

「ごめんねマリア……」

「いえいえ、レイ様ですもの」

マリアも彼の性格を、微笑んで承知してくれた。やっぱり優しい。

聖母マリアに似た名前を持っている分、とても寛大な修道女マリア

ンヌだ。

「それでは、失礼しますね」

と、一礼し、彼女はドアの向こうへと姿を消していった。

「……ｚｚＺ」

「早っ」

沈黙にレイのいびきがわずかに聞こえ、思わず口にしてしまった。
本当に寝たかったらしい。にしても寝付くのが早い。

（まぁいっか。さて……わたしはどうしよっか）

ムーンもレイも目覚めていない。
わたしはレイと違い、あの鐘で目がさえてしまった。
買い物はまず無理に近い、人々は街にいないのだから。
剣の修行でも……と思ったが、いつ礼拝が終わるかわからないし、
終わって帰っていく街人達にそれを目撃されたら、また何て言われるか…。

（わたしも寝れるだけ寝よう……）

甲冑を装備したばかりなのに、面倒だが、身体が軽い方がいい。
両肩と胸と背中を覆っている防具を取ろうとした時に

「うう……」

うめき声。しかも、レイじゃない！

「ムーン……！？」

外す作業中断。
盛り上がっている布団が動いている。
そのベッドにすぐに寄り、彼が目覚めるのを待った。

「ムーン？　大丈夫っ？」
「あ……ああ、アル…」

ゆっくりと目を開け、わたしを確認してくれたムーン。
良かったぁ…安堵のため息がもれる。本当に目覚めなかったらどうしようか、と、心配だったから。

「大丈夫…？　なんか、痛そうだけど……」

そう、普段の平然な顔ではない。もしかして、まだ身体に何かしらの痛みがあるのだろうか？
不安で聞いてみると

「いや……何やら、腹辺りに痛みが」
「お腹が？」
「何かが……のしかかったような」
「の……のし…」

まさか。わたしは昨日を振り返る。
そういえば、ここの男の子が、いたずら半分でベッドに上がり、怒られた時に…。

（昨日のあの痛みが、今ここで来たワケ？！）

なんて時間差。眠っていながらも、彼は五感を受けるというワケだ。
なんて複雑な身体。

「それに……耳鳴りが…」

ああ、と思った。今朝の鐘の音だ。
彼が眠っている間に受けたものは、目覚めた時、一気に受け取ってしまうのだろう。本当に哀れだ。

「うん…いろいろあったのよ。だから……」

詳しく説明したら、いくらムーンでも嫌に思うに違いない。
わたしは誤魔化し笑いで、簡潔にまとめた。

「そうか…。まぁ…いつもの事だ、これといって支障はない」

いつも？　彼はいつも眠る度にこういう目に会うのか？
わたしはそれが疑問に思い、ムーンの顔を凝視した。

「ん？　ああ…そうだな。説明をしなければ……」

わたしの視線に気付いてくれて、ムーンが上体を起こした。そして、ベッドに腰かける。

「『魔界大戦後遺症』というのを、聞いた事があるか？」
「後遺症……？　……」

始めに問い掛けから。
わたしはその言葉を、以前に見たかあるいは知ったかを思い出す。
大戦の後遺症、という事、だよね…？

……あ。

「そうだ…」

思い出した。本で読んだ事がある。

「確か、大戦に参加していた一部の戦士に残る、生活的障害の事よね？」

「ああ。その通りだ」

ムーンはコクリと頷いてくれた。

それは大戦に関する本に記されていた。

大戦から無事に戻ってきた人間の中に、何かきっかけがあると、それにより不利な状況になる、という不便なものだった。

それが大抵、何かしら良い事をしたはずなのに、かえって逆効果を生み出してしまう、という薬の副作用に似たものだ。

詳しい理由はよくわからないが、魔界の負の魔力が身体に染み付いてしまい、それが後遺症というものになっている、と著者は最後にまとめていた。

「私は戦後、最初はそれに悩まされたが……今では上手くそれを避けるように生活してきたが……」

困ったような笑い顔。ムーンは立ち上がり、部屋の隅に置かれた自分の武具へと歩む。

「どんな病状なの？」

彼に向き、わたしは問う。

「お前達の見た通りだ。私は、解毒や解熱の魔力、または祈りを受けると、約一日は眠りについてしまう。どうやっても、起きる事は出来ない……」
「そう…」
それは厄介な後遺症。考えると、大戦の後遺症はとても恐ろしいものだ。
「だから、私の場合、解毒草は貴重で、任務の際には持ち歩く。発熱した場合は、僧侶の力に頼らずゆっくり治している」
「……」
魔法や癒しの力で、生活は苦ではないはずなのに、彼は自分の力で上手く乗り越えているんだ。
ムーンのたくましさに、わたしはまた感心してしまった。
「……」
話が終わって、沈黙。すると
「何故、すぐに帰ろうとしなかったんだ」
「えっ…？」
話しながら装備を終えたムーンが、わたしに向き直ってそう言った。感情はわからないが、怒っているワケではないようだ。
「私は大丈夫だと言った。なのに、何故……」
「それは…」
助けたかったから。ただそれだけで。

「……やっぱり、ほおっておけなかった」
「……我々は出来るだけ早く、騎士団に合流しなければならなかったはずだ」
「関係ないわよ！」
「！？」

確かに、騎士として任務を最後まで果たすのは大事な事だ。でも

「そんな事よりも、ムーンの身体が何よりも早く治さなきゃならなかったんだから……」
「……アル…」
「マリアの受け売りになるけど」

苦しんでいる仲間をそのままに、なんて、出来るワケがない。

「わたし達、仲間なんだから。家族同然でしょ？」

だから、わたし達はここに来て、ムーンを助けたかったのだから。
彼の目を見つめ、わたしはそう答えた。
彼はわたしの言葉に驚いているように見えた。

「…そうか……」

そして、いつもの表情になる。

「ありがとう……」

一言だけ、そう言った。

「ふぁあ～……」

と、区切りのいいところでレイが身体を起こし、あくびをした。彼に注目するわたしとムーン。

「おはよ、おねぼーさん。ちゃんと眠れた？」

目をこすり、まだ半覚醒のレイにそう言うと、ばっちり～、と寝ぼけ気味な返事が。
そして、こするのをやめて目を開けたら

「うぇえっっ！？　なんでおっちゃん起きてんの！？」
「今さっき起きたのよ」

目を丸くし、ムーンをまじまじと見る。
彼の当然のリアクションだった。

「今まですまなかった。今から帰る準備をしようと思うが……買い出しに行くか？」

ムーンがレイに問うと、レイは今度は目を輝かせ、彼に賛同した。
ブーツを履き、防具や武器の準備が早い。
準備が出来、男二人は部屋を出て行った。

「……ちょっと、街にはまだ人がいないわよ！！」

一人になった時、それに気付き、わたしも彼らの後を追うように部屋から飛び出た。

第二十八章

神の地を疑う彼

さすがにレイも空気は読める。
今は朝の礼拝中、故、彼はムーンを連れてこの建物の裏口から外へ出た。

「確か……ユーピテルは今、礼拝の最中だったな」
「ありゃ？　なんだおっちゃん、この街の事知ってたの？」

教会の本来の出入口前に向かって、歩いているわたし達。
ムーンが確認するようにその事を口にしたので、わたしとレイも驚いた。

「過去にここを訪れた事があってな……ここの信者達には度々驚かされたものだ」
「ふーん……」

彼はサーサリー大陸についても知っているのか。
もしかしたら、この世界各地の国を、彼は知っているのかもしれない。
彼はなんでも知っているだろうし。

「ありがたやありがたや」
「これで今日も一日、無事に過ごせるはずだ」
「昨夜のようになりたくないわね」

と、遠くからがやがやとした声がいくつも。
わたし達は足を速め、出入口前にたどり着いた。
どうやら礼拝は終わり、人々が我が家へ帰っていくようだ。

「本っ当に人が多すぎるよなぁ……」
「そうね……」

レイの呆れた呟きには、わたしも同意する。
ムーンを見ると、彼は人の流れを観察するかのように眺めていた。
すると

「この神の地に邪気ある魔物が訪れるのは、私達の祈りがまだ足りないからでしょう」
「おばちゃんも頑張ってるなぁ……」

開け放たれた扉、中からヘスティアーさんの呼び掛ける声が聞こえる。昨日から変わらぬ調子に、わたしはただ耳を傾けるだけだ。

「この地を守る為、争いを起こさぬ為には、皆様の思いの込められた寄付が必要です。どうか、ほんの少しでも構いません。我々サーサリー教団に……」
「何……？」
「？」

ムーンが不意に呟いた。その声には、何かを疑うような思いがあるように聞こえた。

ヘスティアーさんの声がまだ続き、外にまで、小さいが、聞こえてくる。
ムーンは彼女の言葉を注意して聞いていた。
街人の声に惑わされず、彼は耳をすませていた。

「どうしたの？　ムーン……」
「……いや。気になる事がある…」

表情は右目以外、ホータイで巻かれている、だから読みにくい。
けれど、声の様子なら、彼が不審がっているのが見えるようだ。

「この街の教会の僧侶達は、寄付を呼び掛けているのか？」
「え？　うん、そうだけど……」

急に聞かれた質問に慌てつつも答えた。
するとムーンは、顎に手を当てて考え始めた。
太陽も完全に昇り、街に活気が溢れてきた。

「それはない」
「えっ…？」

断言。続けて

「寄付は基本、教会側が呼び掛けるものではない。教会を訪れる者、特に信者ならば必ず貢献をするんだ」
「そうなの？」
「寄付するしないは人の自由だ。神は人々の自由を誰よりも大切にしているからな……」
「……」

教会と寄付についてを語った。
神についても言うが、彼は信者としてではなく、宗教学者として言葉を述べた。

「これだけ大きな教会にも関わらず、寄付を呼び掛ける等、僧侶としては許し難い行為でしかない。それに気付かず、教団の言葉に惑わされる信者達も、他の信仰者から見れば邪道も当然だ」
「む、ムーンのおっちゃん、やっぱり頭いいんだな……」

博識の彼には、わたしもレイも驚くしかない。
でも、これでわたしの中での引っ掛かりが解決した。わたしの疑いは、気にし過ぎではなかった。

「皆様、ここにいらっしゃったのですか？」

礼拝が完全に終わったらしい、人々も元の生活を過ごしている光景。
マリアがわたし達を見つけ、駆け寄ってきた。

「マリアンヌ」
「はい？」

ムーンがすぐさま彼女に向く。

「昨日、一体何があったのか、教えてくれないか？」

彼の真剣な表情に、マリアは一瞬戸惑いを見せた。が、いつも通りの彼女に戻り、

「はい。昨夜、」

と、魔物の襲撃について語った。
彼はマリアの話が終わるまで、黙って聞いていた。

「……マリア」
「はいっ？」

真剣な声も変わらぬまま、ムーンは言った。

「この街に暮らしてどのくらい経つ？」
「わたくしは、拾われた身です。ですから、この街以外の街に住み着いた事はありません」
「何か違和感を覚えないのか？」
「……いいえ…」
「……」

そう聞いて、彼はまた考えて黙り込んだ。
マリアも困惑していた。

「…魔物が街を襲うのは、ありえないはずだ」
「どうして？」
「僧侶がいる街や村には、その僧侶が施した魔避けの結界、または魔法陣があるからだ。魔物がのこのこと街中に入るなど、到底ありえない事なんだ」
「……何が言いたいのでしょうか？」

ムーンの語る事に、マリアが段々嫌な顔になってきた。

「この街はおかしいと言っているんだ」
「おかしい…！？」

断言した彼に、マリアは驚く。
わたしもレイも、彼がここまで言い切る自信にはビックリした。

「あなたは…この神の地を侮辱するのですか！？」

穏和な彼女が怒る等、予想しなかった。

「私はそこまで落ちぶれてはいない。ただ、私が以前見たユーピテルとは違う、と言っているだけだ」
「いいえ！　ユーピテルは昔から変わらずに生きています！！　それは生まれた時からこの街を知っているわたくしが保証します！！！」
「変わらないワケがない。人間も生きていく内に変わる。もちろん、街も、場所も」

ここまで怒るのは、街や教団、神に誇りを持つ彼女だから。
マリアの豹変ぶりに、わたしもレイも怖がっているのに、ムーンは変わらない。対応が冷静だ。

「ムーン様……今まで言った言葉を撤回して下さい。お願いします」

マリアは一度冷静を取り戻し、ムーンに頼みを申した。
争う気はない事がわかる。

「そうだな……まずは、調べさせてもらう」
「何をですか…？」
「この街の状態、この街の教団を」
「！？」

疑い始めたら行動する。

わたし達三人はムーンの言葉に耳を疑った。

「…調べれば、良いのですか？」

マリアは確認の問いをした。

「マリアンヌ。お前も同行してもらうぞ」

「えっ！？」

「この街が変わった事を、自分の目で確かめなくてはならないからな」

「……わかりました」

マリアは挑戦的な目で、ムーンを見上げた。

「あなたに、ユーピテルが変わっていない事を証明します。ご一緒しましょう…」

「ありがとう、マリア」

ムーンも、睨む彼女の見つめ合い、目線を外さない。

ムーンによる、ユーピテル調査が始まった。

第二十九章

―――――――――
ユーピテルと教団の
真の姿　―前編―
―――――――――

一旦、わたし達は教会に戻る事になった。朝食をとらなくてはならない故。
食事中も、わたし達の中での会話があまりなく、特にマリアンヌとムーンは、一言も利かなかった。

（調べるって言ってたけど……）

一体ムーンは何を調べたいのだろうか。
わたしはいろいろ考えながら、パンを口にするが、いろいろと候補が浮かぶ。まずは、魔物が来る原因、教団の方針。これら二つが、ムーンを駆り立てた。

（良い方向に行けるのかはわからないし……）

何やら嫌な予感がする。
何が起きてもいいように、わたしは覚悟を決める事にした。

＊＊＊＊＊

修道人はこの後、いろいろと仕事やすべき事があるという。
教会内部の掃除、街の清掃という奉仕活動、聖書の暗記、子供達の面倒。
マリアは司祭長に、わたし達に街の案内をすると言って、すべき事を後回しにしてくれた。

「すまない、マリアンヌ」
「いえ。わたくしも、改めてこの街を知りたいので」

ムーンが気を遣う言葉を使っても、マリアの様子は外にいた時と変わらない。
少しだけだが、彼女から優しさが消えていた。ヘスティアーさんに近い冷たさを持っていた。

「まずはどこから調べますか？　街の通りですか？　それとも、人々ですか？」

なんでも来い、と構えるような口振り。マリアは彼に質問をいくつもした。

「いや。まずは街の出入り口に連れてってほしい」
「……？」

何故？
わたし達はそういう目でムーンを見た。

「街を囲んでいる高い塀に、地面に描く魔法陣は必要ない。護りが施されているならば、街の出入り口に何かがあるはずだ」

「そうですか……それならば参りましょう」
ムーンの推理を頼りに、村方向の出入り口へと、わたし達は向かった。

＊＊＊＊＊

ムーンの希望通り、わたし達は街の出入り口にたどり着く。
街より外は、森と平坦な道一本。
街を囲っている塀は本当に高く、ここから見える教会の鐘よりは低いものの、それでも充分に。
硬く丈夫そうに作られた塀を、ムーンが手で触り、何かを確かめる。

「でもよぉマリア」
「なんですか？」

ムーンが検索中、ただ彼を見ているわたし達。
レイがマリアに声をかける。

「鉄格子かなんか、門があるならば魔物は来れないじゃんか？　鉄格子もないんじゃ魔物、来ちゃうんじゃ…」
「さっきムーンが言ったじゃないの。教会、僧侶がいる街なら、そういう結界がかけられてるんだから……」

門に何もない事へ対する問いのつもりだったのだろうが、彼は。
一応、ムーンの言った事をわたしが言ったが

「これは……」

「っ？」

ムーンが何かを発見したらしい。わたし達は彼に注目した。
入り口からさほど遠くない距離の壁に、ムーンの手が触れると

「えっ？」
「うおっ、すげぇ…！」

そこから、直径1メートル弱の魔法陣が姿を見せた。
淡い紫色の光を弱く放つ線…。
突然、それが強く光った。瞬間に

キィィィ！！！

「！？」

昨夜に街を襲った同じ植物の魔物が、森から突然現れた。
わたしが柄に手を伸ばしたが、ムーンが先に見えない程の速さで、
肉食の花を横に斬り裂いた。
魔物は枯れて、地面に落ちた。

「こ……これは、一体……」

枯れ死んだ花と、もう光は収まっている魔法陣を交互に見るマリア。
混乱している。

「マリアンヌ。残念だが」

ムーンが現実を突き付けた。

「この魔法陣は、魔物を寄せ付けないものではない。逆の効果をもたらす、禁断の魔法陣だ」

「禁断……！？」

ムーンの言葉にわたし達は驚いた。

特にショックなのは、マリア、彼女であろう。

神の地であるはずなのに、魔物が訪れる。その元凶を見つけてしまったのだから。

「こ……これは、何かの間違いです！！　教皇様が禁断の魔法陣を使えるワケがありません！！　きっと…何かを間違えたのかもしれません！！」

まだ受け入れきれない彼女の反発。やはり、信仰が厚すぎると、確証もないのに神にすがるのであろう。

「……ならば、直接聞きに行くのが早い。教皇と話をさせろ」

「えっ…！？」

ここまで来たら引き下がれない。これは彼の正義、なのだろうか。

ムーンの頼み…否、命令だ、それにマリアは戸惑いを見せた。

「その…教皇様は、昨日、教会に帰った後に、具合を悪くいたしまして……」

つまり、会おうにも会えない状態である、という事を彼女は伝えたいのだろう。

「ただ話を聞くだけだ。無理してここまで連れてくるつもりはない。魔物の被害が出る前に、早く」

「……」

それでもムーンは引き下がらない。レイの好奇心とは違う。探究心。その単語が今の彼に当てはまっていた。

「……わかりました」

彼女は再度、彼に挑戦する。

＊＊＊＊＊

また教会に戻ってきたわたし達。

まだ午前、礼拝堂から中に入り、教皇の部屋へ向かうが、

「あら、マリアンヌ。街の案内はお済みですか？」

「司祭長様……」

廊下でばったりと、ヘスティアーさんに会ってしまったのである。

今日も変わらない冷淡。マリアの表情が若干曇った。

「司祭長殿、遅れましたが、あなたが私を助けて下さった事をお礼申し上げます」

不意に前に出て、ムーンがヘスティアーさんに感謝の言葉を述べた。

「ああ……お客様、当然の事をしたまでです。その後のお身体はいかがですか？」

ヘスティアーさんは、そういえば、というような相づちを打ち、彼の容態を確認してくれた。

「ええ、おかげさまで」

……しかしこの二人、並べる言葉は礼儀正しく綺麗なのに、何故か対立している雰囲気がある。
まるで因縁みたいだ。会って間もないのに、何故？

「おっちゃん怖い…」
「わかってるわよ…」

レイがわたしにしか聞こえない声で呟いてきたので、わたしは制する意味と同意を返した。

「それで…司祭長殿にお頼みしたい事があるのですが」

とムーンが本題を出した。
教皇にお会いしたい、という要望を。しかし

「申し訳ありませんが…教皇様は自室にて休養中です。もし、お礼の言伝てならば、私からお伝えしますので、今回はどうぞご遠慮下さい……」

司祭長に断られてしまった。
そして、これ以上会話は不要だと言うように、ヘスティアーさんはわたし達の側を横切り行ってしまった。かと思ったら

「マリアンヌ」
「はいっ」

急に立ち止まり、マリアに振り向く。

「お客様には申し訳ないのですが、私の付き添いを頼みます。さぁ、いらっしゃい」

「は……はい」

マリアを待つ事なく、ヘスティアーさんはまた歩み出す。

マリアはその彼女の背中を見つめ、そしてわたし達に向いた。

「すみません……司祭長様がおっしゃった通りです。失礼しますね…」

いつもの彼女だった。苦笑いを見せて、ヘスティアーさんの後を追った。

廊下に取り残されたわたし達…礼拝堂に続くドアの、向こう側へと消える彼女を見送るしかなかった。

「ちぇっ。なんだよあのおばちゃん！」

レイは本人がいなくなり、愚痴をこぼした。

「ムーン、どうするの？」

やる事がなくなった。これでは魔法陣の真相を調べられない。

わたしは彼を見上げ、問い掛ける。

それ以前に彼は何か考えている顔だった。

「…本当に教皇は身体を悪くしたのか？」

「え？」

彼の呟きがそう聞こえた。
が、すぐにわたし達を見やり
「仕方ない…。一応、村に戻る準備をしよう。金は限られているが、出来るだけ食料等を揃えておこう」
「え、あ、うん……」
すたすたと、礼拝堂からではなく、裏口から外へ向かうムーン。
わたしとレイは顔を見合わせた。一体ムーンはまた何をする気なのか……と、互いに不安を見せ合った。
しかし、何も始まらない。わたし達は彼の後を追いかけた。

＊＊＊＊＊

街並みは相も変わらず賑やかだ。理想の街と呼べるにはふさわしい。
しかし、信仰者が多いこの街には、食用植物以外の食べ物が売られていなかった。
「ちぇー、肉を食わないなんて、ユーピテルに暮らす人は損してるよ」
「わたしも魚食べたーい……」
「だが、思ったより安く済んだな……木の実は」
木の実を主に売っている専門店で、買い物を終えたわたし達。
「おっちゃんって木の実とかそーゆーの好きだよなぁ。なんで？」

先頭をのんびりとした足取りで歩いていたレイが、止まって最後尾の彼に振り向いた。
わたしも、背後のムーンも足が止まる。

「いや……元々は、旅の荷物がかさばらないように、木の実等を持ち歩いていたんだ。食事の時間もお金も削減出来る、都合のいいものだからな」

個人の好みとかではなく、職業的論を語るムーン。
おっちゃんらしいや…、とレイが笑った。
わたしも思わず顔が緩む。

「サンポリア王国に戻るまでは、しばらくチカラモを食べていればいい」
「えー!?　帰れるまで木の実かよー!!」

反論したのはレイ。
わたしは…魚食べたいけど、そこまで貪欲じゃないから、別にいいが。

「マホーモとゲドクモもあるからな。多少の怪我も心配ない」
「ところでおっちゃん、いくつ買っていくらかかったワケ？」

レイが気になる個数、値段をムーンに聞いてきた。

「ああ…チカラモ２０個、マホーモ１０個、ゲドクモ１０個で……３５０デイルだったか」
「えっ？　高いの安いのっ？」
「ちなみにサンポリアに売られていた焼いた羊肉は一つ３５０デイル」

「安いじゃん！！　すげぇっ！！」

確かに安い…肉と比較されたのにレイは何故か喜んだ。
彼は倹約家だ。いろいろな肩書きを彼は持てそうだ。

「早く行きましょ。席が埋まるわよ」
「ああ」
「パパー！　早くしてよー！！」

急に慌ただしくなる街人達。
教会の方向へと走り出した。

「？　ああ…そっか」

そういえば太陽もそろそろ真上だ…。お昼の礼拝が始まるんだ。
納得したわたしはそれに対し、一人呟く。

「礼拝か？　ならば我々も急ぐぞ」
「えっ？」

急にムーンが走り出した。
不意を突かれたが、わたしとレイはすぐに彼に追い付いた。
むしろ、スピードに自信あるわたしは、彼に合わせていた。

「まさかおっちゃん、あの司祭長のおば…えっとおねーさんの話聞く気か？」

レイが慌てて訂正して、隣走るムーンに問う。
レイ、あなた、多少の空気は読めるようになったみたい。あのまま言ったら住民に怒られたよ。

「いや、違う……この時だからこそ、調べなくては」

彼の目的は礼拝ではないようだ。

街人達を次々に抜かし、わたし達は教会へと向かった。

＊＊＊＊＊

裏口から入るも、ムーンの足は早歩きで止まらない。

ムーンを先頭に、わたし達はあっちこっちに廊下を歩いた。

「ムーン、一体何する気なの？」

彼の歩幅が大きくて、時々小走りしてしまうわたしは、彼に質問をした。

「礼拝の時間ならば、さすがの事がない限りは無人のはずだ。本当に教皇がいるのか確かめる」

「確かめるって……おっちゃん、教皇さんの部屋どこかわかんのか？」

「だから急いで探しているんだ」

レイの問いにはさも当たり前のように答え、足を進める。

まだ全て回りきっていないから、知らない通路を通ったりもしたが

「あっ」

両開きの扉を見つけ、思わず足を止めた。ここは、全体的に奥の方

だ。
食堂の扉とは違い、神々しさを思わせるドアだった。

「これに違いない…」

すぐに扉へ歩み寄り、ムーンはノックをする。
が、返事はない。試しに彼はドアに手をかけ、ゆっくり開けてみた。
すると

「!?」

驚いた表情で、急に大きく開け放った。
わたし達は彼のその行動には驚いた。

「……あの司祭長、何を考えているんだ」

ムーンがそう呟き、中に勝手に入っていく。
わたし達も慌てて部屋の中へ。
何か書類がたくさんたまった広い机が奥の真ん中にある。
デジャヴだ。ラルク団長の部屋を思い出した。でもあの部屋程酷くはない。教皇の繊細さを伺える。
それぞれ壁に、本棚、寝台、豪華な置物。窓のカーテンも高級感が漂っている。
が、部屋の主はそこにはいなかったのだ。

「あれっ？　教皇さん、いないじゃん」
「うん…」

レイはキョロキョロと見回した、家具の影などを覗き込んで、部屋主を捜す。

わたしも、広い机の椅子や寝台を見るが、人影等わたし達に以外に何もない。

「あのババア嘘つきかよ…」

「ムーン……」

レイのヘスティアーさんを呼ぶ名のランクが下がった。負のイメージに相当堕ちたのだ。

わたしはこの事実に対し、何をすればいいのかわからない。

ムーンを見、彼の行動を待った。

「……一旦、部屋に戻ろう。ここに入った事を知られたら、何をされるかわかったものじゃない…」

と、何もなかったかのように踵を返した。

レイも慌てて彼を追う。

わたしは、もう一度ここを見回した。教皇がいない、というのを、信じたくないからだろうが、やはりいない。

「？」

絨毯の敷かれた床、足元に何かがあった。手を伸ばし拾ってみると、花弁のようなものだ。

だが…今まで見たものより、大きい、手の平を超すか否かのサイズだ。

この目に痛い真っ赤な花……図鑑に載っていただろうか。

「アル」

「あ、うん。待って！」

ムーンに促され、わたしはそれを手に持ったまま、部屋を出た。

＊＊＊＊＊

第三十章

―――――――――
ユーピテルと教団の
真の姿　―中編―
―――――――――

教皇の部屋を出て、わたし達は部屋に既に戻っていた、と修道人達に偽るしかなかった。
慌てて部屋へ駆け込み、今までゆっくりのんびりしていた、という演出をする。
すると、ノック音がし、マリアンヌが、失礼します、と部屋に入ってきた。

「ああ……やっぱりいらしてたんですね」

と、わたし達を疑わないマリアがにっこり。

「申し訳ありません……司祭長様の礼拝の準備を手伝っておりました。お昼ご飯をお食べしてから、また調査と参りましょう」

彼女はまだ、わたし達に証明したい気持ちがあるらしい。

「ううん、大丈夫よ。わたし達、あの後街で買い物していたけど、皆いなくなっちゃうから……じゃあ、行こう？」

「いや……もう、いい」

「え？」

わたしが部屋を出る準備をしようと思ったら、ムーンがこの場を制した。
皆の視線は彼に注がれる。

「マリアンヌ……最近、この教団で何か気になる事はなかったか？」

ベッドに腰かけているムーンが立ち、マリアに向く。
教皇の事をあえて言わず、マリアから何かを聞いて推理するのか。

「気になる事、ですか……？」
「ああ」
「……特にありませんが」
「……」

そしたら、話が続かなくなった。
それにムーンが考え始める。
今日を過ごして気付いたが、彼は何か考え事をすると、手を顎に当てる動作をするのだ。

「……質問を変えよう。何か教団で大きな物事はなかったか？」
「物事…ですか？」

イベント……と言っても、ここでは毎回礼拝はやっているし。
マリアも何かを思い出そうと考え始めた。

「あ、そうだ」

と、明るい表情で何か思い出したマリア。

「随分と前になりますが……教団の皆様と巡礼の旅をしておりました」
「ああ……わたしとマリアが初めて会った時期ね？」
「はい」

数ヶ月前の話であった。
確かに大きな物事だが。そこから何を得られるのか？

「マリアンヌ。その頃の教団の者達に何か変わった様子はなかったか？」
「え？　うーん……」

問いと思考の繰り返し。
レイがそわそわと落ち着かない。昼御飯を食べたいからか。

「些細な事でも構わない。教皇や、司祭長、他の司祭達等」
「あ……そういえば…」

と、マリアが口を開く。

「その頃から、ヘスティアー様は思い悩んでおりました」
「悩んでた？　あのおはちゃんが？」

信じられない、と食い付いてきたレイ。昼飯以外の事に興味を示し、そわそわはなくなった。

「そう…あの頃までのヘスティアー様は、人の在り方、神の在り方、幸せの在り方等について悩んでおりました…」

何もマリアまで困惑の顔にならなくともいいのだが……その時の事

を思い出したのだろう、彼女の表情が曇った。

「それは……ユゴリアン大陸にいた時の頃ですね。サンポリア大陸へ行く前に、ヘスティアー様はその答えを見つけたのです」

雲が晴れるように、マリアは太陽のような表情になった。

「まず、貧富の差について、ヘスティアー様は説いたのです。人の持ち合わせの差は、神様が決めた事。故、だから寄付の制度を導入したのです」

「……」

その頃から寄付を始めた、という事になる。

わたしはレイと顔を見合わせた、ありえない、とアイコンタクト。

まさか、司祭長が提案するとは。

「それからヘスティアー様は自信を持てるようになり、今に至るのです。あ……」

「今度は何？」

またシュンと落ち込むマリア。

ためになる情報ならばいいのだが。

「そうですね……その頃から、教皇様の体調が時々よろしくない時があるのです」

教皇の情報だった。

司祭長が良くなった代わりに、教皇が悪くなった、という事になるが…。

「やはり、長旅でお疲れになったと思うのです。最近はいつも通りにお元気でしたが……」

言葉の続きは言わなくても、（別の意味で）現状をわたし達は知っている。
彼女の表情がますます暗くなる。

「……ムーン」
「…なんだ？」

マリアに、教皇の事を教えた方がいいのでは、とわたしは思い、

「マリアに教えた方が、いいかな…？　さっきの」

ムーンに聞いた。ら

「？　なんですか？」

マリアが不思議がる顔でわたし達を交互に見てきた。

「えっ？　いいのか？」
「……」

レイが心配の顔。マリアの反応が怖いからか、それとも。
ムーンは無言で悩みそして

「……マリアンヌ。実は」

彼自身から、部屋を調べた事、教皇がいなかった事を話した。
それを聞いたマリアは、目を見開き、短い悲鳴をあげて驚いた。

彼女の目付きが、徐々に鋭い眼光を見せてきた。怒りの象徴だ。

「何故勝手に入ったのですか！？　司祭長様から、我々は入れない事を厳しく言われたというのに、無関係なるあなた方は何を勝手に……！！」

教皇が不在の事ではなく、無断で侵入した事に、彼女は怒ってしまった。

初めて見た彼女の怒りに、わたしもレイも怯えたが、ムーンに至っては冷静だ。

この事も計算し、予測したのか？　彼は。

「勝手に入った事は謝ろう……すまなかった。だが、私としてはこのままにしてはおけないのだ」

「魔法陣の事ならば、ヘスティアー様にお聞きしましょう。そして、神に懺悔を願います。偉大なる教皇様のお部屋に、勝手に入った事に対して」

「そこまでの事ではないだろう…何も物は盗んでいないし、教皇の邪魔をしなかった……教皇はいなかったが。司祭長が真実を話してくれるならば、私もそこまで深入りはしなかった」

「あなたはヘスティアー様の言葉を信じられずに、教皇様の部屋に入ったのですか！？」

互いに譲らない……怖い争いだ。

ムーンは冷静に、マリアは熱血だ。

「アルテミス…」

「なに…？」

こっそり耳打ちしてくるはレイ。

まだ二人の論は続いている。

「思いっきり止めてくんねぇ…？」

「えっ？」

もう見てらんれねぇって様子だ。まさかわたしが、この静けさなる教会の中で怒鳴らなきゃならないのか？

「頼むよアルテミス…！！」

まだ二人は言い争っている。終わりそうにない。

仕方ない…ここはレイの頼みを聞こう。

わたしはゆっくり、息を深く吸い込み

「いい加減にしろぉっ！！！！！」

「うぉっ！？」

「――！？」

「――！？」

ありったけの声を出した。

言い出しっぺのレイも驚き、言い争っていた二人も言葉に詰まり、キョトンとした顔でわたしを見てきた。

窓越しに、木の葉が揺れ、鳥がバタバタと羽ばたく音が聞こえた。

鳥達も驚いて、逃げてしまった、という事になる…。

「は…はい。ごめんなさい…」

「すまない…」

「ごめん……アルテミス……」

マリアが本当に落ち込んでしまった。あの勢いはパッタリとなくな

った。
ムーンも本気で反省している。わたしに怒られてヘコむ彼なんて、滅多に見れない。
そしてレイは謝る必要がないのだが……そこまで怖かったのか、わたしは…。

「とにかく！　教皇様がいないって事は一大事なのよ!!　ヘスティアーさんに何か言われたりしない程度に、この教会を調べましょ!!　それでいいよね!?　レイ!?」
「お、おうっ！」
「ムーン!?」
「ああ…」
「マリア!?」
「は、はいーっ！」

この勢いならば、メンバーの指揮権利は頂けた。
部屋に入ったどうのこうのより。
まずは、体調が悪くて寝ているはずだった教皇さんを捜さなくてはならない。
でも、その前に昼御飯を食べなければ……捜査はその後だった。

＊＊＊＊＊

「マリアンヌ」
「っ。はい?」

ご飯を終え、食堂を出た時に。
ヘスティアーさんがこちらに歩み寄ってきた。

「マリアンヌ。何か大きな声を聞きましたが。お客様と何かあったのでしょうか？」
「え……えと…それは……」
ああ、やっぱり聞かれていた。
彼女が答えに困っていたので、わたしが代わりに前に出た。
「すみません、わたしがレイと喧嘩をしてしまって……騒がしくてすみませんでした…」
と、すぐに頭をさげて謝罪した。……沈黙。するとヘスティアーさんは
「まぁ……よろしいでしょう。ですが、ここは教会ですので、争い事は街の外でお願いします。マリア」
次はない、という事か。許してくれた。
しかし、教会の外、ではなく、街の外、か。やはり土地さえも愛されているのだ、この教団の皆にも住民にも。
「はい」
ついでにマリア個人が呼び出される。
「お客様とは充分お話したはずです。そろそろ奉仕活動に戻ってほしいのですが……」
「あ……はい…」
どうしよう。断ろうにも断れないだろう。

マリアがいなければ、簡単に捜査が出来ない。ここは広いから。

「…すみません。それでは失礼します……」

本当に申し訳ない、と込められた声と表情。
マリアはヘスティアーさんの後をついていく。
廊下に残されたわたし達……さて、どうしよう。

「どーする？　おっちゃん、アルテミス……」

レイがムーンとわたしを見る。
わたしは、わからない、と言い首を横に振った。
ムーンはこの後の事を考えているが

「……ここは子供がいると聞いたが」
「え？　あ、うん、そうよ。ここは孤児院もやっているから……」

急に子供がどうのって……どうしたの？

「子供に聞こう」
「えっ？」
「へっ？」

どうして？、と聞く前に、彼はヘスティアーさんとは逆方向へ、歩き出してしまった。
わたし達も慌てて彼を追いかけた。

＊＊＊＊＊

「子供は好奇心が旺盛だ。ならば、この教会の至る所の隅々まで足を踏み込むだろう。この教会に何か変わったものがあるかを聞くだけだ」
「なるほどね…」

ムーンが孤児院の子供達に会いたい理由はそれだった。
確かに一理ある。子供はこういう時、良い情報を持っている事がある。

「普段、子供達はこの教会のどこにいるんだ…？」
「外で遊んでいるわよ。シスターさんと一緒のはず…」

廊下を歩いている時、

「だけど……」

ムーンが眠っていた時、彼の腹にのしかかったあの男の子を見つけた。
背後のわたし達に気付かず、辺りをキョロキョロ見回した。
どことなくワクワクしているが……何か子供ならではの企みがあるのか？

「あ、行っちゃたぞ……」

レイが示す。男の子は真っ直ぐの通路へ。
左に壁、窓は一定感覚に位置す。
右に曲がる通路と、そのまま真っ直ぐいく通路……ああ、確かここは、

「あのドア……！」

レイと声が揃った。互いに顔を見合わせ、そういえば、という意。もちろん、その時その場にいなかったムーンにはわからない話。彼は、あのドア？、とおうむ返しで問う。

「とりあえずあの子に聞きましょ！」

「おうっ」

「あ、ああ……」

わたしは良き人物を見つけた喜びで、駆け足が軽く感じた。ムーンは話についていけなかったが、でもついていこうとはしている。

＊＊＊＊＊

「また何やってるの？」

「うわっ！？」

鍵がかけられたドアの前で、男の子は何やらカチャカチャと音を鳴らしていた。

後ろから声をかけると、男の子は驚いた声をあげ、わたし達に振り向いた。

「な、なぁんだ……アル姉ちゃんとレイ兄ちゃんかぁ…」

わたし達に見つかった方が良かったらしい、安堵のため息をもらす男の子。

よく見ると彼の手には、錆び付いた針金のような物が握られていた。

「あ、まさか、それで開けようとしたんじゃ……」

「ち、違うよぉ！　ただ、この鍵のかけ具合はどうかなぁって調べてただけ！！」

なんて言い訳。からかって聞いてみたら面白い返答がきた。

思わずクスッと笑ってしまう。レイもニヤニヤと面白がっていた。

「少年、名前は？」

「えっ？」

急にムーンがわたし達をゆっくり退けて、男の子の前に出た。

「ぼ、ぼくはヘーパイストス」

「ほう……炎の神の名前か」

「おじさん知ってるの？　ヘーパイストス様を」

「ああ。私も好きな神の一人だからな……」

と、二人で何やら炎と鍛治の神様の話を始めた。ムーンからは優しい雰囲気が。

彼は本当に博識。剣携え戦える学者だ。

「あのぉ……ヘーパ、おっちゃん、話してるとこ申し訳ないんだけど…」

二人で長話になりそうだった。だからレイが二人をやんわり制した。

言われたムーン達はやっと状況を把握してくれた。

「ヘーパ。あなた一体何していたの？　この部屋は何？」

男の子ことヘーパイストス。わたしはヘーパに、この開かぬドアについて追究した。

「それがさぁ…ぼくにもよくわからないから、中に入ろっかなぁって思ったんだけど……」

「ってかお前、やっぱ開ける気満々だったじゃん」

「あっ！」

レイに言われ、しまった、と口元を隠すヘーパ。だが時遅し。

「ヘーパ。この事はヘスティアーさんには内緒にするから、このドアがどこに繋がってるのか、知ってる限りに教えて？」

子供も気になるこのドアは一体なんなのか。

条件付きで申し訳ないが、ヘーパに質問をした。

「うん……わかった」

彼は了承してくれた。教会の子らは本当に良い子だ。

「ここから先、どこに繋がってるかはわからないけど。司祭長様が、中に入ってはいけない、って教団の皆に言ってるんだ」

「ヘスティアーさんが？　教皇様が、じゃなくて？」

「……うん」

しょんぼりとした様子で語るのは、過去にヘスティアーさんに怒られたのだろうか。

教皇はこのドアを知っているのだろうか……謎が深まるばかり。

「司祭長様は厳しいから、皆はこのドアの事を気にしていないけど……やっぱり気になっちゃって……」
「ここはいつから鍵がかかっていたか、わかる？」
「わかんない……ここを知った時には、もう鍵はかかっていたから…」

司祭長のみが制限するこの先。確か、ここはヘスティアーさんが寄付用の編みかごを持ち出して行く姿を、わたしは目撃していた。

「……ムーン、調べましょ。絶対怪しいって」
「おれなら開けられるぞ！　こういうのは昔から得意だからよ！」

レイとわたしの考えは一緒だった。ムーンにも賛同してもらおうと思ったが、

「いや……まだ、いい」
「なんで…？」
「マリアンヌがいないからだ」
「あ、そうだった」

自分達で捜査をしては、マリアに証明が出来ない。その事を忘れていた。

「じゃあ…マリアが暇な時、そんでもって、おばちゃんがここに来ない可能性がある時、だよな」

レイが都合の良さそうな時間帯を述べるが、

「でも、礼拝はマリ姉や皆も向こうに行っちゃうよ？」

ヘーパが横やりをしてきたが、正論だった。
レイはああ…とがっくりうなだれた。

「…ところでさ、おじさん達は何してるの？」

ヘーパが聞いてきた。まずいな…出来ればマリア以外の人間に知られてはいけないのだけれど。
どう答えよう。わたしは思い付かず、二人を見たが

「言えない事するなら、協力するよ」
「えっ？」

思いがけない言葉をヘーパが言った。

「おじさん達、この中知りたいんでしょ？　で、マリ姉にも見せたいんでしょ？　だったらぼく、礼拝の時にマリ姉呼んであげるよ」

にこにこしながら言う。子供は純粋だが、純粋ないたずらは、時に残酷な事をもたらす。
ヘーパに頼んでもいいのだろうか。
しかし彼は続けて

「その代わり、このドアの先に何があるのか、わかったら教えてよ。約束！」

小指だけを前に出し、定番の契約を示した。
……これならば大丈夫、わたし達は顔を見合わせ、思わずニヤリ。

「ええ、約束ね」

でもヘーパの前ではにっこりと返し、わたしも小指を出した。
これで、ヘーパとの約束を交わしたワケである。
あとは……夜の礼拝が来るのを待つだけだ。

第三十一章

―――――――――
ユーピテルと教団の
真の姿　―後編―
―――――――――

礼拝の時間になるまで、わたし達は街の外にいる。
魔法陣により呼び寄せられてしまう魔物を、街に侵入される前に倒すためでもある。
腕がなまらぬための修行にもなるので、これはこれで好都合だ。

「おらよっ！」

これで何匹か目の花の肉食植物を枯らした。
レイニーのムチの使い方と、ナイフを投げる動作に、無駄な動きがなくなったと思えたが

「うむ……まだまだ、だな」
「えー！？　なんでだよおっちゃーん！！」

戦う様子を見ていたわたしとムーン。
だが、隣の彼の判定は厳しい。優しさ故の厳しさである。意地悪ではないと思う。

「まだ隙がいくつか見つかった。その隙をどう埋めるかは、これか

ら先、よく考えればいい」
「うーん……やっぱおんなじ相手でも、上達しないもんだよなぁ…」
自分の愛用するムチを眺めるように、レイは持つ手の腕を伸ばし、目を凝らす。
「あ、また来たわよ」
ちなみにここは、アルス村とは反対方向の街の出入口。
ここの近くの塀にも、あの忌まわしい魔法陣は存在していた。
がさり、と森の茂みを鳴らし、同じ植物の魔物が堂々と姿を現した。
二体。
「今度はアルか…」
「お前一人でだいじょぶか?」
順番を確認するムーン。レイはからかうような口調で、でも一応わたしの事を心配しているが
「レイに言われたかないわよ」
「おま、ひどっ!」
わたしも余裕の返事をした、本気ではないが。
でもレイは半ばショックの反応だった。真に受け過ぎ。でも、からかい返すのは面白い。
わたしはすぐさま、両手に一本ずつ、剣の柄を握る。
「…またやるのか?」
「いいじゃない、必殺技の一つや二つ会得したって」

ムーンが不安げな問い。実は、これより前の戦闘でわたしは失敗し、二人に助けられたばかりだった。

「それってどっかの訓練所で習う剣技奥義なのか？」

「我流奥義よ！！」

レイの呆れ声にはイラッとした、こっちは真剣なのに。

だからそれが伝わるように答え、わたしは、まだこちらの様子を伺っている魔物へと、剣を抜かず駆け出した。

「距離をよく考えろ！」

「一発で仕留めろよぉ！？」

背後で、ムーンのアドバイス、レイの応援を受けた。

剣技を試す距離まで、あと少し。

よくタイミングを探る。すると向こうが突進してきた！

（よし！）

若干狂わされても、タイミングは見つかった。

わたしは逆手に剣を抜いた。そして

「えいやぁぁぁぁあっ！！！」

両腕を、自分の身体を包むような動きで、剣の刃を二体の茎へ向ける。

そして、その二体の間を駆け抜けた。

駆け足を止め、持ち手を通常に戻した。

「どうだった！？」

二人に聞きながら、わたしは振り向いた。今のは手応えがあった。

「！？」

はずだったのだが

ギィィィィ！！！

「！！」

茎は斬れ切れず、斬れたところから曲がったまま。
ぶらさがったまま、頭となる花が牙をこちらに向け、二匹同時に迫ってきた。
我流奥義は失敗。だが、こいつらに勝てる自信は充分。
わたしは構え直し、立ち向かおうとしたが

「『邪となりしものを燃やせ』！　『フレイム』！！」

ムーンの早口の呪文、そして燃え盛る植物。
弱々しい金切り声をあげ、黒炭となって崩れていく。
そして、命の終わりを知ったかのように、炎はそのまま鎮火し、消えた。

「お前も人の事言えないだろうよぉ……怪我ないか？」

レイが呆れて言うのも無理ない。失敗したから、それは聞き入れた。
それに、心配してくれている言葉を聞いたし。

「ええ…ごめん、ありがと、ムーン」

「いや…心配はいらない」

あんなに豪語したのに、これでは戦法は狭いまま。
ムーンがわたしの元に歩み寄り、こう言った。

「レイニーにも言ったが、時間はいくらでもある。これから先、よく考えて、腕を磨けばいいだけだ」

同期でも、人生の先輩である彼からの、ありがたい言葉だった。
教皇や司祭長には申し訳ないが、わたしはムーンの教えならば何時間でも聞けそうだ。

「そういやぁ腹減ったなぁ…」

と、お腹をさすりながらレイが呟く。
空を見上げると、もう夕日色に染まりつつあった。
礼拝の時間まで、もう少し、といったところか。

「意外と時間経つの、早いのね」
「ああ…」

空を見上げ、独り言のように呟いたわたし。
ムーンも同じように見ては、わたしの言葉に同意しての返事をしてくれた。

「部屋に戻りましょ。ヘーパがマリアを連れてくる前に」
「ああ」
「おうっ」

男二人に呼び掛け、揃って応えた。

わたし達は魔物がもう来ない事を確認し、街へと戻った。
…また来るならば、戻る必要はあるが、街中で争っても無意味だろう。住民かそれを嫌うから。

＊＊＊＊＊

借りてる部屋でのんびりするわたし達。
レイは、お腹空いた、としつこくて、うんざり。これから何をするのかを考えて、緊張感を持ってほしいのだが。
これにはムーンも呆れたらしく、彼にチカラモを一粒差し出した。

「おおっ、ちっせぇのに、うめぇぞこれっ！！」

木の実一粒ですっかり機嫌が良くなった。お腹が空いたらとりあえずチカラモに頼ろうと思った。

「……礼拝の準備に入ったようだな」

窓越しから見れば、外も暗くなりつつある。
ムーンがこの部屋の燭台に火をつけてくれた。
かすかにざわざわと人々の声が聞こえる。これには特に変わりはなかった。

「……という事は、そろそろ、か？」

レイは待ちきれず、ドアをじっと見つめていた。
いつ開き、そしてマリア達が来るのか。ヘーパイストスは、彼女を礼拝の時間から連れて来る事が出来るのだろうか。

すると、何やら小さく聞こえる騒ぎ声や、ドタバタと鳴る激しい足音が、徐々に音量を上げてきた。

「……から早く！」

「アル様達がどうしたのですかっ？　ちゃんと教えて下さい！」

「とにかく見ればわかるから！　いいから早くぅ！！」

来た！、と顔を見合わせたわたし達。

この部屋に近付いてきているのが、音を聞けばわかった。そして

「アル姉ちゃんレイ兄ちゃんムーンおじさん！！　マリ姉連れて来たよぉ！！」

ドアが開いたのと一緒に姿を現し、さらに歓喜の声をあげながら報告してきた男の子、ヘーパ。

小さい右手は、ちゃんとマリアンヌの左手を握っていた。

その手を目で辿って見ると、マリアはヘーパを、次にわたし達を見渡した。目が点になったような顔をしていた。

「あれ……？　アル様達は、怪我をしたのではないのですか？」

「えっ？」

知らない事を彼女に聞かれ、今度はわたしの目が点になった気分だ。

それを聞いて、ヘーパがニヤニヤと笑う。

「嘘だよっ。アル姉ちゃん達がマリ姉にどうしても見せたい所があるんだって」

だから無理矢理連れてきたんだ、と詫びれる発言もなくヘーパは種明かしをした。

それにマリアがヘーパを見下ろす。母が叱る時の表情に。
だからわたしは慌てて彼女を制した。

「…関係のない子供まで巻き込んで、あなた方はそこまで」
「待てよマリア。礼拝の途中だった事くらいわかってるって」

またマリアの怒りが走るのでは。
予測したが、レイが彼女をなだめた事は予想外だった。

「礼拝でなければ、調査が出来ないと判断した。だからヘーパイストスにお前を連れて来るよう任せた」
「ムーン様……」

そう言い、ムーンは部屋を出ていった。

「おっちゃんもう行くの？　説明は？」
「時間がない。後でする」
「……じゃあ行くか。ヘーパ、ありがとなっ」

レイは彼の返事を受け入れ、男の子の頭をくしゃりと撫でて、ムーンの後を追った。

「マリ姉、どんなものを見たか後で教えてよ。ぼく、礼拝に戻るね。司祭長様には誤魔化すからさ」
「は……はい……」

ヘーパも満足げな顔で、部屋を出ていった。マリアはただ戸惑うだけだった。
残るわたしとマリアンヌ。

「行きましょ」
「……はい」

わたしは彼女に微笑んだが、マリアは真剣の眼差しを向けてきた。
大事な礼拝を抜け出してまでする事故、致し方ない。
わたし達は、二人に追い付く為に駆け出した。

＊＊＊＊＊

「おっ。来るの遅いぞアルテミス達ー」

あの開かずの扉に着いた時には、鍵は解かれたらしい。
レイの手には、鍵を解かした針金が。

「おれの早業を見せてやりたかったぜ」
「早く行くぞ。いつ終わるのかもわからないからな」
「おっちゃん急かすなよ！！」

自慢したかったらしいが、ムーンがすぐにドアを開けて、姿を消した。
わたし達も側まで駆け寄る。地下に続く石造りの階段があった。人と人とがすれ違うにはギリギリの広さ。先が暗くてよく見えない……ムーンが暗闇の中へ。そしたら

「『闇を照らし、光を示せ』『ライト』」

ムーンの静かな詠唱が階段に響く。見下ろした先には、ムーンの頭上に光輝く玉があり、彼と、その回りの壁や階段を見せてくれた。

「一番怪しいと睨んだ所だ。マリア、わかってくれるか？」

わたし達を見上げ、そう尋ねてきたムーン。

わたしも、レイもマリアを見やった。

彼女はうつむき、考え事をしている顔だ。そして

「はい。同行しましょう」

未踏の場所探索に協力してくれる事を答えた。

＊＊＊＊＊

しばらく長い階段が続く、まっすぐに降りていくわたし達。

光を携えるムーンを戦闘に、わたし達は足元が薄暗い階段を降りていく。

「なぁ……この先、どこに続いてるんだ？」

「わからないわよ」

わたしに問うレイ。愚問だ。

「マリアは、どこに行けると思う？」

わたしのじゃ当てにならない、という事か。次に、最後尾のマリアに問うレイ。

「わかりません……ここに入るのは、初めてで……」

「そっかぁ……」

わたしから一つ前の彼は、顔を前に向けた。
結局聞いても、たどり着かなきゃ誰もわからない。
一段一段降りる毎に、気温が下がっていくような気がする。段々肌寒くなってきた。

「待て」
「うわっ？」
「えぇっ？」
「きゃっ？」

急にムーンが立ち止まったらしい。
レイが彼の背中にぶつかり、わたしもレイの背に乗り掛かる状態。
さらにマリアの両手がわたしの両肩を掴んだ。

「ここから階段が終わっている……向こうに、誰かがいるぞ…」
「えっ……？」

人差し指を前方へ差すムーン。
すると、魔法で召喚した光の玉は、彼の指の動きに合わせるように動いた。
ふわふわと飛んでいったそれの周りは、階段から広くなった石造りの部屋を見せる。
石の部屋の広さは、わたし達が借りている部屋とさほど変わらないが、ベッドがないので広く感じた。
部屋の奥には

「！？」

寄付に使う編みかご。だけではなかった。

「な……何よこれ！？」

レイ、わたしはムーンを抜かし、光の下へ駆け寄った。
今まで溜め込んだらしい住民からのお金。ネックレスやピアスの宝石は、ルビー、サファイア、オパール、アメジスト等……本で見た事があるものだ。金塊まである。
金目の物が山のように積まれていた。
さらに、部屋の隅からうめき声。口を覆われたように上手く喋れないような声だ。
光の玉はその方へ向かった。

「教皇様！？」

身体を悪くして、部屋にこもっている、というはずだった人物が。
マリアの呼ぶ声が悲鳴に近い。
手首足首も、長い布のようなもので、噛ませるように口も縛られていた。
マリアの駆け出す音、教皇の側まで来ては、拘束をすぐに解こうとした。

「あんにゃろー……あのババア、悪者じゃねぇかよ！！！」

レイが金目の山を蹴り込んで、怒りを露にした。
蹴られた小銭、指輪やネックレスが辺りに、音を立てて散らばる。

「ムーン、やっぱりあの魔法陣は」
「ああ、あの女に違いない」

最後まで聞く前に、ムーンは断言してくれた。
光は険しい表情の彼を見せてくれた。

「大丈夫ですか！？　教皇様！！」

全ての拘束をほどき、改めて教皇に問いかけるマリアンヌ。
げほげほと咳き込み、落ち着かせようと息を整える教皇。体調が悪いのは真実のようだ。

「ま……マリアンヌ、何故ここがわかったのじゃ…？」

弱々しい声が一人のシスターに振られる。
マリアは泣きそうだった。教皇が捕らわれていたのと、今のこの時が信じられないからだろう。

「いいえ…わたくしはただ、この方達とここを訪れたのです。本当は、司祭長様からは入ってならない、と申されましたが……」
「ヘスティアーが…？」
「はい……」
「……あの者は、ヘスティアーではない」
「！？」

教皇の、誰かを恐れる表情。そして出てきた単語。
一斉に教皇に視線が集まる。わたしも驚きを隠せず、教皇を見た。

「巡礼の旅を終えてから、ヘスティアーは変わってしまった。彼女からも、何やら禍々しい気を感じたのじゃ。それから私は…その気を受けてから…」

と、話している最中に、また咳き込んだ。

マリアは慌てて教皇の背中を擦った。
…言わなくても、ヘスティアーさんからの何かが、教皇の具合を悪くしたのであろう。

「とにかく、まずは教皇を部屋に連れて看病をしなければならない」

ムーンが優先すべき事を話し、わたし達もそれに同意した。
この部屋の物は……教会及び教団、信仰者には不要のものだ。ヘスティアーさんは何を思って、この神に背く行為をしたかは不明だが、許されるワケではない。
ムーンが教皇を背に背負おうと、彼に歩み寄った時だった。

「え…？」

急に、一瞬だが、この部屋を照らす雷のようなものがムーンに直撃。
ふらり、と倒れてしまったムーン。
瞬間、彼が召喚したライトの効果もなくなり、暗くなってしまった。
が

「あなた方は一体何をしているのですか？」

ムーンが発動したものよりも、強く照らす光が現れ、目を腕で覆った。
光に慣れて、視界を塞ぐものをどかすと、

「ヘスティアー様…！？」

階段を降りながら、この部屋に入ってきた企て者、信仰者規則違反をした司祭長であった。
右手には、何やら装飾の豪華な杖。植物のツタ等が規則性に絡まっ

ている。
魔法使いが使うようなものかと思ったが、先端には水晶玉。その玉の中に、どうやって入ってるのかロザリオが浮いている。

「マリ姉、ごめん！」
「ヘーパ…！？」

左手には、麻紐。その紐で両手首を縛られ、不自由の状態である男の子が。

「教皇様の事を聞かれた時は、ヒヤリとしましたが……ここならば誰も助けは来ないでしょう」

あの真顔ではなく、悪意の込められた笑みを浮かべていたヘスティアーさん。
ヘーパは怯えていた。ヘスティアーの容姿だけではなく、彼女からの雰囲気も察しているのだろうか。

「ヘスティアー！　お主は何故このような事を」
「しばらく眠ってもらいますよ。教皇様」

杖を掲げ、まだ教皇が言い切る前に、ロザリオが金色から赤色に変わった。
水晶玉が一瞬光、そこから雷（いかずち）が走る。向かった先は

「――――――！！！？？」

教皇だ。それが彼の身体に当たり、教皇もムーンのように倒れてしまった。

「教皇様！　教皇様！？」

マリアはすぐに駆け寄り、教皇の身体を揺さぶる。
とうとうこらえきれなくなった涙が、収まる事なく流れていくのを見た。

「ヘスティアー様！　どうしてこのような事を！？」

司祭長に目を向け、倒れた者の代わりに、今度は彼女が問いた。
ヘスティアーさんは依然、恐ろしい雰囲気を纏う。

「これも皆…世界が神の存在を信じさせる為です」

そう言い、また杖を掲げ、あの謎の雷を発した。

「きゃあっ！！」
「マリア！！」
「マリアンヌ！？」

マリアも被害を受け、倒れた。
残ったのは…わたしとレイ。

「アル姉ちゃん！　レイ兄ちゃん！　逃げてぇ！！」

ヘーパが叫び出した。さらに、身体全身を目一杯使い、体当たり等でヘスティアーさんの邪魔をする。
さすがに生身の人間を斬るワケにはいかないが、鞘に入れたままならば、打撲くらいでなんとかなるだろう。
わたしは両手を柄に添えたが

「お黙りなさい！！　このクソガキが！！！」
「――――！？」
「へーパ！？」

赤いロザリオからの雷を、子供が受け、気絶した。
早く止めなくては、と思えば、身体が頭より先に動いた。
相手に向かってまっすぐ走る。ベルトから鞘入り両手剣を抜こうとしたが

「無駄な事です」
「うあっ！？」
「アルテミス！？」

雷は速すぎる。避ける動作をする前に、わたしの身体に当たった。
ビリビリと、本当に一瞬、身体を走ったが。
全身の力が抜けていき、足も膝から落ちていった。

「アルテミス！　しっかりしろ！！」

レイの声を最後に、わたしの意識は途絶えた。

第三十二章

神の天罰

「!?」

またも、あのけたたましい鐘の音で目を覚ました。
しかし、普段眠りから目を覚ます時とは、何かが違う。
視界に入ったのは夜の空、そして何人かが松明を持っており、その炎の灯りに照らされている群衆。上から見下ろしているのだが、街の人々だと知った。
ざわざわと、こちら側を見ている。

（な、にこれ…!?）

自分の身体の異変に気付いた。
何やら植物のツルやツタが、腕や足、胴体に絡まれており、身動きが出来ない。首を動かし、必要最低限、見える範囲はある。
しかもこの縛り方……十字架の形に張り付けられたものだ。

「……!」

両隣を見た。左にはムーン。右には手前からレイニー、マリアンヌが。

わたしと同じように、拘束されている状態だった。
皆、まだ鳴る鐘の音で既に目覚めていた。わたしと同じ反応を、それぞれにしていた。

「アルテミス！　おっちゃん！　マリア！」

レイの焦り声が、メンバーに呼び掛けた。そしたら

「やっと起きやがったな！　反逆者め！！」
「私達の街を汚そうとする悪者め！！」
「罰当たり！！」

街の住民達が、いろいろな物をわたし達にどんどん投げてきた。
小石や木の枝、そこらの道に落ちているようなものばかりを、次々に放ってくる。
それを避けたくても、腕や顔には当たってしまう、時に痛い物もぶつかる。

「いってぇなぁ！！　何すんだよ！？」

レイは出来る限りの動作で、物を避ける。抵抗の声をあげた。

「お前達こそ！　神様に対してなんて事をしてくれたんだ！？」
「聖なる教会を荒らした悪魔の使い！！！」
「司祭長様が神に代わって、お前らに罰を与えるんだからな！！！」
「裏切り者のシスター！！　なんで悪魔に加担したんだ！？」

街人の暴言の数々、段々とマリア個人に向けられてきた。
マリアの方を見た。ただおろおろと、困惑している。何か言いたそうな様子。

「違います！　わたくし共はただ、教皇様を」
「そう！　あなた方は、我々の讃える教皇様の命を消そうとしたのです！！」
「！？」

背後から教会の扉が開く音、その後に響く自信に満ちた女の声。もうわかる、ヘスティアーだ。
司祭長の登場に、住民達が歓声を起こした。
さらに、背後から足音がたくさん、他の修道人達だ。様々な視線を感じた。
多分…その視線達に敏感なのは、同じ教団のマリアであろう。

「礼拝の時間を狙い、我々がいない事をいい事に、あなた方は教皇様を狙い、さらに街の方々の寄付を横取りしようとしました！！」
「言いがかりだぞ！！　何嘘ついてやがんだババア！！！」

ヘスティアーが人々に聞かせるよう、住民達の前、つまりわたし達の前に行き、高らかに言った。レイが否定の言葉を吐いたら、それに癇癪を起こした人々が物の投げつけを彼に向けた。
おやめなさい、とヘスティアーが彼らを制した。

「あなた方が手を下す事がありません。私…司祭長であるこのヘスティアーが、神からの天罰をこの者達に与えます」

街人に向いていた彼女が、こちらを向いてきた。
見上げてくる目は、自分の欲望を邪魔された苛立ちを見せるかのように、鋭い眼光だった。

「平和をおびやかす悪魔の手先……神の天罰が、あなた方を裁きま

す。覚悟なさい！」

また、あの水晶玉のロザリオが赤くなる。
水晶玉がバチバチと雷を発し、住民は怖がり始めた。
味方側でさえも恐怖にさせる天罰が、わたし達を襲おうとする。

「やめろおぉぉぉぉ！！！」

バタンッ、とドアを叩いたように開いた音。
ヘーパイストスの声だ。タタタと走る音。
わたしの視界に男の子が登場した。
ヘスティアーに駆け寄り、服の裾を引っ張りながら、止めようとしている。

「マリ姉達は悪くないんだよぉ！！　ぼくがお願いしたから、マリ姉達があの部屋に入っただけなんだから！！　悪いのはぼくなんだよぉ！！！」
「ほう…つまりあなたは、悪魔のお手伝いをした、というワケですね……？」
「ち……違う！！　そんな事してない！！」

ヘスティアーの勝手な解釈に、ヘーパは戸惑う。だが、完全に司祭長の言葉を否定した。

「うるさいクソガキ！」
「司祭長様の邪魔をするな！！」
「あっち行けぇ！！」

ヘスティアーの言葉を否定された住民は、いい思いをするワケがない。

まだ子供だというのに、ヘーパに向かって小石等を投げ込んだ。
ヘーパはひるみ、小さい腕で顔を隠し、身を守る。

「やめて下さい！　子供相手に何をするのですか！？」

マリアが黙ったままでいられるワケがないだろう。殺意剥き出しの彼らに、必死に訴えかけた。
だが投げ込みは、ヘーパが教会の脇へ走り出し、この場から姿を消すまで止まらなかった。

「こうさせたのはマリアンヌ、あなたの行動がいけなかったからでしょう」

ヘスティアーは彼女に責任転換をする。
自分は悪くない、自分を正当化させる。味方が大勢いるのだから、例え一人が異義を唱えても、それは多力に押し潰され消えてしまう。

「それならば、ヘスティアー様。あなたは自分のした事は、神を裏切らない、というのですか！？」

だが、それにめげず、対立するマリア。
周りが認めなくとも、違う事は違う、と彼女は断言し、貫こうと意思を持つ。

「私は、人々の平等な平和、幸福、裕福の為に、行いを続けます。あなたは、私のその思いを踏みにじったのですよ」
「それはこちらの台詞です！　何故あなたがあの魔法陣を書き込んだり、教皇様を閉じ込めたのかは知りませんが、あなたはわたくしの期待を裏切りました！！！」
「戯れ言を。所詮あなたは他の人より劣っているというのに！」

「っ！？」

そう言われた彼女は、急に言葉に詰まった。
まっすぐにヘスティアーを見ていた瞳は、地面へとそらされた。
それを隙と捉えたヘスティアーは、

「ロザリオを無くし、他の僧侶達より遅れたあなたが、私の思想等理解出来るはずがあるまい」
「そうだそうだ！！」
「口出しするなぁ！！」
「裏切りシスター！！！」

ヘスティアーの口調が変わった。
さらに威厳を見せた彼女のそれに、街人が口々に賛同を叫んだ。

「確かに……今のわたくしには…あなたの考える事全てを、理解出来るワケではありません！！」

なんとか言葉を探し、彼女は思いを叫んだ。
住人達の騒ぎ声がまだ響いているのだが、彼女は叫んだ。

「でも、わたくしだって！　わたくしだって、この世界の人々が幸せになる事を、ずっと願っているの！！　その気持ちは、誰にも負けない！！　お母様だってそうでしょ！？　あなただって、誰よりも人の幸せを願っているのに！！！」

自分のありのままの気持ちを大声にする。それは、普段過ごして知れる、シスターマリアンヌではない。
平和、人の幸せを祈る一人の人間、マリアンヌだった。
だが

「その立場で私を母と呼ぶな！！」
「！？」

ヘスティアーの信じられない言葉に、マリアは言葉を失った。
わたしも……子供を拒絶する母親など、聞いた事がなかった。
ヘスティアーの見上げる目付きは、ますます敵意を露にしていた。

「所詮は赤の他人。私の理想など、血筋が繋がる者しか理解出来ない。そんなお前が、私を母と慕うんじゃない！！！」

住民達に、この声は聞こえなかっただろう。
皆、それぞれに思いを叫び、全然聞こえていないだろう。
だから、マリアの流した涙の理由等、わかるワケもない。
絶望の淵に立たされたような、マリアのショックを受けた表情。
見ていられない……わたしは顔ごと目をそらしてしまった。

「あの子供もそうだ……どこの拾われ子だが知らぬが、だからお前のような愚かな人間に手助けをしたのだ」

子供とは、ヘーパの事だ。ヘスティアーの化けの皮が剥けてきた。
こいつは……もう、わたし達、そしてヘーパを人間としては見ていない。こいつこそ、悪魔の手先じゃないか。

「もうお喋りはいいだろう……今からお前達に、地獄を見せてやる！！！」

すっかり口調が変わってしまったヘスティアー。司祭長の面影はいずこに。
杖の雷が激しさを増した。音も耳をつんざき、塞ぎたくなる。

その神の天罰を、住民達は狂喜に叫ぶ。
あんな自然現象の攻撃を受けたら、生きていられるワケがない。

（この草をなんとかしなきゃ！）

両腕や両足を縛るこの植物。
どんなに動かしても、やっぱり微動だにしない。

（レイ……）

右のレイも、焦り始め、懸命に動かそうとしているのは伝わる。

（マリア……）

彼女はうつ向いたまま、顔を上げない。
顔から雫がいくつも落ちる……まだ彼女は、涙を流していた。

（ムーン……）

左のムーンは、うつ向いた状態だ。一応、起きているようだが、右目以外顔は見えない。何を考えているのかわからない。
諦めてこの先の事を受け入れているのか、それともまだ冷静に対処を考えているのか。
出来れば後者を望むのだが。

（一体どうすればいいの……！？）

必死の抵抗くらいはしたい、とにかくツタやツルをほどきたい。わたしは最後まで抗おうとした。

「あなたはお母様ではない」

不意に、低い声が。大音量ではないのに、それはこの場の騒がしさを静めた。

「あなたは…悪い悪魔に取り憑かれているのよ……」

マリアだった。依然泣いているが、あの悲しげな目ではない。ヘスティアーのような、だが、それとは違う怒りの目。

不意に、わたしの脳内に、本で見た神の画を思い出した。

愚かな行為をした人間達に、天罰を下す女神様。その表情に酷似していた。

「この期に及んでまだ何かを言うか。悪魔よ」

他の住民達も、見た事があるのだろうか。

女神の怒り顔を見た途端、急に怯え始めたのだ。

だが、ヘスティアーはそんな簡単に恐怖を見せない様子だ。

「黙れ悪魔!!　お母様はそんな事を言わない!!」

「!?」

縛り上げられ、捕らわれの身なのに。

この声に、今度はヘスティアーが驚く番だ。

「人間は神の子……ましてや、幼き命も宝同然。なのにお前は、ヘーパの存在を否定し、わたくしと彼らの命までも否定した!!!」

マリアの首からさげられたロザリオが、急に輝き出した。まるで、彼女の怒りに反応したかのよう。

ヘスティアーの赤よりも、強い色を示す。金色に、神々しさを表した。
まだ満月ではないが、それでも月の光が消えかかる。夜空を見上げると、黒い雲が空を覆う。強い風が吹き始めた。

「消えろ！！　お前こそ、神の天罰を受けるにふさわしい悪魔そのものだッッ！！！」

マリアの叫びと共に、天候が急に悪化。
雨が降り始め、風もますます強まり、ゴロゴロと小さな雷の音が……ま、まさか。

「ぎゃあああああああ――――――――――――――――――――――――！！！！！！！」

鐘の音とは比べられない程の轟音。
黒空から、一閃の雷。真下のヘスティアーに直撃した。
撃たれた彼女は、発するのが難しく聞こえる悲鳴をあげた。
バチバチと辺りを照らし、人々を驚かせ、怖がらせる。
わたしは……この光景を目の当たりにして、開いた口が塞がらない。
雷が止み、マリアのロザリオも光り輝くのが止まる。
黒く焦げたヘスティアーは、あの雷でも傷ひとつない杖を持つ腕をよろよろと伸ばし、何かを喋ろうとする。が、聞こえる事なく、うつ伏せに倒れてしまった。

「『邪となりしものを燃やせ』！　『フレイム』！」

隣のムーンが呪文を唱え、自分を縛る植物だけを燃やした。
そして、拘束から逃れる事が出来たムーンは、そのまま落ち、地面に着地した。

「ムーン！」
「おっちゃん早く助けてぇ！！」

これは良い展開だ。思わず顔が緩む。
レイも歓喜をあげ、彼を急かす発言。
ムーンは、まだ手に余る火を、わたし達の足元に絡むツタに放った。
まさかわたしごと燃えるのでは…と不安がよぎったが、こちらも丁寧に植物だけを燃やし、自由となる。
やっと足に地面をつけた。

「いて！」
「…何してるのよ」

約一名、着地失敗。

「ムーン、なんで早くツタを燃やそうとしなかったの？」

歩み寄ってきた彼に、わたしは問う。出来たならば、何故すぐにやらなかったのか、気になるからだ。

「精神統一をしていた」
「え？」
「本当に『邪となりしもの』を燃やすには、集中力を高めなくてはならなかった。無闇に使えば、お前達まで火に燃えてしまうだろう…」

そうか…だからじっとしていたのか。わたしの望みは叶っていたようだ。
あ、そういえばまだ…

「おっちゃん、まだマリアの燃やしてないって。早く！」
「その必要はないようだ」
「え？」

レイの言う事に、わたしも内心同意したが、ムーンはもう放つ事はなく。
彼は、マリアを見上げていたので、わたしもその目線をたどり、彼女を視認した。そしたら

「えぇっ？」

植物が段々と色を変え、枯れていった。
ボロボロと崩れ落ち、マリアの身体もその動きに合わせ、地面へと降りる。
そして、母なる大地に足がついたマリアは、まだ泣いていた。

「マリアンヌ」
「マリア！」
「マリア！　大丈夫なの！？」

わたし達三人はそれぞれに彼女を呼び、駆け寄った。
住民達は、司祭長が天罰を受けた事に騒いでおり、わたし達等眼中にない様子。
マリアは……起きないヘスティアーを見つめていた。まだ、目に涙は溜めたまま。
修道人達も、わらわらと司祭長に駆け寄る。

「マリ姉！！！」

すると、ずっと建物の影に身を潜めていたヘーパが現れた。もう事が終わったと悟ったらしい。
あの雷に驚いたのか、泣き顔だ。立ち尽くしているマリアに、飛び付くように抱きついた。

「マリ姉大丈夫!?　マリ姉ぇ!!」

必死に質問する。マリアはヘーパへ顔を向けた。
子供を安心させようと、無理して微笑んでいた。

「……大丈夫」

ヘーパと目線を合わせる、そして、彼女は彼を優しく抱き締めた。
この光景を見ていたのは、わたしに、レイとムーン。

「祈りだ」
「え?」

不意に呟くムーン。わたしとレイは彼の顔を見た。

「マリアンヌの、ヘスティアーに負けない平和の祈りが怒りとなり、それに神が応えたに違いない」
「じゃ……じゃあ、この強い雨も風も、さっきの雷も、マリアが起こしてるって事?」

わたしがそう問えば、ムーンは当たり前のように頷いた。
徐々に風が収まり、雨も弱まった。
マリアの祈りが薄れた、という事だろう。
これで、事も済む。

「ふふふ……」

と思ったのだが。

「ふひひひ……くふふふ…！」

不気味な笑い声が、この場に響いた。

「くひゃ！　きひゃひゃひゃ！！　くへへはははははっ！！！」

うつ伏せのまま、身体が笑い声に合わせて震えている。
そして、ふわりと身体が浮かぶ。杖も同じように、ヘスティアーの周囲を舞う。

「この私を、神の力を得た私を、そんな技で倒せると思うな！！
けひゃはははは！！！」

気持ち悪いくらいに狂い笑う顔。あの天罰を受けて、まだそんな力が使えるというのか。

「私の偉大なる自然の力を……神の力で、この世界を平和にしてくれようぞ！！！」

ヘスティアーの叫びと共に杖の水晶玉がさらに赤黒く光った。
ヘスティアーを真っ赤な光が包み、シルエットが出来る。
それが、形を変え、巨大化し、光を失った。そのシルエットは

「さぁ……私に従いなさい。そして、神の偉大さを称え、敬い、祀るが良い！！！！！！」

植物の魔物と化したのだ。
肌の色が草木のそれ。長い髪が、ツルや真っ赤な花弁で混ざっている。
腰から下は、根となっており、様々な箇所にあの花の植物が生えていた。
あの司祭長の衣服はほとんど破けていた。
胸元に、あの杖の先端についていた、赤いロザリオが入った水晶玉が埋め込まれている。
ヘスティアーが肉食植物の魔物となった事に、住民達はパニックを起こした。
逃げ惑う彼らを、教団の人々が焦りつつも避難をさせていく。

「遂に姿を現したか……」
「ったくよぉ、こんなパターンいらねぇってば！」

ムーンは冷静に長剣を引き抜き、レイは愚痴を言いながらもナイフ、ムチを構えた。
わたしもすぐに剣を両手に持った。
そして、ある疑問を、頭の隅に置いた。

（どうして人間が、魔物になったの…？）

神誕生の地ユーピテルで、危険で害ある花の香りが、舞い上がろうとしていた。

第三十三章

―――――――――
炉の女神の名を持つ
狂った赤花の舞い
―――――――――

王国程の広さ、豊かさを持つ街、ユーピテル。
神の誕生または発祥の地とも言われたこの街。シンボルは、サーサリー教団の大きな教会。
だが、この夜、街の所々にあるいくつかの灯火の台から照らす炎、まだ満ちはしない満月の光の下。

「さぁ…悪魔よ。私が神に代わって成敗してくれよう……」

この神聖な教会前の広場で、肉食植物と成った司祭長が、わたし達を睨む。
街の人々、教団の僧侶達も、もうこの場所から離れていた。
だが

「……」

片膝を地面に付き、ヘーパイストスを抱き締めている形のまま、マリアンヌは司祭長の姿に絶句した。
ヘーパも、恐怖に顔が歪む。身近な人物がこのような姿になれば、彼らじゃなくとも絶対に驚くはずだ。わたしだって。

「マリア！！　逃げろよぉ！！」
「！　は、はい！！」

レイニーの声で、やっと我に返った二人。立ち上がり、駆け出そうとしたら

「逃がさない！！」
「！？」

ヘスティアーは両腕を植物のツルに変え、伸ばし生やした。
勢いよく、ここから逃亡を図った二人に飛ばした。が

「！！」
「ムーン様…！？」

二人の前に立ちはだかり、剣でそれを斬りつけたムーン。
マリア達はまたも、急な展開に動けなくなる。

「早く遠くへ。ここは私達でなんとかする…」
「で…ですが…」

ムーンが避難を促すが、マリアは何か言いたそうな顔だ。それがなんなのか喋る前に

「邪魔をするな！！」
「！？」

ヘスティアーのツルが再生し、ムーンを捕らえた。
そして、力強く投げ飛ばされ、元いた立ち位置へと叩きつけられた。

「ムーン！？」
「おっちゃん大丈夫か！？」

立ち上がらない彼の元へ、わたし達は駆け寄った。
険しい表情はホータイで覆われた顔でも、目を見れば知れた。
彼が自分の足で立てるよう手助けをしようとしたら

「悪魔よ…お前等、神に愛されない哀れな悪人だ！」

ヘスティアーの攻撃がまた始まった。
奴の根から、わらわらとあの花のモンスターが生え、分離して独立した。
その数、７、８匹か？

「アル！　マリア達を…！！」
「うん！！」

武装もしていない、無防備な二人を守らなくては。
ムーンの必死な声に言われ、わたしは駆け出した。
しかし、わたしよりも植物達の方が、彼女らとの距離が短い。
いくらスピードに自信があっても、間に合わないんじゃ…

「こっちに来るなぁ！！」

ヘーパの叫び、マリアの前に立った。
あの小さな身体が魔物の牙にやられてはならない。
速く行こうとしたが

キィィィ！！

ギィィッ！！
クギャアアア！！

「！？」

あれほど数のあった魔物が、ヘーパに触れようとした時に、燃えるように枯れてしまった。
何が起こったのかわからず、驚きのあまりに足が止まる。
マリアも、幼い子のした事に目を丸くした。ヘスティアーも同じく。

「何故だ…何故殺す事が出来ない！！　お前達！　もう一度殺ってしまえ！！」

何かの間違いだ。そう否定するように、ヘスティアーはまた花達を召喚した。
だが、ヘーパは恐れもせず、逃げようともせず、マリアの前の位置に居続ける。
更なる花の魔物が襲っても、やはり燃えてなくなってしまった。

「お前なんかにマリ姉を触らせないぞ！！！　ぼくはヘーパイストス、炎の神様なんだぁ！！」

そう高らかに叫ぶ幼き少年。
まさか…ヘーパの思いは、『ヘーパイストス』の加護となっているのだろうか？　そう推理した方が納得がいく。
信仰の厚い者の気持ちとは、ある意味恐ろしい力だと思い知った。

「おのれ…！　それならば！！」

部下達に向かわせては不可能と知った赤花の女王は、自ら赴いた。

何本もある根が、虫の足のように動き、マリア達へと向かった。
その魔物の動きに怯える二人。
これは…いくらヘーパに加護があっても無理があると思った。

「おい待てよ!!」
「――――!!!??」

わたしが行こうとする前に、ヘスティアーに何か放たれ、それは小さいながらも爆発した。
レイの作った爆弾のようだ。ここには灯火がある。

「…お前か？　私に傷をつけた者は」
「ああそうだ！　マリア達に手ぇ出す前に、まずはおれから倒せって事だよ!!」
「ほう……」

レイの言葉を聞き、何を思ったのか、面白がっていた。
端から聞けば頼りになる発言だ。しかし

「ならばお前から、神の生け贄として捧げてやる!!!」

ヘスティアーの根や、手のツルが地面に潜り込んだ。そして、

「うわぁっ!?」

レイの足元から急に現れ、彼の身体を縛り、宙に持ってかれる。
ムーンのように叩きつけれられると予測。わたしは奴の植物の手足を斬ろうと駆け出したが

「えっ？」

わたしの足元から、また新たにツタや根が生えてきた。

「っっ！」

それを斬りつけながら、バックステップで回避。
だが、植物は次々と生えてきて、わたしの行く手を遮る。
後ろに下がり続けた為に

「あ、アルテミス後ろっ！！」

レイが声をかけても気付けなかった。わたしの背後には、別に生えていた魔物の手があったのだ。

「きゃあっ！！」

気付いても遅く、レイと同じように捕らわれてしまった。
足が地上を離れてしまい、腕も縛られ動かせない。
でも、剣だけは離さない、そう思って強く握りしめた。それしか出来ない。

「ふふふ……子供は神の子…今すぐにでも、神の元へ送ろうぞ……」

ヘスティアーの気味の悪い笑い声。
縛る植物のツル、ツタに、段々と力が入ってきた。
身体が痛くなってきた…このままじゃ千切られてしまいそうだ。

「くっ…うぅっ……！！」

動かせる部分は動かしてみる。

だが、足も腕も封じられている。手首で剣を動かしてみるも、やはり刃が届かない。

「魔技、『紅蓮』！！」

ムーンの声が聞こえたかと思えば、拘束する植物は燃え始め、なくなった。

身体が自由になり、宙に浮かされたわたしは真下に着地。

少し離れた所でも、今度は着地成功したレイの姿が視界に入る。

わたし達と距離が近いヘスティアー。

彼女は遠くにいるムーンを睨んだ。

彼は長剣を構え、刃には魔技の炎が宿っていた。

「アル、レイニー、離れろ！！！」

ムーンがそう叫び、わたし達は彼に従いヘスティアーから駆け離れる。

それにより、ヘスティアーの再生したツルが追いかけてきた。

今度は捕らわれぬよう、足元にも気を遣いながら回避を続ける。

ムーンを視界に入れる。彼の長剣から更に炎が燃え上がり、その場でヘスティアーに向けて、縦一閃に降り下ろした。

剣先から、刃の形をした炎が飛び、ヘスティアーの植物に直撃した。

「ギャアアアアァァ――――――――――――――――！！！！！！！！！」

ヘスティアーの苦しむ、聞くに耐えない叫び声が響く。

わたしを狙っていたツタも、急に動きを止めて、うねうねとのたうち回る。

ヘスティアーの姿をよく見た。植物の部分が燃えており、険しい顔の彼女だった。

「待って！　おじさん！！」
「？」

急に、ヘーパが彼を呼んだ。

「お母さんを殺さないで！！　お母さん、何か悪いものがついてる！！」
「悪いもの？」

さらにマリアが続けて

「先程からお母様から邪気を感じます！！　最初は、お母様の持っていた杖からそれを感じ取りました！！」
「杖…？」

そういえばあの杖の先端…水晶玉があった。あの赤いロザリオが入ったもの。

「ギィィィィ！！！！！！」
「！？」

あの花の魔物達に近い人間の叫び声。振り向くわたし達。
炎を振り払うかのように、植物を生やし、赤い花弁がヘスティアーの周りを舞った。

「私の花を…私の命を削ろうとする異端者……神の裏切り者めがぁぁぁぁぁぁ！！！」

花弁達が地面に落ちる前に、それは浮かび上がり、さらに花びらは

ヘスティアーの花から散らされた。
それが生きているかのように動き回り、わたし達に向かってきた。

「きゃっ！」

風のように舞い踊るそれは、わたしの動きを鈍らせ、視界を遮らせる。追い払おうと剣を振るうも、意味がない。
この花弁…確か、教皇の部屋に落ちていたものだ。何故あの時点で、魔物である事に気付かなかったのだろうか。

「お前達には生き地獄を与えてくれる！！！」

そう声が聞こえるも、半ば拘束状態のこれでは、対処に遅れる。
必死に目を薄め、ヘスティアーの攻撃に備えようとするが

「――――！！？」

花弁が赤色の刃物のように、わたしの顔、腕や足に切り傷をつけてきた。
それだけならばまだいい。しかし、怖いのは直後に起きた。

「うぅ……」

傷を追い、襲い掛かってきたは傷とは別の苦しみ。
直立が難しくなり、ついには肩膝を地面に付けてまで支えなければならなくなった。
花弁が薄らぎ、辺りを見ると、レイとムーンもそれぞれに、険しい顔だった。

「くふふふ……花の毒は、棘よりも怖いもの…」

ヘスティアーの妖艶な笑み。わたし達の歪む表情を楽しんでいる。
不快だ。
ふらつきながらも立つ。剣を構えるが、腕が震えて上手くいかない。
毒が回り始めているんだ、と実感。

「さぁ…死にたくなければ、命乞いをしろ。そして、その身を神の生け贄として、天国へと向かわせてやろう」

どっちにしろ選択は死亡決定。無理言うんじゃないよ、と言い返したい。
そんな事は絶対にさせない。思うならば誰にも負けないが、資本の身体が扱えないのなら意味がない。
ヘスティアーの根が、足元の地面から生えてきた。わたしと、今視界に見えるレイを養分にする気か。
その根らと勝負しようと構えたら

「!!?」

ヘスティアーが悲鳴をあげた。わたしは驚いた。
何故なら、わたしを取り込もうとした根は、燃やされたからだ。
レイも同じ境遇の様。一体何が。

「天国に向かうはお前だ……否、むしろ地獄か…?」

同じ被害に会ったはずのムーンの、紅蓮による攻撃だった。
確かにマントやフード、動く度にその隙間から見える手足にも切り傷はいくつもある。
だが、彼は平気で立って、炎の剣を構えている。

（あ、そうだ！）

ムーンは木の実所持者だ。
解毒効果のあるゲドクモを買ったばかりだ。
そうとわかれば、彼から少し分けてもらわなければ……しかし、向かう途中に狙われるのでは。

「『神よ、彼の者達に天使の加護を与えたまえ』！！」

マリアの叫びに近い祈りの言葉が聞こえ、身体が楽になった。身体の毒が消え去った。
その祈りは、今のマリアには使えなかったはずだが…。

「マリア！　サンキュー！！」

レイが一言彼女にそう言い、ヘスティアーへと駆け出した。
その彼に、ムーンが言った、時間稼ぎを頼む、と。
ムーンは片膝を地面に付き、手の平を地面に……これは、あの盗賊達を捕らえた時の魔法か。

「……私は神に仕える者。地獄に等逝きはしない！！！」

ヘスティアーの反撃が開始。ターゲットはレイとなり、植物のツルや、刃物なる花弁が襲いかかる。
だが、レイはそれを避け続ける。捕まりそうで捕まらない、そんなスレスレの避け技を披露する。
ムーンは詠唱を唱えている、ぶつぶつと声が聞こえる。

キィィィィィィッ！！！

攻撃はヘスティアーだけではない。根から花の部下達がまだ生えてきた。
詠唱中のムーンに向かう魔物、マリア達にも駆け出す植物。
あの魔法は、あの時短縮詠唱をしたくらいだから、邪魔をされたら無駄になる。
わたしは、ムーンに襲いかかろうとする植物達に向かって攻撃を始めた。

「ていっ！！」

ムーンも唱えながら、空いた手で剣を構えようとしたが、彼には集中してもらうべく、わたしが斬った。

「へーパ、こっち！！」
「うん！！」

と、修道女と孤児院の子供の声。マリアとへーパ。振り向き見ると、魔物から逃げているのを確認。
ムーンを見る。彼は唱えつつ剣で彼女らを指し示した。助けろ、という事だ。
それを確認してすぐに、わたしは二人の元へ駆け出す。

「アル様！？」
「アル姉ちゃん！？」

二人の側を横切った瞬間、わたしを呼び止める声。
構わずわたしは、二人を追いかけてきた花達を斬り裂いた。

ギィィィィィ！！！

断末魔の声、もう聞き慣れた鳴き声だ。
さらに迫ってくる奴等に、わたしは刃を振り回す。もう経験値としては低いくらいの相手だ。

「アル！　マリア達を助けたんならおれもー！！」

時間稼ぎ担当レイは依然、スレスレの回避芸を見せている。
正直、余裕じゃないのは目に見えている。
方向転回し、わたしはヘスティアーへと走り出す。

「のわぁっ！？」

ついに足を捕られ、逆さ吊りにされたレイ。しかし、わたしも既にたどり着き、剣乱舞をお見舞いし、彼を助けた。

「こっちに来るんだ！　アル！　レイ！」

ムーンがわたし達に呼び掛けた。それに従い、ヘスティアーから距離を離すわたし達。
マリア達も彼の側におり、わたし達を待っていた。

「逃がさん！！！」

背後で植物の動く音が激しくなった。気配だけでも、距離が縮まろうとしているのがわかる。

「『母なる大地の恵みよ、この地に生まれた我々に生きる力を』！！　『グロウ』！！」

締めの呪文が叫ばれ、

「なっ……！？」

背後の気配が遠退き、わたし達は彼らの元へたどり着いた。
すぐに振り向けば、あの盗賊達を拘束したのと同じ、イバラ達がヘスティアーの全身に絡み、動きを封じていた。
ヘスティアーがどんなに動こうとも、己の茎、根、葉を操ろうとも、動けないようだ。

「マリアンヌ」
「はいっ？」

既に両足で直立しているムーンが、マリアに見向き不意に呼ぶ。唐突故にマリアは驚きつつも返事をした。

「邪気を感じるのはどこだ？」
「ああ……えっと…」

マリアが言った事だ。ヘスティアーから禍々しい何かを感じる、という事を。
ムーンだったら、わざわざ生かしておかない。すぐに殺ってしまうはずだ。
マリアは改めて、ヘスティアーから邪気というものを探した。
そして、目を見開く。見つけたようで、指を差した。

「あれです！　胸に埋め込まれた水晶玉からです！！」

杖の先端についていた赤いロザリオ。
それが今、魔物と化したヘスティアーの身体にある、という事は、あれが元凶であると知る。

「あれを上手く壊せば、もしかしたら……」

もしかしたら、ヘスティアーの魔物化が解くかもしれない、という事だろう。

うまくいくかどうか……やってみなければわからない。

わたしは今まで様々な本を読んできたが、人間が魔物に成り変わるのは、魔界の魔物達の力によるものである、と知った。

その根源さえ無くせば……人間が魔物になる理由はない。

「ア゛ア゛ア゛ア゛ー――――――――――――――――!!!!!!!!!!」

「!?」

もう人間じゃない雄叫びをあげ、ヘスティアーはムーンの魔法草壁を破った。

己のツタ、ツル、長い根が、彼の召喚したイバラを千切り、潰し、自由を取り戻した。

「許さない…私は神の…神の遣いだというのに……!!!!」

顔はもう怒りしかない。目付きも、恐ろしい魔物のものだ。人間の形ではあるのに、もう同類には思えない程、彼女は変わり果てていた。

ロザリオも、真っ赤な血に見えるは気のせいではない。

「死ねぇぇぇ――――――――――――――――――――!!!!!!!!!」

腕の植物、足である根、草となっている髪の毛を、次々に地面に潜り込ませた。

すると

「――――!?」

わたし達の足元から、鋭い槍状の植物達が、どんどん生えてきた。
それも勢いよく、不規則に。
全身を貫かれたワケではない、だがしかし、腕や足、かすってしまい、身体がぐらつく。
槍は地面から飛び出したまま、攻撃は止まった。ヘスティアーの不敵笑う声が聞こえる。
仲間達を見た。ムーンもレイも、堂々直立なんて無理のようだった。
身体を硬直している。かすった傷、突き刺された傷、各々に押さえていたが、武器は落とさない。
ヘーパ達二人は無事だった。とっさであるのに、ヘーパの祈りが二人の身を守ったのであると知る。

「み…皆様……!」
「姉ちゃん達!」

槍が地面に還り、脱力。レイは膝から力が抜け、座り込む。
無傷の二方は、傷負ったわたし達よりも焦りを見せていた。

「……次は避けられまい」

ヘスティアーの次なる攻撃が始まる。また地面に潜り込んだ凶器達。
攻撃が来るのはわかる、が、避けるにもタイミング、出現ヵ所がわからず、予測出来ない。
マリア達には、炎の神の加護がある、傷を負う事はないだろう。

「皆様!」

「来るよ！！」

邪気を察する力がある二人、タイミングはわかった。
問題は、来る攻撃にどう対処するか、全神経を過敏させ、どんな気配にも対応しなければ。

「うわっ！」

最初の一撃は、レイの足元から。
ギリギリに、彼の横から槍が地面から飛び出た。
防具、マントにかすり、傷や穴を作った。

「！」

真下から急に違和感を感じ、わたしはバックステップでそこから下がった。瞬間に、わたしのいた場所から根の槍が数本現れた。
すぐに反応しなかったら、八つ裂きであったろう。

「ふんっ！！」
「っ？」

急にムーンが、剣を逆手に地面を突き刺した。瞬間

「ぐあああっ！！！」

ヘスティアーが苦しみ始めた。剣の刺さっている所をよく見ると、我々を傷つけるはずだったツタの槍が、彼の持つ切っ先に阻止されたのだ。それだけじゃなく

「わわっ！？」

「えぇっ！？」

ムーンの長剣が、紅蓮で炎を出し、突き刺している植物を燃やした。
その予告なき攻撃に、わたし達も驚きを隠せない。
ヘスティアーが叫び声をあげるのは無論。

「やめろ…やめろぉぉぉぉ！！！」

ヘスティアーの制する声。
あの花の植物が喋っているような声だ。耳には痛い。
ムーンの攻撃により、彼女の恐ろしい技は来なくなった。

「『神よ、彼の者達に癒しの力を与えたまえ』！！」

その隙にマリアが、今まで受けたわたし達の傷を治してくれた。痛みはなくなり、楽になった。
彼女に短く礼を言った。ら

「裏切り者が…神にすがるんじゃない！！！」
「！？」

ヘスティアーがマリアを睨む。鋭き目付き。嫉妬のようなものも感じた。
あの毒のある花弁の舞が、マリアだけに向けて放たれた。
あれを防ぐのは、難しい。ましてやマリアには、身を守る防具等ない修道女の黒衣。
防ぎきれないとわかっているのに、レイが駆け出した。ムーンも急いで剣を抜き、魔技を使おうと構えた。わたしも彼女を助けようと。
だが

「――――――――――！！！！！」

わたし達戦士よりも先に、彼女を守ったのは、彼女の側にずっといた、一人の少年だった。
マリアの前に立ち、刃物達に向かって走り出したが、間もなく衣服や顔、腕、足、身体に傷を負った。
ヘーパが全ての攻撃を受け、花は消えた。そしてヘーパは地面に倒れた。

「いやあぁぁぁぁぁっっっ！！！！！！」

マリアが悲鳴をあげ、すぐに駆け寄った。両膝を地面に付き、ヘーパの身体を抱え、自分の膝に彼の頭をのせた。

「ヘーパ！　ヘーパイストス！！　しっかりして！！」

切り傷は小さくとも、数さえ多ければ、流れる血も一本の剣で一斬りしたのと同じ。
しかも子供だ。生命力を維持出来る身体ではまだない。

「お前が神の名を口にするからだ、異端者よ」

ヘスティアーの怒りはまだ続いている。奴の周りにまた赤い花弁が舞う。次の攻撃が来ると知る。
ヘーパの事も気にするが、対処しないとわたし達全員が殺られる。
マリアは手と手を交差、ヘーパの傷を治そうと祈りを呟き始めた。

「まだ神に頼るのか！？　裏切り者！！！」

来た！　武器を構え、出来る限りでいいから、立ち向かおうとした。

ら

「っ！？」

花弁は、燃えカスとなり消えた。火種等見当たらない。何が起こったのか、この場のわたし達にはわからなかった。否、

「××××××……」

この場に、原因らしき人物がいる。

聞いた事ない言語を呟き続け、並べていく修道女。彼女に注目が集まる。

わずかに聞き取れるのは、本で知って今も覚えのある神の名前くらい……そう、炎の神も彼女の声により呼ばれるのを聞こえた。

瞳を閉じ、祈る事だけに専念している。

「黙れ……黙れ黙れ黙れぇ！！！」

その祈りの言葉が気にくわない奴は、同じ攻撃をまたしてきたが、やはり花弁は燃やされ消える。

「××××××……」

それでも彼女は祈りを呟き続ける。静かに、力あるその思いを。

すると、ヘーパの傷が徐々に治っていく。ゆっくり、ゆっくりと。

「ええい！！　その口を塞いでくれる！！」

毒の舞は不要だ、と判断し、ヘスティアーの手の植物が伸びる。

ヘーパは、彼女がいる、大丈夫だ。

わたしはその攻撃に向かい、走りながら斬り捨てた。

「アル！　司祭長を殺すな!!　狙うのはあの水晶玉だ!!」

「わかった!」

背後からのムーンの声。返事をし、また来るツタを斬り落とす。

奴との距離はまだある。スピードを生かし、ただ斬るだけじゃなく、速さでツルや根を避ける。

しかし

「!?」

あともう少し、というところで、イバラを交差させて這い上がってきた壁に邪魔される。

突っ込まぬよう急ブレーキ、また足元から槍の出る寸前の感触を受け、すぐにバックステップ。

横からくる攻撃、それぞれに剣を振るい斬りつけた。

しかし、相手の手数が増えた。対処しきれない!

「そりゃ!!」

と、レイの声。何かがヘスティアーの植物ムチに放り込まれ、爆発。小さいそれが何個も何個も。破裂し、奴の邪魔をする。

「おれ達で援護するから!　速くしろ!!」

「あ、ありがとう!!」

レイの爆弾の攻撃だった。

さらに、生きた炎が私を植物から守ってくれる。ムーンの紅蓮のようだ。それならば、レイの爆弾の火付けは、彼によるものである。

爆発の衝撃、襲いいく炎、ヘスティアーが徐々に押され、わたしも戦いやすくなる。

「来るな！　来るなぁぁ！！」

植物の叫び、どんどん生え、行く手を阻むが意味はない。
後ろからの援助は、奴へ向かう道を作ってくれた。

（あの技を成功させてやる！！）

一旦、二本の剣を鞘にしまう。これで走るスピードが増す。腕には何も持っていないから。
先程のバックステップで、理想の距離が、わたしと相手の間にある。

（よし！）

進行方向に障害物が消えたのを見極めた、瞬間にわたしは駆け出した。
足を止める事はない。ツタ、ツルの邪魔が入るが、ジャンプで避け、スライディングでくぐり抜け。
相手の本体は、根や植物がある故、わたしより高い所にある。かと言って

（不足しているものは、既に充分あるもので補えば良い）

根やツタや葉、利用出来るものを足場とする。絶妙な距離。足場が悪いがチャンスはここだけだし、狂わされる事はない。
柄に手をかけた。それぞれの手に、逆手に持って、

「えいやぁあああああっ！！！！！！」

引き抜き、突っ込む勢いを飛び越えるジャンプに変え、丁度奴の前になった時、斬りつけた。
左右からの横一閃、手応えあり。剣先は赤きロザリオを守る水晶に、傷が負わされたのを確認。
しながら、わたしは向こう側へと着地

「うわっ」

失敗した……。
でも、すぐに立ち上がり、剣の持ち方を直し、振り向く。
「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛――――――――――――――――――――――――!!!!!!!!!」
ヘスティアーの叫び声。痛みをこらえるかのように、その場で植物達がのたうち回る。
ヘスティアー自身も、後ろ姿ではわからないが、胸元を抑え、身体をくねらせる動き。弱点である証拠である。
「皆様！　下がって！！」
と、マリアの声。彼女の言葉に従い、ヘスティアーから急いで離れた。
「『神よ、我が言葉、神の言葉をお聞きならば』」
普段わたし達の話す言語で、マリアの高らかな声が聞こえた。
ヘスティアーを視界に入れつつ、わたしは彼らのいる反対側へと向かう。

「『我が愛する母に宿りし、悪の花を燃やしたまえ』！！　『我が愛する母に宿りし、邪気の毒を取り除きたまえ』！！　『我らが愛するたった一人の聖母の、悪しきもの全てを、ヘーパイストスの神炎により消し去りたまえ』！！！」

彼女らの元へたどり着き、ヘスティアーの前方に回り込めた。瞬間

「ギャアアアアアア―――――――――――――――――！！！！！！！！」

赤花の化け物は、距離があろうとも熱気を感じ取れる、業火に包まれた。

植物の燃える音、燃やされていく葉や茎、根もツタもツルも。

ここを昼のように明るく照らす火炎は、激痛によるものなのだろうか叫びをあげ続ける、ヘスティアーを燃やす。

「ちょ…ちょっとマリア！？」

これはあまりにもやり過ぎだと思えた。彼女の方を見ても、修道女マリアンヌは冷静だ。

ただ真っ直ぐに、炎の神の力を見つめている。

ヘスティアーの水晶玉にヒビが入る、音を立てながら。

そして、粉々に砕かれ、中の赤いロザリオは砂のように消えた、キラキラと光りながら。

すると、炎は徐々に止み、ヘスティアーを包むものはなくなった。

植物はなくなり、ヘスティアーは、ただの人間の司祭長に戻った。

その身体は戦った傷痕が残っている。衣服もボロボロ。

完全に炎は消え、通常の夜の暗さとなった。

ヘスティアーは、スローのようにゆっくりと、後ろに倒れた。

第三十四章

神の祈り

「お母様！」

マリアンヌはすぐに駆け寄る、倒れた彼女の元へ。両膝をつき、必死に呼び掛けるマリア。

わたしは武器をしまい、行こうか行くまいか迷っていたら、ヘーパイストスの身体が動き出した。

「うう…」

「ヘーパ、大丈夫か？」

既に手ぶらのレイニーは、幼き少年に歩み寄り、ヘーパの容態を確認。

上体を起こし、辺りを見回す。そして、ヘスティアーとマリアを見て、すくっ立ち上がった。

「お母さん！！」

マリアと同じようにその方向へ走った。

段々と、周りに人が現れてきた。物影や建物の中、教会の中に逃げ隠れていた街人、教団の者達。二人の動きを真似するように、ヘス

ティアーへと集まってきた。
わたし達も、顔を見合わせ、頷く。行こう、という合図。人混みを掻き分け、マリア達に近い位置に着く。

「お母様…ごめんなさい。わたくし……」

涙声で、ポロポロと目から雫、それはヘスティアーの弱りきった顔に落ちた。
それに反応するかのように、ヘスティアーの腕がゆっくり動き、マリアの頬に手を添えた。

「いいえ……悪いのは、私…」

そう言って、娘同然の彼女を心配させないよう、笑顔を浮かべる。
初めて見る表情だ。

「そんな事ない！　だって、お母様はあれほど悩んでいたのに、わたくしがそれに気付かなかったから…」
「いいえ……全ては、私の心の弱さが、あなたを、ヘーパを、教皇様を、人々を巻き込んでしまったから……」

罪悪感に、ヘスティアーが涙を流す。ごめんね、と、呟くのが聞こえた。
それにマリアは首を横に振った。母は悪くない、と否定の意。

「そう……巡礼の旅で、あの男に出会ったが為に……」
「……？」

ヘスティアーが変貌した原因か？　聞き逃しはしまい、と耳を傾けた。独り言のように、ヘスティアーの言葉が続く。

「あの男の言葉を鵜呑みにしたから……私は、大切な事を忘れてしまった……」
「今はもう喋らないで…わたくしが、お母様の身体を」
「いいのよマリアンヌ」
「え……？」

僧侶の力を使おうとしたマリアを、ヘスティアーが言葉で制した。
弱々しいそれなのに、それだけでマリアの行動を阻止した。

「これは…過ちを犯した私への天罰……私は、罪を償う為にも、地獄へ参ります。どうか、このまま見送ってほしい……」

自分の命がそろそろ尽きようとしているのを悟ったのか、ヘスティアーは目を閉じた。我が子達に、どうか、神のご加護があらん事を…そう呟き、涙を流し続ける。

「いや…そんな事、させない……」

マリアンヌは、まだ顔に添えられた母の手を、大切に握りしめた。
そして、祈りの手のようにヘスティアーの手を包み、目を閉じて、うつむく。
…祈りを込めているのだろうか。

「お母さん…死なないで……！」

ヘーパも、涙をゴシゴシと拭い、祈り始めた。
それを見習い、人々が、僧侶達が、口々に願いを呟き、祈りを捧げる。
周りを見渡せば、わたし達を除き皆が同じように、心を一つにして

いた。
この街の者は、今、一人の為に、神に願っている。炉の女神の名を持つ司祭長に、生きてほしいから。

「……」

すると、ムーンも、素手の右手とホータイの巻かれた左手とを、指を交差させ祈りを。
それを見たわたしは、レイを見た。丁度レイもわたしの方を見ていたので、目が合う。
アイコンタクト。わたしもレイも揃って、この集団の中に混じる。
ヘスティアーさんはただ、何者かの意思により、魔物となったのだろう……だから、彼女に罪はない。
神様を信じない、かと言って否定はしないわたし。だけど。
今は、平和を願うが為に傷を負った、ヘスティアーさんの為にも、どうか、願いを聞いてくれないだろうか……。

「ヘスティアー様…」
「母さん……」
「お母様…」
「どうか生きて下さい…」
「司祭長様……」

皆のそれぞれに呟く声。祈る時、てっきり沈黙であるのかと思ったのだが、ざわざわと、各々の思いが口に出る。
ただ一言、ただ名を呟く、それだけでも、その人々からの思いというのは、一気に伝わってくるように思えた。

（わたしみたいに、悲しい思いをさせたくない……）

何も出来ずに、見殺してしまったわたしの母さん。出会って間もないけれども、マリアは大切な仲間だ。
そんなマリアに、わたしと同じような事をさせたくない。ただ、それだけを祈る。
僧侶のようにそんな力はないけれど、でも、思いだけなら…。

「おお…！」
「神よ…！」

不意に、事は起きた。
横たわるヘスティアーさんの身体は、淡い光に包まれている。
彼女の傷はみるみる内に塞がれ、顔色も徐々に良くなってくる。
この現象に、街の人々、修道人達はざわめき、喜びの声をあげる。

「……」

それにはわたしも思わず、祈りを解いてしまったが。
マリアを見れば、彼女だけは周りに惑わされず、祈り続けた。
……わたしは思った。あの戦いで、マリアが使えなかったはずの祈り、わたし達を驚かせたそれ以上の力。
それを彼女が使えたのは、母を思う気持ちが強まったから。それが二倍三倍に膨れ上がり、女神を思わせる程に、マリアは思いの力を示したんだ。

「これって……まさかマリアだけが？」
「ああ…そのようだな」

レイがムーンに問う。彼は冷静に答えた。
でも…わたしは違うと思う。今、この場にいる思いが、マリアにもっと力を与えているんじゃないかと。

ヘーパは、自分の母の傷が治るのを見、喜びの表情を見せる。マリアが握っていない反対の空いた手に、少年は手を伸ばし、姉と慕う修道女と同じように、祈りの形で重ねた。己の手を。
ヘスティアーを包む光はまだ存在する。
そして

「……？」

目をゆっくりと開け、ぼーっとしているように、夜空を真っ直ぐ見るヘスティアーさん。
それにヘーパが歓喜の声をあげ、同時に涙を流した。
そのヘーパを、ヘスティアーが目だけで見、次に、反対側のマリアを見る。
住民、団員も、気付けば各々に喜びを見せる。

「ま……マリ、ア……」

ヘスティアーさんの、マリアンヌを呼ぶ声。上手く聞き取れた。
光が収まり、消える。残ったは、瀕死から回復したヘスティアーさん。
二人の子供は、母の身体を起こそうと協力し合う。
上体を起こされたヘスティアーさん。

「マリア……ヘーパ……何故ですか？」

第一声は、問いから始まった。
マリア達は、ヘスティアーさんが無事であったから涙を流す、対し彼女は、悲しんでいた。

「私は、あなた達に……街の方々に、大事な仲間達に、教皇様に、

償いきれない事を犯したのに……」
「……」
「何故、私を生かしたのですか……？」

ヘスティアーさんは、罪悪感に満たされていた。だから、一人だけ、気持ちが違う。
皆は嬉しいに決まっている。だから、マリアは

「例え、お母様が過ちを犯したとしても、わたくし達は、あなたを許します…」
「どうして……？」
「これは、お母様の意志ではない。お母様はわたくし達を大事に思ってくれた……家族のように」
「！？……」

家族のように。その言葉に、ヘスティアーさんの目が見開く。

「血が繋がらなくとも、わたくし達は、家族なんです。お母様……」

そう言って、マリアは母を抱き締めた。

「だから…生きてほしいの……！」

その悲願ともとれる言葉を聞く。マリアは声をあげて泣いた。ヘーパも、同じように抱き付く。
周りの人々も、感極まり、各々に涙した。

「……皆さん…」

ここに皆が、ヘスティアーさんを思い、涙する。

彼女は、それに気付いたのか、悲しい表情がなくなった。代わりに、喜びと嬉しさを見せてくれた。

「ありがとう……」

ヘスティアーさんも、二人の子を抱き返す。溢れる涙を止める術は、今、いらない。

まだ満ちない月、けれど、ご加護のように、このユーピテルを照らしてくれていた…。

第三十五章

―――――――――
災いは去り…
平穏が訪れ……
―――――――――

＊＊＊＊＊

その後は、人々と協力して、壊れた箇所を直したり、怪我人を助けたり。
幸い、範囲は狭く、損壊したのは教会の壁や柱に小さくあるくらい。
怪我人も、怪我とは言ってもかすり傷のような軽傷程度で、今後の生活に支障はない。
教会の地下室に取り残された教皇も救出したが、教皇はただ気を失っていただけで、具合等悪くなかった。ヘスティアーを操っていた魔力が消えたからだろうか。
念には念を、この街の出入口の魔法陣も調べたが、綺麗さっぱりなくなっていた。

（ヘスティアーさんを操っていたものはなんだったんだろう……）

教皇の体調を悪くし、言葉巧みに民を騙し、魔法陣で被害を作っていた。
更には、人間を魔物化させる力……兄さんが受けた被害のものと酷

似する。兄がどのように魔物化したのかは、目で確かめた事はないが。
瀕死の時に口にした、巡礼の旅で出会ったという『あの男』。
マリアンヌの証言では、ユゴリアンにいた頃に、ヘスティアーさんは変わったというが…。

（詳しい話を聞きたいけれど……）

作業も終わり、やっとこの街に平穏の夜が訪れた。
街人はそれぞれに、礼拝堂でお祈りをしてから家へ帰っていく。
その帰りを見送るのは、サーサリー教団の人達。
この事件で被害を強く受けたヘスティアーさんは、既に自室で休んでいる。回復しても、無理をさせてはならない、とマリアとヘーパが付き添い、二人もここにはいない。

（まだ精神的に安定はしていないし、嫌な事思い出させるワケにもいかないし……）

気になりはするが、無理に聞き出してまでのものではない、と自分を自制。この話は忘れよう。
教団の人達と一緒になって、人々を見送りながら、わたしは内心で終止符を打つ。

「それにしてもアルテミス。さっきの技、よく決められたよなぁ～」

と、教会の扉付近にいるわたし達。
ある親子の背を見ながら、レイニーがわたしに問い掛けた。
羨ましげに聞こえるし、憧れの眼差しを向けているようにも聞こえるその言葉。

「追い詰められて力を発揮するのは、今後、同じ様な境遇に出会した時に、役に立つだろう…」
「そんなもんなの？おっちゃん。やっぱり必殺技とか奥義ってぇのはさぁ～…」

ムーンの言葉に対し、レイが反論を述べる。単純にカッコよくって強いから、いつでも使えればなぁというレイ。
ムーンはそれに対し首を横に振り、技や剣技、奥義、必殺技の個人的見解を語る。無闇に乱用すると、他人に盗まれたり、見破られる可能性が高い、だとか。
二人のディベートな会話を聞きながらわたしは、もう少ない街の人を見送っていた。

＊＊＊＊＊

全ての住人達が家に帰り、教団員達も教会を閉め始めた。
わたし達は教皇に呼ばれ、礼拝堂まで連れていってもらった。そして、教壇近くの長椅子に座るよう言われ、彼はわたし達の前に立つ。

「今回の件では、本当に心から感謝いたしております。サーサリー教団の教皇として、ユーピテルに住む人間の一人としても、お礼を申し上げます」

と、礼をする。教皇の気持ちが伝わってくる。顔を上げれば、優しげな顔の彼。

「あなた達がいなかったら……この街は近い内に、魔物達に滅ぼされていたのかもしれません…本当に、ありがとうございます」

「いえ…我々も、司祭長殿の呪いにいち早く気付けば、この街に被害はなかったと思われます……」

ムーンがわたし達の代表として、教皇に話す。それに対し教皇は首を横に振った。

「私の油断があった故、ヘスティアーに大変な事をさせてしまいました…。あの魔力を、何故私は察する事が出来なかったのか、今でも不思議でならないのです……」

確かにそうだ。信仰者の代表であり、信仰者達からして見れば神に近い存在である教皇。
その教皇が、禍々しい力を感じれなかったのはどうしてなのか。

「もういいんじゃないのー？　ヘスティアーさんは元に戻ったし、魔物はもうここには来ないだろうし、終わった事をくよくよしてもしょうがないと思いますよぉ？」
「ちょっとレイ！？」

教皇が悩んでいるというのに、それに対しレイが指摘。それも、前向きに聞こえるが無責任にもとれる発言。
思わず右隣の彼を睨んだ。ムーンもチラ見程度だが、左隣の彼を睨むように見える。だが

「ふぉふぉふぉ……それもそうですな、ええと…」

教皇はレイの言葉に笑った。不快には思わなく、むしろ彼の言葉が正解、とでも言うように答えた。名前をまだ聞いてない故、どう呼ぼうとしたのか迷っていたら、すかさずレイは自己紹介をした。

「わかりました……今日はもう遅いので、どうぞ、おやすみ下さい。お部屋をお貸ししますので」

＊＊＊＊＊

例え昨夜に、何か問題や事件が起きても、

「うぎぃっ！？」

あの早朝の鐘の音は変わりなく、街に鳴り響いた。きっと、世界が滅亡寸前でも、神の地の鐘は鳴るのだろう……そう思える。
最初に聞いた時と同じように、轟音、規則性のある鳴らし方、音の回数。
わたしは驚いた勢いで上体は起きてしまったし、レイもびっくりしてベッドから転がり落ちていた。
ムーンはごく普通に、身体を起こし、何もないように武具、マントをつける作業に取りかかる。

「いてて……」

変な格好のレイ。床に打った箇所をさすりながら、両足で床に立つ。
わたしとムーンを見、おはよー、と一言。表情にはまだ痛みが残っているのを知る。

「ムーン……平気なの？」
「大型の魔物の鳴き声の方が、苦手な方だ…」

それを考えれば、これはまだ可愛い方だ、と付け加え、ムーンの身

支度は完了。というか……ムーンにも苦手なものってあるのか。万能人にしか思えないから、彼は。
各々、武具の準備に取り掛かろうとしていた時だった。

「？」

ドアをノックする音…誰だろう。マリアか？
はい、とわたしは返事をし、ドアへ向かった。開けた先には

「おはようございます…」

なんと、この街の教団の司祭長…ヘスティアーさんだった。
魔の呪いを解かれた後でも、姿は変わらぬもの。だが、少しだけ、攻撃性が消えている気がした。

「アルテミス様、レイニー様、ムーン様、昨日の無礼に関しまして、本当に、申し訳ありませんでした…」

まだ昨夜の疲れが取れていないのか、それとも罪悪感が募ったままなのか、声は弱く、今まで見てきたヘスティアーさんとは違う彼女だった。

「いえ……それは、あなたの意思ではなく、呪いによるものでしたから。司祭長殿、あなたに罪はありません…」

ムーンが彼女をかばうよう、言葉を否定する。ヘスティアーさんは首を横に振った。教会の者は、自分の負を徹底的に強めるのだから、謙虚にも程があるなぁ…わたしはそう思った。

「ところでおばさん、朝からどうしたんだよ？」

レイが彼女に問う。それにレイがハッとした。呼び方に気付いて。
だが、時遅し。
わたしは怒られるレイの図をあらかじめ予測したが

「ええ、実は、お願いがございまして…」

…それも気にせず、普通に会話が続いた。レイがこっそり安堵のため息をしたのは、見て見ぬフリをしよう…。

「この街を出て行かれる前に、娘の任命式を見て下さいませんか？」
「任命式？」

任命式ってなんだ？　騎士団で例えるならば、団長に任命したり、将軍に任命したり、なんだろうけど……。
という事は、教皇とか司祭長とか、そういうものの任命って事か。
娘？　娘ってまさか……

「マリアが？」
「はい。教皇様がお決めになった事です」

＊＊＊＊＊

ヘスティアーさんの案内の元、わたし達は、朝の礼拝に参加した。
相も変わらず礼拝堂は人で溢れており、時間になるのを待っていた。
わたし達は、修道人の方々がわざわざ確保し、用意してくれた長椅子に座った。教壇に近い、昨夜、教皇とお話をした所だった。
教皇が教壇に立ち、信者達の喜ぶ囁き声が聞こえた。教皇様がご無

事で良かった、とか。

「昨夜は……私でさえも予期出来なかった事が起こりました…」

と、教皇はまず、昨日の事件について語り出した。
皆が無事である事、街が無事である事、誰一人死ぬ事なく、難の壁を乗り越えられた事を祝福してくれた。
ヘスティアーさんに関しては、何も言わず、ただ、自分の未熟さを彼らに対し謝罪した。
そんな事はありません、教皇様は悪くはございません、という街人達からの声がざわざわ聞こえてくる。
それを、片手を前に出し、制す事で静めた教皇。
そして、またいつものようなお話を始めた。ありがとうございます……皆様のその気持ちを、神は、いつの時も……、といった具合に。

（神様、か……）

故郷ウィズにも小さいながら教会はあり、神父もいた。
そして、週に一度はこのようなミサを行っているのは目にした。行きはしなかったけど、かと言って嫌ではない。
いるかどうかもわからないのに、大昔からあるという聖書だけで、神の存在を信じる人々。
しかし、存在云々の前に、不思議な力を持つ者はいる。その者を、常人達は信じ、自分達よりももっと優れているであろう神を信じる。

（教皇の話は……どうしてこうも伝わるのだろうか）

気持ちが。思いが、よくわかる。今、教壇で話す者の伝えたい事が。
難しい単語はわかりやすく、自分の中で解釈、あるいは意味を探す。
どうしてもわからない言葉は、逆に印象に残る。忘れていなければ、

後日、本等で調べようと思う。
右隣を見れば、あのレイも真剣な面持ちで教皇を見ていた。
さらに右のムーンは…別に聞いてないワケない。普段の彼ならば。
ヘーパの名の由来、神の名前さえ知っているのだから、むしろ信仰者に近い神学者。
教皇の話は、彼の博識の源になるであろう。

「さて……」

と、教皇は、区切りのよいところで話題を変える一言を発した。
もう切り替えていいのだろうか、と思う程、時間は経っていたらしい。

「ここにいる皆様に、お話をしたい方がおります。どうか、聞いて頂けるようお願いします…」

教皇はそう言い残し、教壇を降りた。代わりに、そこに上がってきたのは

「ヘスティアーさんじゃん…」
「シッ」

司祭長ヘスティアー。炉の女神の名を持つ教団の者。
この広く高い礼拝堂は、人々のどよめきで響き渡る。レイもその一人で、わたしは思わず、静かにするよう彼を制した。

「なんかやっぱり…昨日とは別人だよな……」

レイがしっかり声を潜め、そう呟いた。
彼の言う通り、長独特のあの服は相変わらず。でも、彼女の雰囲気

も、朝から変わらない。昨日よりかは、本当に丸く収まった、という言葉が合っていた。

「おはようございます……迷える子羊さん……」

第三十六章

―――――――――
ビショップマリアンヌ
―――――――――

優しく語りかける司祭長。
声量はそれほど大きくはないのに、ヘスティアーさんのそれは、この礼拝堂のざわめきを止める事が出来た。

「本日も、このサーサリー教団の礼拝にお越し頂き、ありがとうございます…」

彼女の声は、厳格だったものとはかけ離れ、聞いた事あるワケないのに…聖母のような優しさ伝わるそれだった。

「本来であれば、私が今からお話する事は、教皇様の口からお伝えすればよろしいのですが…。このお話だけは、私から皆様にお届けしたいと思います……ですが…」

と、表情を曇らせるヘスティアーさん。話そうか話すまいか、ためらっているようにも見えた。
表情はそのままに、彼女は少しの間を空け、口を開いた。

「私は昨夜、この神の地を汚そうとした者の身……このような私が、これから話すであろう内容を、皆様の耳に届く事は容易い事ではないと思います」

つまり、彼女は、今ここにいる事事態、権利等ない、と言っているのだろうか。
昨夜の事情は皆も知っているはずだ、そんな彼女を拒絶する等、信仰者ではない、と、わたしは思う。

「そもそも、私がこうして生きていられたのも、神だけの力ではないのです…」

ヘスティアーさんは語り始めた。
神は確かに、この世界を産み出し、我々のような存在を与えたものである、と。
しかし、この世界が存在した後に、神は姿を消した。神の存在は確かにあるが、姿を見た事がない我々人間は、力を合わせ、困難を乗り越え、今に至る世界を創っていった、と。

（まさかヘスティアーさんがそんな事を言うなんて…）

以前の彼女だったならば、神様絶対主義者とも言える力強い神説を語ってくれた。
この彼女の話は、神のみならず、人間の結束の力さえも、わたし達に聞かせ、考えを与えてくれるのだ。

「私のような者が言う事ではないのですが……」

と彼女は前置きを添え、こんな話をし出した。
神の存在を否定するような事を口にしたのだ。大昔の聖書、歴史の本だけで神を信じ、頼る人々の弱さを語った故。
だが、だからこそ人間は力を合わせて、今までもこれからも未来を築いていく素晴らしい絆を持った存在である、と言った。

「それを証明してくれたのは、そう……昨夜、この街の為に戦ってくれた戦士達と、私の大事な子供達です…」

わたし達の事が話に出た。
この席の付近の街人達、壁の隅や教壇の後ろに待機する修道士達の視線が一気に集まったのを感じた。
これには鈍感なレイも、ビクリと身体を震わせ、落ち着きながらも辺りに目線を配り、様子を見た。
ムーンは常に耳を澄ましている。わたしは、ヘスティアーさんの顔を見、話の続きを待った。

「危険を顧みず、彼女らはこの街を守って下さいました。娘もまた、大事な兄弟をかばい、この愚かな私でさえも、救って下さったのです」

そういえば、マリアはどこにいるのか……目線で、見えるものを見渡していく。
あ、いた。
教壇の後ろ、少し右側にズレている位置、教皇の隣に彼女はいた。

「ひいきをするつもりではないのですが……私は、娘の力が、短期間の内に強まったのに驚きを隠せませんでした…」

マリアはその事を言われ、戸惑い気味であった。
街人達と教団の者達が、各々に一人のシスター、マリアンヌに目を向けていた。

「彼女ならば、信仰者としての偉業を成し遂げられるであろうと、教皇様はある事をお決めになられました」

朝の話。ヘスティアーさんがわざわざわたし達の元に来て、頼み込んできた話だ。

「それを、私の口からお伝えします」

マリアンヌがヘスティアーさんの後ろ姿を凝視した。

「今宵、シスターマリアンヌを、司祭として任命します」

…一瞬、間が空き。

案の定、礼拝堂内はどよめく。ただのそれではなく、喜び溢れているものだった。

これにも他の修道人ら、教皇も嬉しそうな顔をした。

呼ばれたマリアだけは驚き、教団の仲間達の顔を見渡した。

「この決定に、反対の意がある方は、どうぞ、名乗り願います。私達は、その方々の意見を尊重し、考えを改めようと思います」

まだにぎやかなところを、ヘスティアーさんは呼び掛けた。

だが、この様子だと反対意見を言う者等、いるワケもないだろう。

わたしだって、マリアが司祭になる、という事には喜ぶ。

「はい」

のに…。

一人の挙手と共に短い声が、礼拝堂の中を静めた。

その者は、困惑しつつも厳しい表情のマリアだった。

「……マリアンヌ」

ヘスティアーさんは振り向き、我が娘の顔を見る。ここからでは見えないが声の様子からだと、きっとヘスティアーさんは予測していたのだと思う。こうなる事を。この場にいる皆程、驚いてはいなさそうだ。教皇も、隣の彼女を見る。それだけ。

「何故、わたくしが…」

彼女の言いたい事は、自分が司祭にされる理由がわからない。あるいは納得が出来ない。

「わたくしは、司祭に任命されるような事は致しておりません……何故、わたくしを選ぶのでしょうか…？」

彼女を駆り立てたものは、前者の方が強いようだ。
彼女は謙虚。今まで過ごしてそれを感じ取れる。
マリアは、自分の力を皆の前に披露したがるような人間ではない。
故に自分が、今の自分よりも少し高い地位に己の足を立たせる事は、信じ難い事。シスターマリアンヌにとっては。

「……マリア、こちらに来なさい」

と、ヘスティアーさんは、呼び掛けた者を自分の側に来るように、手の動作で隣を示し、促す。
マリアはためらうが、わたしの位置からでは見えないヘスティアーさんの顔を見、観念したように歩き出した。ゆっくりと。
きっと、逆らう事が出来なかった程に、母の存在は強いのだと思う…。

「一体どうなるんだ…？」

レイが声音のない声で呟く。それは誰に向けられた問いなのかは知らぬが、それを聞いたわたしも思わず、わからない、と声音なく呟いた。
そして、一人の修道女は、司祭長の隣へと立った。

「マリアンヌ、ご覧なさい」

祭壇に近い者達にしか聞こえない音量。ヘスティアーさんは、街人と修道士修道女がいないかのように、マリアに話しかけた。
彼女の言葉が示すは、いない扱いをされているわたし達側の人々全てだった。
わたし達大勢の人間を、マリアは見渡した。

「彼らは、私達教団と共に神を信じてきた同志です。私はいつも、彼らとの時間を共有し、穏やかな日々が訪れるのを待っています……そう、平和が訪れるのを」

前の席で良かったのか良くなかったのか……二人の空間を邪魔するワケにはいかない、と思うのだが、会話は聞こえてしまう。
こういう場合の最善の方法は、口出しをせず静かに見守る事だけだ。

「ですが、その日が訪れる前に……私は、神の元へ旅立たなくてはならないでしょう」
「！……」

悲しげな声。マリアンヌはその言葉に、母の顔を見た。

「家族とは、ずっと昔から繋がっている、人と人との絆……血筋等関係ない。互いの心が繋がれば、例え二度と会えなくても、その絆

が消える事はないのです……」

「……」

「その絆が、召される者の思いや祈りを、伝えたい気持ちを、後世へと繋げていくのではないでしょうか……」

司祭長のその語りに、わたしは思わず感動していた。

わたしだって、母さんが最期まで、家族に会いたがっていた気持ちを受け継いで、今に至るのだ。

母さんが道を示してくれなければ、わたしは騎士団に入団出来なかっただろうし、皆と出会う事もなかったと思う…。

「私達は、あなたの力を見極め、あなたに私達の思いを託そうと、任命を決断しました…」

それが、教皇と司祭長ヘスティアー達が、マリアを司祭にする理由である。という事はわかった。

それを、彼女は受け入れるのか。それとも、拒絶をするのか。

「もちろん、これは私達があなた抜きで決めた事です。拒否権は無し、という事ではありません……今のあなたには荷が重いでしょう……。だから…」

悩み、うつむくマリアンヌ。そんな彼女に、ヘスティアーさんが何を言おうとしているのか、わたしもわかった。が

「やります！」

ヘスティアーさんが言い切る前に、マリアは答えた。

迷いを振り切り、決意を示した、そんな強みのある表情で。

その声は、礼拝堂全体に響き渡り、わたし達人々を一瞬驚かせたが、

「こんなわたくしにも、皆様を導く存在価値があるならば……わたくしは、教皇様とお母様の思いを、受け継いでいこうと思います」

サーサリー教団の一員として。そして、お母様の娘として……。

彼女は最後にそう付け足し、司祭になる事を意思表示した。

それは案の定、先程の彼女の一言でシンと静まり返っていた礼拝堂に響く。

それを聞いた街の人々から、段々と拍手の音が聞こえ、歓喜を思わせる旋律を奏でる。

マリアは、その群衆に向き直り、一礼した。

＊＊＊＊＊

任命式は夜の礼拝で実施するとの事。故、昼の礼拝はお祈りの言葉を捧げるだけで、準備の為、教皇からのお話はなし、との事だ。

「マリアの事だから、てっきり断るかとばかり思ったけどなぁ……」

ヘスティアーさんとはもう約束はしている。だから明日までには街を出られないわたし達。

夜が来るまで、わたし達はユーピテルの街を観光及び散歩をしていた。

レイが、朝の礼拝について意見。片手には、串に刺さった焼きリンゴ。あれ以来、すっかり気に入ったらしい。彼の残金はどうなのか知らないが。

「でも、わたしはいいと思うな。マリアが司祭になる事は」

彼女のような心の持ち主ならば、年齢だとか能力の差だとか、わたしには関係のない事だと思う。
意志が強ければ……それ以外に勝るものなど、ありはしないだろう。
世間話をする奥様達の側を横切りながら、そう思った。彼女らは、マリアンヌが司祭になる事で会話をしているのが聞こえた。

「マリアンヌならば」
「？」

さっきから黙っていたムーンが、ホータイ越しの声で喋り始めた。
思わず足を止めたわたし達。後方に位置する彼に振り向く。
前方にいたわたし達が止まった事により、ムーンも足を止める。急なわたし達の停止には動じず、普通に立ち止まった。

「サーサリー教団を率いる事が出来るであろう……彼女には、守るものがあるからな…」

将来が楽しみだな……と最後に呟きながら、また歩き出した。
わたし達を抜かし、まだ歩かないわたし達を置いて行くように。でも

「わたしにだって、」

すぐに追いかけるわたし。すぐに追い付き、ムーンの左隣にに位置付いた。

「守るものがあるわよ」
「おれだって！」

彼の右にはレイが追い付く。便乗して言い、また焼きリンゴを一か

じり。
三人、横列に並ぶ歩むわたし達。

「……それは、私にもある」

当たり前のように。だけど、確かめるように返答してくれたムーン。
皆、何かしら大切にしたい者（あるいは物）がある……その存在があるから、例え自信がなくとも頑張れる源にはなるんだと思う。
マリアだって、本当は司祭としての勤めを出来るのか否か、自分自身わからなかったと思う。
でも……マリアには、マリアを想ってくれる母が、家族がいる。
彼女は、その存在と、皆の気持ちや思いを、守るために引き受けてくれたのだから。

「わたし達も……早くサンポリアに帰りましょ」
「ああ…」
「おうっ」

時間が迫るまで、わたし達はユーピテルの隅から隅まで歩き潰していた。
彼女が司祭にになる儀式が、訪れるまで。

＊＊＊＊＊

礼拝堂に飾られたキャンドル。数多く、各々は定められた役目を成し遂げようとするかのように、灯し続ける。
それが、とても幻想的で見とれてしまう。そういえば、夜の礼拝に参加するのは初めてだったはず。

教壇には、教皇と司祭長が並んで待機。その背後、パイプオルガンによる演奏が流れており、他の修道人修道女らはそれに合わせて歌を歌う。
特別行事に歌う喜びの唄。故郷の教会でも、結婚式があった時に聞いた事がある。この歌は、どこの地方でも共通している、という事なのだろう。
確か歌詞には、神へ向ける感謝なる言葉がメインだったような…。と思考を、歌をバックに巡らしていたら、ドア、開く音。

「おっ、来た来たっ」

と、合唱で掻き消されそうになるレイの呟き。わたし達はまた同じ席にいる。
出入り口の両開きの扉に振り向けば、教団員男女二人が扉を支え、司祭の衣装を身に纏ったマリアが礼拝堂に入ってきた。
何回か歳上の司祭を三人程見たが、マリアがそれを着ると、何故だが違和感。
現役司祭の方々がヘスティアーさんと年齢が近く、マリアのように若い者の職ではないからだろう。

「なんと神々しい…」
「まるで女神様が降り立ったかのようじゃ……」
「ママ…マリアお姉ちゃん、すっごく綺麗だね…」
「そうね……」

だが、決して似合わない意味ではない。街の人々のざわめきは、まさに当てはまっている。
彼女の服装……今まで見てきた司祭とはやはり若干異なるところがある。というより、他の司祭とヘスティアーさんの服も、同じものは何一つはない。

ゆっくりとした足取り。合唱がそんな彼女を見守っているかのように。一歩一歩進む度に揺れる、彼女の服装に注目した。
見る限り、肌に纏うは白いワンピースだろう。
その上から、腰にはベルト。多分、不殺生な彼らだから、動物の皮ではないと思われる。
両肩には紺色で長い装飾布が垂れ下がっている。黄色の刺繍で、十字架が縫い付けられている。それは、マリアが教皇達の前に立って、見れる背中からマントのようになびいていた。もちろん背にもそのサイズに合わせての十字架が。

「あいつ、本当にマリアかよ…」

レイが彼女にすっかり見とれている。釘付け、とはまさにこの事か…見過ぎ…。
帽子も、シスターの黒い時とは違う、紺と白の色。今更知ったのだが、指がすんなり通りそうなマリアの茶色の髪は、肩を過ぎる長さである事を。
両手には、ヘスティアーさんが持っていた杖を握っている。比べれば身分上装飾等は劣るが、先端に十字架があるのは同様だ。
袖の上から、両手首を銀の腕輪をしている。首から下がっているクロスペンダントと共に、キャンドルの光に照らされて輝いていた。
合唱が終演を迎え、パイプオルガンの余韻が礼拝堂に響き残る。音が止み、

「シスターマリアンヌ」

教皇が彼女の名を呼ぶ。マリアは、はい、と返事をした。

「今宵、神のお導きにより、私達は神に代わり、あなたを司祭として任命いたします…」

儀式であるこの任命式……見るのは初めてだ。どのような流れが見れるのか。
教皇の相も変わらない微笑みは、マリアの緊張を和らげてくれているかのよう。

「その前に、司祭としての意思があるならば、神への誓いを唱え、ここにいる皆様に聞かせて下さい……」
「はい」

教皇がマリアにそう述べる。
マリアは手の指を交差させ、祈りの形をとる。

「『主よ。今この地にこの命ある事を、感謝致します』。『主よ。今この時にこの命がある事を、感謝致します』……」

……それから、彼女は言葉を発しなくなった。礼拝堂に沈黙が訪れる……。

「……」

まさか、緊張のせいで言う言葉を忘れてしまったなんて事は……。
と思ったら

「……マリア？」

祈りを解き、こちら側に振り向いた。その行動は、教壇側のヘスティアーさんはじめ一同を驚かせていた。予想してなかったのと、こうなる予定ではなかった、という事だろう。

「確かに、神に感謝するのは当然です…」

彼女は笑顔で言った。

「だから、神への誓いは後回しにします」

「！？」

教団のシスターたるものの発言ではない。それはわたしだって群衆のざわめきの一部、えっ！？、と驚いてしまった。

ヘスティアーさん、そして教皇までもが彼女を制そうと口を開こうとしたが

「神よりも、わたくしはここにいる皆様に感謝と、誓いを捧げたいのです」

彼女のこの言葉で、静まり返った。

「街の方々…教皇様、子供達、アル様達、そしてお母様に……わたくしは、感謝の気持ちでいっぱいです！！」

儀式にしては緊張感がなくなった。マリアが元気に、高らかに言ったから。

「司祭としての勤めを果たせるよう、出来る限りに頑張ります……どうかこれからも、よろしくお願いします！！」

これでは緊張から吹っ切れたように見えてしまう。だが、悪い事ではない。

ペコリッ、という効果音を共にするかのように、マリアはわたし達に向かって頭を下げた。

……またも静けさ。さて…人々はこの展開をどう受け止めたのか。
…しばらくして

「…！」

後ろの方で拍手の音、一人分。二人、三人、四人、段々と、そして急激に音は溢れ。
礼拝堂いっぱいに、人々の喜ぶ声と拍手の音が流れていく。
これにマリアは頭を上げた。皆の反応に嬉しく微笑んだ。
ふと、我に返ったかのように、マリアは背後の二人に振り向いた。

「えっと……」

苦笑いで二人を見、ごめんなさい、と謝った。予行練習をした、とは聞いたが、予行通りにしなかった事への謝罪、という事だろう。
それに教皇と司祭長は顔を見合わせ、まぁいっか、とでも言いたそうな苦の笑み。それはすぐに笑顔となる。

「説教はあとでするから、覚悟なさいね」
「はーい…」

と会話が聞こえたが、母と娘は嬉しそうだった。

第三十七章

―――――――――
帰路、変更
新司祭と共に
―――――――――

＊＊＊＊＊

任命式も無事に終わり、人々は我が家へと帰っていく。
修道人達はそんな信者達を見送る。
もちろん、寄付なんてものはなく、世間一般に見られる礼拝終了後の光景だった。

＊＊＊＊＊

全員の見送りが終わり、教団の人々が後片付けを始めた頃。
教会内部に戻ろうとしたわたし達の元に

「アル様」

司祭長ヘスティアーさん、司祭マリアンヌ、少年ヘーパイストスが歩み寄ってきた。

「すみません…せっかくの任命式、お越し頂いたのに、あんな形で終わらせてしまって……」

まだ気にかけているらしい。自分の行動に。苦笑しつつ、わたし達に謝罪してくれたが、

「何言ってるの、マリ姉」

ヘーパは別に彼女程気にならない様子。

「やっぱり堅苦しいのって、マリ姉らしくないよ。ああいうので丁度良かったんだよ」

「そうですよ、マリア」

ヘスティアーさんもだった。やっぱり呪いが解かれてから、随分と柔らかくなったと思う。性格といい表情といい。

「反省をしているならば、神もあなたを咎めたりはしません。もっと自分らしさを見せれば良いのですよ」

…やはり前のヘスティアーさんと比べてしまう。

なんだ、この人めちゃくちゃ優しいおばさんじゃん！、ってレイニーが言いそうだ…。

「なんだ、この人優しいじゃん…」

……何も小声でわたしの耳元で囁かなくても。予想してたのに似た事を、彼はわたしにしか聞こえない音量で発した。

「珍しいものが見れたのは、私にとって良き経験となりました。あ

りがとうございます」

とムーンが司祭長達に礼を口にした。その言葉にマリアは恥ずかしくなり、赤面をした。

確かにあれは、珍しい任命式……なのだろう、ムーンからしてみれば。

「すみません……無理に頼んでしまいまして…」

「いえ……昔からいろいろな地方で任命式を見てきましたが、マリアンヌのそれは、ありきたりではない新しいものだと思いましたから……」

珍しい、とは言うが、それは善き事を、彼は言っているのだろう。

「本当に、ありがとうございました……」

司祭長は深々と頭を下げ、それに慌ててマリアとヘーパも同じようにする。

頭を上げ、司祭長は言う。

「もうここにいる理由もないと思います。帰る準備が整うまで、この教会の部屋をお貸しします。今夜はゆっくりお休み下さい……」

ありがたき言葉。

わたし達三人はそれぞれに礼を言った。

＊＊＊＊＊

うん、ありがたいけども

「……」

朝の鐘の音はそう思えない…。
もはやビビる事はなく、それ通り越して諦めてしまったわたし。
眠いのに無理矢理起こされた感じ。二度寝する気が起きない…。
上体をゆっくり起こし、部屋を見回した。レイもムーンも、わたしの心境と同じなのか、険しい表情を浮かべながら起床。

「おはよ、二人とも…」
「っはよぉ……」
「ああ…」

レイはまだ半覚醒ながらも、防具を身に付ける作業に取りかかる。
ムーンも同様に。だが、レイと比べれば動きはちゃんと目覚めている状態。
ムーンは睡眠を平均より下にとっても平気なタイプなのか。それともレイが単純に睡眠不足なだけなのか。

「今日でこともお別れかぁ……」
「……そうね」

レイがふと呟いた。甲冑を付け終わった時に。わたしもそれに対し返答した。
わたし達には帰る場所がある。その場所には、わたし達を待ってくれているであろう皆がいる。
それに、ここには二度と戻ってこれないワケではないし。日を空けてマリア達の元へ遊びにだって行けるはずだ。

「まずは…戻らなければな……」

ムーンが呟く。わたしはその彼を見た。レイも反応し、彼に視線を向ける。

「昨日、必要な物は買った。教皇達に挨拶をして、船乗り場に戻ろう…」

コートが彼を包む。これで、右目以外、ほとんどがホータイの顔。普段見れるムーンの完成。

レイも急いで身の回りを確認、装備、また確認。よしっ、と自己判定で準備完了を示した。

「おいアルテミスー、お前もさっさと甲冑付けろよー」

「せ、急かさないでよ…」

レイに言われてしまった。よっぽどサンポリアに帰りたい様子だ、レイは。

待たせるワケにもいかないので、手早く準備を済ませた。

＊＊＊＊＊

が、よくよく考えれば、彼ら教団の者は朝の礼拝をしているはずだ。会いに行けない状態じゃないか……。

結局は急ぐ必要もなく、わたし達は部屋で待機するしかなかったのだ。

「そこまで焦る必要もないだろう……」

「悪ぃ悪ぃ…」

けへへ…と笑いながらレイは謝罪した。ムーンの言う通りだ。ずっと帰れないワケではないのだから。例外さえ起きなければの話だが。ベッドに腰かけ、せっかちな同期をチラ見し、わたしは私物の確認をした。

少なくなったお金、同じく薬草、携帯食料としてチカラモとゲドクモ、替えの服一、二枚。

帰るのには充分手軽だが、その原因は木の実が容量を少なくしてくれたから。

「あーあ、さっさと終わってくんねぇかなぁ……」

「だから…」

レイの愚痴気味な呟きに、ムーンが再度声をかけようとしたが、無意味だろう事を先に感付いたのか、言うのをやめた。

確かに帰りたい気持ちもわかる。が、何が彼をそう駆り立てるのかがわからない。ただ、やっぱり単純な彼だから帰りたいだけなのか。

「？」

ドアの向こう。小さくドタドタと走ってくる駆け足の音。

この教会内部を走るのは大抵、元気な子供達、と相場が決まっている。

それは段々大きくなり、こちらに近付いてくる。もしやヘーパ達か？

これにはムーンもレイも、そしてわたしもドアに目線を集めた。

案の定

「レイ兄ちゃんアル姉ちゃんムーンのおじさん！　大変だよ！！」

勢いよく開くドア。
ヘーパをはじめとする孤児院の子らが次々と部屋に入ってきた。

「どうしたんだ？　まさかおばさんが元に戻っちゃったってか？」

と、ふざけながら問いかけるレイ。
ヘスティアーさんが正気に戻ったからって、もうおばさん呼びか…。

「違うよ！　アルス村から伝書鳩で手紙が来たんだ！　姉ちゃん達宛に！！」
「！？」

＊＊＊＊＊

子供らの導きにより、わたし達三人は教皇達のいる元へ。
詳しい事は、教皇の部屋で話された。

「それ……本当なんですか…！？」
「ええ…残念ながら……」

ハトを使いに出したのは、先日お世話になったアルスの医者からだった。
わたし達がユーピテルへと向かって行った直後、知ってしまったのだという。
わたし達が黒雲の仲間達とはぐれた日。その時わたし達は森の主の獅子との死闘を繰り広げていた。
しかしその一方で、別の戦いが起こっていたのだという。

「ここ最近……魔物の動きが活発化しておりましたが…ここまで影響が出てしまうとは…」

あの船着き場からサンポリアに向かう船が、海の魔物達に襲われたのだという。

すぐに駆け付けた黒雲の騎士団は、別の船に乗り込み、魔物軍に対抗したのだという。

魔物らを退ける事には成功したが、人間達は無傷では済ませられなかったという。

急変した波の流れにより、騎士団を乗せた船は、サンポリア大陸方面へと流されてしまい、以来、こちら側に戻ってくる事はなかったんだとか…。

それ以降、いつ魔物が現れるのかわからないアルス近くの船着き場から船は出航せず、現在は閉港中だそうだ…。

「じゃあおれ達……一体どうやってサンポリアに帰ればいいんだよ!?」

ホームシック（？）状態のレイが嘆く。一番の帰りたがりが、こんな話を聞いて何も思わないワケないだろうに。

「その件に関してなのですが……」

と、司祭長が口を開いた。

「度重なってしまい申し訳ありませんが…お頼みしたい事があるのです。利害一致にはなるかと…」

「帰れるならいいよ！　おれ達ゃどうすりゃいいんだ!?」

ヘスティアーさんから方法を急かすレイ。これにはムーンも無言で、

斜め前方のレイの背中を小突く。
小突かれた彼がムーンを見上げれば、すぐにおとなしくなった。
ムーンの右目は、一体何を訴えていたのか……レイの反応で大体察しがつく。

「マリアンヌと共に、サーサリー王国へと向かっていただけませんか…？」
「えっ！？」
「王国……？」

まさか、村とは反対方向へ、という事？

「司祭となった者が最初にやらなくてはならない事が、国王に挨拶をしなくてはならないのです。ですが、今回のこの手紙から推測すれば……その道のりは険しいものだと判断しました」

以前よりも魔物達が徘徊している、という事を、教皇は遠回しにそう言った。
確かに……森の風獅子といい、人間を利用した何者かによる街の侵略（未遂）といい、あまり吉報を聞いた事がない。

「司祭としての素質があると判断し、彼女に新たな地位を授けましたが……やはりまだまだ未熟な面もあります…そこで…」
「マリアンヌの護衛を兼ねて、サーサリー王国から出る船から帰路を辿れ、という事でよろしいでしょうか？」
「……さすがムーン様…」

教皇が言い切る前に、ムーンが悟る。教皇が言いたかった事を簡潔的に繋げた。
その対応を受け、教皇はホッとした笑顔だ。わたし達に期待してい

るのだろう。

「あの馬車を使わないんですか？」

移動手段について問う。

「あれはもう、我々教団には必要のないものであると検討し、本日からは街の送迎の為にだけ使用しております」

「え？」

はじめ彼らと出会った時、たくさんあった光景を思い出す。旅用のキャラバン。

ヘスティアーさんの呪いが解かれたから、教会の本来の在り方を改めたのだろう。

彼らが馬車を使う事はない……となると

「もしかして、トホ？」

「元々修道人は、歩み、周りの景色やものを見、神が創りし世界を学んで生きる者です。我欲の為に馬車を利用するのは、本来はならぬ事なのですから……」

「マジかよ！！？」

、徒歩。

まぁ、駆け出しの戦士ならば、そして最初から何もないなら、自分の足で行くしかない。

レイはますます嘆く一方。

「本当に勝手なお願いではありますが……マリアと共にサーサリーへ向かっては頂けないでしょうか？　万が一の時も、彼女の力があれば、苦難を乗り越える事は可能でしょう…」

ヘスティアーさんが悲願する。娘の大事な時期、それを無視するワケにもいかないであろう。
わたしは、サンポリアに戻れるならば遠回りでも構わないし、教団を助ける事が出来るなら喜んで引き受けるが…、

「うー……」
「……」

レイは嫌そうな顔で悩むし、ムーンの目は真剣に考えているし。

「……私共が、マリアンヌを引き受けてもよろしいのでしょうか？」

と、まずはムーン、マリアの身の保障をもらっていいのかを聞く。
母親はもちろん、と二つ返事で答えた。

「ユーピテルを救って下さったあなた方の腕を見込んで、このような事をお願いしました」

ここまで言って下さるのだから、相当期待しているのだろう。わたし達の実力を。
実力、と言えるほどわたしは自分自身を強いとは思えないのだが…。

「わたくしも、アル様達と安心して旅が出来ると思います」

にっこりと微笑みながら、マリアも言った。
この発言達に、ムーンは更に考え込む。
……そして

「わかりました」

「では…！」
「マリアンヌと共に、サーサリー王国へ向かいましょう…」
結論が出た。
「アル、レイニー。それしかないと思うが……大丈夫か？」
そして、それに対しどう思っているのかを、わたし達に確認するムーン。
わたしは、大丈夫、と短く答えたが、レイはまだ不服ながらもコクリと頷いた。
「ありがとうございます…！」
教皇達は益々喜びを示し、深々と頭を下げた。
＊＊＊＊＊
「それでは、教皇様、お母様、皆様…」
昼。礼拝の代わりとして、わたし達を見送る時間となった。
王国へ向かうべき方角。塀より一歩踏み出せば、視界には木々の葉生い茂る森。
ただ、平坦な、横幅は広い一本道が、先の森の中へと続いている。
後ろを振り返れば、見送って下さる教団の人々、街の人々がいる。
「わたくしは、必ず帰ってきます。どうか、お元気でいて下さい。神のご加護があらん事を…」

別れの挨拶として、十字を切り、祈りを捧げた。一同もそれを見習い、祈りの手を作る。
その光景を見守るわたし達…。この街は、本当に心のあたたかい場所だ。

「マリアンヌ様ー！　頑張って下さーい！」
「オレ達ゃいつでも待ってるぜー！！」
「お姉ちゃーん！！　バイバーイ！！」

背を向け、歩き出せば、皆の声援を受ける。なんだか力が沸いてくるような感覚。
これから先、何があっても頑張れる…そんな感じ。

「マリ姉――――――――――！！！！！」
「！」

その声援の中、一際目立った呼び声が聞こえ、わたしは思わず立ち止まり振り向いた。
後方にいたマリアも、同じように声のした方向を見ていた。

「絶対に、帰ってきてよ――――――――――！！！！！」

孤児院の子らと一緒に、彼女を見送る神の名を持つ少年。
マリアは、そのヘーパに向かって、大きく手を振った。
この立ち位置からじゃ、彼女の表情は見えないが…きっと、幸せ溢れる、活き活きとした笑顔なのだろう。
手を振り終え、わたし達に向き直るマリア。真剣な、でも、わくわくとした顔だ。

「さぁ、行きましょう」

わたし達三人に呼び掛けた。

「うん！」
「おうよ！」
「ああ」

励ましの声を背中からもらい、わたし達は、この森へと歩み出した。

【第四部】第三十八章

―――――――――
それはまるで散歩
―――――――――

昼頃に街を出たので、太陽はほぼ真上。
森の中、とは言っても、雰囲気はとてもほのぼのとしている。
魔物が住み着いているなんてありえない、そう思える所なのだ。

「やはり、森の中は落ち着きます……魔物さえいなければ、最高の場所なのですが…」

マリアンヌが苦笑を浮かべ、そう口を開いた。
なんだか話が落ち込む方向だ…。

「それならさ…」

と、わたしは話題を提供しようかと思い、発した。
ただ歩いているだけでは、やはり緊張してしまうだろうから…。

「皆の故郷の自慢話とか聞きたいな。何かない？」

と、話を振る。それにまず一番に名乗りをあげたのはマリアだった。

「もちろん！　ユーピテルは神誕生の地、誇れるべきわたくしの故

郷です！」

さすが信仰者、笑顔で断言するものだから、説得力が伝わる。
わたしも言い出しっぺだし、ウィズについて話そうと思った。

「わたしはサンポリアの湊町に住んでたってのは覚えてる？」
「はい。確か、漁業が盛んな所だと聞いております」
「マリア達にはあまり縁がないだろうけどね……ウィズの海域はたくさんの魚がいっぱいいるの！」
「お魚さんですか？　わたくし、本でしか見たことがなくて……」
「巡礼の旅をした時、船には乗らなかったの？　海面眺めてれば、魚くらい顔を出すのに…」
「わたくし、船は苦手なんです…実は」
「えぇっ！？」
「だから、大陸から大陸へ移動する時は、いつも横になって休んでました…」

ユーピテルにいた時には聞かなかった話も聞けて、会話がますます連鎖で続く。なんだか、楽しい。

「あ、そういえばさっ」

と、さっきから会話に入ってない男二人に話しかけた。

「わたし、あなた達がどこで生まれたのか、あんまり聞いた事ないの。せっかくだから教えてよ！」

普通なら、入団してから早い内に、互いの出生は周知するものだが、当時は慣れぬ様々な仕事でそんな暇なかった。
今までそんな事、彼らに聞きはしなかったが……この機会に聞いて

みたいと思ったのだ。

「……エイス」
「うそっ？」
「おっちゃんがっ？」

ムーンがボソリと呟いた。その単語は、この世界にあるエイス大陸の名だ。
わたし、レイニー、マリアが驚きのあまりに足を止めた。が、ムーンは気にしない様子で進行方向へと歩いていく。

「どうした？」

少し遅れて、わたし達が止まっていて自分だけ先に進んでいた事に気付き、やっと歩みを止めてくれた。

「へぇー……意外だなぁ。おっちゃん強いから、てっきりユゴリアンの出身かと思ったよ」

剣士達が皆強い、とよく詠われるのは、ユゴリアン大陸。この世界では一番の王国があるからだろう。
確かに、レイの推理は、彼に当てはまっている。

「わたくしは、あまりにも神の名や話を存じておりましたから、サーサリー王国の方かと思われましたわ」

信仰者がほとんどの割合を示すこの大陸。神話や聖書に関しては他の大陸よりも知識があろう。
マリアの言った推理も、ムーンに当てはまる。

「でも……言われてみれば、ムーンはエイスの人って感じよね…」

エイス大陸は、大昔の遺跡や古い建物等が、特に多く存在する場所。
遺跡研究者、考古学者をはじめとする学問を志す人々にとっては、最高の学び場であろう。
また、ユゴリアンよりも魔法に長けている者が多く、その分野に関しては世界一。だから

「ただ単に強いだけじゃなくて、魔法も使えて、いろいろな事知ってて頭いいし」

ムーンがエイス出身者でも、違和感はないであろう。
ただ、見た目とはギャップがあった、というただそれだけの話だ。

「…そうか……」

そうか、って。自分の事なのに、まるで他人事のような相づち。
わたし達三人はムーンを追いかけ、少し足を早めた。
追い付いてきたのを確認してくれたムーンは、また歩き出し、一時停止していたわたし達の旅は再開。

「ところでレイは？」
「えっ？」

まさか来るワケないだろう、と油断していたかのような反応の彼。
この手の話には自ら口にしない……普段うるさい彼が珍しい。
左隣のレイの顔を見る。よく見れば、やっぱり話に乗り気じゃない顔。
困った表情にも見えてきた。

「おれはね……一応、ココ」
「え？」

と、今、辿っている道を指差す彼。
地面がどうしたの？、と指先につられて目線が下に行った。

「おれ、ここの出身なんだよ…」
「あら、レイ様もサーサリーの者なのですか？」

同出身者、という事でマリアが興味を示す。
だがレイは、相変わらずの低い気分……というか、王国に向かう事が決まってからこの調子だ。

「まぁ、な」

歯切り悪い返事。本当にどうしたのやら。
ただ単に、遠回りになった事で、面倒くさがっているワケではなさそうだ。今やっと気付いた。

「先程から物静かだが……」

ムーンまで彼を気にする始末。

「どうした？　身体の具合でも悪いのか？」

こちらはこちらで、純粋にレイを気遣っている。いや、もしかしたら内心何か疑っているのかもしれない…。

「いやぁそのぉ……」

本当にどうしたの？　気になるの通り越してこっちが心配になってきた。
言葉に困っており、歩みを止めてしまった彼。
わたし達も若干遅れて歩くのをやめた。ら

「！？」

ガサリッ、と森の中から、

「うわっ！　まだいんのかよキラービー！！」

ブーンという羽根の音を響かせながら、巨大蜂が姿を現した。二体。
平均の人間の頭程の大きさだ。
レイはますます嫌そうな表情をし、ベルトからさげている袋から何か取り出した。手の平サイズの包み袋。

「皆下がれぇ！！」

こちらに向かってきた虫の魔物めがけて、その包みを投げつけた。
それが先頭の一匹に当たり、その拍子に包みの紐が解かれた。
粉が舞い上がり、それが後方の仲間にも当たる。そしたら

「ふぅ……」

レイが一息つく。
キラービーという蜂の魔物は、羽根が動かなくなり、地面に落ちたからだ。

「す……すごいですわ、レイ様」

突然の事だった故、魔物との戦闘に慣れていないだろうマリアはただア然としただけ。

「サーサリーは森の面積が広いからな……だから他のとこと比べると、虫とかの生き物が半端なくいるんだよ」

だからおれはいつも持っているんだ、と、レイは話しながら、また同じ包み袋を出した。
あの蜂らを殺せたものならば、殺虫力のある特別な粉なのかもしれない。

「ここの魔物について知っているのか……お前は」
「えっ？　あ、おうよ……」

ムーンにそう言われたレイは、また先程の様子のおかしい状態に戻りつつ返事をした。
かと思ったら

「っても、この大陸については詳しく知らねぇけど…」

なんだか不自然な発言もする。
聞く限りだと、レイは出身者にも関わらずこの大陸を好んでいないのだろうか。

「…そうか」

追究は無意味、とでも言うように、話題終了の相づちを打つムーン。
さて、行こうか、と止まっていた足を進ませるべくそう言った。
直後に

「なっ！？」

先程の敵討ち、という勢いのように、

「ったくよぉ…」

キラービーの大群が現れた。パッと見だと、二十匹いるかいないか…。

レイが舌打ちをし、またあの包み袋を取り出そうと行動したら

「来た！？」

「伏せろ！！」

「うわぁっ！？」

「きゃあ！」

何の前触れもなく、大群が真っ正面に突っ込んで来た。

ムーンは普通にしゃがみ、回避。ベテランではないわたし達若造は、向こうの勢いに驚き、その拍子に尻餅をついた。実質、攻撃をかわした事にはなるが。

「いつつ…」

「皆様……大丈夫ですか…？」

レイが痛そうに己の尻をさする。マリアは周囲の皆に気を使いながらゆっくり立ち上がった。

わたしは、ムーンがすぐに、背後に待機している敵と向かい合っていたので、習うようにすぐに構えた。

両手に一本ずつ。

「あ！」

と、レイが大きな声を出す。何事か、と皆の視線が彼に集まる。

「ちくしょう……全部パァじゃんかよぉ～……」

彼が悔やむ理由……倒れた時、不覚にもこぼしてしまった殺虫粉の無惨な姿。渇いた土色の地面に、白い粉の小さな山がなんとも虚しい…。

「何もそれでなければ倒せない相手ではないだろう…」

「そうよ！　レイも構えて！　マリアは隠れて！」

「は、はいっ」

ムーンの言う通りだ。どうせ事態はこのままだ。やる事やらなきゃこっちが殺られる。

レイも渋々諦め、ナイフを手にする。被害に合わぬように、非戦闘員のマリアは茂みに隠れた。

（さて……）

普通の蜂よりは大きいが、この数だと無傷では終わらなそうだ。

結局、今の世代、森の中をのんきに散歩、なんてのはまだ出来ないのかもしれない…。

第三十九章

―――――――――
わたし達と毒針達
―――――――――

また前触れなく……否、こいつらに『前触れ』なんてものはない。
攻める事が、こいつらの使命感を満たすのかもしれない。
大群で一斉に向かってくるキラービー達。よく見れば、蜂特有のあの針の先をこちらに向けながら。
やはり普通のより大きいから、針も不気味に感じてしまう。

「っと」

戦士三人は散り散りに突進を避けた。すぐに

「『邪となりしものを燃やせ』」

ムーンの魔法詠唱が聞こえ、体勢を整えつつその方を見たのだが、

「っ！」

敵が何匹かすぐ向きを変え、締めの言葉を言う前に襲い掛かってきた。仕方なしにそいつらを斬り捨てるムーン。
と気をとられていれば

「きゃっ！」

わたしの方にも同じように針が向けられた。気付くのが遅かったわたし。グローブごと、その針で切り傷を負った。
キラービーはわたしを通り過ぎていく。

「大丈夫かアルテっうわぁ来るなぁっ！！」

わたしを気遣ってくれるのはありがたいが、自分の立場を考えていなかったレイも二の舞。
だが、わたし程鈍くはなく、すぐにムチで数体を叩き落とした。

「うぅ……」

さっきの攻撃の毒を喰らったらしい……呪われたヘスティアーさんと戦っていた際に受けた感覚が、わたしの身体ににじみ襲う。

「『神よ、彼の者に天使の加護を与えたまえ』！」

後ろで声がした。すると、わたしを苦しめていた毒が消えていくのを体感。
振り向けば、茂みに隠れつつわたし達を見守る司祭マリアンヌがいた。

「自分の身は自分で守れます。出来る限りお助けしますので、どうかお気を付けて！」

と言っている傍から、わたしとすれ違って行っていたキラービーは、マリアを見つけて向かったが

「！」

接近した瞬間、火種もないのに燃えて亡くなった。ユーピテルで見た少年にある加護と同じものだと判断。

「だからわたくしの事はお気になさらずに」

と自信満々の笑みでそう言った。彼女は本当に心強い…。ならば、とわたしは戦意をさらに高めた。

「ありがとうマリア！」

「はい！」

他のキラービー達は、レイとムーンと戦っている。若干の距離あり。わたしは彼らに向かって走った。すると、こちらの接近に気付いた敵が、こっちに突進してくるが

「てりゃあああああっ！！！」

身体を勢いつけて回転させ、剣を、舞のように振り回す。数が多い相手には一番効率の良い技だ。突っ込んできてしまった彼らは、ものの見事に舞に斬り刻められてしまい、地面に落ちる。

「くそっ、こっち、に来んなぁっ！！」

ムチと投げナイフを使いながら、レイは確実にキラービー達を墜落させる。気のせいか、ムーンよりも動きが良い。やはり地元は対処に慣れているのか。

「魔技『紅蓮』！！」

普通の詠唱魔法では先手を取られる、と判断したのか。ムーンは自分の長剣に炎を纏わせ、軽く振り回した。
それだけで、紅蓮の火炎は勝手に敵を燃やしてくれた。
あと……一匹だ！

「えいっ！！」

攻撃した後、男二人には隙があった。瞬時に動けるわたしが、残りに向かって駆け出し、そのスピードの勢いで叩き斬った。
キラービーの胴体は脆く、真っ二つになって地面に落ちる。あまり手応えがなかった。

「ふぅ……全部片付いた？」
「みたい、ですね……」

魔物の気配を感じなくなり、マリアも茂みから姿を表す。
邪気を感じやすい彼女が特に察しやすいだろう、マリアが安堵しているなら、この周りは一応安全になった。

「だったら早く行こうぜ！　長居してると死骸臭を他の魔物が嗅ぎ付…」

とレイが仕切り始めた瞬間、マリアが、ヒッ、と短い悲鳴をあげた。

「なに？」

わたし達三人はすぐさま反応。彼女に注目が集まる。

「き、来ました…」
「え？」

わなわなと震え、わたし達の背後を指差す。振り向くと

「えっ！？」
「うわっ…！？」
「なっ……！？」

さっきのキラービーの大群よりも、さらに体の大きな毒蜂がいた。
まるでリーダー格のよう、人間の女性平均はある大きさ。子分のごとき小さいキラービーを引き連れていた。
昆虫に甲殻なんてあるワケないのに、この巨大キラービーには体が硬そうに見えるのだ。

「これは…突然変異種か何かか…？」

しかもこれを、ムーンは初めて見たらしい…そういう反応だ。

「ただでっかいだけだろ！？　おりゃっ！」

前向きに言うも焦りが見えているレイ。先手として、巨大キラービーに投げナイフ。だが

「いぃっ！？」

見た目以上に硬い体、レイの武器は刺さらずただ当たり、下に落ちた。
虫とは思えない異常な防御力に、わたし達は驚くだけ。

「ちきしょう…！」
「待て、レイニー」

それが悔しくて、また同じ攻撃をしようとしたら、ムーンが彼を制した。

「何すんだよおっちゃん！」
「状況を考えろ。こいつは私も知らぬ敵だ…」
「敵なら倒すべきだろ！？」

負けず嫌いなレイ。ムーンの冷静な言葉にも反抗する。

「今のお前では」
「ちょっとムーン！？」

言い聞かせようとしている途中だが、相手はそんな隙すら狙う。
巨大ビーに付き添っているキラービーが二人に向かったが

「こいつらにさえ負けてしまうだろう」
「う…」

話しながら、魔技の炎で一掃した。器用というか…慣れているというか…。
対処しながらしかもレイと話しているのだから、彼もその説得力ありすぎるムーンの言葉で戦意をなくした。

「レイ様、ムーン様、また現れましたわ…」

マリアの言う通り、辺りから徐々に敵の仲間らが集まってきた。羽根の音が段々増えていくのがその合図。

「いいか、レイニー」
ムーンが真剣な右の目付きでこう言った。
「逃げる、という手段は、強者にも弱者にも使える間違いのない判断だ」
「え？」
何を言った？、と耳を疑う暇もなく
「『スペルショート』！」
以前にも聞いた短縮詠唱。瞬間、
「うわっ！？」
わたし達四人の周囲、辺りが見えなくなるくらいの火の壁に囲まれた。燃える音…一体彼は何をした？
魔物らの姿が確認出来ない。だが、わたし達を囲むこの壁からは、熱さ等は伝わってこなかった。
「魔物くらいには通用する幻だ……今の内にこの場を離れよう…」
静かにそう言ったムーンは、無駄な動きなく、壁をすり抜けて行く。
わたし達もその彼を追い、この偽物の炎を通って、奴らから離れていった。
＊＊＊＊＊

「おっちゃんらしくないなぁ…てっきりスパパーンって戦うのかと思ったのに……」

本来進むルートに戻り、進行を再開したわたし達。
レイはさっきから、ムーンのした行動に対し若干の不満を漏らしていた。
それにムーンは特に何も答える事なく、聞いていないかのように歩みを続ける。

「ですが、ムーン様ですら相手のした事がない魔物なのですから…
…あの場は退いて正解のはずです」
「でもよーマリアー……あれはどう見てもただデカイだけだぜ？
さっきはただヘマしただけで…」

マリアがムーンをかばうような賛同するような意見。レイは依然意見を変えず。
私は…今の状況が普通の状態ならば、どちらでもいい、と思えるなんとも都合の良い中立だが。

「アルテミス！」
「アル様」
「えっ？」

先頭で歩くムーンと、次列で平行に歩いている二人を、後方で眺めていたわたしを呼ぶ声が。
二人がこちらを振り向いているのだ。進みながら。

「おれ達なら息ピッタシの最強組なんだから、あんな馬鹿デカイのあっという間だったよなっ？」

「わたくしは、退く事により無駄な傷を負わずに済んだと思うのですが……いかがですか？」

なんでそんな話をわたしに振るの。二人が互い、己の主張を退かないのだから、どちらか選ばなきゃ延々と続く気がしてならない……。

「……」

真剣に考えてみよう。あの状況を一つずつ思い出してみる。

レイが投げた武器が通じなかったのだから、あそこは逃げても問題はなかったはず…。

でも、そこを考えていつもより慎重かつ勢いよく戦っていたら勝てたかもしれない…。

うーん……どっちなんだろ。思わず歩む足が止まる。

「どっちだ？」

レイ、マリアも立ち止まり、わたしからの言葉を待つ。遅れてムーンも足を止め、こちらに振り向いた。

時に

「！！」

巨大ビーと子分らが、上空からこちらに降りてきた。

すぐに武器を構えるわたし達三人。マリアはしゃがみ込み、慌てぬよう巻き込まれぬよう身を隠した。

「どっち選択しても、勝たなきゃ終わりって事じゃないの！」

さぁて、どう蹴散らしてやろうか…。

第四十章

―――――――――
奮闘した後の休息
―――――――――

＊＊＊＊＊

「ふぅ…」

一通り、キラービー達を片付けたわたし達一同。
戦う様子を見守っていたマリアンヌも、こちらに駆け寄ってきた。

「終わりましたわね」
「思ってたよりあっけなかったな…」
「ほらみろ！　だからさっき戦えばこんな事にならなかったんだぞ！　おっちゃん！」

マリアが安堵するが、ムーンの呟きを聞き逃さなかったレイニーが先程の揚げ足を取る。
揚げ足と言えるような失態ではないけど、わたしから見れば。
ムーンはそう言われても、そうだな…と小さく返事をするだけ。と思ったが

「だが、最初に焦ったよりかは戦いやすかったはずだ」

「え…？」
「今回のは気持ち的にも気が楽なはずだった、という事だ」
「……？」

ムーンの言葉に、怒る気もなくして悩み始めたレイ。
彼が言いたかったのは、最初に無我夢中で倒そうと急ぐレイだったら、勝てなかった、という事なんだと思う。

「なぁ…最初とさっき会った親玉は違ってたのか？」
「そういう意味ではありませんわ、レイ様…」

意味を履き違えている。マリアは苦笑しつつ指摘。
だから、さっきみたいにどんな魔物だったのかもう知っていたわたし達だから、勝てた、って事なんだろう。
技量も体力もパワーも大事だが、メンタル的にも余裕がなければ、どこか優れていても意味がない、と彼は言いたかったのだと思う…。

「どういう意味なんだろ…」
「あ、ムーン様が…」
「ちょ、待てよおっちゃん！」

考え込んでいるレイを眺めたら、ムーンに置いてかれているのを知らせるマリア。
レイもわたし達も慌てて、先行く彼を追いかけた。
レイに今回の事を理解する日があるのかは、わからない。

＊＊＊＊＊

枝や木の葉の隙間から見える空は、赤色と紺色がわずかにある。
そろそろ夜が訪れる事を示していた。けれど、わたし達はまだ森の中。
思いの外、魔物達の出現率が高く、進み具合も良くなかった。

「っしゃあぁぁっ！！」

と気合い混じった歓喜の声をあげながら、最後の巨大蛾をナイフで仕留めたレイ。

「くそっ……どうしてこんなに活発なんだよ、化け物は」

先程のムーンとの件もあったせいかもしれないが、レイからはイライラが余計に増えたように見える。

「おかしいですね……以前はこんなに活動的ではないはずですが……」

戦闘が終わったのを見計らって、マリアが茂みから姿を現す。
辺りに散らばる虫達の残骸を見ながら、疑問を口にする。

「月だ」
「え？」

ムーンが己の名の意味を言い、空を見上げていた。木々の隙間、そろそろ夜になる空に、丸く明るいものが見えている。
そういえば、最近、そろそろ丸くなるなぁ……と思ってい事を思い出した。

「月光は魔の力を向上させると言われている……恐らく、奴らが好

戦的なのはそれが原因だろう……」
「でもムーン様、それはまだ学者達の研究にも根拠がないと聞いておりますが」
その件に関して何か詳しいらしく、マリアが口を挟んだ。
ムーンは、いや、と首を横に振った。
「いずれは学者共も、証明する……時間の問題だ。私達戦士の間では、満月の夜は危険な時間である事を、もう周知済みだからな」
「そうか？　それだけじゃないような気がするぞ、おれは」
と、今度はレイが会話に入り込んだ。ナイフをしまいながら。
「いくらお月様の力があろうとも、こんなにたくさん魔物と出会うなんて、滅多にない事じゃん。何かあるに違いねぇよ」
生まれた時からこの大陸に住む人間の意見だった。それを聞くと、そんな気がしてならなくなるのは、地元の人間故に説得力があるのかもしれないからか。
「その何かって、なんなの？」
わたしも話に加わり、レイに問いかけた。
皆、各々に武器や道具を整え直し、歩き出す。
「さぁな……おれが知りたいくらいだよ。もしかしたら、風獅子や、おばさんを襲った魔物の事にも関わるかもしれないし……」
なんだかレイらしくない。その発言は。普段おちゃらけている人間がこんな真剣に話をすると、わたしの見る目が変わってしまう。

「つーかこの時間……この先歩いてったら危ねぇって！　おっちゃん！！　マリア！！　どっか安全に野宿出来るとこないの！？」

突然、周囲の状況を今更知ったかのような反応で、焦り始めた彼。
前言撤回（してないけど）。やっぱり彼は彼だった。

「夜は余計に凶暴化しているだろう……どこか休める所はないのか？」

「そうですね…ちょっと待って下さい」

ムーンの問いに、マリアが自分の荷物から地図を取り出し、現在地を確認。背中に背負うような荷物。パンパンには膨れてはいない、軽そうだ。

「あっ」
「？」

地図を見るなり、パッと明るい顔と声を出す。その反応に騎士団側三人はキョトンとなる。
空を見上げ、まだかすかに残っている赤色…夕日の方向を探した。
わたしもつられて見る。危うく方角がわからなくなったかもしれない…わたしから見て、赤はやや左側に見える。

「こちらです！」

と、彼女は夕日が沈む方角へと走り出した。そこには人工的道はなく、ただ草木生い茂る所。
だが、マリアのその様子は何か確信したもの。わたし達も彼女の背中を追いかけるため、獣道ならぬ僧侶道を駆けていく。

＊＊＊＊＊

「やっぱり…まだある……」

マリアはさがしものへと到達した。わたし達も背後で立ち止まる。
安心したような呟き。彼女が何を見てそう言うのか。マリアの横に
移動すると

「わぁ……」
「泉か……」

綺麗な湧き水。天然の噴水のように湧き出ていた。
湧き出るそれは、小さな小川として森の中へと流れていた。
広さは街の噴水よりも面積は大きい。湖を思わせる。

「時々、森の中を迷子になった事がある旅人がユーピテルを訪れる
のですが、その際にこの泉に立ち寄れて助かった、と聞いた事があ
りました」

マリアの話だと、ここは森の中では唯一の安息の地だと言われる。
迷い人がここで休息をしてから、無事に森を抜けていくのだとか。
彼女はそんな彼らを幾度か会ったらしい。

「最近、そんな旅人をお見かけしなくなりましたから、もうなくな
ってしまったのかと思ってましたが……」

来て良かった、と彼女は安堵の一息をつく。

「ここで一夜を過ごしましょう。大丈夫、わたくしが魔除けの魔法陣を地面に描くので、見張りはいりませんよ」

頼もしい司祭の言葉。今宵はゆっくり出来る事に、今回は神にも感謝しようと思った。

＊＊＊＊＊

泉の回りは芝生や土の地面がまだらに続く。
さらに一回りの周囲は、木々がこの場所を囲むように生えている。
まるでキャンプのように、わたし達は身体を休めた。綺麗な線で描かれた四方の魔方陣に囲まれて。

「おっちゃーん、チカラモまだあるならおれにちょーだーい」
「一人３つだと言っているだろう……」
「けちけちすんなよぉ！」

夕食はあっけなく終わってしまった。無理もない。荷物の重量の都合、食事は木の実だけで済ませるしかないのだ。
にも関わらず、アホが約一名、円の中心に以前使った『ライト』の光を用意してくれたムーンに文句。状況を理解してもらいたい……。

「確かに満腹感はあるけど、なんかどことなぁく物足りないんだよぉ！　おっちゃんだって木の実ばっかじゃ飽きるだろぉ！？」
「慣れた」
「慣れる前におれ死んじゃう！！」

勝手に死んでろ、と心の中でツッコミを入れる。望みではない、冗談だから。

「うふふ」
「楽しそうね、マリア」
「ええ、皆様が楽しいから。見ているこちらも楽しくて仕方ないですわ」

笑顔で男二人の姿や会話を、見て聞いて笑うマリア。
座っているムーンが、自分の荷物を整理しているところなのに、もう防具を外して身軽のレイは彼の背中にのしかかる。
何この親子みたいなやりとりは、と思ったら、思わず噴き出してしまった。

「マリア」
「はい？」

不意に、わたしの隣でくつろいでいるマリアに振り向くムーン。
おっちゃん聞いてる!?、とまだやめないレイを無視し、身体ごとこちらを向いてきた。

「地図を貸してくれないか。明日の事で話がある」
「は、はい……」

＊＊＊＊＊

明日に関するミーティング。
明日は朝早く、理想は日の出と共にここから出発とのこと。

ムーンが今までこの森の魔物らについて分析したらしく、夜と早朝に活動するだろう魔物はいないと判断しての計画だった。
また、地図に記されている、わたし達のいる泉から次の村までは、計画通りに行けば夕方には着ける計算だという。

「夕方!?」
「皆の足並みと、魔物と会うか会わないかで前後はするが、最悪夜には着けるだろう」
「えー…」

と不満のレイ。ユーピテルを出たばかりの反応と同じような彼だ。

「だから、今の内に睡眠を取り、体力を回復させた方がいい。他に意見はあるか?」
「ないわ」
「ありません」

彼の経路は完璧だ。マリアとも答えが一致したが、

「……」
「どうした…?」

やっぱりいつもと違うレイ。不満顔はまだ残る。
ムーンもそれで心配して問うが、彼は首を横に弱く振り、なんでもない、と一言。
おやすみ、とこちらに背を向けながら横になった。
……しばらくしたら寝息が聞こえた。寝付くの早い。

「もう……なんなの? さっきからなんか変よ、レイ」

もう聞こえないだろう言葉を本人に向けた。いつかその理由をわかる時が来ればいいのだが。

「魔物も寄せ付けないようになっておりますから、どうぞごゆっくりとおやすみになって下さい」

「本当にありがとう、マリア」

「いえいえ。これも神のご加護があるからこそ、ですわ」

誇らしげなマリアに、わたしとムーンは感謝した。

そしてお互い、身体を横にしてはおやすみ、等と一言挨拶。

目をつぶり、次の朝が来るのを待っていた。

＊＊＊＊＊

第四十一章

月女神と歪月神

しかし……なかなか寝付けない。どっかの誰かのようにはいかないものだった。
わたしは上体を起こし、周囲を見回した。
レイニーはいびきまでして爆睡。マリアンヌも相当深い眠りの中。
ムーンは

「？」

あれ……何か違う。わたしからは背を向けて寝ている彼だが、寝息とは言えないものが聞こえる…。
聞き間違えなければ……苦しそうな息だ。

「ムーン……？」

二人を起こさぬよう、小声で名を呼ぶ。だが、反応してくれない。
下半身を引きずるように、わたしは手だけで身体を動かし、彼の元へと近寄る。
…この行動、絨毯の上で相当くつろいでいる時の様。そうさせるのは、僧侶の作った空間の力だ。

「どうしたの…まだ起きてる？」
「っ！……」

バッと瞬時にこちらを向き、右目がこちらを睨んできた。しかも手は剣の柄に伸びる。
思わずわたしも目を丸くし、身を少し退いた。
が、わたしであると認識した瞬間に、鋭い目付きは解かれ、伸ばしかけた手もゆっくり引っ込む。

「……アルか…」

その呟きは息絶え絶え。やっぱり何かあったのか。また発熱したのだろうか。

「どうしたの…苦しいの？」
「いや……大丈夫」

とは言うけれど、明らかに大丈夫、という単語が合わない状況。
すると彼はこちらに背を向け、その状態にも関わらず寝ようとしているのだ。

「ムーン…！」

こっちはこんなに心配しているのに、そのままにしようとするのは何故。
わたし達に迷惑をかけたくないのか、それとも余計なお世話なのだろうか。

「大丈夫……寝れば終わる…」
「ムーン……」

背を向けたまま、そうは言うが。

「大丈夫……」

……もはや向こうはこちらに譲ってはくれない模様。
このままわたしがしつこいと、彼を信じない事になってしまう。

「…わかった……」

明日、何事もなかった事になるのを祈ろう。彼を信じて。

「おやすみ……ムーン」
「……ああ」

夜の挨拶をし、わたしも元いた位置に戻り、空を見た。
夜空に星々、そして、丸い光……月。
あいつのように輝けるような人生を行けるのだろうか、月の女神の名を持つわたしよ。

（『アルテミス』は父さん達がくれた名前…）

とにかく今は、サンポリアに帰らなければ…。
思考を巡り巡らせると、徐々にまぶたが降りてきた。
ああ、そろそろ眠りの住民に加われる、と思えた頃には、意識が消えた。

＊＊＊＊＊

風が吹く。優しい、懐かしい、ウィズにいた頃に感じた暖かい風だ。

――それじゃあ…行ってくる…

――母さん、行ってきます！

父さんと兄さんがいる。父は武具や大きな荷物を身につけていたが、兄はごく普通の少年らしい服装だった。
二人が街を出る。その背を見守る女性。

――気を付けてね…

――必ず帰ってくるのよ…

――あなた……ルナ……

その背に向かって、大声ではなく、呟くように祈る彼女は、紛れもなくわたしの母。
何故ならわたしは、その母の腕に抱かれ、彼らの姿が小さくなるのを見ているのだから。

――アル……二人が帰ってきたら、一緒に出迎えてあげましょう。おかえりなさい、って

＊＊＊＊＊

それはもう二度と出来なくなった。
その現実を再認識。したら涙が流れた。同時に目も覚ましてしまったのだ。

（まだ月がある……）

うたた寝程度しか眠れなかった。今からまぶたを閉じればまた眠れるだろうが、涙が邪魔してその気力もない。
眠いのに眠れない、って表現が合っているのだろうか。

（月が歪んでいる…）

そう見えるのは、涙のせい。
家族全員が揃っていた時期なんて、これからの長い人生を考えたらほんの一瞬のように思える。……長く生きていられるかもわからないけど。
その短い時でも、家族と共にいた、という現実は確かにあった。
それは、あの夢……父と兄が大戦に行ってしまう前までだった。

（今更昔に泣いてどうすんのよ……）

しかも覚えているかもわからない赤子くらいの記憶だ。よく夢に出てきたよな、と己の脳に感心した。

昔があったから、今、わたしはこうして歪な同名の存在を見ているのではないか。…一番同名なのは、そこで寝ている彼だが。
と思ってムーンの方を向いて身体を動かした。ら、

（あれ…？）

彼がそこにはいなかった。これでわたしの眠気はなくなり、覚醒。
立ち上がり、周囲を見る。今夜は月明かりで見える、レイとマリアの眠っている姿が。

（どこに行ったの？）

彼のいた所には、彼の荷物すら置いていない。という事は

（！？）

どこか一人で行ってしまったのだろうか。
せめて両手剣だけは装備し、結界の範囲外に足を踏み出した。
涙を腕でごしごしと拭い、視界をクリアにしないと、万が一の対処も出来ない。
まずは泉周辺を歩く。
と、

「？」

丁度、わたし達の寝床から反対側の方に、月とは違う光があった。
炎とも言えない光…。

（あれは、『ライト』の明かりじゃ……）

さっきまでムーンが使っていた魔法のそれだ。記憶に新しい。
という事は、彼はそこに？
一体何があったのか…。

（もしかしたら違う人間かもしれない……わたし達みたいに野宿している人かも）

いろいろな展開をあらかじめ予想しておき、わたしは敢えて、茂み側に入って近付く事にした。

＊＊＊＊＊

徐々に明かりに接近。人影が見えてきた。魔物でないのならば安心だ。
一体何をしているのか、草木で身をさらに隠して様子を伺った。

（あんなに苦しそうにしていたのに、動き回るのは難があると思うから……ムーンじゃないかもしれないけど……）

人影はこちらに背を向けているので、顔等は見えない。
光が照らす限りでは、背丈は男のもの。体格も偏りはなく、標準に思える。
しかも男は、女の様……否、女よりも長いかもしれない長髪の持ち主だ。
ストレートではないそれ。若干のウェーブがある。今は辺りが暗く、黒髪にしか見えない。
では…その男は何をしているのかと言うと……、

（この泉の底に何かあるのかしら……？）

髪の毛で見えなかったが、男は衣類を身につけてはいないらしい。
それで泉に入り、潜水してしまった。
……潜るのが長く感じる。肺活量が多い方か。
しばらく上がってくるのを待っていたら、

「！！」

わたしの背後から、唸り声を出しながら接近してきたものが。
振り向いた。狼だ。だが、一般的なそれとは違う。明らかに魔物と思わせる大きさと、姿形の違い。
月明かりで見える赤い毛並み、牙や爪が異常に発達して、さらに頭の位置がわたしの目線と同じだという大きな狼が、狼なワケない！

「くっ……」

迂闊だった。今は武器はあるが、戦り合うには危険だ。
一度でも相手の刃に身体が傷付けば、致命傷かもしれない…。
逃げれば問題ない。だが、今はわたしだけじゃない。他の人間だっているのだ。

（ムーンを恨むワケじゃないけど…まだ森は未知数だって思えば…）

夜に活動する魔物はいた、という事である。ムーンの分析は外れていた。
がさり、がさりと草の音を立てて、こちらにゆっくり迫る敵。
さてと…これは

ガァァァッ！！

来た！　単純な飛びかかり、でも怪我を負える技。
後ろにバックステップ。
ガサリッ、と音が激しい。
それでもまだ狼の目はわたしを捕らえたまま。

（まだここじゃ動きにくい）

仕方がない、と観念したわたしは茂みから出る事にした。
背を向けて走ろうとしたら

「あっ！？」

足がもつれて転んでしまった。なんでこんな時に限って…。
グルル…と好機を見つけて喜んでいるような唸り。
とにかく背中を見せてはならない、と倒れたまま振り向いたら

（やばっ！）

既に襲いかかってきている最中。剣二本の交差で防御して防ごうとした。

「え？」

けど。こちらに牙が当たる前に、狼の身体は炎に焼かれ、一瞬で灰となった。
何が起きたのかわからず、急いで立ち上がった。

「大丈夫か？」
「！　ムーン…！？」

彼の声。彼が助けてくれた。
後ろから聞こえた声。わたしはすぐに振り向く。が

（!?……）

見た事のない姿だった。
木々達を境界線とするならば、わたしは森の中側で、相手は泉付近側、と言ったところ。
相手の側にはライトの明かり。長い黒髪で、ボロボロのマントのみ身体に纏う。

（人間？　それとも…）

彼の足元だけ、地面の色が変わっている。先程から泉に潜っていた人間である証拠。
それに…

「ムーン……？」

顔の肌の色……左目の周り、鼻や頬には届かないが、人間の色ではない。やや薄紫色か？
左の目、人間特有の瞳の白の部分がなく、まるで魔物の目を移植したかのような鋭い瞳。
マントの隙間から見える身体の肌。右手は人間だが、左手腕は人型の魔物。

「ムーンなの……？」

ホータイやマントのフードで、右目以外素顔がわからなかった。

だが、確信出来る。この半魔物の人間の右目は、普段見慣れたムーンのそれだった。

「……怖がらせてしまったな」

初めて見る表情だ。申し訳なさそうな、自嘲しているような顔を、普段よりもハッキリと見た。

「ううん……怖くない」

首を横に振り、彼の言葉を否定したわたし。

「ちょっと驚いただけ」

捜して見つけたから嬉しくて、だから笑った。
表現は悪いけど……この夜空を見上げた時に見た歪な月の同類を、今この地上でも見ている月女神の名のわたしがいる。

＊＊＊＊＊

第四十二章

名前が持つ意味

偏見。差別。
入団試験日、わたしは周りの人間達からそれを受け、思い知らされたものだった。
皆、同じように産まれてきた生き物なのに、何故同類に存在を否定されなければならないのか。
すごく、つらかった。

「どうしてわたしの事、メリアーとして見なかったのか、わかったような気がする……」
「……？　何か言ったか？」

事が終わると、ムーンはマントをそこらに放り、また泉の水に身体を沈めた。
だからマントを、泉の側に置いてある荷物の近くにたたみ直し、その付近に座って眺めていた。
わたしの呟きを聞き逃し、泳ぎながら問いかけてきた。

「うん、どうして身体中にホータイを巻いていたのか、わかったんだ」

最初に言ったのとは違うけど、それに近いような事をムーンに言い直した。
彼はこちらを向き、岸辺まで近寄る。

「……嫌いになったか？」
「まさか。身体がそうなってるのは、理由があるんでしょ？　それに、わたしはあなたを嫌う理由がないし」

まだまだ己を嘲笑っているムーン。すぐに彼の言葉を否定したわたし。

「そうだな……この身体は、もう一つの後遺症と言ってもいいだろう……」

後遺症…魔界大戦のものか。
水面から魔物の左手を出し、それを他人のように眺める彼の目。

「実を言えば、私もルナと同様に、敵側に引き込まれるところだったんだ」
「え……？」

兄の話。

「だが、私はそれを振り払った。だからルナを救えず、その代償とでも言わんばかりに、こんな身体にされてしまった」

わたしの兄を助けられなかった故、当然の事。という彼の言い分。

「大戦が終わった後も、一人世界をさ迷い、誰かに会う度に怖がられ、殺されそうになった……。だから、この身体だけは誰にも見せ

ないように……と思ったのだが…」

今、こういう状況だ、と言いたげに、わたしを見た。彼の自嘲は終わらない。

終いにはすまなかった、と謝られてしまった。言葉が見つからない。

（たった一人…苦しみながら、兄さんを助けようとしていんだ……）

それに比べ、わたしの差別はまだまだマシじゃないか。

あの時に癇癪を起こして迷惑かけた自分が情けないのと、彼の苦労を考えたら、自然と泣いてしまった。

「…何故？」

と、ムーンは一言、わたしに泣く理由を問う。彼は悲しそうな顔だ。以前、サンポリアにいた頃に見たのと同じ目だ。

「わたしなんかより…あなたが一番可哀想だもの……」

命懸けで世界を守り、仲間を亡くし、その代償がその存在。

彼にはそれ相応の何かをもらえないどころか、奪われているではないか。

「……私の事で泣く必要はない」

「泣いて当然よ！」

「！？」

彼の謙虚とネガティブな発言。わたしは思わず対抗して声をあげた。

驚く彼の顔。変わる表情見るのも全て新鮮だ。

「わたしは絶対見捨てない。裏切らない。あなたがわたしにそうしたように。…身体が半分魔物だろうがなんだろうが、ムーンはムーンなんだから……」

誰かに対して泣いたのは、母さん以来か……。

彼は試験日で出会った時から今日までずっと、仲間だから。もちろん、これから先もそう思える。

「……ありがとう」

彼の口から出たのは、そう一言。弱い微笑みと共に。

「ご、ごめん……勝手に喚いて……」

わたしは自分の状態がむしろ迷惑だったような気がした。急いで涙を拭うが、まだまだ流れてしまう。

「いや……」

「！……」

ざばぁ…という水音。と同時に彼が右手でわたしの頬に触れ、涙を指で拭う。

そう行動しながら、彼は泉から出ようとしていた。

「ちょっ」

彼は何も着てない状態。目をつぶって視界を塞いだ。

ああ、すまない…つい、という声と、濡れた手がわたしの頭を撫でる。

まだ目の前にいる……見るの恥ずかしいからまだ目をつぶっている

わたし。
撫でられるのって、入団試験が終わって大泣きした時以来だ……この手はやっぱり変わらない。
ムーンの手の感触が消える。ぱしゃり、という水音がした。気配も離れている。

「毎月、こうして一人で水を浴びたり浸っていたりしているからな……誰かといるのは初めてで、気を遣うのを忘れていた……」

恐る恐る目を開けると、こちらには背を向けた状態のムーンの姿。
足を泉にいれて腰かけている状態。
丁度真正面が見れないし、彼の長髪の効果なのか不思議と目を向けれた。

「どうして、こんな事を……というより、もう苦しくないの？」

そうだ、彼はさっき息苦しそうにしていたじゃないか。今はこうして平気で水遊びしているのだ。
それを思い出し、ムーンに問いかけた。

「月だ」
「え？」

一度聞いた台詞。彼は夜空を見上げている。

「先程言っただろう……月光は魔物達を攻撃的にする、と」
「……それって」

まさか、と思って言おうとしたら、

「ああ、私の身体は、毎月、満月の夜……痛み出すのだ。何かを襲いたい衝動に駆られてな。抑えようとすればするほど、苦しくなる…」

「……」

やはり、一般的な身体ではない、彼は。それを隠さず教えてくれたムーン。

「だからこうして痛みを抑えようと工夫をしている。こういう事だけじゃなく、無理にでもトレーニングをして疲れさせる……そうでもしなければ、いつか関係のない人間を傷付けてしまうからな……」

「そう、だったんだ……」

その事に関し、悔やんでいるような風に聞こえてこない。もう既に諦めきっているような、あるいは全てを受け入れているような。あ、どっちにしろ意味は近いが、ニュアンスの違い、というものもある…。

「だから私は、月のない夜が好きだ」

月を恨むのと同じような言い方。ここからじゃ彼の表情が良く見えない…。

最初、彼の顔を見た時、レイの言う『おっちゃん』よりはやや若く見えた。

４０代のはずだけど…それでもまだ剣を握っているのだからすごい、の一言。

「おんなじ名前なのに…」

同名の存在がいる夜が嫌いだなんて、という意味でわたしはそう言った。
すると彼の口からは
「私の名前に意味などない」
「っ？」
わたし的許せない言葉が出てきた。もはや彼は、自分の存在すら消えてもいいような扱いをしているのだろうか。
「意味はある」
「……？」
「絶対あるんだから」
彼が振り向く。相手の右目とわたしの目が合った。
「意味のない名前は記号と変わらないよ」
「……」
「わたしの名前は……父さんがつけてくれたの。月のように」
わたしは夜空を見上げながら語っている。
「優しく輝ける、素晴らしい人間になれ、って。あ、いや、本人に言われたワケじゃないけど……夢に出てきてさ、そう言われた気がするのよ……」
そうだ。わたしの名の由来は夢に過ぎぬ。もしかしたら、家族に対しての願望が夢として具現化しただけかもしれないし…。
今更それを思い出し、彼の言葉を否定して反論したのに、熱意が込めれないじゃないか…。

言った後で後悔……だから

「ムーンの名前は、ムーンからしてみたら意味がないのかもしれないけど。意味を持たないなら、これから探していけばいいじゃない。今後の生活を通して、さ…」

言い訳みたいで申し訳ないが、彼にそう助言してみた。
一回り人生の先輩である彼に助言とか、小娘がよく言うわ、と見下されそう。
ただわたしは、彼の口から、意味がない、って台詞を聞きたくないだけなのかも…。
まだこちらを見てくれる彼の様子を伺う…。

「……そうか。そうだったな…」
「え…？」

その反応は、わたしの言葉を受け入れてくれた、と解釈していいのだろうか。
彼は弱く笑っていた。だが、自嘲はもうそこにはなかった。

「…もう寝よう。明日は早い……」
「あ、うん……」

キリの良いところで会話が終わる。彼がライトを解除するが、それでも月明かりで間に合っている。彼が泉から出ようとしていたので、わたしは身支度を見ないようそっぽを向いた。
時に

ガルルルッ！！！

「！」

突如茂みから狼が。しかも三匹も群れて。先程の仲間の復讐か。
すぐさまわたしは立ち上がり、剣二つ構えたが

「『スペルショート』」

「！？」

ボソリと呟いたムーンの声。気のせいか彼らしくない苛立ちを感じた。
瞬間、泉の水が意思を持つかのように狼達だけを襲う。
三匹を覆うような大きな水玉となり、奴らを閉じ込める。
水玉の中に空気はない、奴らはもがき苦しむが、出られない。
……そして、溺れ死んだ。絶命を見送った後、水に魔力は解かれてバシャリと地面に。狼らの死体と共に落ちた。
凶器は地面に染み込み隠れ、事情を知らぬ者がこれを見たら、変死と判断するだろう。

（これ……ムーンが使うような魔法じゃない）

強い、カッコいい、そんな感想じゃない。
『怖い』……今の彼の技は、まさしくそれだった。そういえば、さっきも炎でこいつらの仲間を燃やしたが、あれは骨すら残らなかったはず…。

「だから私は、月のある夜が嫌いだ」

「……」

身体や髪の水をどのような速業で乾かしたかは不明。
だが彼は既に、身体にホータイを巻き終えており、今は顔に巻く作

業をしていた。

「ただ追い払いたいだけだったのだが……何故か念じていない分まで魔力が暴発する。そうやって私は身を守る度に、必要ない殺生までしてしまう……」

その作業には慣れた手付き。あっという間に普段のムーンの姿が、月光の下確認出来た。

後は衣類、武器と防具、フード付きマント、といった具合に身を固める。あの長い髪の毛は、マントをつける時に隠しているみたい…。

「アル……すまないな、こんな事に付き合ってしまって…」

改まった謝罪、彼から言われ、わたしはそれを否定した。

「いや…私のこの事まで知ってしまったんだ。知らない方が幸せだったはずだ……」

「……だからさ」

彼はどこまで気遣いがいいのやら……。だからわたしは言ってやった。

「わたしは、魔物でもムーンに代わりない、って言ったじゃない。むしろ、ありがとう……」

「？」

感謝した。

「話してくれて。身体の事も、昔の事も」

「……」

わたしを仲間として更に認められたような気がしたのだ。彼の今までの謎が一つ、解明されたのだから。
ムーンはただ、こくり、と小さく頷いた。
それがどういう意味を含んでいたのか、様々だからわからない。

「……寝るか」
「うん！」

けど、こうして彼と並んで寝床に向かっているから。隣に彼がいるから、悪い意味はまずないと思う。
これからも、わたしは彼の事をもっと知っていきたい、と願った。
満月に込めて。

第四十三章

―――――――――
農牧村　ベゴ
―――――――――

＊＊＊＊＊

眠いのに、何故か身体は朝がいつなのかわかってしまう。
周りでガサゴソと準備のような音がする。それを聞いてわたしは、目を開けた。

「おっ、やっと起きたぜ」

っはよー、と地面に座っているレイニー。こちらを見下ろし、挨拶してきた。
わたしはまだ半開きの視界のまま、身体を起こし、向かい合うように座る形となる。

「おはよ……」
「アル様……あまり眠れなかったのですか？」

マリアンヌの心配してくれる声。目をちゃんと開ければ、昨夜の月明かりとは違う別の明るさで、泉のある光景を目の当たりにする。
マリアは荷物を背負い、杖の細い部分で地面の魔法陣にさらに線を

入れる。乱暴に、掻き消すように。

「これでよし、と」

「何をしたんだ？　マリア」

とレイが問いかける。もう出発の準備は整ったらしく、立ち上がりマリアに駆け寄った。

「もう必要がないので、消していたんです。そのままにしてしまいますと、他の事が出来なくなってしまうんです」

「他の事？」

「他の魔法陣や、お祈りや。一つ何かを持続していると、他の行動に制限がかかりませんか？　それと同じ事なんですわ」

「えっと……」

マリアの例えがわからないみたい…。

レイが首をかしげ、考えているが、答えが出る前に

「ずっとここに根を張っては、歩く事も出来ないだろう…」

もう準備バッチリの、普段のムーンが見せない口を開く。

「あ、そういう事かっ」

さすがおっちゃん、と感心するレイ。

うーん……なんか違う気もするけど、ムーンから遠回しに急かされた気がして、武具を装備する事に。

＊＊＊＊＊

太陽が姿を見せている方向へ行きましょう。マリアがそう皆に言い、彼女が先頭で進行する。
歩いている間、魔物からの襲撃は何一つなく、無事、辿るべき道に着けた。

「ムーン様はすごいです」
「なんで？」

マリアの感心の言葉、言われた本人の代わりにレイが問う。

「朝、魔物が現れない、とおっしゃったじゃありませんか。わずかの間でここの環境を知り尽くすのは、すごい事だと思います」
「うん、そういえば今日、武器使ってないや…」

二人がそう話す中、ムーンは一人勝手に進む。二人もそんな彼について行きながら、会話をする。
気楽だなぁ、とわたしはあくびをしながら彼らの後方に位置し、旅をする。

＊＊＊＊＊

だが、陽が昇るのに伴い、魔物らも徐々に姿を現してきた。
やはり虫のような魔物が大半。それに、昨日から相手をしている種類。倒すのは容易かった。

「よしっ、これも終わりっ」

何度目かの襲撃にもひるまず、冷静に殲滅成功。
事が終われば、わたしは鞘に剣を収める。

「にしても…いつの間にわたし達、上り坂を歩いてたの？」
「ええ……この辺りからは山登りの要領で進みますので。傾斜は緩やかですから、大丈夫ですよ」

若干地面が進行方向に向かって傾いている。上りで。

「坂だろうがなんだろうが関係ないって。さっさと行こうぜさっさと」

相変わらずせっかちなレイは、魔物との戦闘が終わればずんずん進む。
わたし達も慌てて追いかける。ムーンは普通の足取りでペースについていけるから、至って冷静。

＊＊＊＊＊

「？」

昼も食べ歩きながら済ませた。そして進んで行けば、

「そろそろ頂上付近になりますので、森が開けますね」
「……」

坂道で先がどうなってるかわからないが、もう木々の姿がそこには

ない事を知る。
サーサリー大陸とはどんな所か……わたしは先に走り、その風景を見たかった。そして

「！……」

今まで葉っぱや枝達で遮っていた日光が、一瞬視界を白くして奪う。
が、光に慣れ、見れた光景は

「わぁ……」

草原が広がっていた。下りも緩やかな傾斜で、人口の道で降りて行ける。
その道の先、遠くには村があるのがわかった。
広い面積で、柵らしきものが見える……柵の中、あれは牛か馬か。

「農牧が盛んなベゴ村だよ」
「えっ？」

いつの間にかわたしの右隣にいたレイ。
見下ろす、というよりは見下した目で、その村の名を言った。

「ここは牛や馬、山羊、羊、鶏とか、普段の生活に欠かせない肉、羊皮紙、牛乳、羽毛とかが原点となる村だ。もちろん、野菜や果物も作っているから、各大陸に売られていて有名なんだ」

さすがは出身者……この村の事も知っているようだ。と感心してたのに

「おれ、この村嫌い」

「えっ…？」

どうして？、と聞きたかったが、後からムーンとマリアが追い付き

「ベゴ村が見えてきましたわ」

「この太陽の傾きならば…予定してた通りに着けるだろう……」

結局聞けぬまま、歩き出した。わたしもその流れについていく。

「なぁ…おっちゃん…」

「？」

芝生のない渇いた土の道、その上を歩く音。

風が吹き、草原を鳴らす。背後から森の木々の音。

わたし達は歩く。そうしながらレイがムーンに声をかけた。が

「いや…やっぱりなんでもない」

「……そうか」

どこか諦めたかのように、言い出した方から話を区切った。

これから向かう村を、彼が嫌うのと関係のある話だったのだろうか？

「今夜はベゴ村の宿屋でお世話になるのでしょうね」

「そうだな……」

「明日、出掛ける前に、教会でお祈りをしても構いませんか？」

「ああ…」

マリアとムーンの会話。このまま降りて行けるかと思ったが、やはり魔物は後を絶たぬ。

出会う度出会う度、わたし達は武器を構えた。

＊＊＊＊＊

「着いたぁ……」

ムーンは魔物と遭遇する事までも計算に入れて、時刻を予想したのだろうか。もしそうならばすごいとしか言えない。
本当に、夕焼けが似合うこのベゴ村にたどり着いたのだから。
さすがにわたしも、体力に限界があった。

「のんびりとした村、って感じだね…」

今まで訪れた場所は、森や塀に囲まれて解放感がなかったからかもしれない。
だが、ここは村と呼ぶには民家も多いし、所々で馬や牛、牧場とも言える柵等が大きいのから小さいのまである。
城下町と比べたら狭くて貧相に思われそうだが、ここにはそれとは別の豊かさがある。わたしはそう思える。

「もう遅いし、さっさと宿とろうぜ…」

誰よりも疲れてきっていたレイが、渋々と、だが足はいそいそと。
二階建て、既に明かりが灯っている建物へと向かった。
その時だった。

「レイ…？」

と彼を呼ぶ第三者の声。ムーンでもマリアでもない、女性の声だ。

声の主に振り向くわたし達。だが呼ばれた本人は立ち止まったまま、振り返らず。

「あんた、レイニーでしょ？」

村人のおば様だ。まだ夕日があるので、彼女の癖っ毛な茶髪が光で映える。ふくよかなで、ワンピースの上から白いエプロンを身に付けている。

「ちょっと！？　黙ってないでこっち向いたらどうだい！」

やたらしつこくレイを呼ぶ。だが、彼は依然反応を示さない。痺れをきらしたおば様は、ずかずかと歩き出し、レイの肩を掴み無理矢理振り向かせた。

「…やっぱり」

目線を合わせないレイ。おば様は彼を確認したのと一緒に、どこか安心感も見せた。
というより…この人はどなた？

「出てったきり手紙一つも寄越さないで……母さん心配したんだからね…？」
「えっ！？」

『母さん』！？　という事は、このおば様はレイの母親？
驚愕の声をあげてしまったのは、マリアも一緒だった。お互い、顔を見合わせた。
という事は、この村はレイの出身地、という事になるのでは。

「出てけって言ったのは親父の方だろ!?　言われた通りにしただけじゃんか!!」

母親に口答え。この様子は、ワケあり、だと思う。

「だからって父さんの言葉を鵜呑みにする事なかったじゃないの!」
「鵜呑みにするとかじゃねぇよ!!　親父は本気でおれの事、追っ払おうとしたじゃないか!!」
「それはあんたを心配したからああなっちゃったじゃないかい!!」

やばい……こんな村のど真ん中で親子喧嘩しても。
間に割って止めるべきか否か、迷ったが

「いいからまずは家にお帰りなさい!!」
「やだね!　帰んないからなっ!!!」
「レイニー!!」

行動する前に、レイが断ち切った。
宿屋へ向かうその背中からは、まだ怒りが表れている。
おば様は追いかけようとするも、途中それをやめて立ち止まった。
バタンッ、と宿屋のドアが閉まる音。
今、この場にはわたし達と彼の母親。
すると、おば様がわたし達に振り向き、歩み寄ってきた。

「あんた達は、レイのお連れかい?」
「は、はい……」

怒っているままかと思ったが、もう既にその感情はなく、苦笑い。
恐らく、先程の喧嘩を見せてしまった事に対しての苦笑と思う。

「はじめまして。あたしはサニー・バルナよ。正直…あたしゃ息子に会うのは本当に久しくてね……あんた達の事や、レイの事、詳しく教えてほしいのよ…」

母親ならば、連絡もない我が子ならば尚更知りたいのであろう。わたし達は揃って了承した。

「ここじゃなんだから、あたし達のウチにおいで。夕飯をご馳走するからさ」

今宵から欠け始めた月が、バルナ家へお邪魔するわたし達の様子を見守っていた。

第四十四章

―――――――――
農牧家のバルナ家
レイニーの事情
―――――――――

＊＊＊＊＊

招かれた家は一階建て。他の民家と比べて広そうな感じ。
丸く囲んだ柵の牧場は広く、牛達がいると思われる小屋も側にある。

「どうぞ。田舎だから、つまらない所だけど、ゆっくりしてっていってね」

レイニーの母サニーさんにより開けられたドア。
玄関から入ると、真っ直ぐ廊下が続いてる。左右の壁、ドアがそれぞれ鏡を対面させるよう位置されている。わたし達は、右手側手前の部屋…ダイニングキッチンへと招かれた。
家族で一緒に食事をする場所……テーブルに椅子、どこにでもありそうな光景がそこにある。
家具の棚には古そうな写真。写真立てがいくつも並んでいる。

「ささっ、おかけになって。紅茶とミルク、どっちがいいかい？」

キッチンの側にある食器棚に向かい、グラスを探すサニーさん。
わたし達は顔を見合わせ、とりあえずお言葉に甘えようか…という事で、三人横に並んで椅子にかけた。
長方形のテーブルに六個の椅子…レイの家族は六人なのかな？

「わたし牛乳お願いします」
「あ、わたくしも頂きますね」
「私も同じのを…」

わたし、マリアンヌ、ムーンという順番で飲みたい物を口にした。
というか……ムーンの性格からは紅茶かと思ったが。
わたし達三人の意見を聞いて、サニーさんはフフッと笑っていた。

「やっぱり牛乳は大人も子供も関係ないもんだからねぇ。美味しいのを用意するからさ」

待ってて、とグラスを四人分用意し、準備をするサニーさん。
わたし達は見守りながら、小声で話をした。

「よく見ると、サニーさんとレイって、似てない？」

わたしが二人に話を振った。

「そうですね……髪の色と明るそうな感じは、レイ様と同じですわ」
「当然だろう……家族だからな……」
「……そうだね」

マリアはどこに目をつけてそう判断したのか話し、ムーンは簡潔的にそう言った。それは皮肉とか批判的な意はなく。
……わたしもどこか納得し、ゆっくりとおば様を待っていた。

＊＊＊＊＊

はい、おまちどうさま、とわたし達の前に並べられる飲み物。
わざわざ火をたいて、鍋で温めてくれたそれは、飲み物同様に白い湯気を立てていた。
いただきます、とそれぞれにコップを持ち、牛乳を口に流し込んだ。

「美味しい！」
「美味しいですわ…」
「……」

そしてこの反応。
各々、牛乳の味に対し絶賛した。
ムーンはわたし達女子二人のように騒がなかったが、味わっているようだ。
そんなわたし達を見て、サニーさんは声をあげて笑った。そんなに面白かったのだろうか。

「あんた達、物騒な格好してる割には面白いねぇー」
「ぶ、物騒って…」
「剣持ってる奴とか、甲冑つけてる奴は大抵、態度も物騒な連中ばっかりだったからね…うちの息子と一緒にいるからかねぇ…」

サニーさんから見た剣士とは、そのように感じるのだろうか。
レイの事よく知る母だから、感じ方が違うのは我が子の影響、と判断された。

「本題なんだけどね」

と、サニーさんは自分のコップを持って、わたし達と向かい合うように椅子に座った。

「あんた達は何者なんだい？」

初対面ならばまず必ず聞きたい質問。

「我々はサンポリア騎士団員の者です。私はムーン・タリアスと申します」

「わ、わたしは同じく、アルテミス・メリアーです」

ムーンがまず、己の自己紹介をし、わたしもそれに続いて名乗った。

急だったので、出だしどもってしまったが。

「わたくしはユーピテルから来ました、サーサリー教団のマリアンヌと申しますわ」

マリアも自分の名や職を教える。

サニーさんはそれを聞いて、何か考えていた。なるほどねぇ…、と呟きながら。

「あんた達がどうしてレイと一緒にいたんだい？」

「我々は……」

ムーンが主に、わたし達の今に至る話をした。

レイとは入団式で出会い、共に騎士団として働いていた事。

先日、団員全員でサーサリー大陸に来たのだが、トラブルに巻き込まれてしまい、帰れなくなってしまった事。

事の成り行きでユーピテルを訪れ、マリア達に出会った事。
そして、彼女の護衛も兼ねて、港がある王国へ向かうべくここまで来た事。

「ま、まさか…」

サニーさんは驚き顔だった。信じ難い事を聞いたようだ。いやまさかねぇ、と、一体どの部分が信じられないのだろうか。

「あのレイが、騎士団に合格したって……」
「それすらも知らなかった、という事でしょうか…？」

マリアがサニーさんに確認するよう声をかけた。サニーさんは、ええ…、とまだ受け入れられない状態だ。

「さっきも言ったはずだけど、あたしはレイが家を出てったきり、手紙すら来なかったからね……今日までなんにも知らなかったよ」

母でもわかっているのだろう、レイの事。あの性格。
レイが騎士団に入れたなんて、当時その場にいたわたしだって意外だと思ったくらいだ。
サニーさんがそう思うのも無理ないかと。

「あの……レイはどうして、この村を出て行ったんですか…？」

あまり人様の事情に首を突っ込むのはよろしくないが、彼はわたし達の仲間。
故、知りたくなってしまうのだが……失礼だろうと思ったが、わたしは問いた。

「あの子はねぇ……父さんと喧嘩したのさ」
「喧嘩……」

＊＊＊＊＊

サニーさんの口から語られる、レイの身の上話。
まず、レイは名の由来、雨の振る日、このベゴ村で誕生した。
バルナ家はこの村で一番の農牧家で、先祖代々から牧場、農作物、動物達を守ってきたという。

「この村じゃ、それらは皆財産だったからね、子が親の仕事を継ぐのは常識なものさ。でも……今は時代が違ってきているからねぇ……」
「……」

レイはこの村の友人も多く、母親のサニーさん曰く『やんちゃボウズ』だという。
だが、友人らの大半は、学問や戦士、僧侶等を志し、村を出てしまったのだとか。
レイもその者に含まれた、という事なのだろうか…。

「物作りは昔から大得意だよ、あの子は。父親譲りってのもあるけどね…。あたし達の結婚記念日や誕生日になる度に、アクセサリーとか、仕事に使う道具とか。作ってくれたら直してくれたりしたもんさ」
「へぇ…」

彼は武器として使う小道具、何かしら細工してある短剣等を駆使し

て戦うが。
その由来が父親だとは…子は親に似る、か。

「それで…その、お父様はいまどこにいらっしゃいますか？」
「ああ……ウチの旦那はね……」

マリアの素朴な疑問に、サニーさんは苦笑い。情けない、という浮かべる表情がまた表れた。

「病に倒れちゃったのさ」
「えっ！？」
「レイが家を出てって、何日も経たない内にねぇ…」

理由は知らないが、ある日にレイは、騎士団に入りたい、と両親に話したらしい。
だが、頑固な父親がそれを許してくれず、跡継ぎとして残るよう説得したとか。
故に、親子は衝突。喧嘩となってしまった。
その後は、サンポリアでわたし達に出会った話に繋がる、という事だ。

「お父様がご病気ならば、わたくしが治療をします。お部屋へ案内して頂きますか？」

やはり僧侶の身分であるマリアは、病人を放っておけない性分らしい。
勢いよく椅子から立ち上がり、サニーさんに問い詰めるが。
サニーさんは首を横に振った。無理だよ、と。
そう言われた司祭は、先程の意気込みはどこへやら、ぺたんと椅子に座ってしまった。

「何故ですか…？」

「旦那は神がかりなものを信じない人間でね。この大陸の生まれにしちゃあ珍しい人間だよ。だから、無理にそういう事したら、あんたが怪我で寝込んじまうさ」

なるほど……やっぱり大陸全土の人間全てが信仰者とも限らないのか…。それを聞いて学んだ気になれた。

「ですが…このままではお父様もレイ様も、仲良くなれないのではありませんか？　せっかく帰ってこれましたのに……」

あ、そうか。だからレイは王国へ向かうのを渋っていたのか。村に到達する前にも、レイは最終手段としてムーンに声をかけたが……この村を避ける事を、諦めてしまったのか。

「どうしよう…」

レイは一人、宿屋に行ってしまったし。マリアだけじゃない、わたしも気掛かりだ。同期の家族ならば尚更。

「ムーン、レイをここに連れ戻してみる？」

このメンツでは、最終判断は人生の上司になってしまっている。わたしはムーンに聞いてみた。

「…いや、連れ戻したところで、何かが変わるワケではない。問題は、お互いの気持ちの持ちようだろう……」

「……そっか…」

そっとしておこう、というムーンの意見だった。まぁ…確かに、連れて来たところでまた親子喧嘩になってしまうだろうし……。

「レイを連れてきて下さったお詫び、と言ってはなんだけど、泊まっていかない？　宿じゃお金かかるし、あたしんちだったらご馳走も部屋も用意するからさ」

「えっ？　いいんですか？」

「もちろんよ！」

＊＊＊＊＊

という事で、ここバルナ家にお邪魔する事になった。

部屋を一室与えられ、わたし達は夕食が出来るのを待っていた。

しかもこの部屋…レイの自室、とサニーさん曰く。先程会話をしたあの部屋からは、家族は多いと思ったが、彼女に聞いたらレイは一人っ子だった。

でもこの部屋、一人部屋にするには広い。部屋主がいなくなった後でも、母はここの掃除を欠かさなかったのだろう、綺麗だった。

「いいのですか？　わたくしがベッドを使うなんて…」

一人部屋故に寝台は1つ。わたしとムーンは雑魚寝には慣れているから、そんな事すらした事ないだろうマリアに譲った。

「ありがとうございます…」

と返事はされるも、まだどこか遠慮がちな彼女。

とりあえず、必要ない装備は外し、荷物と共に一ヶ所にまとめ置く。

わたしはマリアと一緒にベッドに腰掛け、ムーンはこの大陸の地図を片手に、レイの勉強机の側にある椅子に座った。
今後についてのミーティング。メンバーが一人不在だが。

「長居している暇がないのは皆、わかっているはずだ…明日の朝、レイと合流、後、ベゴ村からサーサリー王国まで一直線。昼前には着けるはずだ」
「……」
「アル、マリアンヌ、どうした……」

確かに、わたし達の目的は王国へ到達する事だが。

「どうしても、レイ様とお父様の事が気がかりでして…」
「わたしも…」
「……」

このままレイと家族を会わせないのも、どうかと思う。
親にプレゼントをするような心優しい息子なのだ。家族の事を完璧に嫌っているとは思えない。
喧嘩しても、そう簡単には。

「……気持ちはわからなくもないが、それは家族の問題だ…私達が口を挟んだところで、どうにかなるものではない」

ムーンも気が気ではない、と言っているのか。それは目の表情からも伺える。
しかし、わたし達が急がなきゃいけないのは事実だし、元を辿れば『他人』である家族の事は、彼らが解決しなきゃ意味がないのはわかる。
でも…

「？」

ドアをノックする音。わたし達の注目はドアに集まる。
一言返事をすると、サニーさんがドアを開けてきた。

「夕飯が出来たわよ」

＊＊＊＊＊

「いただきまーす！」
「いただきます」
「いただきます……」
「遠慮せずにどんどん食べな」

また先程の部屋に集まるわたし達。
窓越しに見れば、外はもう暗く、部屋にあるローソクの火により部屋は明るい。
サニーさんが腕を振るって作った料理はテーブルに並べられていた。

「あれ？　これってまさか……」

と、帽子と服の装飾を外しており、シンプルなワンピース姿のマリアが、ある料理で反応した。
サニーさんは思い出したかのように、その料理をわたしとムーンの前に移動した。

「ごめんなさい。そういえば僧侶さんだったから……お肉は食べな

いのよね」
「お気遣い、ありがとうございます…」
その料理は、牛肉を焼いたもの。サーサリーに来て久しぶりに見た肉だった。
「ウチの旦那は不信者だからね、だから家畜も出来るのよ。近所の家は、牛乳絞るくらいまでしか出来ないし」
レイの肉好きの由来なのだろうか、とわたしはふと思った。
「その事について嫌がる人もいれば、それは個人それぞれのもの、と言って見逃す人もいるのさ。あたしは……まぁ、ここの出身じゃあないし、どっちでもいいけどね」
さ、お食べお食べ、と食事を促す。サニーさんのお話が終わり、改めて挨拶しようとしたら
「!?」
バンッというドアを強く開く音。
このダイニングに入ってきたのは、男性……年齢的におじ様、と言える人だ。
「おい……こいつらは誰だ……？」
ぜいぜいと苦しそうな声で、サニーさんに問いかける。
表情も険しく、今にも倒れてしまいそうなくらい。
だが…こちらを睨む目は怖く、何故か圧迫感が。
そして、マリアを見るなり

「お前、まさか尼か！？」
「！？」

いきなり大声で聞いてきたので、マリアだけじゃなくわたしもびっくりしてしまった。ムーンは至って冷静だが。
マリアの服装は一見、ただのワンピースだというのに、何故すぐに教団の者だとわかったのか。

「出てけ！！　この家に神様なんざ必要ない！！　出てけ出てけぇ！！」
「きゃっ…！？」
「ちょっと待ちなさいあんた！！！」

どしどしと、ただ戸惑うマリアに向かって怒鳴り散らすおじ様。げんこつを構えていた。
サニーさんが彼女をかばうように前に位置する。
だが、おじ様の勢いは止まらず、見えてるのか否か、拳を振り上げようとした時に

「げほっ…げほっ……」
「ほら言わんこっちゃない…！」

急激にスピードが落ちた。おじ様は咳き込み、サニーさんが彼の背中をさする。
彼をこの部屋の外へ連れて行こうとするサニーさん。

「いいからあんたは部屋で寝てなって。ご飯は後で持っていくから」
「だが…！　尼が家に…！！」

バタン、とドアが閉まり、まだ二人の会話が聞こえる。

「ただの客だよ。どこをどう見たら教団の人間に見えるってんのよ」

「首もとに忌まわしいものをつけてるじゃねぇか…！！」

「あの人は教団じゃなくて」

という会話がフェードアウトし、また遠くで別のドアの音がした。

何も音がしなくなり、沈黙が…。

「首もとに忌まわしいもの…？」

なんの事？、とわたしはマリアの姿を見たが

「なるほど……ロザリオだけですぐに見分けたのか…」

「あ……」

ムーンの納得した声に、わたしの目線は彼女の胸元……首からさがっている十字架に留まった。

「これでわたくしが教団の者とわかったなんて……余程神を拒絶していらっしゃるのですね…」

神を侮辱されたにも関わらず、先程の男性のその知力に対して驚いている司祭。

「…別に、ロザリオなんて信仰者ならば皆が持っているんじゃ……」

誰もが持つだろうそのアイテム。それを何故あのおじ様はすぐに知り、敵意を見せたのか。

「いや、教団が持つ物と、アクセサリーとして売られている物とでは、素材、製造法、大きさ、形状等が異なる。仮に、一般人が教団の物を持っていたならば、極まれに、団員からもらった、という事しかないくらいだ」

「へぇー…」

神学者の豆知識。ムーンの話を耳に、マリアのロザリオに目をまた向けた。

「ロザリオは教団内でも信仰者の間でも、特に愛用者が多いんです。だから形も様々で……それなのに」

と、マリアは閉められたドアを見つめた。相変わらず感心のみ。彼女は様々な主張を受け入れる寛大な教団員だ。それが、神を陥れる言葉でも。

「あの方はわたくしのロザリオを見ただけで、見抜いておりました」

「というかまさか、あのおじさんって……」

ロザリオの話題で消えかけたおじ様の存在。それを口にしたのと同時に、ごめんねぇうるさくって、とサニーさんが戻ってきた。

「……レイのお父さん、ですか？」

「その通り。どっかこだわりを譲らないところは、親子揃って持っているから、やっかいなんだよねぇ……」

苦笑を浮かべて話すが、それが段々と悲しげに見えてきた。

「一度でいいから……せめて自分の父さんに顔見せしてくればいいのに、バカ息子……」

独り言にも捉えられる呟き…初めて見る母親の『弱さ』、というものなのだろうか。
……やっぱり我慢ならないや。

「すみません！」
「っ？」

もはや行動するしかない。わたしを止めれるなら止めて、って願う。
両手をテーブルにダンッ！、と付けて同時に立ち上がる。
勢いで椅子が後ろに倒れてしまったが、関係ない。

「わたし、レイの所に行って連れ戻して来ます！」
「アルちゃん…？」

そりゃあ、いきなり何を言い出すんだいこの子は、って言いそうな顔をされるのも無理ない。司祭と同期の目もそう言ってる。
気がしただけだが。

「いいよ、そんな。今のあの子じゃ家にはもう帰らな」
「自分のお父さんが病気だと知ったなら」
「いわ…よ…」
「帰らない子供なんて、いないと思います……」

多分……と、思わず最後に付け足してしまった。それは多分、わたしだけかも。全ての子供がそうだとは限らない……と、言い出した後で気付いてしまったから。
母さんが病に倒れたならば、わたしは付きっきりで看病したい。
だって、家族だから。

「……」

わたしの言葉にうつむくサニーさん。何も言ってはこない。

「……ごちそうさまでした」

「アル！？」

「アル様！？」

わたしはすぐにこの部屋を出て行き、レイの寝室に置いてある自分の荷物だけを手にする。

そして、そのままバルナ家を飛び出し、わたしは駆けた。

雨の日の少年がいる、明かり灯る宿屋へと。

第四十五章

―――――――――
すれ違いとは
よくある事であり
―――――――――

＊＊＊＊＊

ベゴ村の宿は二階建て、他の民家より一回り高いからすぐにわかった。
ほんの少しだけ欠けている満月の明かりは、まだ松明いらず。また、民家の窓からもれる明かりがある為尚いらず。

「こんばんはー…」

と、辿り着いたドアを開け、一言ご挨拶。
受け付けには、サニーさんと近い年齢の女将さんがいた。

「あらあら、こんばんはお嬢さん。どうしたの？」
「ここに、レイが来ませんでしたか？」
「あらあら？　レイニー君の知り合い？」

女将さんはそれを聞いてにっこり微笑んだ。

「それなら、二階の奥の部屋よ。あと二人はいらっしゃる？」
「あと二人、ですか……？」

なんで女将さんが、わたし達は四人組だと知っているのか。

「そうよ、レイニー君がいる部屋は四人部屋ですもの」

＊＊＊＊＊

階段を上がり、廊下を真っ直ぐ進む。右側の三つ目のドアが、女将さん曰く『奥の部屋』だ。

「レイ？」

ノックと一緒に呼び掛ける。
ドアの向こうからは気配はするが、

「レ～イ～？」

返事なし。あと、ドアに接近する気もなし。
女将さんが言ったのだから、レイニーはこの部屋にいる、と。
開けてもいいよね？、と自己確認して、ドアノブに手をかけた時に

「アル」
「アル様！」
「！」

バタバタと足音。ムーンとマリアンヌがやって来た。各々に荷物を

持ち……わたしみたいに。
わたしを追い掛けて来た模様…。

「女将様から、アル様がここに来たと聞きまして……」

来た経緯をわざわざ話そうとするマリア。

「レイはこの部屋だけど……」

わたしは空いてる手で目の前のドアを指差し示す。

「でも……どうして二人とも……」

わたしが勝手に来たのに、何故二人までここに来たのか。
サニーさんをそのまま置いて行ってしまった事になるけど…。

「やはり……わたくしもレイ様を帰らせたかったのです」
「このままにしたら、レイの気持ちが片付かなくなるだろう……仕事にならなくなっては、本人も周りも困るからな…」
「マリア…ムーン…」

二人も気にしているのだ。レイと、レイの家族を。
わだかまりがあったままじゃ、この村を去る事など出来ない。故郷ならば、尚更。本人は、特に。

「…そうね」

メンバーも揃って、なんだか心強い。
じゃあ、開けるよ、と皆に言い、行動しようとしたら

「わっ」

勝手にドアが開き、わたし達三人は後退りしながらその場を離れた。
ドアを開けたのは

「レイ……」

武具を外した状態の彼だった。むすーっとした表情…来てほしくなかったような感じだった。

「…何しに来たんだよ」

わたしより歳上なのに、子供みたい。大人から見たらまだ子供の歳かもしれないけど。わたしも含めて。

「連れ戻しに来たの」
「帰らないって言ったじゃないか」

譲らない。自分が下手に回るのは嫌なのか。それとも素直になれないのか。

「さっきわたし達、あなたの家にお邪魔していたの。レイのお父さん……病気なんだよ」
「え…？」

それを知らなかったレイらしい反応。見開いた目で、わたしの顔を見た。

「だから、一度は家に帰ろうよ。両親に顔くらい見せないと……」
「……」

黙ってうつむくレイ。催促するも、反応してくれない。

「…帰れねぇよ……」

しばらくの間が空いて、やっと開いた口。

「『二度と帰らない』って言っちゃったんだ。帰れない……」

「レイ……」

帰らない、ではなく、帰れない。
家を出る前の喧嘩が理由か。

「レイ…」

ムーンが静かに名を呼ぶ。レイだけじゃなく、わたしもマリアも彼を見やる。
ムーンの視線の先は、レイの顔。

「一体何があったのか……話せるならば、聞きたいのだが…」

解決法は当事者から聞く。
その本人が話してくれるかはわからないけど、それでも仲間を助けたい、と思うムーンからの言葉だと思えた。
もちろん、わたしだって、出来る限りでいい。彼を助けたい…。

「でもよぅ…」

「わたし達、仲間なんだから…」

「！」

レイがためらうから、わたしも思いを声にした。

「余計なお世話かもしれないけど、わたし達、レイを助けたいの。サニーさんも、レイのお父さんも」

「レイ様…」

マリアも同じように、彼を見つめる。

わたし達の気持ちを知り、迷うレイ。しかし、ふぅ…と一息ついて

「ありがとう…皆……」

とりあえず入ろうぜ、と。わたし達メンバーが揃い、部屋へと落ち着いた。

＊＊＊＊＊

「ところでレイ様、どうして四人部屋を頼みましたの？」

「えっ？」

今度は一人も欠けず、くつろげる一時。

各々が荷物を一カ所にまとめ、ベッドに腰掛けたり、部屋にあるテーブルの椅子に腰掛けたり。

またベッドに座ったマリアが、反対側のベッドに座る彼に問う。

「そりゃあ、宿のおばさんとは長い付き合いだしっ。好きな部屋でいいって言われたから広い部屋を選んだのさっ」

「一人じゃ広過ぎだし…」

「なんだよアルテミス！？」

もしやこいつ、心のどこかでわたし達が手を差し伸べてくれるのでは、と期待していたな…？　わたしは勝手にそう思った。
別にぃ？、とレイの問いに対しわざとらしく答え、少し彼に恥をかかせてみた。
でも…仲間が頼ってくれている、そんな気がして、嬉しかったりする。

「丁度いいだろう…後でサニーさんの元へ事情を話さなくてはな…」
「あ、そういえば」

ムーンの口振りは、彼が家に帰るのを拒絶する前提のように聞こえた。
サニーさんがせっかく夕飯まで作ってくれたのに……レイの為とはいえ、失礼な事してしまった。

「まずは…レイから話を聞こう」

息子の事なら、多分、許してくれるだろう。ムーンからはそんな余裕を感じた。
どこにも座らず、窓際付近を位置して立つムーンが、レイに話を振る。

「レイは家族の事、嫌いになったの…？」

帰らない理由…第一に考えられるのがこれ。念の為聞いたが、彼は首を横に振って否定した。

「今でも好きだ。嫌いじゃない」

「やっぱり喧嘩が…？」

好きならば会うべきだ。彼をそうさせないのは、旅立つ前の出来事が絡んでいる。

「憧れだったんだよ……騎士団が」

「憧れ？」

「そう……」

小さい頃、ある日に魔物の大群が村に襲い掛かろうとしたらしい。恐らく大戦の影響だと思う。

当時、村に滞在していたサーサリーの騎士団員達が、その魔物を追い払ったという。

何故騎士団達がいたのか、ムーンの推理では、大戦に赴く戦士を捜していたのでは、と言う。

少人数にも関わらず、たくさんの魔物達と対面した彼らの姿は勇ましく、レイにはとても印象的な光景だという。

「おれも、いつか村を守れる強い男になりたいって思ったんだ。騎士団は、おれにとって目標だった」

それが、今のレイに成っている、と言っても過言ではない。

だが…

「おれは親父に言ったんだ。騎士団に入りたい、って」

「そしたら……？」

「お前ぇは道具を作るのが上手い以外に取り柄がないんだ、だからそんな夢見るんじゃない、って、言われちゃった…」

道具作りは、小さい時はおもちゃ代わりに遊ぶようなものだったん

だ。レイは己の技量の高さを誇らしげに語った。

「だからさ、もっともっと良い物を作れるように練習したし、村に魔物や盗賊が襲い掛かってきた時には、自慢の武器とか罠で、退治したんだ。親父に認めてもらいたくて……」

目標に向かって努力したり、頑張ったり…。

わたしは、自分が努力をたくさんしたかは、周りから見られなければわからないけど……レイは純粋に夢を追い掛けていたんだ、わたしはそれに共感を持った。

「でも親父は、おれに仕事を継がせるって言って……」

初めてレイの父を見た時、頑固そうな人だとは思った。だから、やはり衝突してしまったのか…。

レイの口から続き語りを待つ。

「そりゃあ、さ、牛達の世話とか、栽培とか嫌いじゃないぞ。でも、おれだって、やりたい事見つけたんだ。それが出来るかはわからないけど……やってみたっていいじゃないか。親父は聞いてくれなくてさ……」

「……」

「思いっきり、殴られて。だからおれも殴り返して。やばい、って思ったけど、また殴ってきたから、おれも仕返しした」

互いの思いがぶつかり合う光景が浮かぶ。具現化した結果、激しく争う図となる。

だけど、目に見えるものよりも、互いの気持ちの衝突が一番凄まじいものだったのでは、とわたしは思った。

逆に、羨ましいって思った。わたしは、そんな殴り合いの喧嘩なん

て、母さんとした事なかったから。
女のくせに野蛮だな、って思われても、気持ちをぶつける相手がいるんだもの。いいな、って思った。

「そんなにやりたきゃ出て行けって、親父に怒鳴られた時は、もう頭にきて、おれも二度と帰らねぇ、って叫んで……家を出たんだ」
「何故…近いサーサリーではなく、海を渡ってサンポリアを選んだのですか?」

確かに。マリアの素朴な疑問を聞いて、わたしも気になった。
船に乗るのもタダじゃないんだから、サーサリー騎士団でも良かったのでは?

「時々、親父達はサーサリー王国に行って城下町で買い物したりするんだ。そんな時、もしサーサリー騎士団に入団出来た、と仮定して考えて、偶然会ったらって思って…」

顔を合わせてしまった時に気まずい事を考え、あえて遠い地に、でも近い所へ。
レイがサンポリアを選んだ理由はそれだった。

「正直、こんなおれでも入団出来たのはビックリしたぜ…。落ちた後の事ばっか考えていたから……」
「落ちた後はどうするつもりだったのよ?」

わたしは問いた。

「落ちた後っていうか……親父達にどう謝ろうか、って考えてた。今でも、その言葉が思い付かないんだよ……」
「……」

「それに、入団が決まったから、今更引き返せないし。だったらちゃんと、この大陸にも名が馳せるよう有名になってから、って思ったけど……」

こういう形でベゴ村に寄ってしまった。今に至るワケである。
レイが最後まで、港がある王国へ向かう事を拒絶した理由。
過ぎた事は仕方がない。これから彼が、何をすれば良いのか、それを考えなくてならないのだが…。

「…」

どうすれば良いのだろうか。わたしにはその発想がない…。
母さんと喧嘩した事なんて、些細な事以外、レイみたいにした事ないから、具体的な方法がわからなかった。
すると

「私が親ならば」

ムーンが口を開いた。わたし達は彼の話に耳を傾けた。

「正直…騎士団のみならず、我が子を危ない場所には置きたくはない」
「…」
「騎士団は、常に死と隣り合わせにある…お前の父は、それを気にしてお前の意見を受け入れなかったに違いない」

だが、とムーンの話が続く。

「我が子の思いがどれほどのものだったのか、あまり聞かなかったのかもしれない。お前の口から」

「！……」

「ただ『騎士団に入りたい』だけでは、両親も考えを変えられなかったはずだ」

互いの思いのすれ違い……それは、裏を返せば互いを思い合っている。

裏側にあるから、互いに知らなかった。だから衝突してしまった。

「お前の気持ちの伝え方に誤りがあって、こうなってしまった、という事だろう。お前だけじゃなく、お前の父も……気持ちを伝えるのが得意ではなさそうだ、と私は思う……」

「……」

レイは考え込んでしまう。あるいは振り返っているのだと思う。

喧嘩の原因。何故、おれは親父と喧嘩しちまったのか。

「だから、レイニー」

ムーンは彼の目を見据えて、

「今のお前の気持ちを、ちゃんと両親に伝えるんだ。一つ残さず、思いの全てを。親は、我が子の強い意志を知れば、拒絶したりはしない。むしろ、頑張る姿を応援したくなるものだ…」

「おっちゃん…」

レイはムーンのその言葉に、表情を和らげた。何かを見つけ、安心したそれに。

「きっと、わかってくれるはずだ」

レイだけじゃない。わたしだって、彼の話にはとても感心を持てた。マリアも、彼の語りに思わず感激しているようだ。嬉しそうだ、良き話を聞いて。

「……わかった。おれ、明日、親父達に謝るよ」

レイがそう決断し、ひとまず解決策を得たわたし達。

＊＊＊＊＊

その後、ムーンがサニーさんに事実説明の為に、一度宿を出た。わたし達はその彼が帰ってくるのを待っている。
今夜はこの宿で、わたし達は過ごす事にしたのだ。

「おれんちに泊まれば良かったのに…」
「じゃあレイは一人で寝るつもりだったの？」
「ち、違ぇし…」
「うふふ……」

ベッドでうつ伏せになっているレイが、わたしにそう言ってきた。風呂からここに戻ってきたばかりのわたしは、タオルで髪を拭きながら答えた。マリアは笑うし。

「マリア、まだ使う人いないって女将さん言ってたから、入った方がいいよ。あ、タオルとかも貸してくれるって」
「わかりました、お言葉に甘えますね」
「行ってらっしゃーい」

着替えを持ち、マリアが部屋を出た。
……部屋には二人残った。

「ちゃんと考えた？」
「何を？」

自分の寝るベッドに腰掛け、うつ伏せたままのレイに声をかけた。

「言いたい事」
「…大丈夫だから」
「そう…」

まだ、頭の中で作っているのだろう。謝る時、気持ちを打ち明ける時、どんな単語と文法を使っていけばいいのだろうか、と。
……静けさ。会話が途切れ、何か言った方がいいのだろうか、と考えた。

「……ぐぅ…」

寝てるし。考える時間の無駄だった。
まぁ…今のレイを見てると、明日はきっと、大丈夫だろう。そう思えた。
タオルを頭に被せたまま、ベッドに倒れた。しばらくしたら、ドアが開く音がした。

「マリア？」
「私だ」
「あ、ムーン」

おかえり、と言いながらわたしは身体を起こし、座る状態になる。

ドアを閉め、テーブルへと向かうムーンの姿を確認。

「サニーさん……何て言ってた？」
「快く受け入れてくれた。逆に頼まれてしまったものだ」
「そうなの？」
「今、息子の側にいる事が出来るのはあんた達だけだから、と言われてな…」
「そう……」

彼の心に少しでも支えがあれば、というムーンの思いは、現在わたし達がここにいる理由だ。サニーさんも、察しているのかもしれない、レイの事を。

「マリアがお風呂に入ってるから…って、入らないか」
「誰も来ないなら構わないが」

彼女が出たら入れば、と言おうとしたが、昨夜の彼の姿を思い出し、後半の言葉が変わってしまった。
ムーンは気にしてなさそうだ。こう返事をしてくれたから。

「……こいつには緊張感がないのか…？」
「今に始まった事じゃないわよ…」

既に眠っているレイを見て、呆れるムーン。彼の言葉に、わたしも苦笑いしてしまう。

「それもそうだな……」

マリアが部屋に戻ってくるまで、わたし達は起きて待っていた。
明日にレイとレイの家族が、昔のように仲良くなってくれれば、と

祈る。
しかし、わたし達はまだ知らない。明日の非日常を。

＊＊＊＊＊

第四十六章

―――――――――
ベゴ村の朝と
大騒動と
―――――――――

朝が訪れた。何をきっかけに起きたのかというと

「う～……」

呻き声が聞こえたからだ。相当悩んでいる声。レイニーだ。今日は我が家に戻り、両親に謝罪をしなければならないから。
故に武具すら身につけず、椅子に座ってテーブルに突っ伏していた。
ムーンとマリアンヌを見ていると、まだベッドの布団の中……眠っているのだ。
レイは誰よりも早く起きたのだ。

「…どうしたの」
「やっぱり…行くの怖い」

怖いって……まぁ、確かにそう思っても仕方ないか。親が自分の意志を受け入れてくれるのか否か……それに恐怖するのは。

「まだ今朝は早いし、ゆっくり考えた方がいいよ」

「…そうする……」

と言葉は返ってくるが、まだ突っ伏している。そっとしておいた方がいいかな…とわたしは彼を気遣った。のに

「…ぐぅ……」

「寝るなバカ！！」

「うわっ！？」

そっとしといちゃダメだ。こいつには事の重大さを理解する力はないのだろうか。

思わずラルク団長みたいな怒声で起こしてしまったが…。

「ん……」

「おはようございます……皆様…」

関係のない二人まで起こしてしまった。あ～…ごめんなさい、と内心で謝ったわたし。

「おはよ」

起きてくれたのだから、わたしは二人に挨拶をした。

＊＊＊＊＊

メンバーが全員起きたので、朝食。と思ったが

「教会に？」

「はい」

マリアがどうしても礼拝に行きたい、と言い出した。旅の途中とはいえ、やはり教団員故にお祈りがしたいらしい…。

「レイニーがあの調子だからな……家に行くのに時間がかかるかもしれない。行くならば今の内だ」

「すみません…ありがとうございます」

既に身支度を終えていたマリア。ムーンと、わたし達に頭をさげ、部屋を出て行った。

「レイ、ご飯は？」

「後でぇ……」

「……」

じゃあ残りのメンバーで…と思ったが、レイは依然変わらず。ムーンと顔を見合わせ、互いに呆れた表情になった。

「ムーン、わたし達でサニーさんの元に行かない？」

何故、という目で見られ、わたしはレイの背中を親指で指差した。レイ、あんなだし、サニーさんに伝えた方がいいかな、と付け足して。

＊＊＊＊＊

やはり農村は朝が早い。既に起きている村人を何人か見かけた。

畑に水をまいたり、動物らに餌を与えたり。

「やっぱり穏やかだよね、この村」

「ああ…」

呟くように話しかければ、ムーンは相づちを打ってくれる。

わたし達は、バルナ家へと歩く。右隣にはムーンがいる。ちゃんと前を見て歩く彼。

「…ムーン」

「？」

「親ってさ、子供の身を誰よりも考えるんだよね」

「…ああ」

昨夜のムーンの話を思い出し、ふと疑問が現れた。

母さんは、わたしに対し、父と兄に会いなさい、と言った。それが今、このように騎士団になったという結果がある。

「母さんに言われた言葉をね、もしかしたらわたし、解釈し間違えたんじゃないかって思うのよ」

母さんの言葉と、わたしがここにいる理由をムーンに話し、わたしは疑問を口にする。

「母さんは、わたしを騎士団みたいな所には入れたくなかったのかな、って…」

父と兄のようになりたくて、また、出会うために、入団に挑んだ。

これは母が望んだ事なのだろうか。

「…お前の母は、お前に夢を託したのではないのか？」
「！」
「もう家族には会えない…ならばせめて、我が子だけでも、家族に会わせたい。ただそれだけを願った」
「それだけ……」
「我が子がどんな道を行くのかはわからないが、お前の事を信じているから。それだけを言ったはずだ」
「うん…他には何も言われなかった」

わたしを信じているから、わたしがどこへ行こうとも大丈夫、と母は思っている、というのだろうか。今となっては、確かめられない事…。
推測としてムーンが語ってくれたが、やはり彼の言葉には信頼が出来る。
まるで、親の代表、みたいに。彼の言葉には深い深い想いがある。

「母親の言葉を守り、夢を成し遂げる事が出来るなら、お前の母は何もいらないはずだ」
「そっか…」

嬉しい。確かな言葉じゃないけれど。そう思えるから、嬉しいのだ。
思わず口元が緩み、笑顔になる。わたしは母に信頼されているのだ、と。

「ありがとう、ムーン」

そして、そう思わせてくれた隣の彼に、お礼を言った。彼はただ、黙って頷いてくれた。それが返事だ。
歩きながら会話をすれば、そろそろバルナ家が見えてきた。時に

「キャ――――――――――！！！！！」
「！？」

悲鳴。女性の悲鳴だ。丁度方向は前方のレイの家からだ。

「ムーン」
「ああ」

わたし達は歩みから走りに切り換えた。夢中になって駆ける。すぐに家の前にたどり着き、玄関のドアノブに手をかけたら

「いやぁあああっ！！」
「裏…！？」

声は家の中からではなかった。
外からのものだった。家の裏側に回る。柵がある、という事は牧場に、声の主がいる。
玄関から丁度裏側。柵をジャンプで超え、着地をする。そして草原を見渡した。

「！？」
「きゃああっ！！」

牧場には、見た事のない……魔物が。三匹。
人型の魔物……でも見たことのある動物のような魔物。

（まさか……牛、馬、羊…！？）

牧場で見かけるであろう動物達に酷似した人型魔物だ。背丈は共に同じだが、明らか大きいのはわかる。

「女房を離せぇ！！」
「！」

男性…レイのお父さんだ！　比べれば一目瞭然、お父さんより二倍程の大きさだ、あの魔物らは。
レイの父は片手に何か振り回している……ムチだ。

「あんたは逃げてぇ！！」

牛の魔物は、女性……サニーさんを片手で捕らえていた。腕をぶんぶんと振るう度に、サニーさんは振り回されている。
お父さんはサニーさんを助けようとしている。急がなきゃ！
わたしは駆け出した。

「おらっ！　手を、離せぇ！！」

バチンバチンと音を鳴らす父親。その姿は息子によく似る。あのムチとレイのムチ……動物達を操るものだったのか、と知る。
だが、三匹の獣戦士は雄叫びをあげ、言う事を聞かない。

「主人の言う事が聞けねぇのか！？」

本来は音を鳴らして動物達を誘導する物。だが、レイの父はイライラを頂点に達し、牛の腕に当ててしまう。
すると

ウウウヴ…

雄叫びをやめ、主人を見下ろす牛の化け物。うなり声、鋭い獣の目。

やばい…早く助けなきゃ！　足を速さをさらに強くした。あともう少し。あともう少し！

ヴオオオ――――――！！！

「！？」

大きな鳴き声からは怒りが表れている。具合を悪くしていても威勢があった父親も、これには驚き戸惑う。

牛の声に、馬、羊も真似るように声をあげる。

牛は、サニーさんを持つ手とは逆の手で拳を作る。それを大きく振り上げ、お父さんに向けて振り下ろそうとしていた。

まずい、まずい！　あともう少し！

「お父さん！！」

「！？」

父親を巻き込むように、わたしは彼に突進しながら、拳から逃れた。ズンッという地面を殴る音を背後に感じ、ごろごろと芝生の上を転がった。

やっと止まり、わたしはすぐに立ち上がる。お父さんはまだ横たわったまま、わたしを睨むように見上げていた。

「お前ぇ…何しに来た…！？」

まだ警戒心を露わにする彼。のろのろと立ち上がるのと同時に、三獣戦士がこちらを向く。

距離はあるが、奴らの速さを想像すると、すぐに縮められるであろう。

「レイのお父さんですよね？　わたしがサニーさんを助けます。下がっていて下さい」
「お…俺は助けを呼んだ覚えはねぇ！！」
「魔技『紅蓮』！！」

と相手の向こう側から声が聞こえ、魔物らもそちらを向いた。
そうだ、無我夢中に走ってしまい、ムーンを置き去りにしてしまった。長剣に火を纏う彼の姿を確認した。後で謝らないと。

「お前ぇら、俺の邪魔すんな！　助けなんざいらない！！」
「ほっとけるワケないでしょ！？」

この頑固親父に向かって、負けじと大声で返した。それにビクリと驚くレイの父。

「あなた達はレイの大事な家族なんだから！！」
「！……」

お、大人しくなった。言葉が返ってこない。いいから下がって、と普通に言ったら、言う通りにしてくれた。

「よし……」

まずは、サニーさんを助けなくちゃ。右手左手に剣を持ち、わたしは構えた。
三獣戦士は今、ムーンに注目を集めている。隙を見つけ、サニーさんを奪還しよう。

「あ…あんた達！　こいつらを傷つけないでおくれ！！」

と、不意にサニーさんが悲願してきた。どうして?、とムーンもわたしも彼女を見る。

「こいつらはあたしらの大事な牛達なんだよ!!　傷つけないでおくれ!!」

「えっ!?」

この魔物らが、バルナ家の?
明らかに魔物だし、サニーさんが大変な目にあっている…どうすればいいの?

「とにかく、その剣をしまえ!!　1つでも傷をつけたら、お前ぇらを殺してやるからなっ!!」

「ちょ…ちょっと待って下さい!　なんでこんな魔物みたいに…」

背後から父の脅しを聞き、わたしは戸惑う。後ろをチラ見しながら、わたしは彼に問いかけた。

「それが……変な黒マントの奴が、あいつらに変な事をしやがったんだ!!　とにかく斬らずに女房を助けろ!!!」

変な黒マント?　わたし達が来る前に何かあったというのか。
その事情は後で聞きだい。まずは、サニーさんを助ける事が最優先だ。
この三獣戦士らを、どうやって大人しくさせるのか…考えなきゃ。

第四十七章

―――――――――
死闘。三獣戦士
―――――――――

とりあえず、傷は付けるな、と言われている。剣を鞘に収め、収めたままの状態で再度構えた。
これなら刃で傷付く事はないが、打撲はどうしようもない。サニーさんと親父さんは許してくれるだろうか。

「ムーン聞いたぁ!?　その剣をどうにかして!!」
「……」

ムーンも渋々、魔技を解き、剣を鞘に収めた。…って、それじゃあ素手になるじゃない、ムーン。

「あ、あんた達…無理はしないで!」

サニーさんが必死な声でわたし達に呼び掛けるが、そんなのわたしは聞き入れない。彼もそうに違いない。

「アル!」
「っ?」
「援護を頼む」

「…わかった！」

ムーンがこちら側に声をかけた事により、動物らはまたこちらを見てきた。
援護、と言うからには、何か魔法を駆使するのか。だが、相手は三体。彼は何か秘策を持っているのか？

ヴアアアア〝――――――――！！！

と考えていたら、もはや原型が留まらない鳴き声をあげ、羊の獣戦士が向かってきた。まるで巨人だ。立派な角に、凶暴とは反して見えるモコモコな毛。
凶器なる角をこちらに向けながら来たので、まずは右に避けた。単純な突進だから容易い。
相手が、避けられた事に気が付いて脚が止まる。振り向いた瞬間には、わたしは奴の身体めがけて両の剣を振り下ろしたが

「なっ！？」

モコモコの毛が衝撃を吸収する。手応えがない。もちろん、敵も痛がる様子がない。
こいつは厄介だ。

グウヴ…

もう来ないのか、と嘲笑うかのように、鋭い魔物の目つきで睨まれた。来る、と思った瞬間、わたしはバックステップ。
同時に羊獣戦士は自慢の角で攻撃してきた。
これは…剣で受け止めたら危ない。相手の力は、さっきの牛獣戦士の拳を見て知れた。防御しても助からないと思う。

「うわっ！　わっ！　ひぃっ！」

角を振り回すように迫ってくる。どんどん後退するわたし。
隙を見つけなきゃ。わたしは下がりながら相手のテンポを伺う。同じ技の繰り返しは、いずれは種明かしを繰り返す事になる。

（わかった）

角を突き出した後のわずかな隙。わたしは剣を交差し、防御体制。
そして

「えいっ！」

攻撃を受けてすぐに受け流し。ながら奴の隣に位置した。攻撃に耐え続けたらやられていたが、すぐに流せば軽減出来た。

「これならっ…！」

そして、また同じ間違いをしないように

「えいやっ！！」

グゥッ…！！

振って叩くのではなく、先端で突き刺すように打撃を与える。
それにこいつの綿は、手首足首に近付く程、薄くなっていたので、尚更ヒットポイントとなる箇所だった。
これには効き目があったらしい。苦しげな声を出した羊獣戦士。その場でうずくまり、痛がっている。

何故だろう…人間に近いのは人型だけではなく思えてきた。

「アル！」
「えっ？」

焦ったムーンの声で呼ばれ、振り返ると

「きゃあっ！！」

馬獣戦士が猛スピードで向かってきて、両の手の蹄を振り下ろしてきた。
わたしは横っ飛びで避けるも、受け身がとれずに草原を転がり、そして止まる。
立ち上がりながら、先程いた立ち位置を見ると、蹄の跡がくっきりと、地面に残っている。
あれは……受けたら死ぬってば。

「アル」
「ムーン……」
「すまない…お前だけ戦わせてしまって」

羊獣戦士と馬獣戦士との距離は近く、また、わたしの元にムーンが来てくれた。
互いに対立するような位置。
痛みから解放された羊、こちらを睨み今にも駆け出しそうな馬。
あれ？　そういえば牛獣戦士は？

「お前が戦って大体わかった」
「何が？」
「あの三体の中で司令塔となっているのは、牛のようだ」

ムーンにそう言われ、牛獣戦士の姿を探す。
まだあの遠い位置にいる。攻撃した後の場所からは動いていない。
サニーさんを捕らえたまま。だが、こちらを観察しているかのようだ。

「牛の方が知力がありそうだ…一斉に突進させるのではなく、一体ずつお前に仕向けた」
「それって…」
「出方を探っていたんだ」

わたし達が何もして来ないから、と解釈し、一声鳴いて来ようとしてきた二匹。
だが、牛獣戦士がそれを呼び止めるかのように大声を出す。
そちらを見、大人しくなる二匹……まるで人間のやりとりだ。

「まずはあの二体の動きを封じる。このままサニーさんを助けようとすれば、部下が黙ってはいないだろう」
「わかった…」
「先程、援護を頼む、と言ったが……もう一度、奴らを引き付けられるか？」

さっきの『援護』は、出方を見る為だった、という事か。
ムーンから助言が得られたのなら、構わない。わたしは了承した。
彼を、信頼しているから。

ヴオオアアア――――――――――――――！！！！！

牛が雄叫び、馬も羊もそれに習う。牧場に響き渡る魔物の声。
こんな朝っぱから騒がれたら、絶対誰か駆けつけてくる。周りに被

害が出る前に解決しなくては。

「アル、気を付けろ」
「ムーンもね」

お互いにエールを送る。
前方、馬獣戦士が先にこちらに向かってきた。わたしが前に出て、戦う相手である事を敵に示した。

「こっちよ！！」

ムーンに頼まれたのだ。上手く引き付けなければならない。
相手は立ち止まり、駆ける事によりムーンから離れるわたしを見、追いかけてきた。
見た目も強そうな筋肉質、馬を人型にするとアンバランスだが、魔物として見れるから。
ムーンに大技をさせる為に離れたが

ヴォォアアア――――――！！！！

「！？」

あれ！？　羊獣戦士！？
牛の一声で、羊はムーンに向かって駆け出した。
思わず立ち止まってしまうが、馬の気配が急接近。再度駆け出すしかなく。
遠くへ走りながら、ムーンの様子を見る。
やっと長剣を構えた。鞘に入れたままだが。
詠唱しながら防御をするとなると、時間がかかるのは目に見えている。ならば

（わたしはわたしの仕事をしなければ）

ムーンに二体相手させるよりはまだいい。わたしはこいつを引き付けなければ。

わたしは前を向き、加速。あまり後ろの敵と差が広がらない。だが、少しだけならいい。

わたしは後ろに振り向く。同時に足が止まり、余勢で芝生の上を滑っていく。

馬獣戦士が飛びかかってきたが、すぐにサイドステップ。ズンッ、という鈍い音。先程いた位置には、馬の両手の蹄。見てわかるように、地面に少し埋め込んでる。相当な力だ、と再認識。

攻撃が外れ、苛立ちを見せる馬獣戦士。こちらを睨む魔物の目。

「あんた、馬のくせに遅いのね…」

と、通じるかわからないが挑発。己に優越感を与える事で自信を持つ。端から見れば驕っているかのようだ。

それを理解する知力があったのか

グァアァァ――――――――――!!!!!

馬が激怒。キレた。それを露わにまた突っ込んできた。さっきよりも速い!?

そう気付き、間一髪で避けるが、受け身が上手くいかずに身体が転がった。

すぐに立ち上がるが、また突進してきた。両の手の剣では防御なんて難しい。羊獣戦士にやった受け流す防御技ならば可能だろうが

「ひゃっ…！」

速過ぎる。無理だ。見極める時間が欲しい。でもそんな暇も与えてくれない。
さっきから単純な突進攻撃しかしてこない。こんなに何回も攻められたら、いくらわたしでもスタミナが持たない。

「うわっ！」

避けるので精一杯になった。
息も切れ切れ。すると、突然相手は攻撃をやめる。わたしとの距離はあり。相手の脚力ならばジャンプ一回でこちらに来れるくらい離れている。
一体何する気？　馬獣戦士が嘲笑っているように見えた。疲れてそう見えるだけか。
否

ガアアアッッ！！！

、嘲笑は嘘ではなかった。

「なっ…！？」

今度は突進ではなく、飛びかかる攻撃に出た。もちろん、両蹄によるのしかかり込み。
走るよりこちらに到達するのが速い気がする。そう思えるのは判断力が鈍ってしまっている故に。
今度はバックステップで避けた。案の定、わたしのいた位置は、立ち尽くしてはならなかった場所と化する。

（そういう事ね…）

馬にも必要最低限の『頭』がある、という事だ。人間よりスタミナがある動物達だっている。疲れさせた後に、攻撃をする、それをもし狙っているならば、やはり今まで出会った魔物の中で質が悪い。

「もう…！！」

苛立ち、次々と攻める蹄の攻撃を避ける。ただ避ける。今のわたしにはそれしか手段がない。

何か正しい防御または回避を、あるいは初心者でも出来る防御魔法とか覚えておけば良かったかも…。

やばい、もうつらい。どうすればいい。もう身体中が痛い。

その時に

ヴォォガァァァ――――――――――――！！！

「！？…」

馬獣戦士のものではない別の雄叫びが聞こえ、気を引き締めた。

避けながらも、チラと声のした方を見る。と

（え！？）

すぐ目の前の事に視点を置き、先程の視界を思い出す。もちろん、サイドステップしながら。

（今のは…なんでこっち来るの！？）

もう一度確認したい。だが、再度見たとなると、以前より見えたものは大きくなっているであろう。イコール、それはこちらに近付い

ているのだ。

「ムーン！？」

彼と、彼を追う羊獣戦士。
それが段々と近付いてくるのだ、走る音と共に。
同じ攻撃を、同じように避けながら、わたしは彼に呼び掛けた。何故、の問いも兼ねて。

「『母なる』、『大地の恵みよ』」

そう走りながら締めを唱えてきたムーン。もしや、まとめて捕らえる為に？　息絶え絶えだ。

「『この地』、『に生まれた我』…『々に生きる力を』ぉ…！！」

丁度わたし達は対面している状態になった。こちらに向かってくるムーンと羊。
背後には馬。
ホータイの巻いていない右手の平を出すムーン。
わたしは

「ムーンっ！！」

とっさに行動に出た。
右斜め前にステップ。同時に攻撃。

「『グロウ』！！」

さらに真横にムーンが位置する。丁度彼は地面に右手をつけた。

ムーンの背後には、立派な角を振り上げようとする羊獣戦士。さらに彼の前方、ムーンをターゲットに変えた馬獣戦士が、武器を振り下ろそうとしてきた。

「ごめん！！」

彼に向かって、力の限り地面を蹴って低空ジャンプ。
その勢いで突進しながら、共に向こうへと芝生を転がった。彼と共に。
蹄が地面を当てた音が聞こえそして

ヴァァァァ――――――――！！！！
グオォォオ――――――――！！！！

魔物の悲鳴。
勢いが収まり、やがて止まるわたし達。
身体を起こすのに時間を要し、せめて目線だけでも、先程いた位置を見た。
ムーンが仕掛けた魔法が、二体の獣戦士を捕らえていた。
イバラのツタは無数。奴らの身体に絡み、身動きさせない。奴らが暴れても、自ら身体を傷付けるだけだ。それを、痛い思いを知って、渋々おとなしくなった。

「アル…早くサニーさんを…」
「わかった」

ムーンも集中力を途切れさせぬよう、防衛したのだ、持久力はわたしより切れているはず。
だが彼は立ち上がろうとする。わたしも、最後までやらなきゃ。
先に動いたムーンよりも早く立ち上がったわたし。

向かうはわたし達の戦いを見ていただろう牛獣戦士。サニーさんはまだ奴の手中に。

「サニーさん！」

サニーさんの顔からはまだ不安が残っている。
牛は、敵が向かっているのに何もしようとしない。余裕があるのか、馬が見せたような嘲笑が……もう疲れている云々ではない。奴らは笑えるのだ、人間のように。
その余裕の理由は

「！？」

サニーさんの、驚き、悲鳴をあげる時点で気付けば良かった。

「アルちゃんダメ！！」
「え……？」

わたしに何か伝えようとしている。指を差しながら。指先はわたしの後方を示す。
一体何が。振り向いた瞬間

（！！？）

捕らわれていたはずの羊獣戦士がもう接近していた。こんなに近いんじゃ避けきれない。
最悪の手段、受け流しを試みる。剣を前で交差したが

「きゃあああああぁっ！！！」

遅かった。不可能だった。その為、防御では受けきれなかった羊獣戦士の、角を振り上げる攻撃をくらう。
防御だけで身体が宙を舞う。無防備だったならば身体はどうなっていたのか……。

「うぐっ……」

地面に叩き付けられ、良かった、と最悪な展開にならなかった事に感謝。
しかし、衝撃があまりにもキツい。ふと見えた視界には、倒れた姿のムーンが。
側には、いるはずのない馬獣戦士。奴にやられたというの？

ウグウゥヴ……

羊獣戦士のうなり声。動けぬわたしを見下ろす眼光。
サニーさんの泣き出しそうな声に、レイのお父さんの困り果てる声が耳に入った。
なんとかこの状況を抜け出さないと。
わたしは、諦めたくなかった。

「一体どうやってあの魔法から抜け出せたのよ…？」

答えてくれたとしても、通じない言葉で返ってくるだろう。だがわたしは知りたい。どうしてあんたらが動けるのかを。
立ち上がり、武器を構える。身体はよろめくが、絶対負けたくない。
魔物に負ける事は、死ぬ事なのだから。

『わしらに魔法等は効かぬ』
「！？」

『そうさ。うちらは強いんだからな』
「な……何？」
喋った？　動物の魔物が？！
だが、口の動きと聞こえる言葉は合っている。こいつらは、喋るの！？
始めは羊が、次に若干遠距離の馬が喋った。
『オレサマ達は、時間が経てば経つほど、進化する。だから、キサマらにオレサマ達を倒す事は不可能だ』
背後の牛がそう語る。なんなのよこいつら。
こいつらはバルナ家の動物でしょ？
どうして魔物化して、しかも喋れるの！？
サニーさん達の言う黒マント……その存在はますます謎に深まる。
「へぇ……なら、倒しがいがあるわね」
『何を言うか。そんなボロボロの身体でわしらを倒せるとな？』
『面白いジョークだねぇ！　笑っちまうよ！！』
挑発はタダだ。奴らがどんな事を言おうが。
確かにボロボロだが、気持ちは負けてなんかいない。こんなもの、根性で切り抜ける。
「サニーさんを帰して！！」
超短期奪還を挑んだ。馬、羊は無視。
牛獣戦士の元へと駆ける。
『そんなにこのおばさんが大事か？』

牛がそう言った瞬間

「ああっ！！」

「！？」

奴はサニーさんの身体を投げ飛ばした。わたしの頭上辺りに。さらに

『そんなら殺してやるぜぇ！！』

「しまっ…！！」

背後では宙のサニーさん目掛けてジャンプした部下二体が。

あんな状況で助ける手段は……すぐに脳内から方法を探るが

（死なせはしない！！）

わたしに万が一の事があったって構わない。怖いけど、それしか助からない。奴らよりも先にサニーさんにたどり着こう、とジャンプしようとしたが

「！」

別の方角から、何か細いものが飛んできた。

それはサニーさんの身体に巻き付き、素早く引っ張られていく。

その軌跡を目で追う。無意味なジャンプとなってしまった二体は、着地。わたしと近い距離となるが、奴らもサニーさんの行方を追った。そこには

「！！　レイ…！！」

騎士団としての武具をちゃんと装備した同僚。
さっきの細いのは、彼の得意とするムチだった。やはり器用だ、レイ。
サニーさんを上手く受け止めきれなかったらしい、二人は立ち上がっている最中だった。

「アル様！　ムーン様！！」

柵の向こう側には、マリアがいた。あと、騒ぎを駆け付けてしまった村人達も大勢いた。いつの間にこんなに集まったの…？

『ふん…これで満足か？　後先を考えない愚かな人間よ』

牛獣戦士はわたしにそう言葉をかける。これならまともに戦えるようになるが

『そんな疲れ切った顔、オレサマ達を倒せるというのか？』

身体がまともなんかじゃなかった。
だが

「ええ。そのつもりよ」

仲間がやっと揃ったのだ。流れを変えようじゃないか、皆。

第四十八章

ギューバヨー再戦

「レイ……あんた」
「話は後！　今はこいつら片付けなくちゃいけないだろ!?　母さんは親父と下がってろ！」
「レイ！　その子らは元々あたし達の大事な牛達なんだよ！」
「!?」

親子の会話が聞こえる。構えていたレイニーを呼び止め、事情を話すサニーさん。案の定、レイは驚いていた。
マリアンヌが一生懸命に柵を越えようとしており、村人達がその手助けをする。身体を押し上げてもらい、飛び越えた。芝生にポスンと落ちた刹那

「『神よ、彼の者達に癒しの力を与えたまえ』！！」

マリアの高らかな声が響く。それはわたしとムーンに向けられた祈りであると知る。
身体の疲労、痛みが嘘のように消える。
瞬間

「ふんっ！！」
『ぐおぉ！』

ムーンがうつ伏せた状態から急に立ち上がり、わたしの側にいた馬と羊に向かって突進。油断していた二体は、牛の足元に転がっていった。
そんな荒技をした、という事は、ムーンも完全回復したんだ。

「ムーン、案外身軽ね」

親指を空に向けてグッドサインを彼に向ける。ムーンもサインで返事をしながら、こちらに歩み寄ってきた。

「アルテミス！　おっちゃん！」

レイがサニーさんを置いてこちらに駆け寄ってきた。

「悪ぃ…こんな騒ぎに気付けなくて……」

わたし達にそう謝罪をしてきた。わたしはそれに対して怒ってはいないし、むしろ来てくれて助かった。
レイにそれを伝えたら、安堵する表情。だが、すぐに真剣な面持ちに変わり、振り向いた。奴らのいる方向へ。

「あいつら……確かにおれ達の動物だ。なんであんなになっちまったんだ？」

小道具いっぱいの袋に手を突っ込む。何か対応出来る武器があるのか。

獣戦士達の背後、柵の向こう側には村人達。柵を越えているマリアは、レイの父と母を避難させようと走り出していた。

『おお…レイニーか、久しぶりだのう』
「しゃ…喋っ…！？」
『相変わらずそのムチ持ってんの？　前は痛かったけど、今じゃかゆいだけなんだろうなぁ！？　ふへははっ！』

羊獣戦士、馬獣戦士はレイを知っているようだ。こんな魔物になる前の記憶も持ち越されているのか、彼らは。

『これも皆、魔王様となられるお方が下さったお力だ』
「魔王…？！」
『おいおいリーダー、喋っちゃダメだって』

牛獣戦士の言葉から思いがけない単語が。馬が陽気な口調で制する。

『別によかろう。どうせわしらがこの村を支配するのだ。知らぬ者は一人もおらぬ』

羊のゆったりとした口調は、驚かす言葉を吐き出していた。支配？　こいつらは村の人間を殺すつもりなの？

『…それもそうだな』
『そうだ。オレサマ達は魔王様の右腕となるべく誕生したのだから』

羊の言葉に納得する馬。そして、牛の口からはまた『魔王』という単語。

『レイニー、オレサマを殺してみろ！　キサマらは情を持つ愚かな

人間だからな、殺せないだろ！？』
「レイ様！　この魔物達は、あの時のお母様のように邪気を感じ取れます！！」
マリアが突然、知らせる為に叫んだ。その声に先に反応したのは馬獣戦士。まだレイの家族がいるのに、マリア達目掛けてあの蹄の飛びかかり。
『部外者はあっち行ってろ！！』
「！！」
レイの両親が怖がるが、それを守るようにマリアは杖を前に構えた。
そして
「『ヘーパイストス』！！」
炎の神の名を高らかに口にした。馬は何か見えない壁に阻まれたかのように、身体が跳ね返る。そしてその勢いで転がり、仲間の元へ。
炎の防護壁だ。
「わたくしは…部外者ではない！！」
そのマリアの姿は、戦乙女ならぬ戦司祭だ。すぐに両親を柵の外側へと追い出そうと促す。外側の村人達はサニーさん達を引き込もうと必死だ。
これで気を散らす事なく戦える環境は整った。
後は条件を守り、勝たなければならないが…。
「ないのか？」
「何がっ？」

レイの問いに主語がなく、わたしも急いで問い返した。どこか動揺を隠せない様子だ。

「ユーピテルん時のおばさんみたいに、何か元凶になってるもの、壊せるもの！」

マリアの言葉から察したのだろう。呪われたヘスティアーさんの胸元の水晶玉を壊した事により、命も助かったのだから。

だが、彼ら三体からはそれらしいものが見当たらない。どこか隠されているのか？

『もうお喋りはよかろう。さっさと邪魔者を排除せねばな…』

羊獣戦士が呟く。それを合図に馬獣戦士が立ち上がり、すぐに駆け出した。わたし達に向かって。

「えい！！」

とレイはすぐさま、袋に突っ込んでいた手を出す。手には丸い物。それを地面に叩き付ければ、白い煙が辺りに広まる。煙幕だ。

だが、馬は勢い余り突っ込むであろう。わたし達は散り散りになる。煙の中、さっきいた位置から離れながら、二人を捜すが見当たらず。とりあえず煙から出ようと走る。

視界が開けた時だ。

『そこか！！』

「！？」

待ち伏せていたようで、牛獣戦士が飛びかかってきた。

わたしは横っ跳びをし、攻撃をかわす。煙がやっと晴れ、わたしは仲間と奴らの安否を確認。

「皆様…先程から探っているのですが……」

マリアの声。ムーンは鞘に収めた長剣で、馬獣戦士ののしかかりに耐えていた。見た限り、力量は五分五分。

「元凶となるものが、体内にあるのです」

マリアの声。レイは羊獣戦士の角にムチを縛り引っ張っている。羊獣戦士もそれを離したく引っ張っており、若干力はレイが劣る。

「体外にはありません！　身体の内から追い出すか取り出すかしなければ……！！」

「な、んだよそれは！？　っうわっ！！」

『よそ見は命取りとなるぞ、レイニー』

レイがマリアの言葉を受け入れたくないように叫ぶ。その油断している彼を引っ張り、ムチを取った。

『うちらを倒すには殺すしかないんだよ！　それが戦いってものだろ！？』

「くっ…」

馬獣戦士はムーンを押し潰そうと体重をかける。ムーンは抵抗するも、力不足。相手の攻撃範囲から転がるように抜け出し、距離をとり立ち上がる。

『勝者には生を、敗者には死を。それが魔王様となられるお方の掟

だ！！』
「！！」

気をとられ、牛獣戦士が接近してきた事に気付くのが遅れる。
思わず鞘から両手剣を取り出し、受け流す防御。ぶつかった一瞬、剣の音が響く。すぐに耐えず、奴から離れる。
走り、止まり、振り向けば、丁度奴もこちらを見ていた。

『小娘…オレサマから逃げるのか？』
「…誰が…」
『ならば刃を交えようではないか！！』

周りも気になるが、自分の戦いに集中しないと、殺やれる。とにかくわたしは奴に勝る力はない。剣をしまい、避ける事に専念。

「弱者が！　武器がなければオレサマを倒す事など不可能だ！！」

単純な拳の攻撃だが、それが怖い。後退しながら避けるわたし、前進しつつ攻撃、迫る牛。わたしの代わりに殴られた芝生に、痛々しい跡が残る。
視界に、他二人の戦いがわずかに見れる。馬獣戦士と渡り合うムーン。時々反撃しながら、相手の隙を探しているのか。

『どこを見ている！？』
「わっ…！」

集中が途切れ、避けるのが遅れる。意識を相手に切り替える。
また見えるは、レイの戦い。ムチを使いながらの防御、または小道具。あまり傷を負わせない小爆弾や煙玉等で対応するが、魔物には意味がない。

（どうすりゃいいのよ!?）

殺さずに終わらせる方法なんて、あるのだろうか。
元凶が身体の中じゃあ……病気を治したり呪いを解いたりしない限りは意味ないじゃない。
ん？　呪い？　病気…？
そういうのはマリアが

「マリアンヌ!!　ヘリオスは知っているか!?」
「え？」

…あと、ムーンがいた。その分野に詳しいだろう、わたしが言わなくても事が進む。
ムーンは彼女に問い掛けながら馬を突き飛ばす。

「ヘリオスって何だよおっちゃん!?」

レイは羊に向かって閃光玉を投げつける。視界を潰された相手はその場で暴れまわる。
わたしも知りたい。わたしは両手に一本ずつ剣を持つ、鞘に収めたまま。足に力を入れ、高くジャンプ。両手を揃えて振り上げ、牛の頭に叩き付けた。
その衝撃でふらつき倒れた牛獣戦士。これで話せる時間はある。

「太陽神ヘリオスだ。マリア、わかるか？」
「太陽神ヘリオス……」

立ち尽くすマリアを見、理解を願うムーン。太陽神ヘリオス。僧侶ならば何か知っているのだろうか。すると

「そういう事ですか……わかりました！！」

神の名前だけで何かを理解したらしい。暗号みたいに。そして杖の逆先端：装飾のない方を地面に突き刺した。

「この広さだと時間がかかりますが…よろしいですか！？」

「構わない！！　こちらで持ちこたえる！！」

「お願いします！！」

「？？？」

話が読めない。早く教えてほしいが

『太陽神ヘリオスだと…？』

奴らが立ち上がった。ムーンとマリアの言葉に反応していた、しかも、嫌悪感を露わにして。

『そんな事させはせぬぞ…』

『ああ、ぜってぇ殺してやるぜぇ！！！』

三獣戦士が走り出す。しかも、マリアに向かって。わたしは近くの牛を止めようとしたが、強行突破される。

ムーンも飛び乗ろうとしたが間に合わず。するとレイは

「おい待てよ！！」

と羊の角にムチを飛ばし、縛った。それに気付き、急に止まる羊。その勢いに乗り、レイの身体が引っ張られた。が、

『ぬ…！』

それが彼の狙いだった。
引っ張られた身体は器用に宙に弧を描きながら、そして、奴らが彼女に到達する前に、着地。器用過ぎるレイ……アクロバティックな動きはあまり見た事なかったから、格好良く見えてしまう。

「れ…レイ様…」
「大丈夫」

と、レイは袋から灰色の小さな玉をいくつも取り出した。それを見た三獣戦士。一瞬、恐怖に驚いたような気がした。

「お前ら、さすがにこれには立ち向かえないだろ？」

見せつけるように言う。
指と指の間に挟まれた灰色ボール、計４つ。見た事ないが…それは何？

『な…なんだ？　それは』
『リーダー…なんかそれ、いやぁな思い出がめちゃくちゃうちにはあるんだけどなぁ……』
『……わしもだ』

魔物になる前の記憶を持ち越されているならば、彼らもその内気付くはず。だが、やっぱり恐れている。本当にそれは何なの？

「そりゃあな、ムチで言う事聞かなかった時の最終手段だから。…
…親父には散々怒られたけど」

レイのいやぁな笑み。そして、奴らの足元に向かって一つ投げつけた。すると

『ひっ！？』

地面に叩き付けられたらのと同時に、パンッという乾いた短音が響く。耳にあまりよくない音量
それにビックリする三獣戦士。

「ほら！！　あっちに戻れ！！」

と、残りのボールを投げつけ始める。複数の音が重なり、やかましい。
それに驚き、レイとマリアから立ち去る三獣戦士。ムチで言う事聞かない時、となると、やはり牧場の動物達を誘導する為の道具、って事か。
確かにこの音は効果絶大だが、周りに迷惑だし耳に良くない。
と推理してる間に、奴らがこちらに戻ってくる事になった。

『ちくしょう…何故か思い出すと虫酸が走るぜ…』

元動物なのだ、無理もない。この時だけは同情出来た。
マリアに危険がなくなり、すると彼女は

「『太陽神ヘリオスよ。ここに悪を浄化する力を」

と、礼拝のように祈りを口にし始めた。杖は光輝き、突き刺した地面から、ゆっくりと光の線が独りでに芝生を走る。

「魔法陣が出来るまで、マリアを援護してほしい。出来るだけ攻撃

を受けないよう気を付けろ。回復手段は今は私だけで、下手したら間に合わなくなる…」

「そういう事ね」

「ＯＫ、やってやるぜ！」

なるほど、ここに広い魔法陣を描いて、範囲内にいるこいつらの邪気とやらを排除するって事か。それならば勝てる！

『殺してやる！！』

『許さぬぞ人間…』

『ええい…生意気な人間共め！！』

１対１の戦い。馬はムーンに、羊はレイに、牛はわたしに向かって駆け出した。

今は時間稼ぎ及びマリアを死守する事。失敗は許されない。今、マリアに近いのはレイと羊獣戦士だ。

『小娘、オレサマの拳で潰れろ！！』

「！」

またこいつが相手か…出来るだけ足止めさせなくては。

鞘に収まっている両手剣。また奴の身体のどこかに打撃を与え、少しでも時間を稼ごう。

『くらえぇ！！』

拳を振り上げ、わたしに向かって叩き落とす。

もちろん、横っ飛びはバックステップで避けて応戦する。

さっきの羊みたいに、隙を探すわたし。避けながら観察、横や背後に周りながら観察。

『ちょこまかとぉ！！』

奴の怒りが、外して拳が芝生に当たる威力でわかってしまう。奴は正面にしか攻撃していない。ならば

『待てぇ！！』

奴の真横に逃げれば、身体を回転するように横に振る拳。そんな攻撃法は知らなかったが、背をかがめながら来たわたしには当たらずそして

「えいやぁ！！！」
『！？』

両剣揃え、先端で片足に突き刺す、というか突き叩く。筋肉の少ない足首に近い箇所を。
これはさっき羊に対して試みた攻撃。牛にも効いたらしい、その場で痛みにうずくまる。
さらに追撃、ジャンプし、奴の後頭部に剣を振る打撃。
油断の痛みで立ち直っていない牛はバランスを崩し、倒れる。とりあえず足止め成功。
ふと周囲を見ると、光の線は、やっと一つの円を牧場に記していた。

「レイが…」

ムーンは馬と互角に戦っているが、レイは押されている。こいつが立ち上がる前に、そちらに向かって駆け出した。
レイは、まだ残っている爆音ボールで対抗中。
しかし、見てみると羊にはもう効いていない。慣れてしまったのか。

『もう年長の耳には届かん…レイニーよ』

余裕の発言を聞いた。わたしはそんな羊獣戦士の足元に駆け寄り、

「てい！！」

『っ！？』

おんなじ技をお見舞いした。わたしの接近に気付けなかったのか、驚き痛む羊。

背後から走る足音が

「アル！　レイ！」

ムーンが向かってきた。馬を一時的に倒したのか。助太刀に来たのだ。

羊がムーンに振り向く。痛みに耐えながら。そしたらレイが

「よそ見すんじゃねぇ！」

と、衝撃を与えると小爆発を起こす手の平大の球を後頭部に勢い良く投げつけた。ダメージはなくとも、バランスを崩せた。

前に倒れそうになる羊に、わたしはまた高くジャンプし

「えい！」

『ぐぉ！！』

背中に降下し、踏みつけながらまた跳び、相手の背後に着地。ムーンが側に来る。

「いいか、こちらを向いたら」

とわたしとレイに耳打ちしてきた。わたし達はその作成に賛同。
奴が起き上がり、予測通りのろのろとこちらを向こうとする。ムーンの、せーの！、を合図に

「えぇぇい！！」
「おりゃあ！！」

わたし達三人固まって、相手に向かって突進。通常の三倍。
羊の身体は向こうに吹っ飛び、こちらに接近中だった牛獣戦士を巻き込んだ。奴ら二体は共に倒れる。すると、馬が立ち上がろうとしていた。
周囲には、円の中心を目指して神秘的な曲線が描かれようとしている。完成形までもう少しだ。

「私が行く、後に続いてほしい」
「うん！」
「りょーかいっ！」

先程から同等に押し合っていたムーンなら、馬獣戦士を抑えられる。
ムーンは馬の真正面に向かって走る。
馬はあえて力勝負という事か、ムーンの接近に構える。長剣が振られ、それを蹄で押さえた。

「てぇい！！」
「とぉ！！」
『！？』

ムーンを飛び越え、馬に体当たり。レイとほぼ同時に。その瞬間に

ムーンが隙を狙い相手を押した。
仰向けに倒れる馬獣戦士。わたし達二人も奴の厚い胸板に落ちる。
すぐに相手から離れる。どんな反撃が来るのかわからないから。周囲をまた見る。ヘリオスの魔法陣は徐々にそれらしくなる。
マリアの祈りの言葉にも熱がこもっているのが聞いてわかる。
あともう少しでこいつらも元に

「え…？！」

地面が揺れた。一回。それも大きく。バランス崩して尻餅をついた。
何が起きたのか確認する前に

「――――――！！！」
「！？」

レイの身体が宙に浮かぶ。受け身もとらず、芝生に叩き落とされた。
羊に突き上げられたのだと知った。
馬がもう立ち上がっている。両蹄は、地面を叩き砕いた跡が…地震を起こしたのはこいつだ。

「レイ…！！」

あの鋭い角だ、無事では済んでないはず。彼の元に行こうとしたら

『どこに行く？』
「！！」

牛の声だ。振り向いたら

「きゃあっ！！」

奴の大きな手に無理矢理捕まれた。しかも投げ飛ばそうとしている。
方向を目で確認したら

「や…ば…！」

遠くの馬獣戦士が見えた。わたしをそっちに飛ばして殴る気か？
だが、この握力…逃げられない。そしてなす術もなく

「きゃあああああああぁっ！！！」

投げられてしまった。どうなるのか予測する余裕がない。鋭い風。
鋭い痛みが来るのかと思ったが

「やっ…！」

緩い打撃？　真横に軌道を変えられ、わたしは芝生の上を転がった。
誰かが側にいる。やがて止まり、空に向かって仰向く状態。

「ムーン…！」

彼が、軌道を変えて助けてくれたのだ。

「早くレイの元へ」

と言いながら、すぐ立ち上がりこちらに背を向けた。馬獣戦士が突進してきたのだ。
ぶつかる音を背後にして、ムーンに感謝した。
レイの元に駆ける。牛が視界に入った。
こっちに向かってくる。方向は二時。

レイに向かっていくのは羊。速く、早くしないとまた攻撃される。

『うおおお！！！』

拳を、駆け足と共に接近してくる。わたしは

「っとぉ！」

『！？』

スライディングして避ける。姿勢を急激に低くしたので、パンチは空回り。

その勢いのまま、立ち上がり駆け出す。だが、

羊の方が速い。間に合わない！　と覚悟したが

「え…？」

横たわっているレイを通り過ぎ、走る奴。その先を見ると

「マリア！！」

ヘリオスの魔法陣をまだ構成している司祭の姿。守る者はおらず、

柵の向こう側の村人達は逃げ始めた。

マリアも祈りの途中、言葉にならない悲鳴をあげたが

「っだぁ！！」

『ぬぅ…！？』

羊の片足にムチが縛る。それに倒れた羊獣戦士。ムチがどこから来たか目でたどる。が

『小娘がぁ！！』
「え…」

天地が逆さになり、牛獣戦士に追い付かれて捕まったと気付く。その時にはまた投げ出され、受け身をとれず地面の硬さで痛みを受ける。
起き上がれない。両手を地面に付き、支えようとしても身体が痛くて動きにくい。
顔だけでも上げ、位置を確認する。

「あ……アル様…！」

マリアがこちらを見下ろしていた。泣き出しそうな、この危機を恐れる目で。
太陽神ヘリオスの魔法陣を描いている最中なのに、杖を地面から離そうとしたら

「マリアぁ！　頼む！！」
「！？……」

レイの声が聞こえた。身体が痛いのを我慢している、必死な声音だ。

「回復なんかいらない！！　そんなの後だぁ！！　こいつら戻す魔法陣を早く！！」

声のした前の方を見た。まだ羊の足には縛られたまま。レイは倒れた状態だ。ムチを引っ張り、羊を行かせようとはしない。
頭に傷を負ったのか、顔に血が流れている。

「マリア……後でいい、今は」

『話してんじゃねぇっつーの！！！』
「――――――！！」
ムーンもマリアに魔法陣完成を促す。馬に隙突かれ、攻撃されてまでも。
マリアがまた悲鳴をあげる。
「マリアお願い…わたし達は大丈夫だから…」
正直身体は痛い。泣きたいくらい。
だがそれは、この戦いが終われば治せる。わたしは気丈に振る舞い、彼女に少しでも不安を取り除こうと立ち上がった。
対立するは牛獣戦士。
「家族を守りたいんだ！！」
「！？」
レイが叫ぶ。とにかく羊獣戦士の足を引き止める。
「おれはこれくらいしか出来ないから……だからマリア！！」
「……！！」
マリアの強く頷く気配を察した。わたしも、負けるワケにはいかない。
「だあああぁ――――――――――！！！！」
大声をあげ、わたしは突っ込む。奴に向かって。無謀である事はわかっている。
案の定、ただ突っ込むだけでは返り討ちにあった。突き飛ばされる

が、まだ走れる！

『しつこい奴らだ……負けるとわかっている戦いに何故挑む？』

二度目の突進。パンチを避けたはずだが、まだ片方があった。それに戻される。

「勝ち負けなんかじゃ、ない…」

でもわたしは立ち上がる。奴の問いに答えながら

「守るものがあるから戦うのよ…！」

今度は全部避けきれた三度目。両手剣の切っ先を、奴の胴体に向けながらアタック。

『うぐっ…！？』

面積の小さい…例えば一本の針の先の方が、同じ力量で込めても強いもの。

わたしの身体全体の攻撃より、こっちの方が相手を圧す事が出来た。

「『今、ここに、あなた様の力を解放する場所、存在する』」

周囲が突然光輝く。足元を見る。綺麗な円と曲線。光る線は朝日より明るく。

「『この場所に在りし邪悪を、太陽の輝きと共に消し去りたまえ』」

『キサマ…やめろぉぉぉ――――――――――――――――――――！！！！！！！！！』

牛獣戦士の焦る叫びを止めるものは、なし。
馬獣戦士も、羊獣戦士も動揺している。

「『太陽神ヘリオス』！！！」

涙こらえた司祭の声は高らかに、魔法陣は聞き入れ、輝きをさらに増す事で応えてくれた。

グアアアア――――――！！！
ギャアアアァァァァッッ！！！
グオオオァァッッッ――――！！

苦しむ三獣戦士。じたばたとその場で暴れ始めたり、芝生に倒れ痛みに耐え苦しむ姿は恐ろしい。
三体の身体から、目で見えるものが。何か禍々しい黒い色をした霧のようなものが、抜けていく。そして、それは上空に浮かび、消えていった。
それを呆然と見るわたし……魔物の断末魔を聞きながら。
すると

「あ…お前ら……」

レイの嬉しそうな、泣きそうな声。それを聞いて、気付く。三獣戦士の身体が、本来の姿を取り戻した。
牛…馬…羊……元の大きさ、そして身体に戻った三体は、芝生の上に横たわっていた。眠っているみたいだ。生きている。

「よ…良かった……」

魔法陣はそのままに、光はやがて消える。
レイは血を流しているのに、満足そうな笑みを浮かべ、身体を大の字にしては空を仰いだ。
ムーンも、今までの溜まった疲れを表すかのように、ずんっ、と芝生に座り込む。
わたしも、やっと終わったんだと認識したら、倒れたくなった。だから倒れた。
横を見ると、ついさっき争っていたとは思えないくらい愛嬌のある牛の姿が。

「……わかった？」

わたしは、先程の質問の答えを理解してくれたか、確認した。
血と草の匂いが混ざる。それはわたし達が、仲間の故郷と家族を守った証。

第四十九章

―――――――――
…あなた、誰？
―――――――――

唐突に、何か軽快に乾いた音が牧場に響く。一定間隔に。定音量に。
それだけが広まるから、余計静かになる。
それは、人が何か成し遂げた際に、本来は多く耳に入る音……拍手だ。
せっかく戦い終わった余韻に浸っているのに、村人か？、と思いそちらに顔を向けた。ら、

「まさか、教団の連中がいたのは知らなかったな」

牧場の光景には不似合いな姿の……若者。声から聞くと男だ。独り分の拍手はやがて止まった。
何故に不似合いなのかは

「お、お前ぇは…！！」

真っ黒いマントを身に纏っているから。レイニーのお父さんが反応する。怒っている声で。
こいつが、サニーさん達が言った今回の元凶、という事か。

「ユーピテルはてっきり壊滅したのかと思ったが……」
「な…何とおっしゃいましたか…？」

故郷の名を口にした黒マント。出身者のマリアンヌが歩み出す。
ただならぬ雰囲気…痛みは残るが、油断大敵。立ち上がればマリアが隣に位置してくれた。
黒マントとの距離は、わたしが近い。背後にて、ムーンとレイも動き出している。彼らも警戒している。

「もしかして…お前達が、あのババァを止めたのか…？」

マントにフード……ムーンに酷似した姿。
違うのは、真っ黒い身なり。ムーンは長旅をしたかのように自然とボロボロである。また、目深に頭を覆っているから、顔なんてほとんど見えない。声も一本調子で、感情が読み取れない。

「『ババァ』って……どなたの事ですか？」

マリアは問い掛ける。その声は、何か予想が当たりたくないような控えめさ。
すると、黒マントが笑った気がした。

「お前達教団の司祭長に決まっているだろう……ユゴリアンにいた時、相談に乗ったんだ」
「まさか…あなたがお母様を……」
「教団は俺達の力を消し去る能力を持っていやがる。だからユーピテルをババァの手で潰して、ここを拠点にサーサリーを支配していこうかと思ったんだが……とんだ邪魔者がいたな」

と、わたし達騎士団三人を眺めている視線を感じる。

「こいつが、おばさんと親父達を…！　アルテミス！　おっちゃん！」
「ええ…！」
レイは武器を構える。ムチと短剣。わたしもそれに応える。右手左手に一本ずつの剣。
この口振り、そして、仕掛けた能力は人間業ではない。人の形をした魔物だ。
「おっちゃん…？」
「どうしたの？　ムーン？！」
だが、一人だけ、武器を持とうとしない。
ムーンだ。黒マントを凝視している。何か驚いている…ムーンはこいつを知っているみたいだ。
「ちょっとムー」
「うあ〝あああああ！！！！！」
突然。
司祭とは思えない唸り声。マリアだ。怒りを露わにし、駆け出した。
感情のままに黒マントへと向かう。打撃武器ではないのに、杖を振りかざしながら。
無理もない、マリアにしてみれば母を操った魔界の者。仇のような存在。
だけど、それで黙るわたし達じゃない。
こいつは人間も動物も操る危ない奴……止めようと追いかけるが
「よくもお母様をぉぉ！！！」

「だから？」
「！？」

殴る寸前、マリアの足が止まった。何か動きを止める魔力にやられたのか、身体が浮かび上がった。

「きゃあああぁ！！！」
「マリア！！」

そして、身体を吹き飛ばす。丁度走ってきたわたし達三人の元へ。
もちろん彼女を受け止めた。
「ユーピテルが無事ならば、ここは諦める……負の魔力で操っても、消されてしまうから。今度また邪魔をするならば、殺してやる…」
「ま…待ちなさい！！」

黒マントの身体を、黒い霧が包む。先程、動物達の身体から抜けたものと同じもの。
マリアが向かうも、黒霧は黒マントを包み、消えた頃には姿もなくなっていた。

「……許せない…許せない…！！！」

その場で脱力し、座り込むマリア。わたし達は揃って彼女の元に歩み寄る。呟く彼女の声からは、怒りを通り越して殺意が伝わった。

「マリア…」
「ごめんなさい……急に怒ってしまって……」

だが、いつもの調子に戻ったマリア、わたし達に謝罪をする始末。
安心させようと微笑んでいるのだが、余計に不安を思わせる弱い笑

顔だった。

「無理ないって……だって、おばさんに悪い事やらせたんだ。おれだって、牧場の動物達をあんな目に会わせやがって……許せねぇに決まってる！！」

今度はレイが怒り出す。確かに二人は、あの黒マントの男の被害者。許せと頼むのが無理な話。

「わたくし…教団の者として、よろしくない思いを抱えております……」

「なんだ…？」

レイが純粋に問う。

「あの男を、殺したい、という思いに駆られるのです……」

神よ、お許し下さい……と小さく呟き、十字を切る。責めるのはあの黒マントだけで充分なのに、彼女は、自分の立場まで戒める。

「それは…家族を想っているから」

「え？」

手を交差しているマリアが、わたしの言葉に反応した。

「わたしだって、父さんと兄さんが悪者扱いされるのを聞くと、イライラするの。噂話が聞こえると、嗚呼ぶっ殺したいって思いたくなる…。だから、マリアの気持ちは良くわかる……」

「アル様……」

「でも、だからって、本当に殺すのはおかしいって、この前レイに

教えられたばっかりだし」

「えっ？」

そう、あの大男が率いる盗賊達を殺そうとした時に、レイは教えてくれたのだ。自分が会話に出た事に慌てる、まさかこんな奴に教えられるなんて思ってもみなかったが

「そうでしょ？」

感謝している。わたしを道に外さず止めてくれた彼に。

「そりゃそうだけど……相手は魔物じゃんか。あん時とは話が違うし…」

「あ、そっか……」

そうだ、今回は状況が違う。この場合、こんな話しても説得力がない…。

「いえ…同じです。相手が誰であろうと、家族を想って憎しみを抱える事は」

でも、マリアは安心した表情となる。何かを悟ったような。

「ありがとうございます……この想いは、間違ってはいないですよね」

「……間違ってないよ」

司祭でも僧侶でも。家族を想う気持ちは同じ人間だ。

それが、誰かに向けての憎悪でも。それは家族を想ってこそ生まれる憎しみだから。

わたしも、改めて感じ、そして知った。

「ムーンも、入団試験の日にわたしをかばっ、て……？」

ムーンに話を振る。だが、彼はうつむいていた。話を全く聞いていない。

あの黒マントを見た時の驚いた右目、今は虚ろにどこを見ているのか。

「ムーン？」

「おっちゃん？」

「ムーン様…？」

各々、彼の名を呼ぶ。こんなムーン、誰も見た事ないんだもの。わたし達の声に反応し、こちらを見てくれた。我に帰ったみたい。

「だ、大丈夫…？」

「…ああ」

あ、いつものムーンに戻った。無理して普段顔に戻った感じだったが。これ以上何か問いかけても、多分彼は答えてくれないだろう…。

「あ、そうだ！」

とマリアが慌てて思い出したような声をあげる。

「『神よ、彼の者達に癒しの力を与えたまえ』！」

マリアンヌが祈る。効力は相変わらず良い。すぐに痛みがなくなり、傷が塞がり、身体を動かすのが楽になった。

「すみません…すっかり忘れてしまいました……」
「ううん、ありがとう。助かったわ」
わたし達も、黒マントの登場で痛み等忘れていたし。
「……」
静かになり、足が芝生を踏む音が。
レイが、事が終わって安全な牧場に足を踏み込んだ両親の元へと、歩き出していた。
「悪ぃ……あのマントの男、逃がしちゃった」
反省のないレイらしい笑い方をしながら。

第五十章

―――――――
我が家に帰った瞬間
そして、約束の瞬間
―――――――

「レイニー…」

自分の旦那の身体を支えながら、サニーさんは息子の元へと歩く。
嬉しくて泣き出しそうな表情。だが、対しレイニーの父は、無表情。
息子の戦う姿を見、一体何を思ったのか。
わたし達も、レイの後を追いかけた。ら

「ただいま、母さん」

彼は立ち止まり、まず、一言。わたし達も思わず止まってしまう。
レイの真後ろに位置する故、彼の顔が見えない。
だが、声から聞くと、いつもへらへら笑っているレイじゃなかった。

「ただいま、親父」

挨拶をされ、共に立ち止まる両親。その時に、わたし達は家族のやり取りを見やすい位置に歩く。やっとレイの顔が見えた。

「あんたって子は……相変わらず無茶ばっかりするんだから…！！」

愛故に怒る母。だが、迫力は無く、安堵も共に表す顔。こらえきれずに涙を流した。

「だって…親父達が大事に育ててる子じゃんか。それに…」

今頃になって、話す言葉選びに戸惑うレイ。目線はやや下を向き、どのような事を口にすればいいか、少しの間が空く。

「お、おれ、強くなりたかったんだ…」

短い沈黙から出た言葉。それを黙って聞いてくれる両親。

「家を出る前は、ただの憧れだったんだ。騎士団は」

父と母に、思いを話す息子。

「だけど、入団試験、合格しちゃって……連絡しようか迷ってたら、騎士団の仕事で忙しくなって…」

言い訳にしか聞こえないよな。と自ら自分の並べた言葉を自虐した。

「でも、わかったんだ」

彼は顔を上げ、二人の顔をしっかり見据えた。普段のレイにはない、真剣な面持ち。

「騎士団ってのは、ただ単に強くなる事じゃないって。全部の戦いに負けちゃいけない事じゃないって。騎士団は、守るものがあるか

ら、強くなる場所なんだって」

自分の生半可だった気持ちを反省した事、それを自らの言葉でレイは語る。

「ちょっとワケありで、こんな形で帰ってきちゃったけど…さ。今だから言える。おれは、」

思いをぶつけた。

「親父と母さんを守れるように、強くなりたいんだ！」

レイが伝えたかった思いは、両親に伝わるのか。

言いたい事を言い終えたレイ。見据えた目線はやがて、自信をなくし、うつむく状態に。

何を言われるのか、不安でならなかったのか。

「…あ、あんた」

すると、支えが必要だったレイのお父さんが歩き出した。勝手にレイへと歩んだ事を、サニーさんは驚く。一言呼び止めるが聞かず。家を出るきっかけとなった存在。その父が、レイの前にゆっくりと向かう。

手を伸ばせば届く距離まで。レイは意を決したのか、父と目を合わせた。そして

「バカ野郎…」

病人故に、弱々しい声。だが、お父さんの威厳が伝わるからなのか、威圧感があった。

「お前ぇはもう、充分に強いじゃねぇか……」
「え……？」
もう自分の足では支えきれないかのように、父は息子を抱き締める。
突っ立ったままのレイ。どうしてなのか理解出来ないのはわたしもだ。
しかし、父の目からは、サニーさんと同じように、涙が。
「強くても弱くてもいい……たった一人の息子が家からいなくなる事が、何よりもつらい……お前が出て行った後に、すごく実感した」
「お、おや…じ……？」
父親からの思いもしない言葉。動揺するレイ。だが
「もういいから、帰ってこい…。それだけなんだ……」
「！！……」
「怒鳴って悪かった…もう許してくれねぇかもしれねぇけど……悪かった…」
この父の言葉で、全部理解出来た。それを感じ、レイは目からぼろぼろと雫を流す。父を抱き締め返し
「なんで親父が謝るんだよ！？」
涙声で叫び問いた。これ以上父に、謝罪の言葉等言わせたくないかのように。
弱っている父の身体を抱き締める手は、見ても力強さを示しているのが知れる。

「一番悪い事して、家族を困らせたのはおれだろ!?　親父が謝ってどうするんだよ!?」
「れ、レイニ」
「ごめんな親父…！　母さん、ごめん…！！　こんなダメな息子で……こんな、こんな息子で……！！！」
「レイ…！」

サニーさんも、二人に駆け寄り、我が子をきつく抱き締めた。

「ダメ息子なワケないだろ…！？　あんたはあたし達の、自慢の息子なんだから…！！」

嗚呼、これで本当に、レイは家族の元に帰れたんだ。わたしはそう思った。
事の成り行きを見守っていたわたし達。ふとマリアンヌを見たら、もらい泣きしていた。そんな彼女と目が合い、思わず微笑む。
ムーンの横顔を見れば、納得した表情。同時に、親のように安心している顔でもあった。

＊＊＊＊＊

その後、牛、馬、羊の軽傷をマリアが治した。彼らは魔物化していた事を知っているのか覚えてないのか、元気そうだった。
さらに、改めてレイのお父さんの病気も治そうと試みたら、意外な事に快く了承してくれた。
我が子に久しぶりに会えたから、気分が良いのだろう、とムーンの推理。レイも、あの親父が珍しい……と驚いていたくらい。お父さんの無信仰主義はよっぽど酷いのだと知った。

その日はすぐに出発せず、久しく会った家族の団らんと称して、一日留まる事となった。
マリアはそれを勧めたし、ムーンもそうするべきだ、と帰還の日を一日延ばした。

＊＊＊＊＊

翌朝。バルナ家にて夜を越したわたし達、準備は良し、いつでも出発出来る状態。なるべく早めにサーサリー王国に着きたいので、早起きだった。
元々両親も農業の為に早起きの習慣があったので、わたし達を見送ると言い出した。
村の出入口まで進むわたし達。

「それじゃあ…行ってきます」

わたし達の現在の状況は、サニーさん達も知っている。行かなくてはならない、というのも理解している。

「城に帰れたら、手紙くらい寄越しなさいよ」
「うん、もう忙しいとか理由にしないからさ…」

せっかく会えた我が子が、また村からいなくなる。母親としての悲しい思いが、サニーさんの顔から表れている。レイも、元気がない。

「レイニー」
「…？」

お父さんが息子を呼んだ。

「お前ぇの家はここにあるんだ」

すっかり元気になったレイの父。誰かの助けなしでもって歩けるようになった。

だが、頑固そうな雰囲気は変わらない……。

でも、

「騎士団を続けていても、辞めちまっても、必ず一回は帰ってこい…」

息子にかける言葉には、誰よりも愛が溢れている。わたしはそんな気がした。

「わかったか？」

「……おうよ」

「聞こえねぇぞ！　わかったか！？」

大きな声。これが本当のお父さん。

レイだけじゃない、わたし達も驚いてしまった。

「……ああ！　絶対帰る！　それまでにまた寝込んだら承知しねぇかんな！！」

「ほう？　お前ぇこそ怪我してぶっ倒れんじゃねぇぞ！？」

「ああ！　じゃあな！　親父！　母さん！」

強気に見せ合う親子。これが普段の家族なんだと改めて思う。

一時の別れを告げ、レイはわたし達をほったらかして走り出した。

王国に向かって。

それに慌てるわたし達。お世話になりました！、と早口で言い、彼の後を追いかける。
気を付けて行ってらっしゃーい！、じゃあなー！！、と、バルナ夫婦の言葉を背に受けながら。

＊＊＊＊＊

結構な距離を走ってきた。緩やかな斜面が連続するこの土地。お互いに姿が見えなくなった頃、やっと立ち止まる。
柵で囲いを立てて牧場を作れるような環境…。所々林が見当たるが、走り回るには適した平原が広がっている。
人工的に作られた草の生えていない道…ほぼ真っ直ぐに向かっているが、王国は見えない。
今日は良い天気だ。今朝の空を見上げ、呼吸を整える。

「いきなり走り出すとか……びっくりしたじゃないの…」
「わ、悪ぃ悪ぃ…」

レイの猪突猛進には、マリアもムーンもヘトヘトだった。
息を整え終えたレイが、照れくさそうに

「だってよ、あんな湿っぽく村を出たら、帰りたくなっちまったし……」
「……」

なるほど、悲しみを紛らわす為に、あえてあんな軽い別れを切り出したのか。わからなくもない。

「確かに…あのようなやり取りでしたら、またいつでも帰れますわ」
微笑ましい、そう言いたげに笑うマリア。
「…村を出てすぐにホームシックか？」
「ち、違ぇし！！　寂しくなんかねぇし！！」
寂しい、とまでは言ってないけどムーンは。彼の問いに勝手に騒ぎ出すレイ。
「寂しくねぇよ…約束したから」
「約束……？」
「そうさ」
騒ぎは収まり、レイは誇らしい表情を見せた。
「約束果たすまで、強くならなくちゃ。皆を守れるくらいに」
それは、これから進む為の、彼の目標であった。
（寂しく……ないもんね）
彼の心の中には、家族の存在、あたたかさ、言葉。何よりも、約束がある。
「…そうね。頑張んなくちゃ」
だから、つらい時にこそ、頑張れるだろう。彼を強くするいろんな存在があるから。
わたしだって、おんなじように、母さんの言葉も約束もある。夢も

ある。

「その為にも、マリアを王国まで送らなければな」
「ありがとうございます」

ムーンの言う通りだ。今は目的地に向かわなければならない。無論

「うわ…まだ休みたいのに」

険しい道のりを示す魔物らが現れた。
この前、森の中で野宿したあの規定外サイズの狼の群れだ。
無意識に愚痴をこぼしたわたし。

「これも修行の内！」
「油断するな、レイニー」
「皆様、頑張って下さい！」

レイ、ムーンは戦る気満々だ。マリアもサポートには真剣となる。
わたしも、両手に剣を構える。唯一、父が残した武器。

「休息の邪魔するなら容赦しないから！！」

サンポリア帰還への道のり。時間がかかりそうだ。

【第五部】第五十一章

サーサリー王国までのイヤな道のり

「よいっしょー！！！」

最後の一匹は、わたしの一閃で仕留めた。魔物の狼の身体には斬り傷。血を流しながら地面に倒れ、やがて、動かなくなる。魔物の群れが襲ってきたのは、これで十三回か…？　もう数えるのでさえうっとうしくなった。

「おー、気合い入った声じゃん」

レイニーがそんな感想。余裕しゃくしゃく。生死がかかっているのに、なんで緊張感ないのか。その質問はもう、やっぱりレイだから、って片付けたら気にならない。

「お怪我はありませんか？　皆様」
「全っ然平気！　心配すんなってマリア」

司祭としては、やはりわたし達戦う者の身を案じてくれるマリアンヌ。戦い終わる度にこの問い掛け。もう何回目かな？　忘れた。

「お前だから心配するのだろう…」
「え？　おっちゃんなんか言った？」
「わたしもそう思う…」
「アルテミスまで！　なぁ、おっちゃんはなんて言ったんだよ？」
ムーンのぼやきは言われた本人の耳には届かず。わたしも思わず同感発言。ムーンは狼の死体に何かしているが…。

「レイ様、ベゴ村に着く前と比べると、何かに吹っ切れたかのように動きが良くなりましたわ」
「え？　そう？　おれだってやる時ゃやるさっ」
レイの側まで歩み寄り、マリアが比較を述べた。それを褒め言葉を受け取ったのか、なんか照れ気味のレイ。
ここまで単純だと都合が良すぎる。詐欺師に引っかからなければいいが、とどうでもいい心配をふと思った。

「にしても……まだ王国まで遠い気がするなぁ…」
「と言うより、魔物に邪魔をされて進んでいない状態です…」
「だろうなぁ…。家族と城下町に買い出し行ってた頃は、もっと早く着けた気がするぞ」
レイが進行方向を見るが、まだ道のりは遠く、案の定王国の城すら見えず。時代の変化を、過去と現在を比べるレイの言葉で実感してみる。
やはり……あの黒マントの男が原因のように思えてならない。奴は一体何者なのか…。

「おっちゃん何してんの？　早く行こうぜー」

「ああ。行こうか」

死体に何を施していたかは気に求めないレイ。ムーンも丁度作業を終わらせたのか、レイの誘いに従う。

「この調子ですと、昼過ぎか…それより遅くに着きそうですね」

「えー……なんかめんどくせぇ…」

「道があるのだから、進めば必ずたどり着ける」

「ムーン様の言う通りです」

「でもなぁ……」

戦い終えた仲間らの会話。それを耳にしつつわたしも歩み出す。

ムーンが何をしていたのか、魔物の死体を見てみると、原型を留めていなかった。毛皮を剥ぎ取られていたり、骨が飛び出していたり…。

ずっと見ていたら気持ち悪くなったので、足を速めると同時に前を向いた。

今日は快晴。地表に魔物さえいなければ良き散歩のはずだったが。

＊＊＊＊＊

景色は至って変わらない平原。木々が所々で生えていたりするくらいで、駆け回るといい気分になりそう。

だが、このご時世、駆け回れるような平穏な所ではなくなっている。

そしてまた

「何…？！」

どこからかけたたましい動物の鳴き声が聞こえた。

「上だ！！」

ムーンが誰よりも早く、姿を確認した。それは上空からこちらに急降下してくる鳥…竜みたいな鳥みたいな魔物だ。頭から胴体辺りは竜のようだが、翼や足等は鷹のよう。サイズはキラービーと変わらない。

「おれがやる！」

レイがすぐにナイフを数本構えた。あのナイフにはどんなものが仕組まれているのか。
接近してくる鳥竜四匹に向かって武器を投げつけた。
一匹、二匹、三匹は首や腹部分に刺さり、あと一匹は避けた。命中した鳥竜はむなしく地面に落下。
あと一匹は速いスピードで

「マリア危ない！！」

司祭の元へと突っ込もうとするが

「『ヘーパイストス』！！」

炎の守り神の名を叫び祈る事で、ガード。
見えない炎の壁に焼かれた鳥竜は弾き飛ばされ、落ちてきた三匹と同じ場所に落下。
だが、攻撃技ではない故、まだ動ける一匹。他は身体が痙攣しており、生きてはいるが動けない……ナイフには麻痺する液体か何かが塗られていたのか。

「わたしが行く！」

すぐに駆け出したのはわたしだ。剣を右手左手に逆手持ち、体勢を立て直そうとしていた鳥竜に向かって

「たあぁぁぁ！！！」

横一閃。ユーピテルでも使った両手交差剣技。勢いのまま、相手を通り過ぎた。
振り向けば

ピギャアアアァッ！！！！！！

深く出来た傷から血が吹き飛ぶ光景。魔物の後ろ姿からでもそれはよく見えた。断末魔なる鳴き声をあげ、血みどろの身体は倒れ、動かなくなる。

「さっすがぁ！」
「大丈夫ですか？　アル様」

レイ、マリアがわたしの元へやってくる。わたしは剣を鞘に収め、彼らに対しピースした。

「レイニー、刺さった三匹はどうする」
「ああ。超協力な蛇の魔物の麻痺液だから、ちょっとの時間じゃすぐには動けないよ。ほっとこうぜ」

ムーンの問いにレイは興味のない返答。
すぐにわたしの方に向き直り、目を輝かせていた。

「あの技、ユーピテルで使ってから全然見なくなったのに。自分の特技にしちゃえばいいんじゃね？」
「うーん……正直、唐突に使っちゃったから、常用はまだ、慣らしてからかな…？」

ユーピテルで過ごしていた際に、何か技を編み出してみようとした時があった。ヘスティアーさんを助ける時にも、最後の最後で使った技だが、まだ使いこなす自信がない。
レイはとにかく必殺技や奥義には憧れているから、そういう事をわたしに勧めるし。

「ですが、アル様のその両手剣、というものはあまりお目にかかれた事がありませんし……無理に技を作ったり等しなくてもよろしいのではないですか？」
「そういやぁ、アルテミスみたいに二本の剣を使う剣士って、今まで見た事ないや」

マリアは両手剣が珍しい事を含めた助言をしてくれた。レイは今更の発言。
そりゃ、わたし以外で両手に剣をそれぞれ持って振り回すなんて、わたしだって見た事ないよ。話では、父が使う戦法だとしか聞いた事がない。

「歩きながら話せば良かろう…」
「あ、ごめん」

ムーンがわたし達三人を置いていくかのように先に歩き出す。慌てて追いかけながら、謝罪するわたし。

「両手剣は」

ムーンが話し始めた。彼に注目が集まる。

「元々、ある種族が使っていたとされる剣技だと聞いた事がある」

「剣技？　武器じゃなくて、剣技って扱いなの？」

微妙な違いにわたしは問い、彼の左隣へと早足に着く。

「ああ。種類は長剣短剣となんら代わりはない。剣、という部類だ。故、両手剣を使う事自体が、技や奥義に近い扱いとなる」

「へぇー」

「だから、マリアの言うように、わざわざ必殺技等はいらない、両手剣の技術は難しいものだ」

「でもよぉおっちゃん」

レイも、わたしとは反対側に空いているムーンの右隣に来た。さらにレイの右隣にマリアが来る。横一列に歩くような状態になった。

「両手剣って難しいものなのか？　普通に右と左に剣持って振り回せばいいだけじゃん」

「いや。それは逆に無駄な動きを生み出す事となる」

「？？？」

それは、使うわたしがよく知っている。レイはやっぱりわからない表情を見せる。

「人間は大抵、利き腕となるものがあるだろう。利き腕は武器を操る主軸となる」

「えっと……？」

「例えば、お前がムチを左手に持ったら戦えるか？」
「いや…それは出来ねぇや。おれ右利きだもん」
「それと同じだ。必ずと言っていいほど、利き腕で武器を持つはずだ。空いた手には盾や投げナイフ、魔法書や杖等、両手に持つ大きな武器や杖ならば支えとして、補助的な存在となるだろ」
「うん…」

彼が何を言いたいのか。レイは理解しようとしている。マリアも彼の顔をちゃんと見、話に耳を傾ける。

「同じ重さ、同じ長さの剣を二本、両手に各々持つとする。これを左右同じように扱う事が、両手剣の難しさだろう……どちらか片方だけに振るのが偏れば、使う事のないもう片方は何の為にあるのか。それにより無駄な動き、大きな隙が生じる」
「えっとえっと……要は、使わないなら最初から持つな、って事か？」
「……まぁ、お前の感性なら、そういう事だ」
「なるほど。使わないなら、武器の意味がないもんな。邪魔になるだけだし」
「…あんた、結論が何なのかわかる？」

わたしは、レイがどう解釈したか聞いてみた。

「両手剣は邪魔って事！」
「……」

うん。案の定って言うか、呆れたって言うか。言葉にもならないや。

「ですから、利き腕じゃない腕も、利き腕と同じように扱わなければならないんです。両手剣の場合は」

「それって、右利きじゃないのに、左でも右利きみたいに使えるって事か？」
「最初からそう言ってるじゃないの！」
マリアの説明している事が、ムーンの説明を砕けた形で表したのに。イライラが募って思わず怒声を出してしまった。
「えっと……ごめん。えっと、両手剣は、」
と、自分の脳内で整理し始めたレイ。彼なりの、自分なりの解釈単語を探し求めた。
必死に考えているものだから、足が止まる。わたし達も遅れて、彼に振り向きながら立ち止まった。
「無駄を無くす事が難しい剣技って事だよな。だから左手は補助じゃなく、主力になる。右手と同じように。それを出来れば、速さや威力がどんな武器よりも勝るって事だし。使うなら一般的な武器を使うよりもっともっと努力しないと意味がないって事だから……両手剣は生半可な気持ちじゃ使えないってワケか？」
「……」
「…え？　なんで黙るんだよ？」
理解に追い付けないのかと思ったが、理解した途端に似合わない言葉を使う。
そんな雰囲気があったから、もう補足を言う必要はない。それも含めてわたし達は驚き、言葉を失ったんだ。
「……そういう事になる」
ムーンはいつもの平静な彼に戻り、歩き出した。それに習ってわた

し達も歩み再開。

「それじゃあアルテミスは相当努力したんだなぁ…」

「両手剣なんて発想、中々思い付きませんしね」

わたしにそう感心するレイ。マリアも同感発言をする。

自分の努力を認めてもらえるのは、嬉しいものだ。わたしは二人にお礼を言った。ありがとう、と。

するとレイが

「アルテミスはいつから剣の稽古を始めたんだ？」

「え？」

素朴な質問をしてきた。

いつから剣を握ったのか……過去を振り返り、思い出そうとする。

「……三年前に」

「え！？　結構最近じゃね！？」

そう。母さんが亡くなった年に、わたしは戦える人間になろうと志したんだ。

「町一番の剣士に教わったの。でも…家に置いてあったのは、この剣二本だけだったから。父さんが両手に剣を一本ずつ持つ戦闘スタイルだと知って、わたしも真似てみたんだ」

「へぇー…お前の親父さんすげぇ…！」

レイの反応はやっぱり子供だ。わかりやす過ぎる。

目を輝かせる、というのは言葉の表現だけだと思うが、レイはいつか実現させそうな気がしてしまう。

「ですが…やっぱり三年だけの修行ですと、騎士団に所属出来る可能性は極めて低く思われます……アル様、どのような修行をなさったのですか？」

マリアの言う通り、ちょっとやそっとの歴じゃあ、騎士団なんて入れない。わたしは入団が決まった時、本当に信じられなかった。でも…思い当たる事と言えば、

「そうだね……剣の稽古は、週に一回だったの。先生は万屋も営んでいるから。だから、漁業の手伝いそっちのけで、一日中自主練してた…」

「へぇ……」

最初は近所のおじさんおばさんに嫌な目で見られていた。漁師の町の子だというのに、そんな物騒な物を振り回しているなんて、と。けれどある日、町に魔物が襲いに来た際、習いたての剣技の型でそいつらを蹴散らした。大人に混じって。

その日から、町の皆に認められたんだ。小さなガーディアン、って。でもわたしはその事を皆には話さなくていいか、と、多くは語らなかった。

「町の外れに、やたらと雑草が生えている場所があって、そいつら相手に練習してたの。で、稽古の日になる度に、先生に怒られた」

「なんで？」

「剣技の型の事、か？」

「そう！　そうなの！　我流じゃ剣は使えないぞ、って毎回怒られたのよ！！」

言おうとしたらムーンに当てられた。先に言われたが、何故か嬉し

くて声が大きくなる。
彼は武具に関する事も知っているんだ、と更に思い知らされる。

「型って、流派云々ってやつだろ？　そんなに重要なのか？」
「わたしも最初、そう思ってたの。でも、先生の話を聞いて大事な事はわかったけれど…」

レイの疑問は、武具に精通がない人間ならば誰もが思う事だ。わたしは話を続ける。

「その頃には、我流が身体に染み着いちゃったから、もうどうしようもなかったよ。それをマスターしたら、逆に先生に誉められちゃったの」
「ふーん……なぁ、おっちゃん」

わたしの話に相づちを打った後に、レイは博識の彼に向く。

「流派と我流、結局はどっちがいいんだろう？」
「うむ……難しい質問だな…」

と、顎に手を添えながらムーンは結論を考え始めた。この問いは…恐らくムーンもはっきりした答えが出ないかもしれない。
それぞれにメリット、デメリットがあるし。どれを使うかはその人次第となるだろうから。
わたしはそう考えるが、ムーンも似たような事言うのかな？
すると、マリアが

「あ！　見えて参りましたわ！！」
「え！？」

前方を指差し、わたし達に知らせてくれた。喜びの明るい声で。
話は一時中断。いつ再開するかはレイとムーン次第だが。

「わぁ……すごい…」

わたし達の今いる位置にも関わりがあるが、サーサリー王国はサンポリアに負けず劣らず大きな城がそびえ立っている。
城の周囲に広がるように、民家も多く並ぶ。何よりも、海を背景にしたこの景色は、湊街も兼ねるサーサリーならではなのかもしれない。

「塩臭い風…」
「潮風でしょ」

レイがふとした感想を述べる。間違ってはいないが、わたしはもっと良い響きに訂正指摘した。

「陽も一番高い位置にあるな…」

ムーンが呟き、太陽の位置を確認した刹那、

「昼飯ー！！」

レイはそれを昼食時間と判断し、誰よりも先に駆け出した。ちょっと待ってよ！、とわたしは彼を追い掛けた。勝手行動は危険だし、皆を置いてほしくなかったから。

「ちょっとレイ！！」
「城下町まで競走だぁ！！」
「ちょっとぉ！」

彼を止めようとわたしも走り出した。追い掛ける。
何故か、わくわくしてきた。やっと帰れる、という先の出来事を予想して、嬉しくなるから。
わくわく、してたのに

「うわっ？」
「おおっとっ」

急な地震が。立ち止まるわたし。身体の軸を傾けぬようふんばる。
レイも気付いたが、足を止めようとして尻餅をついた。

「な、なんだ…？」
「きゃあっ」
「マリアっ」

後方を見れば、わたし達を追いかけて来たのだろう、さほど離れた距離ではなく二人がいる。マリアが倒れそうになったのだろう、ムーンが彼女を支えていた。

「な、な、なんだよ一体…！？」

レイはまた倒れぬよう、起き上がる。地に足をつけても油断せず、通った道を引き返し、わたしの元に歩み寄る。

「ただの地震でしょ？」

わたし達二人が、今度は更に道を引き返す。離れ離れになったら、何か起きた際に対処が出来なくなるから。あと、ちょっと怖いのもある…。

「いや……それとは違う…」
「ムーン様……？」

四人揃う。が、ムーンの言葉に皆が疑問。地震でなければ、今、地が揺れるこの現象は何？

「おっ、収まった」

地震がなくなり、普段の時に戻る。
と思ったが

ボコッ

「え？」

約４、５メートル先、地面から穴が開き何か出てきた。
虫の触角みたいな…でもあんなに長い触覚持つ虫なんて

ズズズズ……！！

「えええ――――――――――――！！！？？」

穴は拡大し、触覚の持ち主が現れた。
それは、ムカデ。
だが、明らかサイズが魔物級。村の一般的民家の高さを超すか超さないかの全体の長さ。
そのインパクトに、レイと一緒になって声出して驚くわたしであった。

「やはり、倒すしか術はあるまい…」
「おっちゃん戦う気かよ!?」

でもムーンは冷静に長剣を抜く。戦意たっぷり。
だが、このまま素通り出来そうにもないだろう。わたしも今一度すぐに考え、武器を構えた。

「む…ムカデ…気持ち悪い……」
「ああもう!!　めんどくせぇなぁ!!」

マリアはその気色悪い相手を見て顔を青ざめる。レイは諦めてムチを持ち出した。
マリアは下がってて、とわたしが伝えれば、すぐに安全区域まで走って行った。マリア、走るの速い速い。

「虫だから、と油断はするな。二人とも」
「うん」
「おうよ!」

サーサリー王国は見えるのに、行けない状態。
たどり着く事は、魔物を倒すご褒美にするしかないのだ。ああ、イヤだ。

第五十二章

―――――――――
サーサリー王国までの
ホントにイヤな道のり
―――――――――

昆虫の仕組みとは違う大量の足は、長い体の両サイドにズラリと並ぶ。
尻尾と思わしき箇所には、うねうねとうごくトゲのようなもの。
頭の長い触角やつぶらな瞳。反して体を覆う虫独特の甲殻は真昼の日光に照らされて気味悪く光っている。
そんなムカデはこちらを見下ろしているが、向かってくる気配はなし。

「私が先に仕掛けてみよう…」
「？」

ムーンが、手探りをする、という事を言い出した。

「『邪となりしものを燃やせ』！　『フレイム』！！」

彼の指先が示すのはムカデ。呪文を唱えれば、相手を炎が包む。
やるぅ！、と喜ぶレイニー。ほっ、と安堵のため息をもらすマリアンヌ。わたしも、街に入れる事に安心。

してたのに、

「えぇ！？」

「なんで！？」

火がゆっくり消え始めた。その理由は段々見えてくる。

自然摂理をひっくり返す事態、ムカデはその場で長い身体をくねらせる事により、まとわりつく火を消している。

ムカデに炎関連が効かない事を知る。

「それなら……わたしが行く！」

斬撃ならば。わたしはそう判断し、まだ身体をくねらせているムカデへ接近した。

奴がわたしの距離に気付いた時には、わたしは奴の身体に向かって剣を振り下ろしていた。が、

「なっ！？」

最大の力で刃を叩きつけたはずなのに。剣は弾かれ、腕も持っていかれて身体も引っ張られた。つまり、わたしの身体は勢いよく後方へ吹き飛ぶ。

そのまま転がるわたしではない。すぐに受け身をとり、スッと立ち上がった。

「大丈夫かアルテミス！！」

レイとムーンが駆け寄ってくれた。わたしは平気、と短く二人に答えた。

「虫の常識を覆したような魔物だな…」
「そうね……」

ムーンの呟きは、先程仕掛けた攻撃で知れる。難しい相手。
今目の前にいるムカデに効ける技を考えなくてはならない。

「ええっ！？」
「散れ！！」

レイの驚愕の叫びは、相手が反撃しに頭から突進してきた故に。ムーンの呼び掛けにわたし達は四方八方に散らばった。
しかしそれだけではなく、勢いが止まり、

「！」

首と思わしき箇所が動き、広範囲の体当たりを仕掛けてきた。
まだ地面に着地しておらず、無防備。だが、剣を前方に交差し、ダメージの削減だけでも。

「きゃああっ！！」

思った以上に威力が大きい。固めた土の道から外れ、芝生に受け身。
体勢を整えるが、よろめくわたし。よろめくままにせずしっかり足を立たせた。

「おっちゃん！　火をくれ！！」

レイとムーンはあの攻撃を避けたようだ。距離が離れた二人の姿を確認。
レイの要望にムーンは無言のまま頷き、魔技を発動。彼の持つ剣か

ら炎が宿る。

「これなら…！！」

レイの手に持つは、導火線が飛び出ている丸いもの。手製爆弾だ。
ムカデがまた突進してきて、レイは火がついた爆弾をその相手の頭目掛けて投げた。
二人が左右に攻撃を避けたと同時。

ドォォォン！！！！！

「うわっ…！」

爆発と共に来る爆風。近くにいないのに風を強く感じるのだから、もしあの場にいたらひとたまりもない。
虫の常識を覆した、とは言うが、さすがにこれにはムカデも無事に

「嘘っ！？」

済んでいた。なんで！？
思わず声が裏返り、疑問をそのまま口にしてしまう。
ムカデは痛がりもせず、煙を払っているのか、ゆっくりと頭を横に振った。だがそれが終わった途端に、

「うわぁっ！」

頭を地面に突っ込み、地鳴りを起こしながら掘り込み潜ってしまった。尻尾と言うべき箇所も地面の穴に入る事により完全に姿を消したが、足元では地響きを感知出来る。

「あまり動き回るのは得策ではないな…」
「でもいつまた頭を出すかわかんねぇよおっちゃん！」
いつでも対応出来るように構えるムーン。対し、不意打ちを恐れて慌てるレイ。
わたしは、ムーンみたいに冷静さを持てない、でもレイみたいに騒がないでいた。身体の痛みが引き、やっと集中出来る。
（あの虫は、地表にいるわたし達の位置がわかるの…？）
それがふと疑問。わざわざ土の中に潜り込み、今もこうして地中を駆けずり回る気配が嫌と言う程に感じるのだから。もしかしたら最悪のパターン、襲撃されるだろう。
頭を出した時に、もう一度別の攻撃を試みなければならない。
爆弾も剣も魔法も効かないなら、別の弱点が必ずあるはずだから。
「ん…？」
急に、地響きが止む。それにムーンが警戒心を露わにした目をする。
「うおっ」
地鳴りは再開した。だがそれは、さっきまでわたし達のいる近辺ではなく、
「マリア！！　気を付けろ！！」
遠くの方……安全区域だと思い、わたし達から距離を離して戦いを見守っていたマリアに向かっていた。
先に反応したムーンがそう叫びながら、彼女の元へ駆け出す。ムー

ンの行動に遅れてわたしとレイがあとに続いた。

「や…いやぁ……！」

ムカデが気持ち悪い、そういう嫌悪感たっぷりの顔をしていたマリア。それが今、足元に迫ってきているのはわかっているだろう。
ムーンに警告を言われても、怖がって動けない状態だった。
地鳴りには近付いているが、地鳴りもマリアに近付きつつある。

「マリアぁぁぁぁ！！！！！」

わたしはムーンも追い越し、彼女の身を保護すべくスピードを上げた。
地響き……ムカデの頭だろうか、それと横に並び、わたしはさらに奴も抜かした。
その時にはもう、マリアとは距離がなく、

「きゃあああ！！」

突進するようにわたしは彼女の身体を掴み、その残った速さで一緒に芝生に転がった。
ズズズ…！！、とさっきマリアのいた位置から、穴が開き、ムカデが頭と身体半分程、空に向かって飛び出した。

「あ、ぶなかったぁ……」

大分遠くまで転げたらしい。すぐ起き上がり、相手の姿を確認。奴の周りにはムーンとレイも視認。さっきの安全区域程の距離ではないが、ここなら大丈夫だろう。
わたしはマリアに手を差し出し、立ち上がるのを手伝う。

マリアはおっかなびっくりしつつも、わたしの手を取り、芝生にしっかり立った。

「あ、ありが、とうございま、す……」

驚きと恐怖で息も絶え絶えの司祭。わたしはそんな彼女の目を見、大丈夫だから、と一言伝えて、背を向けた。

まだムカデは身体を全部は出していない。その位置で、身体を振り回して武器にしていた。

避けるレイ、長剣で防ぐムーン。ムカデの長い背はわたしに向いており、今は二人の相手をしている。わたしは、眼中に今はないと思う。

（虫の甲殻、って言うのかな？）

と自問しつつ、両の手の剣を握り直して、駆け出したわたし。

炎の一撃、剣の一撃、爆発の一撃。ん？　待って。

（ダメージを与え続けていけば…）

さっきは一回一回の攻撃でビクともしなかった。ならば、同じ箇所を攻撃し続ければ、ムカデの身体を守る鎧も、もしかしたら……だが、

（試すとなれば、今しかない！！）

それに挑むとなると、危険となる。でも、やらなきゃ勝てないし、王国にもたどり着けない。

今なら、ムカデはわたしに気付くのに遅れをとる。油断している時に、わたしが連続的に攻撃すれば、もしかしたら。

「！」

ムーンがわたしの接近に気付いた。だが、ムカデが頭突きのようにムーンに攻撃、それを回避する彼。

「アルテミス！？」

わたしがムカデの背甲に跳び乗ったのを、レイが気付いた。何故そんな事を、という問いを含めて名を呼んでくれた。

「このぉ！」

ムカデも異変に気付き、頭を持ち上げた。丁度目の前に壁が出来たように、背甲も上がったので、わたしは一振り剣をぶつける。もちろん、反動はさっきのでわかっているので、身体を持ってかれずにしっかり握り、次に反対の剣で一振り。そしたら次を。

「えい！　えい！！　やぁ！！」

ひたすら同じ箇所を、狙いがズレないよう的確に衝撃を与えた。剣の当てる場所や、振り方、当てる方向などを変えながら、同じ動きにならぬようひたすら硬い背甲を攻撃し続けた。しかし、

ズズズ……！！！

「ひゃっ！」

やっとわたしに気付いたムカデも、身体をくねらせてわたしを払い落とそうとした。

わたしはそんなんで落とされないよう足場を調整し、何度攻める。
が、

「！？」

まだ地中に入ったままだった半分の身体を出す行動を起こしたムカデ。故意に振り落とすよりも強い力。
わたしは足を滑らせてしまい、地上に落ちると思ったが。

「アル！！」
「――――――っっっ！！」
「アルテミス！！」
「アル様ぁ！！」

もう自由に動き回れるのだから。その尻尾となる部分で叩き飛ばされてしまった。
みんながわたしの名前を呼ぶ声が耳に入ったが、叩きつけられた痛み、その後に芝生に身体を打ち付ける痛みで、音を聞く余裕がない。
身体はそのまま、痛みを残して仰向けとなった。

（ちくしょう……）

皆は恐らく、わたしの元に来れる状況ではない。わたしの耳に、やっと争いの音が入ってこれた。
地上では死闘なのに、目線の先の空は青く、白い雲もゆっくり素通りする。

（あ……海…）

ムカデに集中していたから、今に知った。海の波の音が、ほんの小

さく、ここに聞こえている。
決まったテンポではなく、不規則に響く波の音。これは……穏やかな音。
故郷で聞き慣れた海の奏でる音は、不思議と痛みを忘れる心地よさだった。

（海神様…）

海と言えば海神様を思い出す。なんでこんな非常時に思い出すのかは、やっぱり潮風と海が近いから。
ウィズでは大漁の日の夜、海神様にその恩恵を感謝すべく宴をしていた。大人も子供も、歌って踊ってご飯を食べて。
……あれ？

（わだつみさま……）

海神様に感謝の歌を。踊りを。
踊り子達の両手には、浜辺に流れ着いた海のもの…サンゴの欠片や貝殻など。ありがとうわだつみさま、また大漁でありますように、と感謝と願いの舞。

「そうだ…！」

思い出した途端に、身体を起こし、立ち上がった。何を思い出したのか。否、思い出す、という単語は語弊だ。

「『神よ、この者に癒しの力を与えたまえ』！」

マリアの僧侶の力が、本当にわたしの痛みを消してくれた。声のした横を見れば、マリアの不安いっぱいの目と合った。

「アル様、大丈夫ですか？」
「うん、ありがとうマリア！」
「アル様！？」

まだまだ心配してくれる彼女が、わたしを呼び止めるが、振り向かず、ムカデの元へ駆け出した。
芝生踏む音、徐々に間隔は狭まり。小さい波の音が、わたしの頭の中で徐々に大きくなり、ふるさとで聞いた音と重なる。

「！！」

身のこなしの良いレイが、ムカデの頭突きを受けてしまい、飛ばされてしまう光景を見てしまう。ムーンが彼に気を取られ、次のムカデの体当たりにはギリギリ防ぐ。よろめくムーン。

（海神様、振り付け間違ってたらごめんなさい！）

海神様への舞。それは母がまだ生きていた頃に、わたしも一緒になって歌って踊っていた。
両手には小さな貝殻を持ちながら。でも、今は、

「――――我らはわだつみの子ら」

父の剣を両手に。無伴奏で、わたしは舞の歌詞を口ずさみながら、ムカデの背甲に飛び乗った。

「――――我らは海を生きる子ら」

舞の振り付けは、主に腕の動き。波の表現を意味し、わたし達はそ

の恩恵と災害を共にする。

「――――我らはわだつみの子ら！」

剣は振り付け通りに軌道を描く。狙うは先程攻撃を与え続けた箇所。案の定、ムカデが全身を動かしてわたしを振り落とす。口ずさみ程度の歌は、踊りと共に力強くなっていた。もちろん自覚はする。本来は、こんなに大きな声で歌うものではない。

「我らは海を生きる子ら！　我らはわだつみの下（もと）に生まれ　共に生きて　共に沈む子ら！！」

揺れる足場は踊りには適していた。客観的に見れば踊りは、普段わたしが剣を振るうのと大して変わらない動きだった。わたしの故郷で聞いて学んだ歌が踊りが、剣の技術となるなんて、今更気付き、驚いた。

「だから我らはわだつみを愛し　同胞を愛す！！　わだつみの子らは　皆　仲間！！」

歌も剣も力任せに振った。そしたら、

ギィィィィィィ！！！！！

ピンポイントで狙っていた背甲に、ヒビが入った。それに慌てたように鳴き声（虫に鳴き声？）をあげたムカデ。あともう少し、ワンテンポ早めてみようと試みた。

「海原のわだつみよ！！　我らはそなたの子ら！！　この先の子孫らも！！　そなたを愛し！！　そなたに愛され！！　未来を歩む！

！！」

幼いわたしだったら、こんなに早い振り付けは不可能だったかも。
今なら出来る。
ガン、ガガン、ガンガン、ガガガンと振り付けは背甲に不規則な音と殴りを与え、そして、

ギィィィ！！　ギィィィィ！！

甲殻は壊れ、生身と思われる身体がその部分露わになった。

「我らは！！」

両の剣を逆手に持つ。この動きは振り付けにはないけど。

「わだつみの子ら！！」

ムカデのその生身を突き刺した。その勢いに反応し、虫ならではの液体も飛び出て、ムカデが更にジタバタと暴れ出す。
それに負けず、わたしは更に剣を食い込ませた。ムカデの鳴き声は更に更に響いていく。

「アル！　離れろ！！」

ムーンがそう呼びかけるが、ムカデの声も段々弱まり、動きも鈍くなった。もうそろそろだろう。
彼の呼び掛けに応えず、大人しくなるまでわたしは剣を突き進めた。

「大丈夫！！」

心配かけぬよう一言。わたしはムーンに言った。
その頃には、ムカデの声も聞こえなくなり、長い大きな身体も力を無くし、芝生に脱力、横たわった。
絶命を確信し、わたしは剣を抜いて鞘に収めた。ムーンと、マリアに傷を治してもらったレイとその彼女も、わたしへと駆け寄る。わたしはムカデから降り、皆の元へ走り寄る。

「大丈夫か…アル？」
「大丈夫よ」

よかったぁ…と安堵をするレイとマリア。ムーンもそんな小さなため息をする。
戦いが終わったから、気が抜けたわたし。
しかし、ムーンが突然目を見開き、

「逃げろ！！」

わたし達を無理矢理促しムカデとは反対方向へ。言われた通り走って、振り向いたら、

「うわあああああっ！！！？」

死んだと思った相手が、道連れのつもりか、最期の最期に残った力で尾を振り回してきた。
やばい、ムーンが早く気付いても、これじゃあ間に合わな

「『ヘーパイストス』！！！」

かったが…。
最後尾にいたマリアが、神の防衛炎壁を祈り、尾の薙払いを跳ね返

した。
その衝撃に、マリアは尻餅をつき、わたしら三人もその衝撃を、痛くはないが、芝生に倒れた。

グギィィィ……

ムカデの最期の声。
それを確認したわたし達は、やっと気が緩んだ。そのまま各々、芝生に横たわったままに。

「ま、マリア、ありがとう……」
「いえ…皆様、ご無事で、何よりです…」

マリアの方を見ると、彼女もそのまま座り込んだままで、立ち上がる気力もないらしい。
レイとムーンも見れば、同様に横になったまま、やはりその気力がない。

「アルテミス…お前、やっぱすげぇよ……」
「何が…？」

レイが空を見上げて、わたしに話を振った。

「なんだよあの歌、あの踊り。余裕だったじゃん」
「……余裕じゃないよ」
「海神への歌か…」
「…知ってるの？」

ムーンの確認する声に、わたしは問いかけた。

「お前の故郷だけじゃなく、湊町の出身者ならば誰もが知る歌だ。それを戦術とするのは意外だったが……」
「急に思い出したのよ。ほら」
わたしは耳をすました。
「波の音が教えてくれたんだもの」
そう言えば、辺りは静かになり、みんながそれを聞こうとしてくれた。
風に揺れる芝生の草達。その中に混じって小さく呟く、海の波達。
「……海神様は、わたくし達だけじゃなく、湊町の皆様に愛されているのですね」
「わだつみさまかぁー…」
マリアとレイが呟くがそれは短く、わたし達はしばらく波の音を聞いていた。
こんな形で助けてもらったから。わたしはウィズに生まれて良かったと思っていた。
母さんが、わたしの故郷をあの場所にしてくれたんだ。それが嬉しくて、胸がいっぱいになった。
「そろそろ行くか…」
「おうよ！　おれ、腹減っちゃった！！」
「あらあら」
それぞれ立ち上がり、わたしも足の裏をちゃんとつけて、起き上がる。レイの発言にマリアがくすくす笑った。

「魚料理久しぶりに食べたいなぁー」
「おれは肉が食いてぇ！」
「そんな金銭的余裕はないだろう…」
「さぁ、参りましょう」

戦ったせいで随分ずれた王国への道へと、わたし達は歩き出した。

第五十三章

―――――――――
自由と信仰の湊王国
サーサリー
―――――――――

出入口の門に近付けば近付く程、波の音や潮風の香りが強くなる。

「やっぱ塩臭い…」
「潮風の香りだってば」

さっきもこんな話、レイニーとしてた。
門の近くには二人の門番が立っていた。
わたし達をジッと見据え、通すか否かを定めているのだろう。
だが、急に睨むのをやめる。何故なら、

「司祭様…ですか？」

会話が出来る距離まで来た。一人の門番がマリアンヌに問いかけた。

「はい。新しく任命されました。サーサリー教団、ユーピテルのマリアンヌと申します。本日、任命の件を陛下様にご報告する為、参りました。彼らはわたくしの護衛人です」
「わかりました…どうぞ、お通り下さい。神のご加護があらん事を…」

「神のご加護があらん事を…」

二人の門番は十字を切り、入国を許可してくれた。マリアも同じように応え、門を通る。わたし達はただついて行くのみ。

「おっかしぃな……城下町に門番なんかいたか…？」

「ああ……」

「え？」

ボソリと、わたし達にしか聞こえない声でレイが呟いた。ムーンも同意として相づちを打つので、わたしはそれに疑問を持つ事となる。

「魔物達が活発になったからでしょうか…？」

マリアもレイ達のように呟く。

門番は本来必要がなかったのかを、わたしは三人に聞いた。大陸出身者のレイがすぐに答えてくれた。

「ああ。信仰国だし、湊町も兼ねているから、平和主義な王国が門番なんか配置してなかったさ」

「そうなんだ……」

船着き場の事件も関わっているのだろうか。世の中が上手くいっていない現状を思い知らされた。

「でも……町ん中は変わんないよな」

「そうですね」

門を過ぎて見渡すは、湊町である城下町の風景。民家やお店等があるのは、サンポリアとは変わらないだろうが、全部が同じ、という

ワケではない。
波の音や潮風や、町人と思わしき人々の生活感や服装などは、やはり異なるところがたくさんある。
威勢のいい声が聞こえてくる湊だって、サンポリアにはないものだ。
ウィズのと聞き比べても、ウィズにはないものもある。

「自由と信仰の湊王国…か…」

ムーンが独り言のように呟く。わたしはその国の異名を聞き、納得の意に一人で頷いていた。

「それでは皆様……」
「え……？」

急に話を切り出し、改まった素振りでわたし達に向き直ったマリア。
どうしたの？、と思い、わたし達は彼女に注目した。

「ご一緒するのはここまでです。危険を顧みず、わたくしの護衛をして頂き、本当に感謝いたします」

そうだ…わたし達が彼女といるきっかけは、送り届ける事と帰還の為に来た事。
今になって、別れる、という事に覚悟をしていなかった為、寂しさがこみ上げる。

「なんだったら、ちゃんと城門まで見送るよ、マリア」

レイも、いつでもいられる感覚で思い込んでいたようだ。彼女とのいる時間を延ばそうと、慌てつつこんな事を言い出した。
対し司祭は、首を横に優しく振った。

「皆様には、帰るべき場所があるでしょう。そちらを優先すべきだと思います…。昼頃なら、出航する船もあるでしょう、そこからサンポリアにお帰り下さい…」
「でも……」
「マリアンヌの言う通りだろ」

しっかり現実を見る大人の言葉が、わたしとレイの思いを押し潰す。厳しいのは、彼が……ムーンが優しいから。受け止めるのに、わたしには衝撃が強い。
マリアはわたし達の帰路の無事を祈って言葉にしている。

「また会えるのだから…そうだろ、マリアンヌ……」
「そう…全ては神の、お導き……」

だって、彼女も、別れるのがつらいから。無理する笑顔に涙、を見ているこっちもつらくなる。

「マリア…」
「すみません……ムーン様のおっしゃるように、会いたい時に会えるのに。やっぱり、お別れの時は、寂しくて…」

謝罪する事なんかないのに……彼女は隠すつもりもなく、自分の目に溜まる雫を指で拭う。

「すぐに出発するワケでもない。出航時間を待つ間、この町で会う事もあるだろう…」
「じゃあ、もし時間が空いてたら、マリアに会いに行ってもいいのか？」
「マリアは国王に挨拶に行くんだから、その途中にあなたが割り込

んだら迷惑よ」
「ひでぇよアルテミスその言い方…」
「サンポリアに帰ったら基本礼儀作法を叩き込むよう団長に告げておこうか…」
「おっちゃんまでぇ！！　団長にだけは言っちゃダメだって！」

二対一。レイをからかうとムーンもノってくれる。それにマリアがこらえきれず、声を出して笑ってくれた。

「なんだか…いつでも会える気がしてきました。皆様を見ていると」
「会えるよ。神様のお導き、でしょ？」
「はい！」

彼女の笑顔に、涙はなくなっていた。

「今までありがとうございました！　また、お会い出来ますように」

＊＊＊＊＊

そうして新司祭とは、出入口門付近で別れを告げた。
湿っぽいなんてものはなく、また明日になれば会えるような、そんな感覚で。
その方が、会う日まで頑張れるから。
わたし達も気を取り直して、船着場に向かう。

＊＊＊＊＊

けれども。

「出航出来ない…？」

「ええ、サーサリー南端の船着場が魔物に襲撃されてからッスよ。ウィズ行きの航路は、あの辺りにも近いから、危険という事で船が出せないんスよ」

「そんな……」

非常事態が起きた。湊の船乗りに、サンポリア行きの船を確認したところ、こんな話を聞かされてしまう。

わたし達三人は顔を見合わせる。レイも困惑しているし、ムーンは他手段を考えているのか、顎に手を添えて悩んでいる。

「でも、あの襲撃以来、まだ何も起こっていないッスから、もしかしたら、明日の朝にはサンポリアに行けるかもしれないッス。もしかしたら…ですが」

そんなわたし達に助け舟をする船乗り。しかし、言葉に確信はなく、ますます迷ってしまう助言。

「わかった…明日、またここに来よう」

最終決断をムーンが口にした。

「申し訳ないッス。城下町はいろんな店や宿もあるッスから、それで時間を潰してほしいッス」

焦りは禁物だと言うように、船乗りはわたし達に宿泊を勧めてくれた。

そして、湊を後にし、わたし達は今夜の宿探しをする。

「ここまで影響があったとはな…」

「ええ……」

会話は、先程の船乗りから聞いた話の感想のようなものだった。

「明日が待ち遠しいなぁ。反対側の船着場も使えない。ここも使えない。閉じ込められちまったじゃん」

「そうね…」

船を利用しない街の中の人々は、わたし達の悩み等知らず、各々の生活を過ごす。

道で出会い、互いに知人なのか世間話を始めた女性達。周囲の事などお構いなしに手を繋ぎ、店を見回る男女カップル。雑貨店だろう出入口付近に、イライラしている一人の男戦士が。待ち合わせかな？　待たされてるとか。

「もし、船を利用出来ず、立ち往生している者達が多くいるならば、早めに宿屋を探さなければな…」

「どうして？」

「その者達も明日を待つ為に部屋をとるだろう。空き部屋がなくなるぞ」

「やばいじゃんそれ！　片っ端から探して部屋とろうぜ！」

ムーンに聞かされた予想話にレイが慌てる。わたし達を置いていくように駆け出し、自分だけが突っ走っているのに気付き立ち止まる。遠くの彼がこちらに振り向く。

「アルテミスもおっちゃんも手分けして探そうぜー！！」

そう言い残し、人混みの中に消えてしまった。そんな同僚に思わず呆れのため息。ムーンとほぼ同じタイミングでついた。

「もし見つかったら、町の出入口付近で落ち合おう」
「りょーかい。わたし、レイと一緒に探すね」
「頼む」

短い打ち合わせをし、わたし達も別れ別れになる。レイは知らないだろうから、わたしが付き添わなきゃはぐれてしまう。
潮の香りを感じつつ、わたしは一足先に行ったレイの姿を追いかけた。

＊＊＊＊＊

何やかんやで町の各宿屋を巡るが、わたしとレイは見つける事が出来ず。とぼとぼと合流場所に行くと、ムーンがいた。
彼から宿の部屋がとれた事を聞き、安心。
そして今、武具も外して一室でくつろぎタイムである。

「おっちゃんのおかげで助かったぜー」
「お前達の方は、全部埋まっていたのか？」
「ええ…やっぱり船旅が行き詰まっていた人達ばかりで、空いてる部屋がなかったの」
「なるほど…」

宿屋の女将さんや主人の話を聞けば、サンポリア直航、またはユゴリアン直航の船は立ち止まっているままで、そのお客が絶えないと

の事。
あの辺りの海路は、魔物の影響がある、という事だった。

「部屋とれたはいいけど、どれくらい長居しなきゃならないんだ？」
「うーん…」
「こればかりは、私もわからないな…」

安居にいるが、後先は不安だった。
４人部屋のベッドに各々、ムーンは腰掛けたり、わたしはうつ伏せのままひじをついたり、レイは座って後ろに倒れて仰向けだったり。
開け放した窓から風が入り、外の生活の音と潮風も一緒に来る。
わたし含め一同、それぞれに今後の事を考えるが、そんな雰囲気は徐々に薄れてくる。
そんなだんまりの中、全く関係のない空腹の音が。

「……そういえば、まだ昼飯食ってないや」

上体を起こし、自分の腹の虫に苦笑するレイ。気が抜ける…考える気が抜ける。いや、むしろその気を取ってくれてありがたいと思った。
おかげでどんよりムードが消えてきたから。

「……」
「おっちゃん？」

ムーンも立ち上がり、自分の荷物から何か取り出す。見慣れたミカラモだった。それをわたし達それぞれの元に近寄っては、一粒ずつ差し出す。

「昼食だ」

「いやいやおっちゃん、せっかく城下町に来たのに…」
「サンポリアに帰るまで余計な出費は抑えた方がいいと言ったはずだ」
「でもさぁ…」

自ら提案した事はしっかり守るムーン。対してレイは、息抜きをしたいのか批判の声。
だが、それを聞いてるのか、いや聞いても受け入れないだろう、ムーンは部屋を出ようとする。
どこへ行くのか呼び止めたら、必要な物の買い出しに行く、と短く答えて行ってしまった。

「…いただきます」

二人になった部屋。わたしはせっかくもらった実を口にいれる。小さな粒なのに、噛めば果物の果肉の歯応えがある。ある程度甘酸っぱい味を出して、飲み込む。

「…ごちそうさまでした」

この間、一分も経たない。

「アルテミス！！」
「何よ急に！？」

本当に急に、レイがわたしの名を叫び呼ぶ。こっちは食後まったりしようとしていたのに。

「せっかくなんだから、外出ようぜ！」
「え…？」

「おれ、サーサリーにはよく家族と来るって言ったじゃん。だから案内には自信があるぞ！」
「でも、ムーンは…」
「おっちゃんは外出するなって言ってないし、ここに来る事なんて滅多にないかもしれないぞ」
「……」

レイの言う事には一理あるが、今は非常時だし……そんな現抜かしている場合では…。

「ああ、そう。じゃあおれだけ行ってくるっ」
「！？」

わたしからの返事がない、つまり、同行してくれない、と捉えたレイ。必要最低限の荷物だけを身に付けて部屋を出て行った。

（…レイ一人じゃ不安だ）

放っておけない子供みたいなレイだ。言いようのない責任感に駆られ、わたしもせめて財布だけは持って彼を追いかけに部屋を出た。

第五十四章

―――――――――
サーサリー城下町と海と
―――――――――

追い付いたはいいが、

「なんだよー。最初から一緒に来りゃ良かったじゃん」

「違うって。あなた一人行ったらどこで道草食うかわからないから付き添いよ」

「ふーん…」

結局は同行って形になってしまった。

もしかして、わたしがレイニーの身を案じて今に至るのは彼の計画？　…考え過ぎか。

わたしの答えに、振り向いては嫌味な笑みを浮かべ、前方に向き直ったレイは迷いなく歩いていく。わたしは彼のやや左後方を位置してついていく。

「アルテミス、おれご飯食うけど食べる？」

「だからわたしは…」

「自由とは言うけど、城下町もやっぱり信仰者が多くてさ、肉と魚を扱う店とかって結構少ないからさー。家族と来る度におんなじ店に食いに行くんだぜ」

わたしの話も聞いてよ、と思ったが、楽しそうに語る彼を見たらそんな言葉も言えなくなる。
人の喜びの感情に対して、水を差すような言動は失礼だろう、わたしもされたら不快だろうから、というわたしなりの理由。

「行こうぜ？」
「というか、もう行ってるんでしょ？　今」
「そのとおりっ」

問答に答えられさらに正解してくれたように笑うレイ。
こうなれば、付き合うしかない。この街は彼の思い出の一つだから。

＊＊＊＊＊

「いっただっきまぁす」

人も建物もまばらな所に、そのお店はあった。パッと見、古くから建っている民家かと思ったが、レイがためらいもなく玄関を開ければ、内部は我が家を思わせる食事屋だった。
お客さんも二人しかいないし、店主らしきおじさんも、レイを見て豪快な声で挨拶した。久しぶりじゃねぇかレイニー！、と。
そして今、海を眺められる窓際の席。レイと向かい合っているわたし。
彼は運ばれたシンプルな料理を美味しそうに食べる。正方形に切られた薄いパンで、ミンチして焼いた肉を挟んだもの。肉のみならず野菜の葉が二枚程見える。

「やっぱおっちゃんの作った料理はうめぇよ！」

「だろう?!　この道二十年！　安くて美味い、が売りだからなぁ！」

店の奥のキッチンにいるおじさんに向かって、レイは大絶賛の言葉。返答の音量もレイに負けぬように良く響く。他のお客さん二人も常連なのか、同意の意で頷いている。

そんな光景に目をやった後に、わたしは海を眺め始めた。

（綺麗…）

ウィズで見ている海の景色とはまた違って見えるのが不思議だ。同じ海の水なのに、場所や天気、海以外にも見えるものが違えば、同じ景色は一つもないからか。

「あうふぇひふはふあふぇーお?」

「え?」

「ほえ」

レイが急に何か声をかけてきた。がっつきながら。

語尾上がりだから問い。聞き直そうとしたら、彼は今口に入れている物を指差した。

アルテミスは食わねえの?、か…。わたしはいらない、と短く答えた。

さっきのチカラモで充分空腹ではないから。この木の実の力は本当に助かる食物だ。経済的時間的場所的にも、冒険者向け。

「…すんげぇ安いのに、せっかくだから食えよー」

と、噛んでいたものを飲み込んで話した彼は、食べかけあと一口く

らいの肉サンドを差し出してきた。
それはレイのなんだから食べなよ、と断ったが、

「食べろって」
「んぐっ！？」

強行突破ってやつだ。わたしの隙を突いて、口の中に押し込んできた。なんてやつ。
だが、吐き出すワケにもいかない、観念してそのサンドを味わった。

「……美味しい…！」
「だろぉ！？」

お腹減ってないのに、これは美味なご飯だ。もう一口食べたいかも。
見た目以上に肉は柔らかく、野菜の小さな葉っぱもちゃんとシャリシャリ新鮮だった。
パンと肉と野菜、という組み合わせが良い事を初めて知った瞬間だった。

「安いって言うけど、いくらなの？」
「１５０デイル」
「嘘っ？！」

お肉使ってるのにその値、思わず声があがる。他お客と店主が、わたしの反応に笑い声をあげた。

「世の中にはいろんなものがいろんな値段で売ってっぞ。お嬢ちゃんも、いい勉強になったかな？」

店主がひょっこり顔を出してきてこんな事を言ってきた。まるでわ

たしが世間知らずみたいな扱い。否、もともとサーサリー王国は初めて来た場所だから知らなくて当然が…。
レイが食べ終わった後も、店主との思い出話に花を咲かせていた。

＊＊＊＊＊

「また来るよ、おっちゃん」
「おう、気をつけて帰れよ」

結構時間は経ったはず…まだお昼と言える時間帯だが、そろそろムーンも宿に戻ってるはず。

「もうお腹いっぱいでしょ？　ムーンが心配するだろうから宿屋に戻ろうよ」
「うーん……まだ寄りたい所あるんだけど…」
「レイニー」

少し声のトーンを低くし、改めて彼の名を呼んだ。制する意味の呼びかけである。

「……」
これにはさすがのレイも怖がり、観念してくれた。はぁ、と溜め息はするが、聞き入れてくれたならばその態度に癪が障る事はなかった。

「アルテミスは真面目過ぎるよー」
「真面目不真面目の問題じゃなくて、今は非常時なんだから、余計な行動を取るワケにはいかないって言いたいの。わたしだって仕事

に寝坊や遅刻はするんだから…」
「あ、そっか。真面目でも失敗するもんな、アルテミスは」
「なんでそれで納得するのよ。あなたよりはマシな方よ、わたしは」
そんな会話しながら、人気のないこの地域から、人々がたくさん交流している光景へと足を進めていた時だった。
「っ？」
「どうした？」
人の流れの中に、見覚えのある後ろ姿を見かけた。ムーンより背丈は若干小さいのを覚えているが、それでも充分長身の男性。
レイよりは薄い茶髪で、男だってのにセミロングだ。前髪もその長さ、真ん中で分けていて額にはバンダナをしていた。
後ろ姿から見ると、普段見る剣士のそれとは違う。ローブのようなマントがなびいている。
「！！」
だが、確信は持てた。その人が左に曲がろうと横から見る姿を見せたから。何故バンダナしてないのか、何故そんな武具のない服装なのか、でも髪型と見慣れた顔は間違いない。
「エンバシーさん！？」
「えっ！？　副団！？」
我らの副団長だ。
なんでサーサリーにいるのか、そんな疑問など後で聞けばいい。彼に会えば、より早くサンポリアに帰れるような気がしたが故に。
わたしが駆け出し、レイも慌てて追いかけてくれる。

エンバシーさんらしき人は、建物の影に隠れてしまったが、進んでいるであろう方向は把握している。
人混みの多い通りに出て、左方向を見たが、

「あれ……？」

この通りはますます人々で多かった。住民、観光客、アキンド、旅の戦士などなど……。多くの雑貨店や喫茶、武具屋に服屋等が並ぶからであろう。
わたしは、エンバシーさんと思われる者の姿を見失ってしまったのであった。

「副団は！？」
「ごめん……見失った……」

追いついたと同時にレイが問いかけてきた。わたしは申し訳ない気持ちでいっぱいで、答える声が弱くなる。

「確かに副団長だったのか…？」
「いつもより服装が違かったけど、顔に間違いなかったよ…」
「そういや、副団はサーサリー王国の出身って言ってたし……里帰りでもしたのか？」
「だったらなんでこんな時期に？　航路に魔物達が現れたばっかりなのに…」
「それもそうだよな……」

彼の推理にわたしが疑問を問えば、彼は考え込む。
もう一度周囲を見回してみるが、もうあの姿は見当たらない。
わたしはどうしても、あの人がエンバシーさんであって欲しい事を希望していた。多分それは、わたし達が今、このようにはぐれた状

況下だから、誰か一人でも仲間を見つけたら安心出来るからなんだと思う…。

「もしかしたら、他人の空似ってやつかもしんねぇぞ？　世の中には自分に似た人は三人いるって言うくらいだし」

「そう…」

レイはあまり気にしないようだ。そりゃ、あの人の顔を見たのはわたしだけだから。レイはその一言で片付く事が出来る。

「あ、アルテミス、この店だよこの店！」

「えっ？」

話が終われば別の話。レイがわたしの手首を掴み、引っ張っていく。指差す方向にある雑貨店だった。

「ちょっちょ、ちょっと、宿屋に戻るんじゃ」

「まだ時間あるんだから行こうぜー！」

「……」

彼に引っ張られるがままに、わたし達は店内へ。

しょうがない、エンバシーさんの事は忘れて、今は帰る事を気にかけなければ。否、宿屋に帰る事が最優先だ、今は。

＊＊＊＊＊

店内は様々な物が棚に置かれている。ここは主に、アクセサリー系を売っているとみた。

一般人が身につけるネックレスに指輪、または魔法使いや戦士達には欠かせぬ武具同等の装飾品など、もちろん薬草薬品日用品も扱っていた。
店の中は、街人や旅の剣士などもいた。この店は繁盛しているのだろう。

「おれ、よくここでナイフにつける毒薬とか、爆弾作る為の材料とか買うんだよ。ここは品揃え豊富で、値段も他と比べるとお得だからさ」
「へぇー……」

確かに、ここにある物はみな良品、なのに驚く値札ばかりが並ぶ。
レイの言葉に嘘はなかった。

「？　これなぁに？」
「ん？」

店内の隅、一般人向けアクセサリーの棚だ。他は綺麗に並べて整頓しているのに、低く位置する棚には無造作に並べられている品々があった。
ネックレス、ブレスレット、イヤリング、ピアス、指輪、ベルト……パッと見、他の物と変わりはなさそうだが…。

「ああ…、お客様、そちらはワケあり商品なんですよ」
「え？」

わたし達の様子に気付いたのか、女性の店員が声をかけてきた。

「私達が並べます商品は全て、腕の立つ職人さん達が手掛けたものなのですが、作成中にちょっと失敗してしまった品々もあるんです。

宝石が欠け過ぎたり、修復出来ない程切り過ぎたりとか…」

苦笑いを浮かべながら語る店員さん。言われて見れば、このネックレスの宝石にヒビが入っている。レイもピアスを手にし、眺めている。

わたしもそれに目を移したが、雫型の水色の装飾石には、黒々とした石の部分も……削り忘れたのか？

「ですから、この街のお客様にはあまり人気も無く、低いお値段でお売りしております。中には魔法石もありまして、見た目は問題アリですが、戦士や魔法使いの方達にはこんなものでも充分効果があるみたいなんですよ」

「へぇー」

レイはその雫型装飾がさがっているピアスが気になっているようだ。わたしは他にも見て、欠陥を探してみた。どれも全て、１００デイル以下という目を疑う値段ばかりだ。

「お姉さん！　おれ、これ買います！」

（え？！）

「ありがとうございます！　そちらは水の魔法石のピアスなんです。こちらへどうぞ」

レイは店内さんに宣言するように言った。店内さんもそれに対し笑顔を浮かべ、会計カウンターへと案内する。

そういえば、入団式で新しい服と防具に着替えた時、レイはわたしの右耳のピアスを見て『雨関連の装飾が欲しい』とか言っていたっけ。

（だからあれにすぐ手が伸びたのね）

レイの衝動買いに納得した。

＊＊＊＊＊

「いいもの買っちったぁ～」

上機嫌だ。紙の包みをしっかり手で持ってる今のレイは、スキップしそうな勢いだ。
そして今度こそ、宿への帰路を歩かねばならないのだが。

「ねぇレイ、満足したなら」
「じーちゃん久しぶりー！」
「おおー！　バルナのぼうず、久しぶりじゃのぉ！」
「……」

言ってる側から、いや、側にいなかった。雑貨店を出て少し歩いた先の武具屋に向かったのだ。しかも知人のお店らしい。
ドアがなく、露店のような建物。店先にはどうぞご覧あれと言うように武器防具が並べられている。店の奥からガンッ、ガンッ、という金槌で硬い物を叩く音が。
レイは知人のおじいさんと楽しそうに話しているから、他に何人か職人がいて、現在進行形で武器をつくっているのだろう。

（鍛冶屋も兼ねてるって事ね）

わたしの事そっちのけで会話している彼の元へ歩み寄る。すると、おじいさんが私に気付いてくれた。白髭をたくわえ、白く長い眉毛

が特徴的な老人だ。

「ぼうず、このめんこい娘はお前の連れかのぅ？」
「うん、同期の騎士団。アルテミスって言うんだ」
「は、はじめまして」

不意にレイがわたしの紹介をした。無反応では失礼だから、おじいさんに頭をさげる。

「ふぉふぉ、こんなめんこいのが騎士団にいるたぁ、世の中変わったもんじゃわい。もしや今、でぇと、しとるのか？」
「！？」
「ちっ違ぇよじーちゃん！！　昼飯の帰りにたまたま寄っただけだってば！！」

おじいさんの『デート』という発言には驚いたし、そんな風に見られている事にも目をびっくりした。
レイは慌てて否定する。必死だ。

「なんじゃ、つまらんのぉ…」

期待外れだったのを口にするおじいさん。
誤解されないだけでもわたしは安心した。別にレイが嫌いだからってワケではない。

「そうじゃ、ぼうず。最近新しく弟子が増えてのぉ。その弟子がまた格安のナイフを大量につくったんじゃ。お前ならさらに半額で売るが、どうかの？」
「今？」
「今じゃなきゃいつ売るんじゃ」

商売人としての話題を振るおじいさん。弟子がいる、と言っているところ、このおじいさんは鍛冶師なんだなぁと思った。
問われたレイは突拍子な話だったようで、険しい顔で悩み始めた。

「悪ぃじーちゃん。財布に余裕がなくて、それに、今は緊急時でたまたまサーサリーに来ただけだから、さ」

レイが申し訳ない表情で買い物をしない事を口にした。財布に余裕がない、とは言うが、先程から食べ物やらアクセサリーやらと使ったが故か？
でも、彼は今のわたし達の状態を忘れているワケではない事に、わたしはどこか安堵感があった。
ちゃんと自覚はしていたのね、と。

「そうか……残念じゃのぉ。いつもなら大人より大人買いしとるお前じゃから、今は本当に余裕がないんじゃな」

レイの事情をすんなりと受け止めてくれたおじいさん。また来る時を楽しみにしとるぞ、とにっこり微笑んだ。

＊＊＊＊＊

それで区切りよく別れ、やっと宿屋に

「どこ行くのよ。宿屋と反対方向じゃないの」

帰る

「というかあの食事屋に戻ってない？　湊の更に反対側って感じが…」

はずなのに、

「ねぇどこ行くの？」

レイはまたあの人気のない近辺に向かっていた。

「ここだよ」

とにっこりスマイルで返事し、彼が示したのは、丁度たどり着いた下り石段。緩やかな階段を目で更にたどると、

「わぁ……」

白い砂浜と青い海に空。わたし達よりも先に人は来ており、子供らがバチャバチャと水遊びをしていた。それを見守る母親らしき女性は砂浜で佇んでいた。

「だが、ここじゃない」

「へ？」

カッコつけたような言い方をしながら、レイは階段をおりていく。

「城下町には教会の人の守護魔法陣が施されているけど、海にもそれはちゃんと効いてて魔物が寄り付かないんだ。限度があるけどな」

「ふーん…」

だから子供達の楽しそうな光景を目の当たりに出来る、って事か。
だけど、ここじゃない、と何の関係が？
レイは海を横手に歩き出す。親子達はわたし達に気付かず。

「どこ行くの？」

何度目かの問いに、レイはやっと具体的に教えてくれた。

「あそこ」
「えぇっ？」
「あの崖の下に、洞穴があるんだよ」

王国を囲む防壁の内側にはない、断崖絶壁を指差した。

＊＊＊＊＊

崖の下に行けば、レイの言うように、草花達に邪魔されて普通じゃ見えない洞窟の入り口があった。大人一人がやっと通れるような洞穴。さほど距離はなく、覗いてみれば向こう側には出口の光が差していた。
レイはその穴に入り、先に進んでしまう。わたしも彼の後を追う。向こう側の光に着けたのはすぐで、わたしもレイのようにその中に進めば、

「わぁ…」

上空から見るならば、崖のくぼみに砂浜があった。
さっきいた砂浜と同じ、こっちも波が寄せて返す、を繰り返す。崖

の壁所々に草木が生えており、それが程良く屋根のような役割をしていた。

「おれだけしか知らないプライベートビーチってやつだ！」

と、自慢気に語るレイ。よくこんな所を見つけたねぇ…、とわたしは感心した。

「なんかよく知らないけど、あっちよりこっちの方が、砂浜にいろんなものが流れついてるんだよ。探してみよーぜ！」

と、ブーツを脱ぎ、ズボンを濡れないよう巻き上げてから、彼は波に足を歩ませ、地面に目を凝らした。

本当?、と呟いたわたしだが、海水に足を浸すのは昔から大好きだから、彼に習って履き物を脱ぐ。

「おっ！　早速ラッキー！！」

と、片手のグローブだけ取って、見つけた物をその手で伸ばした。

彼が手にしたのは、遠目からでも刃こぼれしてるのがわかる刃体の短いナイフだった。

わたしはレイの元へぱしゃぱしゃと駆け寄った。

「それ使えないんじゃ…」

「使えないけど、素材屋に売ればちっとは儲けもんだぜ。こういうのがいっぱい見つかるから、アルテミスも探してみろよ」

わたしの忠告を受け入れずに勧めるレイ。そこまで言うのなら、

「…うん」

わたしも、ブーツと両のグローブを外し、波の来ない砂浜へと思いっ切り投げ捨てた。

＊＊＊＊＊

わたしも目を凝らした。無理に凝らさなくても、サーサリーの海の底は透き通って良く見える。
ふと、砂に半分埋まっている見慣れた物が。

「うっそ～?!」
「どうした?」

すぐに手にし、水滴と一緒に持ち上げた。

「デイルめっけ!」

銅貨だ。一体どこから来たのだろうか。でも、ここに流れ着いたのならば、今ここで手にしたわたしの物だ。

「うっそー!?　こうしちゃいらんねぇぞー!!」

わたしがレイに向かって掲げるように見せた効果なのか、いきなり必死に目を見開いて砂浜を凝視する。
そんなに敵対心見せなくても…と思ってまた目を下ろしたら、

「あ、まだデイルがあった!」
「えー!?　アルテミスばっかずるいぞー!!」

さっき取った箇所に貯まっていた模様。取りこぼしのないよう拾おうとしたら、レイは自分の立ち位置から探すのをやめ、バシャバシャとこっちにやってきた。

「ちょっ、と冷たいって」

「三枚あんじゃん！　おれに一枚いいだろー？　さっきじーちゃんの店で買えなかったんだからよぉ」

「それは自分の計画性がないからでしょ？　あ、これなんだろ？」

「お！　ナイフ！　しかも使えそうじゃん！」

「じゃあこれあげるからデイルはわたしのものね」

「それとこれとは関係ないだろー！？」

「だから冷たっ、って今わざとかけたでしょ！？」

「うるせーな！　くれないアルテミスが、あ！　デイル！！」

「ちょっとそこはわたしの陣地！！」

「おれのだってば！！」

「ちょちょちょっとやば」

「うわあああああっ！！」

ばっしゃーん。何の音か。言わなくてもわかるだろう。

＊＊＊＊＊

びしょ濡れになったのは仕方がない。わたしもレイも開き直ってお宝探しを続行。お金だけじゃなく、見た事のないアクセサリーや、もう使えそうにない武器や欠けた鎧等が、海水の砂に埋まっている。波の動きで砂が少しずつどけて、それでカレラが姿を現してくれるのだ。

レイは探し物中に、こんな事を言った。

「どうしても必要な物が買えない時は、ここに来てるんだ」

もう何個目かの小さな指輪を見つけて、わたしに振り向いた。

「でも、買うよりも良い物を見つける事もあってさ。おれにとっちゃここは、宝島みたいなもんなんだよ」

波が来ず、日陰の下にある古い漂流木に、座って休憩しているわたしに語ってくれた。

「いいの？　わたしなんかがここに来て。プライベートビーチってやつじゃなかったの？」

ふとした疑問を口にした。今まで自分だけしか知らない場所を教えるなんて、いくらレイでも秘密にしたい事や誰にも教えたくない事があるはずなのに。

「いや。おれもそろそろ、もしかしたらだけど、忙しくなって、こんな所に寄り道してる暇がなくなるだろうから……」

「え…？」

弱ったような声で理由を返した。それはどういう意味なのか。

「だ、だからさっ、せめてアルテミスには、おれの好きな場所の一つを教えたかったんだよっ。えとっ、ムーンのおっちゃんも一緒だったら良かったけど、さ…？」

「？……」

そんなに慌てて返答しなくても。何故。
わたしは、多分彼がわたしを仲間として見てくれているから、ここにいられるんだと思った。

「ありがと」
「お、おうよっ」

いつも通りの相槌だから、この疑問はこれでおしまい。あっ、とレイが何かを思い出した声を出し、わたしの元へ駆け寄ってきた。
わたしの足元にある脱ぎ捨てたブーツやグローブに紛れて、彼が先程雑貨店で買った包み紙が。彼はそれを手にし、わたしの左隣に座る。

「せっかくだから今つける。アルテミスこれ持ってて」

と、拾った指輪をわたしに渡す。わたしはそのまま、レイが今まで見つけた小さな宝の山にポイッと落とす。小さな粒も、集まればこんなに盛れる絵となる。

「あれ？」
「どうしたの？」
「あっちゃー……」

とレイは手の平に乗せた二つのピアスを見て、困った顔をした。わたしもそれを覗き込んで、彼の表情の理由を知る。

「これ、左耳のピアス二つ買っちまったって事だよなぁ…？」

雫型水色ピアス。耳たぶに挟むタイプ。完璧な魔法石ではないそれは、残念ながら左右につける事が出来ない。彼がデザインだけに捕

らわれてしまった買い物ミスだ。
ま、いっか、と諦めのため息をついたレイは、
「二つもいらないよ。一個はアルテミスにやるよ」
そう言ってわたしに差し出す。
「え？　でも…」
「丁度いいじゃん。左耳には何もつけてないしさっ。耳にそれぞれ違う飾りってカッコいいよなぁー」
彼の美的センスはそんな変わったものらしい。否、これがイマドキの若者なのか？
「いいからつけてみろよ」
「……うん」
多分レイは、ダブったからわたしにくれたんだよね。そうだよね。何を変に意識しているんだ、わたしは。
彼に言われ、早速左耳につけてみた。
「おれもつけてみよーっと」
ピアスをつければ、右耳と同じような感触、だが違和感。その内につけている事を忘れるように慣れるだろう。
「どうだ？　カッコいいだろ！？」
耳を隠す髪の毛を上げて、レイはわたしにお披露目する。耳元には、太陽の光を受けて輝いているピアス。欠陥物でも悪くない。

「似合ってるわよ」
「よっしゃっ」

嘘ではないので率直な感想を述べれば、レイは上機嫌だ。ガッツポーズまでしちゃうし。

「そんじゃあ宝探し再開だぁー！」

それが糧となり、勢い良く立ち上がりやる気満々。
だが、

「うわっ？」

それが仇となり、レイはあるものにつまづいてこけてしまう。それは、

「あー！　お宝がぁぁぁ！！」

塵も積もれば山となる事を証明したもの、レイの獲得物の山だった。しかも蹴られた部分は砂の色が変わっている位置に飛んでしまい、波がさらってしまう。

「あーあーあー！　行くな行くなー！」
「頑張れー」
「アルテミスも手伝えってー！！」

わたしは休憩中だし、応援だけはする。彼が一生懸命に盗られた物を回収しようとする。

（ありがとう、レイ）

左耳の雫を指先で確かめ、わたしは心の中、またレイに感謝をした。

＊＊＊＊＊

回収出来たのは二割、故になくなった分を取り戻す為に宝探し。わたしも体力回復後に再開したが、陽が水平線に沈みかける頃まで続いた。

でも、レイは落胆する。なくなった分を取り戻せず、手に入ったのは素材屋で売れそうなナイフやアクセが五個ほど。わたしがあげたナイフのみ。

それを街の素材屋なる雑貨店に行けば、価値はあった。ダブったピアス分くらいは取り戻せた。それでレイは機嫌を戻した。

「わたしがあげたの売らなかったの？」

「まだ使えるのにもったいねぇじゃん」

鞘のないナイフを宙に投げ、キャッチ、を器用に繰り返すレイ。宿への帰路を歩きながら。

そろそろ陽も落ちる故、民家の窓には明かりがつき、道沿いにある燭台にも火は既に灯っていた。

「こんな時間になっちゃったけど…ムーンに何言われるのかな……？」

「なんでおっちゃんにしかられなきゃならないんだよ。大丈夫だって」

「どうだか…」

＊＊＊＊＊

わたしの予感は的中。

「今までどこに行っていたんだ…」

部屋のドアを開けた途端、物々しい空気が立ち込めているかの如く。ベッドの腰掛けて、腕組みをしているだけなのに、表情が見にくくともムーンが怒っている事がすぐに伝わった。

「そ、そんなに怒らなくてもいいじゃねぇかよー…」
「せめて行き先をメモに書き残すくらいは出来ただろう」
「そんな都合のいい物持ってないって。おれ達だって子供じゃないんだから、そんな親父みたいな怖い顔すんなよ」

いや、顔なんて右目以外見えないが。それともレイは彼の今の雰囲気だけで、怖い顔ってのがわかるのか。

「万が一最後の情報がわからずにはぐれてしまっては、一緒に帰る事も出来ないだろう…」
「そりゃ、そうだけど…。もしかしておっちゃん拗ねてる？」
「は？」

何を言い出すんだお前は。わたしもそう問いたくなった彼の一言。

「おれ達と一緒に街を巡れなかったから、ひとりぼっちで寂しかったんだろー？　だからおっちゃん怒ってんだー！！」

「…反省すら示さないのかお前は」
「あれぇ？　否定しないってどーゆー事だぁ？　おっちゃん図星？」
「拗ねるワケないだろお前は…」

レイはふざけながら勝手に追い込んでいる。何故かムーン、纏っていた怖い、という空気が薄れているのだが。図星？

「いーや、拗ねるぞ絶対。むしろ寂しがってんだ！　普段はおれ達三人で行動してたのに、宿に戻った時には誰もおらず」
「いい加減にしてくれないかレイニー…」
「じゃあなんだよ！　ムーンはおれ達の事がいらないのかよ！」
「それとこれとは意味が違う！」
「ほらやっぱりおっちゃん寂しがり屋じゃん！」
「寂しがってなどいない！！」

おい、男約二名。いつの間にか話していた事が逸れ始めて下らん言い争いになってるぞ。

「第一お前は、そうやって大人をからかって、叱られる事から逃れようとしているではないか！」
「からかってるワケないじゃん！　本当の事を言ったまでだし！」
「だからそれはお前が勝手に思い込んで話しているだけだ！」
「じゃあおっちゃんやっぱりおれ達の事が」
「だから…！！」
「はいストップ！！　ストップっ！！！」

キリがない。わたしは二人の間に割り込んで制した。
言い争えるのは、仲間にしか出来ない事。わたしは正直、端から見て面白かった。この事は口外しないでおこう。巻き込まれそうだし。

「夕飯、食べましょ」

第五十五章

―――――――――
間違いではなかったけど
違っていた
―――――――――

朝は早く起きた。今日、船に乗って帰れるかどうか、期待と不安に駆られたからだ。

「どうなるのかな…サンポリア行き」
「可能性が低いだろう…船乗りも真剣だったからな……」
「帰りてぇよぉー」

宿の食堂で朝食を食べながら、わたし達は予想話をする。と言っても、チカラモだけだが。宿側が用意してくれるご飯は宿泊代とは別料金故。

「腹減ったよー」
「さっき食べたでしょ」
「確かに満腹だけど、気分的に食べた気がしないこの矛盾が…」
「サンポリアに帰れば好きなものを好きなだけ食べられるのだから、もう少しの辛抱だ」
「おっちゃんもっとくれー」
「やらん」
「えー？」

昨夜喧嘩した事はすっかり忘れているような二人。このやりとりは変わらない。やっぱり見ていて安心出来る。

「あ、そうだ」
「？」

昨日の出来事の一部をふと思い出した。私の第一声に二人の目線がこちらを向く。

「ねぇムーン、昨日街を歩いてる時に、エンバシーさんっぽい人を見なかった？」
「…副団長、ぽい人か？」
「そうだ、アルテミスは昨日副団を見たって言うんだよ」

レイニーも便乗して理由を述べた。
ムーンは昨日の思い出しているのか、顎に手を添えて考え込む。
しかし、

「いや……私は見かけてはいない」
「そっかぁ…」
「やっぱ他人の空似ってやつだったんだよ、アルテミス」

期待の答えは出なかった。ムーンが見てない、と言うのならば、もう気にする事ではない。残念だけど。

「食事を済ませたならば、すぐに出よう。船乗りにまた聞かねばならない」
「おっちゃんまだもらってないよ」
「そうか…ならば今日の昼食の分をお前に渡そう」

「やっぱりいいです」

ムーンの冗談めいた脅しに、レイは改まった口調で断ってしまう始末。

＊＊＊＊＊

湊に着いて早速問うが、

「やっぱりダメッスねぇ……今日のサンポリア行きの航路は、航海士が天候を理由に行けないって言うんスよ」

「そうか……」

「またここにいなきゃなんねぇの？」

「申し訳ないッス……」

レイが愚痴を堂々と口にし、船乗りは頭を下げて謝ってしまう。ムーンは目の前の現実をただ受け入れるだけの様子。

「あの……それなら、サンポリア以外の場所へ行く船は大丈夫って事なの？」

「え？」

サンポリアの航路は、と言うのだから、エイスとユゴリアンは問題ないのだろうか。と疑問したわたしは、船乗りに問う。

こんな質問をされたのは初めてなようで、彼は面食らった顔をした。

「ああ…そうか。お嬢さんは賢いッス！」

それで思い出せたような事を言う。ありがとうッスありがとうッス、と何回も私にお礼を言う。

「確かに、サンポリア直路は魔物や天候の影響で難航になるから度々中止になったッス。けど、その海域だけの話で、他の航路はそんな事はないッスよ」

わたしはただ単純に知りたかっただけだが、一体何が知的発言だったのか。

「そうか…」
「え？」

ムーンも何か気付いたような呟き。

「遠回りだが、ここからエイス、エイスからサンポリアならば確実だと言う事か」
「その通りッス！　ダンナも賢いッス！」

船乗りはますます上機嫌となる。ただ知りたい事を聞いたが為に、こんなチャンスを知れるとは思いもしなかった。レイもただア然とするだけ。

「ただ、このやり方は案の定時間もかかって、お金の負担も大きいッス。けど、今は波も状況も不安定ッスから、いつまでも待つよりは早く着けるはずッス」
「……どうする？」

ムーンがわたし達二人に問う。船乗りの勧める方法で、サンポリアに帰還するか否か。

「わたしは、それで行くわ」
「おれも！」

わたし達の答えは揃う。ムーンは恐らく、わたし達に合わせてくれるのであろう。すぐに船乗りに、エイスへ出る船の時間を聞いた。

「エイス行きは昼丁度の予定ッス。遅れないよう気をつけて下さいッス」

＊＊＊＊＊

「やっと帰れっぞー！」
「わからないわよー…？　たどり着くまで何かあるかもしれないし…」
「ああ…」
「おっちゃんもアルテミスも超現実的な事言うなよ…帰れるってわかっただけでも嬉しいじゃん！」

時間が来るまでの暇潰し。城下町を巡るだけでも時は経てる。

「船乗りはああは言っていたが、今もエイスへの航路が安全とは限らないだろう…」
「街の中だから気が緩むけど…安全圏を出てしまえば死闘は避けられないだろうし……」
「うっわぁ…本当に現実的だよお前ら…」

あなたが単純に気楽なだけでしょう……と言いたいが、何か面倒な

返答をされそうだからやめた。
でも、彼のそういう前向きな性格は良い点ではある。

「おっちゃん！　おれ提案ある！」
「？」
「もっとチカラモの実を」
「断る」
「まだ最後まで言ってねぇって！！」
「今あるのだけで充」
「充分じゃねぇって！　おっちゃん背ぇ高い癖にマジ草食だし！」
「それを言うなら少食でしょ…」

二人のトンチンカン劇場に思わず口出しをするわたし。後方の二人より先に歩き、ふと目の前の光景を見た時だった。

「！！」

もう会えないと思っていた人を、エンバシーさんらしき人を見つけた。
昨日から間もないのにこんなに早く……わたしの足はすぐに動いた。

「アル？」
「アルテミスっ？」
「エンバシーさん！」
「何…！？」「マジ！？」

返事するよりも先に足が動いていた。視界は昨日見かけた時と酷似している。また建物の影に行ってしまうエンバシーさん。
絶対に追いつかなきゃ！
しかし、

「きゃっ」

またもチャンスを逃してしまう。
エンバシーさんが見えなくなったのと同時に、馬車が一台現れ、わたしは尻餅をついた故に。
気を付けろクソガキ！、と怒られ、馬車はエンバシーさんとは反対方向へ走る。
後方で二人が追いついたが、わたしは立ち上がり、エンバシーさんの行ったと思う方向へ見に行くが、やはり人混みに紛れてしまった。

「またいなくなった？」
「うん…ごめん……」

レイが隣に立ち、わたしの見ている景色を見渡し、問いかける。わたしはただ答えるしかない。

「怪我はしていないのか…？」

ムーンがわたしの身体の心配をしてくれた。大丈夫、とわたしは彼の気遣いに対し微笑む。

「まだいたんだ……副団の空似」
「空似じゃないわよきっと…エンバシーさんに間違いない」

レイは信じていないみたい。是非とも彼の目にあの人の姿を映して信じさせたい。

「副団長は確か…」
「うん、ここの出身でもあるのよ」

ムーンがエンバシーさんについて聞こうとしたのか、わたしはこの地にゆかりがある事を答えた。

「いや。副団長のファミリーネームが何だったのか……」
「なんでまた？　おっちゃん。エンバシーさんは……エンバシー副団長は…」

返す言葉に意味がなく、レイもエンバシーさんのファミリーネームを覚えていない。でもそれはわかる。大抵は役職名か名前で呼んでいるんだもの、ファミリーネームなんて印象がなければ覚えられない。団長のジェンデスマンとか。

「ラルク団長が言ってたよ。ネーム同様カッスカスって」
「エンバシー・ブルッカス」
「そうだそうだそうだった！」

過去に聞いた事あるような団長の言葉を思い出したわたし。もちろんエンバシーさんのネームも。だから二人にヒントを投げかけたら、ムーンはすぐ思い出し、レイも嬉しそうに言う。

「んで、エンバシー・ブルッカス副団がどうしたってぇの？」

話題の発展者ムーンに問いかけるレイ。

「いや……各国の騎士団にはよく、貴族や名家等が先祖代々入団している事があるだろう。記憶違いでなければ、ブルッカス家もサーサリーでは有名な名家のはずだが……」
「そ…そうだったの？」
「いや違う」

「えっ？」

自分の言った事を急に否定したムーン。誤りがあったのか？　博識のムーンでも、『ブルッカス』は曖昧な記録らしい。

「ブルッカスは騎士団に属する家系ではない。確か」

「みんな逃げろぉぉぉぉ！！！」

「！？」

突然、遠くからそんな声がした。方角的には湊から、船乗りの男が数人駆けてきた。

「湊にデカい魔物が現れたぞー！！　出来るだけ遠くに逃げろー！！」

それを聞いた瞬間、人々が騒ぎ、動き出す。このご時世故に人の流れはわかりやすい。

住民や非力な人々は湊から反対方向へと走り、勇敢な戦士達は逆に湊へと向かって駆け出した。もちろん、

「行くぞ」

「うん！」

「おうよっ！」

ムーンもわたしもレイも後者である。湊へと全速力。

＊＊＊＊＊

「妙よね」
「何が？」

湊にたどり着くまでの会話。
わたしはふと思った事を口にした。

「王国で、しかも結界魔法陣を駆使する僧侶達がいるサーサリーで、魔物の侵入を許すのかな、って」
「そういえばそうだよな」
「備えが厳重だからと言えど、完璧に防げるワケではなかろう。あるいは…」

ムーンが別の説を語ろうとする。わたしもレイも、あるいは？、とオウム返しに聞く。

「魔物達の方が、それらを上回る力をつけたのか」
「……」

……ありえるかも。納得の意で言葉が出ない。

「うわぁぁぁぁ！！」
「きゃあああ！！」

そして、たどり着いた湊周辺。ついさっき礼儀正しい船乗りさんと会話した所とは思えないくらい、危険な場所と化していた。
逃げ遅れてもなお逃げる人々。そんな彼らを守りつつ立ち向かう人々。大きな船が並んでいたはずなのに、各々が大破されていた。
で、騒がれている魔物はと言うと、

「た、タコ？」

「でかい……」
「デビルオクトか…」
漁師達が穫るあのタコを何十倍にも大きくしたもの。しかもムーンは奴の名前を知っていた。
「奴の足と吐き出すスミには気を付けろ。目玉以外は軟体故に斬れない。目玉を狙え」
「マジで!?」
「りょーかいっ」
以前戦った事があるのだろう、ムーンは的確なアドバイスをし、長剣を抜いて駆け出した。レイは難題に驚きつつもムチとナイフを構える。
わたしも了承を答え、右手左手には剣を持った。
「皆さん、下がって下さい!!」
しかし、ある声が戦う者を制した。聞き覚えのある声。
その声は頭上から聞こえ、わたし達含め戦士達はそちらを見た。
「ど…ドラゴン…!」
「…の割にはちっさくねぇか…?」
翼を一定感覚に羽ばたかせて上空を浮遊しているのは全身が白い竜。だが、レイの言うように大きさは思った以上に小さく、大人一人がその竜の背にまたがる事が出来るサイズしかない。
「何者だ…?」

ムーンが誰かに言うのでもなく呟く。翼がせわしなく動くのと、見上げる故に死角があって乗馬ならぬ乗竜している人物の姿を捉える事が出来ない。
こうしてる間にも、海面から顔を出しているデビルオクトは石作りの地面に上陸しようとしている。

「『サモン』！　『トールバード』！！」

乗竜する者は片手に開いた分厚い本を掲げ叫んだ。すると、本は光に包まれ、その光の中から黄色い羽根を持つ鳥達がたくさん現れた。

「召喚士…」
「しょうかんし？」

ムーンはまた呟く。聞き慣れない単語だ。レイも知らないのか確認するように問う。

「ああ…あのように、魔法書等を用いて、その本に描かれている魔法陣によって味方となる魔物…召喚獣を呼び出して戦う者だ」
「なるほど……って事ぁあの白いドラゴンも」
「恐らくは召喚獣だろう」

ムーンの知る召喚士とは、今まさに彼の事だ。

「もう一度言います！　戦う方も魔物から離れて下さい！！」
やっぱりどこかで聞いた事ある声が呼びかける。誰だろう。ついさっき話題にいたような…。
と思考を巡りながら、わたし達は言う事に従い湊から離れた。
召喚獣である黄色の鳥達は、デビルオクトの頭上をグルグルと旋回して飛び回る。全部が同じ方向ではなく、時計周り逆回り、魔物に

近かったり遠かったり、回る距離が短かったり長かったり。各々が似てるようで違う動き方をしている。

「何をする気なの…？」
「雷鳥…」
「え？」
「もう少し離れた方がいい」

ムーンに促され、わたしもレイも足を速めた。背後の状況を見ると、デビルオクトは鳥達に惑わされ、必死に太い足で叩きつけようとするが、全く当たる気配はなく。
ここまで来れば届きはしないだろう位置についたわたし達。
もちろん、他の戦士達も魔物の周囲にはいない。

「トールバード」

召喚士の声が言った。

「殺って下さい」

その瞬間。

「うわっ！」

トールバード達が各々に甲高い鳴き声をあげた。確かに鳥の声だが、鳥とは思えない耳をつんざく巨音雑音。耳を塞がないワケにはいかない。
わたしだけじゃない、ムーンもレイも、建物の影にいる住民や戦士達もその音に顔を歪ませていた。
そして、

「！！！？」

轟音。ユーピテルの鐘が人為的ならば、この音は自然的なもの。
トールバード達は自分と仲間達の力を合わせ、デビルオクトに向けて雷を落とした。あまりにも眩しくて、見れるけれど長くは出来ない。
自然災害なるこの攻撃に、デビルオクトも叫ぶ鳴き声がない。
その攻撃が一瞬なのか、数秒なのかわからない。だが、デビルオクトは黒こげになっていた。

「え…？　終わり…？」

上陸するはずだった足は、本体が海にゆっくり沈む為に引きずられ、ズボズボと海へと消えた。
相手の様子を見ようと、レイが向かう。それに習いわたしもムーンも、他の人々も。
だが、そこは陸に近い海、海底に着いたのか、丸い頭が小島のように少しだけ海面から出ており、最後まで沈み切らず。
バサリバサリとドラゴンの翼の音。わたし達の背後に着地したのが聞こえ、振り向いた。
竜の背から降りる召喚士。両手で抱えるような分厚い本を開くとそれは光り、トールバード達とドラゴンは、その中へと向かい、消えた。

「皆様、ご協力感謝致します」

そして、三度目の正直。
鎧など身につけてはいないが、冒険者としては動きやすい服装だ。
右肩だけに深緑色のマントを留める金具があり、運動的には不自由

に見えるが、本をしっかり抱え持つ右腕は機能出来る。

「やっぱり…」

バンダナはしていない。格好もいつもと違う。だが、この人はやっぱり。

「エンバシーさん!!」

また見失うものか。名を呼ぶと同時にすぐに駆け寄った。わたしを見て彼はやはり目を丸くした。

「やっぱりこの街にいたんですね！　どうしてここにいらっしゃるんですか!?」

「うっそぉー!!　マジで副団じゃん！　会えるなんて思わなかったですよ!!」

レイもやっとわかってくれた。だからこのリアクションだ。レイもわたしも、はぐれた立場故に、仲間に、特に信頼なる上司に会えた事は嬉しい事だった。

「…あのぉ……」

だが、エンバシーさんの様子がおかしい。苦笑を浮かべて、

「確かに、間違いないですが……違いますよ」

不可解な事を言った。

「え?」

わたし達は顔を見合わせ、どういう事？、とアイコンタクト。
エンバシーさんじゃないエンバシーさんは、一息ついてから、こう言った。
「ボクはミュージアム・ブルッカス。考古学者です。エンバシーはボクの双子の兄ですよ」
「…………」
もう一度、頭の中に、彼の言った言葉をリピートした。
それを理解した途端に
「えぇ――――――――――――――――――――――――！！！？？？」
わたしとレイは叫ばずにはいられない愕然的意味悲鳴をあげた。

第五十六章

―――――――――
考古学者兼召喚士
双子兄弟の家系
―――――――――

「信じられない」
「それ言うの何回目だよ」
「１１回……」
「おっちゃんも数えなくていいよ」
「いや……少し暇だからな。待つのが」

仕留められたデビルオクトは、漁師や船乗り達が処理する事となった。
彼らの会話が聞こえるが、ただ大きいだけでこいつは普通のタコと変わらないぞ、表面は焦げちまったが切れば食えるぞこれは、こんなに大きいなら街中のみんなに配ろうぜ、とか。
丸ごと地上に引きずる事が出来ないらしいのか、近くの剣士を何人か呼び、更に自分達も刃物を取り出して斬る作業を始めた。

「ホントに信じられない」
「１２回」
「アルテミスもさっきからうるさいしおっちゃんもおっちゃんなりに暇つぶししようぜ！」

わたし達はそんな光景を遠目で見ている傍観者。一般市民やお呼ばれしてない戦士達と共に眺めていた。
そろそろお昼時、エイス行きの船に乗りたいのだがこんな事態だ。
だから待つしかない。
ムーンは本当に暇な様子。レイニーがツッコむくらいわたしが小さく呟いてしまうのは、ワケがある。

「だって」
「漁師さん！　こちらの足を運びますので、斬って頂けますかー？」
「すまねぇなブルッカス。魔物退治だけじゃなく死体処理まで手伝わせちまってな」
「ボクもここの人間ですから、協力は何でも致しますよ」
「ありがとなミュージ！」

初めて見た時に乗っていたあの白竜の背には、漁師達と親しく会話をする上司の弟さん。竜がデビルオクトの太く長い大きな吸盤が並ぶ足を一本抱えており、その近くの海面に浮かぶボートに引き寄せる。ボートには剣を構える会話相手の漁師がいた。

「エンバシーさんに双子の弟さんがいるなんて信じられないもの！　礼儀正しいし親切だしエンバシーさんとは全く正反対じゃない！」
「アルテミスの言い分もわからなくはねぇけどさ……確かに副団って、学者の弟がいるってイメージの欠片もなかったもんなぁ…。でもエンバシーさんは親切だぞ」
「親切だけど、でも信じられない！」
「ブルッカス家か…」

またわたしの、信じられない、をカウントするのかと思いきや、ムーンは呟く。

「おっちゃんやっぱり知ってる？」

レイが食いつく。話の続きを再開だ。

「ああ……彼の戦法を見て思い出した。ブルッカスは学者の家系なんだ」

「がくしゃ？」

デビルオクトのタコ足が陸にあがる。それを見て歓声をあげる周囲の人々。だがわたし達は彼の話に集中した。

「学者と言ってもいろいろな学者がいる。植物学者、動物学者、神学者、心理学者、天体学者、魔法学者……様々な学者の大半がブルッカス家となる」

「へぇー」

「本家は主にサーサリーの者であり、各大陸にも分家となるブルッカス家が在住している。世界に出版される本はブルッカスの人間が書いたものばかりだ」

「嘘？！　全然知らなかった！」

たくさん本を読んだ事がある私だが、もしかしたら、今まで読んでいた本の中に、著者がブルッカスの書物があったのでは。急に本が読みたくなった。

「よぉし、これで全部斬れたな」

「今日の昼飯に食いたい奴らはこっちに来い！　みんなで分けれるぞー！」

人手も召喚獣もおり、さらにメンバーのチームワークが良かったのか、作業が終わる。これ以上待たなくてもいい、はず。

船乗り達の呼びかけに、住人も観光客も戦士達もぞろぞろと寄っていく。

「お、おれも食いてぇ…」

「そんな事言われても、あんな人だかりじゃ時間がかかるわよ」

時間も時間、レイも腹を空かしているのだった。忠告はするが聞かずに足が進んでる。

「その心配はありませんよ」

「！」

頭上から降りかかる声。わたし達は見上げた。

乗用竜がバサバサと翼を動かしながら、わたし達の前方へと舞い降りた。竜の背にはミュージアムさんが。

彼の手には、一口サイズに斬られたタコ足をいくつも串に刺したものが、三本。

「用意の早い漁師さん達で、お礼にこちらを頂きました。出会ったのもご縁ですので、差し上げますよ」

「あ、ありがとうございまーす！！」

レイからしたらミュージアムさんは神様みたいな扱いになっていると思う。驚きながらも喜び、レイは彼から串タコを受け取った。

「はい、アルテミスとおっちゃんの分！」

「あ、うん。ありがとうございます」

とっさに渡され、手元に串タコ。戸惑いながらも、わたしはミュージアムさんにお礼を述べる。

「よろしいのですか？　ミュージアムさん……」

ムーンも受け取りつつ、確認の問いをする。ミュージアムさんはにこりと微笑み、返事をした。

「ボクの事はミュージで構いません。それに、ボクは兄と同じ騎士団の人間ではありませんから、そんなにかしこまらなくてもいいですよ」

「……そうか」

「ええ、そんな具合でも大丈夫です。どうぞ、召し上がって下さい」

「ありがとう」

ミュージアムさん改めミュージさんは、わたし達に串タコを勧める。彼の親切を無駄にするワケにもいかないので、いただきます、と挨拶をして口に入れてみた。

レイはとっくにがっついておいしー、とニコニコ。ムーンは……やはり、ホータイを巻いている故に人前では食べない。

「ミュージさん、おれ達、サンポリアの黒雲の騎士団でさ、エンバシーさんがおれ達の先輩なんだよ」

「ええ、なんとなく察しはしてました。最初にボクを兄の名で呼んだり、その身なりが兄の騎士団の服装と似る部分がありましたので」

レイは半分ほど食べて飲み込んだ後ミュージさんに話を振った。

「でさ、ここにいるムーンのおっちゃんがさ、ブルッカスの人達は学者だ、って聞いたんだ。なんでエンバシーさんは騎士団なんだ？」

なるほど。確かに気になる部分だ。弾力のある海の味を含んだタコ

をわたしも飲み込み、話を聞きたくなった。

「ほお……ブルッカスの家系をご存知でしたか、えっと…」

レイにより紹介されたムーンに目を向かせるミュージさん。どう呼ぼうか迷い、そこを

「ムーン・タリアスだ」

ムーンがすかさず自分の名を口にする。

「ええ…ムーンさんの仰るように、我々ブルッカスは学者の一族と言っても過言ではありません。ブルッカス家には昔から掟がありまして、初めに生まれた子は、男でも女でも五体不満足でも、学者としての道を志さなくてはなりません」

「それって、学者になりたくてもなりたくなくても、って事ですか？」

「はい、えっと…」

「アルテミス・メリアーです」

「そうです。アルテミスさんの仰る通り、学んだ全てを次世代へ届ける為に、我々は存在する、その為にも意志に関係なく使命を果たさなくてはならないんです」

なるほどなぁ……わたしが今まで本を読める事が出来たのは、ミュージさん達のおかげなんだと納得出来る。

ミュージさんは学者としての自分に嫌気は無さそうだし、でも、わたしがもしブルッカス家に生まれたのなら、その掟に対してどう思ったのだろうか…。

「なんか、不自由だな。それ」

レイは食べ終わったらしい。そして率直過ぎる感想を言う。いけない、と思ったが、ミュージさんの反応は苦笑を浮かべるだけだった。

「そんな事ないですよ。ボクは昔からこの世界の歴史に興味がありましたし、」

「何故弟のお前が学者であり、兄の副団長は学者ではないんだ…？」

彼が話している最中にも関わらず、横槍のようにムーンが質問をした。

ムーンなら、最後まで聞いてから問いかけるはずなのに。

「ああ……そうですよね。ボク達双子は掟と矛盾しているのですから、あなたのその質問はよくわかりますよ」

話を止められても気にしないミュージさんは、彼の同感を述べる。

「ボク達は特例なんですよ。『双子』だから。たまたま兄は勉強よりも剣を握る事に興味がありましたから、ボクが兄の代わりを務めているようなものなんです。ボクの場合、学ぶ事はご飯を食べるより大好きなので、不満は一つもありませんよ」

「……なるほど」

「ミュージさんってすげぇー。おれ、真似出来ねぇよ」

ミュージさんがそう語る時、嬉しそうだ。誇りを持っているみたい。ムーンはそれで納得し、レイはただ感心するだけだ。もちろんわたしも、ミュージさんが勤勉である事が彼の話からよく理解出来る。

「学者の大半は魔術書を用いるのだが、ミュージのそれは珍しいものだな…」

今度はムーンが、ミュージさんの抱える本と召喚獣について振った。

「召喚書をご存知でしたか。あなたも本を読むのがお好きですか？」

「…それなりに」

「ボク達、良い語り相手になれそうですね」

確かにムーンは様々な事を知っている。ミュージさんもいろいろな知識を身に付けているようだし、わたしもわからない会話で盛り上がりそうな気がする。

「ええ…ボクが護身用に使うのはこの召喚書なんです。最近ではその人達の事を『召喚士』と称する人もいらっしゃいますね。ボクは主にエイス大陸の遺跡等を研究しているのですが、その時知る事が出来たのは、この召喚書の作成なんです」

「えっ？　その本作れるの！？」

「はい。遺跡には魔界と関わりが深く、魔界の生き物を呼び出す魔法陣等も発見されるんです。その際、ボクは魔術書にそれを記し、魔物と契約をして初めて召喚が出来るんですよ」

そう語りながら、隣にいる白竜の鼻を優しく撫でるミュージさん。それにしてもこのドラゴン、瞳が大きくとても可愛らしい。ドラゴン、という割には体格も丸く、凶暴さなんて微塵も感じない。主人に撫でられ気持ちよさそうだ。

「エイスにはまだ謎が多く残されてまして、ボクの探究心を駆り立ててくれる所なんです。これは十数年前に知った事なのですが、」

「その話はもういいだろう」

「えっ？」

今度の横槍は質問ではなかった。ムーンが人の話を止めたのである。どことなく、彼から殺意に近い怒りの雰囲気がまとっていた。ムーン…一体どうしたの？
普段の彼とは違う様子にはレイも気付いたらしく、わたし達はそれで互いに目が合った。
今のムーンは、いつものムーンじゃない、と。

「……何故ですか？」

ミュージさんはどんな事をされても、不満の表情は見せない。だが、微笑む顔に純真がなく、少しずつ歪になっているのがわかる。
こんなミュージさんでも、やはり邪魔されれば怒りは感じるのだろう。

「あなたは考古学や歴史には興味がないのですか？」
「歴史くらいならば知っている。だが、お前が今から語るのは、ここにいる子らには必要の無い話だろう」
「…ボクが何を話そうとしたのかわかるのですか？」
「十数年前に発覚した、とならば、その話は世間に知れ渡っていないはずだ。学者達が世界を混乱させない為に、と言ってな。お前は学者でありながらその話を易々と語るというのか」
「なるほど……ですが、これはもしかしたら事実かもしれません。この世に生きる人ならば、受け入れなくてはならないでしょう」

一体何の話？　二人しかわからない話。
会話は盛り上がるが、こんな盛り上がり方を期待していたのではない。お互いに対立の念を感じるのだから。

「なぁ…それ、どんな話なんだ？」
「やはり聞きたいですよね……名前は」

「おれはレイニー・バルナ！　レイって呼んでいいよ」
「ほら、ムーンさん。勉強に自信がないというレイさんも興味が沸く話なんですよ。歴史の授業はとても大事なものなのですから」
「黙れ」
「！？」

絶対に聞いた事のないムーンの脅す声。大声ではないのに、この場にいるわたし達くらいにしか聞こえない声量なのに、仲間に対して恐怖を抱いてしまった瞬間だ。

「エイス行きがそろそろ出航するぞー！！　乗る奴は４００デイルを手元に来ーい！！」
「……行くぞ」
「え……？」

ミュージさんを一睨みした後、ムーンは何もなかった素振りで船へと歩み出した。
わたし達はムーンの背とミュージさんを交互に見るだけだったが。

「ごめんなさい……またお会い出来たらいいですね」
「ミュージさん！　また今度教えてくれよなー！」

ごめんなさいを精一杯表し、ミュージさんに振り向きながら、わたし達はムーンを追い掛ける。

「またお会いしましょう！」

ミュージさんにあの歪んだ笑みはなく、爽やかな笑顔で見送ってくれた。
ああ……やっぱり信じられない、エンバシーさんにこんな弟さんが

いるなんて。

＊＊＊＊＊

幸い、エイス行きの船に被害はなかったらしい。エイス大陸までの道のりは長いのか、とても大きな船だった。
ちゃんと船乗りにお金を手渡し、現在わたし達はポール付近にて潮風に吹かれてちょっと気を抜いてる状態。

「やっぱり海っていいよなぁ」
「船酔いする人がよく言うわね」
「うるせぇ！　おれはこれから克服するんだよ！」
「どうだか……」

目標を掲げる隣の同期に嫌味たっぷりに言い残し、わたしはふとある者に目を移した。

「……ムーン、なんであんなに怒ったのかな」

サイド寄りに位置し、たそがれるように海と空を眺めるムーンの背だ。周囲にも同じように彼の見てる光景を見る観光客や旅人がいるが、何故か彼だけは近寄り難いものがある。
それが悪いものなのか、あるいは『悪い』とは違うものなのか。

「……おれ、知りたいな。おっちゃんが聞かせたくない話」
「ちょ、っとレイ？」

好奇心か、それとも勇気か、レイはぼそりと呟き彼へと向かった。

その呟きを聞き逃さなかったわたしも追い掛ける。ムーンの元に行くしかない、という事だった。

「ムーンのおっちゃん！」

「……？」

どうした？、と無言でもわかるような顔で振り向いたムーン。丁度わたしもこの場にたどり着く。

「あのさ、さっきミュージさんと喧嘩してた話だけど……」

「聞かない方がいい」

「あっちゃ…まだ言ってないのに」

レイが苦笑してがっかりするが、怖いもの知らずな感じのレイではなかった。やっぱり彼も、ムーンに対して恐怖があったのか。

「そんなにいけない話なの？　歴史の話なのに…」

わたしはどういう内容だったか推理する為に、質疑応答を通して探ろうと問いた。

ムーンはわたしを見るが、彼の右目が憂いに満ちていた。

「十数年前からじゃない。もっと昔からだ。ただ学者達は、このご時世にその歴史を明かしてはならないから、とずっと隠し通してきたんだ」

「もっと昔から…？」

「ミュージアムのような『真実を届ける』使命を果たそうとする者が、十数年前から一部で公にしたようだがな…」

「……それって、どんな歴史なの？」

聞いてはいけない、だが、聞かなくてはならない。そんな事実があるのだろうか。
わたしが今まで本を読んでも知らなかった話ならば、勇気を持って聞いてみたい。

「…大丈夫よ」
「アル…？」
「信じる、信じないはわたしの中で判断するから。お願い」
「お、おれもおれも！」

遠回しな言い方ながらも、わたしはムーンから聞き出そうと試みた。
それに気付いたレイも賛同し、主張をした。

「……そうか」

ムーンは観念したような、でもやっぱり悲しさも混じったため息をした。

「なら…お前達を信じて、話をしよう」

ムーンが初めてわたし達側に正面を向き、海を背にした。

「過去に…古代族というものがいたという」
「古代族？」
「ああ……各々に王が国を治める以前に、この世界を統べていたであろう一族がいたと言われている。それが古代族だ」
「古代族……」

聞いた事がない話だ。そんな種族がいたというのか。

「なんだよ、どうって事ないじゃん、おっちゃん」
「いや……その古代族を調べた学者が公表をしたんだ」
「なんて？」

ムーンが躊躇する。やはり言い出したくないのか。
わたしは彼の目を見つめ、続けるよう促した。
ムーンもこちらを見てくれた。小さく頷く、了承の意。

「古代族の先祖は……魔界の住人、だという事だ」
「……！？」
「古代族は、人間でありながら魔族の血を持っている、と言われている……」

ムーンが頑なに拒んだ歴史の公表を、自らわたし達に明かしてくれる時。波の音と真昼の日射しがわたし達を包み込む。

第五十七章

古代族

「それマジか……？」
「ああ」

レイニーの確認問いにムーンは相づちを打った。

「それって……誰かが見つけた事なんだよね？」
「……そういう事になる」

でなきゃ、ムーンが話したくないワケだし、ミュージアムさんが話したがるだろうし。質問した後に、愚問だった、と気付いたわたし。

「なんで古代族が魔界の住人って事になるんだ？　そういう事が書いてあったのか？」

理由を知りたいのか、レイがムーンに問い詰める。自ら勉学は苦手である事を口外した彼だが、誰も知らない、知ってはいけない話には興味を持つ。
好奇心ではなく、彼の表情は真剣になっていった。

「……私の知る限りでは、エイスに住み着き古代族のみが扱う文字

を研究していた学者が、遺跡や古文書、埋もれた石版等に記されていた文字を解読する事に成功したんだ。その学者が見つけた」
「なんて書いてあったんだ？」
「そうだな……古い歴史書らしきものには、当時の魔王と、ある女性、二人が結ばれた事から始まっている」
「！？」

そんな事実があったの？

「もしかして、」
「ああ…二人の間に子も産まれ、人間でありながら魔族の血を引く者、という事だ」

魔界の族の血を持つ人間……明らかにしてはいけないのも納得がいける。
今のご時世、魔物達が人間を襲わない日がない。そんな魔物達が、かつてはこの世界を支配していた存在なのだから、人々は恐怖にさえも襲われてしまう。
人々が混乱しない為にも……学者達は自分達だけしか知らない史実を保護しているんだ。

「やがて、古代族は繁栄し、常人にはない力も備わっていた。だから、世界を統治する力があったワケだ……しかし」
「何……？」
「それを良く思わない者もやはり存在していた。古代族が善人なのか悪人なのかは、そこまで記されてはいなかったが、結局反逆者達に追われ、歴史上からも姿を消し、ひっそりと暮らし始めたらしい……」
「……そうだったの…」

それじゃあ……もしかしたら、

「ねぇムーン。という事は、」

まだこの世に古代族の末裔がいるのでは？

「子孫達は今もどこかで暮らしているの？」

「……」

「おっちゃん……？」

わたしの問いに、彼はうつむく。もしかしたらそこまで知らないのか、あるいは自分なりの予想を考えているのか。

「もちろん、暮らしておりますよ」

しかし、問いの答えは第三者の声により解答が出た。

声がしたのは横の方。船の後方側だ。

わたし達揃ってそちらを見たら、

「え――――――――！！？？」

ムーン除きわたし達は驚きを隠せなかった。

いや、だって、今さっき別れたばかりなのに。こんなに早い再会、ある？

「えんば…じゃなくてミュージさん！？！？」

「その通りです」

驚いているのに対して、学者ミュージさんはやっぱり笑顔を見せてくれた。

「なんでミュージさんこの船乗ってるんだっ？」
「そりゃあ先程お話しましたよ。ボクはエイスの遺跡調査に帰るのですから。それに」
それに？　何ですか？
イタズラが成功出来た子供みたいに、にやけるのを隠せない顔で、ミュージさんは言う。
「またお会いしましょう、って、聞こえませんでしたか？」
「……」
開いた口が塞がらない。今がこの状況に合う。
ミュージさん……もしかしたらお兄様よりくせ者？
彼の目は、まだ愕然の余韻残すわたし達よりも、ムーンに向かれた。
ムーンは再会時にわたし達みたいなリアクション等やるワケないが、また対立した時のようなあの怖い雰囲気を纏ってしまった。
「古代族の末裔……もちろんいらっしゃいます。ですが、彼らは分家という立場で、正式的な古代族ではありません。ボクは何度かその方々にお会いした事がありますよ」
と、わたし達の話題の続きを繋げるように語ってくれた。
少しずつ、ムーンに歩み寄りながら。
「やはりあなたも、古代族に関する情報を話したかったんですよね。教師になりたいのですか？」
「勘違いするな。この子らがただ、真剣に聞いてくれると信頼して話をしたまでだ」
「それでは……ボクも真剣にお聞きしたいので、あなたの知る範囲

のお話をお願い出来ますか？」
「もう語る事はない。…行くぞ」

後半の言葉はわたし達に向けてのものだ。歩き出すムーン。振り向きもせず。だからわたし達も慌てて彼の背を追う。

「ほー？　もう語らない、という事は、あなたの知識はその程度のものなのですか？」
「っ？」

わざとらしい口調で話しかけてきたミュージさん。わたしは思わず足が止まり、レイも同様に。
だが、まさかムーンまで歩みを止めてしまう。

「あれほど古代族に関する話を止めたにも関わらず、あなたはただ、末裔が今でもここにいる、という事しかわからないのですか？」
「……」

それは、挑発だ。学者が誰かを挑発するなんて聞いた事ないし、イメージつかない。ミュージさんの今の笑顔は、エンバシーさんでもやらなそうな皮肉たっぷりなそれだった。

「もっと知っていらっしゃるのでしょう？　末裔だけじゃなく、古代族の具体的な能力や特技を…」
「……これ以上私を怒らせるならば、貴様の大好きな魔物のいる海へ突き落とすぞ」
「！？……」

誰が見たってわかる。ホータイに巻かれた顔でも、この人、怒ってる、と。

ムーンの恐ろしい言葉に、周囲にいた他の客船達も聞いてしまったらしい。こちらに目線が集まるのがわかった。

「やめて下さいよ。そんな事するならば人気のない所で起こした方がいいですよ」

苦笑いを浮かべ、冗談こぼしながら制するミュージさん。でもそれは、炎に油差しているようなものだけど…。

「……これ以上私の視界の中に入るな」

「……」

あえて怒りを暴発させず、沈めようとしているのがわかる。ムーンが余計な事には関わらない事を、わたしは知っている。

「……わかりました。騒ぎを起こしたくないですよね」

話をしても無駄であると察し、ミュージさんは立ち去ろうとする。しかし、

「ミュージさん！」

「？」

彼を呼び止めたのは、レイだ。ミュージさんも中途半端に踵を返そうとしたので、またわたし達側に正面を向いた。

「ミュージさん、魔物とかに詳しいんだよな？　召喚士だし」

「ええ、一般的な魔物から架空や伝説と詠われたものまで知っておりますよ」

「あのさ、おれ達、変な奴に会ったんだよ」

変な奴？　そんな人に……いや、魔物に会ったのだろうか？　もしかしてあの巨大ムカデ？　記憶に新しいのは確かだが。

「もしかしたらミュージさん、知ってるかもしれないから……」

「それはどんな“奴”でしたか？」

早速食い付いた、さっきの冷戦状態はもうなくなり、先生と教師のような感覚を見せる。

「人間や、動物を魔物にしてしまう変な奴」

「！？」

それって……ベゴ村で会った黒マントの事？

人の形ではあったが、ヘスティアーさんやレイの家の牛達を魔物化させる力を持っているような事は言っていたから……魔物だとは思うが…。

「……心当たりがないですね、その魔物は」

「え？」

ミュージさんの記憶の中には、該当するものがないようである。これにはわたしもビックリする。

正体が不明故、何かわかるかもしれないと思ったから。

「どのような体をしてましたか？　獣だったり、鳥だったり…」

「いや、人間みたいな奴だぜ。真っ黒いマントに真っ黒いフードかぶってたから、顔が全然見えなかったし、普通に喋っていたし…」

「……」

それで更に脳内の図鑑を広げて探すミュージさん。瞳を閉じ、視界を閉ざす事でより早く記憶にたどり着こうとしているのか。
だが、

「……それは、もしかしたら、魔物ではないのかもしれませんよ…」
「？…」

魔物じゃないと否定を言い出した。ミュージさんでも結局わからなかった…のではなく。

「これはボクの推測ですが、その黒いマントの魔物、というものは、人間なのかもしれません…」
「えっ？」

それを人の仕業である事を推理した。

「普通に暮らしている世界の住民達の中には稀に、魔界や魔王を崇める異教徒がいらっしゃる事があります。そんな方々が、人知れず禁断魔法や黒魔法等に手をつける事があるんです。でも……そのような事件が発覚した場合は、公にしないのが常識ですね」
「って事はその黒マントは、そういう危ない魔法を使って、人間と動物を魔物に変えたりするって事か？」
「……そういう事になりますね」

そんな人達は、架空物語書だけの存在ではなかったのか……。という事はあの黒マント、かなり魔界に干渉している可能性が高い。魔物に変える力、姿を消す力等も備わっているのだから。

「なんで……おんなじ人間なのに……」
「ハッキリ断言は出来ないですよ…あくまで仮説ですので、信じる

信じないは個々の自由ですから」
「じゃあおれ信じないっ」

いや、レイ、そうやって終わらせちゃうの？　あっさりした結論には、呆れよりも微笑ましく思ってしまう。理由は言わずとも、レイだから。

「…？」

そういえば、ムーン、黙ったままだ。ふと思い彼に目を向けた。ら、

（え……？）

虚ろ。
右目に光が宿っていないかの如く。
こんな表情、前にも見たな、と振り返ればそれは最近で、ベゴ村であの黒マントが去った後のそれに近いものだった。

「ムーン？」
「……あ、ああ…どうした……？」

名を呼び、またなんでもないいつもの彼に戻った。いや、ボーっとしていたから…、と呼んだ理由を言い、そうか、と一言言われただけだった。
ムーン……もしかして、黒マントの事、知っているのかしら。
もし知っているならば、わたし達に語らない理由は、古代族の歴史と同等の扱いになるからなのだろうか。

「人や生き物を魔物に変えてしまう力、ですか……」

レイが区切りつけたはずなのに、まだ何か引っ掛かりがあるのか、ミュージさんが呟いた。
それに区切りつけた本人も興味を持つ。

「やっぱり何か知ってんの？」
「いや……身体の構造を変える力なんて、なかなかお目にかかれないですよ。そんな事が出来るのは」

ミュージさんは言った。

「魔王か、あるいは魔王に近い立場の魔物でしょうね…」

その時だった。

「きゃあああぁっ！！」
「！？」

突如、船上で女性の悲鳴。立て続けに男、子供、老若問わず悲痛な叫びが響き渡った。

「魔物が…！　さっきのタコがいっぱい……！！」
「うわあああああっ！！！」

タコ？　わたしとレイは耳疑い顔を合わせた。アイコンタクトも兼ねての行動。
一般客が船首へと逃げ去り、戦えるだろう者らは船尾へと駆け出した。わたし達も、そしてミュージさんも船の後方へと向かう。

「なっ…？！」

客の一人が叫んだ『さっきのタコ』とは、デヒルオクトを人間サイズにした大群だった。
別の意味、嵐の予感…。

第五十八章

―――――――――――

黒、再来

―――――――――――

既に対立している戦士、魔法使い、刃を振り回す船乗り等は、海から這い上がり、船上に侵入してくるチビオクトを追い払っていた。ある者は敵の目を突き刺したり、ある者は燃やしたり。ある者は蹴落としたり。

「上だ！」

「えっ？」

チビオクトは船尾からじゃなかった。帆が飛ばぬようポールと結び繋がれているロープにも、侵入を許してしまっていた。ムーンが教えてくれなかったら、頭上からの奇襲に気付かなかっただろう。

瞬時、武器を構え、真上から急降下してきた一匹に、わたしは両刃を一本にまとめ重ねて上突きの構え。体を貫けるかと思ったが、

「きゃあっ？！」

そうだ。こいつは軟体だ。切れない！

一瞬、だらりとしたチビオクトを支えたが、重さがあったが故にわたしは耐えきれず、そのままのしかかりを受けてしまった。

「『サモン』！　『リトルドラゴンズ』！！」

いつまでも受けられる重量ではない。早くどかそうと抗うが、身体は重さで縛られている。ミュージアムさんがまた何か召喚をした声を認知した時に、ふっと身体が軽くなった。
だが、すぐに起き上がれず重い身体…。レイニーとムーンが手を貸してくれた。

「大丈夫ですか！？　アルさん！」

ミュージさんもわたしの安否を確かめる。争う音、魔法が引き起こす音、羽ばたく音？
ミュージさんの後方に目をやると、

「…かわいい」
「彼らがアルさんを助けて下さいました」

最初に見たあの可愛らしい白い竜だけじゃなく、同じ姿でも色違いの竜があと三匹も各場所に滞空していた。召喚獣達だ。
赤色、青色、緑色……赤と緑の竜が協力して、あのチビオクトを捕まえたらしく、そいつを海側の空へと放り投げたら、青の竜がチビオクト目掛けて頭突きをした。
その勢いで、海面にぶつけられたそいつは一度沈み、ぷかぁと水面に体が浮かんだ。……死んだらしい…。

「すご…」
「惚けている場合ではない、アル」
「う…うん！」

見た目の可愛さから連想出来なかった凶暴な連携プレーであ然としたが、ムーンの忠告で気を取り直す。
再度周囲の状況を確認すると、倒し損ねたチビオクトらがどんどん範囲を広げているのがわかった。
恐らく船上にいる戦士達は魔物に負けはしていないが、頭数は明らかに相手が勝り、それで不利な立場に置かれているようだ。

「目だけ狙うって難しくないか？」
「それでもやるしかないでしょっ？」

切れない体を持つ相手故、レイは弱気になっていた。レイらしくない。わたしだって難しいと思っているが、やるしかないのだから武器を構えた。

「こっちに来るぞ！」

三体のタコが床に這いつくばりながら迫ってくる。船を沈められるのはたまったもんじゃないし、一般人に怪我させたくない。

「ボクに任せて下さい！」

そう名乗り出たミュージさん。ドラゴン達も戦闘の構えを見せた。

「フィエ、グラヌ、奴らを押し返して下さい！」

赤と緑が動き出す。文字通り二匹の竜は、同じ大きさのタコ目掛けて突進し、押し返した。そのタコ達は勢いよく船外へと吹っ飛んだ。
しかし、一体のチビオクトはそれをかわし、進行する。

「クアーも！」

それを逃さないミュージさんはまた指揮をする。青の竜が一体を同じようにアタックした。最後のチビオクトも、仲間達と同じ結末を辿る。

「いやあぁぁぁ！！」

すると、また悲鳴が。今度は船の前方に。確かあそこには一般客が避難していた場所のはず。

「アルさん達はそちらをお願いします！　ボク達はここで追い払いますので！」
「わかりました！」
「おうよ！」
「頼む」

ミュージさんに言われ、彼に任せる事にした。
わたし達は元来た道を引き返し、船尾の方へ向かう。

「勝つ事よりも、まずは他の者達の身を保護する事を優先しろ」
「護衛って事ね」
「それならおれだって出来るぞ！」

ムーンの作戦を聞き、レイが弱気を脱した。護衛の仕事はレイの得意分野だ。本来ならば彼は、青海の騎士団にふさわしいのだから。
船尾からもチビオクト群が這い上がり、一般客達は後ずさり、徐々に迫ってくる敵から逃れようとしていた。

「皆さん！　船内へ避難して下さい！」
「ここはおれ達が引き受けるぜ！！」

わたし達の存在に気付き、振り向いてくれた客人達。その瞬間、チビオクト達が一斉に飛び上がった。

「させるか！」

とっさに行動するレイ。奴らの目の前にあの閃光玉を投げつけ、一瞬の眩い光を放った。わたしとムーンはそれが何なのか知っていたので視界を防いだし、幸い客人達は背を向けていたので、驚いただけだった。

「おっ、動かなくなったぞ？」
「それなら早くお客さん達を！」

レイの閃光玉は効力があり、チビオクト達はうずくまるように動かなくなった。投げた本人もびっくり。わたしはレイを急かす。しかし、既に船乗りの一人が避難客を船内へと誘導していたので、わたし達は必要なかった。

「……あとはあいつらか…」

確認するように呟き、ムーンはチビオクト達を睨んだ。徐々に目眩ましが解かれ、チビオクト達が動き始めた。しかし、さっきより数が多い気がするが…。

「アル、レイニー」
「何？」
「なんだ？」

ムーンは剣を抜いてはいなかった、となると、これから言い出す事

は、

「私が呪文を唱える間に、なんとか持ちこたえられるか？」
「それっておっちゃんの護衛って事か？」
「……まぁ、そういうところだ」
「りょーかい！」
「わかったわ！」

一掃作戦か。やっぱり。
レイは捉え方さえ変えればやる気が出るようだ。単純。今に始まった事ではないが。
わたし達が同意すると、すぐにぼそぼそと聞き慣れない言葉を発するムーン。

「とにかく近寄らせなければいいから、なんでもいいから押さなきゃ！」
「ああ！」

わたしは両手に剣を構えるが、鞘に収めたままにした。切れないならば、このように質量を少しでも増やして打撃系にしなければ。

「いいなぁアルテミスは…リーチが長いから、よっ！」

と羨みながら、レイは煙玉を大群に投げつけた。
チビオクト達の行く先に、白い煙が立ち込められ、姿が見えなくなった。恐らく奴らもわたし達側が見えないと思う。

「リーチの長さならあなたが一番でしょ？」
「え？　おれ、そんな武器あったっけ？」
「騎士団に入る前は動物達の調教に使ってなかった？　それに、持

つだけが武器じゃないだろうし」

わたしは彼に助言をし、煙の中へ突入した。右往左往している一匹が目の前に見えたならば、すぐに突き刺す動作で前へと押し返す。先端は特に力が集まるので、力自慢じゃないわたしでも容易く押し出せる。

一匹、また一匹と、油断している奴らとムーンの距離を離していく。しかし、そうしてる内に煙は徐々に晴れていき、わたしは

「やばっ」

大群の中心にいる事に気付いた。ムーンとの距離は離せたが、逆に自分の身を晒す危険を冒していたのだ。

ところが、

「おりゃっ！」

一部のチビオクト達の身体を乾いた音が叩く。ムチだ。

「アルテミス！　伏せろ！」

と命令が聞こえたが、わたしは聞かなかった。次にナイフが何本か飛んできて、ムチが放たれた方向を見ていた何匹かのチビオクト達の目に、それが突き刺さった。

「伏せろって言ったじゃんかよ！！」

「伏せなくても問題ないわよ！」

わたしが話を聞いてくれなかったのか、心配する意味で文句を言うレイ。

だって、こんなにノロい動きの敵、レイの腕なら投げるナイフなんて百発百中だ。

「お前そこで耐えられるか！？」

「なんとかやってみるから、出来るだけ減らして！！」

「だから伏せるんだぞお前は！」

わたしの身を案じているところ、あのレイは己が技量に自信がない、と捉えられる。

まだ残っているチビオクト達が人間のように飛びかかってくるが、限られた隙間を利用して避ける。そして相手に隙があったならば、頭を割るつもりの勢いで二本の剣を合わせ、振り回す事で攻撃。これ繰り返し。

一匹が少しでも吹っ飛べば、それに巻き込まれる敵側の仲間も動きを制限される。一石二鳥どころか三羽も四羽もおとせる。

「殺るから伏せろって！」

その間に、レイがムチで気を引かせ、次々と致命傷なる目を狙う。もちろん、外していない。

「だーかーらー！！」

「大丈夫でしょうってば！！」

なのに自信がなく、わたしに注意ばかりする彼がわからない。わたしが標的の中に混ざらなければいいのだろうか。

「お前達！　伏せろ！！」

レイじゃなくて…これはムーンの声だ。詠唱が終わったのか。

言う事を聞かない理由はないので、わたしもレイも身を低くした。
そして船上に響き渡るは、

「『風の怒りをその身に刻ませ』！！　『レイジングストーム』！！」

吹く風の強さを増していくものだった。その異常にチビオクト達も気付くが時遅し。目で確認は出来ないが、風が渦巻いているのは感じ取れた。そして、伏せていたわたし達にはただ風が強くなったのが肌で知れただけで、チビオクト達は上空へと舞い上げられていった。
見上げれば、見えなくなる程に。

「おっちゃん…？」

風が弱くなり、いつもの風量になった。レイが疑問符を添えて、遠慮がちにムーンを呼ぶ。あの魔物達の事だろうか。

「…遠くの方へ飛ばしただけだ。あの高さから海へ落ちたならば、助かってはいないだろう」

レイは、聞きたかった事をムーンが話してくれたのか安堵のため息をした。そして立ち上がり、丁度立ち上がっていたわたしの元に早足で来るなり、

「なんでおっちゃんのゆーことは聞いて、おれのは聞いてくれないんだよぉ」

またその話を蒸し返すかあんたは。
思わずため息。それにレイがムッとした。

「聞かなくったって、レイの腕は確かなんだから。それを信じない事、したくないよ、わたし」
「えっ？」
やっと理解してくれたか。しかし、わかりやすく言ったわたし自身、恥ずかしい発言だと気付いた。
普段から信頼しているのに、改めて言ったのだから。
「そ…それならいいや」
レイも了承してくれた。しかし、目線を少し外したのは何故。
「…！？」
「えっ？」
「へっ？」
突然、ムーンがわたしとレイを巻き込み前方へと突き飛ばし、転がり込んだ。ドスンと何かが落っこちてきた音が。
受け身をとり、立ち上がりムーンは背後へとすぐに振り向き長剣を構えた。
何事なのか。わたし達もすぐに起き上がり振り向けば、
「まだいたのか！？」
四匹程のチビオクト達。
「違う、帆に掴まって助かった奴らだ！」
頭上を見上げ、そういえばこんな高いものがあったな、と認知。上

空に舞い上げられ、不覚にも生き残った奴ら、という事か。

「さっきよりは少ないから大丈夫よ！」
「ああ、そうだな！」
「油断はするな…二人共」

向こうも戦闘体勢だ。さっきよりも高く飛びついてきた。だが、

「ふんっ！」
「うりゃ！」

バックステップし、すぐさま逆手に持った剣で目を突き刺したムーン。
動く標的の目を、見事にナイフで狙い撃ちにしたレイ。
わたしは鞘に収めたままの剣で打ち返す。ベルトに鞘を戻して再度刃として逆手に構えては、一時的に動けないチビオクトの両目を両の剣で突き刺した。
あと一匹。そしたら、

「ホワイティ！！」

名前らしき固有名詞を叫ぶ声。竜の鳴き声。そして、チビオクトはぶっ飛ばされ、海へと落ちる音。

「大丈夫でしたか！？　皆さん！！」

それは、ミュージさんと白い竜ホワイティによるものだった。敵に勝った白い竜は勝利に喜びの顔だ。
ミュージさんだけじゃなく、他の戦士や船乗り達も駆け付けてきた。

「ありがとうございます、ミュージさん。そちらは？」
「ええ、なんとか。全て追い払い、他に何も来なかったので、こちらに来たのですが……」
「……ここも、何も襲っては来ないようだ」
ムーンが周りを見渡し、一時安全である事を確認した。
「いやいや……あんたらのおかげで助かったぜ。危うく沈没船になるところだったよ」
と、船乗りの頭らしき男が、わたし達戦士一同に礼を述べた。ありがとよ、ホントに助かったぜ、と。
「これで航海も出来ますし、避難している方々をお呼びしましょう」
「そうするぜ、ミュージ」
ミュージさんが頭に話を振り、頭は快く聞き入れる。避難場所となっている部屋のドアへ向かう時に、
「しぶとい連中が」
「っ？」
声が響いた。どこかで聞いたような声。
しかも、聞こえてくる方向が不自然だ。平行に聞こえるのではない。見下ろされているような所から聞こえるのだ。
まさか、と思い、船の前方を見上げると、
「！！？」
奇怪な光景がそこにはあった。

「なんでまた」

風になびく黒のマントローブ。同じくフード、ただし、何の細工なのか、顔を明らかにしてくれない風。
その背景は、空と海の地平線。だが、まるで引き連れてきたかのように、黒い雲達が広がり始めていた。

「あなたが」

それを知らない人々が騒ぎ始めた。それを聞きつけて一般客達が外に出る。そして連鎖していく。

「ここに……？」

ユーピテルとベゴ村を陥れようと仕組んだ、あの黒マントの男が姿が。宙に浮いているのだ。

「誰だお前は！？」
「人が……浮かんでるわ！！」
「なんか風が強くなっていないか……？」

船上はますます騒然となる。
風に黒い雲、さらに雨まで降り始めた。これはもう、嵐の前兆としか言えない。
まさかあの黒マントが引き起こしている、というのか？

「おいテメェ！！　あん時はよくも親父達をひどいめにあわせたな！！」

レイからしたら奴は仇のような存在だ。船首ギリギリに身を乗り出し、怒りの声を荒げた。波と同調するかのように。

「……ほう、見覚えがある顔があるな」

「忘れたとは言わせねぇぞ!!」

わたしとムーンもレイの元へ駆け寄った。お前ら危ねぇぞ、等と呼び止められたが、レイが危険行動しているのだから聞く気はなかった。

「忘れる事はないな……どんなに時が経とうとも」

「は…？」

「あなた！　どうしてここに!?　また何か企んでいるの?!」

忘れた、という返答だったら、レイはあ然としなかった。殴りかかっていたかも。

わたしは奴がここにいる理由を問い詰めるべく率直に問いかけた。

「どうせお前達はここで消えるのだからな。エイスへの航路を一時的に止める為に、こいつを連れてきただけだ」

「こいつ…？」

奴の口振りからしてみると、今まで航路を潰してきたのはこいつの仕業であると伺える。

と、いう事は、サーサリーの船着場にいた黒雲の団長達も、あいつのせいで…。

「お前以外に誰がいるって言うんだ!?」

レイがキョロキョロと周囲を見回し、黒マントの発言を確認するが、

嵐となった所を見ても黒マント以外の姿等、ない。
奴は何を言っているのか。

「あれが、レイさんの言っていた…」

いつの間にかミュージさんもわたし達の元にいた。呟く声でもビクッとしてしまった。

「……ナ…」
「え？」

ムーンも呟いたみたいだが、風に遮られている故に空耳だったかもしれない。彼の横顔を見たが、今はじっくりと表情を探れない。
もしかしたら、奴と初対面（ムーンは初対面？）した時のあの顔をまたしているのだろうか。
すると、

「うわっ！！」

突如、前方に巨大な水柱がせり上がってきた。それで奴の姿も見えなくなる。
そして、雨に紛れて舞い上がった海水が落ちてきた時に、知る。

「へ…蛇！？」
「デカッ！！　しかも多っ！！？」

大蛇が、しかも八匹。海面から姿を現していた。個々に意志があるのか各々の動きは異なる。くねったり、ジッとしたり、わたし達側に威嚇をしたり。
船と同等あるいはそれ以上かもしれない大きさだった。

「八頭の海蛇」
「やつあたま…何っ？」

ミュージさんがすかさず相手の名を口にした。レイもオウム返しするつもりが途中でつまり、聞き出す。

「海の災害を引き起こす恐ろしい魔物です。今までの航海が難航していたのはこの魔物が邪魔をしていたからでしょう」
「詳しいな。学者か」

黒マントが薄気味悪い笑みを浮かべたのがわかった。

「だが……学者がいようがいまいが、お前達はこいつに沈められるのだからな！！」

わたし達は船の上、だが敵は海の上。どうやって戦えと？
嵐は悪い予感を更に増していく。その流れに……巻き込まれてたまるものか！

第五十九章

海蛇と小竜達

「殺れ」

黒マントのその一言で、死闘が始まると思ってもいいくらいだ。八頭の海蛇達が一斉に叫び、何をするのかと思えば、

「うわっ！」

ただでさえ奴の嵐に船が揺れるというのに、自らの頭を海面に叩き付けて波を起こし始めたのだ。

これには船乗りも戦士達もバランスを崩してしまう。一般客達は悲鳴もあげてしまう。

「どうすんだよ！？　敵が海にいるんじゃ近寄れねぇじゃん！」

「高度魔法を使わなければ、奴らに一撃を与えるのは難しいだろうな……」

「おっちゃんは簡単だろうけど、おれ達何にも出来ないじゃんかよ！！」

ムーンが冷静に戦法候補を述べるが、レイニーの言うように、それだけじゃこの危機から逃れられはしないだろう。

一方的に災厄を受け、わたし達は沈んでしまうのだろうか。そんな事させたくない、けど…。

「『サモン』」

「？」

ミュージアムさんが魔法書を広げた。ばさばさと勝手にめくる紙、だがミュージさんは目当てのページを空いた手で押さえ、

「『リトルドラゴンズ』！！」

まだ四体の小竜達がいるが、更なる数の小竜達を召喚した。魔法書が光り、そこから光の分子がいくつも現れた。

その数だけが人間サイズの竜を型どり、初めて小竜達が姿を現した。白、赤、青、緑以外の様々な色のドラゴン達が帆よりも高い空で旋回する。

「ドラゴン達！　この船が沈まぬように守って下さい！　ホワイティ！！」

他のドラゴン達に命令し、一匹だけ、白い小竜のホワイティを呼び寄せた。

ホワイティは主人の元へ近寄り、主人はホワイティの背へ飛び乗った。

「ミュージさん何を！？」

「ボクも学者ですから、魔法で奴らを撃退してみます！」

「一人じゃ無理ですよ！！」

わたしが呼び止めても、ミュージさんを乗せたホワイティは船上か

ら飛び立った。嵐の強風に負けず、彼らは海蛇達の元へ向かった。

「ミュージさんだけじゃやべぇって！！」

海蛇の一匹が小さな彼らに噛みつくがんかわされる。だが、かわした先には更に他の海蛇が襲いかかる。それさえも彼らは軽やかに避け、ミュージさんは何か詠唱していたのであろう雷魔法を一匹の頭へ放った。

その一撃は効いただろうが、そんなんで倒れたりはせずに攻撃体勢を整える海蛇。

「わたし達もドラゴンに乗れれば……」

「そうか…！」

「え？」

わたしが、加勢出来る仮定の一つを呟いた途端に、ムーンはひらめいたのか声をあげる。

「フェイ！　グラヌ！　クアー！」

そして、固有名詞を叫んだ。すると、

「！！」

「これほどたくさんの小竜を扱うあいつだ。各々に名前をつける事で、あいつは上手く扱う事が出来る…」

「おっちゃんすげぇよおっちゃん！！」

ムーンが叫んだのは、小竜達の名前だった。赤色、緑色、青色のリトルドラゴンがこちらに舞い降りてきた。それにしてもムーン、記憶力、高いのね。

「私はフェイに乗る。お前達も必ず彼らの名を呼び、乗せてもらうんだ」

と、赤色の小竜に乗せてもらったムーンはわたし達にそう伝え、ミュージさんの加勢へと飛び立った。

「いいのかな…ミュージさんに無断でドラゴン乗っちゃって」
「いいのよ。今は緊急事態よ。クアー！　行きましょ！」
「えっと、じゃあおれは」
「グラヌよ」
「グラヌ！　頼んだぞ！」

レイが罪悪感に戸惑うが、別に悪い事するワケじゃないんだから。
わたしは青色のドラゴンに呼び掛け、駆け寄った。
レイも緑色のドラゴンに走り寄る。

「よろしくね、クアー。頑張りましょ」

可愛らしい瞳がわたしを見つめてくれる。コクリと頷くは了承の意だ。
クアーの背中に飛び乗り、ふと思った。
乗馬すらした事ないわたしが果たして、竜を操れるのだろうか、と。
だが考える間も与えず、

「きゃあああああっ！！」

クアーは嵐の中へと羽ばたいた。わたしは必死に彼（否、彼女？）の背にしがみつき、海蛇達へと向かった。

「大丈夫かよアルテミス！！」
「だ…だいじょうぶよ……」

レイとグラヌのペア。わたしを気遣う彼の声が聞こえ、声した方へ見るとレイは慣れた様子だった。農家の息子だから、乗馬の感覚と大して変わらないって事か？

「おい、あれ」
「？」

レイが指差すは嵐の中、海の主の如く鳴き声を轟かせ、刃向かう勇敢な小竜達を墜とそうと暴れる、戦う手段を持たない人間だったならば近寄れはしない光景。

「『邪となりしものを燃やせ』！　『フレイム』！！」

ムーンの乗る赤いフェイは、頭上から降りかかる海蛇の頭を避け、それに振り回されず冷静に詠唱し、攻撃してきた一匹に火をかけたムーン。
でもやはり、そんなんで倒れるような魔物じゃない。やられた一匹だけじゃなく、他の海蛇達も食いかかる。

「『雷（いかずち）よ、邪気に貴方の天罰を放て』！！　『ライトニングボルト』！！」

ムーンとフェイに襲いかかっていた海蛇三匹の頭上から雷が落ちる。唱えた声は海蛇達の頭より上の方、ミュージさんとホワイティのペアだった。

「大丈夫ですか！？　ムーンさん！！」

「……すまない」

という会話が聞こえてきたところまで、わたし達も接近。すれば二人はこちらに気付いてくれた。

「アルさん！　レイさんも！」
「助太刀に来ましたよ！！」
「ミュージさんだけじゃ危ねぇからな」

わたしとレイ、そしてわたし達が乗っている小竜達を驚きの顔で見たミュージさん。だが、それは苦笑いに変わる。

「やっぱり皆さん……兄さんの仲間達ですね」
「？」

何の事？、と思って間もなく、

「うわああっ！！」
「ひゃあっ！」

わたし達の頭上から海蛇が牙を向いて突っ込んできた。危機感知が鋭い小竜達のおかげで、振り回されたが避ける事が出来た。だが、皆互い、距離が出来てしまう。
攻撃した海蛇はそのまま頭を海面に突っ込ませるのを、わたしは見下ろす位置にいた。

「皆さん！　一匹ずつ対象を集中して狙って下さい。この人数なら抑える事が出来ると思います！！」

ミュージさんがわたし達に作戦を知らせる。わたしより高く、海蛇

の頭上に位置している。

「抑える？　倒すんじゃねぇの？！」

「残念ながら、この魔物の弱点は知らないんです……だから船の被害を抑えるのを優先したいのですが……」

「ミュージさんでもわからないってあるの！？　うわっとっ！」

こんな中で話し合うのは難しい。レイの乗るグラヌが相手の攻撃を避けてくれた。ヒヤヒヤする。

「何もしないよりはまだマシだ！　私からいくぞ！！」

ムーンは弱点を知ろうが知らなかろうが、戦う事を選ぶ。ムーンは長剣を構え、一度上昇し、近くの海蛇に向かって斜め急降下した。

「魔技、『紅蓮』！！」

ムーンの持つ刃に炎が宿る。雨のせいかいつもより火力が少ない気がするが。

不利も気にせず、海蛇が返り討ちにしようとする前に彼らは

ギャオォォォ――――――――！！！！

すれ違いざま、海蛇の片目に切り傷を負わせた。斬られた目をふせ、痛みに苦しむ一匹。長い胴体がグラグラくねくね、わかりやすい状態だ。

「……そうだよな、じゃあおれも！！」

レイも仕方なしに了承し、ムーンに続いてグラヌを行かせる。

右手の指にそれぞれ挟み持つは牙を削ったナイフ。左手には何か仕込み玉、火種はないから恐らく目眩まし系か。

「そりゃっ」

痛みに耐えて海蛇がレイを睨んだが、それは左手から放たれた物が顔に当たり破裂し、粉をかぶる事となった。

え？　粉？　まさか殺虫粉？　雨も風もあるのに、いやそれ以前に奴らは虫なんかでは、

グウウゥ……

え？　眠そうにあくびをし、徐々に体が海へ沈んでいくのに、海蛇は抵抗も薄れ目をつぶり。

そのまま海の中へ眠っちゃった…。

「暴れ牛もおとなしくなる眠り粉だい！」

「眠り粉？　いつの間にそんなものを……」

「ベゴ村で調達したのだろう。あいつの故郷は武器庫同然だろうから…」

近くにいたムーンが推測を並べる。彼の剣はまだ闘争心のごとく燃え上がっていた。彼はすぐに、そしてミュージさんも攻撃を開始した。次は隣の二匹目へ二人は向かう。

「ホワイティ！　ライトニングブレスです！」

きゅううぅ！！、とミュージさんの声に答える可愛らしい鳴き声とは裏腹に、ホワイティの口からその姿とは不釣り合いな雷の光線を海蛇へ放った。

驚きはするが、わたしも何もしないワケにはいかない。
ミュージさんは一旦、奴らの攻撃範囲から離脱し、代わりのようにわたしが向かった。
瀕死の二匹目にまたすれ違い斬撃を与え、そのまま三匹目への攻撃へと繋げるムーン。
だが、そんな彼らに一匹が襲いかかろうとしていた。から、

「クアー急いで！！」

思わず青小竜に命じ、接近を試みたが、後で後悔した。

「うわわわっ？！」

確かに間に合うくらい近付けたが、わたしの身体が小竜のスピードについていけず、しがみつくのに必死だった。
もちろん、最初から構えておらず、ムーンを狙っていた海蛇がこちらを睨む。
やばい、と思ったと同時に海蛇が大口を開けて噛み付く体勢に入った。
が、

キュウウウッ！！

クアーも小竜だ。口から勢いよく水流を吐き出し、それを海蛇の口へと放った。
その激流に海蛇は耐えられず、口をしめたがクアーの攻撃は続く。
そのまま水鉄砲の的と化した。
わたしはまた驚いて、あ然とするだけだった。

「えいっ！！」

水だけじゃなく、ナイフも刺さる。刺された海蛇は体を動かせなくなったのか、水圧に圧されて胴体を海面に叩き付けながら倒れた。
ナイフが飛んできた方向を見れば、そこにはレイとグラヌのペア。
そして、援護があった事により三匹目…というか四匹目も倒す事に成功したムーンもいた。

「あと半分か…」
「いよぉし！　このまま嵐なんか追っ払ってやろうぜ！！」

彼ら三人のおかげでこちらが優勢だ。わたし、何もしていない…。
海蛇が減った事により、若干だが、嵐も弱まっているのがわかった。
ここにいる小竜以外の仲間も、船を守るのに態勢を崩してはいない。

（わたしもちゃんと守らなきゃ！）

そう決意した時。気付いてしまった。
海蛇達の海面に何やら鋭い眼光が薄ら見えている。
しかも、目線の先まで察した。
まずい。その目線にはムーンとフェイが重なっていた。
眼光が強くなり、何かが来るのを感じたわたし。それはクアーも気付いたようだ。
わたしの思い通りに動いてくれた。

「ムーン危ない！！」

ムーンを軌道から外そうと突き飛ばす。それはクアーと同じ考えだ。
と思ってたのに、

「え？」

何故かわたしは宙に放り出されていた。
クアーが、わたしまでも振り払ったのだ。
わたしは振り向き、クアーの姿を捉えたが、徐々に小さくなり、そして、

グオオアアアア――――――――――――――――――――!!!!!!!!!

耳につんざく重い鳴き声と同時に、激しい水放射を浴びるクアーを見てしまった。

「アル！」
「っ！」

そのままわたしは落ちるかと思ったが、ムーンに抱き留められた。
放射はそのまま後方の船の帆に穴をあけてしまう。
その恐ろしい攻撃に、悲鳴や怒声が船上にわずかに響き聞こえる。

「アル……大丈夫か？」
「クアーが……」

一瞬でも、意志が合ったと思っていたが、間違っていた。クアーは、先程の攻撃も読み取り、助からない事を知って、わたしを守ってくれたんだ。
こんな危険な助け方をしても、仲間達が何とかしてくれるだろう信頼までも持って。

「クアーが…！」
「安心しろ……クアーは召喚獣だ。しばらくの間呼び出せないだけで、悲しむ事はない…」

「でも…！！」

グオオオ――――――――――！！！

またさっきの轟声。声のした方を見た。
海面にはまだ、あの鋭い眼光がまだ海上を、わたし達を睨んでいる。
殺意。それしか感じ取れない。

「そうですよ……彼女は数日経てば、また呼び出せます。今は、彼女の分まで戦わなければなりません、アルさん…」
「ミュージさん……」

ミュージさんも、そうわたしに声をかけたが、目線はあの潜む魔物へ向けられている。

「おかしいですね……てっきり八頭かと思っていましたが」
「ああ、もともと八匹だ」
「！」

今まで見守っていたかのように黙っていた黒マントが、ミュージさんの独り言に答えた。八頭だと思っていた、とは言うが、実は九匹であるとミュージさんは思ったのだろう。
黒マントはそれを否定し、代わりに答えを出した。

「俺が一匹加えただけだ」

単純だが、単純に思えない奴が海から姿を現した。出てくる事により一波大きくなる。

「なんだこいつ！？」

確かに海蛇の一匹だが、まだ残っている周りの仲間と比べると、明らかに親玉のような大きさ、そして風格。レイの驚く声にも同感だ。額には紅い宝石のようなものが埋め込まれているようについている。…ん？

以前にもこんな風に体にそれを身につけている奴がいたような…。

「思ったよりも厄介だな…お前達は。こいつで仕留めてやろう……」

殺れ、とまた命じ、親玉は鳴き声とは言えない声で吼えた。それに同調するかのように、嵐が強まり、波が高くなっていった。船から悲鳴があがる。

「ミュージさん！　あのでっけぇのどうすんの！？」

レイは学者から助言を得ようとする。そんな彼から必死さが伺える。

「ボクも今まで見た事がありません！　だから、他の海蛇を倒しつつ様子を見ましょう！　弱点がわかり次第、皆さんにお知らせします！！」

「りょーかい！」

「わかりました！」

「了解…！」

わたし達騎士団は同時に了承を答えた。

ミュージさんとレイは早速ターゲットへと向かうが、わたしはまだムーンに抱きかかえられたままだった。

クアーもいないし…フェイに二人乗れるけど、片方の動きに制限がかかるかもしれない。わたしも彼も剣を持つし。

「どうするの？　ムーン」
「…海神だ」
「えっ？」

わだつみって……城下町に入る前にとっさに思い付いたわたしの剣舞？
わたしが剣を持つ、という事なのだろうか、と思ったら

「湊町で育ったお前なら、海神に対する敬意をしっかり持っている。それと強い精神だけで魔技を使えるはずだ」
「ま、魔技って…！？」

こんな状況下にありながらムーンは、突拍子もない事を口にしたのだ。
わたしよりはるかに人生の、戦士の先輩であるムーンが使う魔技を、わたしが同じように使えるっていうの？
というかわたし、魔力なんて持ってないけど…。それをムーンに短く言う。ところが

「魔技は魔法と同じだが、若干異なる。魔力を持たない者でも使える魔法だ。武具、気力、意志さえあれば強くも弱くもなる」
「でもムーンの使っている魔技は魔力も必要としているじゃない」
「それは私なりの使い方だ。更に魔力を込める事で、出力が安定して威力が高まるからだ。……だが、私の場合、高め過ぎぬよう調節として魔力が必要なだけだ」

じゃあ尚更ムーンが主戦力として戦うべきじゃないの？、と思ったが、

グオオオ――――――――――！！！！

「うわっ？」
「っ！！」

例の親玉が、宙で停止しているわたし達をあの水流放射で狙ってきた。それをフェイがかわしてくれた。この不意打ちで言いたかった事が言えず、バランスを崩すが、ムーンがフォローしてくれた。

「私の魔技では、この天候とこの場所では最大限に使う事が出来ない…。お前の武器、海神への敬意と気力があれば、あの海蛇に抗えるかもしれない…」

追撃がこない事を確認し、わたしが知りたかったのを気付いていたかのように、ムーンは理由を話してくれた。

「どうすればいいの…？」

ムーンの言葉が確かならば、わたしは挑戦したい。だが具体的に、『魔技』を扱う方法を知らないわたし。ムーンから少しでも助言がほしい。

「魔法は詠唱を必要とするが、魔技は豊かなイメージさえあればいい」
「豊かなイメージ……」

確か、そんな話をした事がある。ムーンが怪我と発熱を患い、ユーピテルへと向かうキャラバンの中で、マリアンヌ達と会話していた内容の一つだ。

「お前の思い描く海神は、どのようなもので、お前に何をもたらす

のか。そして、お前はどうやってこの状況に打ち勝てるのか……」
「私の、海神様……？」
「とにかく接近する」
「えっ？！」

なんで？、と問う間もなく、フェイは海蛇達へと向かった。
親玉以外にもまだ四匹おり、その内の一匹をレイとミュージさんが相手をしていた。
さっきはさくさくと倒せたのに、あのデカいボスが現れてから苦戦を強いられている。二人は攻撃を避け、反撃しようとするが、他の二匹とボスに妨害されて思うように動いていなさそうだ。

「お前は魔技を発動する事に集中してほしい。私とフェイで援護をする」
「そんな急に」
「お前は出来る」
「！……」

そう言葉を遮る声は、怒声でもなく早口でもなかった。
なのにわたしは、そのもらった一言を受けて、自信が湧き上がるのを感じた。
まだ不安も入り混じるが、……今は確信が勝っている。

「……わかった」
「武器を構え、お前の持つ海神のイメージを浮かべるんだ。武器にそのイメージを宿すように」
「うん」

まだ抱えられていたわたしは、前方に位置する。移動と回避をムーンとフェイに任せ、わたしは右、左手に剣を持った。

赤小竜が口から火炎球を吐き出し海蛇にぶつけたり、ムーンが紅蓮で敵の突進を跳ね返したりとやかましいが、わたしはそれさえもイメージの中に取り入れて、海神様を思った。

（そうよ……海神様は海の『神』。海『蛇』なんかよりずっとずっと尊い立場の存在なんだから……！！）

穏やかな波、あるいは真逆、荒れていく波。海神様は様々な表情を持つ。
悲しげに泣いたり、ジッとわたし達海の子らを見守っていたり。命を助ける時があれば、天災と名乗り奪う時だってある。
そんな神様を、わたしの力にする。生まれた時からずっと一緒なんだ。

（わたしはただ、みんなを護る為に）

わだつみさまよ、わたしはわだつみのこ。
どうか、ここにいるいのちをたすけるべく、わたしの手に、わだつみさま…。
そしたら、

「！？」

フェイが猛スピードで身体をひねるように動いた。こう避けなきゃ受けていた攻撃だったのだろうか？
ダメージを受けずに済んだが、

「きゃあああ――――――――――！！！！」
「アル――――――――――！！！」

それに振り回され、身体がついていけなかったわたしは、小竜の背から落下。
ムーンの必死な声が、嵐の中で響いた。
今、落ちているというのに、荒れる海面にぶつけられるかもしれないのに。
不思議と不安はなかった。

（だって、この海は海神様の海だもの…）

魔技のイメージは、心までも強くするものらしい。だが冷静に考えるが、身体までもダメージに強くなれるワケではない。
海神様海神様海神様。最後に念じ続け、柄を持つ両手に力が入った。
その時だった。ひらめき、とはまさにこれだ。

「えいやっ！！！」

両の剣先を海面に向けた。剣から勢いよく水流が放たれる。それはわたしがこの海に落ちる寸前。

「う、わわわわわっ！！？」

そして、海と剣がぶつかり合った勢いが、わたしの身体を上空真上へと飛ばしたのだった。
船とその周囲の小竜群を、レイとグラヌを、ムーンとフェイを、海蛇とそのボスを、そしてミュージさんとホワイティという順に視界が変わり、上昇はここで終わる。
上昇が終われば次は、また落ちるしかないじゃないの！

「いやぁあああああっ！！」
「アルさん！」

「アルテミス！」
「アル！」

仲間達の呼ぶ声が聞こえたが、わたしは重力に従うだけ。
ふと見下ろすと、一匹の海蛇が待ちかまえている。こいつは先の二人との戦闘で傷を負っているようだ。

（このまま狙われるならば…！）

またもひらめく。ただ落ちるのではなく、落下地点つまり海蛇へ剣先を向け、落下速度を速めた。
その勢いで、わたしは

「魔技！　『海神』様！！」

魔技を扱う方法を知った。
奴の片目に突き刺す瞬間に、剣から水流が放たれる。剣だけじゃなく、その水までもが刃と化し、目の周りに痛々しい傷を負わせた。

ギャアオオオオ――――――――――――！！！！！

「ひゃあっ！！」

海神が叫んだのと、水の刃がさらに強まり、それに耐えきれずわたしの身体がまた宙に舞う。
わたしは冷静に体勢を直し、先程手を下した海蛇を見下ろした。
直視出来ないくらい痛めた目の傷を持ったまま、その一匹は海に沈んでいく。
あと三匹、と思ったが、どうやらわたしもこのまま海に沈

「うわっぷっ」
「ありがとうございます。アルさん」
まずに済んだ模様。わたしの落ちるところへ先回りしたミュージさんとホワイティが、わたしを抱き留めてくれたのだ。
「びっくりしましたよ……あなたも魔技を使えるとは」
「ええ……わたしもびっくりしましたよ」
「そんなアルさんのおかげで、朗報を伝える事が出来ます」
「えっ？」
二匹がわたし達に噛みつこうとしたが、それをサラッと避けながら上空へ舞い上がるホワイティ。避けたついでにそれを二人に伝えるつもりなのか。
「レイさん！　ムーンさん！　あの大きな海蛇の額を見て下さい！」
「っ？」
そう聞いた二人はすぐに視線が動いた。わたしも親玉を視界に捉える。
奴の額には、真っ赤な血のように見せる宝石のようなものがある。
わたしはそれを見て思い出した。
「あれって、ヘスティアーのおばさんが化け物になったアレみたいじゃん！！」
そう、レイが口にした言葉の通りだ。見覚えがあって当然だ。わたしはアレを壊した事があるのだから。
「知っているならば、説明はいらないみたいですね！　アレは上級

の魔物が身につける魔力の塊なんです！　アレさえ破壊すればこちらの勝利です！」

なるほど……ただの宝石ではないのか。
上級の魔物が所有するもの…と聞けば、あの時のヘスティアーさんの恐ろしい変貌にも納得がいく。
そして、そうさせたのも、あの黒マントである事も。
弱点を知られたにも関わらず、黒マントからはまだ余裕がある雰囲気があった。

「てもよぉミュージさん！　あいつに近付きたくてもッおわあああっ！！」

レイが言いたい事がわかった。ああいう水流放射を避けたり、さらにその先で子分の突撃を回避するしかなく、肝心のターゲットに近寄れない事を述べたのであろう。

「一斉に接近しただけでは返り討ちになるだけだ！　誰か一人を援護し、その一人があそこを狙えば壊せるかもしれないぞ！」

ムーンも声高らかに会話する。そんなムーンに子分の頭突きが襲いかかるが、難なく避けた。

「だったらオレが」
「アルさんに行かせましょう！！」
「えーっ！？」

レイが名乗り出たが、それを遮りミュージさんが提案した。その人物がわたしだった。
思わず彼の顔を見てしまったが、レイの驚きと難色がむなしく聞こ

えてしまう。

「どうしてなんだよミュージさん！！」

「何か策があるのか？」

海蛇達を見下ろせる高いところに、わたし達の元にレイを乗せたグラヌ、ムーンを乗せたフェイが近寄ってきた。

「今までの戦況を見させて頂きましたが……あなた方各々の戦法、身体能力、今のこの環境と天候を考えた結果……一点狙いに相応しいのは彼女だと思ったからです」

「アルテミスに何かあったらどうするんだよ！？」

レイの反感は、わたしの身を案じて故だと知った。でも、もしかしたらこいつ、いいカッコ見せたかったのかもしれない……って思うのはやめておこう。

「レイさんは様々な武器による援護が強みだと思いました。ムーンさんも一点狙いにふさわしいですが……魔技が炎属性では倒すのに時間がかかると思います」

「でも、アルテミスはおっちゃんみたいにパワフルな技は魔技は使えないじゃんか」

「パワフルではありませんが、彼女の先程の身のこなしと反射神経は、万が一の時に己の身を防げる力がありますし」

「アルは魔技を扱える」

「えっ！？　いつの間に！？」

ミュージさんの語りに横槍……ムーンだ。だが、それはただ一言。今まで気付いてなかったレイを驚かせただけの言葉だった。

わたしは、魔技が使える。

「彼女の魔技を見せて頂きましたが、これ程この場所に優位な技術を持っているのは、本当に幸運です。彼女自身が海神かと思いましたよ…」
それはお世辞でしょうか、ミュージさん。と言おうとしたが、ミュージさんがわたしの目を見据えたので、なんだか口に出なかった。

「ボクがアルさんを親玉まで連れていき、レイさんとムーンさんお二方でどうか、ボクらを援護して頂けないでしょうか？　ボクも出来る限りに対抗します。アルさんはこの作戦に同意して頂けますか？」
「えっ」

わたしがあの宝石を持つ海蛇を仕留める重要な役目を任されている。
今さっき魔技を会得したばかりなのに、それが今すぐに出せる保障がない…。
わたしが、その大事な仕事を請け負っても良いのだろうか。
でも、ミュージさんの理論はほぼ当てはまっており、彼が掲げた作戦は信じられるものである。
けれど…

「わたしは……」

自分自身に自信を持てないでいた。何故ならこの役目は、とても責任の重いもの。
レイみたいにお気楽に引き受けられるものではない。
どう答えればいいのか、言葉に迷ってしまうわたし。
……そしたら、

「頑張ろうぜ、アルテミス」

「え……？」
「今まで苦難を乗り越えてきた我々なら、出来るはずだ」
レイと、ムーンが、わたしに激励の言葉をかけてくれたのだった。
「あなた方は黒雲の騎士団なのでしょう？　兄さんの仲間なら、あなた方はこんな嵐を払う事は容易いはずです」
ミュージさんも、わたしと、わたし達を信じている。その言葉を口にしてくれた。
「……わかった」
不安はあるけど、
「やってみる……！」
勇気も持てた。
わたし達４人で、航路を開く作戦を開始した。

第六十章

わたし達と海神様

「話し合っても、勝てなければ無意味な作戦だろ…」

うるさい、黒マント。こんな巨大な部下達に戦わせておいて、自分から手は下さないのに。

思わず高みの見物している奴を睨んだが、そんな事しても終わるワケない。ただ、相手に対する苛立ちを少しでも減らしたいが故の反抗だ。

「レイさん、ムーンさん、お願いします…！」

ミュージアムさんが静かに、レイニーとムーンの二人に指示をする。

具体的にではなく、先程提示した作戦の通りに。

緑の小竜と赤の小竜が、倍以上ある海蛇達へと向かって飛んでいく。

八頭残り三頭と、彼らを率いる血色の宝石を額に示す親玉へ。

「アルさんは宝石を狙う事、魔技を発動させる事に集中して下さい。ボクらが必ず連れて行きます…」

「……お願いします！」

ムーンと共にした際に似た言葉をミュージさんに言われ、わたしは

彼に託す事にした。
わたしは、みんなを信じ、自分の力を信じて、ボス討伐を果たさないと。

「ホワイティ、行きますよ」

白い小竜はキュウッと一声応え、二人のあとを追いかける。
ホワイティの背には、わたしが前、ミュージさんが後ろに位置付いている。小竜達の動きや速さにそろそろわたしは慣れてきた。
もう振り回されたり落ちたりしないように、そこにも気を付けなければ。

「まずはあいつからだ！　おっちゃん！！」
「了解…！」

レイが端の一匹を指差し、一番に向かって行った。ムーンもそれに賛同し、彼のあとを追いかける。

「えいっ！！」

レイはまた新たに投げナイフを二、三本、その一匹に放った。だが、片目を狙ったらしいが、硬いまぶたを塞ぎ、直接攻撃にはならなかった。

「ばーか」

と、相手を小馬鹿にしながらべェッと舌を出し、一匹の反撃なる噛みつき、更にもう一匹の追撃の頭突きをさらりとかわした。

「おっちゃん頼む！」

「ああ」

次にムーンがその一匹に向かう。だが、親玉がムーン達に水流放射を放とうと口を開けてきた。危うく落ちそうになりながらも、赤い小竜フェイは軽やかに攻撃を避けた。
だが、避けた先には、レイが攻撃した海蛇が口を開けて待っている。

「ムーン気をつけてぇ！！」

わたしは思わず叫んだ。だが、海蛇の攻撃は止まらない。

「安心しろって」
「え？」

通りすがりレイがわたしに声をかける。
その意味は、あんなに近距離でありながら、海蛇は攻撃を外したのであった。空気をガブリと虚しい光景。

「あいつのまぶたに麻痺の毒が回ったから、視界が不安定なんだ。それじゃあな！」

なるほど……そういう事ね。さっきのレイの投げたナイフは効き目バッチリで、あの海蛇はまぶたを開けられない状態になっている。
レイはまた奴らに接近、既に手元にはお得意のナイフを構えていた。
そしてムーンは回避行動しなくても無事である。麻痺している海蛇の、麻痺していない目に向かって剣の向けてフェイから飛び降りた。
それは勢いよく、気持ちよく突き刺さった。

ギャウウウウゥ！！！

じたばたと痛覚を表現するかのように身体をくねらせる海蛇だが、ムーンは既に血を垂らす剣を抜き取りフェイへと乗り移っていた。反撃も出来ない海蛇へ次に向かうのは、

「うるさかったらすみません」

魔法書を開き、構えたミュージさんとわたしを乗せるホワイティだ。

「『雷(いかずち)よ、邪気に貴方の天罰を放て』！『ライトニングボルト』！！」

魔法書がミュージさんの詠唱に共鳴するかのように、光始めた。何も出来ない海蛇一匹に耳につんざく落雷が。直撃はし、一歩勝機に進んだかと思ったが、

「！！」

他二頭が左右から、挟み撃ちにするかのように大口を開けて迫ってきた。

わたしから見て、ホワイティは右側から迫ってきた海蛇に向かってライトニングブレスを放った。それで相手の攻撃を防ぎ、また、相手にダメージを与える事が出来た。

だが、まだ左側からの攻撃が近付いてくる。

ミュージさんは詠唱を終えたばかりだ。だから、

「魔技、『海神』様！！」

左剣の切っ先をそいつに向け、自信持って試みた。そのわたしの思いを繋ぐように、

ギャアオオオオッ！！！

刃から刃より鋭いだろう水の激流が回り、こちらに接近した海蛇の顔にいくつも斬り傷を与えた。
相手はつらそうだが、わたしもつらい。

「早くあっち…行けぇ！！」

加減がわからず、激流は剣を持つわたしの腕に、わずかだが傷を負わせてきた。
それが嫌で、まだ耐える海蛇を追い払おうと魔技を強くするが、余計に火花の如くこちらも襲う。

きゅうううう！！！！

だが、ホワイティが後に加勢してくれたブレスのおかげで、海蛇は傷だらけで後退って（？）くれた。

「ありがとうホワイティ…」

痛みの余韻がまだ残る故のわたしの弱った声に、キュウッ、とホワイティは相づちを打ってくれた。

「ありがとうございます。アルさん、ホワイティ」

ミュージさんもお礼を口にした、わたしにも含めつつ。
その理由を、雷の神からの贈り物により海に沈んでいく一匹の海蛇の、嬉しき光景を目の当たりにして知れた。
あとは、二頭と、血色の宝石を持つ親玉だ。
ムーンとレイは既に、どちらか一頭に向かって接近していた。

「おれが先に行くぜ、おっちゃん」
「ああ」

レイとグラヌのペアが片方に向かう。だが、ただ受けるだけの奴らじゃない。

「おっととっ」

レイが接近しようとすれば、口を開けて牙を向く、さらに親玉が口から水流を発射するのだから複雑な回避軌道を描くしかない。

「大丈夫か？」
「大丈夫！？」

ホワイティは待機するムーンとフェイと横に並び、わたしもムーンもレイに声をかける。
だが、ここに集結した事により、仲間の心配をする事が出来ない状況下に。

ギャアオオオオオ――――――――――――！！！！

親玉が休む間もなく水流を口から吐き出してきた。散り散りになるフェイとホワイティ。グラヌはまだ部下二頭の噛みつく攻撃を避け続けていた。

「な、に、しやがるてめぇ！！！」

避けながらもレイは、両手に構えたナイフ達を、攻撃を終えた親玉へと放った。

あんなにグラヌが激しく行動しているのに、ナイフはしっかりと親玉の顔に刺さっていた。レイの腕は百発百中だ。
だが、

「あれ…？」

レイは一旦噛み付き範囲内から遠のくが、怪訝な顔で親玉の様子を見るべく振り向く。
わたし達とムーンは彼と合流。ここならば、水流以外は安全だ。

「レイ、あなた何を当てたの？」
「さっきのと同じだよ。なんで効かないんだ？」

麻痺液を塗ったナイフの事だ。確かにあいつから何の変化もない。

「恐らく…他の海蛇とは体のつくりが違うからでしょう。麻痺や毒に耐性があるのかもしれません」
「マジかよ！？」

さすが学者のミュージさん。推測ではなく、その説は確信がある。

「とにかく、船が沈む前に倒した方がよさそうだ…」
「え？」

ムーンが心配していたのは、海蛇達と対立している船だった。後ろを振り返れば、ホワイティの仲間達リトルドラゴンズが船と乗客達を死守しているが、荒波は収まるワケではない。
船が危なかっかしい揺れを見せる度に、船上の人々の悲鳴が聞こえてくる。

「やっべぇ…すっかり忘れてた…」
「レイさんは二頭を封じて下さい。ムーンさんは彼のサポートをしつつ出来るならば倒して下さい」
この状況下、ミュージさんは二人に作戦…というか、指令を下す。
自分の能力に自覚ある二人は二つ返事で了承した。
「わたし達はどうしますか？」
赤色の竜と緑色の竜が向かうのを見送り、止まぬ嵐の中、わたしは後方のミュージさんに問い掛けた。
「…早く決着を着けようと考えています」
「！？……」
「子分となる二頭の相手は、ムーンさんとレイさんに任せます。ですから、ボクとホワイティがあなたをすぐに親玉の元へと連れて行きますが……」
ミュージさんは不安げな眼差しをこちらに向けてきた。
「先程……魔技を使った際に、傷を負われましたよね…」
「あ……はい…」
そう言われ、左腕を見た。二の腕まで長さがある生地の薄いグローブも共に、わたしの左腕にいくつかの斬り傷が刻まれていた。
「技を会得したばかりでつらい事を頼むのは心苦しいですが……無理ならばもちろん、出来る限りで奴を止めようと思います」
ミュージさんはわたしの身を案じてくれている。だけど、わたしが

動かなければ、みんなを助ける事が出来ない。
ミュージさんの心境は、板挟みの状態なんだ。

「いや、」
「っ？」
「わたし…やります！」
「アルさん……」

一瞬目を見開いたミュージさんだが、まだ不安が拭えない顔だった。

「魔技の扱いはわたしに責任があるのだから、ミュージさんがそんな顔しなくても大丈夫ですよ」
「ですが…」
「わたし一人が犠牲になって、大勢が助かるならば、それが本望ですから…」
「……アルさん…」

正直、自分の身体がどうなるかはわからない。怖い。
だが、剣を握る、という事は、誰かを守る為にすべき事をしなければならないのだから。
父と兄のような戦う者を目指すならば、自動的にその覚悟も持たなければならないんだから。
本望は本当だ。ただ、少し怖いだけ。

「ミュージさん、わたしを信じて下さい！」
「！」
「わたしも…ミュージさんを信じます！」
「……わかりました…！」

ミュージさんの目は、決意と戦意を示した。

ミュージさんは魔物達の姿を見据えた。

「今からすぐに、親玉の元へ向かいます。アルさんは、魔技発動に集中して下さい」

「わかりました！」

ホワイティがキュウッ、と一声鳴いた。

「ホワイティ！！」

キュウ――――！！、と助走無しに高速を出したホワイティ。急なスピードはもう慣れた。

嵐や風が顔にかかって気が散りそうだ。けど、散らしてはいけない。

徐々に親玉達との距離を縮める。交戦するムーンとレイ達さえも通り過ぎ、もう目の前には凶悪な海蛇がいた。

「掴まって下さい！」

ホワイティは止まらず、親玉の頭上辺りへと上昇。赤い宝石を見下ろせる位置へと移動。

もちろん、見上げてくる親玉の二つの眼は、ギロリとこちらを睨んでくる。

「行けますか！？」

「はい！！」

わたしはホワイティから飛び降り体勢をとる。海神様のイメージを強め、それを共にするわたしを思い描いた。

もう覚悟決めた刹那。

「――――我らはわだつみの子ら」

!?

「――――我らは海を生きる子ら」

この歌は？　突撃意識が遠ざかり、わたしは思わず周囲を見回した。

「アルテミス！　お前か!?」

「わたしじゃないわよ!!」

歌はレイ達にも聞こえているようだ。レイの問い掛けには交戦中故のイライラが含まれており、わたしもついカッと返してしまった。

「一旦離れますよ」

ミュージさんもタイミングを逃した事を察してくれた。ホワイティは旋回しながらスタート地点へと戻っていく。

「海神の歌ですか」

「知ってるんですか？」

「ええ…」

ミュージさんもあの歌を気にかけているようだ。短い質疑応答。

「――――我らはわだつみの子ら」

やはり湊町で育った立場故、こんな大嵐なのに、こんな緊迫感の中なのに、この歌を聞けば心安らいでしまう。一体誰が？

「――我らはわだつみの下(もと)に生まれ　共に生きて　共に沈む子ら」

この声が誰なのか、やっとわかった。上空を見上げた。
魔力により身体を浮かす正体不明者…黒マントの男だった。

「――だから我らはわだつみを愛し　同胞を愛す」
「なんであいつ歌ってんだよ!?」
「――わだつみの子らは　皆　仲間」

レイの疑問をよそに、黒マントは歌い続ける。湊の者ならば、故郷の歌。
だが、この気配……何故だろう、無数もの殺意を感じた。歌に呼応するように、海原の水底からキリキリとした視線を感じる。

「波が…」
「どうしました?」
「嵐で出来るような波じゃないんです…」

波の動きが不自然だ。不規則と不自然の違いなら、わたしは見極める自信はあった。

「――海原のわだつみよ　我らはそなたの子ら　この先の子孫らも　そなたを愛し　そなたに愛され　未来を歩む」

予感がした。それは良くない方の。
黒マントの歌唱力はお世辞抜きで上手。そこを評価しても今は無意味だが。

「――我らは　わだつみの　子ら」

予感が的中してしまった。
一つ、二つ、三つと何かが、海蛇の周囲に波しぶきを出して海面から姿を現した。最後の歌詞を歌い切る頃には、

「嘘だろ…！？」
「レイ！　離れるんだ！」

今まで倒したはずだった海蛇達が、復活を遂げたのである。八頭と、親玉が揃い九の海蛇が揃う。
だが、わたし達が沈めたはずの海蛇には、生々しい傷跡が残っていた……何故生き返った？
ムーンの呼びかけにレイも急速に離脱する。わたし達はまた集合し、恐ろしい海蛇達の姿を改めて目にする。

「どうした…？　あれほど作戦を練りながらも、数が増えた事で怖じ気づいたのか？」
「誰が…！！」
「相手の挑発に乗っちゃダメよ！　レイ！」

黒マントの嘲笑がフードで隠れてもわかってしまったのか、レイは喧嘩腰になり身を乗り出した。わたしはすぐさま声をかけ彼を制した。

「もう暇潰しにもならない。早く終わらせてやろう。……殺れ」

その命令に、ゾンビも混じった八頭達は、

ギャウウウウ――――――――――――！！！

頭から海面へと潜り込み、わたし達を窮地に追い込ませる行為を行った。それは、

「きゃあああああっ！！」
「うわあっ！」
「みんな落ち着けぇ！　しっかり掴まるんだぁ！！」

船の周囲で波を起こし、転覆させようとするのだ。悲鳴がますます悲痛に聞こえてくる。
これはまずい……わたし達が奴らを倒したところで、皆が無事でなければ意味がない。

「ミュージさん！　速くあいつの所へ！！」
「はい！」
「おれ達も行くぜアルテミス達！！」

ふと船を振り返れば、小竜達が協力して海蛇の邪魔をしていた。けれど、それも長く続きそうにはなさそうだ。
わたしがあの宝石を壊さない限り、この嵐は終わらない！
ホワイティの前方を、わたし達を抜かしたフェイとグラヌが行く。

「これでもくらえ――――！！」

レイが次々と親玉の頭に、ナイフを投げる容量であの催眠粉入り玉を頭に投げつける。もちろん眠ってくれるのは期待しないだろうが、あれだけ大量に顔にかけられたら視界が塞がりがちだろう。

「魔技、『紅蓮』！！」

次に、粉に邪魔されて反撃が遅れた親玉は、ムーンの持つ剣の火炎

斬撃を受けた。

グオオオ――――――――――――――――!!!!

親玉の視界がやっと治ったのか、反撃として大口を開ける。水流放射の構えか、と思ったら、

「おれを忘れてんじゃねぇぞ!!」

レイは奴を怯ませるべく、手製爆弾を放り込んだ。先程のムーンの攻撃により伴った火を火種としたらしく、雨に濡れぬようギリギリまでかばい、投げたらしい。

「お前……自爆だけは避けるんだぞ」
「おれの事より目の前だぜおっちゃん!」

という会話を耳にしながら、彼ら二人を通り過ぎ、ホワイティはまた相手の頭上へと上昇した。
背後で燃える音、爆音、海蛇の吠える度に異なる声がする。

「さぁ…次こそ決めて下さい!」
「はい!」

リトルドラゴンズ達が船を死守している。ムーンとレイが親玉の気をそらしてくれている。そしてホワイティとミュージさんがわたしを導いてくれる。
わたしは、そんなみんなの為に、

「行きます!!」

ホワイティからジャンプした。

（よしっ！）

足元はしっかり宝石を定めている。わたしも両の剣先を足先に揃え構えた。そして降下スピードを上げる。

（海神様海神様海神様海神様海神様海神様海神様！！！！！！！）

五十語百語の勢いで海神様を念じた。
わだつみさま、みんなの未来を導いて下さい！
すると、

「出来た！！！」

剣からほとばしる魔技、『海神』様。水の激しい刃も血色の魔力に向かっていく。
その水は重力に従い、わたしにもかかり、視界を邪魔された。
だが、わたしの攻撃は揺るがない。端から見ればまるでわたしは、水で象るレイピアのようになっているのだろうか？

「当たれぇぇぇ――――――――――――！！！！！！！」

第六十一章

―――――――――
対面。黒マント
―――――――――

海蛇の親玉の断末魔。
激しい水の刃の音。
ガラスに亀裂が入り、砕けた音。

「きゃあああああああ！！！！！！」

またも魔技の調節が上手くいかず、水の勢いを強め過ぎた。その水圧が重力に逆らい、わたしの身体を空高く飛ばしたのだった。

（あれ？）

トドメを刺した後なのか、急激に嵐が弱まっているのに気付く。なんとか宙にゆく身体を操り、地上に目を向けた。
子分の八頭達の起こす波も弱まり、小竜達が船乗りや船上の戦士達と協力して倒していた。
上昇の勢いがなくなり、今度は下に落ちなければならない。真下を見ると、血の色の宝石を壊された親玉の海蛇が、ゆっくりと海へ沈んでいくのを見た。
…出来ればわたしもあいつの後追いをしないよう、魔技で海面衝突を避けようと剣を構えた。

ところが、

「っ？！」

誰かに受け止められたのだ。落下は免れたワケだ。横抱き出来るのは、もしかしてムーンか？、と思って顔を上げたら、

「あ…あんた…！？」

違った。

わたし達の敵。黒マントの男だった。

何故この男がわたしを助けた？

だったら落ちた方がマシだと思い、奴の腕から逃れようとしたが、暴れるわたしをものともせずに奴はしっかり抱えている。

「離してよ！！」

「重くなったな」

「はぁ？！」

なんなのその懐かしむような声は。しかも女性に対して失礼な発言。

先程対立し合っていたのが嘘みたいな、暖かい言葉のように思えた。

「最初にだっこしたのは……まだ赤ん坊だったからな、お前は」

「えっ……？」

わたしはこいつを知らないのに…こいつはわたしを知っているというのか。

警戒心が緩みかけた時、やはりこいつは、

「だが……俺はもう、お前の知っている人間じゃない」

わたしの敵である事を口にした。
その時だった。

「え……」

何の前触れもなく、風が強くなり、雨が再開する。また嵐になったのだ。波の音がまた強くなり、一般客の悲鳴等が小さく聞こえてくる。
その風で、黒マントのフードが後ろに下がり、男の顔を露わにした。

「人間ですらないんだ。俺は」

黒髪の若い男だった。無造作に肩まで伸びている漆黒の髪は、身に付けているマントと同化するかのごとく。
わたしはこの顔を知らない。先程聞いた歌も上手かったが、切れ長の青い瞳や整った顔立ちはお世辞抜き……嗚呼、またそんな単語が合ってしまうのかこいつは。
そういえば、こいつは歌を…。

「あんた……どうしてあの歌を知っているの!?」

海蛇達を復活させるような禍々しい歌に仕立てあげた事よりも、何故湊の故郷の歌を知っているのかがわたしには気になって仕方がない。
こちらは睨み顔で奴を見るが、黒マントはこちらを見下ろし嘲笑を浮かべていた。

「当然だろう……故郷の歌なんだ。小さい頃から歌っていたんだ」
「人間じゃないって言ったばかりのあんたが、なんで人間の故郷の

歌を知ってるのよ!?」
「何も最初から魔界の者とは言ってないだろう」

どういう事?
わたしが考える前に、男は答えた。

「俺はサンポリアに生まれたんだから」

!?

「アルテミス!!!」
「なっ…!?」

ぶつかるかのように、わたしは黒マントから逃れる事が出来た。その理由は、ムーンが物をひったくるかのようにわたしを取り戻したからだ。

「アル…大丈夫か…?」
「む、ムーン…」

フェイの背に乗り、黒マントの元から離れるわたし達。
わたしは遠ざかる同じ故郷を持つ黒マントを見つめた。

「ねぇムーン…あいつ、サンポリアの人間だった奴よ…」
「先程の海蛇の嵐とは無関係に、天候が怪しくなった。本物の嵐が来るぞ」

…なんでわたしの言葉に応えてくれないの?
そういえばムーンは…ベゴ村で黒マントを見た時は、明らか初めてのような顔じゃなかった。

わたしを知っていて、さらにサンポリアの湊町の歌（しかもサンポリア大陸に湊町はウィズの他にない）を知っている。
そして、かつて人間だった魔物だ。

「ムーン知ってるの？　知ってるんでしょっ？」
「もうあいつに構う事はない。また来たならば返り討ちにすればいい」
「そういう事じゃない！　わたしが聞きたいのは」
「聞くな！！」
「！？？」

もうこれ以上、黒マントの話題を出さぬよう、遮るように、ムーンはわたしを閉じ込めるように抱き締めてきた。
ムーンがこんな強く言葉を出すのは普段ない事で、だから余計に知りたかった。けれど、

「私は……何も出来ないんだ…」

聞いた事ない弱く震える呟き声に、わたしは今、ここで真相は聞けそうにないと知った。

「ムーンさん！　アルさん！　レイさん！」

ホワイティに乗るミュージアムさんと、グラヌに乗るレイニーも、船に戻ろうと飛行中だった。
わたし達メンバーは揃い、残りの海蛇討伐に参加した。

「まずいです…天候が悪くなってます。邪魔者を早く倒して、嵐を航海する事に専念させた方がいいですね」
「ああ…」

「ミュージさん、まだグラヌを借りてもいい？」
「ええ、構いませんよ」

わたし抜きで話している三人…。
ミュージさんとレイは残党討伐に加勢し、ムーンは船上に一旦降り立った。
そして、わたしは船におろされた。

「む、ムーンっ？　わたしも」
「お前は大役を成し遂げたのだから、今しばらくここで待ってほしい」
「ちょっと待っ」

赤い小竜はまた船を離れ、海上に残る魔物を倒しに飛んでいった。

（……どうしてよ…）

ただ単に、わたしから追求されるのが嫌だからなのか、と疑っているわたしがいた。
いや、今は非常時なのだから、聞くのは後で……後で聞けばいい。
わたしは心に決め、ふと、黒マントがいたはずの上空を見上げた。
……やはり、長く留まる理由がもうないのだから、あいつの姿はなかった。

（そうであってほしくない…）

黒マントが、あの人だとは思いたくなかった。
不安が募り、今さっき決めたばかりの事がすぐ崩れた。
ムーンから聞かないと！

「ムーン!!　戻ってきてよ!　ムーン!!」

ムーンは知っている。あの人と一緒に戦時を共にしたのだから。あの人を失った罪が自分にある事を責めて、ただ彼は思うように話せないだけだ。わたしは責めない。責めないから話を聞かせてよ。わたしに、兄さんの話を聞かせてよ!!

「へっ?」

船が急激に傾いた。何が起きたのかわからず、ふんばる事が出来ずに身体が転がった。他の客人や戦士達も船の傾きに振り回され、中には海に投げ出された人影が見えてしまった。

「海蛇が攻撃してきたぞ!!」
「落ちた客を助けろ!!」
「その前に海蛇を倒さないと食べられるぞ!!」

嵐も波も本格的になり始めた。それを好機と捉えたのか、最後の海蛇が最期の悪あがきに出た。
主人の命令を残りの命で遂行しようとしているのだ。
だが、海蛇が船体に体当たりをし、木材でつくられたそれはバキバキと嫌な音を作る。船が半壊し、沈んでいるのを知れた。

「『サモン』!　『スカイドラゴン』!!」

ミュージさんが魔法書を取り出し、新たな召喚獣が現れた。
それは船よりは小さいが充分な体格を持つ大きな飛竜だった。その子の背に人々を乗せるつもりなのだろうか。

「リトル達は船客の皆さん達をスカイに乗せて下さい!　スカイは

海蛇の動きを上手く封じて下さい！！　ホワイティは詠唱が終わるまで回避行動をお願いします！！」

船乗り達の威勢のいい声に紛れて、ミュージさんが召喚獣達を指揮する声もあった。
わたしはまだ、壊れて立ち位置が傾いている船上に足をつけたままで、沈んでいくのを待つしかない状況にあった。
自然が生んだ災害、海神様のお怒りだ。
わたしは今、手出しが出来ない。リトルからの救済を待つしか出来ない。
だが、

グオオオアアアアアアア────────────────！！！！！！

完全に沈む前に

「え？」

海蛇が船体にダイブしてきたのだ。

「キャアアアアアア──────────！！！！」

一気に船体が壊れていった。様々な嫌な音が、他客達の悲鳴が、わたし自身の悲鳴が、海上に広がる。投げ出される人々が見える。わたしのその中の一人だ。
そして、わたしは海の中に落とされた。

（まずい…）

泡の音が状況を知らせる。空と地面がわからない。それでも、明暗を見極めようと落ち着いて把握を試みた。
あった。わずかに明るい海面。そこに向かって泳ぐ。

「っはぁ…」

空気を確保したが、波は荒いものだった。いくら泳ぐのに慣れているわたしでも、この荒波は乗り越えられるのか…。
船の破片とも言うべき海に浮かぶ木材が、わたしの側を横切った。
わたしはそれに助けを借りようとしがみついた。
壊れた船、それでも尚暴れる海蛇、抗う人々、召喚獣。

（ムーン……レイ……ミュージさん……）

その光景の場所へとたどり着こう。わたしは足を動かし進行しようと思った。
だが、海神様が邪魔をする。波にもまれたり、流れにさらわれたり、進めば進む程遠ざかる目的地。

（嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！！）

ここで皆と別れる？　剣を持つ事を志したらといって、いくらなんでも早すぎる！
まだ死ぬワケにはいかない。まだ夢を叶えてなどいない。家族に会わずに死ぬなんてわたしは…

「嫌だ…！！」

生まれて初めて、かもしれない。

「嫌ぁぁぁぁぁ――――――――――――――――！！！！！！！！！」

海神様を恨んだ。

＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊

＊＊＊＊＊

【第六部】第六十二章

―――――――――
ひとり
―――――――――

「母さん、どうしたの？」

幼女が夜中に目を覚まし、まだ明かりが灯る部屋にきてみれば、母は食卓の席に座っており、俯いていた。

「あら…起きちゃったの？」
「うん……」
「お母さんも眠たくなったから、一緒に寝ましょう」
「うんっ」

だが、顔を見れば、母は微笑んでいた。幼女を抱きかかえ、寝室へと向かう。

（そうだ……）

今だからわかる。普段はにこにこと微笑み、わたしが何か悪い事をしたならばしっかり叱ってくれた母は、わたしの見ていないところで寂しさを募っていたのだ。
旦那と息子がいなくなり、心細かったかもしれない。それでも、気丈に振る舞えたのは、わたしがいたからなんだと思う。

まだまだ小さかった、わたしが。
あの赤い目は、眠たくなった目じゃなく、涙で濡らした目だったんだ。

（母さん……）

死ぬ一歩先まで、母は笑顔を見せてくれた。
苦しかったら苦しいと言えばいいのに。泣きたかったら泣けばよかったのに。
わたしが、母の感情を殺してしまっていたのかもしれない。

（ごめんなさい……）

だから尚更、諦めきれないわたしがいた。

『お母さん、もう死んでしまうけれど……』

母の言葉を思い出す。

『お父さん達のように立派に生きてほしいの』

最後の最期に母はありったけの思いをわたしに託してくれた。

『あなたのお父さんとお兄さんに、会ってほしいのよ…』
『いつか、大切な人を守れる程に、強くなって…』
『お母さん…あなたが夢を叶えるのを、楽しみにしているわ……』

そうだ、わたしは、

＊＊＊＊＊

「母さん……」

故郷で日々聞いた音がとても近くに聞こえた。どうやら気を失っていたようだ。

わたしは身体を起こし、焦点が定まらない目をどうにか正しながら、周囲を見回した。

……ここはどこの浜辺なのだろうか。あの大嵐に飲み込まれながらも、海流がわたしをここに運んだという事なのだろうか。

わたしだけじゃなく、壊れた船の残骸や積んであっただろう箱やタルも浜辺にあった。

（わたしは助かったんだ……）

あれほど海神様を憎んだというのに……わたしはまだ捨てられてはいないようだ。

一体どうしてこうなったのだろうか…意識を無くす以前を思い出そうとわたしの記憶を探る。

（エイスの湊街に行くはずだったのに……ここはどこなんだろう……）

船旅が始まり、安全に行けると思ったはずなのに。

黒マントに会わなかったとしても、嵐は訪れたワケであった。だから……今に至る可能性もあったんだ。

黒マントとの遭遇でその確率が高まってしまったんだ。

（ムーン……レイ……ミュージさん……）

もちろん、この周辺、わたし以外誰も人影はなし。いつまでも砂浜に座っているワケにもいかないわたしは、ゆっくり立ち上がった。前方に海、後方を振り向くと小さい丘が。砂浜と平行に広がっている。丘の向こうに何があるのかは今は行かない。ここに木片等が流れ着いているならば、左右側に続く砂浜にわたし以外にも流れ着いた人がいるかもしれない。

（でも、大半のお客さん達はあの大きなドラゴンで避難したから…最悪誰もいない可能性も…）

なんてマイナス思考は振り払い、とにかく砂浜を中心に探索を開始した。
誰でもいい、誰か乗船客がいるならば。

＊＊＊＊＊

立ち上がった場所から左側に向き、歩き出したが、残念ながらその先は砂浜が途切れていた。まるでその目印のように、波が押し寄せる度に塩水を被る岩達があった。
手作り感たっぷり漂う立て看板らしきものがあったが、残念ながら腐りかけており文字は読めない。
岩の謎めいた存在はともかく、立て看板があるって事は、

（この丘の向こうには人が住む村か集落くらいはあるみたいね……）

流れ着いた場所は、地図には載らない小さな島とかではなく、大陸であろう。だが断言は出来ない……小島で生活している人間だって

いるんだから。
航路的にはエイスに行くはずだったんだから、運が良ければここはエイス大陸のはず…。運が良ければ…。
踵を返し、今度は反対方向へと足を進めた。

＊＊＊＊＊

陽がそろそろ沈もうとしている。そんな夕陽の景色は綺麗だが、ゆっくり見ている暇がなかった。
ひたすら歩いて行くが、誰もいない。物ならばちらほら見つかる。貝殻だったり、随分前に流れ着いたような丸太だったり。
同じような景色が側で流れる中、前方の遠い景色が徐々にハッキリしてきた。あれは…、

（崖…？　森…？）

遠くからでもわかる。断崖絶壁。崖の上には木々が植わっている。森なのだろうか？　それとも林？
その木々を目でたどると、徐々に手前に視界が移動し、丘から歩いて行けばそこに行けると知れた。

（誰かいたりしないかしら？）

森もとい林の中に、食材となる草花やキノコ、木の実等があるならば、それを採取する人間がいるかもしれない。
……最悪魔物と出くわすだろうが、幸い自分の荷物と武器ははぐれず身につけてあったから、対処は出来る。

（そうだ）

高い崖ならば広く見渡す事が出来るかもしれない。崖の上程木々が少なくなっているので、見晴らしは悪くないと思う。

思いついたならばすぐ行動、わたしはあの崖に向かうべく、丘に広がっている林へ走っていった。

＊＊＊＊＊

（着いた……）

木々を抜けた先の光景は、無限に広がる夕日色の海原。見晴らしが良く、つい見とれてしまう景色だった。

まだ太陽が地平線に隠れようとする最中であった。

（綺麗……）

崖の上は芝生が生えている。この崖付近だけは陽が当たるからなのかはわからない……今度植物図鑑読みたいなぁ、って思いながら、わたしはその芝生に座った。

いつになったらあの丸いオレンジは顔を隠すのだろうか、と眺めながら、時間の流れが遅い事を感じる。

今振り向けば森。向こうは海。砂浜を見下ろす事も出来る。わたしが今さっき歩いていたラインだ。

（本当に誰も見当たらないなんて……）

よく考えれば、やっぱりあの時海に投げ出されたのはわたしだけな

んだ。たまたまここにたどり着く海流に乗ってきただけなんだから、他の人達はきっと、ミュージさんに助けられたに違いない。
わたしは……運が悪いだけだ…。

（運がなかっただけ……）

世の中は計算や数式で成り立つものではないし、例え計算して先が読めても、それを覆すものはたくさんあるんだ。今回の嵐も、黒マントも……。

（黒マント…）

首からさげている写真入りのペンダントとを手にとる。ふたを開ければ家族の姿。
父の顔はやはりわからない。色褪せても顔がハッキリわかるのは母と兄とわたしだ。
兄の顔をよく見た。色褪せても黒髪なのはわかる。わたしと母さんは金髪だから、黒髪はもしかしたら父譲りだろう。
幼顔、目は活き活きとしている兄。兄の瞳の色は……母さんと一緒だ。青い目。

（やっぱり黒マントは）

髪は長かったが黒い。覚えのない顔には青い瞳。そして自ら口にした。証明となる歌も。
自分はサンポリアの人間だった事を。

（わたしの兄さんなの……？）

確証はない。手掛かりは、既に面識があっただろうムーンただ一人。

わたしの父さんと兄さんの話題になれば、彼はいつも物悲しげな漆黒の右目を見せる。
仲間を助けられなかった罪悪感がそうさせるのだと思う……彼から話を聞く限りそう判断するしかない。

『聞くな！！』

あんなに否定した言葉は、声は聞いた事が今までなかった。わたしを押さえ込んだあの行為や言葉も、何かに触れたくない、そんな拒絶の意を感じた。

（ムーンは何を恐れているの……？）

剣技、魔術、知識、経験……全てにおいて優秀に思わせる彼にも、怖いものがあるのだろうか。
わたしはどうしても知りたい……わたしが知りたがる事で彼が恐れるのは、話の後に責められる事か。

（責めたりしない……もう事は済んでるんだもの…）

なんてキレイゴトを心に決めるが、実際にその瞬間が訪れた時、わたしは冷静でいられるだろうか。
…いや、そんな事よりも、わたしは、

（ここで眺めても何も見つかりはしない……）

皆との合流をしなくてはならない。わたしは立ち上がり、気を持ち直した。
夕日の景色を見、もうここに用がない事を再確認し、振り向き浜辺へ戻ろうと歩き出した。

時だった。

「!?」

前方の森から鳥達が次々とこちらに向かって飛行してきた。

「うわわわっ……」

鳥達は進行方向にいたわたしを避けているのだろうが、中には避けきれずわたしの顔に当たる鳥もいた。
これにはわたしも腕を使い顔に当たらないよう隠すが、まだ鳥達は耐えない。
なんでこんなに飛んでくるの？　その鳥の波から逃れようと後ずさる、が、

（やばい）

そうだ、ここは崖だ。と気付いた時には

「あっ…!!」

わたしの足が乗る範囲の崖の先が崩れ、最悪の事態。だが、わたしはとっさに腕を伸ばし、右手が崖の端を掴んだ。

「っっ……」

…変に風を感じるとは思わなかった。気にも留めない程のそよ風がこんなに恐ろしいとは。
今、わたしがぶら下がっているのは右手だけが維持しているから。
足より下がどうなっているかなんて……荒波が断崖絶壁にぶち当た

っている音が小さく聞こえるのに、それが耳元で囁かれている恐怖がある。見れるワケないじゃないの。

「だ……」

言いかけて、絶望した。誰か助けて、って言ったところで、誰かが来る可能性なんて低い。今まで誰一人会ってないんだから。でも、誰か来る可能性だってある。こんな所で落ちたら、助かる可能性ない。確信出来る。

「誰か…」

左腕を伸ばし、自力で戻る事も試みる。

「誰か、助けて…！」

そして、他者の力も信じて、自然の音しかしないこの場所でわたしは救済の音を鳴らした。

「誰か助けてぇ！！！」

それが誤りだったのか。

「きゃっ」

声をあげる事に力が偏ったからなのか。指の力が少し緩んだばっかりに、落下が決まってしまった。

嗚呼、もう駄目だ。こうなったら助かる見込みはない。わたしは重力に従う事にした。

「――――――！！」

呼ばれた気がした。伸ばした右腕に何かが絡み、とっさに掴んだ。ヒモのような、ツルのようなものだ。

落ちる重力を感じなくなり、わたしはまたぶら下がっている感覚を知る。波の音、風の音、それが森を揺らす音。それを聞けるのだから。

「アルテミス！！」

呼ばれたのは気のせいではなかった。わたしが掴んでいるものを目でたどり、見上げた先には、

「早くっ、掴まれよ！」

わたしの恋い焦がれた仲間がいたのだ。愛用のムチをロープ代わりに、わたしの身体を引き寄せようと必死だった。

ロープと違い、ムチには耐久力はない、わたしはすぐ彼に応えるべきだ。

徐々に上昇する身体、その位置は、左腕を伸ばして端に掴まれる位置まで来た。

「よしっ、その調子だ！」

彼はわたしの左手も、ムチが絡まっている右手も掴み、懸命に引っ張り上げようとする。わたしもどうにかして上がろうとする前に、もう身体は彼の引っ張る勢いに動き、そのまま倒れ込むように崖の上に登れた。

「アルテミス……重い」

「ご、ごめんなさいっ」

彼…レイニーに言われ、急いで離れた。倒れた先がレイの上だった故。でも、

「レイ……今までどこに…？　レイも海に落ちたの？」

思いもしなかった再会だった。嬉しさよりも驚きが勝る。どうして彼がここにいたのか、あと、あの嵐の中、何があったのかを知りたくて仕方がなかった。

「それが……いや、待てよ。ここは危険だから、一旦森から出ようぜ。話はそれからだ」

周囲を見回し、彼は危機感を露わにしながらここから立ち去ろうとする。わたしもふと見回して、背後にあの恐ろしい空間に今さっきいた事を思い出し怖くなった。

「そうねっ」

先に森に降りようとした彼よりも先に、わたしの足は進んでいった。でも、良かった……もう会えないかと思ったから。

＊＊＊＊＊

第六十三章

―――――――――
ふたり、さんにん。
―――――――――

森を抜け、丘の上。わたしは浜辺とは反対側の方を初めて見る事になる。
簡単な柵でここは村ですよー、と示すかのように民家があるのがわかる。柵の外側は、なだらかな平原が広がっている。
村と海が近いにも関わらず、あの村はどうやら湊町ではないようだ。

「あん時、アルテミスが船から落ちたのを見てさ、」

とレイニーがここに至る経過を話し始めた。

「助けようと思って向かったんだ……けど、アルテミス、いなくなっちゃって…。海の上で探し回ってたら、波に飲まれてグラヌから落っこちまったんだ」

なるほど…本来だったら助かっていたかもしれないのに、わたしの後追いをしてしまったワケだったのか。ここに流れ着く海流に乗れただけでも奇跡としか言えない。

「ムーンとミュージさんと……他のお客さんは？」

もう一人の仲間と、共に抗った戦友と、船に乗っていた人々がどうなったのかを問うが、レイは首を横に振った。わかんねぇ…と弱く呟く。
そうなると……候補はいくつかある。わたし達以外全員助かり、湊町に着いたか、わたし達以外全員……助からなかったか。

「おれさ、あの崖の上に誰かがいるのを見たんだよ」
「え？」
「ここがどこなのか知りたかったから、急いでそこに行こうとしたんだ。そしたら、助けを呼ぶ声がして、それがアルテミスだったんだよ」
「誰かいたの？　わたし以外に」

わたし達以外の誰かを目撃したならば…何か有力な情報が手に入る、と期待した。だが、

「よく考えたら、あれ、アルテミスだったんだな」
「へ？」
「森の中でも茂み浅くて視界は良かったし、鳥達もわんさか飛んでっちまったよ。おれがバタバタ走ってたからか？　やっぱりアルテミス以外誰もいなかったぜ。誰かいたなら…おれじゃあなくて、その誰かがアルテミスを助けていたかもしれないし……」

ちょっと待ちなさい。今、なんか、すごく心当たりある事を聞いたのだが。
鳥達がレイに驚いて逃げてった、って、それって、

「あのねぇ……」
「？」
「あんたが暴れるように駆け回らなかったらわたしは落ちずに済ん

だ、って言ってるようなものじゃないのちょっとぉ！！」
「うわあああ！！！　どうしたんだよアルテミス――――！！！！」

間接的に殺されそうになったワケである。なんて因果。行き場のない恐怖心から湧き上がる怒りをレイにぶつけたくて仕方がなかった。
その表現法は、追い回し。

＊＊＊＊＊

「ごめん……アルテミス…」
「ううん…事が済んでるのに、蒸し返すわたしがいけないのよ……」

時間のロスだ。レイを追いかけ回している内に陽が暮れていた。空の色は紺色と、地平線に隠れようとする茜色で染まっている。
不思議と雲は少なく、これから欠けていく月の光が当たりを暗闇にする事はなかった。
走り回って疲れて息切れ。わたし達は浜辺に座り込み呼吸を整えようとしていた。

「……この辺り、おれ達以外誰もいなさそうだな…」
「…そうね……」

息の音が静かになり、レイが口を開く。わたし達は浜辺に座り直し、海原を眺める位置にいた。隣にはレイ。

「ムーンのおっちゃんは、助かったのかな……？」
「だといいんだけど……」

最後に二人きりになるのはつい最近だったが、やっぱり彼がいないと、不安だった。
隙間が出来たかのようにむなしさが襲う。果たして彼は無事なのか…。

「でも、グラヌに乗ってたおれでさえここにいるんだぜ？　……あんなひどい嵐じゃ」
「変な事言わないでよ…」

レイはどうしてそんな怖い事を平気で口に出来るのか。本当にいなくなっちゃったんじゃないかと、余計、不安に駆られた。

「ムーンは大丈夫よ……きっと、大丈夫……」

仲間の安否がわからないなんて、こんなにも泣きたくなるものだなんて。
言葉でだいじょうぶだいじょうぶ、と言っても、自信が持てなかった。
死んでる、だなんて、そんなの信じたくない。生きてる、そうであってほしい。のに、

「っ……」
「アルテミス……」

真っ直ぐな地平線が歪みだした。それは視界に涙が溜まるからだ。
堪えきれなかった。
ムーンがいない、それだけで涙流せるとは予想だにしなかったし、止める術もわからない。
そんなわたしの頭を、ぐわしゃ、といった感じに撫でる手が乗っかる。グローブをはめてあるレイの手だった。わたしを安心させよう

としているのか、その気持ちだけでもすごく嬉しかった。

「大丈夫だぞ……ムーンのおっちゃんだからな」

レイの声も、どこかわたしの持つ感情に似ている。震えてはいるも、気を持とうと必死になっている。

普段同年代に思える彼だが、この時、やっぱりレイはわたしより歳上である実感があった。

「ムーンのおっちゃんが死ぬワケないじゃん……」

「……うん…」

その言葉が、希望を持たせる原動力だ。

ムーンには、会える。きっと。

＊＊＊＊＊

今後どうするか、それはレイから提案があった。

村の宿に一泊し、翌日、ここの場所がどこなのか、ここに流れ着いた人間がいないか等の情報を探す。

ミュージさん達が無事であるだろうと想定し、もしここがエイス大陸ならば湊町へ伝書鳩を使う方法を、わたしは思いついた。

今は落ち込むよりも、落ち着いて状況を把握しなければならない。

何が出来て、何が出来ないのかも。

「でも、おれ達の荷物がはぐれなくて良かったよな。宿代も足りるし、おっちゃんがくれた木の実も入ってたし」

「うん」

そんな会話しながら、わたし達は浜辺を歩き、丘へと向かう。今頃村の家々には、灯りがついてあったかそうに見えるかもしれない。その時だった。

「！」

浜辺に人の気配がした。立ち止まり、海ごと見渡したが、丁度その時雲が月を隠し、薄暗くなり見えなくなった。

どうした?、とレイも遅れて止まり、わたしの側に歩み寄る。

「誰かがいたの」

「嘘？　こんな夜に誰かいるのかよ…」

「気のせいじゃない。確かにいた！」

今は見回しても見えにくい。やっと雲がどけて、月が再度姿を現した。

それを合図に、わたしは浜辺を駆け出した。

さっき行った所、行き止まり扱いの岩達があった方向へとわたしは走る。レイもわたしに追い付こうと後から来る。

波の音と夜風の音が耳の側を通る。また月が雲に隠れ暗くなる。それでも私は砂浜を踏んだ。浜辺に真っ直ぐ沿って走れば、逸れる事はない。

「速いよアルテミス！」

ぜぇぜぇと息が乱れるレイは懸命にわたしを追い掛けてくるが、振り向く気がわたしにはない。

わたしだって、息苦しい。走って酸素が足りなくなる事と、胸騒ぎで呼吸を落ち着けられない。

少し長い暗がりが、また月光を取り戻す。その時のわたしの視界には、

「！……」

もう波をかぶってない、たくさんある中の一つの岩場に腰掛け、夜空を見上げる人物が映った。

まだ小さく見えるから、わからない。速度が緩み、徐々に徒歩へと動きが変化。レイが追い付き、息を整えようとする。

そんな事よりわたしは、そこにいる人間を凝視しつつ、歩む。

「……」

まだ半分になってない欠けた月明かりに照らされた者は、マントで鎧を隠し、フードを目深に表情を隠す容姿。これほど見慣れた人なんて、わたしの知り合いの中では二人しかいない。

片方は敵対する者。もう片方は、

「ムーン！！」

わたし達の仲間だ。

わたしは自信を持って、彼を呼んだ。まだ顔がハッキリ見えない距離だから、ありったけの声で呼んだ。

彼はこちらを向いた。気付いたようだ。その場で立ち上がり、わたし達を見ているのか。

落ちた速度が、また段々速くなる。彼は岩場から降り、綺麗に砂へ着地、わたし達に向かって駆け出した。

こんなに嬉しい事、今までにあった？

嬉しくて涙が出るなんて、今までにあった？

「ムーン！　ムーン！！」
「おっちゃん！！」

段々と近くなる距離、この勢いだと体当たりになってしまう。
いや、体当たりにはしない。わたしは嬉しさを表すべく、彼に抱き付いた。それをムーンは拒絶せず、受け止めてくれた。
だが、

「おっちゃ――――ん！！！！」
「きゃあああ！？」
「なっ…！！？」

レイは涙声で、わたしの背中を突進。勢いを抑える事は出来なかったのか、あんたは。
わたしとムーンの短い悲鳴は虚しく、そのままわたし達を巻き込んで砂浜へ倒れた。そんな状況になってもムーンは、レイも受け止めてくれたのであった。

「おっちゃんおっちゃんムーンのおっちゃんだぁぁ！！　すんげぇ寂しかったぞちくしょー！！」
「お前…少し落ち着け……」

なにこれ。わたしの涙引っ込んじゃったよ。ムーンもア然としてしまったし。
やっぱりレイも怖かったんだ、ムーンが、仲間がいなくなってしまった事が。
そう思うと、

「泣き虫」

からかいたくなって、レイにそう言った。

「な、なんだよアルテミス！！　お前だってさっきから泣いてたじゃねぇかよ！！」

「嬉しいのは一緒よ！　だけどここまでする！？　倒れなくてもいいじゃない！」

「すまない……少しどけるか？」

と問いかけるムーンだが、答える前に上体を起こそうとする。わたし達も彼が動けるように身体を起こし、お互い浜辺で座り込み向き合う形になった。

「二人とも……無事でなによりだ」

と安堵の目を見せるムーン。さらに、気持ちの表現は行動となったのか、わたしとレイを包むよう抱きしめてくれた。

…そんな事されたら、

「う……うう…」

涙腺が耐えきれない。嗚咽するも抑え込めず、声をあげて泣いた。

レイとほぼ同じタイミングで。

「すごく会いたかったよ…ムーン…！！」

「ホントに…ホントに良かったよおっちゃん…！！」

海神様、騒がしい夜でごめんなさい。しばらくわたし達を、このままにして下さい…。嬉しくて嬉しくて、しょうがないんです。

第六十四章

―――――――――
ムーンの事。
今後の事。
……あの事。
―――――――――

＊＊＊＊＊

まさかの形でわたし達三人は無事に揃った。ムーンがここに至る話をしてくれた。近くの村へ向かいながら。
ムーンを真ん中に、わたしは彼の右側、レイニーは彼の左側、横一列。ムーンの歩幅に合わせて歩く。

「私はレイニーが波に呑まれたのを目撃し、救出を試みたが…結局見つける事が出来なかった」
「なんだそりゃ。おっちゃんはおれの後追いって事？」
「いや……しばらく周辺を探したが、やっぱり見つからなかった。…客人は皆スカイドラゴンに避難出来たというのに、アルテミスまでもが消えていたのに気付いた時は、さすがに焦ったが…」
そしてムーンの口から信じられない事実が。
「お前達を必死に探し、その隙を海蛇の一撃で海に叩き落とされた」

「え――――――――――!!?」

なんでそんな失態を？　ムーンに限ってそんな敗北があるだなんて思いもしなかった。わたしとレイの驚愕の声が響く。
客観的に語るムーン。自分の事なのに。
案の定、ムーンは意識をなくし、彼も海流に乗ってわたし達より後に流れ着いたのが話の結末だった。

「おれがアルテミスの後追って、今度はおっちゃんがおれの後追って……なんか妙な運命だよな」
「だね」

ムーンが海蛇の攻撃を避けられなかったのは、わたし達の事で頭がいっぱいになっていたからなのかな?、とわたしはふと思った。
わたしがレイやムーンの立場だったら、自分の身よりも仲間の事を気にかけただろうし…。
そんな仲間運命に、何回目かの嬉しさを知る。

「ここまでは運が良かったが、これから運が悪かった事も知れるだろうな……」

何故そんな不吉な事を言うのよムーン。感激の余韻に浸る間もなくこんな現実的な言葉。
いや……そうだそうだ、今は現状を知らなければならない。

「村で何かわかればいいけど……」
「やっぱりここって島なのか？　大陸なのか？」
「どうだろうな…わかるのは村に着いてからだな……」

わたし達、騎士団のみんなとはぐれて、帰るはずがとんでもない旅になってしまっていた。
めげるもんか……大地と海と空は繋がってるんだから。

＊＊＊＊＊

「ここのご主人、親切な人で良かったわ」

宿を訪れ、部屋が空いているか訪ね、わたし達は泊まる事が出来た。
四人部屋だ。
あの浜辺に遭難者が流れ着くのは昔からよくある事なのだと主人は語り、その者には無償で手助けをするのだそうだ、この村は。

「やはりここはエイス大陸だったか…」
「船から落っこちゃったけど、目的地にはたどり着けたって事だよな？　な？」

各々にベッドを選び、その側に甲冑や武器を外しては置き、それぞれにくつろいだ。
レイは恒例倒れるようにうつ伏せになり、わたしは腰掛けその状態から後ろに倒れ仰向けに。ムーンは主人から借りたエイス大陸の地図を両手に持ち、大きく広げた。

「いや……ここは海に近い村ではあるが、湊町のように船は使わない。ここからサンポリア大陸に行くのは不可能だ」

ニアシー村……文字通り海が近い村、と受付の際に主人から聞いた。
特徴は海に近い、ただそれだけ。ウィズのように漁業は行わない、

否、行えない村だった。人口が少ないから、貧しいんだ、と主人曰わく。

「じゃあどうすんだよ！？」

わたしもそれが気がかりだった。むくっと身体を起こしムーンを見やった。レイもガバッと顔を上げ、険しい表情で彼に注目した。

「本来着くべきであったエイスの湊町まで歩くしかなかろう…」

「はぁ……」

現実的な答えだった。レイはその現実突き付けられ上げた顔を布団に臥す。大きなため息を吐きながら。

そんな彼にわたしは言う。

「何も一生帰れない、ってワケじゃないんだから。もうひと頑張りよ」

「……わかったよ」

と了承をするが、くぐもった声でも露骨に受け入れがたい事を聞かせる。

「エイスは世界で二番目に面積が狭いからな……魔物との遭遇の際、いかに早く戦いを終わらせるかで帰還の日も早まると思うぞ…」

「もうわかったよおっちゃん……おれ、頑張るから……」

ムーンから気が楽になるだろう情報を与えたが、レイの状態は変わらない。するとムーンは、

「……今後は歩かなければならないからな…レイにはチカラモを1

つおまけしようか」
「くれ！　木の実くれ！　おっちゃんくれ！　いや、くださーい！
！」

餌付けを試みた。単純だな、をい。
ムーンの元に飛びつく犬がごとく動いたレイを見、わたしは呆れた。
でも…やっぱり、このメンバーがいい。安心したせいで気が抜けて、
身体にどっと疲れが溜まっているのを自覚。

「ムーン、わたしも」
「ああ」

わたしは立ち上がり、ムーンの元へ歩み寄る。

＊＊＊＊＊

夜も更け、主人がわたし達の部屋を訪ねてきた。なんでも、エイスの湊町へ伝書鳩をつかって手紙を送らないか？、というものだ。
遭難者を行くべき場所に送るのが、ニアシー村の役目のようで、湊町から連絡が来るまで、遭難者はここで滞在する事も可能のようだ。
湊町から出航する際、こちらに寄ってくれるらしい。
中には、とうとう誰とも連絡がつかず、ここに暮らす者も、過去にちらほらいた模様…。
あんた達…どうやらただの遭難者じゃなさそうだよな、さっきの格好見てると。と主人は、わたし達の身なりだけで見抜いた模様。

「……手紙を頼んでも良いだろうか？　もちろんここに残るつもりはないが」

「だろうな…手紙は何日もかかるから、旅人の戦士なら自分の足で行った方が早いもんな」

で、誰宛だ?、と主人はムーンから聞く。

「ミュージアム・ブルッカスという学者に、我々はニアシー村に着いたが、迎えは不要、と伝えてほしい」

「……了解」

最南端から最北端まで伝書鳩をつかうのは、多大な時間を要する。わたし達は自力で湊町へ行く事が決まった。

＊＊＊＊＊

睡魔に襲われたレイは、部屋の灯りであるロウソク達を消し、先にベッドに潜った。

わたし達も起きる理由がないから、彼に続き布団をかぶる。

が、わたしはどうしても寝付けなかった。寝返りを何回もするが、眠れない。

（まだ聞いてない事があるんだもの……）

黒マントの件だ。ムーンがわたし達と合流した話はもう理解した、だから明日はこの村を出発するのだから。

帰還への再スタートを切る前に、わたしはどうしても聞きたい事があった。

大戦時、最後に父と兄の近くにいた人間は、ムーンしかいないのだから。

（……でも）

タイミングとやらはなかなか掴めない。レイもいたから私情出してムーンから話を聞く事は出来なかった。

今も、就寝の時、起こすワケにもいかないし。

「……」

今回の宿の部屋は、サーサリー王国で泊まった所と比べれば狭い方だった。ベッドはわたしの体格としては大きいが、一応成人体型のレイ、このメンバーでは長身のムーンには合っているから問題ない。が、四隅にベッド、荷物置く範囲も狭い、ドアとは向かい側に位置する両開きの窓からは、カーテン越しにか弱い月光が差し込む。ロウソク台を置く為だけのサイドテーブルは、残念ながらオールマイティーな机の役目を果たせない。

「……」

こんな互いの息遣いも聞こえそうな（レイの寝息は尚通る）部屋で、わたしは眠れないまま。

「……アルか？」

「っ！」

そう呼ばれ、思わず上体を起こした。

対となる反対のベッドから、ムーンの声がした。

「眠れないのか…？」

「……うん」

そう問いかける声の主は布団の中。姿を確認出来ず。レイが起きない程度の小声の会話。

「……これからの旅に、何か不安があるならば話を聞くが…」
「旅に不安はないよ…」
「……そうか」

それは本当だ。自信を持って言える。

「ムーンがいて、レイがいて……こんなわたしを仲間だと言ってくれるんだもの。わたしは、ひとりになっても、あなた達の事を思い出すだけで自信が持てそうだから……」
「そうか…」
「わたしが聞きたいのは」

だから、言わなきゃ。聞かなきゃ。

「黒マントの男の事よ」
「……」

…彼から伝わる雰囲気が変わったのがわかった。
触れたくない。
そんな見えない拒絶感の気配。
だがわたしは、構わず彼に問い掛けた。

「わたしは写真でしか家族の顔を知る事が出来ないけれど……まだ小さかったわたしを知っている人間は家族くらいしかいないの」
「……」
「母はもういない。わたしを知るのは父と兄しかいない。黒マント

はわたしの事を知っていた」
「……」
「ねぇムーン……知ってるんだよね…知っているんでしょ？」
だんまりはもうやめてほしかった。やっぱり、感情が抑えられない。
ムーンはベゴ村で出会った時から知っていたんだ。黒マントは…兄である、と。

「隠すのやめてよ。あの人はわたしの兄さんなの……ルナトル・メリアーなのよ！」
「……ああ、そうだ」
「！？」

ムーンが重い口を開いた。だが、身体を起こさず、見えないまま。

「あいつは、ルナトルだ……」

わたしと目を合わすのが嫌だというのか。

「どうして黙ってたの……？」
「……」
「隠す必要なかったじゃない……」
「…すまない……」
「理由を話してよ…！」

大声を出してはいけない。今は夜中。
でも、冷静にもなれない。わたし達仲間なのに。話してくれなかった、それに怒りが抑えられない。

「わたしに話さなかったのは、わたしに見せたくなかったから？

悪さする兄さんを、その人間がわたしの兄だと教えたくなかったから？　兄さんを助けられなかった事の責任を言われるのが怖かったから？　どうなのよ！」

「……！」

「っ？」

不意に、ムーンが身体を起こした。ホータイに巻かれた腕、首もと、顔が薄暗い中で見える。日中見れない長い黒髪も、より一層黒く。

「……私の責任だ…ちゃんと自覚はしている」

「え？」

布団をどかし、ベッドに腰掛ける状態となる。顔はうつむき、その悲しげな右目はわたしを見ようとしない。

「私が大戦の時に助けれさえすれば、あいつは……ルナは司祭長を魔物にする事はなかった」

「む…ムーン…」

「私がヘマをしなければ、レイニーの村に被害が起きなかったはずだ」

「ムーン待って」

「私が命をかければ、船旅も問題がなかったはずだ」

「わたしはムーンが兄さんを助けなかった事を責めてるんじゃないの！」

彼は……苦しんでいる。兄を助ける事が出来なかった自分の非力さに、罪悪感を持っているんだ。

一番悲しい思いをしているのは……側にいて結局救う事が出来なかった彼自身じゃないか。

その心の傷を、わたしはほじくり返してしまったんだ。

問い詰めて、後悔した……。

「……何故そんな顔をする？」

ムーンがこちらを見てきた。

「お前のその怒りに間違いはない……私は、お前に真実を言わなかったのだから…」

「……」

「私が…あの時、すぐに言わなかったのは……お前がルナを憎むと思ったからだ」

「憎む……？」

初めて彼の素顔を見た満月の夜。あの時は顔の表情がよく見えた。今は光も足らず、ホータイ巻きの彼だが、不思議とそれさえを見透かして、わたしは彼のただただ嘆く顔を見ている気分だった。

「マリアンヌも、レイニーも、ミュージアムも、船に乗っていた人々も……あいつを憎んだだろ……そしてあいつは、世界でも有名な悪人だ。お前はそいつの悪を目の当たりにしたのだから、少なからず憎む思いがある。そんなお前に……あいつがお前の兄だ、と伝える事は、どうしても出来なかった……」

わたしを気遣った故に隠した真実。

わたしはやっぱり、ひどい人間だ。彼がわたしに対しどんな思いで接してくれたのか。そうかもしれない……例え家族でも、わたしは憎んでしまったかもしれない。

でも、話がわかれば、そうは思えなかった。

「ムーン……ありがとう…」

「え…？」

彼からしたら意外な返答だったらしい。目を丸くしこちらを見てくれた。

「やっぱりムーンは、優しい人なんだね…」

「いや……私は優しさなど…持ち合わせていない」

「持ち合わせてないのはわたしの方よ…」

もっと冷静になって聞けば良かった。彼を困らせてしまった。彼は答える言葉を選ぶのだから、わたしはただ、彼が口を開くのを待てば良かったのだから。

「ムーンとは、同じ時期に入団した同期だけど、それでもわたしにとって尊敬出来る人だもの……ごめんなさい」

「謝るのは私の方だ…」

「謝らなくていいの！　謝るのはわたしの方で」

「いや、私が悪いのだから」

「ふぇ～…どっちも悪くねぇ味だぁ～……」

「……」

気まずい空気を破ったのは、蚊帳の外にいる眠り人の寝言であった。どっちも悪くないって……どんな夢見てるのあんたは。レイにかける布団はめくれ、床に落ちていた。

ゆっくりとムーンの方を見た。彼もこちらを見てきた。呆れた右目とわたしの目が合った。

「……ふふっ」

何故か面白くなって、でも大笑いしちゃいけないからこらえた。ム

ーンも笑いそうだが、何事もなかったかのように装っている。身体が震えているんだもの。

「こんなに話してるのに、なんで起きないのかしらね？」

「さぁな……羨ましい限りだ」

気付けば笑顔になれたわたし。彼の眼差しもあたたかなものとなっていた。

「アル……今回の事だが」

「ん？」

「おあいこ、という事で話を終わりにしないか？」

「…うん」

そういう風に持ち込めたのは、今寝ている彼のおかげだ。

「私は……大戦後、彼の行方を捜していたが、まさか会えるとは思いもしなかった…」

「もしかして、ベゴ村で出会ったのが、それ以来初めて、って事？」

「ああ……」

そうか……ムーンでさえやっと出会えた、って事だったのか。思いがけない出会いならば尚更、ムーンはわたしに言う事が出来ないワケだ。

「黒いマント……黒いローブ……最後に会ったのと変わらない姿だった。私もあの嵐でハッキリと顔を見たが、随分と大人になったものだ……」

「……」

「すぐにでも連れ戻したいが…今の私にはその術がない…」

魔物に変わった兄さん……元の人間の戻し方なんて、僧侶か教団の聖なる力とやらが必要だと思う。
ムーンは万能だが、だったら出会った段階で兄さんを元に戻したはずだ。

「それに今は……我々は戻らなければならない時だ。時間を潰すワケにもいかない……」
「うん……兄さんにまた会えるかどうか、わからないからね……」
「ああ…」

わたしもムーンに協力したい。兄さんを、元に戻し、連れ戻す事を。
けれど、その猶予もやり方もない。
今のわたし達では、為す術がないのだ。

「アル……申し訳ない…」
「？」
「今、ルナの事は、頭の隅に置いてほしい」
「……うん」

それしか方法はない。わたし達は帰還を果たさなければならない。
ムーンもやりきれない思いでいっぱいだ。わたしもそうだ。
今回の事は忘れないように……いつか必ず、夢を成し遂げる為に。

「今じゃない……いつか、必ず、助けるよ…兄さんを」
「ああ……」

彼が仲間だから良かった。魔物と化した人間を助ける、という事は、他の人達には理解出来ない事だから。

「ムーン」
「……どうした？」
「わたし、ムーンが仲間で良かった」

浜辺で独り、そんな時に、ムーンとレイを思い出した。無事だろうか、どこにいるのだろうか、と。
希望を持てるのは彼らが仲間だからだ。

「また離れちゃっても、わたし、絶対見つけに行くよ。もちろん、レイも」
「……」

わたしの思いを、彼はわたしの目をしっかり見て、黙って聞いてくれていた。

「わたし……父親、ってものがよくわからないけど、ムーンはきっとそんな感じの人なんだと思うんだ」
「……私がか…？」
「そう。ムーンみたいな人が、家族を守っていく父親のような存在なんだと思うの」
「……そうか…」

…あっちゃ。思った事を口にしてみたら、ムーンが戸惑いの目つきになった。
まさか彼が困惑するなんて思わなかった。レイの下らない言動に呆れているのはよく見ていたけど。
……彼から返答がない。そりゃ無理ないか…。
気持ちはもうスッキリしたので、これで悩む事はなくなった。今は今後の旅に悩まなければならない。
もう寝よう、そう彼に区切りを示そうかと思った矢先、

「……ありがとう」

小さな声で、本当に小さな声で、ムーンはそう答えた。わたしの解釈違いじゃなければ、なんだか照れているようにも聞こえる。だからわたしは、敢えて聞こえなかったフリをしようと思った。

「もう寝よう。明日は早く出発しなくちゃ」

「……そうだな…」

黒マントは兄だった……残念、という単語では片付けられない事実を知った。けれど同時に知ったのは、ムーンは兄を救う事を共にしてくれる事。

今はまだ……まだだけど、でもいつか。

心に決め、不安を拭ったわたしは眠る事が出来た。

＊＊＊＊＊

第六十五章

これで本当の仲間

コンコンというノックの音。誰だろう。
と意識が目覚め、黒の視界を開かした。窓にかかるカーテンは両脇にどかされており、空が太陽の光で見えるのが知れる。

「ああ……もう起きてたか。おはようさん」
「おはよーおじさん！」
「お嬢ちゃんはまだ寝てるのかい？」
「起きてますよ……」

主人とレイニーの声で完全に目を覚ました。身体を起こし、ベッドに座る状態になった。
甲冑や荷物の支度が終わったレイと、主人がこちらを見ていた。
昨夜はあんなに難色見せてたのに準備万端。やる気満々だ。あんだけ眠ってりゃ元気だわ。

「おー、アルテミス、おはよー！」
「おはようレイ……おはようございます、おじさん」
「まだ疲れが取れてないみたいだな。もう少し休んでから出発するかい？」

「その必要はない……」

と、意外な声が。

「あ、ムーンのおっちゃん、おはよー」

「おはようさん。あんたも疲れてるみたいだね」

「ああ……」

「へぇー…おっちゃん髪の毛長かったんだ。知らなかったや…」

メンバーの中で最後に起きたのが、意外やムーンだった。上体起こしたムーンの表情はホータイで隠されていても、目元に疲れが表れていた。

眠れなかった時間が長かったから……睡眠不足なんだろう。わたしも寝足りない気分だ。

「おっちゃんの黒い髪かっこいいなぁ……おれも伸ばしだいや」

レイは一体どこに関心持つのやら……いや、おそらく見たのは初めてだから、無理ないか。そして彼の美的感覚をこの発言で知る。

「食事も用意したから、良かったら食べにきてくれ。食堂で待ってるからな」

「いいんですか？」

「これも遭難者へのサービスさ。荷物の準備が終わってからで構わないからな」

「ありがとうおじさん！　よっしゃー！」

主人は用件を言い残し、部屋を出た。久しぶりのまともな食事、しかも無償なのだから、レイはこれに大喜び。

わたしも朝ご飯は食べたい。せっかく用意してくれるのだから。わ

たしはブーツをはき、ベッドからおりた。
ムーンはまだボーっとしている。普段しっかりしている彼からは想像もつかない、意外としか言えない姿だ。

「おっちゃん……眠れなかったの？」
「ああ…」
「そういやおっちゃんって、あんまりご飯食わないんだよな。おれ先に食べに行っていい？」
「ちょっとレイっ」

全くあんたは……ご飯になると周りが見えなくなるのが欠点だ。
レイを一睨みし、制する。案の定、わたしの顔見てビビるのらレイだ。だがムーンは、

「ああ……少し荷物を整理したいから、先に食べてくれ」
「おっけー！　サンキューおっちゃん！」

そんな彼さえ許し、行かせてしまった。バタバタとドアへ向かい、元気の意味威勢よくドアを開け、そして閉めていった。

「ああ……行っちゃった…」

部屋に残された二人。わたしは急いで身支度に取りかかる。甲冑をガチャガチャやかましいが、彼には周囲に合わせる習慣をつけるべきである。わたしがしつけないと、という使命感に駆られてしまう。

「アルも、準備が出来たならば私に構わず行ってくれ」
「でも…」

ムーンは遅れて準備に取りかかる。が、まずは持ち歩いている荷物

の確認から始めた。武具の装備は後回しのようだ。

「どうしても遅れるから、本当にいいんだぞ…」

「……わかった。ごめんね」

ベルトの両手剣を確認を最後に、わたしはムーンに謝罪をいれ、部屋を出ていった。

＊＊＊＊＊

この宿屋の食堂とは、受付ロビーも担う広い部屋にある。正方形木製テーブルに椅子が四脚。そのセットが三つある。

窓に近いテーブルには、既にレイが朝食をとっている真っ最中。麦パンがいくつも入った網かごが真ん中にあり、果物のジャムらしきビンもいくつかあり。

レイは一個食べ終えてすぐに、またパンを1つ取る。小さい木のスプーンでジャムをすくって、それに塗りつけパクリ。

「わたし達の分はあるんでしょうね？」

「んあ、ふぁんふぁおあうへひふ」

「パンをくわえながら喋るんじゃないの！」

んな、なんだよアルテミス、じゃないっての。口から飛び出している部分を掴み、千切りながら取り上げた。

「それおれのだよー！」

「あんたねぇ、集団生活の中でわたし達は動くんだから、協調性ないとチームのペース乱れる事くらいちゃんと知りなさいよ。はいこ

れ」
「あ、ごめん」

彼の言うごめんは、わたしがパンを返した事に対するものだ。怒られている自覚がないし。
各辺に椅子は用意されている。レイは窓が右手の位置に座っていたので、わたしは彼が左隣、窓を背にする椅子に座った。

「だったら……おっちゃんは例外なのか？」
「え？」
「おっちゃん、木の実食べてるとこしか見た事ないし。騎士団のみんなとご飯食ってるとこ見た事ないんだよ」
「……それは」
「おっちゃんこそ、協調性ってものがないんじゃないのか？　そりゃ、おっちゃんは仕事には意欲的だけど、仲間との交流はいまひとつじゃん。おれ達とはよくツルむけどよ……」
「……」

確かにレイの言葉に間違いはない。仕事の協調性はあっても、仲間との協調性は見た事がない。でもそれにはワケがある。
推測でしかないのだが、彼は必要以上に交流を求めたりはしない。彼の身体は他の人達と少し違う……交流が深まり過ぎて、それに何か言われる恐れがあるからなのだと思う。

「仲間ってさ…やっぱり、一緒にいなきゃダメだと思うんだよ。お互い分かり合って、理解し合って……そう思うの、おれだけかな……？」

普段おちゃらけていて、周りの空気をよく読まないのに、そんな彼は、悩んでいたんだ。

仲間、というものを。

「おっちゃんは……おれ達の事、仲間だと思ってないのかな……」
「そんな事ない」
「え？」
「そんな事ないわよ……」

レイは知らない。彼は誰よりもわたし達を思っている。そんな心配、しなくてもいいのに。

「ムーンは、優しい人よ。彼はわたし達を仲間だと思ってる」
「なんでわかるんだよ。…あ、そういやアルテミスは入団試験で最初におっちゃんと組んだんだもんな」
「そういう付き合いの長さとかじゃないの。レイだって知ってるはずよ」
「何を…」
「ムーンという人間が、誰よりも信頼出来る、って事を」
「……でもさ、今だから言う事があるんだよ」

と、食べかけのパンにまたジャムをたらし、パクリ。よく噛んで飲み込んで、彼は言った。

「おっちゃんはあんな姿していて……まるで腫れ物を隠しているみたいで。聞きたい事いっぱいあるんだけど、あの格好見ると、聞いちゃいけないような気がして仕方がないんだよ……」
「レイ…」
「おれさ、もっと知りたいんだよ。仲間なのに、全然おっちゃんの事知らないんだ。おかしいだろ？　聞く事も出来ないし、向こうから話してくる事もないから尚更聞けないんだよ。やっぱり……おっちゃんはさ」

まだ大きいパンの欠片。彼は一息つくように大口開けてそれを入れた。
もきゅもきゅと味わっている様子は口やほっぺの動きでわかる。そして飲み込む。

「おれ達と、関わりたくないのかな……？」

……なんでそんな事言うのよ。そう言いたかった。彼にその言葉を撤回してほしい思いで。
わたしが口を開く前に、

「関わりたくない、ワケがないだろう」

第三者が口を開いた。
普段その声は布に覆われたように聞こえるのに、今はクリアに耳に入る。
それは満月の夜以来の声だった。

「私は……お前も、アルも、仲間と思っている…」
「え？」

声のした方を見た。その人物は、わたし達が陣取るテーブルへと向かってこちらに歩み寄ってきた。

「……おっちゃん？」

その人間とは、ムーンだった。だが、彼を見たレイは目を見開き、ポカーンと口を開けていた。これほど間抜けなのも笑い物だが、今は笑っている場合じゃない。

なんでレイがそんな反応をしたのか……ムーンが、フードを取り、更に顔のホータイを取って素顔を露わにしてきたのだから。

「ああ…」

周囲からの非難を恐れ、半分魔物に侵されたその身体を見せない為に巻いていたはずのホータイを、彼は自ら剥いだ事になる。
黒い右目に、魔物の左目が、わたし達を見据える。

「座っていいか？」
「え？　えっと……」
「いいわよ」
「えっ？」

ムーンの問いかけに戸惑うレイに代わり、わたしは自分の右隣、レイの向かい側の席を勧めた。
彼は椅子に腰掛け、網かごにまだあるパンに手を伸ばした。パンを持つ右手のホータイも取れていたが、左手は巻かれた状態。
……さすがに禍々しい手ではレイもビビってしまうか。

「あ、ルテミス……なんでそんなに冷静なんだよ…？」
「何が？」

喜んでんのか怖がってんのか、そんな曖昧な表情、そして震えた声のレイが、わたしにそう言った。

「ムーンのおっちゃんが…ホータイ取ったんだぞ！？　おれ、ビックリしたって言うか……なんだこのよくわかんねぇの…！」

多分、嬉しいという気持ちがあるんだと思う。彼には。だがそれよ

りも驚愕の方が勝っていて上手く表現出来ないんだと思う…。

「ねぇムーン…どうして……？」

ホータイを……今まで隠していたものを脱いだ理由はわたしも知りたかった。レイの反応をよそに、呑気にパンにジャムをぬる彼に問いかけた。

「私も……昨夜はよく考えたんだ…。我々は、仲間だから……」

「おっちゃん……」

手の動きを止め、彼は真剣な面持ちで語る。

「驚かれたり、怖がられたりするのはもう慣れている……だが、私は今まで誰かに頼る事がなかった。仲間ならば、こんな醜い姿さえも受け入れてくれると、そう思ったんだ……」

彼は……わたし達を信頼している。だからなのだろうか。非難を覚悟してまでその素顔を見せたのは。

「私の……思い込みでしかないが」

「何言ってんだよ！？　おっちゃんはすっげぇ頼りになるし、相談にものってくれたし、おれ達の大事な仲間じゃん！」

ガタリ、と椅子の音を立てて立ち上がり、その勢いで彼の言葉を否定したレイ。

わたしも同意する。あなたは思い込みなんかじゃない。

ムーンはレイを見た。彼の中では、やはり罵声を浴びると思っていたのだろう。驚いているようにも見えた。

「レイニー……」
「ちょっとビックリしちゃったけど……それは謝るよ。ごめん…」
ビックリするのは仕方ない。だが、それだけだ。ビックリしただけで何か心境が変わるワケでもない。わたしはそうだった。
「見た目なんて関係ないもの。接すれば接する程、中身がどんなものか見えてくるものだしね…」
「だよな……今更どうこう言う事じゃねぇよ。おっちゃんはおっちゃんなんだから。むしろ嬉しいぜ」
「…何がだ…？」
ムーンは信じられない模様。やはり彼も人の子ら。予想外な事には顔が反応するのは当然だ。
「これから一緒にこうやってご飯が食えるんだから」
何よそれ。思わずぶっと吹いてしまった。それに案の定怒るのはレイだ。
「なんだよアルテミス！　何笑ってんだよ！」
「だって……何を言うのかと思ったら、なんか、レイらしいって言うか……くふふ…」
「だってそうじゃねぇかよ！　顔合わせて飯食うのが当たり前だろぉ！　笑う事ないじゃんかぁ！」
ダメだ。せっかくのいい雰囲気台無し、ぶち壊し。我慢出来ずアハハハハっ、と声をあげて笑った。
レイの怒りは徐々に羞恥と化す。もう笑うなよ！、恥ずかしいだろ！、と。

「っ、ははは っ」
「え？」

大笑い。とまではいかなかった。だが、わたしも初めて聞いた笑い声だった。
ムーンだ。少しこらえながら、でもふせきれてない、そんな風に笑っているのだった、彼が。
レイもわたしも、自分の行動を止めて彼を見た。ムーンが笑い終わるのを待った。

「いや…すまない……久しぶりに笑ったな…」
「なんか……新鮮だな、おっちゃん見てると」

この場の雰囲気が、和やかになる。それは普段変わらないわたし達の空気だ。

「今は共にいられるが……いつの日か別れる時もある。挫けそうな時になれば、お前達といる日々を思い出せばいい…」

だから、とムーンは続ける。

「お前達の人生はまだまだこれからだ……その中で、私がいた事を、忘れないでほしい…」
「ムーン…」
「おっちゃん…」

やっぱり……嬉しく思う。家族のような、いや、それ以上に強い繋がりが、わたし達にはある。
絆って言うのかな……そういうのは。きっと、わたし達ははなれば

なれになっても、思い出すんだと思う。レイの事、ムーンの事、騎士団の事。

「わたしからも……お願いするわ」
「ああ、おれも、おっちゃんの事忘れないから。おれの事、忘れるなよ？」

わたしは笑顔になれた。レイもにっこりとした顔で、なんとも上から目線な言葉だが、それはレイだから、で片付けておこう。

「ああ…」

ムーンの微笑みは、気持ちがあたたかになる。これからもそんな彼を見る事が出来るのだろう。
白く柔らかな鎖が、彼にはもうないのだから。

「さぁ…食事を再開しようか」

【第七部】第六十六章

―――――――――
旅は道連れ。
そして人情。
―――――――――

「うわあああああ！！？」

朝食を食べていたわたし達の元に来たのは、この宿屋の主人。
だが、ムーンの顔を見るなり目を丸くし、驚いた拍子に尻餅をついてしまった。
……やっぱり、ムーンはホータイに巻かれないと出歩けないのだろうか、せっかくこうして見せてくれたというのに…。
しかし、思いがけない展開が起きた。

＊＊＊＊＊

「あのおじさん本当にすげぇよな……」
「たくさんの遭難者を招いたのだから、免疫があるのだろう…」
「それでも、あんなに驚く事ないじゃないの…」

主人は文字通り驚いただけで、ムーンの顔を見た後も普段通りの接し方だった。

そんな顔じゃあ同じ人間に襲われちまうぞ、これやるよ、と言って、

「よし……これでいいかな」

「うっひょ～。おっちゃん、かっこよくなったなぁー…」

過去に遭難した冒険者が忘れていったという黒い眼帯をくれたのであった。だが、それで左目を隠せたとしても、ムーンの容姿は多少人間離れしていた。

ので、

「…やっぱり、髪の毛短く切った方が良かったんじゃないの？　レイ」

「いーやっ、絶対こっちの方がカッコいいんだよ！」

レイニーが自分好みにムーンの長いウェーブがかった黒髪を、胸元まで切った。

それだけでも充分邪魔な感じがしたので、わたしがムーンのホータイを少し分けてもらい、それをリボン代わりに後ろで束ねたのであった。

顔の両脇には、後ろ髪と同じ長さである前髪。皮膚の色が違う顔を隠すカモフラージュ代わりになった。

「ねぇレイ……ムーンは剣士なんだから、戦闘の時すっごく邪魔になると思うのよ」

「でもおっちゃんは言ったぜ？　お前達に任せる、って。なぁおっちゃん？」

「あのねぇ……」

この段階でレイのセンスというか……騎士団の一員とは思えないようなこだわりを知るとは予想だにしなかった。

おっちゃんの髪は天然ウェーブだから前髪つくらなくていっか、って言った時は本当にビックリした。そんな知識があったのかあんたには。

「いや……不便な事はない。ありがとう二人とも…」
「え？　いいの？　ムーン」
「ああ」

幸い、ニアシー村の宿屋に泊まっているのはわたし達だけだった。主人がわたし達…特にムーンを気遣ってくれたので、寝泊まりした部屋でムーンの容姿を調整する事が出来たのである。

「出発に少し遅れをとったな…早く行かねばならない」

そう言って、荷物を再確認、借りた地図を広げ、今日行く道のりを調べた。

「…この距離だと、恐らく一日はかかってしまうだろうな……」
「えー？！」
「道の途中、地図に載っていない集落などがあればいいが……」
「おじさんに聞いてみた方が早いんじゃない？」

＊＊＊＊＊

部屋に忘れ物を残さぬよう荷物を最終確認。食堂を兼ねる受付広間、カウンターで記録帳か何かを確認している主人の姿があった。
歩み寄ってくるわたし達を見、さらにムーンに対し感想を一言。随分カッコよくなったなぁ、と自分の事のように喜んでいた。

レイも、だろだろ?、と自分が手がけた事を主張するよう同意を述べた。主人とレイの美的感覚の波長が合っているのだろうか。

「あ、そうそう。湊町に伝書鳩を行かせたからな。強い魔物にさえ襲われない限り、問題なく届くからな」

「ありがとうございます」

「すまない…」

「サンキューおじさんっ」

主人のように親切な理解者がいなかったら、わたし達、途方にくれていたかもしれない。

最後に、わたし達はこの先にまた村があるかどうかを聞いてみた。

ところが、

「いや……ここから先は何にもねぇさ」

「え?」

状況不利なる情報だった。

「昔だったら、遺跡研究者を滞在させる為に転々と集落はあったけど、大戦以降、魔物の残党を恐れて、村から人間が人っ子一人いなくなっちまったんだよ」

「そんな…」

って事は、次に着く村か街までにたどり着けない場合、野宿になる可能性もある。

マリアンヌみたいな結界系の魔法は、このメンバーでは誰も使えないから、危険な野宿となってしまう。

「人のいなくなった村は魔物達に荒らされて、今では平原や森しか

ない。ここから出発してたどり着ける街と言えば、『ロムラ・スムラ』ってとこしかないぞ」
「ロムラ・スムラか……」
「ムーン、知ってるの？」

エイス出身だ、と以前聞いたが、ムーンはその名の街に詳しいのだろうか。

「エイスの遺跡には、様々な鉱石が見つかる……ロムラ・スムラはその鉱石を用いて武具を作り、発展していった街なんだ」
「武器と防具の街、って事か？」
「そういう事だ」

武具の街……興味深い。きっとユーピテルのように活気のある街なのかもしれない。
訪れる事にワクワク感を覚えた。

「でも……その、のむらしむら、って街まで遠いんだよな？」
「ロムラ・スムラね」
「何か魔法でひとっ飛びとか、出来ねぇかなぁ……？」

わたしからの間違い指摘を気にせず、野宿を恐れ、道が長い事に苦悩するレイ。
途中の村が皆無、となれば……やっぱり野宿は免れないのだろう。
そんなわたし達に主人が、

「魔法じゃないけど」

最後の最後に助け船を出してくれた。

「ひとっ飛びする方法、あるぞ」

＊＊＊＊＊

「なにこれ…」
「まだ生きていたとはな……」
「おっちゃん知ってるの…？」

宿屋裏には、馬小屋があった。内部が狭く、四頭が入るか入らないかくらい。
まさか、ロムラ・スムラへ行く為に馬を貸してくれるのか、と思ったら、

「ラピッドシープか…」

ごくごく普通の羊達が馬小屋にいたのであった。二頭。
モコモコの毛の色は、白ではなく、草原の色に近い黄緑色だった。

「おれんちの羊と毛の色が違うけど…」
「こいつは一応魔物なんだ。羊が魔界からの魔力を受けてな。馬同等あるいはそれ以上に速い脚力を持ってるんだぞ」

宿屋主人の話を聞き、納得がいく。毛の色が違うのは魔力による突然変異である事が。

「そんなに速ぇの！？」
「魔物だからな。でも、魔物なのに人間にはよく懐くんだ」
「へぇー…」

農牧家の息子のレイでさえも、この動物は見た事がないようだ。主人からの話を聞き、ますます関心を示す。

「まさかおじさん、こいつら貸してくれるのか？」

「ああ。エイス王国から譲り受けたものだからな。この村から隣街に行くのに苦労するだろうからって」

「ん？　でも、そしたらこいつらの世話は街に頼むしかないのか…？」

確かに。レイの疑問は当然だ。こんなに可愛いらしいこの子らを街の外に放置するワケにはいかない。

質問に対し、主人は得意気な顔だった。

「それは問題ないさ。乗り手がいなくなるか、家に帰るように命じれば、勝手にここに帰ってくるからな」

「へぇー！　頭いいんだなこいつら！」

なるほど。ハーネスいらず、って事ね。

一般的な羊に帰巣本能があるのかは知らないが、突然変異で知能も上がっているならば、その賢さには感心する。

「部屋、食事、眼帯のみならず、ここまで世話をかけてしまい、申し訳ないくらいだな…」

「なぁに。昔から遭難者達を助けていくのが俺の仕事だからな。これくらい当然だ」

ムーンは主人に感謝を伝える。主人は本当に寛大な人だ。

「こいつらは魔物に対しての危機感知が鋭いから、夕方頃には着け

るはずだ。そう簡単に魔物に遭遇する事はないぞ」
「よっしゃー！　早く帰れるぞー！」
「ありがとうございます、おじさん」

つらい旅にも、少しくらい安易な展開も欲しいくらい。それが今、この時だ。
わたし達は主人達にたくさんの感謝をし、ラピッドシープと共に村から出発した。

＊＊＊＊＊

ラピッドシープの大きさは、レイの家で見た大人の羊となんら変わりはない。だが、毛のモコモコ具合が、布団にしたいくらい肌触りが良かった。
それに、ムーンが一頭の背に座ってみたが、それに倒れず、体格もしっかりしている。羊は元々乗用する動物じゃないし、丈夫な体をしているんだなぁ、とさっきから感心の連続だ。

「じゃあおれはこいつだ」

と、空いている片方のシープに飛び乗るレイ。となるとわたしは…どちらかに座るしかないか。
すると、

「ん？」

ムーンの乗るシープがわたしの方に歩み寄る。そして、モコモコの毛を擦り付けるように甘えてきた。

これは…なんだ？

「もしかしてそのラピッドシープ、アルテミスを乗せたいんじゃないのか？」

農牧家なりの解釈で、レイが推測を立てる。

言葉を理解出来るのか、レイの言葉に答えるようにシープが鳴いた。

ぷぉー、って。

「ぷぉー、って…」

「ラピッドシープは独特な鳴き声をするからな…」

「ぷぉー、だってよ！　ぎゃははははっ！」

まるで金管楽器…ええと、トランペットだったかしら？　それに近い鳴き声だった。見た目は可愛いのに間抜けな声、ギャップにも程がある。

まぁいいか。わたしはその子の依頼を引き受ける事にした。

「ムーン、座っていい？」

「ああ」

まだ笑いが収まらないレイをよそに、ムーンの手を借りてシープの背に座る。

…しかし、一緒に小竜に乗る時もだったが、彼はわたしを前方に位置させる。明らかわたしが小柄だから、振り落とされない為の用心だろうが。

そういう点ではムーンは紳士なんだろうなぁとか考えていたら、

ぷぉー！！

二頭のラピッドシープが元気良く鳴いた。否、吠えた、が近い。それが合図のように、

「ひゃあああああっ！？」
「しっかり掴まれ」
「うっひゃあああ！！」

二頭のシープが平原を駆け出した。リトルドラゴンより速過ぎる。ムーンに言われるよりわたしは、抱き付く形で掴まった。
馬とは違い、手綱がない生身の羊だからか、モコモコの毛をしっかり掴むムーンの手が必死なのがチラと見れる。
隣にも同速でラピッドシープが走っているが、

「やっべぇ！　マジやべぇ！！　馬より楽しいぞこりゃ！！　ひゃっほーい！！」

その子に乗っているレイはやはり慣れている。そしてこのテンションである。なんとか程速いのが好き…いや違う、高い所が好き、か。どっちでもいい。
ぷぉーぷぉーと鳴き続けながら、羊達の足は止まる事を知らない。広き平原に、林や数本の木々が見当たるが、ゆっくり確認する事は不可能。速いんだもの！

「あれ？」

ふと、進行方向先に何かがいる。ムーンがラピッドシープ達にスピードを落とすよう命じた。
羊達はぷぉー、と了承しスピードを緩める。それで前方を確認出来た。

（魔物……しかも襲われてるのは人間！？）

若い女性が、二足歩行をする大人の人間と同じ背丈のトカゲの攻撃を避けている。三対一じゃ不利じゃないか。

トカゲはどこで手にしたのであろう斧や剣をがむしゃらに振り回しながら、女性に襲いかかっている。

「あの身のこなしはただの一般人ではなさそうだな…」

「でもこのままじゃ大変だぜ！」

「レイ！？」

頼むぞプォッチ！、って勝手に名前つけて、そして独断でレイがそこへ向かって駆け出した。

何をするのかと思いきや、

「掴まれ――――――――――！！！」

あの人を救出するつもりだ。大きな声で呼び掛け、女性はレイに気付いた。

そしてすれすれでトカゲ剣士の攻撃を避ける。レイが腕を伸ばし、彼女も彼が来るのを待ち、手を出した。

わたし達の乗るシープも徐々に近付いたが、レイの方が速い。

「やった！」

「さすがだな…」

そして、女性の手をしっかり握り、背に座らせながら魔物の攻撃を避け、進行方向へと逃亡。

ムーンも彼を追うべく、シープに命じた。お前の仲間を追いかけろ、と。

もちろん、トカゲ達はわたし達に気付いたが、

ぷぉぷぉぷぉ――――――――――！！！

ラピッドシープの速さに追い付ける事はなく。気付いても対応出来ないだろう。

わたし達は進みながら、女性を助ける事に成功したのであった。

＊＊＊＊＊

「助かったわ。どうもありがとう」

二頭のシープは横列になりながら街へと向かう。スピードにも慣れたわたしは、レイが救出した女性に問いかける。

「一人であんな魔物と戦っていたなんて……怖くなかったの？」

「怖くなかったわよ。ただ、隙を突かれて反撃出来なかったのよ」

レイの後方に座る彼女は、スタイルが良い女性だった。

なんで身体のラインがわかるのかは、

「見たところ……格闘家か？」

「そうよ。よくわかったわね」

職業的服装は露出が凄いからだった。首には肌にフィットするような首飾り。上半身は胸だけしか隠していない。動物の毛皮なのか、白くふわふわした布で巻いただけの。

またぐのではなく、ラピッドシープに腰掛けているので、奇抜なズ

ボンも目の当たりにする。膝下まで長いブーツ、紐で結ぶタイプのもの。何故か左足の丈は自分で切ったのか、太ももが露わだ。……格闘家って言うくらいだから、身体を動きやすくするための服装なのだろう。

「アタシはシェリンリ・ツウィンニー。このエイスで一番強い格闘家になる女よ」

紺色の髪。たれみみうさぎを思わせるような束ねたおさげが風でなびく。横一線に揃えた前髪。けれど大人の女な顔立ち。同性であるわたしですら羨ましい美貌の持ち主だ。

緑色の双眼は活き活きと、自信溢れているかのようだった。

第六十七章

出逢った彼女は
エイス大陸一
最強の格闘家？

格闘家の女性改めシェリンリから、事情を聞かされた。
彼女はニアシー村在住者であり、ラピッドシープに乗ってロムラ・スムラに行くはずだったのだが、

「シープちゃんがあのトカゲちゃんの足引っかけにまんまとやられて、振り落とされちゃったのよ。迂闊だったわ」

体勢を上手く取れず、調整しながら回避をしていたら、わたし達が通りすがったワケである。

「じゃあシェリンリの乗ってたシープは…」
「そうよ。ニアシーに逃げるように帰っちゃったわ。ところであなた名前は？」
「あ、悪ぃ悪ぃ。おれはレイニー・バルナって言うんだ」

不意に名前を聞かれ、レイニーは顔だけ彼女に向けて自己紹介をした。

「じゃあレイニーちゃんね」
「レイニーちゃんって…」

シェリンリの彼の呼び方に思わず呆れの呟きが出てしまった。それを聞かれたかは知らないが、シェリンリは横隣のわたし達に目を向ける。

「わたしはアルテミス・メリアー。長いからアルって呼んで」
「ムーン・タリアスだ……」
「アルちゃんとムーンちゃんね。改めてありがとう、みんな」

美人だから許されるのだろうか、そのちゃん付け呼びは。
わたしとレイの年齢ならばともかく、明らか歳上のムーンまでちゃん付けはどうなの。ムーンは気にしていないようだけど。
だが、それが彼女の普通のようだ。にっこりと微笑むそれに悪意はないのだから。

「ところで……シェリンリはどうしてロムラ・スムラに行こうとしてたの？」
「夢の為よ」
「夢？」

夢……彼女の夢とはなんだろう。自信あるように答えたシェリンリの言葉を期待して待つ。

「三日後にロムラ・スムラで、年に一度行われる武闘大会があるのよ」
「武闘大会!?　面白そうだなそれ!!」

エキサイティングな催し物だと察したのか、レイがその話題に食い

付いた。
さらに、ここが出身地であるムーンも話題に加わる。

「元々は生産した武具を御披露目し、賞賛し合うものだったが…」
「へぇー」
「そうよ。詳しいのね、ムーンちゃん」
「……」

シェリンリはロムラ・スムラの武闘大会について詳細を教えてくれた。
ムーンの言うように、昔は鍛冶師達が独自の製法で武器防具をつくり、それを自慢し合う伝統行事だった模様。だが、貴重な鉱石でつくられた武具に戦士達が街を訪れ、その武具を用いて戦士らが試合をするようになったのだという。
そして、戦士のみならず格闘家や魔法使い達も試合に参加するようになり、武具制限なし、魔法制限なし、素手も可、そんなオールマイティーな武闘大会に至るのだという。

「大会で優勝する者は、エイスの英雄として称えられるのよ。アタシは小さい頃から大会を観てきたから、ただ観るだけじゃ気が済まなくなったの。武闘大会が今のアタシになるきっかけよ」
「武闘大会かぁ……観てみたいなぁ…」
「アタシはね……毎年挑戦しているけど、優勝はした事ないのよ」

そう言うシェリンリの表情が、憂いに変わる。さっきまであんなに強気な顔だったのに。
もうラピッドシープが走っている速度には慣れてきた。ただ、シープが坂をのぼるくだる、進行方向にある木々があると避けたりする、その度にわたしはムーンにしがみついた。

「毎日毎日特訓して……退治がてら魔物達を倒して、技にも試行錯誤を繰り返し続けても、どうしても優勝出来ない…。出来ないのはまだまだ努力が足りないアタシに問題があるのよ。だから大会の為に、わたしは修行の日々を過ごしてきたわ」

「すごいのね……シェリンリ」

「その言葉は、アタシが優勝してから言ってちょうだい」

んなっ。何それ。わたしはただシェリンリが努力家である事にとても感心を示しただけなのに。

さっきの悲しげな顔は消え、代わりに変化前のあの自信満ちる顔に戻った。そしてこの語りである。返す言葉が思い付かない。

…言われた言葉より、多分、彼女の威勢ある物言いに驚いたんだと思う、わたしは。

「今年こそ……アタシは優勝してみせる。エイスの人達に…ううん、他の大陸の人達にも、まだまだ知らない世界にも名を馳せる格闘家になってみせるわっ！」

「おー…！！」

そんな彼女の優勝宣言に、同乗者のレイがますます表情を、目を輝かせる。頂点に君臨する者への憧れ、とでも言うのだろうか。

「！……」

「どうしたの？」

こうして会話している間にも、わたし達はロムラ・スムラへ向かっている。

ムーンが不意に辺りを…いや、上空を見回し、睨む目になっていた。

…恐らく、何か悪い展開が。

「まずい……追い掛けてくるぞ」
「何が？」
「もしかしてネズミちゃん？」
「ああ」

ムーンとシェリンリは何が来るのかを予期しているようだ。ここの情報等知らぬわたしとレイはただ首を傾げるだけ。

「イリュージョンマウス。ここに住む人間なら誰でも知ってるわ」

シェリンリが、それを知らないわたし達にそう話し出した。
それに重ね、背後からパタパタという鳥が羽ばたくような音が、徐々に近付いてくるのに気付いた。
レイが後ろを振り返ろうとする。わたしも落ちないよう気を付けながら後方を見てみる。と、

「何あれ…！？」

見た事ある動物が、見た事ない群集でわたし達を追い掛けているのだった。ラピッドシープの速さに追い付くなんて、こいつら魔物？

「あの子達は特殊な目玉を持っているのよ。あの可愛らしい瞳を見たら、幻覚を見せられて、気が付く前にオダブツよ」

怖っ。そんなネズミの魔物がこの大陸にいるの？　レイもわたしも急いで目をそらし、前を向いた。
見た感じ普通のネズミと変わらないのに、いや、背中に鳥に近い小さな翼を羽ばたかせている時点でネズミと大違いか…。

「どうするの？　ムーン」

一瞬だけ彼らを見たが、数はハンパない。あんな数の相手をするのは、個々が弱体でも苦戦は確実。しかも幻覚をかけられるという恐ろしい特性付き。
わたし達メンバーで唯一イリュージョンマウスを知る彼に問い掛けた。

「広範囲の魔法を使えば、一掃は可能だが……」
「あら？　何も魔法だけが広範囲攻撃が出来るってワケじゃないわよ？」

ムーンが話している途中なのだが、シェリンリが割り込み入る。
失礼な感じがするが、どうやら彼女はあのマウスらに対抗策があるようだ…。

「レイニーちゃん、協力してくれるかしら？」
「え？　おれ？」
「アタシ、シープちゃんに命令するから」
「えっ？」

一体何を？　レイも突然の申し出に戸惑うが、

「シープちゃん、ゆっくりスピードを落としなさい！」
「えぇっ！？」

問いの答えを待つ事はなく、レイと一緒に乗用しているラピッドシープに向かってそう命じたシェリンリ。
レイもわたし達もそれには驚き、隣に位置していたシープが視界の端へと流れて消えた。
ムーンが慌ててシープに、止まれ！、と命令し、急ブレーキ。後方

を振り返ると、

「はあああああっ！！！」

シェリンリが気合いの入った叫び声をあげながら、両手の平をイリュージョンマウス達へ力いっぱい向けた。瞬間、マウス達が殴られたかのように吹き飛ばされ、草原へ勢いよく、次々と墜落。

「気功じゃないの…！？」

「格闘家だからな……珍しくはないだろう」

「わたし、生で見るの初めてよ…」

「そうか…」

世間一般では、人間の中に眠る『気』を、身体を用いて放出する、というもの。

気功術、気功拳、等と呼び方は様々だが、習得するには日々の厳しい鍛練が欠かせない、と故郷にいた頃に本で知ったが…。

「ただのお色気じゃないのね、シェリンリって」

「ああ…」

つい本音がボソリ、と口を突いて出てしまったが、ムーンが静かに相づちを打ってくれたし、シェリンリ達のシープもわたし達に追い付いたので、本人に聞かれてはいない。

「なぁなぁ二人とも見ただろ！？　おれあんなに近くであんな技見るの初めてだぞぉ！」

「まだまだ序の口よ。大会を観戦すればもっと観せてあげるわ」

「うっひょー！！　観てぇ！　超観てぇ！！」

わたし達の元に駆け寄りつつ、レイがわたし達に感想を熱く語る。
シェリンリは案の定得意気ある返答だ。あれ程豪語するくらいだから、まだまだ技はあるに違いない。

「生憎だが、我々は先を急がねばならない……観戦はまた次の機会にしよう」
「えー…？」

レイが難色。武闘大会の話を聞かされてから興味を示しまくってはいたけど。無理もない。
わたし達は一刻を争う…と言ったら大袈裟だが、道草の暇はないのだ。

「そう……残念ね…」

と苦笑いの顔になるシェリンリ。

「ネズミちゃんも倒したし、早く行きましょ。時間がないのはアタシも一緒よ」

さぁさっ、とわたし達を促す彼女。ところが、

「！！」

不意にムーンがシープから降り、長剣を構えた。そしてわたし達が来た道を向き、

「魔技！　『紅蓮』！！」

剣に火炎を宿し、一振り。イリュージョンマウスの生き残りがわた

し達に襲いかかろうとしたが、炎に焼かれ、返り討ちとなった。

「ご……ごめんなさい。まだいたのね…」

完全一掃が出来なかった自分の腕の悪さに、シェリンリは謝罪を口にした。おほほ…と笑うが、空笑い。誤魔化しになってないわよちょっと。

「ありがとうムーンちゃん。さっ、早く行きま」

と言いかけた刹那。

「！？」

ムーンがまだ紅蓮の剣を、よりにもよってわたし達に振り払った。切っ先の軌道通りの形の炎が、わたし達を襲ったが、シープが必死に攻撃を避けた。

シープのいた場所には、焼け跡が…。

「どうしたんだよおっちゃん！？」

「ちょっと待ちなさい」

レイがシープから降りようとしたが、シェリンリが彼を制する。そして代わりに彼女自身が降り、まだ戦闘体制を解かないムーンと対峙した。

「どうやら……ネズミちゃんの幻覚にやられちゃったみたいだわ」

「えっ！？」

シェリンリの分析を聞き、次にムーンの姿を見た。

ホータイが消えた事により、顔の表情はより鮮明となったが、逆にそれがつらい。彼の目つきは何かを恐れ、それに抗おうと殺意を剥き出しになっていた。
普段、冷静沈着なムーンを見ていたわたし達からすれば、今の彼は平静を装っているつもりだろうが、バレバレだった。
一体どのような幻を見ているのだろうか…。

「アタシが幻覚を解くわ。二人はそこで大人しくしてなさい」
「そんな…ムーンは敵に回すと強いのよ！」
「やめた方がいいってシェリンリ！！」

幻覚に捕らわれたムーンとは言え、彼の力はわたしとレイが充分に知っている。
会って間もない彼女がどのように対抗出来るのだろうか。

「いいから見てなさい」

依然退かないシェリンリ。ムーンは警戒心を消しやしない。
エイスの格闘家が、武器であり防具である己の身体を、戦闘モードへと移行させた。
仲間であるわたし達は、ただ見ているだけしか出来ないのか…。

第六十八章

―――――――――
予期しなかった争い
彼と格闘家
―――――――――

片や炎の剣を持つ黒眼帯の男。
片や己が拳を武器にする女。
わたしとレイニーは各々にラピッドシープに乗っている状態だ。二人の戦いを止める術はなし。というか、シェリンリに言われて止められているだけだ。
彼の力を充分に知るわたし達からしたら、今の彼女が彼に対抗出来るのか不安でならなかった。

「ムーンちゃん……痛いけど我慢してね？」

余裕しゃくしゃくにこの発言。ムーンは剣の柄をしっかり握り締め、相手の動きを見ている。
お互い、まだ行動に移らない。ラピッドシープもぷぉー……と怖がっている。

「来るよ！！」
「言われなくても！！」

ムーンの剣の炎が燃え上がった瞬間、シェリンリは接近を試みる。

ムーンは更に火力を増して、真っ正面から来るシェリンリに火の刃を振り上げた。
真っ正面に向かったにも関わらず、シェリンリはスレスレでサイドに動き回避、接近は続行中。そして、

「はぁっ！！」
「っ！！」

回し蹴りを彼の胴体に当てようとしたが、剣で防御される。それもムーンの構えは、切れる刃の部分ではなかった。
するとムーンはその状態のまま、空いた手の平をシェリンリの顔に向け、

「『スペルショート』！！」

詠唱短縮魔法を唱えた。瞬間、

「きゃあああああっ！！！！」

シェリンリの足元からイバラのつたが急速に成長。意志を持つそれらは彼女の身体に絡みつき拘束。

「ちょっとぉ！　なんなのよこれぇ！！」

腕や足を動かし、イバラ達から逃れようとするが、無意味。そうすればする程に、トゲが彼女を傷付ける。
シェリンリがそうしている間に、ムーンは彼女から後退り、距離をとっていた。まだ彼の顔から恐怖はある模様。

「……を返せ」

ムーンがそう呟いた。恐れながらも、立ち向かおうとする、そんな強い意志のある声で。

「ルナを…返せぇぇ！！」
「シェリンリ！！！」
「シェリンリぃ！！！」

兄の名を口にした彼の剣は、火山の如く燃え上がる剣をシェリンリに振ろうとした。これにはわたし達も焦る。レイもわたしもシープから降りて駆けつけようとした。のだが、

「えぇぇい！！！」

シェリンリが両腕を広げ、回転しながら気功を使い、身体を縛るイバラを吹き飛ばした。のみならず、襲い掛かる火炎も、ムーンも共に、見えぬ衝撃波で反撃したのだ。

「す…すげぇ…！　どうしてそうなるんだ？」
「全身に気を行き渡らせれば、ああいう事も出来るのよ…きっとね」

レイに語るのは無論、本から得た知識だ。しつこいけど、本物をこの目で見るのは、わたしは初めてだ。
ムーンは気功の勢いにより仰向けに倒れた。
ルナを返せ…か。彼は魔界大戦で見た幻覚に惑わされているのだろうか。
起き上がろうとする彼の元へと、シェリンリは歩み寄る。

「貴様…ルナをどこに…！！」
「いいから目を覚ましなさい、ムーンちゃん」

シェリンリを睨む彼。対しシェリンリは何をするのかと思えば、

「はいっ」
「っ！？」
「え…？」

ごくごく普通の、ビンタ。平手打ちだった。
やっと上体を起こそうとしていた彼の頬に、ぱしんと乾いた音を鳴らしながら、シェリンリは思いっきり叩いた、
またも草原に横たわったムーン。なんだか哀れ…。
シープから降りて、でもシープを引き連れながら二人の元へわたしは向かった。レイもそれを真似て、わたしと一緒に行く。

「シェリンリ？　そんなんでおっちゃん、戻ったのか？」
「幻覚から目を覚まさせるには、単純にこうすればいいのよ。怪我もしないし、アタシも痛くないわ」

レイが彼女に問い、答えを聞き終えた頃に、ムーンがはたかれた頬をさすりながら起き上がった。

「ムーン！」
「ああ…すまない」

彼はとても不快な思いをしたようだ。表情がそう見せるのだ。それにしても……ムーンは一体何を見たのか。
兄さんに関する何か……だが、今は聞ける状況じゃない。この話は今すべき事ではないし、兄の話をレイやシェリンリに聞かせるのには引け目があったから。

「私は……何か言っていたか？」
「覚えてないの？」
「いや…叫んでいたのは覚えているが……」

彼が地に立てるよう手を差し伸べ助けながら、この会話。

「幻を見せられたら、多少の記憶障害はあるわ。仲間を襲った事を覚えてない人もいれば、どんな幻を見たかを覚えている人もね」
「ふーん……」

シェリンリが幻覚にかかった者の症状まで熟知している模様。レイは感心の目を彼女に向けた。

「シェリンリか……私を助けたのは。ありがとう」
「どういたしまして。歩けるかしら？」
「ああ…」
「じゃあ早速行きましょっ」
「えっ？」

ムーンの容態に問題ない事だけを確認し、シェリンリはレイに寄り添うラピッドシープへと早足で向かう。あっさりとした区切りに思わず声が裏返ったわたし。
気配でレイとムーンも似たような反応を知れた気がした。
そんなわたし達に、彼女は振り向いた。

「まだまだ道は長いのよ。アタシの晴れ舞台に間に合わなくなったらどうするのよ」
「今日がその大会当日なの？」
「とにかく行きましょ。ほらっ？」

わたしの質問に答える事はなく、レイより先にシープに乗り込み座った。レイも慌てて同乗する。
わたしはムーンを見たが、目が合う。私は大丈夫だ、と意を示す頷き。
シェリンリに急かされ、わたし達もシープへまたがった。

＊＊＊＊＊

平原を馬よりも速く駆ける羊。もう慣れてきた。それでもまだ、ロムラ・スムラの全景は見えそうにない。
時たま魔物らと遭遇する事があるが、シープは平然と素通り。案の定魔物達は追い掛けてくるが、追い付けるワケがない。陸上系の魔物だから。
だが、どうしてもイリュージョンマウスのように飛行系も襲いかかってくる。そんな時は、

「おっちゃん、火ぃ使う？」
「『邪となりしものを燃やせ』、『フレイム』！」
「サンキュー」

レイとムーンが連携攻撃。ムーンが追い掛けてくる飛行魔物に炎を放ち、さらにレイが手製爆弾を放り込んで一掃。
シープはそれに驚く度に、一瞬加速する。

「甘い顔して危なっかしいのを扱うのね」
「危ないのばっかじゃねぇぞ。煙玉や閃光玉もおれが作ったものだからな」
「あらそう……見せてくれない？」

と何やら武器について会話が始まった隣のシープに乗る二人。農牧の息子とこの地出身の格闘家だから、こんなスピードの中、レイがシェリンリに自分の持ち物を見せようとするのも容易いのだろう。…二人がなんかいい感じに話しているので、わたしはムーンに先程の事で聞こうと思った。

「ムーン」
「どうした…？」
「兄さんを奪われた時」
「っ…」

幻覚から解放された後に見せた険しい顔が一瞬表れたが、わたしは話を続ける。

「ムーンはどんな相手と戦ったの…？」
「……」

……隣ではキャッキャと聞こえる二人の会話。なんだろう、ちょっぴりイライラするが、わたしは今はムーンと話している。が、肝心の相手からの返答がまだ来ない……答えられないのか。否、答えたくないんだ。

「ごめん、忘れて」
「え…？」

すぐに質問を取り下げた。彼は、それが意外だったらしく、目を丸くしわたしを見た。

「今、そんな話をしている場合じゃないからね……」

「……すまない」

なんでムーンが謝るの。

意外性にわたしを見たムーンを、わたしは見返した。自分でもわかる、顔が強張って怖く見られるだろう事も。

「なぁなぁおっちゃん、シェリンリにおれのねずみ爆弾お披露目したいんだけど」

「今は火を使う時じゃないでしょ！？」

「うわっ。なんでアルテミスが怒るんだよ！？」

「今はロムラ・スムラに行くのが先でしょ！？　それは後にすればいいじゃん！」

ごめんなさい。感情が残って、レイに八つ当たりしてしまった。ムーンが悪いワケじゃないし、レイも悪くない、勝手に怒るわたしがいけないのだ。

「最近の若い子はすぐ怒るのね。カルシウム不足じゃないのかしら？」

「そんな事ねぇよ。アルテミスはおれの村で牛乳飲んだんだから…」

「でもまだ足りなそうね。ところでレイニーちゃん、あなたどこの村に住んでるの？」

「え？　おれ？」

と、ねずみ爆弾の話題が消えて、二人が会話を始めた。なによそれ、わたし、蚊帳の外じゃないの。

二人に見えぬよう深いため息をついたが、

「すまない、アル…」

ムーンには見られていた。今度はちゃんと笑顔を見せて…。

「ううん、わたしがいけないから」

駄目だ。苦笑になってしまった。

ラピッドシープは走り続ける。

第六十九章

―――――――――
旅は道連れ。
そして巻き添え。
―――――――――

＊＊＊＊＊

「シープちゃん？　もう喉は潤ったかしら？」

ぷぉー。シェリンリの問いかけにラピッドシープ二頭はそう返事した。

太陽がほぼ真上に位置していたが、まだまだロムラ・スムラは見えなかった。シープのスピードが落ち、それが疲労の原因だとシェリンリは話した。

誰よりも早くロムラ・スムラに着きたかった彼女は、到着を早めたい為に、木々に囲まれた泉に立ち寄り、今は休憩中である。

「さっ。早く行きましょ」

「えーっ？！　まだ昼飯食ってねぇよシェリンリー！」

すぐにシープにまたがろうとした彼女に野次を飛ばすレイニー。ムーンからチカラモをねだっていた最中だった故。

「大会に間に合わなくなるって言ってるじゃないの。あなた達も早く行かなきゃいけないんでしょ？」
「そりゃそうだけど……少しくらい休ませてくれよぉシェリンリー…」

そこまでわたし達を急かすのは何なのだろうか。大会のエントリーに間に合わないならば、前もって村を出れば良かったのではないのだろうか……という本音は、彼女の前には出さなかった。
身体的疲労はないだろうが、心休まる時間が欲しいレイにとっては、彼女の言葉はキツいものであろう。

「アルちゃんとムーンちゃんはもう行けるかしら？」
「私は構わないが…」
「わ、わたしも」
「え〝ーっ！？」

話がわたし達に振られ、ムーンは普通に返答。わたしは思わず彼に便乗するよう、焦りつつも返事をした。
多数決で即再出発が決まった。相変わらずレイの意見は変わらないが。

「急がなきゃいけない旅なのはわかるけど、急がば回れって言うだろー？」
「なによそれ…」
「ほう……遠き東海の国の格言を知っているのか」

急ぎ過ぎるとそれが仇になって失敗する、って意味だぜー、とムーンも知っていることわざとやらを説明しながら、レイはまだ休みたい事をひたすらに訴える。

「だったら、善は急げ、よ。アタシ達はただ街に着きたいだけなんだから」
「シェリンリもなによそれ……」
「シェリンリも知っているのか…」
「レイニーちゃんの言うその格言は、横着しようとする人に対する言葉よ。アタシ達は横着してないんだから」

このメンバーで東海の国を知らないのはわたしだけらしい。ムーンは元々博識の人間だし、レイの場合は誰かの受け売りだろう。シェリンリが知っているのは……意外やムーンと同類か？

「でもよぉ……」

どんなに言われても譲らないレイ。するとシェリンリはシープから離れレイの元へと近寄り、

「ロムラ・スムラに着いたら」

と、彼女はレイの顎に己が手を添えて目線を合わせた。お色気作戦？　レイに通じるのだろうか。

「アタシが何かおごってあげるから。ね？」
「マジか！？　じゃあ早速行こうぜ！」

否、ご飯奢り作戦と来たか…。
すぐ返事をし、レイはシェリンリと共にシープの元へ。わたしは、レイに呆れたというか、あ然と二人の後ろ姿を見ていた。
前にレイ、彼の後ろをシェリンリが腰掛ける。まだ動いていないわたしを見て、

「おーい、アルテミスも早く行こうぜー」

そう急かしてきた。ついさっきあんたが急かされていたというのに。うるさく言われないよう、わたしも行動に移る。ムーンは既にもう一頭のシープに乗っていた。

「アル」

「ありがとう」

駆け寄ったわたしに手を差し伸べたので、その勢い、わたしは飛び乗った。

＊＊＊＊＊

時たま魔物からの奇襲はあるものの、シープの速度に叶うものはおらず。また、わたし達の戦闘はすぐさま返り討ちにしてしまう。魔物達は自分達より劣る強さではある。それはいいのだが、

「まだかなぁ……」

「やっと見えてきたから、あともう少しよ」

進むにつれて、木々が多くなった。また、前方にはユーピテルと同じか、或いはそれより上回っているような高い高い塀がポツンとあるのが見えるようになった。

先の泉で休んでからずっと走り続けているラピッドシープ達に、また疲れが表れている。

太陽も低い位置となり、わたし達は一日中移動をしていた事になる。こんなに長い道のりだなんて思いもしなかった。

「シープのスピードが落ちているが…」
「いいえ、もう止まっちゃダメよ。陽が沈むまでロムラ・スムラに着かなきゃ」
ムーンがシープを気遣うも、シェリンリがそれを許さなかった。でも、少し休んで一気に駆ければ、沈む前には着けそうな距離だとは思うが…。
「ねぇ……何なのあれ？」
「えっ？」
進行方向に何か黒い物体が。何て言うか……生き物、って言うより、気体がもやもやっとした感じの。
他のみんなもそれに気付き、それにシェリンリが短い悲鳴をあげた。
「やばい……シープちゃん！　迂回しながら走ってちょうだい！！」
「えっ？　ちょっとシェリンリ！？」
慌てて命を下したのがいけなかったのか、レイとシェリンリのシープは前方の黒いのを避ける道を走る。
だが、わたし達の乗るシープにはその命令がしておらず、そのまま一直線に走っていく。
「すまない、アル…『スペルショート』」
「へ？」
ムーンが何か険しい顔を。そして何をしたのかと思えば、
「きゃあああっ！？」

わたしの身体をシープから振り落としたのだ。転がるかと思ったが、ムーンが直前に唱えた魔法なのか、シャボンの泡みたいなものがわたしを包み、地面に叩き付けられる衝撃を和らいでくれた。
泡が消え、すぐに立ち上がりムーンの行方を見たが、

「おっちゃん!?」
「ムーン!?」

先程目撃した黒は、ムーンの背丈より二倍程の巨人を象り、大きな両の手でムーンとシープを捕らえていた。

「イブニングシャドーよ!!　この時間帯になると出てくる魔物よ!!」
「魔物…!?」

あの影みたいなものが、魔物？　シープから降りたのか、そのシャドーとやらに向かって走ってきたシェリンリからの情報には耳を疑った。

「シェリンリおれも」
「レイニーちゃんはそこで待ってなさい!」

シープと一緒に彼女を追いかけようとしたレイだが、またも制された。
彼女の接近にイブニングシャドーは気付き、振り向いた。同時に彼女も足を止め、敵を見上げる。
シャドーの手中にはまだムーンとシープが捕らわれている。抜け出そうとしているのだろうが、出来ないようだ。
わたしも右手左手に剣を持ち、構えたが、

「無駄よ！　物理攻撃をしたら、ムーンちゃんみたいに捕まるわよ！！」
「えっ？」
「この子はね」
とシェリンリは指先を揃えた右手を、構える。シャドーはそれで敵意を知り、頭部らしき箇所から影を伸ばした。
それは斧のような形となり、シェリンリに振り下ろした。が、
「こうでもしなきゃ対抗出来ないの……よっ！！」
シェリンリの右手には、気功が備わっていたようだ。剣の如く影の斧を切り裂くように振るった。
地鳴りのような低い呻き声をあげるイブニングシャドー。攻撃は聞いているようだ。
しかし、シャドーも反撃にかかる。太陽光の摂理を無視するように、足元から地面へと影を伸ばし、それがシェリンリの足元を広く包囲した。それに彼女が自分の肩を抱くように身を固めた。すると、
「！！？」
広範囲の影から、黒い槍が無数に生えてきた。驚愕。いつぞやの植物の根を思い出す。
だが、槍が彼女を貫こうとするも、それは叶わず、弾けるようにかき消されていくものがいくつも見えた。
身体の表面に気功を行き渡らせ、防御をしているのだろう。
「シェリンリ、魔法は効くのっ？」

わたしは質問しながらシャドーへと駆け出した。可能ならば、わたしも加勢しなきゃ。影槍が足元から消えたのを確認し、シェリンリはコクンと頷いた。魔法は可、という意。
ならばわたしは援助が出来る。覚えたてだが、わたしなら出来る。

「魔技！　『海神』様！！」

わだつみさまは、なかまのために。
その思いを強める事により、わたしの刃は水を纏う。
その水の音に気付いたシャドーがこちらを向いた。足元から影が、わたしに向かってすぐ伸びていくが、わたしはその場から垂直にジャンプ。同時に槍が元いた位置から生えてきた。
しかし、まだ槍は引っ込むワケないし、このままだったら針地獄に落ちるだろうが、両の剣先を地面に向けて、水流を起こした。放射さながらの勢い。わたしの身体はさらに宙へと運ばれた。
低い声が響き渡る。相手に効いている模様。

「アルテミス！」

とレイがわたしを呼ぶ声が聞こえた。地表を見て知った。シープにまたがったままレイはわたしを受け止め体勢になっているようだ。
わたしは彼に身を任せようと落下点を定めようとした時だった。

「アルちゃん！」

シェリンリの焦った声。それを聞いた時には、

「――――――――！！！」

げんこつで殴られたかのような痛みが、背中全体に走った。

敵に殴られた、と認知したが、頭で展開に追い付いても、激痛の身体が芝生を転がるだけで、何も出来ない。

「いけない子ね……許さない…！！」

と呟き怒る声を耳にし、わたしは視界を動かし状況だけでも知ろうと思った。

シャドーは次に、シェリンリに襲いかかっている。ムーンとシープを右手に移しており、空いた左手でハンマーを象ってシェリンリの頭を叩こうと振り下ろしていた。

対し彼女は格闘家ならではのみのこなしで攻撃を避けるが、頭上のみならず足元も狙われる。もちろんそれもシンタイで避けるが、間に合わない場合、瞬時に気功で攻撃を受け流した。

痛がる鳴き声（？）を発するイブニングシャドーだが、体力が多いタイプなのか、なかなか弱まる傾向が見当たらない。

（何か弱点はないの…？）

痛みは引いてきたが、完全に、ではない。でも立ち上がれるならば直立は出来た。

物理的に不可能ならば、魔法で対抗するしかない。だが、わたしは魔技しか使えないし、唯一魔法に精通しているムーンはあの有り様。レイはシープと一緒におどおどしているし、物理系しか彼には手段がないから動けそうにない。

（海神様……力を……）

せめて、ムーンとシープだけでも救えば。

わたしは海神様を念じた。剣に宿る、仲間を助ける、その思いを宿す為に。

「っあああああっ！！！」

わたしの思い描く魔技が、実現するならば。思い込めすぎて叫び声をあげる。

わたしはがむしゃらに、両の剣先を地面に突き刺した。狙いを定める事はなかったし、かと言って狙ったつもりもなかったが、二つの剣は交差するようになった。すると、剣が刺さった地面から、

（あれっ！？）

波のように水しぶきが発生した。それは津波と化し、シャドーのみならずシェリンリとレイ達にも降りかかった。

やばい、どうしよう。わたしはただムーンを助けたかっただけなのに。

と思ったところで、波は悲しくも彼らに覆い被さった。

魔技の水流は芝生の下の地面に染み込み、広がる景色には、

「……はぁ…」

結果オーライだった。安堵にため息がもれた。

イブニングシャドーの手にはムーンとシープはいなかった。波に持っていかれたようだ。

持っていかれたムーン達は、近くの木々の根に引っかかって遠くに流される事はなかった。レイもシェリンリもラピッドシープ共々に。ずぶ濡れになったくらいか。

「ア、ル、テミスー！！　おまえ団長の真似かよー！！」

「ごめんなさいレイ！！　そんなつもりじゃ…！！」

あのインパクトのあった黒雲の騎士団歓迎会、当事者だったわたし達の記憶には根強く残っている。わたしはその時のラルク団長の失敗を再現したワケである。レイに怒られるのも無理ない。
でも、構わずシャドーは波に飲まれた側の彼らに向かっていく。

「みんな揃ったなら、あの子にお仕置きしなきゃ」
「待て」

シェリンリが戦闘体勢になったが、ムーンが立ち上がり彼女を制した。
ムーンの顔……シャドーを見上げ睨むその表情は…、

（怒ってる…？）

冷静沈着の彼は、静かに怒り狂っているのがよくわかる。そして、

「『闇を照らし、光を示せ』！！　『ライト』！！！」

一聞、戦闘時役に立たなそうな魔法を唱えた。怒りに任せて。
ムーンの唱えた勢いに比例するかのように、シャドーの頭上高くに、この時間にはまだ必要ない、否……むしろ眩しくてうっとうしい明かりが現れた。
この場にいる皆が、腕を用いて視界を守っていた。
そうしながら、わたしは一度シャドーを見た。ら、

（あっ！）

いない？！　あの黒い巨人が。この光に照らされて姿が見えなくなったのか。
ライトが照らす場所は、色白くなるくらい強い光を受けている。と

思ったが、

「逃がさん…」

ムーンが長剣をすぐ取り出し、何かに向かって駆け出した。ムーンが、巨人のいた場所に剣を突き刺した。
地面を見ると、何か黒い丸い影が動き回っている。ムーンがそれを追い掛けてまた刺そうとしていた。

「レイちゃんも手伝って！　あれがイブニングシャドーの本体なのよ！！」
「マジで！？　ぃようし！！」

シェリンリも光の下、ムーンと同じように地面を這い回り逃げる影を追いかけた。レイも即座に投げナイフ達を構え、駆け出した。何故かシープ達もつられて追い掛ける。
イブニングシャドーは光の照らされない所を目指していた。だからなのか、光の下にいないわたしの所を向かっていた。

「行くよ、海神様」

自分の魔技にそう言い聞かせ、剣に水流を纏わせる。さっきのお返しをしなきゃ。
剣を抜き、さっき失敗した技を思い返す。今のは狙いを定めなかったから、あんな広範囲の津波を起こしたのだから、

（敵にピンポイントで狙わなきゃ）

今度は両の剣を揃え、切っ先は地面に垂直に向けた。
その時、シャドーがわたしに気付き、逃亡の道を変えようとしたが、

「てぇぇぇい！！！」

思いっきり地面に剣を刺した。そしてそこから、水柱が現れ、シャドーを追い掛け地面を走る。今度はみんなを巻き込むものではない。逃げ惑うシャドーに追い付く。そう思ったら、

「！？」

反対側から地割れのように走る土の槍がシャドーを狙った。わたしの水流とその土槍が、敵を挟み打ちにするかのように直撃した。水と土とが重なり合い、その衝撃波が空高く飛び上がったが、舞う事はなく地上へと落ちた。

イブニングシャドーの姿は、もうそこにはなかった。

「あら……アタシが仕留めるつもりだったのに…」

土槍の軌跡を目で辿れば、そこにはシェリンリの姿が。芝生に踵落としをしたらしく、そこから土槍が発動したのだと知れた。気功による技であろう。

わたしは両手剣を鞘にしまい、ムーンとレイとシープの元へと向かう。シェリンリも構えを解き、わたしと合流しながら共に集まる。たどり着く前に、

「荒削りな魔技だけど……その実力なら武闘大会で通じるかもしれないわよ、アルちゃん」

「……でも、さっきムーンが言ったけど、わたし達は先を急いでいるから…」

「残念ね……あなたとなら楽しく戦えそうだったのに」

こんな会話が発生した。わたしの魔技しか見ていないのに、わたしに実力がある、というのだろうか。
…正直、大会で腕試しをしてみたい、と思ったが、ムーンの言葉を思い出し、自粛した。

「すげぇなアルテミス、シェリンリも」
「さっきはごめん…」
「いいっていいって。あの変な影を倒したんだから」

レイはわたし達が来るのを待っていてくれた。先程の魔技暴発の件を謝罪したが、レイはそんな事はもうチャラのようだ。ここにも結果オーライ。

「あらぁ？　アルちゃんばっかり褒めてアタシには何もないのかしら？」

と、わたしとレイの会話に割り込むシェリンリ。何もわたし達の間を割って入らなくてもいいのに…。

「そりゃシェリンリにもビックリしたぜ！　ただの踵落としであんなの出来ねぇって！！」

戦いの爪跡を指差し、興奮し始めた彼。印象深いのならば、レイでも今後忘れる事はないだろう。わたしも別の意味忘れたくない。
それは何故なのか……理由やきっかけは言葉に表現出来ないが、忘れるものか、という、どうしてか敵対心に近い感情がわたしにはあった。

「でも……一番、ある意味ビックリしたのは…」

不意に声を静めながら、彼は己が隣の者を見た。

「……どうした？」

今ではいつもの（いつもの？）顔のムーンである。声を潜めても隣人に聞こえているので意味がないけど、レイ。

普段潜める、とは違うが、感情を読み取りにくい声の彼が、あんな感情剥き出しになって戦っていたのは滅多に聞かないし見ないであろう。

ましてや、今日初めて素顔に近いままでわたし達と共にしているのだから、余計に新鮮なそれを感じてしまう。

「レイも思った？」

「ああ。なんていうか」

「いやいや、みなまで言わなくていいのよ。ムーンに失礼だから」

「その会話のやりとり自体がもはや失礼だろう…お前達」

「あっ」

レイを止めていたつもりが、わたし達の会話自体がムーンに対し無礼となっていた。ごめんなさい、とすぐに謝ったが、彼は首を横に振り、構わない、と一言。

「でも、おっちゃんのおかげで倒せたんだし、感謝しないといけないよな。サンキューおっちゃん！」

「ありがとうムーン」

「……ああ」

ライトの効果は徐々に消え、この場が夕日色に戻りつつあった。そしたら、

「ちょっと！　お話は街に着いてからよ！！　もう間に合わないじゃないの！！」
「ちょっシェリンリ苦し」
「アルちゃんもムーンちゃんも急いで！　ほらレイニーちゃん！」
「首が締まるってシェリンリ！」

格闘家は猫の首をつまむようにレイの服を掴んで引っ張る。幸い大人しく待機していたラピッドシープの元へ。

「もうそろそろ着けるだろう……行こうか」
「うん」

わたし達も、もう一頭のシープへと駆け足。のんびりすると、また急かされるのはわかっているから。

第七十章

―――――――――
旅は道連れ…否、
巻き込まれるもの
―――――――――

辺りも暗さで見にくくなる。街の全景が段々と大きく見えるようになる。どのようにして建てたのか想像つかない高い石の塀が広がっている。
その塀に、重たそうな両開きの鉄の扉がゆっくりと閉まりかけていた。シェリンリの焦る気持ちがこちらにも伝わってくる。
速く、もっと速く、とシェリンリはシープ達に頼んでいた。シープらもヘトヘトだと言うのに、頑張っている姿には心打たれるものがあった。

「まだ閉めちゃダメよ――――――!!!」

と、シェリンリがありったけの声で、叫ぶ。扉がピタリ、と止まった。それによりわたし達はやっと、ロムラ・スムラの出入り口にたどり着けたのであった。
片方は閉まりきっており、閉めようとしたもう片方の扉から、一人の門番らしき男が出てきた。

「おお……お前ら、ギリギリセーフだったな」

シープから降りているわたし達にそう笑う男。すぐ地に足をつけたシェリンリが男の元へ歩み寄る。

「もちろんまだ入れるわよね？」

「シープに乗って来た、って事は、ニアシー村から来たんだろ？もちろんだ。さぁ、早く入りな」

シェリンリは安心した顔で、満足げに街へと入る。わたし達も、シープ達にお礼を言い、彼女のあとについていく。

「わかっているだろうが、大会が終わるまでは街から出られないからな」

「えっ……？」

男の言葉に耳を疑った。わたしは振り向き、扉に長い鉄の棒をかけようとした門番に尋ねた。

「わたし達、湊町に行かなくちゃいけないんだけど……」

「ん？　知らなかったのか？　武闘大会開催三日前はロムラ・スムラの出入りは禁止なんだ。前もって大陸中に連絡したはずなんだが…」

「えぇっ…？」

わたし達のような旅人からしてみれば、そんな話は耳に入るはずがない。

大陸の人間であるシェリンリに思わず目線を向けたが、当人は己が両の手と手を合わせ謝罪の意を見せてきた。ごめんねぇ～、って聞こえてくるような苦笑いで。

「今なら外に出る事は出来るぞ。もちろん大会が終わるまで入る事

も出来ない」

どうするんだ?、と門番の男はわたし達に答えを聞く。

「少し時間をくれないか?」

「手短に頼むよ」

ムーンが時間の猶予を求めれば、門番は条件付きで呑んでくれた。

彼はシェリンリと向き合う。

「いつからだ? 大会前に出入り禁止になる条例が出来たのは」

「そうね……確か、六年程前だったかしら?」

ムーンの問いに、シェリンリは答えを語る。

以前、とある大会出場選手が反則なる行いをしたのだという。自分の名前でエントリーをし、他の人物に戦わせたとか。大会の運営を取り仕切る委員会がそれに気付いた時には、その者は賞金及び賞品を持って街から消えたのだとか。

また翌年、自分を優勝させるよう他の参加者に前もってワイロなる金を渡し、名誉を得た不正なる者もいたとか。

とにかく、伝統ある武闘大会を汚さぬ為に、最後まで何事もなく大会を終わらせる為に、万が一不正者が現れた時に備える為に、大会三日前は街の出入り口を封鎖するようになったのだという。

「魔界大戦中の事だったから、生活が貧しくなって金目のものが欲しかったらしいの、無理もないのよ。封鎖条例が出てからはそんなお馬鹿ちゃんも出てこなくはなったけど…」

「そうか……」

「これでわかっただろ? お前らが急いでいるのもわかるが、お前らだけを特別にするワケにはいかないんだよ。急ぎたいなら街を迂

回して王国に行きな」

時間のようだ。門番が背後から声をかけてきた。留まるか、出て行くか。

「わたしは構わないけど…」

「えー？　おれ野宿したかねぇよー。でも三日間も出られねぇのも嫌だし…」

各々意見を述べる。わたしは他者の意見に頼り、レイは板挟みながらも自分の気持ちを語る。

ムーンに向けられるのはわたし達の目線。こういう時、やっぱりムーンに決断を任せるのがいい、という暗黙の了解がわたし達にはあった。

顎に指を添えるのは、ムーンが考える時の癖。離れれば、答えが出る。

「すまない…ここですべき事があるのに気付いた。しばし滞在しようと思うが…」

「えっ？　うん、いいけど…」

「良かったぁ……でも良かったのかぁ……？」

驚いたのは、ムーンの言う『するべき事』というものだった。滞在は仕方がないが、ここでわたし達は何かしなきゃいけないのだろうか。

レイもレイで、疲れているならば喜ぶだろうが、今回は状況が違う。それを知ってるから、いいのか悪いのか複雑そうな表情をしていた。

「よし、決まりだな」

門番が最終確認をし、ついに鉄の扉に鍵がかかった。ガタンッ、と棒を引っ掛けるフックに入れる音が、ビクともしない事を物語っている。

「武具生産世界一の街、ロムラ・スムラにようこそ！」

改めて門番から、歓迎の言葉を受け取った。

扉を背にし、改めて街並みを視界に映した。

二階建ての建物が長く連なっており、定間隔でそのラインがある。

その建築物の間が石造りの道となっている。

地上には松明による火の明かり、家達の屋根にも、今さっき見たライトの明かりがいくつも存在しており、夜なのにまだ眠る気配のない活気が、街にはあった。

「大会前だから、お祭り騒ぎなのよ。関わらない人間からしてみれば騒音でしかないわ」

とりあえず、街中を散策しながら。シェリンリは街についていろいろと話始めた。

「この街は別名『武具達の休息地』って呼ばれているわ」

「へ？　武器が休む、ってどういう事だ？」

一回聞いただけじゃピンと来ない。わたしもレイも首を傾げる。

「長旅により、自分の武器防具の耐久が消耗しているだろう……故に旅の戦士達はここで、腕の立つ鍛冶屋に武具を預け、強化ないし新たに生産を依頼するワケだ…」

「ムーンちゃんの言う通りよ」

「そっか。だから休息地って言うのか」

そういえば…とわたしは、その話題を聞いて急に自分の武具が気になってしまった。泥をかけられ水をかぶり、さらに何度も衝撃を受けて身を守ってくれた。両手剣に関してはサンポリアで修理した以来だが、防具よりかは明らか使用数は上回る。

「ムーン、まさかその為に」

「ああ。サンポリア王に認められた鍛冶屋のものでも、やはり限界は来るからな……」

だから帰還が延びるのを覚悟で滞在を決めたワケか……するべき事とは、この事だったのね。

「それならさっさと宿屋を探そーぜ。こんなに大きな街なんだから、泊まれない、って事はないしさ」

「そうね」

「ああ。武具を預けるのは、明日でも問題はない」

ラピッドシープに乗って来たとはいえ、やっぱり疲労は溜まるものだ。それをレイの言葉で自覚する。

するとシェリンリはたたたっとわたし達の元から離れていった。

群衆に紛れる前に、彼女はこちらに振り向き、両手で筒をかたどりその輪を口の前に持って言う。

「それじゃあ、同行ありがとうねー！　すごく助かったわ。アタシはこれから役所に行ってエントリーしてくるわねー！」

「こちらこそありがとうシェリンリー！　大会頑張ってねー！！」

格闘家とはここでお別れとなった。でも、わたし達は大会が終わるまでこの街を出られないから、もしかしたらどこかで会えるかもし

れないし。
大会観戦だって出来るかもしれないし。
と思考は動きつつ、わたしはシェリンリを見送った。

「あっ！！　シェリンリ！」

といきなりレイが叫び呼び止める。それにビックリし、わたしは彼に振り向く。一体何を思い出したのか。

「おごりはどうすんだよシェリンリー！！」
「また会ったらねー！！」

おごりの心配してたのかい。をい。
彼女も顔をこちらに向け、大きな声で返事をしてくれたが……。

＊＊＊＊＊

この街は、中心部に大きな噴水広場があった。その近くの大きな宿で部屋をとる事が出来たわたし達は、食堂にて夕飯及び今後についての会議を行う。

「はい、お待ちどうさま」
「サンキューおばちゃん」
「ありがとうございます」
「ありがとう…」

シェリンリ曰くお祭り騒ぎ、とはまさにこの事だ。食堂は今から宴でもやりそうな勢いに人々で賑わっている。

しかも大半の人々が、甲冑を身に纏い、個性が各々に出る武器を携えているのである。杯を片手にがやがやがや…。
当宿屋の女将さんが、わたし達の座るテーブルに夕食を運んできてくれた。わたし達はそれぞれに礼を述べる。

「あんたらも、武闘大会に出場するのかな？」
「いや…たまたまこの街を訪れただけだ…」

レイは早速焼いたチキンを掴み食事開始。女将さんの問いにムーンが答えた。
あちっ、あちちっ、と慌てるレイは目の前の自分の皿に慌ててチキンを離した。そりゃあんた、調理したてだから当然でしょうに。
ムーンが器用にナイフとフォークを用いて、運ばれた料理を自分の皿に盛り、チキンを食べやすいサイズに切り分けていた。
わたしも見様見真似で試みる。

「そう？　あんたらもそんな格好しているからてっきり……」
「でも、すっげー興味はあるんだ。観てみたいし、出来るなら出てみたいし」

と、レイも会話の中に入る。ムーンの真似してナイフとフォークを使うが、面倒くさくなったのか、フォークだけで食事をし始めた。

「今後の旅の事を考え、体力は温存しておくべきだと思うが…」
「えー？　だってどうせ三日間出られないんだろー？」
「観るくらいならば問題はないだろう…」
「観に行っていいの？」

参戦はダメでも観戦は可。ムーンは確かにそう言った。思わず確認の問いをしてしまう。

あははっ、とわたし達のやりとりに微笑む女将さん。

「観に行って損はしないと思うよ。せっかくロムラ・スムラに来たんだから、終わるまで楽しんじゃいなさいよ」

おばさーん、もういっぱーい、という声が聞こえ、はいよー、と答える女将さん。

それじゃ、ごゆっくり、とわたし達に一礼し、そちらへと向かって行った。

ここの空間はわたし達三人となり、周囲のがやがやはまだ続く。わたし達の会議も再開。

「明日の朝、早くに開いている鍛冶屋を探して武具を預けよう……異議はあるか？」

明日の予定の確認。わたしは、大丈夫よ、と短く答えた。するとレイは、骨にまだついていた肉を食べ終え、こんな事を言い出す。

「なぁおっちゃん。せっかく来た街だし、おれ、カンコーしてみてぇ。自由行動してもいい？」

「観光は構わないが……お前の場合、資金も必要になってくるんじゃないのか？」

「そうなんだよなぁ……見て回るだけになるし……」

自由行動か……現状、わたし達はこの街から出られないから、万が一はぐれたら……なんて心配は必要ない。宿で合流すればいいのだから。

「資金ならば明日、調達出来る。単独行動は私の調達が終わるまで待ってはくれないだろうか……」

「えっ?!　おっちゃん、金くれるの!?」

口に運ぼうとした料理が皿に落ちた。が、それに構う事はなく、わたしは彼を見た。

「ムーンやめときなさいよ……いくら仲間だからってお金のやりとりは…」

レイがつけあがりそうな予感がしたので、あえて厳しい目線でムーンに一言添えた。

親しき仲にも、貸し借りやマナーは守らなきゃいけない、とわたしは思う故に。

「いや……そろそろ換金がしたい頃だったんだ」

「か、んきん?」

「この街ならば、高値で売れるはずだからな……」

わたしはレイと目が合う。何が?、とアイコンタクト。そんなわたし達をよそに、ムーンは食事を続ける。

「……武闘大会かぁ…」

「そうね……」

少し沈黙した後に、レイが話題を切り替えた。わたしもそれに相づちし、目線だけ周囲を見回してみた。

「みんな強そうな人ばかりだもの」

「おれも戦ってみてぇなぁ……おれがどれだけ強いのか知りたいし……」

「わたしも知りたいな。どこまで力が通じるのか……」

ほぼ同じタイミングで、ムーンを見やるわたし達。視線を注がれているのに気付いているか否かは知らぬが。

「……ムーンのおっちゃん」
「ダメだ」
「なんでだよー…」

レイからどのように言葉が来るのかわたしも察したが、ムーンは即答。食事の手を一旦止め、

「生半可な気持ちで行くくらいならば、特訓をした方がいい。この大会に参加する者達は皆、真剣勝負に来ているのだから……」
「う……あ、うん。そ、うだよな…」
「そうね……」
「どうした？」

どうした、って聞かれても……そんな真剣な表情で力説されたら、反論出来ないじゃないの。レイも恐らくわたしと同じ心境なのかも。わたしは彼の目だけでなんとなく表情は読み取ってきた。だが、今はホータイはなく、ありのままの彼の顔を見る事が出来る。瞳だけでわかっていた気がしたから、その必要がなかった分全部を目の当たりにし、なんというか……新鮮を通り越して、戸惑いがある。

「ううん……ムーンの言う通りだから、返す言葉がないの」
「……そうか…」

わたし達の今の反応に問い掛けがあり、わたしはこう答えた。レイも、コクリと頷き同意をする。

「ごちそうさま…」
「早っ」
「久しぶりに食べたからな……胃が追い付かない…」

何よそれ。思わず吹いてしまったが、ムーンは気にしていない。
だが、よくよく考えてみれば、食べている姿を見た事ないし、木の実だって隠れるように食事をしていたから……少食なのも当然かも。

「先に部屋に戻る。お前達も食べ終わったら、早めに寝るんだぞ…」
「うん」
「はーい」

そう言い残し、食堂を後にし部屋へ行くムーン。
……わたし達は彼を見送り、姿が見えなくなったのを確認し、

「やっぱダメかぁ…」
「そうね……あ、だったら、他の戦士と稽古しない？　参戦する人達も大歓迎するかも」

大会の事や、明日の事の会話が始まったわたし達。ふと思いついた事を提案してみると、レイは賛同の笑顔を見せてくれた。

「いや……そういえば何か忘れてる…」
「？……」

急に難しい顔になって考え始めた。二つ目のチキンを片手に。やっと触れる程の温度に下がってるみたい。

「そうだ。シェリンリだ」

「え……？」

忘れかけていた名前が不意に挙がり、思わずムッとした。だが、顔には出さず、彼に聞いてみた。

「どうしたのよ」

「あいつ……本当におごってくれるのか…」

「どんな心配よっ」

抑えられずツッコミ。ふぇっ？、と間の抜けた声をあげ、なんだよ、と逆に聞かれた。

もういいっ、とわたしは呆れ、話を区切る事にした。心配していたわたしがバカみたいじゃない。

…え？　わたし、何を心配していたの？

斯くして、わたし達は一人の格闘家に巻き込まれ、予想してなかった展開を起こしていく…。

第七十一章

―――――――――
この気持ちは
なんだろう…
―――――――――

大会二日前。

「まいどっ。明日までにはしっかり直しておくからよ」

翌朝、噴水大広場の近くにあった鍛冶屋を見つけ、そこの主人に武具の修復が出来るか否かを確認。
今は大会が近く、主人はわたし達の武具修復に通常の半額で引き受ける……というサービスを提供してくれた。
だが、それでも、わたしとレイは自腹が足りず、ムーンが足りない分を出してくれた。
店を出て、目の前は大きな噴水の光景。周囲に人々が行き交ったり、立ち話したり、噴水の池を背に腰掛けたり、待ち合わせをしていたのか、誰かと会ったり。

「ねぇムーン……本当にいいの？　返すのに時間がかかりそうよ…わたし」
「構わない。貯金は城にもまだ残っている……今使わなくていつ使うんだ」
「マジでいいの？　おっちゃん…」

この大広場は、ロムラ・スムラの中心地。文字通りここを軸に、街の外壁へ向かって長く建物が列を連なっているワケである。宿屋で借りた地図を見てみると、形は歪だが、大ざっぱな円形なのである。街のやや西方に、この街のシンボルでもある闘技場…通称コロセウムがある。

「…お前達に礼をするのは、これくらいしか出来ない。私からのプレゼントだと思ってくれ……」

今朝の太陽は、芸術とも思わせる噴水の中心に位置する女性の石像を照らしており、また、石像及びその周りに噴かれた水達をも輝かせていた。写真に撮りたい景色である。

「お礼って…」
「おれ、そんな大それた事してねぇよおっちゃん……」

わたしもレイニーも、武器防具がなく今は身軽な状態だが、未だにムーンからの『プレゼント』に戸惑っているまま。
ムーンの表情は相変わらず無に近く、声の調子もいつも通りだから、やっぱりわからない…。

「いや…お前達からいろいろなものをもらった。それは勇気であり、信頼であり……見えるもの見えないもの、たくさんのものをもらったんだ……」
「ムーン……」
「こうして過ごして、こんな私を受け入れてくれたお前達に、ささやかだが……恩返しがしたかっただけだ。だから、受け取ってほしい…」
「おっちゃん…」

ムーンがわたし達に感謝しているんだ。それならばわたしだって、レイもきっと。
ムーンには助けられているし、感謝の言葉だけでは足りない。
もっともっと、彼の助けになりたい思いは強いものである。

「わたしだって……ムーンとこうして助け合えるのがすごく嬉しいわ」
「おれもだぞ。おっちゃんがいなかったら、おれ、家族ともちゃんと話が出来なかったかもしれないしさ…」
「…そうか……」

ムーンが、微笑んだ。長く一緒にいるはずなのに、そんな顔もやはり、わたしは初めて見たのかもしれない。

「ありがとう、ムーン」
「ありがとな、おっちゃん」

彼からのプレゼント、ありがたく受け取るわたし達であった。

＊＊＊＊＊

しかし、自由行動とは言うが、もうお金がない。かと思いきや…。

「へぇー……あんた、結構いろんなもの狩ってるんだなぁ…。だってこれはサーサリーにしかいない奴だろ？　これだって、弱い奴だけど一体に少量しかないものだし…」

適当に選んだ武具屋へ、ムーンが立ち寄った。
そこでは武器防具の販売のみならず、武具作成に必要な素材を買ってくれるのだという。
その素材なのだが、

「ムーンのおっちゃん…いつの間に集めていたんだ…？」
「そういえばわたし…たまに見た事ある。倒した魔物から何か剥ぎ取ってた気がする…」

いつからなのか、それは集団遠征が決まってからなのか、それより以前からなのか。
ムーンの背負い袋からは大量の小物達が、カウンターに広がっているのだ。
背負い袋……ロープに隠されていて見えなかった故、その存在を初めて知った。それに、サーサリー王国に行く道のりで、死体から何か取っていたのも、記憶に新しい。
一つ一つ小さいが、これだけ集まれば山盛りに。武具屋の主人も目がらんらんとしている。素材一つ一つ手で確認し、まじまじと見ているのだ。

「こんなにありゃあ防具の一式が造れそうだ。あんたホントにすげぇなぁ」

＊＊＊＊＊

「一人３０００デイルだ」
「うっそ…？！」
「こんなに！？」

換金終了。皮袋に入れられたお金を、彼から渡されたわたし達。
その金額の大きさにわたしもレイも驚いた。えっと……こんなにもらっていいの？
わたしは彼を不安いっぱいに見上げたが、

「私からの贈り物だ……息抜きに使っても構わない。もちろん、とっておくのもいい」
「マジでおっちゃんありがとう！！　大事に使うよ！！」

ムーンの優しげな眼差しと目が合い、申し訳ない気持ちよりも感謝の方が上回った気がした。レイもこれ以上にない喜びを露骨に示していた。

「ありがとう…ムーン…」
「……どういたしまして」

と言い残し、彼は活気ある人混みに紛れるかのように立ち去った。

「ちょっと…」
「おっちゃん？！」

わたし達は見失わないよう彼の背に向かって呼び止めた。だが、彼は一旦立ち止まり、こちらを振り向き、

「これから自由行動だ。暗くなる前に部屋に戻るんだぞ」

と言付け、とうとう姿をくらませてしまった…。
武具屋前、残されたわたし達二人。それでも時は、街は人々は、朝から元気であった。

「……おれ達も探索しよっか」
「うん」

やっと言い出したのはレイだった。ここでジッとしても仕方ないのは、わたしも同じ気持ちだ。二つ返事、わたし達は人の流れに合わせるように歩き出した。

「ムーンのおっちゃんって、冒険者だったのかなぁ？」
「冒険者？」

ふと隣の彼がこんな事を呟いた。気になる単語が耳に入り、どうしてそう思ったの？、とレイに聞いてみた。

「だって、冒険者ってのはやっぱり剣も使えなきゃいけないだろ？　街から街を転々とするんだから、お金も自分で調達しなくちゃなんねぇし。さっきの換金だって……まるっきり冒険者そのものだったぞ。村に来る旅人のやり方と同じだから」
「冒険者ってそんなものなのかしら……わたしの知る限り、魔法使いだったり、僧侶だったり。単独じゃなくて旅団っていう集団形式の冒険者達もいるもの……ムーンも冒険者、だったのかな…？」

そういえば、ムーンがサンポリアに入団する以前、どんな生活をしていたのか、具体的に聞いた事がなかった。
兄さんと父さんを捜し出す為に世界を回った……とは聞いていたが、一体どんな旅をしてきたのだろうか。
気付けばわたし達、噴水大広場に足を運んでいた。冒険者について、ムーンについて話すのがこんなに夢中になるものなのか。

「にしても、人は多いし、強そうな人も多いよなー」

「そうね…」

とりあえず、違う方角へ向かうわたし達。目的はなく、とりあえず散歩。
その中を歩く際、観光客らしき人々、大会参戦者らしきツワモノ達とすれ違ったりする。

「試合を見て、何か戦闘の手がかりが見つかればいいよな」
「そうね」
「そうすりゃ王国に無事に帰った後も、仕事で役に立つかもしれねぇしな」
「そうね。わたしも、大会がすごく楽しみだな」
「おれも！」

と、他愛ない会話が、表には出さないが、わたしはとても楽しんでいた。
時々頼りない仲間だけど、一緒にいるのが楽しいのは事実だ。これから彼とこの街でどんなものが見れるのか、わくわくしている自分がいた。
噴水大広場を抜け、真っ直ぐの道のりに入った時だった。

「あらっ！　レイニーちゃん達じゃないの！」

がやがやっとした街中、周囲の戦士に紛れつつも目立つ知人がいた。
その女性がわたし達を目撃したらパッと顔の表情が明るくなり、わたし達に向かって駆け出してきた。
えっと…その勢いじゃぶつかりそうなのだ

「ぶわっぷっ」
「久しぶりねー！　やっと会えたわー！」

が……否、ぶつかる、じゃなくて、レイに抱き付く為の勢いだったのね。背丈はほぼ一緒で、女性としては彼女は高い方。なのにレイが顔を真っ赤にし。慌てふためく故に存在感がある彼女。その彼女に、わたしは慌てて制した。

「ちょっとシェリンリ！　レイが苦しそうよ！」

「あらぁ、ごめんなさい。嬉しくってつい…」

昨日、わたし達を巻き込んだ格闘家シェリンリと、仲間のレイを引き離すように、わたしは彼女に言った。

一瞬見下ろされたのは気になったが、シェリンリは素直に聞き入れ、ごめんなさい、という両手合わせを可愛く表現。

…ちょっとイラっとした。

とりあえず落ち着いて、わたし。

「い、いや、おれも嬉しいよ。こんなに早く会えるとは思わなかったからさ」

「アタシもよ。こんなに広くて大きな街でしょ？　なのに人はごちゃっとしてるから、大会当日には会えたら…って思ってたのよ」

落ち着いている間に会話をしている二人。彼はどぎまぎしており、でも嬉しそうなのは事実だ。

…とりあえず、落ち着け、わたし。一体何を焦っているのよ。

「そうね……せっかくこうして会えたんだから、昨日の約束は守らなくちゃ」

「おっ！　って事ぁ」

シェリンリが言い出す事が、私の心境をかき乱すのは予想しなかっ

たワケである。
レイもバッチリ覚えている。その約束を。だから食いつきが早い。

「アタシがこの街で一番美味しい料理、ごちそうしちゃうわよ。一緒に行く？」
「行く行く！！　なぁアルテミスも」

ダメだ。何かよからぬ事をしてしまいそうだ。わたしが。
レイに声をかけられる前に、わたしはその場から逃げるように、うーうん……二人から逃れる為に、人の流れに入った。

「アルテミスー？」
「何か興味があるものを見つけたんじゃないかしら？」

まださほど距離は離れていないから、二人の声は聞こえる。
彼はわたしを捜し呼ぶのだが、それを邪魔するかのようにシェリンリがあんな事を言いやがった。

「どうせ街からは出られないし、どこかで会えるわよ。お昼にするにはまだ早いから、アタシが街を案内してあげる」
「マジか？　助かるよシェリンリ。絶対飯おごれよなぁ～」

…楽しそうな二人の声が遠ざかるのを確認した。とうとうわたしは一人になったワケだ。

「……はぁ…」

ため息一つ。なんで二人から逃げたのだろう、わたし。
どういうワケか、二人が揃っているのを見たくなかったのかも。でも間に割って入るような勇気もなかったし、そんな事して二人に不

審がられるのも嫌だったからかもしれない…。

（３０００デイル……）

これだけあれば、個人の買い出しも可能であろう。ロムラ・スムラにしかない物が売っているかもしれない。

一人なら……誰よりも自由に動けるから、そこが長所だ。そこだけが。

「行きましょう…」

と自分に向けて呟き、わたしは歩き出した。彼らとは反対方向に向かって。

武具生産の街の午前はとにかく活気溢るるも、わたしは真逆の気持ちだった。

＊＊＊＊＊

「今なら剣、金鎚、槍もサービスすっぞー！！」

「エイスじゃなきゃ手に入らない貴重な鉱石のアクセサリーはいかがですかー？」

「長旅に欠かせないのは食糧！　木の実セットがお買い得だよー！」

「へぇー……武器だけじゃないんだな。この街は」

「らしいな。おっ、これは安い…」

「お祭り週間だから、出血大サービスだ！　持ってけドロボウ！」

「ねぇあなた、このブレスレット……私に似合わないかしら？」

「どれどれ」

「パパー！　ママー！　速く速くー！」
「おじさん、これはどんな鉱石で出来ているんだ？」
「ああ、これか？　こいつは女王様も認める貴重な」
「待ちなさい坊や。走ると転ぶわよ」
「いや、君にはこれが似合いそうだ」
「あらぁ。嬉しいわ」
「いたっ」
「小さいお嬢さん」
「え？」
「子供はいつも元気だからな。転んでも大丈夫さ」
「でも…」
「こいつはすごい！　いくらするんだ？」
「普段ならばこの店一番の高額品だが」
「お前さんだよ、お嬢さん」
「わたし？」
「君にプレゼントしよう。すみません店員さん！」
「身なりからして……武具は外しているけど、戦士かな？　若いのにすごいねぇ」
「えっと……一応、騎士団の一員なんです。サンポリア王国の」
「騎士団！？　そいじゃあ、今年最年少で入団したというサンポリアの新人は、お嬢さんなのかい！？」
「あ、はい。そう……みたいですね」
「うわーん！　痛いよー！」
「だから言ったのに……」
「えぇ！？　そんなに！？」
「今だからこその値段だ。どうだい？　欲しくなっただろ？」
「そうか……若くして腕のある、しかも女性の騎士団員が、この街に…。お嬢さんは、大会には参加しないのかい？」
「いえ。たまたまこの街を訪れただけで」
「ほら、泣くな。男だろ？」

「木の実セット？」
「そう。チカラモゲドクモマホーモゲジュモ……万が一魔物に襲われても大丈夫な」
「そうかい。もったいない……騎士団の腕ならば、この武闘大会で通じるかもしれないのに…」
「いや……わたしはまだまだ、挑む程の力はないです。今は急ぎの旅をしているので、体力を温存したいから…」
「腕試しくらいしてもいいじゃないのかい？　何も優勝なんかしなくたっていい。この大会をきっかけに、目指す目標をより確実に定める事が出来るかもしれないし…ね」
「目標……ですか？」
「そうさ。お嬢さんは、目標にしている事は何だい？」
「……わたしは、父と兄のように、強くなりたいです」
「ほう……親子揃って騎士団員って事かい？」
「いえ、父と兄は今は行方不明で……でも、過去には名を馳せた二人なんですよ。今では……評判が悪いですけど……」
「……そうかい。いや、深く聞きやしないよ。お嬢さんの事情もあるだろうから」
「ありがとうございます。おばあさん」
「そんなお嬢さんにせっかく会えたんだ。私から、餞別だよ」
「え！？　そんな、悪いです！　お金は払いますよ！」
「いいよいいよ。どうせ私が死んだら、この店も終わりだから。私とこうして話した、って事を覚えてもらいたいから。遠慮せず受け取っておくれ」
「……ありがとうございます」
「なんだか元気がないようだね……明後日の大会を観て、元気になるといい。毎年盛り上がりを見せる武闘大会だから……楽しみにした方がいいさ」
「はい。そのつもりです」
「道中気を付けて」

「それじゃあ」

＊＊＊＊＊

街の音は様々。足音。ドアの開閉音。喋る音。怒音。喜音。笑音。
街の景色も様々。昼になる事をそろそろ示す太陽。青い空を横切る白い雲。この街ならではの建物。行き交う人々。街人。観光人。戦士、剣士、格闘家、魔法使い…。
その中で、わたしが偶然出会った雑貨屋のおばあさんがくれた物があった。

（おまもり……よね、これって）

本で見た事あった、かも。ある地方では、石や鉱石を小さく加工し、それを首飾りや耳飾り等、身に付ける物を作っておまもりにする、っていう習慣。
石の種類によって、おまもりの効力も様々なものがある。だが、一部の学者が、そんなものはまやかしに過ぎない、ただのアクセサリーであろう、と論する者もいる。
しかもこれ、丈夫な草ひもで作った手作り指輪にはルビーがあしらわれている……それ自体は小さいけれど、貴重な石である事に代わりはない。

（あ……）

とある店の窓ガラスに反射し、自分の姿が映る。金髪は母譲り。髪を伸ばしていたのは母が生きていた頃までで、肩にもうちょい届きそうなくらい、自分で切ったんだっけ。

世間客観的に見れば、この年齢で剣士をやっているなんて、やっぱり若すぎるのかもしれない。おばあさんに言われたように。
そんな若過ぎる女剣士の右耳には、三日月型ピアス。左には雫型の魔法石を吊したイヤリング。

（そうよ……この前のお返し、って言って、このおまもりをあげれば…）

正直、指輪は無縁だ。グローブしているから尚更。首飾りの紐に通してぶら下げるのもアリだが、ルビーは柄に合わないから……わたし。
ピアスを彼からもらったから、そういう口実でプレゼントすればあんな女、

（え？）

なんでプレゼントごときにシェリンリが関係しちゃうの。考え直した。
とにかく、プレゼント。プレゼントするの。この前の、お返し。
そう…わたしはお返しする為に、レイにプレゼントするんだから。

（ただお返しするだけなの）

さっきまで沈んでいた気分が嘘のよう。いい考えを思い付いた達成感を得たように、段々晴れてきた。
まさに今の街の活気のように。徐々に、だけど。

（あ…あれは……）

ある通りを再び歩き出した途端、ムーンの姿がある光景を見つけた。

第七十二章

―――――――――
この気持ちは
どうしてなのか…
―――――――――

「ムーン！」
「邪魔だクソガキ！」
「うわっ…」

彼に向かって駆け出そうとしたら、横の店から大柄な戦士が現れ、構わず横切られた。足を止めるしかない。
戦士が過ぎ、人混みの光景を見たが、そこからムーンは消えていたのであった。
あんにゃろう……と内心毒突き、思わず戦士の後ろ姿を睨んだ。目線を察知したのか、そいつはバッと振り向いてきた。

「なんだクソガキ？　優勝候補の俺様に対してその態度はいい度胸だな」
「……」

のっしのっしと歩み寄って、見下してくる目つきはなんとも不快だ。だが、ここで相手したら身よりも精神が持たない。わたしは、すみませんでした、と謝罪をし、男から立ち去ろうと踵を返した。が、

「おいクソガキ。なんだその謝」
「触らないでよ！！」
「！？」

背後から腕を伸ばす気配がした。わたしは振り向きざまその太い手をはたき、走り出した。
待ちやがれクソガキぃ！！、と追い掛けてくる戦士。しかし、見た通り鈍足だ。わたしは人と人との間をくぐり抜けるように距離を離した。
こういう時に小柄で俊足なのは有利だ。人の為に良い事にはなってないのがシャクだけど。

＊＊＊＊＊

「はぁ…」

思わずため息がもれた。
ここはどの辺りだろうか…と一旦立ち止まり、周囲を見回す。
すると、他の建築物よりも大きく、雰囲気も若干異なる建物を発見。
その後ろ、街の外壁よりは低くも、それでも大きい大きい建築物が…。

（なるほど、あれがコロセウムね……）

立ち入りが禁じられているのか、コロセウムの出入り口だろう所には門番がいる。観光客らしき集団が中に入りたいのか、交渉しているようだが門番は首を横に振るだけだ。

「あの役所で参加手続きが出来ます。締切は今日の夜までだから、早めに済ませた方がいいですよ」
「ありがとうございますっ」
そんな会話が耳に入った。すると、一人の戦士が手前の建物へと走っていく。

（ここは街の西方か……）

現在地を大まかに推測した。それにしても大きい……どれくらいの観客を入れる事が出来るのか、気になる。
ここではただ見る事しか出来ない、と判断し、わたしは違う通りを目指し歩き出した。
すると、

（レイだ）

彼を見つけた。とある店の前に佇んでいる。遠い所にいながらわたしもよく見つけられたと思う。
そろそろ昼になるけども、もうおごる話は済んだのだろうか。だったら早速、彼にこの指輪を渡そう。
声をかければ気付いてくれるはず。レイ、と。

「レ…」

だが、最後まで呼べなかった。レイの後ろにある店のドアが開き、姿を現したシェリンリを見た故に。
両手に一個ずつ、スイーツらしきものを持っている。この位置からじゃよく見えないが。片方一個をレイに差し出し、それを喜んで受け取る彼。

ああ……まだ終わってなかったのね。先程のような感情がまた込み上がってくる。

「……ちくしょう…」

団長口調で無意識に毒突く。だが、ボリュームはわたしの範囲まで。さっきの道を引き返そうと振り向いた。
あんな楽しそうな二人……見たくないから。

＊＊＊＊＊

依然賑わう街。あの光景から逃れるべく引き返したは、ムーンを目撃した場所だった。さすがにあの大柄な戦士もいないか…。
この通りは食べ物の匂いが特に目立つ。飲食店や居酒屋が並ぶからか。

（あれ…？）

そんな数多い店の中から、ふと目についた酒屋を発見。何故なら、その窓越し、店内で見た事ある姿を見た故に。

（ムーンったら…昼前から居酒屋にいたの…？）

見間違いだろうか？　だがわたしは、確認すべくその店へと向かい、ドアを開けた。
店内は外同様に賑わいを見せる。というか…こんな時間でもお酒飲んで談笑している大人達って…。まぁ、お祭りだから、無理ないか……大会は明後日だけど。

もしかしてムーンもお酒を……と思ってキョロキョロ見渡した。ら、

（いた）

そうだ、確かあの窓から見えたんだ。ムーンは窓際のテーブル席に。後ろ姿しか見えぬが、見知らぬ男達と向き合っていた。ここで知り合って酒を交わして会話しているのか？

（あっ…）

否、わたしが知っている人間も中にはいた。今さっき、イライラで睨み付け、謝罪はしたのに怒らせてしまったあの戦士も同席していた。

まだイライラしているのだろうか、一触即発な雰囲気を醸し出していた。片手にはトランプ五枚…そういえばムーンも五枚持ってる。あの男とプチ争いを起こしたばかりだが、仲間の事が気がかりだったので、意を決して彼に歩み寄る。

「ムーン、何をしているの？」

「ん？」

「あ、てめぇはさっきの…」

ムーンがわたしに気付き振り向くのと、男がわたしに気付くなり立ち上がったのはほぼ同時だ。わたしは男に対し身構えたが、そんなわたしをかばうように腕を伸ばしたのは、ムーンだった。

「今は私が相手だぞ……放棄するというならば構わないが…」

「……けっ」

矛先を自分に向けさせ、わたしを遠ざける。一体何してるのかまだ

わからないけど、男は諦めて椅子に座り直した。

「何してるのよ」

わたしは改めて、小声で問い掛けた。ムーンと、あの戦士の男と、他二人も座っている。彼らの後ろで立って見守る者はいっぱいいる。四人はトランプを持っていたし、テーブルには酒の入ったグラス、トランプの山も乗っていた。

「いや……誘われたものでな、つい…」
「だから何を？」
「ポーカーだ」
「ぽぉかぁ？」
「ギャンブルだ……」
「……えー…？」

いや、トランプくらいわたしだって知っている。ギャンブルの意味やポーカーのルールも大体わかっている。
わたしが難色示したのは、まさかムーンがギャンブルをやる人物だとは思わなかった、という愕然の意味だった。

「おい……こいつ、マジで強いぞ…」
「誰だよ、いいカモがいるって言った奴はよぉ……」

と、隠しきれてない小声で会話する三人。ムーンから稼ごうとしていたのか。でも、状況を見る限り、彼らからすれば真逆の展開を迎えている模様。
戦士が不必要なカードを三枚捨て、山札から三枚補充。そのカードを見るなり、ニヤリと笑った。

「大丈夫だ……俺様の勝ちは決まったぞ」
「おっ！」
「本当か！？」

役が揃った、という事か。戦士は勝利を確信し、テーブルにその五枚を見せる。えっと……それ、なんて言うんだっけ？
ワンペア、ツーペアくらいしか知らないわたし。そもそもギャンブルに夢中になる事はないから。
仲間達も大喜びし、他の客達も、おおーっ、と歓声をあげた。だが、

「いや、私の勝ちだ」
「！？」

ムーンが自分の手札を公開。相手三人の顔は蒼白、周囲は先程よりも歓喜。テーブルに置かれていた賭け金を、ムーンは手際良く回収した。
な、慣れてるのね……ムーン。博識剣士、魔法剣士、新たにギャンブラー剣士って肩書きが加わった。わたしのイメージの中では。

「仲間が迎えに来てくれたので、私はここで失礼する…」
「え？」
「行くぞ、アル…」
「う、うん……」

勝負が終わるやすぐに、ムーンは立ち上がり、わたしの肩に手を添えつつ押し促す。彼らに背を向け、歩き出すわたし達。だが、ガタリッと乱暴に立ち上がる音を聞き、わたしは後ろを振り返った。瞬間、

「逃げるのかコノヤロウ！！」

「!?」

戦士の男が、酒の入ったグラスを力いっぱい投げてきた。
ぶつかる、と思ったが、

「『スペルショート』」

こちらに降りかかるはずだったグラスと液体は、一瞬で燃え上がり、消えた。蒸発したんだ。攻撃魔法がこんな防御の使い方をするとは思いもせず、思わず足が止まる。
グラスを投げてきた側の連中も、目を丸くしていた。
どうした？　行くぞ、と何事もないようにわたしに呼びかけるムーン。進行方向に振り向き直し、彼の後ろを追いかけた。

＊＊＊＊＊

酒屋を出て、わたしは改めてムーンに問いかけた。どうしてあんな人達とギャンブルなんてやっていたの？、と。
だから誘われたんだ、とムーンは答える。本当は情報収集をしていたつもりだったが……と付け足され、わたしはそこに食いついた。

「何の情報よ」
「ルナの事だ」
「！……」

兄ルナトルの名前が出て、足が止まる。立ち尽くしているわたしに気付き、遅れてムーンも立ち止まりこちらを振り向いた。

「……この街は全大陸からの戦士や魔法使い達が集まる故…ルナの目撃情報があるかもしれない、と思ったからだ」

別に理由を聞くつもりはまだ考えていなかったが、ムーンが先読みするように言葉を続けた。

ムーンが冒険者か否か……レイの会話を思い出し、わたしはとっさに質問を切り出した。

「ムーンは騎士団に入団する以前は、何をしていたの？」

「ん？」

「その…具体的に。…終戦した後に…兄を助ける為に……」

「……ああ…」

わたしの質問の意がわかったのか、そう相づちを打たれた。どんな答えが来るのか、と待っていたが、

「食べるか？」

「へ？」

ムーンがわたしの元にゆっくり歩み寄り、丁度近くにあった飲食店を指差した。繁盛しているのが窓越しに見えてわかる。

「もう昼だからな……金ならばさっき手に入れたから問題ない」

「え、えっと……」

「レイとはぐれたのか？」

「！」

不意に彼の名前が出てきて、言葉に詰まった。ムーンはそんなわたしを見て、何が面白かったのやら、微笑んだ。

「あの店でゆっくり話をしよう…」

ムーンの提案に、わたしも賛同した。彼から聞きたい事はあるし、聞かせたい事もあるから。

このもやもやっとしたわたしの心境とか。

＊＊＊＊＊

「ごゆっくりどうぞ」

第七十三章

―――――――――
ムーンの事情
わたしの事情
―――――――――

運ばれた料理からはいい匂い。賑やかな店内は大忙しだった。お客さんの談笑や、店員を呼ぶ声、今年の大会出場者にイケメンがいたのよ、うそぉ！？、なんて女性の歓喜の声が。

こんな所で話が出来るのか、とは思ったが、皆、周囲の事などさほど気にせず過ごしている。だからわたしも、向かい側に座るムーンと話していればいい、と決めた。

運ばれてすぐに、ムーンは食べ始めた。やっぱりそうやって食べる姿は新鮮だ。まだわたしは慣れやしない。

彼が三口くらい飲み込んだ時だった。

「魔界大戦が終わった後の私だが…」

前触れもなく話を切り出した。わたしも食べやすいサイズにして口に入れようとしたので、ビクッと驚き、お皿にぽとんと落ちてしまった。

ああ、すまない……食べながらで構わないが、聞けるか？、とムーンが気を遣ってくれた。わたしはコクリと頷き、お言葉に甘えて食事を再開した。彼の言葉に耳を傾けながら。

「戦争が終結した後……私は仲間と合流する事が出来なかったんだ」

どうして？、という思いで、わたしは彼の目を見つめた。それを汲み取ってくれた彼が話を続ける。

「正確には、合流させてはくれなかった、だな…。私は世間上、メリアーの肩を持った立場故、仲間達はそんな私を拒絶したワケだ」

「そんな…」

ダメだ。ご飯食べつつ話を聞くのは集中出来ない。食事の手がつい止まるのは自覚したが、それよりも彼の話を聞きたかった。

「無理もない……勝負の分かれ目は、あの二人がキーだったからな…近くにいたから尚更わかる。ルナは魔物と化し、人間側を殲滅しようとしたが、ダイアンはなんとかそれを阻止した。だが、魔物軍を全滅しようという姿勢はなかった。それでも、魔物軍は完全撤退をし、事実上、我々の勝利だった、という事だ…」

「……父さんは、それ以来見ていないの…？」

父も自分の息子を助けようとしたはずだ。だったらあの時、彼は父さんと共にいたはず…。

ムーンは俯き、答える事に躊躇している。私を思って何を言えばいいのか考えてくれているのだろうが、その様子だと、答えは一つしかない、よね…。

「…ああ」

「どこに行ったのかも…わからない？」

「…ああ……すまない…」

「謝らなくてもいいのよ…」

父はまだ生きている……そう信じなくては。信じれば希望は生きていくから。

ムーンは更にその後の事情を語る。

醜い姿のまま人に尋ねれば、大半が拒絶。ひどい時には魔物だと叫ばれて殺されかけた。この話は、サーサリー大陸で聞いた。

そんな中で幸い、自分を見ても怖がらず、むしろ哀れんだ人物に会ったのだという。

「その老婆が、身体を隠した方がいい、と助言をしてくれた。マントやフード、ホータイなども提供してくれた」

それからムーンは、そのおばあさんに自分の事情を話したんだという。わたしの兄を助けるべく捜す旅に出たい、と。

長旅をするならば、その歩んだ道で見つけられるもの全てを利用すべきだ、とアドバイスを受けた。

「気がつけば……私は旅をする事に慣れてきたワケだ…。あの姿になれば、人々は不気味がる事はもちろんだったが、何もしないよりは話が出来たものだ」

「そう…だったんだ…」

旅をし、それでもわたしの兄は見つからず、手掛かりすら皆無。魔物に関わる機会を得られるのはどこなのか、と考えたのが、魔物と戦う集団の事を思い出した。

騎士団に入り、ルナトル兄さんの遭遇を待ち続けるつもりだったらしい。

「何年かかろうが…必ず救い出す、という思いで入り直したのだが…」

まさか、このような非常時に出くわすとは思いもしなかった、と、ホータイ無きムーンの素顔から悔しげな、あるいは悲しげな感情も読み取れた。

「だから、なるだけルナの情報を仕入れようと、旅人が多いだろう酒場に立ち寄ったり、自警団があるならばそこの人達に尋ねたりするものだ」

しかし、そう語る彼の顔は依然変わらない。やはりベゴ村で兄さんに会うまでは、何も有力な話を聞けなかったからなのだろうか。

「だが……ルナがまだ生きているとわかった以上、機会は必ずあるはずだ。今すぐにではないが、必ず……」

後半に行くにつれて声が小さくなる。独り言のように。ムーンの中にある、兄さんを助けられなかった罪悪感が、彼の気持ちを誓わせるのだろう。

わたしも……必ず。家族が揃う日は必ず来る。

わたしも彼も、希望は捨てずにはいない。でも今は帰還が優先だ。

「……アル」

「なに？」

少し間が空いてから、ムーンが改まったようにわたしに向いた。なんだろう、と思って言葉を待っていたが、

「今まで一人だったのか？」

「っ！」

すっかり忘れていた感情が、彼の問いかけで瞬時に蘇った。別にム

ーンを恨む事はないのだが……いや、今だけ恨もう。
なんで思い出させたのよ、という思いで彼を見据えた。そしたらムーンの顔が一瞬、怯えた、というか、なにかまずったか、とも見えた。

「……喧嘩でも、したのか？」
「喧嘩はしてないよ」

慎重に問いかけてきたムーンだが、わたしはそれを否定した。喧嘩は、してないもの。嘘はついてない。
冷めかけの食事に手をつけた。ムーンも後から続き、お昼ご飯。

「……レイは今どこにいるんだ？」
「知らない」

自覚はしている。冷たくあたってしまっている事を。ムーンは関係ないのに、被害者になっている。
わたしはとにかく食べる事に集中しようと、目先は原型を崩している料理に向けられている。

「シェリンリといるんだから、心配ないのよ。どうせこの街からは出られないから」
「シェリンリと会ったのか」
「レイとの約束があったからよ。おごる約束」
「……そうか…」

それから質問は来なかった。わたしの事をやっと気遣ってくれたのかは不明。
このお店の料理を味わう。美味しいのは確かだが、残念ながらそれを言葉にする気分でもなかった。

ムーンも舌鼓打っている。食べる事に専念してるわたし達の間に、言葉のやりとりはなく。

「……何が不満なんだ？」

「え？」

食べ終わりそうだったのに、ムーンが沈黙を破って質問してきた。質問の内容がそれ故に、料理から目をそらし、思わず彼の顔を見た。

「……不満？」

「そうだ。何か気に入らない事がレイにあったのか？」

「ち…違うわよ！」

レイが気に入らない、なんて事はない、逆だ。わたしにとってレイはかけがえのない仲間で、家族みたいなものなのだから。

レイ自体に不満なんて……ある事はない。

のに、このモヤモヤはなんなのか。わかってはいるけど、この状態をどう言葉に表現すればいいのかわからないから、余計に苛立つわたしがいた。

わかるのに、わからない。この矛盾がなんと腹立たしい。それは決して、レイに対する怒りではないのはわかっている。

「レイは悪い事なんかしてないよ…」

「……」

そうだ、レイはシェリンリがごちそうしてくれるから、彼女の元へ行っただけだ。そんな普通の事に何故、イライラしなくちゃならない。

「…ごちそうさま……」

「へっ？」

考え込んでいる間に、ムーンは完食。わたしもあと一口二口だ。彼に続くように食べ終えた。

「んちそーさまでした」

「何も置いて行ったりはしないぞ…？」

微笑ましいのだろうか、慌てて食べた私が。ムーンの表情はそんな目でわたしを見ていた。

「話の続きは街を歩きながらにしようか」

＊＊＊＊＊

そうして長いようで短かった昼ご飯は終了。街を歩きながら続きを、と誘ったムーンに連れられ、依然賑わう街中をさ迷うが、気付けば今後の旅の備えるべく買い出しになっていた。

チカラモはまだあるでしょ？、とか、先程の稼ぎがまだあるが…、とか。

エイス大陸は西方隣のユゴリアン大陸とは距離が近い故に、そこからこちらに移住してくる魔物は、サンポリアとサーサリーの連中に比べ強敵、とムーン曰く。

ユゴリアン大陸には魔界に通ずる入り口が神出鬼没に開かれ、その度に魔物達がこの世界を訪れるのだとか…。

「何か魔導具などがあれば、戦いも楽になるはずだ」

「まどーぐ？」

そう言って彼と一緒に来たのは、宝飾屋。中心の噴水大広場の付近にあるお店だった。
こういう雑貨店はレイと来た事があったが、雑貨店じゃない。アクセサリーオンリー、本当に宝飾屋さんだ。
わたし達お客は既に、戦士達も何人かいるのである。
外のお祭り状態とは対称的に、こちらは落ち着いた雰囲気に包まれていた。
客の戦士が見ている棚へとムーンが行く。わたしは彼の後を追った。

「こういう魔法石や、魔術を施された装飾品の事だ。身に付けるだけでその場その時に応じて助けてくれる。……もう知ってはいるだろう、アル」

最後の言葉はわたしに振り向き、そう言ってきた。確かに知っている。

「入団式にもらったそのピアス……ん？」
「？」

ふと、わたしを見る目が一瞬丸くなったムーン。どうしたのだろうか。ピアス、という単語を聞き、両耳についてるピアスに触れた。
右手で右耳の三日月のピアス、左手で左耳の雨水のピアスを。

「お前……いつの間に左に…」
「ああ、これね」

ムーンが気付かなかったなんて、そこが意外に思えた。わたしはこの装備について話した。
サーサリー城下町でレイが格安でピアスを買ったのだが、どちらも

左につけるものを誤って買ってしまったのである。それで彼が、丁度左耳に何も付けていなかったわたしにくれた、という事を。だからこれが水の魔術や攻撃の耐性を少しだけ強くする、魔導具って呼ばれるのも知っているワケだ。

「そうか……」
「……？」

今まで気付かなかった、知らなかったからなのか、どこか寂しげに見えてきたムーン。
そこまで落ち込まなくてもいいのだが…とは思って、何か声をかけようと思ったが、すぐにいつもの彼に戻った。

「アル」
「？」
「さっきの話だが」

さっきの話？　ピアスの事か、と思ったがすぐに違うと気付いた。さっきの話、とは、飲食店でしたわたしの事情話だ。

「今のお前の心境を説明するのは、私には不可能だ。かと言って、その心境をよくわからないアル自身が上手に話すのも、難しいものだ…」
「……うん…」
「だが、私とは違い、説明が出来る。不可能ではない」
「……うん」

ムーンの背丈より高い陳列棚を、彼は彼の目線の先にある腕輪を手に取ったり、指輪を取ったり比較をする。そうしながら彼は話す。

「生きていれば必ず後悔する事はあるだろう。大きかれ小さかれ、必ず」
「うん」
わたしも、ムーンの隣で品物を眺めた。近くにいた戦士が出入り口近くのカウンターへと歩き出し、そこの棚の上も見ながら、耳を傾けた。
「ならば、何かしてから後悔した方が、何もせずに後悔するよりはずっといい。……私は大抵、何も出来ず後悔する事が多かったからな……」
「っ……」
自分の体験を語る事で、彼の言葉に重みがあるのを感じる。
やっぱり人生の先輩は、説得力があるのだ。
「レイニーと何があったのかはわからないが……解決の為に動くのならば、行動は早い方がいい。私が言えるのはここまでだ」
「ムーン……」
いや、レイとの間にいざこざがあったんじゃないけれど……とわたしは彼を見上げたが、ムーンもこちらを見下ろしていたようで、互いの目線が合った。
「行動をしろ、とは言わない。するしないのタイミングは、アル自身が決めろ。困った事があるならば、私に相談してほしい」
「……うんっ」
不思議と、自信が湧くものだ。ムーンの助言は。やっぱりわたしより長く生きている人間は、本当に敬える存在だ。

ならばこの自信、消える前に使わねば。しかし使用方法が、

「……！」

今さっき見つかった。出入り口に向かって振り向いた時、窓越しに見渡せる噴水大広場が目に入った。

噴水の付近、知っている人物の姿を一人見つけたからだ。確か二人一緒のはずだが……もう用は済んだのか。

「わたし、寄りたい店見つけたから、先に行くね」

「そうか…」

「また宿で」

「ああ」

と、宝飾店から出る為の理由を作って、わたしはムーンにそう言って立ち去った。

ドアを開け、わたしは先程見かけたその人物の元へと向かって歩き出した。その者は噴水を背に池の囲い石に腰掛けていた。

どうして今は一人なのか……わたしは声をかけた。

「シェリンリ」

今、レイと共にいない格闘家の彼女に。

第七十四章

―――――――――
何を言われるのか
わからず身構えた。
するとこうなる
―――――――――

「あらっ？　アルちゃん今までどこに行ってたのよ？　レイニーちゃんが捜していたわよ」

ややうつむき加減のシェリンリ。わたしが近付いてきた事に気付き、頭を上げる。その際に、たれみみうさぎが如くのツインテールが揺れた。

同性でも羨む美貌。のみならず格闘家としての腕も確かな女性。戦う身である私からしたらパーフェクトに思えてならない。

「レイは一緒じゃなかったの？」

最後に見たのは、二人が何か同じお菓子を食べていた光景。ムッとなった光景。

今は彼女単独だから、そんな気分にはならなかったが、レイニーがいなかった事に疑問だったので問いかけた。

「買ったものを宿屋に置きに行ったわ。お買い物が好きなのね、あの子は」

ふふふ、と微笑むシェリンリ。買い物に付き合っていたのならば、そんな彼の姿を思い出して微笑ましくなったのであろう。わたしはなんだか今は共感出来ないけど。
それに…

「シェリンリ」

彼がいない方が、話しやすい。

「何かしら？」

わたしが彼女の名を改めて呼ぶと、シェリンリは挑戦的な目で見上げてきた。こっちが見下ろしているのに、何故か彼女から威圧感があった。
もしかしたら……わたしがこれから言おうとしている思いに気付いたのか。
見透かされたような気がして、戸惑いを覚えたが、それまで見透かされぬよう平静装う。
それにより妙な時間の間がわたし達に流れた。どう話を切り出せば良いのやら…。

「少し散歩しない？」
「えっ？」

わたしから何も来ない、とすぐに察したのか、繋ぎ合わせるようにそう聞いてきた。

「さっきからレイニーちゃんを待ってるのに、なかなか来ないのよ。だからちょっとアタシと散歩しましょ」

「……」

見上げ睨むような目はいつの間にか消えていた。友好的な眼差しと、わたしは目が合った。

それを拒絶する理由など、ないのだから

「うん」

わたしは誘いに応じた。

＊＊＊＊＊

噴水広場から離れるように、わたし達は街の外壁への方向へと、とある通り歩いていた。

いくら伝統あるお祭りの時期だからと言えども、昼夜問わずこの盛り上がりが一向に静まったりしないのは何故なのだろう。

所々で人々が賑わい、立ち並ぶ店からも笑い声が響き、危うく喧嘩になりそうな場面を目撃したがそれさえも街の活気となっているのである。

「普段はこれほどに街が騒がしい事はないわ。この街の代表的伝統行事なんですもの。年に一度ならば尚更、街の人々はわいわいしたいものなのよ」

「ふーん…」

わたしはシェリンリから改めて、ロムラ・スムラの伝統について聞かされた。

生産した武具を自慢し合う、鍛冶職人達の戯れが、いつしか習慣と

なり、伝統となり行事となり、己の技を示し競い合う大会にまで発展した事は、この街を訪れる以前に彼女から聞いてはいたが、

「アタシも気になって仕方ない事があるのよ。どうして武具の自慢から、今では武具を使わずとも参加出来る武闘大会になっちゃったのかしら、って」

「……そういえば…」

シェリンリにも疑問点やわからない事があるようで、わたしにそう言った。

言われてみるまで気付かないものが世の中にはあるが、ロムラ・スムラの伝統行事はまさにそれの対象である。

「ロムラ・スムラは貴重鉱石を用いての武具生産が有名よ。もしも武闘大会をするのならば、その武具を自慢させなくてはならない。だから参加者は武具を持つのが条件になるはずだわ」

「うんうん」

確かにそうだ。武具を持たず、己が身体を武具とする彼女が参加可能の大会だ。

格闘家等の参戦者が、伝統を繁栄する条件になるのは薄い方だ。逆に参加不可になってもおかしくはないのだが…。

「……これはアタシなりの見解だけども」

わたしが思考を巡らしている中、隣のシェリンリが立ち止まる。それに気付き、わたしも遅れて立ち止まった。振り向けば、互いに全身を見れる近い距離だった。

「やっぱり、伝統行事はこの街の人々だけでは、後世に伝えるのは

限界があるわ」
「限界？」
「そう。お祭りはお祭りらしく、街の人も外の人も、一緒になって楽しまなくちゃ」
……？　普通に聞けばもっともらしいが、それでは何故武具無し参加が可能なのか、って答えにはなりえない。
彼女はふふふと微笑み、歩き出した。わたしもシェリンリに合わせて歩く。
「つまり、単純に考えれば、きっと格闘家のみんなも試合に参加したかったのよ」
「へ？」
なんだそりゃ。ぽかんと口が開いてしまったが、シェリンリの話は続く。
「武具を持つ戦士だけが戦うのはおかしい。我々だって拳という武器がある、肉体という防具がある。不公平ではないだろうか、って具合に」
「なんか……それって都合が良すぎるんじゃあ…？」
「何を言ってるのよ」
わたしの疑問に、シェリンリが苦笑いした。どういう意のある笑みなのか。それは、彼女の次の言葉で理解するのである。
「人間は都合良く生きるものよ。それもただ、悪い事だけじゃなく、良い事にも、ね」
「……」
「もっと楽しめる人々を増やす都合で、格闘家の参加が認められた

のかもしれないわ。あと、魔法の件もおんなじ風に考えれば、魔法だって立派な武器であり防具でもあるわ。いや、もしかしたらムーンちゃんみたいに魔法を使える戦士がつい魔法を使って、それが認められた、って事もあるかもしれないし…」

見解、というより、推測、だ。いや、この単語は意味は近いがニュアンスがどことなく異なる。わたしの中では。

だからシェリンリが興味津々な感情を湧いて話すその姿は、何か推理する、と言ったものが当てはまる気がした。

それに、彼女の推測よりも、苦笑を見せた後の言葉が気になった。

（都合良く、か……）

都合良く、と聞くと、なんだか悪いイメージが強くなるが、人々に合わせて楽しいお祭り仕立て上げた昔の都合……と聞くと、なんだか悪いものではなく思えた。

伝統は守りつつ、かと言って掟を貫き通すのではない。世の中には様々な人種も個性も職もある。

そんな人々も受け入れ、人々が祭りに……大会に参加出来るように、今に至れたのではないのだろうか。

「都合良く、ね……」

「……ええ。人々の出会いって、そういう都合良く出来るものなのよ」

「？」

わたしの呟きは独り言のつもりだったのだが、シェリンリが言葉を返してきた。思わずシェリンリの顔を見た。

「武闘大会というイベントは、各大陸の猛者達が集まって、自分の

技を見せるもの。だから、アルちゃんにムーンちゃん……レイニーちゃんと出会えた事も、祭りの都合で出来た事でしょ？」

「う、うん……」

女性格闘家の口から、レイの名前が出てきた時、またムッとした感情がひょっこりと顔を出した。だから相づちも上手くいかない。

「アルちゃん達からしてみたら、足止めを食らっちゃったけど、アタシからしてみたら、この出会いにはすごく感謝がしたいわ」

「……？」

キラキラと目が輝いている。実際輝けるワケないが、そういう表現が合う程に、彼女の瞳は活き活きしている。それが何故か。

「アルちゃん達のおかげで大会エントリーに間に合ったし、アタシは素敵な人に出会えた」

どういう意味よ。それ。

まさか、と予感したくないけど、無意識にシェリンリの言葉を予想してしまった。

彼女の態度がどことなく違うのには、出会ってから今に至るまでを瞬時に振り返れば、下手したら確信が出来る。

「レイニーちゃんってちょっと変わっているけど、本来は良い子でしょ？　アタシ、あの子の事、もっと知りたくなっちゃったわ」

間違っちゃいなかった。

この人、レイに興味持ち始めている。もしかしたら、世間一般で言う『恋』、というものなのだろうか。

「アルちゃん達はレイニーちゃんと一緒の騎士団なんでしょう？あの子は普段、どんな風に過ごしているのかしら？」

活き活きとしているのは、彼を知りたい、という思いから、否、想いからきている。わたしはそんな愛らしいシェリンリを見て、

「なんでわたしが教えなきゃいけないの」

こんな言葉が出てきてしまった。さすがにシェリンリも、え？、とわたしを凝視した。

わたしは足を止めた。こちらを見ながら歩いていたシェリンリは二、三歩進んで止まり、こちらに向き直ってくれた。

「そんなに知りたかったら、もっとレイと話せばいいじゃない。レイに聞けばいいじゃない。わたしが教えたところで、それがシェリンリの捉えるレイとは限らないんだから」

イライラする。イライラする。イライラする、イライラする、イライラするイライラするイライラする。

よくわからない怒りが込み上がる。思い出したくないのに、振り返るつもりもないのに、シェリンリとレイが楽しく一緒にいる姿が脳裏によぎれば、それはヒドくなる。

わたしの言葉に静かな苛立ちも含まれていた。あんな風に言うけれど、その言葉の裏には。

あんたにレイの事、教えたくない。と。

「……そう。それもそうよね」

とシェリンリは苦笑い。くすくすと笑う声は綺麗なのに、今のわたしには耳障りだった。

「あなたもレイニーちゃんの事を思って、そう言ってくれたのね」
「え？」
耳疑う言葉に、今度はわたしが彼女の顔を見つめる番だった。
レイを思っての言葉……確かにそうだが、何か違う。わたしの中で引っかかるものがあった。思う、という言葉じゃ曖昧だ。
じゃあわたしは一体何を、どのように、ハッキリさせたいのか。あるいは、ハッキリした時わたしはどうなるのか。
「そうよね……アタシが直接彼と話さなきゃ、彼もアタシの事を知る事が出来ないもの。ありがとうアルちゃん。アタシ、レイニーちゃんともっと仲良くなれるように頑張」
「ふざけないで！！」
「！」
シェリンリがそんな事をする事に、怒りを知った。許さない。許せない。
彼女の言葉を遮り、わたしは大きな声で叫んでいた。
「あんたなんかがそう簡単にレイと仲良くなれるワケないじゃない！　今日会ったばかりだっていうのに、気が早すぎるんじゃないの？！　あんたは絶対レイの恋人とかにはなれない！！」
言った後に、自分の言葉を疑った。いくら怒りの勢いとは言っても、こんな事を吐き出したわたしは、まるで、嫉妬しているみたいじゃない。
嫉妬……そっか。わたしはやっと気付いた。いや、知らないフリをしていただけだ。わたしは、嫉妬していたんだ。二人の光景に。

「……やっぱり」
「あ…？」

シェリンリにそう静かに言われた。その目は、先程の挑発的な瞳。
何がやっぱり、なの？　この段階では、まだわたしは己の気持ちを完全に知っていたワケじゃなかった。
いや、やっぱりわたしは……知らないフリだったんだろう。これも。

「あなたもレイニーが好きなのね」

この、シェリンリの静かな言葉が突き付けた現実を。
わたしも、気が付けば、レイに対して恋心があったんだ。やっと向き合えた気がした。わたし自身に。わたしの想いに。

「そうでしょ？　好きじゃなきゃそんな事言えないでしょ？　言える人なら彼の家族とか、アタシを狙う男友達とか、アタシから彼を遠ざけようとする……彼に恋心抱く女友達、とか」

自覚すると尚更、敵対心が大きくなる。シェリンリの物言いが皮肉にしか聞こえない。
でも事実だから、嘘はつけないし、こういうのに対する言い返しとか、わたしにはわからない。
ただ、シェリンリを睨み、睨むだけしか出来ない。

「アタシはレイニーの恋人にはなれない、って言ったわね」
「……そうよ」
「じゃあそんなあなたは彼に相応しい、とでも言うのかしら？」
「！……」

そう言われれば、答えはＮＯだ。私が彼に相応しいかなんて、わか

らないもの。
レイがわたしをどう見ているのか、レイが同じようにわたしをそう見ているかなんて、確認した事がない。
確信持って言えるのは、わたしを仲間として見てくれている事。

「そんな自信もないあなたに言われる筋合いないわよ！　あなたこそただの同僚までで、発展なんかしないわ！」
「！？」

そう嘲笑う顔で、堂々とした姿勢で、わたしに言い放った。
そんな風に言われたら、

「発展しないかもしれないけど……それでも」

わたしは言い返してしまいたくて仕方がない。とにかくぶつけるのである。

「わたしは、あんたなんかにレイを渡したくないのは確かなの！！」
「なっ…！？」

シェリンリの顔が驚きと嫌悪に変わり、いい気味だった。勝負しているワケでもないのに、勝った気分でいられた。
シェリンリがジトッとこちらを睨む。だからわたしもそらさず睨み返した。
この街にたどり着く前までは、互いに協力してきた仲間だったはずなのに、レイニー・バルナを巡って彼女とこういう対立関係になるなんて思いもしなかった。

「……アタシに譲る気、ないのね」
「ないわ」

シェリンリの静かな問いも、ピシャリと即答。はぁ、と苛立ちのため息をシェリンリはもらした。

「そう……彼があなたを好いてるなんて事、根拠もないのによく言えるのね」

けれど。と、彼女は最もらしい事を口にしたのである。
いや、一般人から聞いてみたら、だから?、って事になるが、

「だったら、アタシ達なりのいい勝負があるわよ」
「っ?」

わたし達が一般人女性と違う事が、無視出来ない展開になったのだから。

「明後日の大会。試合しましょう」
「えっ…?」
「彼もアタシもあなたも、職は違えど戦士である事は同じよ。同士なら同士ならではの決着ってものがあるでしょ? 同士の決着を同士が見て判断するのは、間違って等ないわ」

確かに彼女の言葉は納得が出来る。でもそんな簡単に出来るような事じゃない。今後の旅の為に体力温存をしているわたしに、大会参加はやめた方が良い、とムーンに言われている故に。
しかしシェリンリの言葉は止まらない。

「もし、アタシが勝ったら、アタシはレイニーに想いを伝えるわ。あなたは手出し無用よ。勝者のアタシを邪魔してはならないの」

何勝手な事言ってるのよ。グッ…と拳を握り締め、爆発しそうな怒りをこらえ、あの女の言葉を聞いていた。

「あなたが勝ったら、レイニーは諦めるわ」

諦める……その単語に思わず心揺らぐ。わたしが勝てば、この女はレイから離れてくれる……。

けれど、そんな事の為だけに、わたしは自分勝手に動いていいのだろうか。

大会には出るな、と制されている。でも、このままじゃ、シェリンリがレイを……。

「戦う？　それとも逃げるの？」

勝手に話を進めないで。急かさないで！

わたしは……わたしはどうすればいい…？

（わたしは……）

時期が悪かった。ここを訪れたのは。

偶然を責めれなかった。出会いは一期一会、故に。

決断力が足らず、こうして迷うわたしがいるのであった。

「おっ。アルテミス！　今までどこ行ってたんだよー」

「シェリンリも……こんな所にいたのか」

「あ…」

聞き慣れた声がし、振り向いた。レイとムーンが共に、こちらにやって来たのだった。

そういえば、話に夢中になったが……わたし達は既に出発地点の

噴水広場に戻っていたのか。

「遅かったじゃないのレイニーちゃん。宿屋で何していたの？」

険悪なムードを振り払い、いつものシェリンリが彼に問いかけた。

何……この豹変。

「いやぁ……荷物の整理とか、いろいろ。そしたらおっちゃんが部屋に戻ってきたから、シェリンリをほったらかしだったの忘れて…ごめんっ」

と、レイは戻りの遅い理由を述べ、ムーンと行動が一緒のワケも綴る。両手をしっかり合わせ更に頭を下げ、謝罪の意を強めてシェリンリに向けた。

「いいのよ。その間にアルちゃんとお話していたから、大丈夫」

「そっか…アルテミスも、なんかごめんな」

なんでわたしに謝るのよ、と彼に言おうとしたが、その際にレイの顔を見て、ドキッとしてしまった。

ああ…わたしは本当に、彼が好きになっていたんだ、と自覚まで促されつつも。

苦笑うその顔も、レイらしさが表れて、何度見たって飽きやしないだろう。わたしが彼に想い寄せ続ける限りは。

（シェリンリなんかに……）

こんな女なんかに、レイを独り占めされたくない。そんな思いが勝っていた。

戦う？　それとも逃げるの？、って彼女はそう聞いたっけ。

「ムーン」
「？」
「レイ」
「ん？」

わたしは

「ごめんっ！！」

逃げない。
二人に思いっきり頭をさげ、わたしは駆け出した。向かうは街の西方。
背後から呼び止める声を聞いたが、構わず足は向かって行く。
わたしは、彼女からの挑戦を受ける決断をしたのだった。

＊＊＊＊＊

空がもう、赤みが消えかかっていた。

第七十五章

―――――――――
何もしないで後悔は
したくない。
それでこうなった
―――――――――

赤の代わりに、柔らかな紺の色が見上げる空を支配していく。徐々に、徐々に。
だが、この街は、地上はもうライトで照らし、夜の訪れを避けるかのよう。だから空の変化に気付くのが遅くなったのだった。
とにかく走らなきゃ。街役場は夜に閉まる。となると、

（エントリーは今夜までだ、って聞いたばかりだ）

意志はあるとも参加が出来なきゃ、わたしはシェリンリに負けた、という事になってしまう。
だから走った。負けたくない。譲りたくない。彼をよく知るのはわたしだけだ。だが、彼の真意まではわからないけど。

（あった）

一際立派な街の役所。まだ屋内には明かりがあった。まだ開いている。
スピードを抑え、扉に衝突しないよう緩める。でも、勢いは落とし

たくない。
それでもまだ速いまま、わたしは両開きの扉を押して開けた。
ライトで充分明るいロビー。中央に位置する円形のカウンターから出ようとした職員らしき男性が、わたしを見て驚いていた。
わたしは息切れ切れでも、大きく一息吸って、

「まだ武闘大会の参加募集してますかぁ！？」

思わず叫ぶように聞いた。ますます職員の目が丸くなる一方。しかし、そんな表情はすぐに笑顔になり、

「ええ、まだ大丈夫ですよ。さぁ、こちらへ」

と、すぐカウンター内に戻り、書類らしき羊皮紙と羽根ペンを出してくれた。呼吸を整えつつ、安堵感たくさんにわたしは指定されたそっちまで歩いた。

（二人には申し訳ない事したなぁ……）

今後の旅に遅れを取らぬよう体力温存をムーンは言ったのに、ただシェリンリからの挑戦とわたしの想いの為に、勝手な行為をしたワケである。
武闘大会に参加をする、という行動を。

（後でちゃんと説明しなきゃ…でも）

どうやって？　レイへの想いを隠しながらどう話せばいいのか。わからない点がございましたら、お声をおかけ下さい、という親切と共に差し出された羊皮紙とペン。
わたしは言い訳を思考しつつも、まずは名前か書き始めた。

性別、年齢、出身地、現在の職、使用武器……。

「これでいいですか？」

「確認致します」

と、漏れがないかを職員に調べてもらうべく差し出した。一箇所一箇所ずつ、目を追う職員。ほぉ…と関心のため息が聞こえた。

「あなたはあのメリアーの親族でしたか…」

「え？　あ、あの…」

デジャヴ。入団試験に、役員に名前と使用武器を聞かれただけで怖がられた事がある故。何か言おうとしたら、

「いえいえ、わかりますよ。世間上、メリアーは悪名として知られておりますが、私はそうは思いませんよ」

「え…？」

「ロムラ・スムラの住人にとっては、悪名なんかよりも英雄として見る方々が多いですからね。真似出来ない剣術使いのダイアン・メリアー…その息子、凄まじい腕力で等身大の剣を駆使するルナトル・メリアー……」

誇らしげな笑顔だった。わたしはてっきり、またあの時のように父と兄が侮辱されるのかとばかり思っていたから。

その逆だった。この人は、どこで二人の活躍を見たのであろうか、まるでそれを思い出し、描いているようだ。

「ダイアンは、わたしの父です……ルナトルはわたしの兄なんです」

「なんと…?!　英雄の肉親が武闘大会に…！」

隠さなくても、いいと思えた。わたしの正体を明かした途端、職員はますます笑顔に輝きを見せてきた。

「これはビッグニュースだ……明日は大騒ぎになるぞ…！」

と独り言。確認終えた書類と羽根ペンを片付けながら。

すると、

「すまないが」

「っ！」

聞き慣れた声が。一瞬ドキリとしたが、

「参加手続きはまだ出来るのか？」

「おれも参加するぜー！」

予想外の言葉と、別の意味ドキッとした声音が背後から迫っていた。振り向けば、

「ムーン…レイ…」

二人の仲間の姿があった。職員が、もちろんですとも、と意気揚々に答え、別の羊皮紙と羽根ペンを用意した。

わたしはカウンターから二、三歩離れ、書き込む様子をただ眺めるだけ。あれ、おっちゃん、おれ、ここってなんて書けばいいんだろ？、とか、自分の使う武器くらいしっかり覚えておかなければいけないだろう、とか、なんだか楽しそうに見える。

大会前のワクワク感、と言ったところか。

でもわたしは疑問した。大会出場を止めていた張本人が、何故レイと共に参加を表明したのか。

「あなた方は、サンポリア騎士団の一員なのですか…。各国騎士団からの参加は久し振りですね…盛り上がる事間違いないですよ」
「盛り上げられるかはわからないが、行けるところまで行くつもりだ…」
「おっちゃーん、せめて、頂点ただ一つだ、ってカッコ良く言おうぜー？」

しかも職員さんとこんな会話。
理由を聞く事が出来ず、わたし達三人は別室へと案内された。

＊＊＊＊＊

「ごめんなさい」
「なんで謝るんだよ、アルテミス」

その後、一部の大会規定説明及び木製の武器を見せられた。怪我をなるだけ最小限に抑えるべく、参加者は皆、平等な武器を貸し与えられるワケである。昔はやはり、本物の武器を競う大会ではあったが、それ故に死にかけた選手も後を絶たなかった、という事で、職人達お手製のこれ、って事になったんだと。
もちろん、格闘家や魔術師には必要ないものなので、必ず所持しなければならない、なんて事はない、とか。
という事は、数の制限も無く、わたしは父の剣より少し刃渡りが長い、でも軽いのでなんら変わりはないスタンダードな木製剣を二本借りた。

「だって……ダメだ、って言われたばかりなのに…」

迷惑かけた二人も、片手にまたは別袋に各々借りた武器を所持していた。ムーンはわたしより長い、普段使っているのと変わらない長剣を。レイの場合、ムチや道具は制限なしで唯一引っかかったのが短剣達だったので、ナイフを袋いっぱいに借りてきた。

「シェリンリから聞いたぞ」

「えっ…？」

ムーンの言葉にまさか、と思った。互いの私情によって今に至る理由を聞いたの？　話してほしくなかったのに。

と思いきや、

「彼女がどうしてもお前と戦いたかったから、エントリーさせようと仕向けた、と」

「えっ？」

確かにそういう事にはなるだろうが、他に理由を聞かなかったのか、ムーンは。

思わずキョトンとしたが、

「女性の戦士はなかなか数が少ないからな……同性同士で実力を試したかったのだろう…彼女も、お前も」

「でもさっ、アルテミスだけじゃやっぱズルい…じゃなくて、いろいろ不公平だろうから、おれ達も出る事にしたんだ！」

つまり、シェリンリから聞かされた情報が少なく、不自然なく筋が通る経緯だけだから、ムーンがわたしの、実は自分勝手な行動に気付けていない、という事なのか…。

更にレイが、ムーンと共に参加を表明した理由を明かす。そしてわ

たしに対する不平不満がバレバレだ。
いや…そもそもレイにそう思わせる事をしたわたしが悪いから、不満を持つのも当然か。

「……ごめんなさい」

わたしは改めて二人に謝った。それに二人が、え?、とわたしの顔を見てきた。謝られる要素はないのだが、とでもいうような表情。

「もういいじゃん。済んじゃった事は。これからの大会を楽しまなきゃやってらんないじゃんかよ?」
「レイの言う通りだ。私も久しくこのような催し物に出るから……正直楽しみで仕方がない」
「なんだよそれー。ダメだダメだ、って言ってたクセに、おっちゃんも結局は出たかったって事じゃんか」
「そうだな」
「あっさり認めたし!」

男と少年の会話。なんだか楽しそうだ。申し訳ない気持ちがわたしを支配していたのに、二人の様子を見ていたら、安心した。シェリンリにそそのかされたような形で行動し、後悔したが、もう大丈夫。事が始まってしまったのならば、終わりに向かって進まなくてはならない。わたしは覚悟と決意を固めた。

「ありがとう。ムーン、レイ」

＊＊＊＊＊

その後、宿屋に戻ったわたし達。二人はシェリンリとは、わたしを追いかける間際に別れを告げたらしい。

だから次に会うのは、明日の街中か、あるいは明後日の大会当日か…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7331d/

drea[M]oon fantasy

2011年9月7日04時42分発行